生田春月全集

第八巻

感想集（2）

新潮社

昭和四年初夏（或る叛逆者執筆時代）

昭和四年初夏（或る叛逆者執筆時代）

目次

感想集

（2）

旅ゆく一人

小序

ケエペル博士の紹介せられたフリイドリッヒ・ダニエル・シュウバルトの「批評家に對する誡命」中に擧げられてゐる、かの謙遜な著作家のやうに、私も一つの小さな圓を畫いて云ひたい、私はこの範圍のために書くのであると……

私はその小さな圓の中に、自分の乏しい才能と力の限りを惜しまぬと共にまたそこから幾分かでも、その慰藉と滿足とを見出さん事をねがつてゐる。荒涼たる人生の沙漠にも、何處かに緑地はあるであらう。そして、靜かな友達の團欒の中に、その緑地は見出されはしないであらうか？

冬の夜、暖かい紅々とした火の傍で、外には雪が降りつもり、風が暴れてゐる音の聞えるとき、お茶などを啜りながら、しめやかに物語る親しい友達の心おきなき打明話、私はそんななつかしい心易さを愛する。そして、この書もまた、その閑談の一つとして、友達に送りたいのである。

「眞實に生きる惱み」の頃から見ると、私の心持も推移した。今はかのむしろ嚴しい理想の追求よりも、もつと成熟した、こだはりのない、自由な心持を尊び、かの生一本な直線的な歩みよりも、暢びやかなそぞろ歩き、明るい諧謔と微笑とを重んずるやうになつた。今はより純粹にとよりも、より自由にと望む。とは云へ、それは依然として、一つの愚かな心の打明話たるに止まるのである。

世に生きれば、憂いこと、辛いこと、口惜しいこと、情ないことの數々で歡びと呼ばれる歡びはあまりに僅かであるけれども、それはこの世を渡る旅人のなべての習ひである。運命には潔く負けてやるがいい、そして、おのれの苦しみを愛するところに、人生の眞味は見出される。これはさうした心の一人の旅人から、他の旅人への微かな挨拶である。寂しい人生の途上で、はからず一樹の蔭にやどりした同行への呼びかけである。

此の度は、最近のものより逆に執筆の順に排列した。それによつて心持の動きを溯つて見る事が出來ると思はれたから。昨年は一昨年にもまして、殆んど詩を書かず、感想をのみ書いて來たが、私はかうした感想の形によつて、やはり詩を書いてゐるのだと思つてゐる。

大正十五年一月

生田春月

山河人生の明暗

梧桐の秋

秋はいつでも、私の家では、屋根の上の梧桐の梢からおとづれて來る。白いと云へるほどぎらぎらした日光の直射してゐる夏の眞盛りでも、頭の上でさらさらといふ梢の葉ずれの音の中には、はやくも秋の響が聞きとられる。それにもう七月のうちから、あの大きい葉が褐色に枯れて、ばさばさと落ちてくる。あけはなされた窓から、まるで小鳥のやうに飛び込んでくる。今年はとりわけ、それが早いやうな氣がするので、梢を仰いでみると、みんなむしばんで、滿足な葉は殆んど一枚も無いのであつた。今年ははひあがつて、幹にからみついてゐる蔦の葉は、まだ青々としてゐるのに……

　この二本の梧桐は、私たちがこの家に引越して來た時分には、まだそれ程大きくはなかつた。兩手の指だけでもはかられさうであつた。それが今では、はじめの少くとも四五倍にはなつてゐる。そして、その大きい梢を翼のやうにひろげて、あの蟬がその幹に來てジイ〳〵啼く暑い夏の間中、どんなに私たちを烈しい暑熱から護つてくれるか知れない。伐つてみたところで、下駄の臺にもならないやくざな木だと、差配の爺さんは云つてゐたが、私たちにとつてはどんなにこの木が有難いか知れない。

　一河の流れ、一樹のかげといふ言葉があるが、私はこの木をおもふ事によつて、それを實感として感ずるのである。丁度このやうにして、天なる神が、私たちの上に惠みの腕をひろげてゐて下さるといふやうな、ナイーヴな信仰は持てないけれど、私たちはみんな、この一樹の蔭に宿りする旅人同士だと思ふとき、愛にさへも近いやうな悲哀と慰藉

との思ひが湧く。
悲しみは年とともに深くなる。年とともに人は孤獨になつて行く。曾つては毎日のやうに往來してゐた昔の友達とも、今はたまさかにしか會へない。會つても昔のやうに、互ひの悲しみを聞いたり聞かせたりする暇もない。互ひに寂しさを抱きながらも、おもては笑つて街へ出て行き、用談がすむと、急いでお辭儀をして別れる。
しかも、かうした人生の寂寥を身にしめて覺えれば覺えるほど、私はおなじ木蔭の同行に、呼びかけずにはゐられない氣がする。同行とはなつかしい言葉だ。近頃はやりのタワーリシチといふ言葉には、これだけの情味はまだ汲まれないやうに思はれる。けれど、その同行ですら、結局は一つ屋根の下に住むもの同士だけかも知れない、それを思へば、せめてその間だけは仲よく暮したい、そんな心から、時にはこみあげてくる腹立ちをも抑へる。努めても努めても、澄み切らない心の自分だ。愛のない心よ、疑ひ惑ふ心よ。
梧桐の梢には、もうまぎれもない秋の風が立ちそめた。もう葉もおほよそまばらになつたその梢が、夜空に黑く、私の家を蔽うてゐる……今夜もそのかげに私は眠るのだ、あけはなした窓の上に、ほのかに輝く星をながめて……

漂泊の思ひ

この家に住みついてから、もう幾年になるだらうと、數へてみると、もう十年、或ひはその上かも知れない。越したい、越したいとは、長年云ひ續けて來た事なのだが、さて愈々となると、金の調達やら、引越しの騷ぎやらを考へて、つい臆劫になつてしまふ。
自分の憂鬱と不如意とが、みなこの家のせゐのやうな氣がして、引越しさへすれば、もつと明るい晴れやかな生活ができるやうに思ふ事もある。が、引越した位で、新しい爽快な生活がはじまれば幸福であるが――所詮、自分がも

との自分である限り、それもはかない幻影にすぎないであらう……

旅をしたい、旅に出たい、秋になると、また切にそれを思ふ。旅から旅へさまようて、何處へ行つたかわからなくなつてしまひたいとさへ思ふ。とりわけ、心の苛立つやうな事に出遭つた時などは、そのまま家も書物も振り棄ててしまつて、遠い遠い旅へ行つてしまひたいと思ふ。

此前行つてゐた溫泉地で、私のためにそこの湯中子の稻荷さまのおみくじを引いたと云つて、同行のものの見せた卦には、紅雲たなびくところ鹿は千里の遠きに行く、追ふものこれを求むれど得ずといふやうな言葉があつた。私のかうした氣まぐれを、稻荷さまはよく御存知だつたと見える。

「いづくにか眠り眠りて倒れ臥さんとおもふかなしき道芝のつゆ」といふ西行の歌は、時折り私の口にのぼる。けれど西行は、漂泊の詩人レナウとか、あるひはまたヘルデルリンとか云つた意味の漂泊の詩人ではない。彼の漂泊は厭離に根ざした出離であると共に、また修行の道でもあつた。それは私たちには、うかがひ知れぬ深い宗教心であつたであらう。それにくらべると、「片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず」と云ひ、「造化に隨ひ造化に返れとなり」と云つた芭蕉の、難波の花屋でみまかるまでの漂泊の生涯の方が、私たちにはまだ近づきやすいかも知れない。

けれど、「捨てゝいにし浮世に月のすまであれなさらば心の止らざらまし」と云つたのは西行であつた。西行ほど眞に自然を愛した詩人は、その時代には他になかつた。その西行なればこそ、「見ればげに心もそれになりぞ行くかれ野の薄有明の月」と云ひ得られたのであらう。自然を愛するものは、つひに自然に同化し、融合するに至るであらう。自然の愛は世捨人の最後の絆のやうに思はれる。この世のほだし持たぬ身には、空の名殘のみぞ惜しまるるといふ、或る世捨人の言葉をつたへて、それに同感を表した人は兼好であつたのだから。

私の漂泊の思ひは、それ程深いものではない。むしろレナウやハイネのそれに似てゐるであらう。けれど、私も日

本人である。「うつせみは數なき身なり山川のさやけき見つつ道をたづねな」と歌つた大伴家持以來の傳統の血は、私のなかにも流れてゐる。自然と道とが合一した境地も、ほのかにそれを仰ぎ見られる……。
西洋人はつい近世まで、自然を愛する事を知らなかつたやうに見える。ペトラルカが、單に自然美を愛するがために、疲勞も厭はずに、プロヴァンスの不毛の山、モン・ヴェントオに登つた最初の人であつたと云はれる。それまでは單に自然を愛するがために、山にのぼるといふやうな事はなかつたのである。それでエミイル・ルカは、「これ實に不朽の行動で、その功績は、彼の詩や論文の總てを一括したよりも更に偉大と云はねばならぬ」とさへ云つてゐる位だ。

旅人の木

厭離の心は、人間憎惡の心では決してない。けれど、自然愛は、人間憎惡の反動である場合もある。例へば、バイロンの場合の如きである。そして、西歐の詩人には、この方がむしろ多い位ではあるまいか。そして、その心はいかに自然に遁れようとも、厭離ではなくして、より多くの執着を示す。執着ならば、むしろ人間を愛するやうになりたい。人間もまた、自然の一部として抱擁し得る自然愛でありたいと思ふ。
「自然は人間がその卑小をもつて出て行かない時は常に完全である」とシルレルは云つてゐるが、自意識の強い自己感情の烈しい人は、自然の中にいつでも自分自身を發見する。そんな人は、實際不幸だ。靴屋に無視されても、機嫌をそこねたといふシヤトオブリアンのやうな人は、旅をすれば、屹度不愉快な目に遭ふにきまつてゐる。いかにシヤトオブリアンが文壇の大立者であつたにしても、田舍の無學な人達が、その名を知るわけはないのだから。その上、どんな美しい自然に出あつても、「今天才シヤトオブリアンが、この景色を見て感動してゐる！」とか、「我こそはこの絶景をはじめて發見したぞ！」とかいふ風に、絶えず自己を意識してゐたのでは、いつも自然に對抗してゐる事に

なる。もつとも、これはあの壯麗な「アタラ」の自然描寫をなし得た人が、常にさうであつたと云ふのではない、ただ、さうした自己感情が、自然を愛する人の道でない事を云はうとしたのにすぎない。

旅は自然と人間とを愛する道だ。そして、どんなに憂い事、辛い事、心細い事は數多くあつても、結局樂しい歡ばしい事だ。なにがしといふ個人の名をなくして、單なる一人の「旅人」である事ほど、氣樂な好ましい事はないではないか。誰にも知られず、誰をも知らず、インコグニトで、ほんの獨りぼつちで……かくて心は解放される。そして、この一個の「旅人」に――道を問へば、人は親切に敎へてくれる、行き暮れた時には、心やすくとめてもくれよう。それが旅だ。暑い時は、涼しい木蔭に憩ふ事も出來よう、雨に降られた時には、木蔭でも辻堂でも、雨やどりするところはいくらでもある……

旅するものには、殊に步旅(フッスライゼ)をするものには、樹立は有難いものである。風につけ、雨につけ、日ざしにつけ……南洋には特に旅人の木と呼ばれる樹木さへある。

旅人の木とは、アフリカ東海のマダガスカル島に産する大きな椰子の木で、その團扇形の梢は、涼しい風を生み、その幹を切れば、淸水が滾々として流れ出すのだといふ。その蔭で憩ひ、その水に暑熱の步みの渇を醫やす――それは一本でもうオアシスだ、旅人の木とはよくも名づけたものである。

溫帶地の日本には、そんな木はないが、あたりまへの木でも、旅人には尊い。昔の人はそれを一層よく知つてゐた。天平三年といへば奈良朝であるが、時の天皇が道のほとりに果(くだもの)の木を植うべしと仰せられて、東大寺の高僧が、それを植ゑられた事が記錄に殘つてゐる。「國々の民ゆききたゆることなし、その蔭にやすみ、その實をとりてつかれを支へむとなり」と大鏡には記されてゐる。これがおそらく我國の街路樹のはじまりであらうが、これは特にこゝに書くだけの價値(ねうち)のある話である。私はその果樹の下に、當時の旅人や奴隷たちが、寢そべつたり、肌ぬぎになつたりして、の

んきにやすんでゐる光景を想像して、ひとりで微笑む。
けれど、私たちの「旅人の木」が、私たちのためにつとめてくれるのは、まだそればかりではない。榛名の湖畔亭で、湖水の美しさに時を忘れて、案内してくれた友達と酒を傾けて、つひに最後の客であつた私たちが、湖畔からはなれて、むかしの湖水のあとだといふ沼の原の眞中にさしかゝつた頃は、もう夕方近かつた。うそ寒くなつて、急いで歩いても、汗も出なかつた。冬の間はスキイをやるといふこの廣い原には、まだ去年の枯草が一面に伏し亂れてゐて、外には人影もなく、鳥も啼かぬ曠漠とした寂しさ、右手には相馬ヶ嶽、左手の榛名富士も餘程形を變へても、その原が遠い……ゆるい勾配をなしたその前方の果てに見える瘦尾根峠の一本の大楢の木、それが夕空にくつきりと黒く、人影のやうに佇んでゐる。が、すぐ目の前に見えながら、行つても行つても、やつぱりもとのところにゐるやうな木。それでゐて、あそこへさへ着けば、もう半道は來たといふ慰めとなつて、どんなに私たちの足を勵ましてくれた事であらう！
峠の上の一本の木――それは丁度、闇の海をわたる舟人に、港を示す燈臺の火のやうなものであつた。遠い道を歩くものは、いつも、こんな目標がなくてはならない……

歩く女

目標なくして歩く道はどんなだらう？　何處といふ目あてもなくして歩かねばならぬならどうであらう？　私たちは、時とすると、目標なくして、あてなくして歩いてゐるのではないか、と自ら反問する。然し、世には、さうしてリテラリイに歩いてゐる人間がある……
私があの名高い、華かな名前の――私もはじめはそんな貴族的なところとばかり思つてゐた――溫泉場で、伊香保

で、こんなあはれな一人の女を見出さうとは、思ひもかけぬ事であつた。

それは働きざかりのおかみさんである。汚ならしい乞食のやうな身なりをして、陰氣な、殆んど泣いてゐるやうな。丁度子供が悲しい時に見せるあんな顔附をして、手をそつと後に組んでぢつと一ところを見つめてゐるやうな、いや、實は何も見てゐないやうな眼付をして、默つて、ゆつくり歩いてゆく、いつもおなじ足どりで歩いてゐる……

私はさう始終外を歩き廻る方ではないのだが、それでゐて、外へ出る度びに、必ずこのおかみさんに出會ふ。同じ散歩のみちで、一度ならず、二度三度も出會ふ。それで不思議に思つて、女中さんに訊いてみると、彼女は一寸眉をしかめて、

「あのおかみさんですか、あれはこの上の駕籠屋のおかみさんですが、何でも子宮の手術をして以來、あんなにホケになつたのださうで、一年中、雨が降らうと風が吹かうと、朝から晩まで、日のあるうちは、家にぢつとしてゐられないので、あんなにして町を歩き廻つてゐるんですよ。家の前なんか、一日に何度通るか知れやしません、ほんとに可哀相ですよ」と云つた。

何でもこのおかみさんは、誰かゞ死ぬと、眞先にその死人のあつた家にくやみに行つて、「この莫迦なわたしが代つてあげたいものを……」と云つて泣くといふ。それこそ心からのくやみであらう。生きてゐる限り、歩かねばならぬとは、何といふ因果であらう。もう歩かないでもいゝ、死の世界こそは、本當の極樂浄土だ。彼女はどんなにか、それにあこがれてゐる事だらう……

だが、歩かねばならぬのは、ひとり彼女ばかりであらうか？

私たちは結局は、この不幸なおかみさんと同じ事なのではあるまいか？　歩かねばならないのだ、あれが人間の象徴なのだ……歩く、歩く、歩く……

心の明暗

照つたり翳つたりする空、曇つたり晴れたりする心――
自然も人間も、明暗二つの中に漂うてゐる。
私の心も、朝のやうに明るくなるかとおもへば、夜のやうに暗くなる。
今は、むしろ暗い……
頭の上で木の葉が鳴る。枯れた乾いた音。
もう夜も更けた。私は眠らう、空なる星をながめて……
星を一杯ばらまいて、私はその上に眠るのだ……

（大正十四年九月）

秋の消息

×

片瀬にてW君――

此頃いかがですか。湘南の秋はいかゞですか。もう靜かでせう。風の聲、波の音、松林から松林にわたる自然の歌が、嗟嘆が、君の胸のいちばん細い線に觸れるとき、人一倍寂しがりやの君は、もう寂しくてたまらなくなつて、愛讀書のアミエルをはたととざしてぶらりと外へ散歩に出かけやしませんか。あの卑俗な江の島へまでも、ただこせこせした人間の顔が見たいばかりに、長い棧橋をわたつて……

あの棧橋の上から、目の下に揉み合つてゐる淺瀨の波の戲れを見るのは、私は好きですが、君はそれよりも、あの湘南の砂濱の、白く波打際を縫ひとりされた長いラインを眺めるのが好きかも知れませんね。けれど、君には、あれもこれも、みんな何年か見慣れた珍らしくもない景色なのですね。寂しい心で、いつも身に食ひ入るやうな寂寥と哀感とをもつて、君は何度、ここから、かしこから、海を見、海と語つたでせう。

それでも、君はやつぱり寂しい處が好きだ、丁度僕と同じやうに。それで、棧橋をもう少しで渡り切らうとするところで、また後へ引返すかも知れませんね。そして、片瀨川ですか、境川ですか、あの川の橋をわたつて、むかうの松林の方へ歩いて行くでせう。その川を流れる水も、もう冷たい秋の水ですね。さやさやと爽かな青い風を立ててゐた蘆の葉も、もう少し色が衰へて、疲れた秋の音樂に、微かに伴奏してゐることでせう。砂丘の砂を波打たせながら、松林の間の小徑を這つてゐた風は、忍びやかに君の袂をくぐるとき、君のふところに、一つの秋思を投げ込むのを決して忘れはしないでせう……

この間の手紙に、君は「近頃殊に物思ふ事が多く、何かにつけて涙がにじみます。かつての詩人らしいセンティメンタルなものとは餘程違つた、冷たい、無常の寂寥の底からしぼり出る涙です。生きる事は私には全く寂しいものです」と云つた。その君の言葉の底に盛られたもつと深いものが、その慰めがたい苦しみが、私にはよく分るのです。秋が來ると、とりわけ寂しい。秋の心はそのまゝ愁です。秋思とは、その寂しさを云ふのでせう……

君とは違つて、僕のやうな年配になると、いくら寂しくても、そんな事を訴へれば、人に笑はれてしまふ、それ位の事は私も知つてゐる。それだけ散文化したのですね。それに第一、そのひまさへもない程、あれやこれやと、いろいろな仕事や世間並の俗事に煩らはされて、君のいつものお手紙にも、また、外の人達の親切なおたよりにも、めつたに返事さへ書けないといふ、不如意な、すまない、心苦しい境遇なのです。

それでも、まだ一人前の人間でないせゐか、時々あの「ふさぎの蟲」といふやつに取ッつかれて、なす事もなく、ぼんやり机の前にすわつて、考へるともなく、讀むともなく、愛讀書をあちらこちらと引つくり返してゐる。君の好きなレオパルヂや、ハイネや、アミエルやを。私の好んで讀むものは、やはりペシミストの書物です、君のやうに。もつとも、私の氣持は、概して昔よりは明るくなり、快活にはなりました、いやむしろ、快活の美徳を學びたいと日頃心がけてゐるのです。全く、快活は一つの德です。だが、快活な好々爺——それは何とペシミストとは遠いものでせう。そんなになりたいと私が云ふのを聞いたら、君は驚くでせうね。

×

一體、僕ほど矛盾だらけの、二元的な、統一のつかない人間はあまりなささうです。僕の內部には、イデアリストとニヒリストとが、謂はば同居してゐるのですね。そしてそれが絕えず爭鬪して、或ひは右に傾き、或ひは左に傾く。僕のこの數年といふものは、このニヒリズムと決然手を切りたいとの努力だつたとも云へます。また、この根强いペシミズムを、すつかり退治してしまつて、どうかして快活なオプティミストになりたいと願ひました。それはどうやら少しづゝ成功して行くやうに見えました。

だが、イデアリストにしろニヒリストにしろ、所詮、僕はペシミストです。底の底では、いつも悲觀性です、ありのままの世界の肯定も、やつぱりそこから、デスペレエトから出るのぢやないかと思はれて來ました。

それについて思ふのは、一體、このペシミズムといひ、オプティミズムといふのは、人間の一定の見解や、主義や、思考ではなくして、そのテムペラメントであり、性質でありはしないか、つまり、普通考へられてゐるより、もつと根本的な、先驗的なものではないかと……人間はある事件や、ある經驗によつて、オプティミスになつたりペシミストになつたりするのではなくて、元來、ペシミストとして、オプティミストとして生れてゐるのではあるまいかと……

即ち、それは後天的に形成せられるものではなくして、先天的の氣質なのではあるまいかと……

もとより、人生の悲痛な經驗は、どんな樂觀的な人をも、悲觀的にするだらうといふことは、想像せられないではありませんが、それはまづ稀有の例でせう。人間の一生といふものは、どんな幸福さうに見える人にとつても、隨分堪へがたい重荷であるのが普通ですから、若し外部的の經驗が、人をペシミストとするものとすれば、此世には、殆んどオプティミストと云へる人はあり得ないやうに思はれるが、存外さうでない事を考へると、私のこの推定は、必ずしも全く誤りであるとも思はれないでせう。

オプティミストとペシミストは、人間に存する二つの氣質を代表するものとして……一つは凡てを明るくみる、快活で勇敢で、人生を肯定して、積極的に生きて行く。けれども、それは往々輕薄とか、淺薄とかの缺點を伴ふ。後者は凡てを暗くみる。概して沈鬱で、人生の否定に傾きやすく、消極的になる。そして、因循に陷つたり、皮肉に墮したりする。君がナイーヴな、純情の人でありながら、あの皮肉なハイネを愛し、ハイネに傾倒する所以は、そこにあるのぢやありませんか、君がペシミストである事に。

僕と來ては、そのペシミストの弊を遺憾なく具へてゐる人間です。そのくせ、やつぱりイデアリストでもあるのです。ここのところの關係は、どう說明したらいいものか、結局は自分でも分らなくなるでせう。

ところで、此頃僕は、やつと骨折つてその行き着いたところに、今迄克服しようと努力してゐたニヒリズムが、ちやんと待つてゐたやうに思はれるのです。もつとも、それは以前のやうなデスペレエトなそれとは違ふので、その虛無觀は、一種の信仰とも云へるものかも知れません。それはいづれ今度、君にお會ひした折りにお話しませう。とにかく、僕はこゝで、イデアリストとニヒリストとの融合調和の道を發見できるやうな氣もして來ました。もつとも、僕は組織立つた頭がなくて、直觀と飛躍とで行くのですから、とんでもない獨斷と誤謬に陷る事はあり得べき事です。

けれども、思索も、自分といふものから遠くかけはなれた、單なる論理的構成だけで終つては、やつぱり寂しい事ですね。一種の空中樓閣となつてしまつては……私が獨逸製の機械のやうに堅固で精巧な哲學の體系（システム）よりも、片々たる「半哲學者（ハーフフイロソーフ）」の直觀と獨斷と逆說とを愛するのも、自分のやうな無力なものには、その方がのみ込め易いからでせう。まづ、詩人哲學者ですね。丸ビルのやうながつしりした大建築よりも、松間の草屋を愛するのが、詩人にはふさはしい。雜然混然、矛盾は矛盾の儘、不明は不明の儘、ポンとはふり出しとけばいいのですね。

×

詩人哲學者と云へば、君はレオパルヂをずつと讀んでゐるやうですね。「私も、私も、フィリッポ・オットニエリのエピタッフのやうになりたい」と君は云ひましたね。あの墓碑銘は、私にそれをはじめて敎へてくれたT君の好きな文句ですが、私も好きです。私たちはおなじく、for virtuous actions and for glory に生れながら、idle and useless に生きてゐるのです、然し、without fame はとにかく、not ignorant of nature or of himself は、ちとむづかしいですね。實際、僕は自分がいかにイグノラントであるかに驚いてゐるのです。「私が何を知らう？」結局はこのモンテエニユの口眞似をする外はない、しかも空虛な口眞似を。私の信念がいつもぐらぐらしてゐるのは、その爲めでせう。

此間、レオパルヂの評傳を讀みました、例のフォスレルのを。

ジェムズ・トムスンは、レオパルヂをパスカルに比較してゐましたが、フォスレルは獨逸のヘルデルリンと比較してゐます。そして、ヘルデルリンは無限の中に充實を見たのに對して、レオパルヂは空虛を見た、これが二人の相違だと云つてゐます。つまり、前者のナイーヴな希臘思慕の信仰に對して、後者のニヒリズムを云つたのですね。だが、ヘルデルリンが狂氣したのに對して、レオパルヂがよく身を保ち得た所以を說いたところは、たやすく同感できました。中には、著者の見解に對して首肯しかねるところもあるが、あまり理窟を云ひすぎて、つまらないと思ひましたから、

それは抜きにして、とにかくこれは近頃動かされた書物です。「その人物」「その精神狀態」の章は時に面白いものです。そこにはニイチエにも劣らぬ負けじ魂が、不屈の精神が、いかに戰ひ、いかに血まみれになつてあがいたかが、よく出てゐますが、その境遇が境遇だけに、その一生の努力は、殆んど悲壯と云つていい位です。

レオパルヂの事を思へば、君でも僕でも、まだ幸福ですよ。君はさうは思ひませんか。

然し、君の心の苦しみは——僕こそ知り、また尊重してゐる第一のものだ、とは君も信じてくれるでせう。K市時代から、湘南の幾年まで、君がいかに苦しみ、惱み、いかに光明を求めて考へて來たかを、誰よりもよく知つてゐると僕は信じてゐます、君が僕にそれ程はつきりとは打明け得ないあのデリケエトな問題の惱みをすらも。然し、君が云はれたやうに、「生きることは一つの努力です。大きな努力と勤勉とがなければ生きられない」僕もさう思ふのです。そして、君も力強く生きて下さいと云ひたい。僕も勿論そのつもりです。

それにしても、僕が君と知り合つてから、もう何年になるでせう、五年、六年、いやもつとになるかも知れない。時のたつのは早いものですね、實に、實に早い。瞬く間に、みんな、何もかも過ぎてしまふ。人生はまるで新聞紙のやうですね、たつた一日きりだ……胸を躍らせた歡びも、心をしめつけたあの苦しみも……それを知りながら、なほ「空觀」に徹せられないのは、これが凡夫のあさましさでせう。

「時逝きぬ、時逝きぬとや、あらず、人の逝くなり」とは、佛蘭西の或る古い詩人の言葉と聞きました。時の流れの中に、一葉の扁舟をうかべて、私たちは流れて行くのですね。

動くとも見えぬ流れに
一つしづかに下つて行く
枯葉の舟に、秋の氣はひを

ひたひたと水は洗ふ。
水の流れを見てゐる時ほど、時の流れを感ずる事はない、
みんな流れて、自分だけ殘る……
いや、水が流れるのではない、
自分が流れるのだ。
時の流れに沿うて、
靜かに流れて行かう。

こんな風に、私は此頃思つてゐます。みんななるがままになるのだ、みんな流れるにまかせて……ただぢつと見てゐる、それは宿命觀かも知れませんが……

×

「思考する人と私は語らう」といふワアヅワアスの言葉が、私の胸にも籠つてゐると、君は云つてくれた。さうです、秋のやはらかな日ざしの沁みるやうに落ちてゐるあの長い長い砂濱を、ずつと茅ヶ崎の方までゆつくりゆつくり歩いて行きながら、海を見ながら、波を聽きながら、空行く雲のあとを追ひながら、半日、君と靜かに話したいものですね。

湘南の秋！　更けては、あまりに寂しい。秋の齢の傾かぬうちに、風があまり冷たくならないうちに、日ざしがまだやはらかなうちに、君と並んで步きながら、レオパルヂをシエリイを、ハイネを語りたい。疲れた時には、砂の上に腰をおろして、果てなき太平洋の波を眺めやりながら、二人はあの憂鬱なレオパルヂの無窮の詩を想ひ浮べるでせう。

このあらはなる丘ぞわれには常に好ましき、
また遠き地平のながめを、
わが眼に遮るこの生垣も。
ここに坐して四方を見渡し、われは夢みる、
果てなき廣さ、世の常ならぬ沈默、
いとも深き安息の、かなたにあるを、
かの低き垣根のかなたに。
かくて心は恐れてふるふ。
枝の間にうそぶく風を聽きつゝ、
かの限りなき靜寂と、この高き聲とを
くらべ見て、われは思ふ、永遠を、
死せる歳月、なほ生けるこの瞬間と、
またその聲のいかに響くかを。
窮みなき萬有の中に心はしづみ、
この海に難破せんことぞ、われにたのしき！

萬有の海に沈まんと、レオパルヂは云つた。沈みゆく下にまた海ありとは、エマスンの引いた誰かの詩でしたね。永遠の中にあるものは、果てなき空虛か、はた實體か、誰がそれを知らう。今日のこの時、私たちは生きてゐる事を感謝すればいいのだと、私はその時思ふかも知れない。

君は砂濱の彼方をぢつと見る。あそこの大磯の美しい人は、もう遠い北の都に行つてしまつた。それが君にどんなに寂しいかを私はよく知つてゐる。私には、そのまたこちらに、私の先輩の作家の家と、先輩の老詩人の家とがあつて、自分がその老詩人のお嬢さんの病床に、まだ一度も見舞に行つてあげてない事を想うて、空しい瞑想から引き戻されるでせう。今度こそ、君を訪ね、それから御無沙汰してゐる先輩のお宅をおたづねして見よう、さう考へて、今日はこれで筆を擱きます。身體を大切にして下さい。さやうなら。（大正十四年九月）

靜かなる友達

×

ぢつと對ひ合つて、何も語ることとてもないので、いつまでもいつまでも默つてゐる。それでゐて、互ひの心の中は、丁度自分の心と同じやうに、よくわかつてゐる。一つの眼つき、一つの微笑で、その心持をあらはすには十分なのだ。

こんな友達があつたなら、どんなに幸福なことであらう。互ひに信じ合ひ、互ひに愛し合つて、一點の疑ひもその間に介在しない友達が一人でもあれば、私達は二重に人生を生きることが出來るのだ。ただ自分ばかりでなく、友達によつても生きることが出來るのだ。

×

善い友達であることは、善い父であり、善い子であり、善い兄弟であるよりも、一層困難な事であると同じく、一層重要な事でもある。善い父や兄弟である事は、なほ努めずしても成り得られようが、善い友であることは、十人の

中七八人までが、生れながらにしてはなり得られない事である。大抵の人が、それには品性の練磨、人格の淨化を必要とするのだ。

隣人の愛とか、人間愛とかいふ事は、まづ、友達の愛から初められなければならない。眞に友達を愛する事が出來れば、愛の世界の鍵はすでに握られたのである。

×

友達を得るのは、主として、運である。

どんないい友達になれる人が、此世の何處かに在つても、一生遭遇しないでしまへば、それまでである。また、どんないい友達になりえた人でも、他の偶然な理由から、互ひに理解し合ふまでに至らないで別れてしまふ場合もある。甚だしい場合には、最もいい友達となりえられた人達が、或る外面的な事情のために、例へば、黨派的偏見だとか、階級の懸隔だとかのために、最も烈しい敵となつてゐる事さへ尠くはないと思ふ。

友達運のいい人は、眞に幸福な人である。財產を惠まれるよりも、名譽を惠まれるよりも、いい友達を惠まれた方が、本當の人間らしい人間にとつては、感謝すべき幸運なのである。

×

本當の友達、本當に互ひに許し合へる心友は、一生のうち一人か二人、多くても三四人とはあるまい。その少數の友達でもえられたなら、それは非常な幸福と喜ばねばならない、大抵は知人にすぎないものだ。

×

若い時には、友達は容易に出來る。けれども、それがいつまでもつづく友情となる事は極めて稀れである。大抵は、いつともなく疎遠になり、去るもの日に疎しの例に洩れず、相見ることの少くなると共に、相思ふこともまた少なく

なるものだ。

けれども、それさへ友情のをはりとしては、いい方に屬する。もつとわるい場合になると、昨日までの友達が、今日は最も激烈な敵となる場合が世の中には非常に多いのである。

×

己に如かざるものを友とする勿れとは、聖人の敎である。また、彼が何人であるかを知るには、彼の友を見よといふ事も云はれてゐる。

友達は何等かの點で、相通ずるものがあつて、はじめて結びつくことが出來る。どんな點から云つても、共通點もなければ、聊かの理解もないものは、知人ではありえても、友達ではあり得ないのだ。

私達は「彼の友達である」といふ事を、誇りをもつて考へもし、言ひもする事の出來る友達を持たねばならぬ。さうした友達を惠んでくれるやうに、運命に祈らねばならぬ。

×

シヤンフォオルは、「友達に三通りある、自分を愛してくれる友達、自分を何とも思つてゐない友達、自分を憎んでゐる友達とである」と云つた。そして、リヒテンベルグも、「まことに然り」と、それに強く同感してゐる。

私達もかうした三通りの友達を、その近邊に擧げることが出來るであらう。

自分を憎んでゐる友達とは、早晩別れてしまはねばならない。こんな友達は、ある時期が來ると、假面を脱して、敵として立向ふやうになる。彼はただ假面をかぶつた敵にすぎないのだ。

自分を何とも思つてゐない友達は、そんな事もなく、いつまでも微溫的に交際はつづく、が、それは嚴密な意味からは、勿論、友達などと呼ぶべきものではあるまい。

眞の友達は、ただ自分を信じてくれ、自分を愛してくれる友達である。

然し、それは、單に自分を信じ、自分を愛してくれるばかりでなく、また、自分が信じ、自分が愛してゐる友達でなくてはならない。自分が信じ愛することの出來ぬ人は、つひに友達ではあり得ないのだ。

×

人間の一生は、友達を失ふ過程のやうなものだ。三十歳といふ年にもなると、若い時分の友達とはだんだん疎遠になる。

ニイチエが云つた「別れの時」を、私達は屢々經過しなければならない。「別れの時」は、どんな幸福な人でも、一生のうち絶對に一度も通過しないですますわけには行かない。

その境遇が異り、その意見が異り、そのめざす方向が異るとともに、どうしても避けるわけに行かなくなる。私達はあまりに屢々、古い友達と別れなければならない運命の下に置かれる。

然らば、汝の「別れの時」をして、意義あらしめよ。

×

舊い殼を脱することのできない蛇は死ぬ。人は時來れば、舊衣を脱して、新粧しなければならない。そこで、舊い時代と共に、その時の友達に自然別れなければならなくなる事もあらう。

然し、友達に別れるのは、汝の進步であらしめよ。汝があまりに高くのぼつたために、アインザアムになるのはい い、友達よりも低く下るのであつてはならない。

×

ニイチエのワグネルに於けるがやうに、その離反が年少者の成長の結果であるとき。

長上の影響からの離脱が、年少者の自立が、友情の冷却の原因であるとき。
かかる場合こそ、實に止むを得ない、運命的のものである。
それだけの重大な理由なくして、一旦の怒りや氣まぐれからして、友を棄て去るのは、愚かな行爲である。

×

友情は屢々、苦い裏切り　裏切られとに終る。その人を愛してをればをる程、その裏切りは、私達の胸を刺し貫く。
然し、一考せよ、私達はいつも裏切られてばかりゐるだらうか？――
私達が若し友達に裏切られ、そむかれたと感じて、憤を發するやうな事があつたなら、自分は果して彼を裏切らなかつたか、彼にそむかなかつたかと、自分に訊ねてみるがよい。自分は果して、彼にいい友達であつたらうかと。
そして、たとへ彼に對しては、いい友達であつたとしても、彼の外の誰かに、私達は曾つてそむいたり裏切つたりした事はなかつたであらうかと。
私達は他人を責めるばかりでなしに、また自分をも反省してみたいと思ふ。

×

別れた友を思ふのは、過去の自分を思ふのである。過去を愛惜する心切なれば、別れた友を愛惜するの情なきをえない。
然し、それは別れねばならなかつたのであつた。故なくして別れたのではなかつた。
ただ、その別れが淸らかなものでありたい。再び顏を合せられないやうなものであつてはならない。やさしいなつかしさをもつて、古い友達を回想できるのは、何たる幸福であらう。
然らば、汝は友を失つたのではなかつた。

私は今、多くの古い友達について考へる。むかしの友達をおもふのは、あだかも自分の青春の墓を見るやうな思ひがする。

×

私は自分のなつかしい愛する友達を、死の手に奪はれた。また、歳月のために空しく隔てられてしまつた。

また、第三者の惡意ある讒訴のために、親しい間を裂かれてしまつた事もある。それは止むを得ない事だ、自づと眞實の現れるまで、堪へ忍んで待つ外はない。そして、その友達が再びその親しみに還つて來た日は、新しい友達を得たよりも、更に樂しい事である。

かくて、今私に殘された友達は、實に長い年月によつてふるひ殘された、最も信頼のできる惠まれた友達である。

かうして、私は一層古い友達を愛するのである。

×

人はその理解しないものを所有しないと、ゲエテは云つてゐる。

友情は所有し所有せられることである。

理解のないところに、友情は成立する筈がない。

×

ただ高貴なる精神のみが、友情を解するとは、誰の言葉であつたか。

友情の中に、自分の生命の一半を傾倒するものは幸福である。

彼はその友情の中に、第二の自己を經驗するであらう。

×

結婚に於いて、戀愛の結婚と便宜の結婚とがある。そのやうに、交友に於いても、友愛からの交際と、便宜からの交友とがある。

我々凡庸なものは、全く便宜からの交友を避ける事はできない。せめては、それをも眞の友誼に向上せしめよ。

×

近代文明は、他の多くの精神的なものと同樣に、交友道をも下落せしめた。交通の便と社會組織の複雜化とは、あまりに交友の範圍をひろめる事によつて、個々の友情を稀薄化し、生活の煩雜と困難とは、信義の價値と効果とを著しく減殺した。

今日、友情とは、極めて薄弱な知人關係の挨拶によつて表示されるものに過ぎないかに見える。それもよし。知人にもまた信義と愛をもつて對せしめよ。

×

友情は、古代希臘人にとつては、非常に重要な意義をもつてゐた。ソクラテスの如きは、交友の達人であつた。プラトオンの「饗宴」即ち、愛情論は、戀愛といふよりはむしろ、交友の愛を說いたものと云つていい程である。

だが、とりわけ私になつかしいものは、エピクロスの園の、無花果の樹蔭の、數少ない交友の歡びである。エピキュリアンにとつては、交友もまた重大な快樂の一つでなければならぬ。

×

靜かな友達と、今私が呼ぶものは、むしろ自然と書物とである。自然と書物との中に、私は離れ難い友を見出してゐる。

然し、そのゆゑに、私は人間の友達を棄てようとは思はない。それは自然と書物との與へてくれないいかに多くのものを、私に與へてくれるであらう。

友は幾度びか變る。然し、つひに變る事のない友もある。酒と友とは古きほどよしといふ。然し、一見舊知の如きよき友もある。私をしてよき友のためのよき友であらしめよ。（大正十四年七月）

夏の風物

畠のもの

夏になるのを待ち遠しく思はせるものは、あまり上品ではないかも知れないが、私には矢張りたべものである。

夏の果物は一つとして嫌ひなものはないが、殊に何處か涼しいところへ行つて、苺ミルクなどを食べるのはたのしい。食べるものも單に食べるだけがたのしいのではなく、その場所とその時の氣分とをたのしむのだと思ふ。

一體人間の感覺といふものは、刹那的なもので、一昨日の御馳走を「ああ、うまかつた」と考へるのはもう感覺ではなくて、觀念であるかも知れない。だから感覺といふものはつまらないかといふと、さうではない。それだから有難いのである。一昨日のうまさが、いつまでも舌の上に殘つてゐたら、かへつてまづく感じられるだらう。けれど、あの苺の味だけは、その觀念といつしよに、あのスキイトな爽かな味ひが、いつでも舌の上に感じられるやうな氣持がする。

苺に次いでは西瓜など好きである。

私の故郷の日本海に面した海邊には、砂濱一帶に西瓜畑がずつとつらなつてゐる。私が故郷に歸つてゐた時分は、

毎朝、その畠の中を通つて、波打際の方へ散歩するのが好きだつた。その畠の中には、ところどころに番小舍が建つてゐて、あかりがともる。そして、そこに吊つてある青い蚊帳が、遠方からもはつきり見えて、なんとなく田園のロマンスといふやうなものを想像させる。また實際、そんな番小屋でいろんな事件の起るといふやうな話も聞いた。

或る時などは、番小屋にゐる男のところに、隣りの村の女が通つてきてゐたところへ、その男の女房が行き合せたので、そこで大騷ぎが持上つて、泊りに來てゐた女が風呂敷をかぶつて、畠の中を逃げ出したといふやうなことなどもあつた。西瓜を食べるときには、時々そんな野趣のあるエピソオドを憶ひ出すことがある。

德富蘆花の文章だつたかに、西瓜を川の中に放り込んで、みんなして泳ぎながらそれを割つて食べる話を讀んだことがあるが、こんな凉しいことは、さうたくさんはなささうに思ふ。そして西瓜には、さうしたいろんな興趣が伴ふところから云つても、夏の景物としては、なくてはならないもののやうな氣がする。

西瓜にかぎらず、胡瓜でも茄子でも、夏の畑物はみな、いかにも夏の物らしく爽かで氣持がいい。あの朝早く跣足で、露にしめつた土を踏んで畠に行つて、まだ露のおりてゐる茄子をちぎつたりする樂しさを想ふと、實になんとも云へない。その時は別になんとも思はなかつたそんなつまらないことが、激しく感情を動かしたり、喜んだり泣いたりした大きな事件よりも、一層樂しく且つ鮮かに思ひ出されるのは、まことに不思議なことである。

移りゆく季節

一體私は、あんまり感情を劇しく動かしすぎるたちなので、その爲めにいつも人一倍苦しむ方であるが、この頃ではそんなにひたむきにならないで、もつと餘裕のある氣持で、人生を素直にうけいれて、人生をありのままに味つて行きたいやうな氣がして來た。年をとると、人間はみんなエピキュリアンになるのかも知れない。けれど、與へられもの

を粗末にしないで、出來るだけその中から價値を見出し、それをしみじみと味つて行くのはいいことだと思ふ。

さういふ點から、私は季節の移り變りを愛し、その時々の自然の風物をたのしんで行くといふやうな、あのわが國の俳人たちの見せてくれるやうな生活をなつかしいと思ふ。

俳諧の歲時記などを見ても、古來の日本人がどんなにか細かに自然を見て、小さな自然の移り變る風物を、いかに愛してきたかといふことを感じさせずにおかない。

金魚

夏は隨分苦しいときである。以前は、夏のどんな酷暑の時でも、平氣でどんどん仕事が出來たものだが、いつかだんだん暑さがこたへるやうになつて、夏の間は一向仕事が捗らない。けれども、苦しいのは晝間だけで、晝間が苦しければ苦しいだけ、夏の夜はたのしい。

私は氣輕に浴衣がけで散步に出て、氣輕に何處へでも立ち寄るといふやうなことが仲々出來にくいたちであるけれど、夏の晚に、緣日などをひやかしたり、植木や金魚などを買つて歸つたりする趣味が、幾分かわかつて來たやうに思ふ。去年などは、釣堀で亂暴な子供たちの爲めに、小さな金魚が背中や尾などを鈎でひきさかれてゐるのが可哀想なので、滅茶苦茶にたくさん金魚を買つて歸つたはいいが、生き物を飼ふのはいやなもので、飼ひ方のわるかつたせゐか、ひと月ぐらゐすると、一尾づつだんだんに死んでしまつた。今度はどれが死ぬだらうと思つて見てゐる氣持は、あまりいいものではない。子供にいぢめられても、釣堀にゐた方が、金魚にとつては、かへつて幸福だつたかも知れないと思つたことである。

人生の幸福

夏の晩に、行水を終へて、ノリの硬い浴衣にさつぱりと着更へて、緣側に岐阜提灯でもつるして、胡瓜もみかなんかでビイル一本位の晩酌でもやりながら、家族の者と罪のない世間ばなしなどをしてゐる時には、つくづく夏の夜のたのしさを味ふ。

人生の幸福などといふものは、功名にもなく、富貴にもなく、そんな平凡無事な好々爺の生活にあるのではなからうか。

兎に角、私は今、何よりも好々爺になりたいと思ふのである。

蚊と蠅

夏の晩はこんなにたのしいが、どんないいものにも缺點のあるやうに、蚊といふものがゐて、どんな好々爺でも容赦してくれない。殊に酒の匂ひでもしようものなら、一層集つてくる。ハイネの詩にあるやうに、「私は螫(さ)されて喜びたい」といふ氣持にはなれないが、しかしあのブーンと音立ててくる蚊の、卑怯でない、勇敢な行動は憎めない、追つても追つても去らぬ、しつこい蠅よりも始末がいい。

この間『新潮』で、島崎藤村氏が『蠅』と題して、ストリンドベルグの晩年の戀愛について書いてゐられた感想は、大變意味ふかい、いいものであつたが、その『蠅』といふのは、ハイネがその死ぬ前に得た戀人に與へた名前なのでストリンドベルグもハイネに倣つて、自分の愛する少女を「私の蠅」と呼んでゐたさうである。が、「ムウシュ」と聞けばなんだか美しいやうな氣もするが、私たちの戀人を「私の蠅よ」と呼んだなら、なんだか怒られてしまひさうな

氣がしてならない。ハイネは皮肉屋だから、病氣で寢てゐる自分のまはりに飛んでくるところから、「蠅」と呼んだのかも知れない、と一應は思はれるか知れないが、實はその女性の印章に一匹の蠅が彫られてゐたので、それでさう呼ばれるやうになつたのであると云ふ。

それは兎に角として、私には蠅よりも蚊の方が、むやみと螫されないかぎりにおいて辛抱が出來る。殊にその蚊を防ぐために出來てゐる團扇と蚊帳とが、私は好きである。蚊など全然ゐないにこしたことはないが、あの日本的な風雅な團扇をつかひ、涼しい風にゆれる蚊帳の中で――それは白い木綿の蚊帳よりも靑い麻の蚊帳の方がいいが――悠悠とねころんで、陶淵明の詩でも讀んでゐる氣持は、なんとも云へないものだ。つやつぽい聯想のともなふ蚊帳も、私にとつては、むしろ枯淡な老處士の天地をつつむものとして、尊いものである。昔は、その中で輾轉反側して、終夜眠れないこともあつたのだけれど。（大正十四年六月）

山中孤獨感

五月のはじめから、六月にかけて、私はすつかり旅で暮した。月はじめに、先輩のU氏のお伴をして、箱根に行き、歸るとすぐまた伊香保に行つて、二つ三つの原稿を書いた位の外、殆んど爲す事もなく一月あまり經つてしまつた。

初夏の候になると、きまつて頭がわるくなつて、何も出來なくなるのだが、今年はそれが特にひどい。それなのに、家にゐると、長い間の習慣性になつてゐる讀書を、どうしても廢める事が出來ない。氣が付いてみると何かしら書物を讀んでゐる、その書物は鈍い濁つた頭を一層の混亂に導く。この書物の誘惑を避けて、詩も忘れ、沈思も忘れて、ただ無心に、山の中を歩き廻つて、小鳥や昆蟲などと遊びたいのが、私の願ひだつた。

その願ひは幸ひにかなつた。全く、今度ほど山の中を縱横に歩き𢌞つた事は、これまでにない事である。また、こんなに長い間書物から離れてゐた事も。それでも、こつそりと、自分の心にさへ隱すやうにして持つて行つた、陶淵明集の詩の二三篇を讀んだ。そして、あの「山氣日夕佳。飛鳥相與還。此中有眞味。欲辨已忘言。」の味ひが、はじめて少し解つたやうな氣がした。

これまで私は有名な繁華の温泉は、何やらブルジョア氣分が漲つてゐるやうな氣がして、好んで人のあまり知らない小さな温泉をたづねる方だつたので、箱根も伊香保も今度はじめて知つたのである。が、行つてみると、どちらもなかなかいい處であつた。箱根も、震　のためにさびれたせゐもあらうが、幸ひそんな厭やな成金にも會はず、案外落着く事が出來たし、伊香保も思つたより民衆的で、私は知人の經營してゐる宿で、自炊同樣の生活をして、かへつて東京の暮しよりも安易にすます事が出來たのは有難い事であつた。貧しいものは貧しいなりに、どうにかやつて行けゐるものと見える。

箱根では、底倉まで上つてそこで泊つたが、U氏の話によると、そこの溪流は兩岸に樹木が鬱蒼と生ひ繁つてゐて、隨分景色のいい處だつたさうだが、その立樹が今ではみなずれ落ちてしまつて、わづかに根の強い竹だけが、髮毛のやうにぶら下つてゐるといふ有樣だつたし、宮の下からずつと下の堂ヶ島の方を見下すと、樹木の上に西洋館などの壞れた儘になつてゐるのが、丁度破れ凧が梢にひツかかつてゐるやうな感じであつた。一體の山々も、そこここが處處崩れ落ちて、赤い肌を見せてゐるのも傷ましかつた。けれども、小湧谷から蘆の湯にのぼる途中には、新綠の間に山櫻が春の名殘を惜しむやうに咲き亂れてゐて、その間には山躑躅が目のさめるやうな淡紅色を點綴してゐた。蘆の湯まで上ると、その花さへまだ咲かず、藪鶯がうしろの篠山の中で啼いてゐた。私たちは蘆の湯から、さらに蘆の湖畔に出て、あの元箱根からの杉並木を賞しながら、箱根町へ行つたが、U氏の微恙さへなかつたら、一緒に湖上をわた

つて、湖尻から、姥子へまはつてみるつもりであつた。けれど、蘆の湖を見ただけでも、湖水の好きな私は滿足であつた。

伊香保では、浴客の行つてみるところにはみな行つた。榛名湖を經て榛名の町まで行き、水澤に行つて名物のうどんを食べ、船尾の瀧を見たりしたばかりでなく、あまり行く人のないガラメキ溫泉にまで遊びに行つた。それは榛名山中の、相馬ヶ嶽の麓にある小さな溫泉で、むかし文屋の綱秀といふ男が來て、そこで悠々風月を樂しんで、我れ樂しむといふところから我樂と名づけたが、その後かの宗祇がやつて來て、その風光に目を嬉ばす事が出來たから、自分は目嬉とつけようと云つたので、それで我樂目嬉と呼ぶやうになつたといふ。

こぢつけかも知れないが、そんなに云ひ傳へられてゐるだけあつて、屛風で圍まれたやうな山峽の、前方だけが磯部、安中の方に展けてゐて、その前面の連山の上には、富士さへも見えるその風景は、確かに隱れたる名勝と云つていい。殊に伊香保からの二里の山道づたひは、これ迄のどの風光よりも、どの途よりも、私は氣に入つた。さうした風光や、旅の出來事やらは、別に書いてみたいと思つてゐるが、然し、この山遊びの樂しさは、つひに私の筆の及ばぬところであらう。

然し、自分が自信したほどの健脚でなかつた事を發見したのは、悲哀であつた。やつぱりふだん歩きつけないせゐもあらうし、絕景に會ふと有頂天になつて駈け廻つたりしたのもいけなかつたらしい。初めから用心してゆつくりゆつくり歩くといふ、旅人の何よりの注意を忘れた罰で、榛名町からの復りには、すつかりヘトヘトになつてしまつたが、ガラメキ行きにさへ、少々道草を食つたせゐもあるが、かへりには何遍も休まねばならなかつたのには悲觀をした。これではとても、西行や芭蕉の行脚を語る資格はないと思はれたから。西行などは隨分頑健な身體であつたらしいが、芭蕉はあの病弱な身で、よくあんな奧の細道の大旅行が出來たものと感心する。今でも大町桂月翁などは、さ

うした一笠一蓑の旅をされるやうだが、それこそほんたうの旅だ。私もだんだん山歩きにも馴れて、歩き方も覺え、脚もたつしやになつて、そんな歩旅（フッスライゼ）がしたいと思ふ。

健脚でない事も、旅人として殘念な事だが、今一つ私は、氣輕に人に話しかけたり、話しかけられたりして、一見舊知の如き旅の友達をつくる事の出來にくい、自分のむくちな、シャイな性格を更に悲しまずにゐられない。それこそ、旅人としての私の最大の缺點であると思ふ。いや旅人としてばかりでなく、總じて人間としての私の呪詛はこれだ。この憂鬱な、消極的な、オークワアドな性格よ。

この性格は、いつも私の悲しみだ、私の重荷だ。こんなものは、どうにか振り捨ててしまへないものか。藝術は、殊に詩は、個性のもので、個性を生かすのが何よりだとは、もとより今も信じてゐるし、人にも云ふところだが、然し私の個性だけは、この性格だけは、私はむしろそれを滅ぼし、これから脱却する事を欲してゐる。私が超個性の藝術といふものはあり得ないものだらうかなどと考へて見て、俳諧など多少さうした意味のところがありはしないかなどと摸索してみたりするものも、一つはこんなところから來るのかも知れないと思ふ。

そして、おもふに、この性格が私を孤獨にするのである。心の底には人なつッこい氣持は十分持ちながら、賑かな社交に何となく壓迫を感じて、寂しい自然へと逃れたく思ふ。誰が强ひたわけでもないのに、好んで樂しい談笑の集りを避けて、孤獨の中にもぐり込む。あはれな男よ。ところが、世には私のこの態度を、孤（ひと）り自ら高しとしてゐるのだと解釋して、その傲慢をこころよく思はない人もあるといふ。この氣のきかない。手持無沙汰な、氣の毒な性格を。さりとは運命の惡戯である。私はどんなにか、快活な、愉快な、氣輕な人間になりたいか知れないものを。（大正十四年六月）

郷愁

×

長い間待たれた春は、やつと來たかと思ふと、もう直ぐに行つてしまつた。花が咲いて、そして散つた。

花時にはきまつて風が強い。春の嵐といふ言葉で形容したい位に、武藏野の中の都會では、生溫かい風が縱橫に吹き暴れて、あたりかまはず紅塵をまき起す。都會の人達のあの騷々しい花見といふものは、大抵こんな疾風と塵埃との中で行はれるのである。

それでも、稀に風の吹かない日もある。雲切れ一つない日は、かへつて風がひどくつていけないものだが、その晴れた空に、いくらか白雲の漂つてゐる日が、いちばんいい日和だ。そんな日には、心の合つた友達と郊外を歩いてみるのもいい。

そんな花時分に、友達が誘ひに來てくれたので、一緒に長崎村のむかうへ散歩に行つた。そこには石神井の池に續く小川が流れてゐる。そして、その兩側には、片方に櫻、片方に楓が植ゑられてゐて、若木の櫻ではあるが、割合ひに美しい花をつけてゐた。が、それよりも、私は楓の新芽の薄紅い色を美しいと思つた。また、櫻の間に、ところどころ辛夷の花が白く群がり咲いてゐるのも目を惹いた。

私を誘つてくれたその友達は、野原に出ると、すぐ帽子と足袋とをぬいで懷に入れ、その懷をぐつと押し開けた。どうするのかと訊くと、かうして日光浴をするのだと云ふ。一人で來る時は、その上まだ着物の肌をぬいで、野路のはしに蹲つて、ぢつと背中を日に晒すのだといふ。そして、そんな折りに、若い娘さんなどの通りかかる事があるの

で、こちらは悪いと思つて、ぢつと顔を俯せてゐると、その前をソツと拔足に通り過ぎると、バタバタとかけ出すさうである。狂人だとでも思ふらしいと、友達は笑つて云つた。

私はそれ程にまでして日光浴をする勇氣はないが、然し、かうしてポカポカと春の陽のあたる田舍路を歩いてゐるだけでもいい氣持だ。若い男女が肩をならべて、樂しさうに散歩してゐるのを見ても、かるい微笑がうかぶ。樂しい淸遊よ。こんな時には、しみじみと自然の惠みを感謝したい氣持にならずにはゐられない。

×

春は逝つてしまつた。そして新綠の初夏が來た。けれど二三日前に行つた箱根の山の上には、まだ春が殘つてゐた。

箱根といふと、私はすぐ成金の札ビラを切るところ、ブルジョアの樂園といふ氣がしてついぞ行つてみたいとさへ思はなかつた。それが今度先輩のU氏に誘はれたので、そのお伴をして、はじめて行つてみると、丁度ひまな時節のせゐもあつたらうが、思つたほどでもなかつた。これならば、箱根もさういやな處ではないと思つた。が、それもあの震災のためにすつかりさびれたからにちがひない。今でもまだ十分に恢復してゐないやうで、殊に、山のところどころが崩れて赤禿げになつてゐるのや、底倉などの谿流の兩岸の樹がすつかり下へ落ちてしまつて、竹などが逆立ちしてゐる光景などは、いたましいものであつた。

私たちは底倉に一泊して、それから蘆の湯の方に行つたが、あの小涌谷から蘆の湯にのぼる道には、新綠の間に、山櫻が今を盛りと咲き亂れてゐた。またその間には、ぱつと目のさめるやうな山躑躅の花が、帶をお太鼓に結んだ若い娘のやうなはにかみを見せてゐるのも、美しかつた。

けれど、蘆の湯までのぼると、まだ花も咲いてゐなかつた。木の芽が芽ふいたばかしで、山の方では藪鶯がしきりなしに啼いてゐた。底倉などよりもよつぽど冷たく、朝から雨の降つた日なぞは、とても五月とは思はれない肌寒む

を覺えて、シャツの上に宿のどてら一枚ではたまらないので、もう一枚借りて上から羽織つたほどであつた。

つい目の前の双子山は、すつかり霧に隱されて、はじめて來た日ならば、そんな山がそこにあらうとさへも思はれないにちがひない。風がわりに強くつて、樹立がざわめいて、雨は眞白に降つた。それは麓では、新綠の梢をつたふ雨であり、花を送る雨であるが、この山の上では、花を誘ふ雨なのであつた。そして、その雨脚を見たり、お茶をのんだりしながら、私は話上手な先輩の豐富な話題に驚嘆しながら、いろいろな人生智を敎へられてゐた。かうして雜談ばかりに日を送つて、二三日ゐた間に、二人とも一向原稿が書けないでしまつた。が、久し振りに山の空氣を吸つて、山を下りる時には、何だか身が輕くなつたやうな氣がした。

×

いつもいつも慌しい都會の生活をしてゐると、心が沙漠のやうに乾く。埃つぽい長い道を歩いて行く時、たまらない渴きを覺えるやうに、毎日の忙しい散文的な生活に追はれてゐると、歩き疲れた旅人が、一杯の淸水を渴望するやうに、その一杯の淸水のやうな、人の情、人の言葉にあこがれる、靜かな安息の一日を願ひ、人里はなれた山中に、平素の奔命を忘れたいと望む。そんな時、私たちは自然を思ひ、旅を思ひ、故郷を思ふ。

自然は私たちの故郷である。いつも都會の榮耀に放浪してゐるものは、屢々その故郷を忘れる。故郷は常に安息の場處である。都會に生れた人は故郷を持たない。それがどんなに寂しい事だらう。田舍に生れたものは、いかに都會の生活に喘いでゐても、その歸つて行くべき故郷の事を思ふと、心が慰む。

郷愁は甘い悲しみである。流浪者の詩である。一日外に働いてゐたものが、家路につく時は、おのづと足が急がれる。早く歸つて、靜かにやすみたいと思ふ。歸つて行くべき家がある人が幸福だ。故郷のある人はなほ。しかも、自然はいつも私たちの故郷だ。（大正十四年五月）

自然に親しむ

季節のうつりかはりは、毎年毎年、おなじやうに繰返されるのだけれど、その繰返される度びに、やつぱり心は新しい喜びに充たされる。

×

そのむかうに盛夏の炎暑をひかへた梅雨どきだとか、秋から冬にうつる時分だとかは、とりわけ病身な人達にとつては、恐怖や不安を抱かせる事が多いやうで、湘南に病を養つてゐる私の若い友達は、いつだつたか、その長い受難の冬を迎へる氣持を訴へて來た事がある。けれども、それだけに、その冬過ぎて春のめぐり來る時は、どんなにか喜ばしい期待であるか知れない。

春は健康な人にとつても、もとより樂しくたふとい時だ。一冬の間、いぢけて、かじかんでゐた心が、ひと雨ごとに暖かくなるにつれて、丁度草木の花が咲きほころぶやうに、また凍つてゐた池水がほのかにぬるむやうに、解き放たれ、やはらげられて、何とはなしに浮き立つて、いきいきしてくる。

私はかうした早春の時と、それから夏たけて、蟲の音がだんだん滋くなつて行き、夜などかすかに肌寒むを覺えだす初秋の頃とがいちばん好きだ。けれどもまた、梅雨があがつて、カツと暑くなる時分や、冬外套を出して着なければならぬ時分も、さう嫌やではない。苦しい夏冬の眞中ですらも、心を構へさへすれば、その季節相當の趣味がまるで見出せないわけではない。またたとへどんなに嫌やでも仕方がない、その嫌やな季節があればこそ、また樂しい季節が一層樂しく味はれるのだから。

今まで冬枯れてゐた寂しい庭のおもてに、青い木の芽、草の芽を見つけた時、その一點の靑が、どんなに強く眼を惹くだらう。それが花となり、若葉となり、若草となる一日一日の變化は、大抵氣も付けないで見すごしてしまふが、若しさうした極くこまかな自然のいとなみにまで、深く注意をはらつて行つたならば、思ひもかけぬ喜びと慰めとが、そこから無盡藏に汲まれるであらう。

×

そして、かうした自然のかすかな姿を、昔からの日本人は、どんなに愛して來た事だらう。俳諧の季寄せなどを見るも、その自然に對するこまやかな注意が、いかにも行屆いてゐる事を感ぜずにはゐられない。摘草とか、野遊とか、接木とか、又は水溫むとか風光るとか、すべて自然の風物や、季節の推移や、自然を對手の行事やが、こんなにも不變の主題となつてゐるといふ事は、卽ちこれらの季題は、日本人がいかに自然を愛し、自然に親しんで來たかといふ事を、はつきりと示してゐるではないか。然し、これはひとり俳諧ばかりでない、總じて日本の文學の大きな特質であるやうに思はれる。むかしの隨筆家——例へば淸少納言だとか兼好だとかいふ人々の作品のやうなものは、また、西行や芭蕉のやうなたちの詩人は、恐らく、外國の文學史には、あまり多くは見出し難いにちがひない。また、後世になつていたづらに技巧的、形式的なものに墮してしまつたとは云へ、かの茶道の如きも、當初はこの自然の愛から生れたものと云つても過言ではない。少くとも千宗易の草庵一風の茶の精神はそれであつたに違ひない。

×

今では、人の心はひとへに都會的なもの、人工的なものに向つてゐる。新しい刺戟を求め、その刺戟に慣れると、更により強い刺戟を求めて、あく事を知らないやうに見える。もとよりこれは止むを得ない時代の趨勢で、隻手よく挽回すべきでもなく、また、あながちに否定し去るべきでもないと思ふが、然し、あまりに物質的な、强烈な刺戟の

享受にのみ心を向ける結果は、その心をすさませ、乾からびたものにしてしまひはしないだらうか。私は現代の文學に、その痕跡を、あまりにはつきりと見出し得る事を寂しく思ふ。

現代は科學文明の時代である。ラヂオの時代である。アメリカニズムの時代である。從つてまた、その文學が、かうした傾向を露出してゐる事も、當然であるかも知れない。新時代とか、新感覺主義とかいふ聲を聞く。また、ダダイズムや、未來主義や、表現主義や、それらの流れが渦卷いて、靑年の頭を愈々新しい刺戟へと驅つてゐる。もとよりかうした傾向は、仕方のない時代の反映であらう。が、我々は時には自然の懷にかへつて、そのやはらかな愛撫の中に、心をやすめ憩はせる事が必要である。自然の與へる慰藉には、シネマの刺戟もなく、デパアトメントストアの眩惑さもない。が、その代り、かすかながらも盡きせぬ滋味がある、心を爽かにする精氣がある。私達はこの時代のゆゑに、愈々自然に還つて、そこに自分の生活の支柱を見出したいと思ふ。

然し、その自然に還るとは、どんな生活を意味するのであらうか？　それについては、簡單に書き記す事は出來ない。然し、私が最近讀んだ森の哲人ソロオの『森の生活』一卷は、それについてのいい暗示を私たちに與へてくれると思つた。

×

ソロオはウォルデンの森に入つて、二年間をそこに暮した。その貴重な生活記錄が、この『森の生活』一卷である。彼はそこで、ウォルデン・ポントの岸の眞向ひの松原の傾斜の上に自分で一つの小舍を建てて、そこに隱栖した。私はその小舍を想像すると、自分が少年時代に、朝鮮にゐた時に、父の家の後の空地に、弟と二人で、後の河原の堤の楊柳の枝を折つて來てこしらへた小さな小舍の事を想ひ出さずにゐられない。そのアンペラで圍つた小舍の中に、蓆を敷いて、その上にすわつた時は、どんなに樂しかつた事であらう！　ソロオの小舍は、勿論そんな子供の建築とは比

較にならぬものではあつたらうが、その中に、自分が手づから建て、自分で裝飾し、整頓した小舍の、その三脚の椅子の——それは一脚は孤獨のため、二脚は友情のため、三脚を用ふる社交の爲めであるとかれが云つてゐる——一脚にかけた時は、かれはいかに幸福であつたらう。

This is the house that I built;

This is the man that lives in the house that I built;

「これは自分で建てた家、これは自分で建てた家に住む人」と歌はずにはゐられなかつたであらう。

然し、彼は自ら家を建てたばかりではない、彼は數エーカアの土地を自ら耕して、その食料の豆と馬鈴薯とを收穫した。彼は森の外へ出て、少許の勞働をもしたが、その生活は出來得るだけの自給自足のもので、それは謂はば武者小路氏の新しき村を單獨でやつたやうなものであるが、彼の孤獨には、別様の深い意味があつた。彼はその孤獨をたのしみ、——然し、彼は天性の隱者ではなく、またミサンスロピイでもなかつた——少許の勞働の時間の外は、そこで讀み、書き、また瞑想した。彼は隨分獨特の讀書家であつたやうに見える、けれども、かれは人間の書いた書物をのみは讀まなかつた。彼は手近の自然をより多く讀んだのである。

彼は四季の變化をよく觀察してゐる。自然の靜と動とをつぶさに味つた。爽かな風は彼を訪れ、樹々の聲は彼を呼んだ。小鳥は彼の呼聲に喜んで出て來たし、獸は彼を嘗めまた抱いたし、湖水や小川の魚でさへ、彼の掌の間に辷り込んで來たのである。二年間の森の生活は、人間がいかほど自然に近づき得るか、自然はいかに人間を歡び迎へるかを、實によく示したものと思ふ。

そして、その二年間に、彼の學んだものは何であつたらうか？　人間がその是非とも必要な需要以外のものを棄てて、簡易質朴な、少しも無駄のない生活を營みさへすれば、僅か六週間働けば、一年間の生活を支持する事は左程む

づかしい事ではなく、一週間の順序を逆にして、一日だけを勞働に捧げて、あとの六日間を休養に送る事さへ出來るといふ確信をそこで得たのである。そして、これは大に考ふべき事である。實際、我々は是非無くてはならぬものよりも、むしろ有つても無くてもどうでもいいもののために、餘計勞働し、心勞し、奔命してゐるのであるから。

しかも、今のアメリカほど、この文明の弊害の極端な處はない。そのアメリカニズムの本場から、かのエマスンやホイットマンと共に、このソロオのやうな人が出たといふ事は、非常に意味の深い事であると思ふ。そして、我國の社會狀態も、日に日にアメリカ化して、物質と虛榮とに走りつゝある事を思へば、ソロオの、特にその『森の生活』一卷の、我々に與へる敎訓と暗示と慰藉とは、決して尠少ではないと思ふ。

×

私達はもとより、みなソロオのやうな生活が出來るわけではない。また、ソロオのやうに森の中に、二年間隱れるといふ事が、必ずしも必要な事であるとも斷ぜられはしない。

ただ、私達はもつと自然を愛し、自然と接觸し、自然の靈氣に浴して、自分たちの疲れ、乾き、荒んだ心を濕ほし、慰め、且つ更新したいと思ふ。

私達の生活は餘りに自然と隔離してしまつた。芭蕉の「造化に從つて、造化に還れとなり」「萬象もまた風雅なり」の直觀は、新しい意味をもつて、私達の胸にも響かねばならぬ。（大正十四年四月）

水邊初夏

夏になると、水のほとりがなつかしくなる。何處か涼しい處へ……と思ふと、まづ心に浮ぶのは水邊である。海邊、

河邊、湖水のほとり、人毎に好みは違つても、水はとりどりに心を惹く。盛夏の暑さに苦しむ都會の住民にとつては、バケツ一ぱいの打水でも、どんなに有難いか知れない。それが漫漫とたたへた海の色、清淺な流れの趣きを目に見たならば、ただそれだけでも、もう滿腔の凉味を覺えずにはゐられないであらう。けれども、水のながめは、ひとり盛夏にあるばかりではない。冬の雪や氷に埋められた時分だけは別としても——いつか見た東北の雪の野を流れる河一筋のいかに侘しかつたことよ——春の花どき、秋の紅葉のころ、みなそれぞれに趣きが深い。が、私がとりわけ好ましく思ふのは、晩春初夏、新綠の目ざめるやうに青青とした時分である。新綠と水色との相映ほど美しく爽かなものはない。私は花や紅葉のいろどりよりも、むしろこの初夏の翠色のしたたりを愛する。

一體に、旅をするには、この晩春初夏の頃が、いちばんいいやうに思ふ。よんどころない勤めを持つてゐる人はやむを得ないが、それでも土曜から日曜にかけての、小旅行のためにこの時候を空しく逸するのは惜しい事である。それにこの頃は、溫泉などでも、あまり客が立てこんではゐないし、氣候も暑からず寒からず、ほんたうに樂しい旅が出來ると思ふ。それで私も、毎年この時候だけは、のがしたくないと思つてゐる。

一昨年、加賀の溫泉めぐりをしたのも、丁度この頃だつた。片山津、粟津、山代、山中——その溫泉と溫泉との間を連絡してゐる電車もさう感じはわるくない。そして、その軌道の眞中には、兩側の野や畠から散りこぼれた樣に、青い草が勢ひよく生えてゐたりして、何となくのんびりした氣持になれる。もう菜種もさかりを過ぎ、麥も青く伸びてゐる加賀の平野に立つて、天の一方に聳え立つた白山の美しい姿を望んだ時には、莊嚴の感にうたれたと云ひたい。

片山津は柴山潟のほとりにあつて、山中、山代などにくらべて、わりに新しく出來た溫泉だが、山陰の東鄕溫泉などをおもはせる、その湖畔の風趣は、私にはむしろ、より好ましかつた。けれども、最初の二三日の間は、雨に降りこめられて、所在なしに、土地の新聞や、土地の地方附錄のついてゐる大阪、名古屋の新聞ばかり讀んで暮したので、

おかげで金澤の方の事情には隨分通じてしまつた。どの新聞かに、香林坊の某寄席の藝人が、西廓の藝妓の指輪をとりあげて、何と云つても返さない事から起つた悶着など、幾日にもわたつて載つてゐたのさへ憶えてゐる。

やつと雨があがつたので、藥師堂のある山にのぼつて、その崖際に立つて、湖上を眺望すると、柴山潟は、こちらの水田と、彼方の海をかぎつてゐる丘陵との間に、帶のやうに左右につらなつて、まるで靜かな大河のやうに見えた。そして、舟が一つ、しづかに動いてゐた。それから御堂の横の方を、ずつと歩いて行くと、卯の花がそこここに咲いてゐるし、路のかたはらには、忍冬の花が澤山咲いてゐた。ふとその花を摘みとつて、匂ひを嗅いでみると、甘やかに匂ふ。

かうして新綠の葉のみづみづしい山路を歩いて行くのは、何とも云へぬいい氣持である。と思つてゐると、その山がいつか畠になつて、雜木が盡きたところに、のびきつた菜種の花が黃色につらなつてゐた。それでそこからまた引返して、藥師堂の前のかなり急な幅の狹い石段を下りようとすると、下から若い女が一人上つてくる。そのパラソルの水色もいかにも初夏らしい。ぢつとそこに立つて、その上り切るのを待つ。と、上り切つた女は目の前に立つてゐる男の姿を見ると、靜かに會釋して、藥師堂の方へ行く。

山から下りて湖畔に出ると、水はさうきれいではないが、そのほとりには一杯に芦が靑靑と伸び續いて、風がさやさやと戰いて行く。その中に、銳い聲で行々子が啼く。岸邊につないだ小舟に、波がゆたゆたと來ては、ものうげに碎けて、影を亂す。その趣きが、平凡ながら私には捨てがたいものがあつた。山中の溪流の眺めとは、また違つた感銘が胸に殘つてゐる。

山中の蟋蟀橋は、長い間あこがれてゐる名前であつたので、雨の降るのも厭はないで、宿の番傘をさして、足駄を穿いて行つてみたが、繪葉書で想像されるほど幽邃な氣はしなかつた。溪流の淺いせゐかも知れない。そして、其溪

流の上にかざしてゐる新樹の緑、殊に若楓の鮮かな色の方が、反つてはつきり眼に印象された位であつた。けれども、それはあまりに期待が大きすぎたからに違ひない。それにこの溪流の眞價は、十町ほど下流の黒谷橋まで舟で下つて見なくては分らないかも知れないと思つた。

勿論、犬山の白帝城の天守閣から瞰下した日本ラインの大觀などから思へば、比較にはならないが、然し、風景といふものは比較すべきものではないと思ふ。比較はしても、ひたむきにその優劣を論ずべきではないと思ふ。どの風景にも、それぞれの獨特の趣きは存するものである。それを認め、それを愛するのが、眞の自然の愛好者ではあるまいか。そして、これはひとり風景山水についてのみ云はるべき事ではない。

けれど、こんな理窟はどうでもいいのだ。のんびりした、のんきな心持で、何處かに旅をしたい。溪流のほとりか、或ひは湖水のほとりへ――。もう久しく旅をしない。私の心は塵に染みてゐる。淸流の水はそれを洗つてくれるであらう。(大正十四年四月)

水の讃

湖沼學といふ學問は、割りに新しく出來た學問で、瑞西の學者フオーレルにはじまつて、日本では、田中阿歌磨子爵が唯一の專攻學者であるといふ。そして、それは湖沼の形態成因から水位、水色、水溫、深度、其他各般の事項に關する地學的研究で、湖沼の多い日本では、特に重要でもあるし、また隨分趣味のある學問だと思ふ。

子爵がこの學問に志されたのも、やはり湖沼の風致を愛するところからと云ふ事であるが、私も湖水が好きで、日本中の湖水を見てまはりたいと云ふ奇妙な願望を持つてゐる。私も湖沼學が理想だと云ひたい。だが、私の湖沼學は、

頗る非科學的な方法による。つまり、湖畔に行つて、その景色を眺望する、ただそれだけの話である！　そして、それらの湖水の水や魚を味ひ分ける事が出來たら、既に博士である。かうした極めて雑作のない暢氣な學問なのだ。

ところで、こんな威張つた事を云つても、實のところ、今私の知つてゐる湖水と來ては、まだ極めて少ない。とても恥かしくて人前では云へない位のものだ。それは霞ケ浦さへまだ知らぬのでお察しがつかうと思ふ。が、「今に見ろ」とは思つてゐる。

然し、幸ひ私の生れた山陰には、この湖沼が多い。鐵道の沿線だけでも隨分ある。湖山池、水尻沼、東鄕湖、それから宍道湖、石見の方にもまだあつた筈だ。私がその岸に生れた中海は、殘念ながら正確に湖水ではないかも知れない、が、湖水のやうな氣がして無理にでも湖水にしたくつて、その相聯結してゐる宍道湖の女性的なのに對して、これを男性的な湖水と見なして、二つの湖水を相愛の男女の象徴にあしらつたロマンティックな構想をさへ立てた程だつた。

この出雲の宍道湖は美しい湖水で、優雅な女性的な感じを受けるのは本當なので、それで私もそんな風に描寫して得意でもあつたのだ。が一昨年の十二月、雪の降り積つた中を、玉造から湯町驛まで歩いて出た時、眼の前にこの湖水の面が、周圍の白皓皓たる中に眞黒に物凄く見えたのに、すつかり平素の感じを裏切られてしまつたのは我ながら笑止であつた。が、とにかくこの宍道湖などは、私の最も好きな湖水だ。そこからは、あのすばらしい白魚がとれる。名も松江の鱸も名産だ。もつとも東鄕湖の鰻の方が、私にはより好物ではあるが。

所で、二つの湖水を夫婦とすれば、三湖臺で名高い加賀の柴山潟、今江潟、木場潟は、さしづめ當世ばやりの三角關係で、琵琶湖に余吾湖は子持女に見立ててもよからうと思ふ。（これも私の湖沼學の一科目である！）だが、それも去年の春、米原から北陸に廻つて時、山の間にポツチリ盆のやうな水を見つけた時に、さう感じられたわけではない。

勿論、地圖の上の感じにすぎないのである。然し、かうした淺薄さのおかげで、私の興味はもつと擴がる事が出來る。つまり、私の愛するのは、ひとり湖沼のみにとどまらない。河川も好きだし、海も好きだ。總じて、水を愛し、水を好む。かうなると、むしろ水學と云ふべきであらう。そして、この水學者は、單に水を眺める事が好きなばかりでなく、また水を飮む事も好きだ。そのくせ泳ぎと來てはからダメなのは滑稽だが、その代り、船には自信がある。何しろ玄海灘を六遍も渡つてゐるのだ。東京灣位ではまゐらぬつもりだ。

孔夫子によれば、智者は水を樂しみ、仁者は山を樂しむといふ、が、自分ほど智者に遠いものはないから、いかに孔子樣の言葉でも、餘り信用は出來ぬが、續いて智者は動く仁者は靜なり云々と云はれたなど大に味がある。また芭蕉が、山は靜にして性をやしなひ、水は動いて情をなぐさむと云つたのも面白いと思ふ。むかし小學生の時分には、よく山と海とどつちが有用かなどいふ問題を論じ合つたものだが、考へてみると、今でもともすると、そんな無用の辯を弄して、ムキになつてゐる事が多い。言葉は陳腐でも、柳はみどり花はくれなゐ、善惡不二、萬法歸一、山水一體だ。然し、水はたしかにうまい。

西洋人は、日本人が水を飮んで滿足してゐると云つて驚いてゐる。が、水は實際うまいのだ。醉ざめの水の味ひは、もとより下戸の知らぬところだが、酒は茶よりも濃しである。然し、水の眞味は要するに生水にある。生水飮むのは毒だと云はれたが、此頃では、水飮むべしと盛んに醫者によつて宣傳されてゐるのは會心の事である。先年、名古屋へ行つた時、木曾川の水を飮む事が出來たのは嬉しかつたが、更に岐阜へ行つて、土地の人達と一緒に、長良川に遊んで、上流に溯つた時、丁度早春の頃で、岸上の白梅の點綴に林處士の詩趣を愛したその折りに、舟の上から長良の川水を汲んで飮んだ甘露の味は今に忘れ難い。

茶道でも、擇水は重要な事で、茶人は水の吟味には隨分注意する。東坡の汲江煎茶の詩に、自臨㆓釣石㆒取㆓深淸㆒の

句あり、楊誠齋これを評して、七字而具五意と云つて、水の淸きこと、深處に取ること、石下の水の泥土なきこと、釣石の尋常の石ならざること、東坡自ら汲み卒奴を遣らざることの五を擧げてゐるが、この自ら汲むところに、何よりもその用意が見えるではないか。我國でも、堅田の祐庵が、僕をして茶水を湖心に汲ましめて、その命に違ふ事の出來ぬほど水を味はひ分けたのは有名な逸話である。が、自分で汲みに行かないだけ、茶人としては至つたものでないかも知れぬ。とにかく、陸羽の茶經などを見ても、山水は上、江水は次、井水は下、山水は乳泉石池漫流のものを取り、江水は人を去ること遠きものを取り、井水は汲むこと多きものを取るとあるをはじめ、その水の精選の方法が實にこまかいものであるのに驚かれる。

だが、水を吟味するのは、茶人ばかりではない。酒造家もさうだ。私は酒屋の子だが、小さい時に、家の酒男が、隨分遠方まで擔桶（たご）を擔つて水を汲みに行つてゐた事を憶えてゐる。灘の生一本の價値は、卽ちその水にある。松尾神社が桂川のほとりにあるのも偶然ではない。だが、所詮酒はきちがひ水だ。あの五尺の桶の上に鼻を出して、その窒息せんばかりの芳烈な醱酵の香を嗅いだものでなければ、ともに酒の味を談ずるに足らぬなどと、まだ酒をがぶがぶあふるばかりの時分に豪語して、友達を驚かして、一時の快を貪つた事を思出すと、今更赤面の次第だが、然し、それはいい加減な出鱈目ぢやなかつたのだ。

けれども、今私は五尺の桶の代りに、湖や河川を俯瞰することを樂しむ。曾つて犬山の白帝城から日本ラインを見下した時には、芳烈な酒の香に劣らぬものを感じた。水にも醉へるものである、もとより船暈のそれではないが。水淸淺の趣きも佳、怒濤衝天の姿も快、夜もすがら溪流の水潺湲、枕に通ふ波の音、ああ、大堰川の春、日本海の冬、はた三朝川（みささがは）のほとり、錦が浦のながめ。なつかしきはかの水の思出である。

少し詩人になつてしまつた。が、水の詩人は私の願ひだ。水臭いとか、水つぽいとか云へば、ひどくわるいものの

やうだが、それは酒を本位のよまひ言、君子の交りは淡き事水の如しと云ふ、その水の淡きにこもる無限の滋味、それはやがて米の飯の味で、日常生活の味で、そして平凡人の人生の意味ではあるまいか。そして、酒客は問はず、茶人は最もよくこれを解するに違ひない。茶道は即ち水の精神に外ならぬのだから。

水なるかな、水の精神なるかな。白樂天の、水は能く性淸ければ吾が師とすと云ふのに私も賛する。方圓の器に從つて、よく機を轉ずるその無礙自在の活(はたら)きこそは、羨ましくも、また尊い。俗謠子の曰く、「何をくよくよ川端柳、水の流れを見てくらせ」と。至言なるかな。（大正十四年四月）

靜かな春

×

この都會では、正月をすごすと、春はいつでも町の花屋の花から訪れてくる。

今年も桃色にふつくり咲いた躑躅の切花が、私の家の竹の緣に、ちひさな壺に挿されて置かれてから、もう十二三日位もたつであらうか。

この間に、一度雪が降つたので、その雪どけの寒さの中で、冷え冷えと、桃色の花が忍んで咲いてゐるのを見るごとに、私の口にはおのづから「春遠からじ……　春遠からじ……」との句が、慰めるやうにのぼつてくるのであつた。

ああ、春、ほんとに、懷かしい春。新しい爽かな袷を着る事も出來るし、色あせた冬の外套を輕い外套にとりかへる事も出來るし、靑い靑い麥の畑を車窓から眺めながら、美しい川の流れの上の鐵橋をわたる汽車に乘る事も出來るし、どこかの山里に近い溫泉宿で、ぶらぶらと二三日を屈託もなしに過す春の旅、何と思ひ浮べても、たのしいのは春の

旅ではないか。

「春し待ちなば花咲かん……」

ふとかういふ句も口に浮んでくる。

今は事志とたがつて、不遇に暮す身にも、いつかは春はやつてくるのだ、そして、花の咲く日もあるのだ。今に春がくる、今に花も咲く、かう思ひつつ、忍びがたい事も忍び、むづかしい事も、努力、努力で、耐へ忍び、勤勞する人の心は、何といつても素直なものではないか。

×

若い者にとつても、老人にとつても、それぞれの意味で、春は待たれる。ひたすらに待たれる。春がくれば、貧しい者も貧しいなりに快活になり、病んでゐる者も病んでゐるなりに幸福に近づくのを感じ、健かなものは、健かなだけに、はじけるばかりの元氣が出るのである。

この心からの春の思慕は、それがそのまま詩の心である。詩といふものは、もともと魂の思慕であると云つてもいいのだ。そして、その心の動きが、自分のリズムにふさはしい詞をえらぶのである。

外國の書物を見ると、かういふ春への思慕が、北歐から南歐、伊太利への、旅のあこがれになる。雪と氷とに埋められた露西亞、スカンディナヴィア半島の方から、暗い英吉利から、灰色の加奈陀から、世界漫遊客が、列をなして集つて行くのが、かのミルテの樹はしづかにロオレルは高くとうたはれた伊太利の靑空の下である。希臘、羅馬の古典的な旅である。

それが日本では、京都であり、奈良である。佳い春を極く少ししか持たない東京に住んでゐるものにとつては、北歐人が南歐をおもふやうに、京都、奈良をおもふ。

日本の春は、まづ、京都、奈良にとどめをさす。

菜の花が黄色につづいてゐる大和路を、寺から寺へ、村から村へとさまよふ氣持はどんなであらう。あまりの長閑(のどか)さに、つい眠たくなつて、何處かの丘の草の上に、寢込んでしまひはしないだらうか。

靑いといふよりはむしろ黑く眠つたやうな東山三十六峯から、北山、西山、淀、山崎の山々に圍まれたあの盆地に、溫かい水のやうにたたへられた春光を浴びながら、洛中、洛外の春をたづねて、名僧、隱士、美姬の遺蹟を弔ふのは、いかに心ゆく限りの逸興であらう。

×

春のくるごとに、おもふは京である、奈良である。

去年の春、丁度花も少し盛りをすぎた時分、私は京都に行つた。が、そこの混雜は實にひどいものであつた。何でも丁度博覽會開催中なので、一日二萬人位おのぼりさんが、この京都驛からはき出されるのだとか云つてゐた。が、私はその博覽會には勿論行かなかつた。そして、豫定のプログラムを追うて、古い寺寺を見まはつた。そこでは、いろいろなものが見られたし、いろいろの事が考へられた。けれど、あんまり多くを見、多くを感じたので、感性の疲勞を來して、かへつて印象がぼんやりしてしまつた。

それよりも、私が忘れ難くおもふのは、洛西嵯峨のあたりをさまよふた一日の樂しさである。そこにもところどころ菜の花が、靑い麥畑の間に點綴せられて、ありとしもない風が仄かにそよいで過ぎる。さすがに都ばなれのした小徑を、ぶらりぶらりと步いたり、佇んだりして行くと、行くところに何か心にささやきかける古代の俤が、花となり、胡蝶となり、夢となり幻となつて、そぞろに懷古の情をつのらせる……

×

二三年位、京都に住んでみたいといつも思ふのであるが、なかなか急にはその望みもかなひさうでない。もつとも、その望みがかなつて、いよいよ住んで見れば、また違つた氣持になつてしまふかも知れない。が、今のところは、抑へ難い思慕を感じてゐる。

そんな心持から此頃では、京都に關するいろんな文獻を漁るのを樂しみにしてさへもゐる。雍州府志だとか、山州名跡志だとか、都名所圖繪だとか……

火鉢の火に新しい炭を加へ、鐵瓶に水を加へて、和本の雍州府志をひもといて行く私の窓に、もうやや西南にまはつた三月の日かげがさして、そのほんのり溫かい感じが、心をゆつくり落着かせる。

折りしも、入口で訪れる聲がする。丁度家人もゐないので、自分で出て行くと、若い人が浮世繪木版畫會から繪を持つて來たのだ。受取つて、袋から出して見ると、美人畫二枚の中にまじつて、廣重のゑがいた「嵐山」があつた。滿山の櫻と、美しい河と、橋と、そしてとなせの瀧も見える……私は渡月橋をわたつて、法輪寺をたづねて、更に川沿ひの路を大悲閣までのぼつて行つた、曾遊の日を偲んで、ぢつとその繪を見入つてしまつた。

繪を持つて來た若者は、歸つて行つた。（大正十四年三月）

おもかげの花

鴛鴦草

雨のあがつた朝、泥濘（ぬかるみ）の道。

白い手拭をかむつた花賣の娘。小柄で、眉がまるくつて、一寸可愛い。

夏菊と撫子とをそろへて、切つてゐる。鋏がぱちぱちと鳴る。
その後荷の方には、あの美しい花が挿してある。
「花屋さん、この花は何と云ふんだね？」
「それでございますか、それは鴛鴦草（おしどりさう）と云ひます」
「花屋さんはいつもここを通るね」
「此處を通りますので……」
花賣の娘はにこにこ笑つた。
鴛鴦草とは美しい名だ。たしかにこの花は、故郷の叔母の家の花畠に咲いてゐた、あれにちがひない。
夏のはじめから秋にかけて、その家に寂しく暮した頃のことが思ひ出される。裏の畑に出ては、ぼんやり花を眺めるともなく眺めながら、これからどうしたものだらうと、前途の事を思ひ煩つてゐた。
その頃、私のへんくつをわらつた娘たちは、もういゝ母親だ……
花賣の娘はまた荷をかついだ。その前の荷には、撫子と矢車草と。うしろには、鴛鴦草の紫に加へて、夏菊と、白菖蒲一輪。

牡丹

櫻の花が散つてゐる。牡丹の蕾が破れかけてゐる。
井戸が涼しさうだ。
この情（こゝろ）をみだす晩春の風情をもつてゐる家は、この邊でのかなり裕福な家。

文枝といふその家の娘が、垣根のところにぼんやり立つて、牡丹の方を見てゐる。
いや、見てゐるのではあるまい、眼を病んでゐる。
まへに肋膜をわづらつてゐた。今では我儘一杯に養生をしてゐる。近いうちに養子をとる筈になつてゐるといふ。
今日はおせつかいな母親も、むくちな父親も姿が見えない。
むかうの方から、何處かの丁稚がやつて來て、にこにこして娘の方に頭を下げた。そして、何か手紙らしいものをわたした。
娘はそれを受取つて、ふとこちらの方を見て赧い顏をして頭を下げる。
私も一寸頭を下げて、その家の前から、海岸の方へ行く小道を逸れた。
「悩ましい日だナ……」と、なにがなしにかう呟く。

野茨

甲府の市街と山一つで背中合せになつてゐる三階づくりの大きな温泉宿。前の方はずつと葡萄畑で、可愛らしい葉が澤山、みづみづしい棚の上を蔽うて、細い蔓が日光を慕つて上に向いてゐる。
杉の古木に兩側をかこまれた、いかにも物寂びた由緒ありげな寺院。それは夢窓國師の開基で、武田信玄の長子の義信が自殺したといふ東光寺といふお寺だ。
道はその寺の山門の前の大きな松の間を横ぎつて、おなじく武田氏の建立したといふ善光寺の方へと導く。
葡萄畑の間には、豌豆やそらまめの畑、小さな藪、百姓家、それに溜池、淸らかな流れもある。
このあたり一帶は、むかし湖水であつたのを、鰍澤を開いて、富士川に水を切つて落したために、こんな盆地が出

來たのだといふ。

現に宿のうしろにある東光寺の地藏堂には、行基菩薩が水を下す折に祈願があつたといふ國母地藏がまつられてゐる。その堂は今は荒れて、隅々には、葡萄の箱が一杯積まれてはゐるが……。

私は毎朝、この小道をぶらぶらして、いろんな花を摘んだ。木瓜だの、蒲公英だの、忍冬だの、あざみだの、鼓子花だの……

　甲斐の盆地は花の湖水か、
水のほとりも、草みちも、
藪のほとりも、賤が軒邊も、
花で一杯……
たんぽぽの花、草ふぢの花、
白い野いばら、すひかつら、

花で一杯……その中でも、白い野ばらは、ひとしほ鮮かに、池のみぎはにも、道の邊にもいたるところにくつきりと白くむらがつてゐるが、とりわけ、山の奥から流れ出した淸冽な小流れの土橋のあたりから、ずつと川中かけて水の上まで一杯に垂れかかつて咲いてゐる美しさ。その白い花びらが、水に浮んで、川中の石が點點と白い、かぐはしい匂ひは、そこら中に漲つてゐる。

　土橋かかれる細谷川に、
目もさやかなる花うばら、
その白いこと匂ふこと……

善光寺のあたりをぐるつとまはつて、宿へかへつてくると、女中のおふぢさんが、につこり迎へて、「お疲れでござんせう」と云つて、お茶を出してくれる。年のころは二十七八、くつきりと色が白くて、その白いこめかみのところに、よく靑い頭痛膏を張つてゐたのが、なまめいて見えた。一皮まぶちの切長の眼は、水晶のやうな澄んだ感じを與へる女。

やはりこのあたりなのかと訊いてみた時、おふぢさんは云つた。

「いいえ、わたし、これでゝ東京の生れなんですよ、深川のものなんですよ。いろいろな事情がありましてね、一人でこんなところへ來てゐるのです。はじめは隨分さみしかつたんですけれど、もう大分馴れましたわ。でもね、東京のお客さんがいらつしやると、東京がばかに戀しくてたまりませんわ」と云つて、寂しく笑つた、私の顏を見て……

薔薇

紅い薔薇の花——花ことばによると、これには何か意味があるはず。そんな意味を考へたら、こんな薔薇の花を、若い娘から貰ふのも、一寸考へなければならないかも知れない、然し、あの乙女、あのおとなしい娘が、私の家へ來る度に持つて來てくれた紅い薔薇には勿論、何の意味もなかつたのだ。ただ自分のその若さの——十七八のあこがれの氣持と、この薔薇の花とがぴつたりと合ふので、それを小父さんのやうな私に見せたにすぎないと思はれる。

はじめての薔薇の時、その乙女は、非常につつましやかに、言葉すくなで、いつもうなだれてばかりゐた。くつきりと白い顏は、そのために、十分私には分らなかつた。

二度目の薔薇の時、乙女は自分の生れた國——大和の田舍の村の行事や、奈良のこと、京都のことなどを話した。

三度目の薔薇の時、乙女は夢の話をした。いろんな夢——恐ろしかつた事とか、うれしかつた事とか、花のなかに

自分がゐた夢とか、海の上で自分が波のやうに光つてゐた夢とか……だが、まだ戀人の事を夢みた事はないやうだつた。

四度目の――いやもう薔薇の花はない――もう暑い夏で、乙女は花を持たないでやつて來た。

「わたし近いうちに、遠いところへまゐりますの」と乙女は寂しい顏をして云つた。

「何處へ……」

「………」

それには答へないで、彼女は、自分の手紙が四五通、私のところに來てゐるのを、返してはくれないかと云つた。

「どうぞわるくお思ひにならないで、返して下さいませ」

「ええ、返してあげませう、あとから探して……」と私は云つた。その手紙と云つても、勿論、何でもないものなのだが、それを返して貰ひたいと云ふさうした乙女らしい心の動きは、私にはよくわかる。それで、直ぐ探し出して送つてやると、折返し禮狀が來た。その禮狀が一通、いつまでも私の机のひきだしの中にある。何となく寂しい娘たつた。

（大正十四年三月）

初戀

×

美しい五月の陽光かさしのぼる綠の野。まだ陽炎はもえず、朝露がしつとりと草葉の上にたまつてゐる。その綠の野を、ぢつと私の眼は見るのです。限りのないあこがれ心地で、かうして朝な朝な、家のかたはらの棗の木の下にイ

んで、私がある何者かの影の現れてくるのを待つてゐるとは知らぬ妹は、私の袖を引いて云ひますの、

「姉さん、深呼吸をしてるの？」

から云つて妹は、美しい陽ざしの方にむいて、その深呼吸をするのです。思ひきつて大きく深く、空氣を吸ひ込むので、その鼻がぴくぴくするではありませんか、それから顔がふくれて見えて……私が思はずニコリすると、妹はハアと息をはき出して、聲を立てて笑ひました。丁度その時、もうあの影が、あのなつかしい人の影があらはれると思ひます。するともう間違ひなかつたのです。むかうの雜木林から、こちらになゝめに延びてゐる街道に、白い夏帽をいただいた若人の姿です。その若人はもう毎朝のこととて、今朝もここに私がゐないとは思ひません。もうちやんとこちらの方に向いて、挨拶のために夏帽をとりました。私は急いでおじぎをします。そして、またたき一つせず、まるで私の眼の中に、あの方のお姿を吸ひ込まうとでもするやうに、見まもり見送ります。

いつの間にか、おどけものの妹はそこにはゐません。ああ、もう急いで家の中へと駈け込んで、學校通ひのいろんなものを持つて、あたふたと飛び出してくるのでせう。そして、あの方の行く方へと行くのでせう。つい去年の春まででも、私がそんなにしてゐました。私があの方のあとをつけて行つたのです、今妹のするやうに。

村でも評判のいい先生、若くて、おとなしくて、勉强ずきの先生、むろん、子供たちはみな慕つてゐます。いやいや、村では子供たちばかりではない、娘さんたちがみな慕つてゐます。このなつかしさ、この慕はしさ、毎朝のやうに先生のお姿を見ようと、かうして背戸にたつ影を、私一人と思ふことがどうして出來ませう。私一人ではない、それは此の間、學校で開かれた處女會のあの時の樣子で、私はそれと知りました。先生を、なつかしいと思ひ、慕はしいと思つてゐるのは、私ばかりではなかつたのです。峰子さまがどんなに燃えるやうな眼を、あの先生のお眼にと射てゐたでせう。

峰子さんは村長さまの大切な一人娘、とつて十七の私とは同い年。いつも美しい着物、美しい帶、すらりとした、西洋花のやうな方、いつも學校で、私の方を見るとき、あはれむやうな眼付をするので、私がいやにおもふ方――その峰子さんが、私の先生をいつもその眼で追うてゐました。でも私の先生は、ちつとも氣が付かないやうに、特に峰子さんにおやさしくもなさらない、それがうれしい……

翌年の春

「なぜ夕飯をたべぬ……」

とお母さんはおつしやるけれど、これがどうして御夕飯をいただく氣持になどなりませう、胸は一杯です。なにも知らぬ妹は、私の耳にささやくやうにして、

「ねえ、姉さん、一緒に御婚禮を見に行かない?」と云ひました。

ああ、どうして私があの方の御婚禮を見にゆく事が出來るものでせうか、あの方と峰子さんとの御結婚の今夜――私はこの身のおきどころがないではありませんか。ああ、私の心がしびれて何も思はぬとよいのに。ああ、何といふおしあはせな峰子さま。いいお家に生れ、いい御兩親をもち、そして、今、おのぞみどほりに、あのいい先生をお婿さまにお迎へになつて、明日はもう東京へいらつしやるとの事。それにもましておしあはせなのは先生です、村長樣の御養子になつて、そして、先生は東京に行つて、ある大學とやらに入る準備をなさるとかで、峰子さんと御一緒の御上京、えらい出世とかで、村一同は羨んでゐます。またお祝ひしてゐます。私だとて、これがうれしいとは思はぬではない。先生のための御喜びこそは、私はくりかへしてものべませう、でも私の眼からあふれ落つる涙のあるのをゆるして下さらねばなりませぬ。

空には月が美しくのぼりました。何處となくきこえる三味の音は、こよひの饗宴のために町から呼び迎へられた町の藝妓のさんざめきです。家のお父さんも、今ごろは行つてゐるはず。

いつとはしらず空にのぼる柔かな月の光に私の涙が光るではないか。ふいてもふいてもふききれぬ私の涙で、月の光がぼつとする。なんの、私のやうなものが幸福になどならうか。なんの、私のやうな娘をあの先生が何とかお思ひにならうか。あの私へぢつとお與へ下すつたやさしいお眼、なつかしい親切なお言葉は、あの方のお生れつきの御立派なお心からでしたものを……それと知りつつも、私の戀は育てられて行きました。でも、私はどうしてこの心持を言葉にいひ現はすことが出來ませう。もし云つてしまつて、先生にいやな娘とおもはれたなら、それがどんなにつらからう、いつも何も云はず、いつまでも私を「いい娘」として、あの方の胸の中に住みたい願ひ。奥さんになつた峰子さんとても、この私の願ひだけはどうする事も出來ぬではありませんか……

翌年の夏

野茨の花さくみちに私は行く――

「どうかして東京へ！」

から私の思ふやうになつたのは、先生と峰子さんとが、そろつて東京へ行つた時からのこと。何かから目に見えぬ絲にひかれるやうな思ひ。

東京にさへ行けば、私はこの寂しい思ひが慰められるのではないか、きつと、さうだと思ふやうになつてからの一年。私は父母からすすめられる村の靑年との結婚を、どんなにことわつて來た事でせう。いいことわりのたねとてはないので、いつも、「東京へ一二年出て行つて、修業したなら……」とそれを口實にしてゐたのが事實となつて、今度

いよいよ上京の出來るやうになりました。東京の裁縫學校へ行くのです。
停車場への二里の野ばらの花さく田舍みちを、父は行李、私は風呂敷包をもつて、つれ立つて歩いて行くのです。村はづれの小高い傾斜地から、なごりをしさに振りかへる我が家の門には、妹と母のかげ……

×

ある年の旅に、ある日、私はある田舍のみちを歩いてゐた時、その路のなぞへに咲いてゐる野茨の花の美しさに、ぢつと見とれて佇んでゐた時、むかうから行李をもつた父親と、風呂敷包をさげたその娘らしいのと、二人がやつて來ました。さうした田舍のならひとて、その五十すぎたとおもはれる人の善ささうな親父さんは、
「えゝお天氣さまで……」と見知らぬ旅人の私へ挨拶をして過ぎました。その後から、默つて私の方にお辭儀をして行つた娘は、十七八の色の白い面長なおとなしさうな娘、少し赧らめた顏がやさしく可憐に見えたのです。
私はその二人の後姿をぢつと見送つてゐるうちに、ふとこんなはかない乙女の夢が、私の胸に浮んで來たのです。誰かが、人のすむところには戀があると云ひました。私は二人の行つたとはあべこべに、その田舍みちを歩いて行きながら、さうした娘のかなしみとよろこびとを思ひやつたのです。村のあるところ、そこにはかならずかうした娘の戀の涙があると思ひますから。（大正十四年三月）

若き詩人の死

×

二十歳前後の頃には、私はどういふものか、自分が二十五位で死んでしまふやうな氣がしてならなかつた。そして、

「うたびとは二十五にして死にぬべし」といふやうな歌をつくつたり、「われし失せなば、わが戀も願ひもかなはむ」といふやうな、死へのあこがれの詩句を書いたりした。それは二十五歳が男の厄年だといふ、傳統的な迷信が、潜在意識に存してゐたためかも知れない。或ひは、世の荒い空氣に堪へられない軟かな心には、とりわけ強く生れてくる青年時代の憂鬱とペシミズムとが、その美しい先蹤——ノヷリスやキイツの若若しい名前によつて、自ら陶醉し自ら媚びたのであつたかも知れない。實際、ノヷリスやキイツやシェリイやレルモントフなどの名のもつ魅力の一半は、その若くして逝ける詩人といふ點にあるやうに思はれるから。

けれども、私は死なかつた。いつか二十五の峠も越して、もう殆んど十年近くにもなつてしまつた。それをおもふと、いかにも生きのびたといふ氣がする。だが、全然私は死なかつたらうか？　多分、私の裡の若き詩人は死んだであらう、少くとも、私の幼いロマンティシズムは恐らく二十五歳で死んだのかも知れない。今はもう、昔の激情と純眞とに別れて、心は穩かに和んで、複雜にもなり落着いても來ると共に、またそれだけ世の汚濁にも染みてしまつたであらう。自分といふものが今ではかなり底まで分つて、自分の力の限界も見え、自分の拳銃に彈丸が罩めてなかつた事も分つて來た。さう分つて見ると、少しがつかりはしたが、まづ危險のないのが何よりだと、この平凡な生涯に安住して、その惠まれないといふ事によつて惠まれる運命の惠みの乏しい賜物をも、感謝して受取らうとしてゐるのである。

かうして兎に角、青年時代の危險だけは、やつと越した。私は美しい早世の詩人ではなかつた。そして、それは結局、私がやくざであつた事を證明するだけなのかも知れない。歐羅巴では「神に愛せられるもの」は早く死ぬとも云はれてゐる、そして私達の間でも、それに類する言葉はある……けれど、神に愛せられないのだとしても、私は生きたい。こんなつまらない自分のやうなものでも、やつぱり生きてゐたい。そのためには、どんなにか苦しみもがかね

ばならぬかを、私はよくよく知つてゐるのだけれど、現に、ここまで、この今日の日まで辿つて來るためにも、私はどれだけの危機と面接しなければならなかつたであらう。どれだけの暗礁に乗上げねばならなかつたであらう。あの折り、この折り、ああ、危なかつた、——時々、その折々の事を思出すと、私はぞつとする……

　十四歳の折、父に連れられて、朝鮮から大阪に出て行つた時が、恐らくその最初の危險であつたらう。その時、私は死とすれすれになつて、その冷たい息吹を頰に感じたのだ。私達の乘つてゐた小蒸汽船が、大阪の川口の夜景の中に入つて行つた時、その折り鳥目を病んでゐた私には、水陸の澤山の燈火もボッと霞んでしか見えず、ぼんやり舷近く立つてゐると、突然、

「アレ、危い！」と後の方で女の叫び聲がした。と同時に、誰かがうしろから私の帶をつかまへて、グッと引張つた。途端、何か大きな眞黑な物が、つい目の一寸前を、さつとよぎつた……

「まあ、よかつた」「ほんとにわたしひやつとしましたわ」「あれに一寸でも觸れて御覽なさい、一たまりもありませんぜ」とみんなが口々に云つた。

「何しろ鳥目なもんですから……」と云つた父の聲は妙にかすれて顫へてゐた。

　その大きな眞黑な物は、むかうから下つて來た船に積んでゐる大きな錨だつたのだ。瘦せッぽちの少年は、後から父が引張つてくれなかつたなら、どうなつてゐたらう？　それを思ふと、「ああ、助かつた！」と私は思はずにはゐられなかつた。若しもその時私があの錨に觸れたとしたら、私はつひに何者であつたらう？　私は榮養不良で鳥目になつたあはれな十四歳の少年にすぎなかつたであらう……

　これが私の相面した最初の危險であつた。けれども、その最後のものではなかつた。そんなに端的に死そのものに直面した事はなかつたとしても、危機はその後も幾度となくやつて來た。そして、時には私を死に誘はうとした。危

機は單に外からばかりでなく、内からも來る。いな、暗礁はむしろ心の中に多く横はるであらう。それにしても、私のやうな人間でも、考へてみると、隨分あぶない瀨戸際を渡つて來たものだと思ふ。そして、今のやうに、生活を小さく制限して守つてゐる時でも、そんな危機は四方八方から、豺狼のやうに自分を窺つてゐるやうに感じられる。

思へば、人の一生といふものは、むづかしいむづかしい、そして恐ろしいものである。私は今、曾つては同感をもち得なかつた、かの老人、長壽者を敬重する我國の風習の中に、十分の理由のある事を認めるやうになつた。それは彼等老人の現在のためではない、彼等の過去の苦難のためなのである。彼等が戰ひ、打克つて來た數々の苦鬪と努力とに拂ふ敬意に外ならないのである。彼等は辛うじて生きのびたのだ……

×

滅び行くものは美しと讃へたのは昔である。若くして死に行くものは美しとあこがれたのも。今私は、滅びざるものは更に美しと云ふ。生き殘るものは更に美しと云ひ得なくとも、更に力强しとは云ひ得られるであらう。けれども、この變化は、私が詩を失つたためではない、私がより健かになつた證據にすぎないのだ。だが私のロマンティシズムは、背景に押しやられてしまつたとしても、若くして逝いた詩人の魅力は、なほ深く自分を動かすに足りる。三十歲に充たぬ年齡で夭折した詩人を、自分は深く愛してゐる。だから、私がその名を容易に想起し得るのも、毫も不思議ではないのだ。しかも、さうした早世の詩人はいかに多い事であらう、今私の數へあげ得る限りでも、かなり多いのだから。

神童チヤッタアトンの死んだのは、十七歲と何ケ月か、日本流の數へ年にしても、十八歲の若さであつた。チヤッタアトンの事は、近頃、彼を主人公に取扱つたド・ヴィニィの劇も邦譯された事であるし、もはや知つてゐる人も尠くなからう。どの國の文學史上にも、これ以上の若年は見當らない。强ひて擧げれは、同じ年で死んだ獨逸種の露西亞の

女詩人エリザベエト・クウルマン位のものであらう。勿論、才能は比較にならないのであるが。ところが、二十臺になると、非常な數である。獨逸の獨立戰爭の勇士として、琴と劍との詩人テオドル・キョルネルは二十二歲で戰場に仆れた。露西亞の悲觀詩人ナドソンが二十四歲、キイツが二十六歲、靑い花の詩人ノヷリスが二十八歲、いづれも胸を病んで仆れてゐる。レルモントフが決鬪によつて仆れたのが二十七歲、シェリイが伊太利の海で水死したのが三十歲の時である。まだカツルスだとか、ヘルテイだとか、早世の詩人の名はいくらも思ひ出せるが、その歲がはつきり思ひ出せない。詩人以外では、『性と性格』の大著に、恐るべき獨創の見を立てた少壯哲學者オットオ・ワイニンゲルが、短銃自殺を遂げたのは、たしか二十三歲の筈である。露西亞の人生派の二批評家、ドブロリュウボフ、ピサレフの死も、二十四五歲であつたと思ふ。

我國の例で云へば、ずつと古い時代では、源實朝がある。明治になつてからでは、北村透谷、樋口一葉、石川啄木、みな二十臺で夭折した人達である。一體に、明治の文學者は短命であつた。高山樗牛、國木田獨步、尾崎紅葉などにしても、みな三十臺でなくなつた。四十五十に年の屆いてゐるのは、長谷川二葉亭、夏目漱石位なものである。幸ひにして自然主義以降の老大家が、いづれも五十年の祝賀を終へて愈々健在な事は、まことに喜ばしい事である。これからは、文學者も、實生活の體驗と廣汎の敎養との至難のために、早く世に出る事がむづかしくなり、完成する事もむづかしくなるのだから、せめて五十位までは生きなければ、一通りの仕事は出來ないであらうから。

もつとも、あまりに早く世に出るといふ事は、幸福のやうに見えて、實はかなりに不幸な事であると思ふ。いろいろの苦勞に揉まれて、世間といふものも知り、自分といふものも分つての上の事ならばであるが、若しも二十歲前後のまだ志操の十分にかたまつてゐない若年時に、社會から法外の賞讚と榮譽とを授けられたなら、どうであらう？ たとひその人がかなりしつかりした性格を持つてゐたにしても、その名聲の壓力に堪へられるかどうかは疑問である。

そのために度を失し、自己と人生に對する正しい指點を失つてしまひ、往々にして狂氣に陷るやうな悲しい實例もない事ではない。たとひそれ程ではなくとも、そんな一時の幸運に誘はれさへしなければ、もつともつと發達すべき筈の人であつても、徒らに傲慢になり、自足して、それきりになつてしまふやうな氣の毒な結果にならないと誰れが云へよう。

一體、藝術家の天分といふものは、或種の草花のやうに一朝の榮に終るものよりも、樹々の花の多々益々より大きなより美しい花を開くやうなものでなくてはならない。卽ち無限の發達、止む事なき開展性こそより大きな天分であるべきである。たとひその出たてには、一世を驚倒させたとしても、直ぐに萎縮し涸渇してしまふやうな才能ならば、むしろ祝福よりも呪咀ではあるまいか。おもふに才能の祕密は、小手先の器用になくして、その人格の根柢に潛んでゐるであらう。かくて、人間としての完成がはじめて藝術家としての完成となるのだ。

その點から云つても、二十五歲以下のものは小說家にはなれないといふ菊池寬氏の說には、多分の眞理が含まれてゐる事を認めなければならない。もとより、人には早熟と晚熟との差がある。世には隨分若くして完成する人もある。そこに行くと、年齡といふものは、極く表面的な意味しか持たないものである。現に樋口一葉は二十五歲にして逝つたが、「にごり江」「たけくらべ」のやうな作品を殘してゐるではないか。けれども、一葉は天才であつた。私達のやうなものにとつては、つまり一般の原則としては、この菊池氏の說を深く肯定する外はないと思ふ。

然し、それは小說と戲曲との事である。それが詩となると、此の點で少し違つたところがありはすまいか。もとより詩といへども、その人格的な深味と完成味とは、これを成熟の時代に俟たねばならぬのは云ふ迄もない事であるがそれは晚年のゲエテや、ブラウニングの作品の如きものであつて、純粹のリリック、卽ちソングやリイドの如き抒情詩は、どうしても靑年時代の所産でなければならぬ。詩人はたとひ年齡に於いて、その時代を通過してゐるとしても、

少くともその心情に於いては、その若々しさを保持してゐなければならぬ。

永遠の若さ——それが詩の酵母である、(瞑想的な詩に於てさへも)とすると、私は再び早世の詩人に對する私の愛には、或る理由の存する事が領かれる。もとより彼等の多くは天才でもあつたらう、が、彼等はまたその上に永遠の青年である、彼等はその若さをその詩に殘らず注ぎ込んだのだ。彼等の作品には、幸にしてか不幸にしてか、老年の理智と冷索とは、少しも織り込まれてゐないのだ……

×

ミルトンの「リシダス」や、シェリイの「アドネエス」は、夭折した詩人に對する美しい輓歌である。そして、キイツの死を悼んだシェリイ自身も、またアドネエスであつた。いや、彼を何と云はう、ただ「心の心」と——水は彼の身體を傷つけても、火は彼の心臓を燒き得なかつたではないか。

水死のシェリイをおもふ時、私は、二十九歳で銚子の海で死んだ三富朽葉と今井白楊の二詩人を想起せずにはゐられない。殊に三富朽葉君は、私がまだ朝鮮にゐた時分、十四五歳のをりに、手紙の上で交りを結んだ友であつたのだから、十九歳でなくなつた白石武志君と共に、私にとつては忘れえない人である。

三富朽葉のために、私は輓歌をうたはうか？ 私にはその才がない。そしてこの人には、實に澤山の才人がその友であつた。私には、三富君よりも、もつと知られない、もつと不幸な、そしてもつと短命で終つた、幾人かの薄命な青年詩人がある、しかも彼等はただ私にだけ知られてゐる。そして私の心は、今、彼等のためにより一層動かされる。彼等のためにこそ、私は私の貧しい輓歌を捧げねばならないのだ。だが、もとよりミルトンの力もなく、シェリイの才もない私である、この貧しい散文で、彼等を記念し哀悼する外はない。

この數年來、私はかなり澤山の若い詩人と相知つた。そして、その人達の、いづれもそれぞれに成長を示して、完

成して行く勇ましい姿を見て喜ぶにつけても、いい天分を惠まれてゐながらも、不幸にして夭折した、かの「神に愛された」人達を偲ばずにはゐられない。それで私はこの文章を書かうと思ひついたのであつた。

まづ、私の頭に浮んでくるのは、眼の大きな、髮の毛の薄い、小さな顏をした、何處か病的な感じのする瘦せた小柄の靑年、むしろ少年である。彼は井上邦夫と云つて、九州の耶馬溪、山國川のほとりの小さな村に生れた。耶馬溪と云へば、古い文章世界の愛讀者ならば、そこにかつて病詩人西萩花があつた事を憶えてゐるであらう。惠まれた才能と、惠まれない健康との相剋に、喘ぎもがいたこの薄倖の靑年の傷ましい短生涯は、加藤武雄氏の『惱ましき春』の中に、長く力強く記念せられてゐる。私のはからずも知つたこの靑年井上邦夫も、またその同じ土地から生れて、その經歷こそ餘程違つてゐるが、その薄倖な點に於ては、西萩花にまさるともゆづらないやうに私には思はれる位だ。

彼は早くから詩の愛にめざめ、盛んに詩作しては、それを地方の新聞の文藝欄や、同人雜誌などに發表してゐるうち、彼の天分はだんだんと輝いて來て、それがその仲間にも認められ出した。ところが、かうした彼の詩作生活はさして豐かでもない彼の一家にとつては、許せない事だつたので、彼はたうとう、彼ぐらゐの他の靑年と比較して、彼の生活は怠惰であり、柔弱であると云つて、その父からきびしい叱責に遭つた。そしてその書物――詩集は悉く取上げられ、詩作は禁じられてしまつた。この父の壓迫に、若い心は極度の反抗心に燃え立つた。「自由を！自由を！」と彼は叫んだ。そして、再びとはその父に生きた顏を見せじとまで思ひつめて、家を飛び出し、長崎で見知らぬ男から誘はれるが儘に、ハルピンに渡つたのであつた。然るに、この壯圖は、取り返しのつかぬ致命傷を彼に與へたのだ。ここに靑春の不幸がある、無分別の罪がある。若くそして空想的な詩人は、實に悲しい！ハルピンに到着した彼は、その日から殆んど囚人のやうな監視のもとに、ひどい勞働に從はなければならなかつた。そして、彼は絕望的な氣持になつて、あらゆる事をしたらしかつた。そのハルピン詩篇によると、この間に彼は强い酒を飮む事を知つたらしい

し、また露西亞の流浪の女にも心を寄せたやうに思はれる。一年近くそこにゐるうち、はげしい熱病にかかり、生死のさかひに彷徨し、やうやく蘇生して、內地に送り還され、再び踏むまじと思つたその父母の家に歸つて靜養する身の上となつた。そして、だんだん小康を得るに從つて、彼の詩想は溢れて來た。そして、數十篇の詩を彼の生涯の最高調の感激をもつてうたひ切つたのである。そして、彼はこの詩篇の刊行を決心し、再び父母には無斷に上京した。然し、病氣の十分恢復してゐなかつた彼には、二箇月の無理な生活が更によくなかつた。そのため志を他日に得んとして、又もや歸國したのであつたが、一年餘の後、遂ひにふたたび立たず、その數卷の詩稿を枕頭にして、冬夜壁間のこほろぎの死に逝く如く、あへなく他界の人となつてしまつた。彼はその時やつと二十歲を越したばかりだつたのだ。

彼の死後、彼の父がその子を憫れんで、自分の理解の足りなかつた事を嘆いた手紙と共に送つてよこした彼の遺稿は、今なほ私の座右に、癒やし難い彼の悲嘆を訴へ顏である。

○

厨で娘があらつて伏せた
盆のうへの盃だ
山國川のよどみよ
月はくまない銀びかり

○

靑い灯のもとにちんちろりんと
ものを煮てゐる娘

じつとのぞき見してをれば
しんしんと雪が降り出して來た
ああ、戀しさ、きはまる

これがその中の一つ二つである。然し、彼の詩の最高點は「ハルピン詩篇」である。が、それはここに載すべく餘りに長く、また餘りに强烈すぎる。この井上邦夫については、まだまだ書かねばならぬ事が澤山ある、それが彼の詩をどうかして世に出してやりたいといふ心持とともに私には今も負擔となつてゐる。彼が死んでから、もう五六年はたつたであらう……

×

井上邦夫は、その境遇の上からは最も惠まれなかつたかはりに、彼はたしかに著しい天分を運命に惠まれてゐたと思ふ。それにくらべるに、少し落ちるかも知れないが、福島の方の山の村から出て來た、あの素朴な民謠詩人も、かなり獨特のものを有つたいい詩人であつた。

○

まぐさ切る音ねてゐてきけば
音のたえまにみだれ息
早も起きたな隣のむすめ
昨夜ねたのもわしや存知

○

雪はみだれに香もない袖に
暮るる夕日もあるものを

〇

孟宗竹のよなおまへの心
風の吹きよで西東

といふやうな民謡に、田園の野趣を歌つて、ほとんど他の追隨しがたい境地を示してゐた。それが東京に出て來て、身體が弱いのに、郵便局の扉になつて、自轉車で駈けまはつたりしたため、たうとう病氣になつて、國に歸つて、山の中の溫泉で療養したりしてゐたが、いつの頃からかぷつつり便りが絕えてしまつた。一人も友人のなかつた彼には、他にその消息をつたへてくれる人もない。もうなくなつたのではないかしらと、私は時をりその飄逸な顏を思ひ出して寂しくなる。彼は折越扇一と云つた。

それからまた、原田睦次といふ名古屋の方の靑年もあつた。年は二十一位であつたかと思ふ、色の黑い、丸顏の、生々とした、いかにも純朴な愛らしい顏付をした靑年であつたが、非常に短かい斷片のやうな詩、せいぜい四五行、時には二行、三行位の詩を書いた。彼はいつもその詩想が浮ぶと路上で、懷からノオトを取出しては、それを書きつけながら步む。そんな時、鉛筆を持つたまま、うつとりとした眼をして、都會の空の晝の月を見上げてゐる彼の顏は寂しかつた。私はその表情を忘れる事が出來ない。けれど、その寂しさは、彼にとつては、どんなにか樂しいものであつたらう！　彼はその寂しさに浸つて、その短かい、力強い、何處か啄木の短歌を偲ばせる詩句を喜んでゐた。そして、あまり作品の發表にも急がず、また知己をつくらうともしないやうであつた。ただ、あまり丈夫でもないのに、

自活しなければならぬのが辛さうであつた。たうとう彼は國に歸つて、そして、そこで急に肺炎か何かで死んだらしい。彼に送つた郵便物は、（本人死亡）の附箋をつけられてかへつて來た。詩はあの靑年にとつては戀人でもあつたし、また神でさへもあつたであらう。それを思ふと、何だかから淚ぐましい氣もする位である。

今一人、私には忘れられない靑年がある。それは田中紅兒と云つて、私が最初の詩集を出した當時の知合ひで、恐らく私の知つた最初の若い詩人の一人であつたと思ふ。はじめ越後の方から手紙をくれて、詩を見せてくれてゐたが、暫くすると上京して、私を訪ねてくれた。顏色のわるい、年の若いのに頰の鬚の剃りあとの濃い、無口な靑年で、實になつかしさうに私に話しかけ、私と話すのがどんなにか幸福さうに見えた。私も當時は今のやうに仕事に追はれてもゐなかつたので、一緖に散歩したり、一緖に下谷にあつたその住居に行つて半日位遊んだりもしたものである。ところが半年位もして、國へ歸ると、それきり消息がなくなつたので、田中君はどうしたらうと、時々思出して氣がかりになつた。そして、その年は非常に流行感冒がはやつたので、事によつたら、そのためにやられたのではなからうかなどと思つてゐた。

ところが、ついこの間、信州から歸つた三石勝五郎君が來て、その田中君の消息をつたへてくれた。（田中君の故鄕は信州の佐久であつた）その話によると、三石君の村から少し離れた南御牧村に、葡萄園を經營してゐる風變りの人があるといふので、紹介されるままに訪れて行つて話してみると、文學にも興味をもつてゐる人で、詩についても隨分傾聽すべき立派な意見を話してくれたが、そのあとで、自分の弟も詩が大變好きで、東京へ行つてゐた時には、詩人の方に詩を見て貰つたりしてゐたやうだが、國へ歸つて結婚させてやると、妻を迎へて二三日位して、急病で死んでしまつて可哀想でならないとの話なので、或ひはそれがよく私の話に聞いてゐるその人ではないかと思つて、なほよく聞いてみると、やつぱりさうだつたといふ。それで、三石君は私にかはつて、その墓を拜んで來てくれたといふ

話なので、私ははじめてその人の死をはつきりと確かめて、いまさらにわびしい暗然とした氣持になつてしまつた。そして、今度信州へ行つたら、是非その兄なる人をお訪ねし、田中君の墓に詣つて來たいと思つてゐる。

　そして、これが、私の知つてゐる若くして逝ける詩人達である。私はよく旅先で、寂しい村里、貧しい港などを眺め、またはさまよひながら、そこに詩を愛し、詩を抱き、人にも世にも知られずに死んで行つた靑年が、どれほど多いかをおもひみる事がある。若くして逝ける無名詩人の名は寂しい。然し、それが詩人の本當の運命であつて、私たちのやうになまじひに詩人の名を得たものこそ、反つて詩を裏切る事が多いのではなからうかと、考へてみる事が多い。詩は他人のために歌ふ時よりも、おのれのために歌ふ時、より眞實であり、より切實である。それはかの小鳥たちが林の奥ふかく囀りかはして、その聲を惜しまず、時の流れに流してしまふのに似てゐる。そして悲しい事には、かうして小鳥その儘の聲を出す詩人――謂はば自由詩人は、その村里、その林から外に出ると、歌へなくなる傾きがある。直觀のみあつて批判力をもたないかうした自由詩人は、都會生活に入ると駄目になりやすい。彼は急にその聲が消えて了ふ、衰へて了ふ。そしてその中で、弱い身體をもつたものは、都會の濁つた空氣で永久に傷つけられてしまふのだ。それは何といふ悲しい運命であらう。若し私がさうした可憐な詩人のために忠言する事が出來るならば、都會に來て、その痛ましい犧牲者となる勿れと云ひたい。君のためには廣い野があるではないか、そこで君は詩を作るのみならず、詩を生きる事が出來る。詩は單に書かれるのみではない事を、私達は相共に知らねばならない。だが、人間には、理性の力ではどうする事も出來ないものがある。私とてもまたさうであつた。それゆゑにこそ、私も幾度か仆れようとしたのだ。そして、より不幸な人は仆れた――それは運命であらうか？

　おもふに、彼等は、あのメエテルリンクの所謂宿命者であつたのかも知れない。「彼等が二十歳頃になると、あだかもその誤つた住居をえらんだ事に氣付いたやうに、急いで我々の間から立去つてしまふ……」そ

んならば仕方がない、だが今私は、もつと人間の自由意志を信じてゐる。そして、あの早世した人達が、もつともつと身體を大切にして、長生きして、生きのびて、もつといい完成を示してくれた事を、どんなにか私は願はしく思つてゐる事であらう。（大正十四年二月）

草花作りの夢

×

私は昔は隨分の夢想家であつた。殊に、夜眠られない時などに、いろんな事を空想したものである。とても此世では實現出來さうにないやうな幸福の夢を描いては、自分でその夢に醉ふのであつた。

それは隨分いろいろな夢をゑがいたものであるが、その中でも、たつたひとり草鞋をはいて、菅笠をかむつて、昔の西行や芭蕉がしたやうに、西へ東へと、日本の國中を歩いて見たら、どんなに幸福だらうといふ事が、よく思ひ浮んだ。けれども、それはとても實現されさうな事ではなく、また實現して見ると、幸福どころでなく、隨分苦しい辛いものであらうと思ふ。だが、空想に浸つてゐる時には、苦しい事の方はちつとも考へられないで、ただ樂しい事しか頭に浮ばないものである。多く空想が空想で終るのは、一つはそのためでもあらう。

元來、人生の幸福といふものが、かうした私の空想する漂泊の旅ばかりでなくて、すべてその實現の後にあるものではなくて、その前の豫想の中にあるものだといふ事は、少し經驗をつんでくると、はつきりわかつてくる。かうして、私もだんだんつまらない空想は描かないやうになつた。

けれども、その私にも、たつた一つ殘つてゐる幸福の夢がある。それだけは、その實現が可能でもあり、またそれ

を實現してみても、それ程失望しないだらうと思はれる。

それは何かといふと、何處か東京から汽車で三四時間の行程の處で小さな農家を借りて、自然を友とした生活をする事である。そして、それには、家は小さくていいが、その代り庭だけはかなり廣くなくてはならない。一寸した畠地がついてゐるとなほいい。そこに花畠をこしらへて、いろんな草花をつくつて見たい。これが今でも殘つてゐる夢想である。

×

旅ももとよりいいけれど、本當に自然の魂にふれようと思へば、天下の名勝をほんの通りすがりに眺めたりするよりも、たとへ景色はとり立てて云ふ程でなくとも、何處か田園の中に住んで、始終、四季のうつり變りを親しく眺める方がいいと思ふ。

殊に、はだしになつて、直接土を踏み、自分の手で鍬をもつて土を掘り、手づから草や木を植ゑ、好きな草花を丹精して咲かすのは、本當に幸福な生活ではないだらうか。自然を愛するものにとつては、こんないい生活は一寸ないやうな氣がする。

都會の花屋などで、草花を買つて來て眺めるのも樂しいものであるが、それが自分の長い間丹精して咲かせた花であつたなら、どんなにか眺めるにも眺め甲斐があるだらうと思ふ。それは丁度、詩人が活字になつたその作詩を見る時のやうな氣持ではあるまいか。

×

美しい花は、その一つ一つが、美しい詩のやうなものである。詩人は詩が作れなくなつた時には、花を作るのがよい。詩が作れなくなつてゐるのに、むりに詩をしぼり出してゐる詩人は、花作りにならうとは思へないのだらうか。

私も、詩が出來なくなつた時には、田舍へ行つて、その長い間の夢想を實現したい氣がする。けれども、花を作るものには、詩もまた作ることが出來るやうな氣もする。出來なくともよい、まづい詩の代りに、美しい花を都の友達に持つて行つてやつたなら、たしかに一層喜んでくれるに違ひないから。（大正十三年十二月）

講演雜感

×

自分の性格にとつて、最も不似合な事を、私は二つした。それは講演をした事と、雜誌を出した事とである。この二つが、いかに自分に不似合な事だつたかは、私の氣質を知つてゐる人達が、その意外に驚いたのでも知れよう。

けれども、その二つとも、私は自ら進んでやつたわけではなかつた。一體、私のやうな受動的な性格の男は、自分の意志の儘に突進むやうな事は稀れで、一切あなたまかせに押流されて行く事の方が多い。何しろ大抵の事は成行次第なのだから、そのために、心にもない事をさせられたり、自分の氣質とまるでそぐはぬ事をさせられたりする。

この受身の性質は、交遊關係などにもよく現れてゐる。自ら進んで友をつくるといふ事がないから、自分の方に度度訪ねてくれる人が、自然と友達になつて行く。こんな性格の常として、萬事ひかへ目で、引込思案だから、會合の席などでも、かねがね尊敬してゐる大家のところへ、自分の方から行つて挨拶をする事が出來なくつて、反つて、あべこべに先方からやつて來て聲をかけられて、二重に恐縮したりするといふ有様である。そんな自分が一見反對の講演などをしたのだから、人に怪しまれもし、思ひがけない誤解を受けたりもしたのだが、然し、それもやはり此の受身の性質のためであつたのだ。

はじめ、名古屋の純正詩人協會の人達から、講演に招かれた時、直ぐ斷わればよかつたのを、一寸のばしにしてゐた爲め、どうしても斷わりきれない事情になつてしまつた。そこへ高等學校の中の紫蘭會の人達が、講演を求めて來たので、名古屋の下稽古のつもりで、ふと受合つてしまつた。けれども、後になると、さあ心配になつて來た。果して自分に講演が出來るだらうか、壇上に立つた儘、一口も云へないで、ガタガタ顫へながら立往生するのぢやあるまいか。そんな不體裁を想像しただけで、胸がドキドキするのだ。

そんなところへ、中學校の教師をしてゐるHといふ友達がやつて來て、その話を聞くと面白がつて、そんな事なら、今度僕の學校で文藝會があつて、誰か文學者に講演をたのむ事になつてゐるから、丁度いいから高等學校でやる講演の下稽古のつもりでやつて見ないか、中學生はみなおとなしいから大丈夫だと云つてくれた。それで、私もその氣になつて、二三日してから、その中學の文藝會に出かけて行つた。これで一つの講演をするために都合三つの講演をする事になつたわけだ。

×

文藝會の演說自慢の生徒達が、雄辯をふるつて壇を下りる毎に、鈴が鳴る。控室に一人でゐる自分には、その鈴の音が、何と胸にこたへた事だらう。愈々、自分の番になつて、會場のドアの前まで行くと、實に何とも云へぬいやな氣持だ。思ひ切つて中に入ると、意外にも白髮の校長先生が、自分を紹介してくれたのは恐縮であつた、が、先生が「此方はH先生の御友人でありまして……」とその友達の名を云つて紹介されると、生徒が一齊にクスクス笑ひ出した。職員席を見ると、みなニコニコしてゐる。その前の方に腰かけてゐるH先生その人も、やはりクツクス笑つてゐるのだ。それを見ると、私はすつかり氣が落着いて、何だか重荷が下りたやうな輕い氣持になつた。そして、自分でも意外な程、すらすらと言葉が出て來て、勿論立板に水を流すやうにとまでは行かなかつたが、まあ兎に角當り前に

は喋れた、と自分では思はれた。人生の意義について話して、人間は出來るだけ自由な、自分を生かすやうな生き方をしなければならぬと云ふ主旨であつたが、あまり調子に乘つて、カンニングでも何でもやつて構はぬと云ふ結論になつてしまひさうなので、大急ぎで、社會生活の原理を持出して、手綱を引きしめなければならなかつたのでも、まづ、思つたよりも好成績だつた事はわかる。

×

こんなわけで、愛嬌のある友人のお蔭で、皮切りはまづうまく行つた。その勢ひで、紫蘭會では二時間も話し、名古屋でも、同行の友人からは說教風だと云はれたが、どうやら話す事が出來た。そして更にそこから岐阜に招かれて行く事になつて、講演のすんだ翌朝、自動車で市中を見物させて貰つて、午後には、名古屋の人に送られて停車場まで行くと、そこで岐阜の人が一行を受取つて、汽車に乘せてくれる。それを見ると、何だか私は旅役者のやうな悲哀を感じた。たしかに、講演者は一種の藝人、見世物の意味を有つてゐはしまいか、かう私は思つてゐる。文學者の思想や意見を知るためには、その著書を見ればよい。特にその講演を聽かうといふには、その人の風采や人柄を見たいといふ欲求が伴つてゐなければならぬ。それは敬意から來るにしても、好奇心から出たにしても。もつとも、聽衆の欲求の底には、もつと深い要求、すぐれた思想に觸れ、新しい知識ををさめたいと云ふ要求が潜んでゐる事を私は知つてゐる。然し、それは一場の講演によつて、果してどの程度まで充たされ得ようか。

私は度々講演をしてゐるうちに、一體、講演といふものが、果してどれだけの意義のあるものかといふ事を、考へずにはゐられなくなつた。それは講演者自身にとつても、聽衆にとても、單なる著作並びに讀書以上の、いかなる稗益を與へ得るか？　この問題は、眞面目に考へてみる必要があると思ふ。

まづ、聽衆にとつての利益は、讀書の勞なくして、何等かの知識を獲得する事が出來る。次ぎに、直接講演者の人

格の氣息に觸れる事が出來るといふ利益がある。然し、一般に講演會の會場の空氣は、概ね靜肅で眞面目ではあるが、それでも多人數の集合は、氣分を散亂せしめ易く、講演者から云つても、少しこみ入つた理論的な話は、どうも不適當な氣がする。それが殊に、講演者自身に何等纏つた準備なくて、ただ當座の場當りや、才氣走つた冗談で、滿場の拍手喝采を買ふにとどまる場合には、一場の氣ばらしに過ぎなくなる。それから第二の利益を考へると、講演者の資格はむづかしいものになる。私など眞先きにその資格を失つてしまふ。現に、松本や秋田で單獨講演をした時など、聽衆の中に、堂々たる紳士や老人の人などもあつて、それらの人々が隨分熱心に聽いてゐるので、それを見ると、若輩の身でこんな講演などするといふ事が、何だか大それた事に思はれて、空恐ろしくなつて來た。それはすぐれた學識と、立派な人格的の力とを有つてゐる人のすべき事である、自分など決して決してしてはならぬ事だと、深く感じたのである。

要するに、講演は他の人にとつては意義もあり、利益もあるであらうが、私自分にとつてだけはどうもないらしい。また、何か利益らしいものはあるかも知れないとしても、あの壇上にのぼるまでの心を削られるやうな不快な感覺だけでも、私などは二三年壽命が縮む氣がする。斷頭臺にのぼる前の死刑囚の氣持が分るやうな氣さへする。それを思へば、講演はつくづく厭やだ。

かうした次第で、私は今後斷然、一切講演といふものはしない事に決心した。最近も二三のところからたのまれたけれど、お氣の毒ながら謝絕した。今後はいくら强請されても無益である事を、ここで一寸書き添へておく。

それから、講演をやめたと同時に、今一つ自分に不適當な仕事から離れるため、雜誌『詩と人生』を今度廢刊する事にした。これはもともとやむを得ぬ事情から、私の手に引受けたものであるが、どうも私の力にあまる仕事なので、多くの友達には氣の毒であるが仕方がない。これで自分らしくないものは、二つとも捨ててしまつた譯だ。私はやつ

ばり私らしい行き方をした方がいいのである。そして、片隅の書齋裡に、學究者の生活をするのが私には最もふさはしい事であらう。（大正十三年十一月）

或る旅人の話

旅で逢つた忘れ得ぬ女の印象について語るほど、私はまだその方の話題に豐富な人間でない。私はほんとに旅がすきだ。殊に秋の旅はほんとにすきだ。だが、ことしの秋も、心は、ひたすらに烟霞勝景を戀ひつつ籠居してゐる。かういふ場合、かつての小旅行中にあつた女の人を、あれこれと思ひ出す事が出來たらそれも一興であらうとは思ふが、生憎と、頭に浮んで來るのは、南裏日本の漁師町の宿屋の色の淺黑い丸顏の女中とか、北裏日本の雪の市の停車場で見かけたニコッともせぬ冷たい顏の女敎師とか、京都の旅で見たおしやべりの年增女とかの重ね寫眞に過ぎない。よく人のするやうに、すぐ、馴々しく宿の娘にでも聲をかけるといふやうな事の出來ぬ性質の私は、旅は實際に一人ぼつちの旅である。だから所謂旅の恥はかきすてなどといふやうな事さへもない。ごく寂しい旅である。

だから私の事ではない、他の旅人が忘れられない女について語つた一つの話をここに御紹介するにとどめて置かう。

その話をした人は、色の白い、なかなかの好男子で、年頃はその頃廿三四であつたといふのだから、むりもない事ではあつたが、汽車や汽船にのる度に、美しい女が乘つてくれればいいナと思ふが、なかなかさうは行かない。ところが、ある時、大阪から下關までの急行列車にのつた。汽車は、夜をこめて、暗い長汀を縫ひつつ西へ、西へと走る。尾の道のほとりもいつしかすぎた頃、彼の方を斜めごしにぢつと見て居る一人の若い素人づくりの美しい女が、彼の眼にぴつたりと來た。その柔かな眼つき、水のたれるやうな髮のかかり、紅い唇、どことい つて、缺點のない上に、

その感じがすつかりおとなしく靜かで美しいんだから云ふにいへぬ氣持がして、こちらでも、ぢつと見返す。暫くすると、むかうの方で、眼をそらすので、こちらも眼をそらす。だが、何となく氣になつて、こちらから見てやると、むかうもぢつと見る。こんなにして、四つの眼の默語はどれほどであつたらうか。他の乘客はすつかり寢てゐる。汽車の走る音、車窓の外の灯が、この時の背景の全部なのだ。とその女が、紫がかつた懷中ものから卷煙草を一本ぬいて、別の白い手を、ツッと彼の方にさし出した。「ははア」と思つて、彼は、マッチをすつて、持つて行つたものだ。

「…………」

「一本の煙草が、彼にわたされたので、彼もだまつて吸つた。こんな風になつたので、彼は、すつかり氣がのつて了つて、

「あなたの名は」と小聲できくと、その女は自分の羽織裏を襟のとこでくるつとかへして見せて、その模樣の「とんぼ」を見せた。

この「とんぼ」といふ藝妓の顏は、實によかつた。商賣の女として見てもよく、さうでなく見ても素晴しい女でしたと、その青年は云つた。（大正十三年九月）

初秋

×

暑かつた日の、夜の空は、淸らかな碧色（あをいろ）に澄んでゐる。

いつか巽の方にのぼる十六夜の月は、匂やかな薄い綠を帶びた鏡のやうに光つてゐる。かうした時である、私は白

い蚊帳を吊つて、その中に寢ころんで、涼しい夜風の小波を味はふ。そしては、愛讀の書を繙いて、靜かな古人の詩を讀む。これが一日の仕事に疲れた心の渇きを濕ほす夜露のやうなものである。

蚊帳越しに見える卓の上に、一枚の靑葉をまるめたやうな形をした一輪挿が置かれてゐて、それには、家のものが昨日、「もう、こんなに咲いたのが出ましたのよ、花屋に……」と云つて、買つて來て挿してくれた女郎花が一枝。

すつきりとした直な莖の一ふし一ふしから、左右に一枚づつ小莖が分れて出て、その小莖のきつさきに、また、ささやかな莖が、もう房のやうに幾つも出てゐて、粟粒のやうな蕾と花とが、プツプツと宿つてゐる。かうした女郎花の姿は、なまめいたといふ感じではなくて、いかにもあつさりとして、可愛らしい純眞さのそれである。十七八にもなつて、少しも身體つきが脂ぶとりにふとらないで、すんなりと、身丈ばかり伸びてゐる、腰のほそい少女といふ感じ、白い綺麗な齒を仄見せて、笑つたり、爽やかに話したりする娘の感じにこれをたとへようか。

私は女郎花を見ると、草の丘、もしくは山の裾野、雜木林の中、川の土手、池のほとりの草むらなどを、直ぐに思ひ浮べる。また、この女郎花の根のところで、チロチロと啼く蟲のことを思ひ浮べる。

このささやかな一莖の女郎花は、多分、野原とか、山の裾野とかで、こんなに生ひ育つた野生のものではなくして、何處かの花畑で栽培されたそれなのであらう。けれども、土を離れた都會生活に疲れたものにとつては、この花屋の女郎花、その一莖にも、なほかつ爽かな田園の初秋を偲ぶことの出來るのが、せめてもの慰めなのである。

×

秋はまづ「風より」と昔の人は云つてゐる。「秋來ぬと目にはさやかに見えねども、風の音にぞおどろかれぬる」といふ古歌は、誰でも知つてゐるが、風によつて秋を知る心は、まだ數知れぬ歌や詩にうたはれてゐる。西行の如きも山居して、「秋たつと人はつげねど知られけりみ山の裾の風のけしきに」と詠んでゐる。だが、私の感じからは、秋は

まづ「草より」と云ひたい氣がする。

風のけしきを見せるものは、み山の裾の草である。靑々と眼もはるかにつらなつてゐる草むらが、波のやうに搖れて、さらさらと爽かな聲を送つてゆく時、秋のおとづれをその風の音の中に聞きとるのである。けれども、秋のけしきは、ひとり風の音に聞かれるばかりではない、また風の色にも眺められる、やや老いた草の色が、かすかに風を彩るのである。

太陽が直射して、土地からは熱炎の昇騰する眞夏のあひだに、十分に伸びられるだけ伸び切つた野の草、山の草、それがいつか花をもつものは花をもち、實をもつものは實をもつてゐる。そして、その草ぐさの中には、一本の高い高い女郎花があつて、その楚々たる綠の莖に、黄色の花の小粒をささげて、ほのかに風に搖れてゐる。想ひやるさへなつかしい秋のけしきである、秋の色である。

秋は「草より」あらはれる、その草の色、草のさやぎとともに、人の心にも秋は生れる。

やさしい母のふところに、みどり兒の抱かれるやうに、夏のふところに秋は乳をのむ。

×

秋は田舍にゐてもよく、都會にゐてもよい。家にゐてもよく、町を歩いてもよい。寢てゐてもよく、起きてもよい。たつしやな人にもよく、身體の弱い人にもよい。かういふ風に、惠み深いものに考へられるのが、秋のシイズンではなからうか。

いつの年でも、秋の來るのは待ち遠しい。秋になつたらと、夏の暑さの間ぢゆう、したいと思ふ仕事のこと、旅のこと、あれこれと想ひめぐらして、待ちに待つてゐるうちに、秋はいつのまにか、つい傍に來てゐる。

白い蚊帳の中で、夜の更けるまで、心しづかに、愛讀の書にしたしんでゐる時、何時からか這ひ込んで來た蟋蟀が、

その毛のやうな觸角をまはしながら、友達ででもあるかのやうに、私に近づいてくる。何の不安もなげに、つい私の手もとまで入つてくる。この小さな蟲を見ると、近づいてくる秋の相が感じられる。けれども、まだかうした八月の半ばなので、十分發育しきつてゐないし、まだ啼きもしない。みどり兒のやうに這つてゐるばかりだ。寢がへりのはずみにでも、潰してしまつては可哀さうだと思つて、そつとつまんで、白い蚊帳の外に出て、硝子戸の開かれてゐる窓から直ぐ手のとどく、蔦の一杯からんでゐる板塀へと放つてやる。

昔、浦島の子に救はれた龜は、浦島の子を龍宮へと連れて行つたといふ。私のこの夜の蟋蟀は、きつと私のために、九月がくれば、可愛らしいセレナアドを唄つてくれるに違ひない。やがて秋が近くなると、蟋蟀の這つて行く蔦の蔓は伸びるのをやめる。伸びてもその葉は極く小さい。板塀から板塀に、竹垣から竹垣に、繁れるだけ繁つた蔦が、ほろほろと黄ばんで落ちるのは、十月の末であらう。その時まで、出來るだけの仕事をしておいて、たのしい秋の日の旅をしたいと私は考へる。女郎花のそのままの姿で野邊に立つ、その汽車の窓からの眺めさへ、ありありと眼に浮んで、心はいかばかりそそられることぞ！（大正十三年八月）

清閑雜記

×

芭蕉の嵯峨日記は、私の最も愛讀するものの一つである。芭蕉が去來の落柿舍に寓してゐた半月あまりの閑寂な生活の姿が、あの短かい文章の間に、さながらに現れてゐる。

「障子つづくり、葎引きかなぐり、舍中の片隅一間なる處、臥處とさだめ」て、「むかしのあるじの作れるままにして、

處々頽破し」た落柿舍の趣きを愛して、「なか〳〵に作りみがかれたる昔のさまよりも、今のあはれなるさまこそ、心とどまれ」と云つて、芭蕉は朝から雨降つて、人も訪ひ來ぬ日を、さびしきままにむだ書して遊んでゐる。「愁に住するものは愁をあるじとし、徒然に住するものはつれづれを主とす。さびしさなくばうからましと西上人の詠み侍るは、さびしさを主なるべし」と云ひ、「獨すむほどおもしろきはなし」とも云つてゐる。

ここに見出されるものは、一つの生活態度である。自然主義以後、文人は多くかうした生活態度を消極的として斥ける傾向があるが、自分はやはり「我貧賤をわすれて、淸閑をたのしむ」と云つた芭蕉の心境の方に惹かされる。さびしい人生に於て、我々が主とすべきものは、さびしさの外にはないと思ふ。文人が一切の外面的粉飾を捨てて、ただ內面的充實の生活に生きることが、何であやまりであらう、何で逃避であらう。

今や、文學はだんだん昔とは違つた意味のものになつて來た。そして、今、落柿舍のあとは、ただ柿一本、松二三本をあますのみである。然し、自分のやうな季節外れの人間は、その荒廢の中に、芭蕉の風雅のあとを偲んで、日本人の最後の隱れ家は、やはり此邊に見出されはしないかと思ふのである。今年嵯峨に遊んで、自分はそこに自分の片隅を築きたいと思つた。自分もまた、いつかはこのあたりに隱れて、生涯の仕事にとりかかりたいものだと思つた。だが、いづこかは浮世の嵯峨ならぬ、思ふにまかせぬ境遇が、心に染まぬこの世界に、なほ一筋の糸をもつて、自分をつなぎとめてゐる。

×

自分の愛好は、だんだんと、所謂美文學の範圍から擴がつて行く。と云ふよりは、むしろ文學といふ槪念が變つて行くと云つた方が正しいかも知れない。所謂文學的作品以外に、文學といふものがあり得ないとは思へないし、むしろ本當の文學と云へるものは、かへつてさうした文學的意圖と制限との外にあるのではないかと云ふ氣もするのであ

る。かうして、私は寒山詩や、良寛和尚の詩歌集などに、心の慰めを見出すやうになつた。

賣茶翁の偈語の如きも、またその慰藉の一つである。その翁の偈語中に、「淸貧瀟洒淡生涯」といふ句がある。私はこの句が大變好きだ。なぜ好きかといつても、それを簡單に說明することは出來ないが、その語を思ふと、何となくいい氣持になるのだ。淸貧がよく、瀟洒が面白く、そして淡生涯といふのが、とりわけうれしいのである。然し、この語も、外の人の語であつたなら、それ程に思はれないかも知れない。賣茶翁のやうな人の肝膽から出てゐるので、とりわけ味はひが深いのかも知れない。

今では、大抵の人が、詩といふものは、その作者と引離して、それ自身單獨に鑑賞することの出來るもののやうに考へてゐるやうであるが、私はその見解には、隨分疑ひをもつてゐる。少くとも、私は藝術よりも人間を重んじたい。そして、藝術は人間の反映にすぎないと見てゐるのである。良寛が詩人の詩、書家の書を嫌はれた心持が、意味深く考へられずにはゐない。文學が所謂文學となる時、そこにある濁つたものが生れて來る事は、少しでも人生を眞劍に考へてゐる人ならば、直ぐ氣のつく事であらう。文學が職業となる時、本末が顚倒して、つひに人間よりも作品が主となるのは止むを得ない事かも知れないが、實にそこに、文學者生活の悲しみがあるのだ。そして、トルストイの藝術論の如き、この根本的洞察の上に築かれたものに外ならないのだと思ふ。

賣茶翁の徹底した風雅の生活は、伴蒿蹊の「近世畸人傳」に詳しく出てゐるが、かの「隨處開二茶店一。一鍾是一錢。生涯唯箇事。飢飽任二天然一」の境界は、到底我々の到り得ないところである。それも常然で、この翁が黃檗の月海和尙の後身であることを知れば、その悟道の分明さも推し得られるではないか。

芭蕉や良寛や、更にこの賣茶翁ほどの高い境界は到底及びもつかぬにしても、しばらく名利を忘れて、淸閑を樂しむ位の境地には到りたいものである。いや、それ位のところならば、さまで至難でもないが、未熟な人間の悲しさには、

直ぐまた後に引き戻されて、營營として蒼蠅の態をなさねばならぬ。その事を思ふと、全くなさけない氣持がする。

×

今の私にとつては、淸閑にまして願はしいものはない。心にもない俗事に忙殺されないで、風塵に心を煩はされないで、靜かに好きな書を讀み、興來れば卽ち賦し、庭前の梧桐に對して、みづから茶を煎じては、心おきなく一椀をすすりつつ、古人の風流を想ふことが出來たなら。そして、註文を受けて、感興なくして筆を執り、締切を急がれ、枚數を制限され、十分の推敲を施すことも出來ず、書きたい事も書けずして、原稿を編輯者の手に渡さねばならぬ賣文生活の繁忙からでなくして、淸閑裡の逸興からのみその藝術を生み得られたならば――。

これが私の願ひである。そして、そのためには、派手な風流才子風な文人生活よりも、地味な學究者の生活を選ばねばならない。アメリカ式のジヤアナリズム、オフイスでの取引、タイプライタア、そんな事は、新時代の若い才人諸君にまかせておかうではないか。たしかに、自分の考へる文學は、アメリカニズムとは最も遠い。少くとも、それは古日本的文學である。淸閑から生れると云ふよりは、淸閑的精神から生れねばならぬ。淸閑とはただの閑暇を意味するのではない、無意味な無爲な時間を意味するのではない。いかに閑暇に遊ぶとも、その心が世情に囚はれ、物慾に驅られてゐるものには、淸閑はあり得ない。淸閑とは實に、人生に對する一つの超脫的精神を意味してゐる。それ故未熟者は、直ちにその樂園から追放されなければならぬ。

アメリカ人は「タイム・イズ・マネイ」と云ふ。そんなら、金は淸閑を生み得るかと云ふに、タイムは得られても、淸閑は決して得られない。恒產ある人でも、世情の旺盛なるものある時は、淸閑とは遠いのである。求め求めて飽くことのない心は、百に滿たぬ人生に、常に千載の愁を懷いて、「秤鎚東海に落ちて底に到つて始めて休することを知る」であらう。

清閑は知足の酬いである。それゆゑ、恒產なき、自分などの身分のものでも、知足によつて淸閑を樂しむことが出來る。卽ち、淸閑は淸貧によつてのみ得られるのだ。それで自分は出來るだけ小さな家に住み、出來るだけ質素な生活をしたいと思つてゐる。そして、それによつて、心の儘の詩興と讀書に耽り得られる時間を出來るだけ多くして行きたいと思ふ。生活を張るだけ金に屈しなければならぬが、生活を縮めるだけ淸閑の主となることが出來るのだから。

淸貧なきところに淸閑なく、淸閑なきところに風流なし、文學なし。淸貧を樂しんだ芭蕉にして、はじめて淸閑の趣きを解し得られたであらう。

×

淸貧といふ言葉は、東洋人獨特の風味を有つたいい言葉だ。この言葉に含まれてゐる超脫の氣分は、到底西洋人には理解できまいと思ふ。私も社會主義的な思想――これは西歐的思想に外ならない――に心を占められてゐた時分には、この言葉が嫌ひであつた。淸貧などといふ事は、ほんとうに貧乏の苦を知らない、餘裕のある人間の贅澤な放言のやうに思つたのである。

それはあやまつてゐた。淸貧とは物質に屈伏せぬ毅然たる精神の表示である。資本家階級の代辯者が勞働者階級を說得するために、淸貧に甘んぜよと唱へるならば、それは勿論曲事と云はねばならぬが、精神生活の徒たる文人學者は、貧苦に惱みつつも、なほ淸貧を誇りとすべきである。

淸貧とは、單に貧しいといふ生活狀態を示すものではなくして、貧を樂しみ、貧に安住する一つの生活態度を意味する。卽ち、それは一つの高い心境の表示である。金、金、金の外には何物もないアメリカニズムに對する日本的精神の確保である。

富者が眼中にあるうちは、その貧は淸貧ではない。眞の淸貧者の眼中には、王侯なく、貴人なし、彼こそ王侯であ

る。外面はたとひ乞食に類するとも、彼の內面は王侯の寶庫の如く充實してゐる。我々はかやうな淸貧者となつて、淸閑の主となり、淸閑によつて高い內面生活の頂上に登らねばならない。

ワァヅワアスが「低き生活、高き思想」といつたのもまたこの意に外ならぬであらう。彼英詩人にしてなほこの言あるに、現代の日本の文人學者が、滔々としてアメリカニズムの洗禮をうけて、物質文明を謳歌してゐるのは、止むを得ない世界の大勢に順應し、不可抗力に敢て抵抗せぬその賢明に服すべきものであらうかも知れぬ。(大正十三年七月)

心是芭蕉

×

芭蕉葉の下に、一人の支那美人が立つてゐる圖に、心是芭蕉といふ賛がついてゐる。每朝、洗面器の底にそれを見る每に、心は是れ芭蕉と、私はくちずさむ。

いつかこの題で、一篇の詩を書きたいと、私は思つた。だが、こんな題をつけると、その題だけを見て、芭蕉翁を氣取つてゐると云つて罵る人があるかも知れない。私はそん苦い經驗を幾つも持つてゐる。

だが、芭蕉翁とは何の關係もない事がわかると、今度はセンチメンタルだと云つて罵られるに違ひない。自分の語らうとする本當の意味が分つたら、今度は何と云つて罵られるだらう。

芭蕉の葉は既に破れてゐるが、美人の面に愁色はない。

芭蕉葉上無愁雨。只是時人聽斷腸。

批評は究局、その對象の批評でなくして、自分自身の批評に外ならぬ。

或る作品を批評する場合に、その作品によつて惹起された自分の精神の反應を吟味する事によつて、その批評ははじまらねばならない。

その吟味を經ない批評は、要するに、ただの漫言たるにとどまる。

×

書物と頭とがぶツつかつて、からツぽな音を發すれば、それはいつも書物の罪だらうか？　とリヒテンベルグは問うてゐる。勿論、書物の罪である。人間は主觀的なものであるから。そこで、そのからツぽな頭は、心から憤慨して、さんざん書物を罵るのだ。

×

私達が批評家になつたら、そんなにして罵る前に、ひよつとしたら今の音は、俺の方から出たんぢやなからうかと一度位疑つて見たいものだ。この心懸けさへあれば、からツぽな頭も、だんだん詰まつてくると云ふものだ。

×

人は己の書けるものを讀むとエマスンは云つた。自分の讀み得るものは、既に自分の衷心に存するものに外ならぬ、自分の衷にないものならば、どんなに熱心に讀んだところで、到底理解し得られる筈はないのだ。

×

今の批評家の一部の人達は、刑事に似てゐる。無辜の良民が、どんなに屢々、拘引されることか。彼等はその上、ブラック・リストをつくつてゐる。一度、それに上せられたが最後、もう助かる道はない。何を書いても失敗なのだ、無價値なのだ。

彼等にとつては、札は二つきりない。成功の作でなければ、失敗の作だ。そして、それは何を標準にして云ふのか、などと聞くだけ野暮だ。彼等には、私情といふ立派な標準がある。打算といふ標準もある。

×

書物を讀まないで批評する術は、蓋し、近代の一番大きな發明だらうとリヒテンベルグは云つてゐるが、まだ讀みもしないうちから、その裁斷の言句の決定してゐる批評のある事を聞いたら、彼は何と云ふだらう。此間よりもつと隨喜の涙を餘計流さうと準備したり、うんと罵つて、失敗の作だと云つてやらうと待ち構へたりするやうな批評家は、リヒテンベルグの時代には、さすがにまだ無かつたらしいから。

×

人生を動かしてゐるものは理性ではなくて感情である。批評の意向を決定するものも、私情を離れた眞の鑑賞ではなくして、個人的便宜の力であり、好惡の感情であるとすれば、作家は結局、ゲエテの敎に從ふ外に道はない。批評に對しては、自らを護り防ぐを得ぬ。ただこれに抗つて行動し、漸次他をしてその行動を承認せしめねばならぬ。これゲエテの言である。

人間の偏見は、その性格に根ざす、理性もこれを奈何ともする事なし。これまたゲエテの言である。

×

夢をみてゐながら、これは面白いから書いておかうと、夢の中で考へてゐる事がある。また、そのうとうとしてゐる間に、すばらしい思想が湧いて來て、これは忘れてはならぬと思つて、頻りに頭で繰返してゐる事がある。が、それを朝起きて考へてみると、その愚にもつかないのに呆れてしまふ。

そして、時々、自分の此世の仕事も、そんな夢中の妄想のやうなものではないかといふ氣がする。自分で相當の意

味があるつもりでゐても、夢がさめてみたら、その愚にもつかないのに呆れるかも知れない。よく、俺は此作に自信をもつてゐるといふやうな言葉を聞く毎に、私はこの夢中の確信を思ひ出す。

×

四方八方、神様ばかりで充滿してゐて、身動きが出來ない。息がつまりさうだ。誰か引つぱり出してくれないか。

これが、その或夜の夢中の妙想の一つ。

×

後には惡、前には善、途をふさがれて進むことが出來ない。誰か、善をとりのけてくれないか。

これもその妄想の一つ。

×

何事をも、これは善である、これは惡であると、一々善惡のはかりにかけて見ずにはゐられないやうでは、餘りに窮屈な境界である。過程としてはいいが、いつまでもそんな境界にまごまごしてゐたのでは救はれない。

その暗い洞穴から出て行きたいと云ふのが、今の私の努力なのだ。

×

總じて、道德道德と呼ばざるを得ないのは、既に道德的缺陷を示す。

ロダンの「接吻」を卑猥と見なした官吏は、卑猥に對する大なる可能性を示した。

性的問題を重大視せざるを得ぬものは、最もそのために苦しむ人である。トルストイはその人であつた。更にこれが自己存在の中心の問題となるに至つては、明かに病的の證左と見なさざるを得ない。

人はその最も關心するものの爲めに苦しむ。

自分が愛憎の彼岸を語らざるを得ないのは、自分に愛憎の念が人一倍強いからである。（大正十三年七月）

野中の清水

澤潟の葉のかるくうく
野中の清水しづかにて
昨日も今日も水すまし
澄みたる鏡、影をひく

あの靜かな、清く澄みきつた水の面に、閃くやうに、スイスイと水を切つて行く水すましの影は、いかにも涼しく爽かなものだ。

さる年の初夏、甲府のそばの里垣村に、しばらく滞在してゐた折りに、葡萄畑の澤山つづいてゐる野中を歩いて行つて、草むらの間にたたへてゐる靜かな池水の上に、その水馬のゑがく、束の間の白い波線の閃きを眺めるのが、私は好きであつた。

私には、水の戀人と云つてもいい位、水を眺めるのが好きな性癖があつて、橋の上を通るときは、そこから下を流れる水を見おろさずにはゐられないし、海岸に佇んで、いつまでもいつまでも、波の岸邊に碎けるのを見てゐたかつたり、また、名だたる河川や湖沼を、わざわざ見に行きたいと思つたりする。

こんな私であるから、里垣村にゐたをりも、偶然發見したその池水がひどく氣に入つて、毎日、そのほとりに行つては、長いこと、その水の面を眺めてゐたものだ。そして、その水にひたつてゐる私の眼を、スイスイと爽かに橇ぎ

る水馬が、のちには靜かな水面そのものよりも、私の心を娛しますやうになつた。

私がさうして佇んでゐる間に、どういふ事を思つたか、それは今忘れてしまつた。多分、私はかうも思つたであらう、不幸な詩人キイツは、我名は水の上に書かれたる名なりと歎じた、私の名は何であらうか、あの水馬が水の面にゑがいた、あの一つの波線にすぎないのではあるまいか、或ひはまた、私自身あの一つの水馬として、此世の鏡の面に、はかない影をゑがいてゐるのだと思つたであらうか……

今、私は、この私の心が、丁度あの野中の淸水のやうであれかしと思ふ。その面に、あの小さな水馬が、往つたり來たりして、しきりに細い黑い影をひいてゐる、そのたはむれの波紋にも搔き亂されない、靜かに澄みきつた池水であれかしと思ふ。

或る時は、そのねがひの通りでありえたと、ふと、心づくことがある。一昨日、昨日、今日、おそらくは、明日もまたおなじ靜かな水鏡であるであらう……たとへ絶えず小さな水馬が、わがもの顏に、どんなにいそがはしく、その面に細い波線をひかうとも。だが明後日は、その上に時ならぬ嵐が吹き寄せて、水を搔き立て、搔き亂す……

それもしかし、その波風も、だんだん稀れになつて行く……

しづかに、しづかに、なほも澄め、私の心よ、淸く爽かに、さながら明らかな鏡のやうに。

しづかに、しづかに……私は私の心を、盤上の水のやうに、そつと手で保つてゐる、昨日も今日も。

だが、その私の心は、そも何ものであらうか。それがいつも私の問題である。

むかし、支那の禪宗五祖忍大師が、その徒にむかつて、各一偈を作り持ち來れ、大意を悟るものに、衣法を附與せんと云はれた時、神秀上座が、その所見を呈するの偈に曰く、

身は是れ菩提樹、心は明鏡臺の如し、時々に勤めて拂拭せよ、塵埃をして惹かしむること勿れ。

五祖これを見て、但だ此の偈を止め人に與へて誦持せしめん、此の偈に依つて修せば悪道に墮することを免れんと云つて、門人をして炷香禮敬せしめられた。のち慧能行者ひそかにその偈を聞いて、その未だ自性を見ざることを知り、人をして更に一偈を書きとらしめて曰く、

　菩提本と樹無し、明鏡も亦臺に非ず、本來無一物、何れの處にか塵埃を惹かん。

祖その本性を悟ることを知つて、ひそかに衣鉢を慧能に傳へて、震旦第六祖とすといふ。

そして、これが神秀大師の北漸と、曹溪六祖の南頓の禪との分派した次第であるといふことである。

私はよくは分らぬながらも、この二つの偈を味はひ深く拜誦する。心は明鏡臺の如し――。

　昨日も今日も水すまし
　澄みたる鏡、影をひく

時々に勤めて拂拭せよ、塵埃をして惹かしむること勿れ――

心の天文學者と僭稱するこの一小詩人は、その百尺竿頭の頂上に於て、なほこの境地にとどまる己れを見る、門外に到つて、未だ一歩も門内に入り能はぬ身分であることを認めずにはゐられない。けれども、その私にも、おぼろげながら、一つの豫感はある……

「明鏡も亦臺に非ず、何れの處にか塵埃を惹かん」

掌上にささげ持つてゐる水盤を、微塵に擲つて、心は何處にある……。

　應無所住而生其心――

私にはなんにも分らない、私の心は何であらうか……

　澤瀉の葉のかるくうく

野中の淸水しづかにて

昨日も今日も、私はぢつと私の心を眺めてゐる、さる年の初夏、甲府のそばの里垣村で、草むらの中の池水を見入つてゐた時のやうに……(大正十三年六月)

夏草

×

夏が來て、いろいろの草木の葉が、靑に綠に、黑ずんだ靑に、黃みがかつた綠に、それぞれの大きさに從つて、まろく、或ひは細長く、掌のやうに、また髮のやうに、伸びるだけ伸び、ひろがるだけひろがつて、鮮かな朝は露にうるほひ、靜かな夕は靄にしをれ、吹く風にひるがへり、しとしとと降りそそぐ雨にはうなだれ、こそこそと這ひ込んでくる小さな蟲ども、ピカピカと光りながら潛つてくる螢。さては、氣まぐれに飛びおりてくる小鳥の翼にも、おのづからなる親切な挨拶を與へながら、野をおほひ、丘をつつみ、水のほとりに靡き、石と石との間からでも、ぢつと明るい方をさしのぞく澤山の草の葉や、木の葉。

葉は花よりも寂しいものである。けれども、花のうつくしさ、きらびやかな、匂はしさがすぎると、今まで何ともなしに見すごしてゐた葉のむれが、今度はわたしの方を眺めて下さいと言つて、一齊に手招きしてくれるやうな氣がする。花は美しく、やさしいけれど、何の飾りけもない葉のながめも捨てがたいもので、そこから靜かな、しつとりとした慰めが見出される。

×

汽車の窓から、ふと見おろすレエル沿ひの草地の眺め、そこにある多くの葉が、つやつやとその生育の喜びを示してゐるのは、通りがかりの旅人の心に、可憐な情趣を味はせてくれるやうで、忘れがたい氣持である。

もう二三年も前のことになつたが、一週間あまり滯在したことのある甲府の近郊の村の山かげの草地、草の小徑は、私の時をり思ひ出すやさしい自然の一つである。その草の小徑を、何の心おきもなく、セルの着物の裾のぬれるのもいとはず、山の方へと歩いて行くと、名も知れぬ雜草の葉までも、みな私の方にと靡くがやうで、ぢつとそれらを見やりながら歩いて行く心の靜けさ。どの葉にも、生き生きとした望みと力とが充ちみちてゐるやうで、丁度處女の淸らかな感情のそれのやうで、心を淨化してくれるやうな氣がする。あへてその葉をつみとつて、手にもてあそぶほどの心ない事もしなかつたが、そのときふと、この柔かな綠の草の上に寢ころんで見たいと思つた。けれども、さうして寢ころぶためには、どれほどの草の葉が、私の一寸したこの思ひつきのために犧牲となるであらう、さうした事が思はれたので、私はそのままそこから歩き出した。

×

美しいもの、淨らかなものを見ると、人の心には、それをいとしく、愛らしく思ひながらも、いや、そのいとしさから、これを自分の手にとつて、自分のものにしたいと云ふ欲望がおこる。かうして美しい花はかず限りなく人の手に摘まれて、そのまま萎れてしまはねばならない。木の葉、草の葉は、花のやうにそれほど美しいとも、望ましいとも思はれはしないであらうが、それでも何の氣もなしにむしられることが多い。道のべの木の葉、草の葉には、それをむしり取らうと考へつかれたが最後、どうすることも出來ないのである。

夏草のしげみに降りそそぐ雨が、幾度び重るうちに、その綠の色も、やがて褪せて、爽かな液汁もからびて、枯渇の色が、凋落のすがたをおもはせる時がやつてくる。花のいのちはあまりに脆いけれど、葉いろの爽かさも、やがて

過ぎてしまふ。それとおなじやうに、美しいをとめの淨らかな日も、わづかな間しかない事が思はれる。だから、このわづかな間の美と純潔とは、これを寶玉の如く貴ばねばならぬ。（大正十三年五月）

美しい手の姿態

一概には言へないであらうが、女の人は、概してその手について敏感であるやうに思はれる。手を綺麗にしておくといふことは、女の人のたしなみの一つであるかも知れない。實際、どんなに美しい人でも、その手がきたないと、いくらかその美をそこねるが、さまで美しくない人でも、手の綺麗な人は、床しいものである。

女の人は、對坐してゐる時などに、その手のおき場には、かなり氣をつかふやうである。また、その手のポオズによつて、こちらもその人の氣質が、いくらかわかるやうな氣がする。そして、時どき、そんな折りなどに、人間の手に一番ふさはしい、また一番美しいポオズは何であらうか、私はふとそんなことを考へてみることがある。

ある時は、それは鍬を握つてゐるかたちではあるまいかと思ひ、また、ハンマアをふりあげてゐるかたちであらうかと思ふ。女の人ならば、縫物をしてゐるとか、編物をしてゐるとか、とにかく働いてゐるかたちを、眼にうかべてみる。けれども、それは或る一時的のポオズであつても、これを永遠不動の相（すがた）として見ることは出來ない。それは人間の手に命ぜられてゐるものであるとは思へても、人間の手に一番ふさはしいものとは思はれない。若し、さう思はれるとすれば、それはあまりに痛ましいことである。

今、私には、最後に、二つの手を前にささげて、合掌してゐる相（すがた）こそ、最も美しく、また最も人間の手にふさはしいポオズであると考へられて來た。このすがたこそ、そのまま繪にし、彫像にして、永遠に、人間の姿としてつたへ

ることの出來る、限りなく尊く、また淨らかな姿であるやうに思はれる。

フラ・アンジェリコの敬虔な畫風によればもとよりのこと、むしろ現世的であるラファエルのマドンナの畫像にしても、稚兒の前にあのほつそりした纎手を合掌したポオズが、天的の美をそれに附與してゐる。まことに、つつましやかな女性の合掌のすがたは、それだけで、人の心を淨らかにする。そこにはまことの女性の美が輝いてゐる。

かたちを正すのは、心を正すことである。氣高い、美しいポオズをとつてゐるとき、心はおのづから氣高く、美しくなるであらう。これに反して、かたちを亂し、姿をくづすときは、心もおのづから亂れてくる。むかしの人が、禮といふことをやかましく說いたのも、この理を知つてゐたからである。

神に祈るのでもなく、佛を念ずるのでもない、ただかたちばかりの合掌にして、すでに美しく淨らかである。それがまた直ちに、心を淨め、心を高める道となるのである。若しそれが心から祈りであり、祈念であつたならば、更にたふとい。祈りは心の淨化である。おのれの狹い限界から、廣い天地に心を解きはなつ、それだけでも十分である。

人間は出來るだけよく働かなければならない。働くといふことの中に、人生の意義もあり、生活の面白味もあるのだ。けれども、いつも働いてばかりゐると、心がすさんで、乾からびてしまふ。それはあまりに寂しいことである。時をりは働くのをやめて、ぢつと靜かに自分の心を眺めなければならない。祈りはまた靜觀に外ならない。動から靜にかへつて、天地の靈と融合する刹那に、晴れやかな安心の靜謐が、その面にいみじき美を漂はすであらう。人間は、最後には、この靜かな合掌のポオズにかへらねばならないと思ふ。（大正十三年五月）

嵯峨と嵐山

×

東京を發つたのは、十八日の夜だつたが、途中で名古屋に寄つて、同市から出てゐる雜誌『醫海及び人間』の一周年記念祝賀會に列席したり、Iさん達と一緒に犬山へ行つて、白帝城の壯觀に耽つたりして、二日も滯在したので、京都に着いたのは、二十一日の午後だつた。

朝、名古屋を發つ時から、重苦しい曇天で、雨にならねばいいがと思つてゐたら、果して、大垣までくると雨になつた。關ヶ原にかかると、雨に煙つてゐる南宮山や松尾山の姿が、まるで索寞たる秋景を見るやうな氣がして、王漁洋がいはゆる「濃春の煙景殘秋に似たり」の感があつた。そして、參勤交代のをりに、毛利氏がここに差しかかると、必ず雨になつたといふ言ひ傳へを思ひ出した。三成びいきの私は、關ヶ原を過ぎる毎に、とりたてて書く程でもない、至極コンヹンショナルな感慨に耽るのが常だ。

この雨ではと、雨ばかりを氣にしてゐたところが、京都の停車場で下りてみると、そこらは一杯の人波だ。倖はみな出拂つてしまつて、どうする事も出來ないから、雨を冒して、入口の方にまはつてみると、その人間のゐること、ゐること、待合室など文字通り立錐の餘地もない有樣だ。成程、今京都は博覽會の最中なのだ、これではとてもと、少少心細くなつたが、やうやく倖を雇うて、Eさんに紹介して貰つた繩手の宿に行つてみると、やつぱり滿員でことわられてしまつた。それから、三條小橋の邊で三四軒きいてみたがみな駄目、車夫の言ふところによると、一萬人も人が入つてゐるから、前前から約束でもついてゐない限り、なかなかいい宿はあいてゐまいといふ、全くその通りで、麩屋町を萬壽寺までとつてかへして、多分七八軒目に、やうやく部屋があいてゐるといふ家があつたが、それも一人客だから、もし外に客があつたら、二人とは云はぬが、一人相客を我慢してくれるならといふ條件つきなのだ。

二階の四疊半の汚ない部屋に通されて、すぐ前がよその家の壁だから暗い、その薄暗い中で、ひどい目にあつたも

のだと、ひとりであきれてゐた。でも、今頃、京都なんぞに出かけてくるなどは、自分のやうなものにとつては、隨分ぜいたくな話だから、これ位こらしめて貰つた方がいいのだと、隣室の夫婦づれの客の連れてゐる三人の子供が、狹い廊下を走つて來て騷いでゐるのを見ながら、自分を慰めてゐた。もつとも、私が京都に來たのは、單なる京見物の意味合ひではなくて、仕事の上で一寸必要があつての事なのだが、それはここに書いてみる程の事でもない。

その夜、宿帳に著述業と書いたら、女中が不思議さうな顏をして、運送業どすかと言つた。考へてゐると、自分の今やつてゐることは、まづ、體のいい運送業のやうなものだと氣がつく。大して獨創といふやうなものの持合せもなくつて、古來の聖賢や天才の言葉を、頭へ入れては、そのまま又外へ送り出す、それ以上の事が出來てゐる自信もないのだから、運送業と言はれても仕方がないと思ふ。早く、こんな運送業の分際は突きぬけてしまひたいものだと、はからずも感じたことであつた。

×

翌二十二日は、拭うたやうな快晴だつたので、朝から俥をやとうて、一日がかりで、お寺まはりをした。若い車夫が威勢のいい恰好で、五條大橋をわたる。お上りさんの心持も、何がなしに躍つてゐる。

手はじめに、三十三間堂に參詣する。堂の階段を上るとき、かの後白河法皇が、御惱みの夢枕に立たれた高僧に、法皇前生の髑髏が岩田河の底に沈んでゐる、そこから一本の柳が生え出して、その枝葉が搖れる度に御惱みがますとの告げを受けられて、その柳を伐つてこの堂を御建立になつたといふ緣起と、それに暗示を受けたらしい柳のお柳の傳說とが、私の心に味はひ深く思ひ出だされる。金色燦たる一千一體の觀世音の壯麗と、風神雷神などの彫像とばかりでなく、裏手の壁一面に書きとどめられた參詣人の名前が私の興を惹いた。中でも一きは大きく書きなぐつた、「富士松小綱太夫、同福登太夫、柳ばしぼたん」といふらくがきが、思はず微笑を誘ひ出した。小綱太夫の京見物の愉快さ

が、その字にありありと見えてゐる、太夫が「どうだい」と言つて弟子(?)の福登太夫と、ぼたんとをかへりみた得意の顔が眼に見えるやうに思はれた。

養源院は血天井で名高いが、俵屋宗達の刷毛がきの象など、面白いと思つた。妙法院にはいい物が澤山ある。太閤の遺物が多いが、とりわけその茶器が目を惹いた。惡筆とも云はれてゐる定家卿の筆蹟も、ここではじめて見た。豐國神社を拜むで、大佛殿の巨鐘に、あの恐ろしい國家安康の銘を讀みながら、官吏風の男が一生懸命になつて、その鐘を撞いてゐるのを見てゐた。鐘の音は重重しく響いた。

淸水の舞臺から、京畿の大觀を恣にしたいとは、久しく考へてゐたところだが、それは期待が少し大き過ぎたやうだ。それよりも、それ程期待してゐなかつた高臺寺に來て、一つはお上りさん達の群れから脫しられたせゐもあるが、はじめて落着いた心になつて、その林泉を眺め入ることが出來た。そして、何だか古人の風流の意味が幾分かわかりかけて來たやうに思つた。後の靈山にある北政所の靈廟へさしわたした、長い臥龍の廊下、下から見ると階段の石ばかりが見え、上からは一段每に敷きつめた瓦ばかりが見える、その趣きも捨てがたいものであつた。ここには千利休好みの時雨の茶亭などもある。何とはなしに、心の底までしんとして、嚴肅な、それでゐてすつきりと胸がすくやうな、靜かな澄んだ心持——風流とは心の淨化の道である。私はもつともつと、この京都で、古人の風雅の名殘を見步きたい。感覺だ意志だ、それもさうであるが、それをムキになつて論じたりする事も風流に遠い。風流とは卽ち人の道、人の心のまことである、まことを離れた風流は、畢竟風流才子の風流で、古人の篤實とは全く反對のものである事を、及ばぬ私も感ぜずにはゐられない。

ここからその儘宿へ引返す程ならばいいのだが、下根な慾ばり心を出して、(この慾ばり心こそ、風流第一の賊であるとは知りながら)圓山公園を拔けて、俥を智恩院に走らせた。淨土宗の大本山、折しも開祖圓光大師の御忌とかで、

京洛の美女の衣裳くらべの華やかさは見られたが、その代り、お上りさんの押すな押すなの眞中で、林泉のおもむきをしみじみ味はゝうとするのは無理であつた。

南禪寺の廣い境内を、庫裡の方へと歩いて行きながら、花のすぎたあとの若葉をわたる微風に襟を吹かれて、禪寺らしい幽寂の中で自分の氣持も若葉のやうに爽かであつた。草履を突つかけて出て來た小僧さんの案内で、清凉殿や小方丈の國寶を拜觀してから、東山はこれで切り上げて、西山にまはる事にして、丸太町橋を渡つて、御苑の中を通つて、北野神社に參拜して、そのほとりの旗亭で晝餐をしたゝめた。神樂といふ名は俗だけれど、座敷はすべて茶室がかりの離れになつた風流な家であつた。

午後は金閣寺を拜觀し、金閣の三層よりも、衣笠山をとりこんだ林泉と、夕佳亭の雅致とに、瞬間、孤獨の法悅を感ずることが出來た。そして、それから更に仁和寺にまゐつて、はじめて京都の花を見た。御室の葉櫻は盛りは少しすぎたが、まだ花見の人達が澤山醱いでゐた。妙心寺で打ちどめにして、宿に歸ると、やがて日が暮れた。夜は田舍者相應に、花見小路で都踊を見物した。それ程美人ぞろひとも思はなかつたのは、名古屋の祝賀會で、選りぬきの名古屋美人を六十人も見て來たせゐばかりでもあるまい。が、夢のやうな京美人は觀客席にもちらほらと見えたやうだ。

×

その翌日、今日はお上りさんをやめにして、もつとゆつくり、ブラブラと郊外散策でもするつもりで、四條大宮から嵐山行の電車に乘つた。電車の中に、虛無僧が一人乘つてゐた。虛無僧といふものを長い事見ないので、珍らしい氣がした。顏はもとより分らないが、骨組のガツシリした男で、前にかけた箱に、明暗敎會とあるのを面白いと思つて、考へてみると、臨濟錄に、普化が鈴を搖つては、「明頭來明頭打、暗頭來暗頭打云々」と唱へてゐる事が載つてゐる、多分それから來たのだらうと氣がついた。虛無僧は普化宗から出てゐるからだ。

京も西郊は、西院の南の方あたりは、澤山會社が建つてゐるが、曾つて小澤蘆庵が隱栖してゐたといふ太秦まで行くと、東京の郊外などとは違つて、やはらかなのんびりした京の田舍氣分が味はれる。太子前をすぎて、嵯峨野の少し手前に、帷子の辻といふのがある。檀林皇后がおかくれになる時、葬儀の禮を行はないで、遺骸は西郊に棄てよ、色欲に耽らんものは、我が爛穢を見て、少しく警悟せよと遺令せられたので、おんなきがらを嵯峨野に捨てた時、その帷子の落ち散つたところだといふ言ひ傳へがあるのだ。それは傳說にすぎなくて、大日本史に記したやうに、「遺令して葬を薄くし、山陵を營まざらしむ」位が事實かも知れないが、その傳說はたふといから、そのままに受け容れてゐたい氣がする。けれど、今車窓から眺めてゐると、そこを一隊の兵士が、色の黑い顏を揃へて、嵯峨野へ向つて行軍してゐるのだ。そして、その中に、眼鏡をかけた兵隊さんの大變多い事に、私はふと氣がついて、一寸不思議に思つた。

終點で電車を下りると、すつかり花見氣分だ、花は殆んど散つてゐたが、賣店やら茶店やら、手提鞄をぶらさげた大阪人らしいのをはじめ、赤い布れを襟に卷いた團體の行列など、なかなかの賑はひだ。渡月橋の眞中ごろで、欄干にもたれて下の河原に立つて、尻はしよりにした男が魚を釣つてゐるのを暫く見てゐた。橋の上から、下を流れる水を見てゐるのに、私は特別の嗜好を有つてゐる男だが、この美しい大堰川の水を見てゐると、限りないタイムの流れが、とりわけ切に切に感じられる。みんな流れて行くのだ、昔も今も、人も自分も。逝く者は斯くの如きか、晝夜を捨てず、あとに殘るものは、ただ空しい幻像ばかりだ、いたづらな名ばかりだ。

京都に來て、私達が何よりも感ずることは、悠久なタイムの流れである。私達はこの麗はしい自然の中に、はかない人間の歷史を讀むのである。一木一草に、私は今は世に亡き人達の俤を偲ばずにはゐられない。私達とおなじやうに歎き泣き、笑ひ歡び、過ち悔いた人達のあとを。そこには可憐な小督の墓もある、仲國が峯の嵐か松風かと、たづ

ぬる人の琴の音を聞いたといふ琴聞橋といふのもある。ニイチエが「人生に對する歴史の利害」といふ論文を書いた心持も、私にはうなづける、彼がフィロロオグであつただけに。そして、今や、そのニイチエの考察が、あたらしく私にも問題にならずにはゐなくなつた。それほど、京都は私達の歴史感に、烈しい拍車を加へるところなのだ。昨日の一日でも、私の感性はかなり疲勞してしまつた。そんな事を思ひながら、下流の桂川の方を、逝く水のあとを追ふやうに眺めてみた時、ふと私はそこにおのれを捨てたといふ、あの良寛和尚の父親なる以南の事を想ひ浮べた。

蘇迷廬の山をしるしに立ておけば
　わがなきあとはいつのむかしぞ

この悲しい歌が、あまたたび、私の口には繰返された。良寛がこの以南の子であつたといふ事は、實に深い味はひがある。私達は以南から直ぐに良寛にすすむ事は出來ないものであらうか。

×

法輪寺は、十三詣りで賑つてゐた。

十三詣りといふのは、京洛の俗、男女とも十三歳になると、四月の中旬の麗らかな日を期して、この寺の虚空藏尊に智慧を授かりに、綺羅を凝らして參詣する習慣をいふのだ。私が上つて行つた時にも、三四組の美しい女の兒を連れた婦人達のために、坊さん達は忙かしさうであつた。私も智慧の足らぬのに弱つてゐるのだけれど、まさか三十三にもなつては、智慧を授かるわけにも行かないから、その代り、寺の繪葉書と洛西名所圖繪などを、坊さんから購つた。この寺にも小督局の經塚といふのがある。小督はどこまでも嵯峨の小督なのだ。暫く、大堰川の眺望を恣にしてから、石磴を下へおりる、爽かな風に吹かれながら下りて行くのに、いかにもなつかしい石磴であつた。

それから私は、大堰川に沿うて西して、大悲閣まで登つた。渡月橋のところから、山裾づたひに六丁あまり歩くと、

一寸氣の利いたレストオランがあつて、その傍らに芭蕉の「花の山二丁のぼれば大悲閣」の句を刻んだ碑が立つてゐる。そこから嵐峽館を右手に見下しながら、正に二丁のぼれば大悲閣である。が、そこまで行く路が、思ひがけない見つけものだつた。上り下りのある、かなり嶮しい路で、その間には、となせの瀧もあり、千鳥ケ淵もある。大堰川の水が、ずつと目の下に若葉のしげりをすかして見えるあたりが、千鳥ケ淵の上にあたる。そこで私はかなり長い間イんで、ぢつと水を見てゐた。

大悲閣までの二丁は、それ程急坂でもなかつたが、少し苦しかつた。前を行く田舍者らしい二三人連れも、おなじ思ひであつたか、道の左へ曲るところに腰かけて休んでゐた二人連れの學生に、「大悲閣はまだですかいナ」と訊くと、朝鮮の人であるらしいその學生さんが、「すぐ上のあそこですよ」と敎へてくれた。成程見上げると直ぐ上に家があつた。大悲閣の茶亭に憩うて、遙か目の下に、新樹の梢の波を眺めながら、田樂とかきや(かき餅のこと)とで、一本の麥酒を傾けたのは、實にぜいたくな氣がした。

×

「來者總ニ打ツ」

天龍寺の庫裡の鐘には、白い札にから記してあつた。

私は渡月橋を再び引返して、それから、とかげのちよろちよろ這つてゐた石橋を渡つて、お婆さんが菓子などを賣つてゐる天龍寺の山門をくぐつたのである。庫裡に入つてみると、五六人の拜觀人らしいのが、ぼんやりそこに腰かけてゐた。友達が貰つてやると云つた紹介狀を持つて來たのだつたら、一つこの鐘を打つてみるところだが、私も人並にそこに腰かけて、少し汗ばんだ身體に風を入れてやすんだ。何とも言へず凉しい。それにみんなおとなしく默つてゐるし、廣い庫裡はひつそりとして、人の氣配すらもない。私は夢窓國師の事などを思ひながら、かなり長いこと

やすんでゐると、やがて、大阪人らしいのがやつて來て、「どやどや」と叫んで、「かまやせん、奥へ入つてきいてみまほ」と言ひながら、いきなりつかつかと奥へ闖入して行つたが、間もなく出て來て、「拜觀は今年は休みだてことだつせ」と言つた。天龍寺もこんな男に會つてはかなはないと、ひとりで苦笑した。

私は開山堂を拜んでから外へ出て、門前で天龍寺納豆を二箱ほど買つて、小包にして貰つて、それをさげて、教へられた郵便局へ行つて東京へ送り出した。それから又ブラブラと、淸凉寺の方へと歩いて行きながら、空家らしいのはないかと、あたりに氣をくばるのだつた。

曾つては名古屋が氣に入つて、名古屋に住みたいと思つた。松江や金澤も氣に入つたが、今では自分の住むべき處は、京都の外にはないと思ふ。京都も東山方面でなければ、この嵯峨か衣笠の紙屋川のほとりでなければならぬ。いつ實現出來る事かわからないが、一日も早く、この洛外の閑寂を求め得て、靜かな隱栖を樂しみたいといふ氣持で今は一杯だ。氣に入つた空家が見付かつたところで、この邊では、いきなり借りるわけには行くまいし、また借りられたにしてもさしあたつてどうする事も出來ないのだけれど、風雅な家が目に入ると、つい立止つてみたりした……(大正十三年五月)

聖凡不二

×

語に曰く、世間の好人を識り盡し、世間の好書を讀み盡し、世間の好山水を看盡すと。私の願ひもまたそこにある。ただ、私から見れば、この語にはまだ幾分か不滿がある。好人、好書、好山水の揀擇から、更に一歩をすすめて、那

箇か好人、好書、好山水ならざる底の豁然たる境地にまで行きたい。世間萬事皆好事であり得るやうになりたい。それが出來なければ、到底、日日是好日の至境には達し得られないからである。

世間の好人を識り盡すのはむづかしい、又、好人不好人の差別のあるうちは、好人必ずしも好人で終始しえない。然し、こちらが好意を以て對すれば、世間の人は凡て好人である。そして、自分の識り得られる範圍內の人を、凡て好人として見出し得たならば、それが卽ち、世間の好人を識り盡したのである。世間の好書といふのも、また同じ理で、こちらから心肝を披瀝して接すると、どんな人でも好人であるやうに、こちらで何の偏見も成心ももたないで對すると、どんな書物でも、それぞれその好いところを示してくれる。

愛讀書といふものは、丁度友人と同じやうなもので、年を追うて愈々少なくなると共に、その少數の愛讀書は、ますます味ひ深く、また尊くもなるものだ。けれども、友人以外の人でも、天下の人みな好人ならざるはないやうに、愛讀の書ではなくとも、自分の著書を除いた外は、天下の書みな好書ならざるはない。自分の著書は、自ら餘りに知りすぎてゐるので、何等敎へられるところなく、從つて非常につまらなくしか思はれないが、他の人の著書からは、たとひどんなにつまらないと一般に思はれてゐるものからでも、必ず何等かの學ぶところはあるものである。

物には凡て長短がある。その長をとつて、その短をすつ。この讀書の道の上乘なるものである。他人の書を讀んで、その弱點ばかりが目につくうちは、つひに進步はない。他人の書を執つて、直ちにこれを拙惡庸劣として擲つのは、自ら高しとし、自ら足れりとする心があるからである。かうした頑な、倨傲な心の前には、向上の門は悉く閉されてゐる。これに反して、何物の偏見にも煩はされないで、他の長をとり、他の賢を學ばば、その知は加はり、その道はすすむ。古人も言へるあり、百千萬人の評して以て迂書愚書怪書となす物も、我之を讀まんとするや、敢然として讀むべし。常に時俗の見に徇ひて讀む、これ畢に一頭地を拔く能はざる人たらずんばあらずと。何物にも長はある、

その物獨自のものがある。天下の愚書、また何の意味なしとせんや。愚人はその愚によつて、人を訓ふ。天下に愚書なく、愚人なき所以である。

山水もまた然りである。私もはじめて山水癖になづんだ時分には、天下の名山名水は剩さじと思ひ立つ事もあつたが、今ではそんな有名なところよりも、反つて名もない山水の方が好きになつた。奇癖に富んだ天才よりも、素直な凡人が親しみの多いやうに、概ね拔群の奇峭、絶倫の變化を示してゐる名勝よりも、何等他奇のない平々凡々の山水が、自分のやうな凡庸者には、遙かになつかしみが多い。その平凡の中から、獨自の趣致を見出すのが、自分には樂しみである。勿論、これは天才を斥け、名勝を否定しようといふのではない。天才の前には謙虚に頭を垂れて、その施與にあづかりたい自分である、天下の名勝は周圍の俗惡をも忍んで、敢て訪ねずにはゐられない自分であるが、天才のゆゑに凡才の必ずしもすつべきでなく、名勝のゆゑに、凡山凡水の必ずしも拒否すべきでない事を思ふのである。

千里を遠しとせず、天下の名勝をさぐつた芭蕉にも、

春なれや名もなき山の朝がすみ

の雅懷がある。芭蕉の風流は、ここに至つて一段の徹底味を加へた。英雄崇拜に終始してゐては、この風流の醍醐味は恐らく味ひ得られないであらう。

×

澄江堂主人、白醉亭主人の二大家をはじめとして、此頃では、新進氣鋭の人達まで、それぞれ一堂一亭の主人として、一家の風格を示されてゐる。そして、その號がみなとりどりの面目を現してゐて面白い。

つい二三年前までは、雅號をつけてゐるのは時代後れだと云つて、いきまいてゐた人もあつた程だのに、變れば變る世の中である。もともとそんなつまらぬ事で躍起になるのも、妙な話で、元來、名前といふものは、所詮符號にす

ぎないのだ。第一號第二號の番號でも、すませればすませるものだが、それでは餘り曲がないから、一定の名前にした方がいい。戸籍簿に登錄された本名よりも、雅號の方がまた一段の趣きがある。そこで雅號も出來たわけであらう。それに本名は親のつけるものであるから、自ら選ぶ雅號の方が、意味があるわけである。もつとも、私の號などは、十三四の時につけたので、大した意味があつたわけでもないのだか、今さらそんな事にこだはるのでもないと思つて、その儘にしてゐるまでの事である。その名のために、妙に幼稚なセンチメンタリストといふ偏見を以て遇せられる不利益があるらしいが、自分の本色は知る人ぞ知ると思つて、別に心配もしてゐない。

ところで、それについて思ひ出した事がある。實は、私も昔、木魚庵と號してゐた事があるのだ。十八九の時だつたらう。考へてみれば、氣障な話だが、然し、その由來には必ずしも氣障とばかりでは片付けられない殊勝なところもあつたのである。何でも、そのころ、なくなつた從弟の法養があつて、寺に行つてゐた折りに、木魚の叩かれるのを見て、感ずるところがあつて付けたので、幼稚ながらも、忍辱の心を旨としたいとは思つたものらしい。

それから十五六年も經つた今日、ふとその事を想ひ出して、自分ながら昔の自分の殊勝さを賞めてやりたくなつた私はやつぱり木魚でなければならない。捨身の供養には及ばずとも、叩かれ叩かれて、稱佛のたすけを果す木魚の功德は廣大である。その木魚功の德にあやかり度い心は、今に至つて一層切なるものがある。

内山良男氏の私の「負けたる人」に對する感想は、若い人の眞卒な心持が出てゐて、氣持よく讀んだ。氏の言はれる通り、二人の間には十年といふ年齡の差がある。私がここまで到達したのも、さんざ苦勞したお蔭である。私も「若さ」をもつてゐた、その若さが數知れぬ「若氣のあやまち」となり、憎まれ、罵られ、打たれ、叩かれて、謂はば白旗を揭げた體であるが、この白旗は、それが本物となつた曉には、私としての大勝利であるのだ。

負けじ魂は大いによい、戰ふべきは大いに戰ふがよい、若い人は大いに勝たねばならぬ。だが、戰ひは一時である、

動は必ず靜に歸さねばならぬ、その時、勝者必ずしも勝者でなく、敗者必ずしも敗者でない事を、人は悟るであらう。最後の安心は、結局、負けたる人の境地にしかない事を、辛うじて私は悟つたのである。負けて勝つのが、ほんとの勝ぢや。世の中を知つてくると、この中に無限の人生智を見出し得るであらう。然し、これは「負けたる人」の謂はば小乘の敎へで、私の今の所期では勿論ない。聖も超え、凡も超え、聖凡不二の境界を仰視してゐる自分は、また、勝ちもせず負けもせず、成敗利鈍を超越した無礙自在な境地にまで行きたいと思ふのである。が、かたちは何處までも負けたる人の無抵抗主義で、叩かれ、叩かれて、人天の供養を助ける木魚の功德にあやかるために、一個の木魚庵主人として生きて行きたいと思ふ。（大正十三年四月）

枯淡の春

×

三月に入つても、なかなか暖かくならないのみか、一層寒くなつて、氷點以下といふ溫度の日が、幾日も幾日續いた。それが、今朝起きてみると、急に暖かくなつて、春めいて來たと思つたら、夜になつてから、たうとう雨になつた。もう春雨であらう。これからの一雨毎に、だんだんに暖かくなつて、木草は芽ぐんで來て、やがて花が咲くであらう。燒けた都にも花は咲く。燒け殘つた櫻の梢を、花の飾るとき、三春の行樂は、人の心を浮き立たせて、過ぎ去つた日の災厄の記憶も、夢のやうに薄れてしまふであらう。人間がとにかくその一生を生きて行けるのは、かうした健忘性のあるがためかも知れない。

ぢつと耳をすまして聽いてゐると、雨は亞鉛板の屋根を打つて、急に音繁くなるかと思ふと、また疎らになり、聲

高になるかと思ふと、聲をひそめて、その音の中におのづからなる律呂がある。この亞鉛板の屋根のために、雨が降ると、私はまるで船に乘つてゐるやうな氣持になる。日本海や、瀨戶内海や、玄海灘を船で通つた日の、幽かな記憶が喚び起されて、あの船室の中から、頭の上の甲板をたたく雨の音を聽くやうな氣がする。

これが田舍の草葺の家で、まはりが林や草原だと、どんなであらう。たとへ註文通りの草庵ではなくとも、あたりまへの平凡な百姓家でもいいから、かうした靜かな夜を、そこでひとりぢつと雨の音を聽いてゐたい。しめやかな、幽かな雨聲が、野から來て野を渡り、林から出て林に入る、その聲をぢつと聽きながら、いつまでもいつまでも、無念無想の禪定に入つて行つたならば、どんなであらう。

ぢつと雨の音を聽きながら、そんな事を思つてゐると、私はふと、夜雨和尙、蘭陵禪師のことを思ひ出した。和尙は大和の葛城山や、京の東山のほとりに草庵をむすんで、夜雨を愛して、雨のふる夜は、いつも香を焚いて、端坐しつつ、明けがたまでぢつと雨の音を聽いてゐられたといふ。それで和尙の名を知らなかつた村人が、いつとなく夜雨和尙と呼び慣はすやうになつたので、和尙もそれを面白がつて、自分でも夜雨和尙と名のられたといふことである。何といふなつかしい風流三昧であらう。

森大狂居士の『禪學一夕話』には、詳しく禪師の事が語られてゐて、その草庵稿中の偈も多く收められてゐる。それを讀めば、ますますその風流のあとが偲ばれる。

おなじ「洞上の風流佛」良寬和尙の詩にも、

生涯懶立身。騰々任天眞。囊中三升米。爐邊一束薪。

誰知迷悟跡。何問名利塵。夜雨草庵裡。双脚等閑伸。

達人の所見は、期せずして一致するものと見える。高野の山に、「杉の雫を聞きあかしつつ」想ひを凝らし、「おち

つけばここも「廬山の夜の雨」を愛した人も、また良寛である。風流佛の好風流、想ひやるだに心往く限りではないか。こちらの心境の進むにつれて、そのたふとさもわかり、慕はしさもまた一倍である。

×

風流といふ言葉は、しばしばつかはれてゐながら、その解釋がまちまちで、この頃二三の文學者の間で、そのために論議が戰はされたやうであるが、私から見れば、風流を單に感覺的享樂にすぎないやうに解釋したのでは、何となく滿足されないやうに思ふ。

床屋の亭主が發句をひねくつたり、横町の隱居が植木いぢりをしたりするのも、風流といへば風流であるが、それだけでは、風流も極めて低いものである。風流をその生活の中心とかけはなれた、部分的な趣味や、感覺的なこのみにとどまるやうに解釋したのでは、私達を滿足させることは出來ないであらう。それが生活全體に徹したもの、全生活を擧げての修道となつてこそ、はじめて問題とするだけの價値をもつてくるのだと思ふ。

少くとも芭蕉の生活の如きは、たしかにそれだけの意味を有つてゐると思ふ。これが私達の芭蕉を尊敬せずにゐられない所以である。芭蕉にとつては、自ら無能無才にしてこの一筋につながると云つたその風流は、單なる感覺的陶醉などではなくして、その人格的鍛錬の道であり、その全生活の支柱であつたであらう、いな、それは旣に信仰の域に達してゐたと云つてもいいであらう。

床屋の亭主や横町の隱居の風流も、いうにやさしい日本の國民性のあらはれとして、決して斥くべき事ではないが、ただ、それだけでは大した意義がないといふばかりでなく、また、さうした表面的な趣味性の滿足にすぎないうちは、あやまつて風流の賊となりやすいのである。

無智な人は、花を見ても、單にそれだけでは滿足しないで、すすんで花を折らないでは承知しない。が、そこまで

行つては風流の賊である。ただそのままに見すごしてこそ眞の風流である。何事もあつさりとすますがいい、七分にとどめておくのがいい。感興を全うするためには、この抑制が必要である。自を撓め、己に打克つ、これが風流の第一歩であらう。愛慾の情を斷ち、功名富貴の念を殺してのち、はじめて、風流に徹することが出來るのではあるまいか。

歡樂極つて哀傷多しといふ、蕩兒は此の堪へがたい寂寥の苦を、つぶさに語りうるであらう。激情の歡びは、また激情の苦を伴ふ。芭蕉の寂びは、歡樂でなく、哀傷でもなかつた。さうした激情に煩はされない、高い淨らかな境地であらうと思ふ。

己を空しうして、自然に歸る、これが風流の第一義ではあるまいか。芭蕉が「形花にあらざる時は夷狄に等し、心月にあらざる時は鳥獸に類す。夷狄を出で鳥獸を離れて造化に從ひ造化に還れとなり」と云つたのも、その心であらう。自然に同化し、自然と一體になる。そこまで行かなければ本物ではない。そしてそれには、まづ何よりも吾我を抑へ、我執を殺さなければならぬ。名利の念を超脱しなければならぬ。世捨人の心にならなければならぬ。

風流もその徹するところは、また宗教の境地に外ならないと思ふ。

×

夜の雨を聽いて、風流といふことを考へた夜から、いろいろな仕事にとりまぎれて、約束の原稿も書きすてにしたまま、慌しく一月はすぎてしまつた。

四月に入ると、さすがに暖かくなつて、もう狹い庭の片隅にある桃の樹には、小さな蕾がふくらんで來た。花もうちらほら咲き出したといふ知らせを聞く。それらが俗事に追はれて、空しく閉ぢ籠つてゐる心をそそのかして、心は旅にあこがれる。野には麥が青く、菜の花は黄色に、一面に彩つてゐるであらう。それは平凡ではあるが、なつか

しい景色だ、その景色が見たい、それを眺めながら、草鞋脚絆で、何處迄も何處迄も、一筋の街道を歩いて見たいやうな氣がする。

とはいへ、實際には、まだそんな心ゆくかぎりの旅をした事のない私である。思へば私には、とても風流などといふ事を論ずる資格はないのである。けれども、あのやうに世俗の名利の牽を截斷して、任運騰々、風流三昧に迻つた古人の好風が、しきりに慕はしくなつて來たのにつれて、幾分か私も、あの息苦しいやうな激情の苦から脫却しつつあるのを思ふ。少くとも、激情の歡びを求めない氣持にはなつて來たと思ふ。

そして、こんな風な氣持になつて來た此頃の私にとつては、庭の隅にたまたま思ひがけぬ草の芽を見付けたり、ぢつと雨を聽いたりしてゐる時の、さうした淸興――それはむしろ淸福といつてもいいであらう――が、世俗的などんな快樂や、どんな幸福にもまして、生きてゐることの有難さを感じさせてくれるやうになつた。

むかしは全く想像もしなかつた、こんな平凡な淡々しい境地から、こんな滾々として盡きない滋味が湧いてくるといふのは、どういふわけであらう。私たちの最後の落つき處は、かうした枯淡の境地なのであらうか。年を重ねるにつれて、日本人はどうしてもそこへ行かずにはゐられないのであらうか。これは日本人が早く老いるからであらうか。然し、そこまで行くのは、單に自然の推移ばかりではなくして、日本人の敎養の素地が、その點に存するのだとも云へる。

西洋人は日本人が水を飮んで滿足してゐるのに驚嘆してゐる。每朝のむ一杯の白湯の味はひは、西洋人の解し得ないところであらう。一杯の淸水のうまさは、自然に醉ひ、自然に同化した時に、はじめて解しえられる。そのとき、月のいろ、風の音、溪流のひびき、それがどんな世間的な逸樂も及ばない悅びを與へてくれるのである。

枯淡なものが、最後に最も願はしいものとなり、いいものとなるのは、枯淡なればなるほど、その味ひは汲めども

盡きず、飽くことがないからである。

あまりに強烈なもの、あまりに濃厚なもの、あまりに刺戟的なものは、はじめは心をどんなに魅惑し、どんなに震盪しても、すぐに感性の疲勞を來し、つひには見るのも厭やになることが多い。愛慾の情や、功名野心の滿足などの如きも、あまりに濃厚で、あくどくて、苦を伴ふ事の方が多い。

幸福といふものは淡いものである。淡泊なものでなければ、幸福を齎らしはしない。

年をとつて、一切の情慾や俗情が消滅して、少しも心を強制しないで、靜かに落ついてゐられる日が來たなら、どんなに安らかで、どんなに長閑であらう。私にその思慕をうたつた詩がある。

「野のけしき見てはまどろむ簀子の上に、今日もひねもす一村翁、晩年はかくもあれ、浩歎のこの詩人にも」

そんな一村翁になつて、春の景色をながめてゐたい。春を惜しみ、春を傷みなどはしないで、ただ目前の春をそのままに、その過ぎゆくままの姿として眺めてゐたいと思ふ。（大正十三年三月――四月）

同時代者の尊重

半生の峠に立つて、過去をふりかへつてみる時、おろかな人間にとつては、いかに悔の多いことであらう。いたづらに過ぎ去つた日を思ひ返して、悔恨に暮れるのは、恥づべき愚痴であることは言ふまでもない。けれども、あるときある機會に、折々過去をふりかへつてみることは、その道を進める上から言つて、必ずしも無益な事とのみは斷ぜられないと思ふ。

現在は樣々の事情に妨げられて、そのありのままの相を見る事が難いが、過去は一枚の繪卷物のやうに展開してゐ

て、その醜も過失も、一目に看てとる事が出來る。それをよくよく見究めて、今後に資する事は、私のやうな過失の多い人間にとつては、むしろ必要であると思ふ。そして、必要であるだけに、その回顧は私にとつてはなかなかに辛いことなのである。今でも顔から火の出るやうな失策や、やりそこなひが、幾つともなく思ひ浮んでくる。私の過去は限りの無い悔の連續と云つてもいい位なので、自分がいかに愚かであつたか、いかに明智を缺いでゐたかが、身に痛いほどに感ぜられる。

然し、その悔の中の最も大きいものは、他の人に對する自分の態度である。自分があまりに他人を責めようとする心の强かつた事である。實際、自分はあまりに多く人を裁いて來た。殊に、批評の筆を執つてゐたとき、自分のこの心が、理論的にヂャスチファイされたので、その弊は一層甚だしかつた事が看取される。私が批評の筆を折つたのも、一半はまたその反省に基因する。批評は人格の仕上げの出來てゐないうちは、容易に好惡の私感情に支配された苛酷な裁斷に墮しやすい危險が附隨するから、決して今一般に考へられてゐる程に容易な事柄ではないことを、私は悟つたのである。

今、私は外に向つてゐた批評の眼を、内に向けようとしてゐる。他人を裁くに急な心は、それだけ自分を裁くに緩である。然し、人を裁かうとする心は、空虚な心である。他人の罪過や弱點ばかりが目につくうちは、その人の自己はまだ影のやうな自己にすぎないと思ふ。自ら裁かれるものとして現れるとき、はじめて人は本當の自分の姿に出逢ふことが出來る。さうすると、曾つて自分が他人に下した宣告が、悉く自分自身にそのまま適用される事を見出さずにはゐられない。丁度クライストの喜劇にあるやうに、今迄檢事であつたものが、實は被告であつたのである。被告が檢事の席についてゐるほど不都合な事はない。私は被告にすぎない、檢事として他に臨んではならない。自分自身に對しては、よろしく常に檢事でなければならないが、他人のためには、よき辯護人でありたいと思ふ。

よく人生を知つてくると、他人を裁かないで、他人を宥す心とならざるを得ない。よく世間を知り人間を知つてゐる現實家——所謂酸いも辛いもかみわけた苦勞人と、ひとへに自分の心を探究する書齋裡のモラリスト（道德研究家）とは、期せずして、この一點に於て一致するであらう。他人の行爲を裁斷する所謂道德家と、他人の作品を是非する所謂批評家とは、弱い人間を鞭つて、何をしようといふのであるか。弱いのだ、力が足りないのだ、自分はさうするより外はなかつたのだ。自分は自分の出來るだけの事をした、この上自分にはどうする事も出來ないのだ、これが弱い罪人と弱い作者との答である。そしてそれ以上人間らしい謙虚な愛すべき答はない。この事がわかつてくると、私達はもはや他人を責める事が出來なくなる。

一體、我々の他人に對する批評が、稀れにしか好意的でありえないといふ事は、人間の免れ難い弱點であるが、殊に、時代を同じうし、その方面を同じうする學藝の人の間などには、どうしても他の業蹟については、偏見に囚はれ、好惡に驅られ、個人的利害に左右される事が多くて、感情を離れて、冷靜に理性に基いて判斷する事が困難である。然るに、古人に對しては、さうした牽制がないから、私達の理解は反つて一層深められ、私達の批判は公正であり得るのである。私達が謙虚な心をもつて、古人を尊崇し得るのは、勿論それらの古人が、時代の篩にかけられて殘つた間違ひのない人達であるからでもあるが、また一面には、距離の隔絶によつて、私達の私感情から自由であるためでもあると思ふ。從つて、私達が古人を尊重し、古人に親しむのはいいけれど、それが偏狹な同時代の蔑視と閑却との反動であつてはならない。

私達はもつと同時代に意味を見出し、同時代者をもつと理解すべく努めなければならない。時代を同じうするといふことには、單なる偶然以上のなみなみならぬ意味がある。私達が同じ時代に、同じ國に生れ合つたといふ事は、思へば深い因緣である。たとへば十年早く生れたのと遲く生れたとでは、私達の關係は今とは非常に違つたものとなつ

てゐたらう。また、今反撥してゐる同時代者と、同時代でありたかつた事を切望するやうな事が、全然ありえないとはどうして斷言出來よう。第一に、同時代者は、時代の動搖と刺戟とを等しく受け、謂はば同じ空氣を吸ふ人々である。現に、私達はあの九月一日の大きな災難を共にした人間ではないか。あの折り私達は、夜警を共にし、恐怖と辛勞とを共にして、その隣人と非常に親しくなつたではないか。そして、おなじ學藝にたづさはる同時代者は、精神上の隣人であるべき筈ではないか。

私達はもつと同時代を尊重することを學ばなければならない。一切の個人的感情を捨て、あだかも古人のそれに對するやうな心で、白紙のやうな心で、同時代者の行爲や事業に對するやうでありたい。それが出來るやうになつたならば、人間としてかなり出來上つたと云へる。少くとも、もはや安心して批評の筆を執る事が出來よう。そして、それには、まづ何よりも、自分の小さな我執や偏見を棄てなければならぬ。

半生の峠に立つて、やつとそれだけの自覺に私は到達した。そして、一人の讀書子として、白紙のやうな心を以て、現代の文學を、私と同時代の名家を――それらの人々が現在の地位を保持してゐる事には、必らずそれだけの理由のある事を、かうした心持から私は肯定するのである――味つて行きたいと思つてゐる。そして、現今の凡ての批評家が、この一文をおなじく白紙のやうな心をもつて味はつてくれたなら、多少の參考にはならうかと思つてゐる。(大正十三年三月)

純眞といふこと

純眞といふことは、今一般に非常に尙ばれてゐる。そして、それはまた實際尙ぶべきことに違ひない。が、そこに

は多少の條件が必要であるやうに私は思ふ。

純眞は美しい。けれども、それをもつと深く推究してみると、その實質には、外觀ほど美しくはないものが潜んでゐはしないであらうか。

もつとはつきり言へば、純眞は一面、エゴイズムを意味してゐるやうな場合はないであらうか。

×

子供は純眞そのものである。子供の天眞爛漫は、愛すべきである。これほど純眞なものはない。けれども、考へてみるまでもなく、子供ほどエゴイストはない、我儘なものはない。

子供は遠慮會釋もなく、傍若無人に振舞ふ。自分の欲しいものなら、どんなものでも取らなければ承知しない。

大人が氣の毒で云へぬやうな他人の弱點を、ツケツケと云つて憚らぬのは子供である。見馴れぬ人間や、異樣な人間に對して、はやし立てて、後をつけまはすのは子供である。人の非常に困つてゐるのを、面白がつて喜ぶのは子供である。

子供には同情などといふ觀念は少しもない。

子供はタイラントである。

子供は奪ふことを知つて、與へることを知らない。

然し、どんなに我儘でも、勝手でも、それが子供だと、一向憎らしくはなくて、むしろそのため一層愛らしく思はれたりする。

×

子供は愛されるためのもので、愛するためのものではない。

子供には邪氣がない。見せかけがない。裏がない。これが子供のどんな事でもゆるされる事の、また子供が可愛らしく思はれる事の最後の理由である。

けれども、それが成人であつたらどうであるか。

いくら子供のやうに無邪氣で、天眞爛漫であつたにしても、その人のエゴイズム、その人の無慈悲、その人の我儘勝手、それを純眞の名で人がゆるしてくれるだらうか。正直だといふので賞めてくれるだらうか。

たとひ人はゆるしてくれるにしても、自分で自分にゆるしていいものであらうか。

×

人間の心の中には、持つて生れた悪いものが澤山ある。それはどんな善い、立派な人にも、多少は免かれぬところだ。

私達が善くならうとする努力は、この悪いものを滅して行く努力に外ならぬ。

純眞とか、正直とかの美名によつて、それを無條件に肯定して、勝手氣儘に生きてはならない。

×

自分を絶對のもののやうに思ひ込んで、自分のする事はみんな善い事だときめてかかつて、自己中心の行動をして憚らない人がある。

そんな人にかかると、相手の者は、その人の自分勝手な我儘を聽いてゐるうちは、善人だが、その人の意に從ふ事が出來なくなると、悪人にされてしまふ。

みんな自分の都合次第なのだ。しかも當人は何の策略も邪氣もない。さうした人がよくある。殊に、女の人に多い。が、これほど無反省な、エゴイスティックな事はない。

その人自身は天眞爛漫で、少しもうそがなく、意識しての駈引がないとしても、その周圍のものは迷惑を受け、ひどく惱まされねばならぬ。

これが純眞であらうか。純眞かも知れないが、それは無智な純眞である。無自覺な純眞である。

×

純眞はいい。純眞は美しい。けれども、それは人間性の素のままの本能まるだしである事であつてはならない。

若し純眞が、欲しいものは勝手に取り、したい事は好きにして、欲望のままに振舞ふ事であり、他人を犧牲にして平氣でゐる事であつたなら、純眞は恥づべき事でなければならぬ。純眞はそれが自分自身に對する批評力の缺乏を意味するのであつてはならない。

即ち、單なる無智、無自覺であつてはならない。

×

人間が愛を知り、同情を解するに至るのは、世間に出て揉まれ、運命に虐げられて、人生の不如意をしみじみと感ずるからではあるまいか。

人間は身に引きくらべてでなければ、他人の苦しみを理解する事は出來ない。そして、理解のないところに、愛もなく、また同情もない。

即ち、私達が成長するからこそ、愛も知り同情も解するに至るのである。

私達は子供であつてはならない。私達の純眞は子供のままの純眞であつてはならない。それは單なる非常識にすぎないからである。

×

人生はあまりに複雜であり、不自由であり、悲慘である。それで我々はそれから脫却したいために、子供の時代を戀ひ慕ふ。

それは別にわるい事ではない。が、我々が本當に子供にかへつてしまつたなら、問題はまた違つてくると思ふ。子供の天眞爛漫は、子供としては自然の事であつて、從つて許されるばかりでなく、愛されなければならぬ事である。子供の純眞は、それ自ら一つの美であり、善でもあるであらう。

けれども、成長してなほ子供と等しいならば、それは明かに不自然であり、從つて直ちに無條件に、美であり、善であるとは云ひ得られない。

×

おなじく賞讃の意に用ゐられてゐる言葉に、童心といふ言葉がある。それは、純眞の意を一層明確に表明した言葉で、卽ち、子供のやうな純眞さを表示する。

良寬和尙は童心の人であつたと云はれてゐる。然し、その童心は子供の心そのままであつたとは、どうしても思はれない。良寬の行跡を知り、その遺語を讀むことの多きにつれて、一層その感が深まるであらう。

例へば、その戒語として傳へられるものを見るに、よく人間の弱點を指摘して、私達の愼まねばならぬところを道破してある。そして、その中にある「人のかくす事をあからさまにいふ」「おしのつよき」「おのれがかうしたく〳〵」などの例は、無自覺の純眞、無智の童心の最も陷りやすい弊ではあるまいか。

良寬の童心は、子供そのままの心ではなかつた。無智や無自覺ではなかつた。良寬の玉の如き人格は、もつて生れた天賦のものには違ひなからうが、また一面、非常な自己修養をも示してゐると思ふ。

一言にしていへば、良寬の言行の中には、智慧の光が輝いてゐる。

すべては智慧に歸する。

×

愛が智慧に照らされなければ、眞實の淨らかな愛となりえない如く、純眞も智慧を伴はなければ、無智なエゴイズムであり、單なる非常識で終るであらう。

そしてこの智慧は、私達が人間である限り、たとひ今どんなに愚かで無智であつても、その心の中に、一點の火のやうに潜在してゐる事を私は信ずる。この光を輝き出させるために私達は修業しなければならない。この後、はじめて純眞は尊い。その以前の純眞は、まだ磨かれぬ珠にすぎない。（大正十三年三月）

名山に藏す

×

いろいろな事を、口にし筆にもしてゐながら、その言つてゐる事、書いてゐる事を、なほなほ深く考へ究めて行くと、それがみんな單なる言葉にすぎないやうな氣がしてくる。まるで影のやうな、何の力もない饒舌にすぎないやうな氣がしてくる。そして、自分が依然として、何一つ知るところのない事を見出す。

そこで、更に古人に學ばうとして、本を讀む。古來の聖賢や天才の言葉は、煌々たる眞理の火を私の胸に點じてくれる。これこそ眞理だと思つて、その言葉の有難さをしみじみと感じて、僅かづつでも眞理を知り得たことを喜び、それによつて、自分の道が以前より一歩をすすめた事を自分で認める。

けれども、凡庸な人間の悲しさには、その眞理も、實際に於いては、聖賢がその中にこめられた深い含蓄にまでは

觸れ得ないで、單に表面的な、極く淺い理解にとどまる場合が多い。また、よし理解はかなり深いところまで達し得たとしても、それが本當に自分の血肉となるまでには至らないで、單なる知識として終る事が多い。だから、一度び聖賢の書からはなれると、その光は再び暗くなつて、またもとの愚かな自分にかへつてしまふ。

いくら聖賢の書を讀んでも、その眞理を學び得たつもりでゐても、實際にふれると、はじめて、それが自分の誤認であつて、自分の道が、以前より少しも進んでゐないことを悟る。罵られれば腹が立ち、賞められれば、どんなつまらない事でも嬉しく、名利の空しい事を痛切に感じてゐながら、いつのまにか、やつぱり名利にとらはれ、やむなき煩惱の心に驅られて、濁りの中を泳いでゐる。氣が付いてみると、やつぱりもとの通りの自分である。

それといふのも、その學んだ眞理が、知識とはなつても智慧とはなつてゐないからである。知識は容易に得られる。然し、知識は畢竟知識にすぎないので、つひに智慧とはなり得ないのだ。智慧は知識の道の絕えたところからはじまる。知識と智慧とは、外觀が酷似してゐて、實質に於いては、全く正反對のものである。

然し、智慧は賢者の身から射し出る光であつて、生れつき凡庸な、愚かな人間には、到底身に着けることの出來ないものなのではあるまいか？　智慧は一半は確かに生得のものであり、天賦のものである事は私も認める。けれども、どんなに鈍根なものにも、一點の光は心の中に潜んでゐるといふ事を、私は信じてゐる。それは他日智慧の光となつて、煌々として輝き出るべき可能性である。長い間の觀心と專念の修業とは、私達の衷心の暗の中から、その光をみがき出す事が出來得ることを私は信じてゐる。さうでなければ、私達の修業は、全く無意味な努力で終らねばならない、そんな事は考へ得られないからである。

とは云へ、鈍根者は何處までも鈍根者で、道を進める事、決して一朝一夕の事ではない。今の私のやうな分際では、いくら聖賢の言葉をくりかへしてみても、それは要するに知識の範圍を出ないので、それには何の力もない筈だ。そ

れは眞理の影にすぎないので、未だ眞理そのものではないからである。オスカア・ワイルドは、眞理はそれを口にした人の如何によらず意義をもつといふ意味の事を言つてゐるが、これはワイルド流のパラドックスに過ぎないので、眞理に二つはないから、我々だつて、聖賢の言葉と少しもちがはない事を口にする事は出來る。然し、その實質は全く違ふのである。聖賢の言葉には、尊い體驗からくる生きた力が動いてゐるけれど、鈍根なものの言葉には、それがない。つまり、まだその眞理が自分自身のものになりきつてゐないのである。今の私の境界が丁度それである。それを思へば、殆んど何事も筆にする勇氣がなくなつてしまふ。もつともつと勉强もし、修業もつまなければならないと感ずるばかりである。

×

書を著して名山に藏すと云つた古人の心が、今いくらか分つて來たやうな氣がする。そして、それは昔私が漠然と考へてゐたやうに、知己を後世に俟つといふ位の意味よりは、もつと深い心持ではないかと思ふやうになつた。まづ、書を著すといふことは、今一般に考へられてゐるよりも、もつと重大な、もつと非常な事でなければならない。今では印刷術の進歩とともに、どんなつまらないものでも、すぐ書物になるといふ時代になつたので、我人ともに、書を著すといふ事に馴れ切つて、極くありふれた何でもない事のやうに平氣になつてゐる。

ところが、昔の人はさうではなかつた。木の葉に書き、竹の軸に書いたやうな時代の事はしばらく措くとしても、版木で刷るやうになつてからでも、その苦心はなみなみなものではなかつた。苟くも、一册の書を著はすには、どれだけの人知れぬ辛勞と刻苦と艱難とを積まねばならなかつた事であらう。かの鐵眼和尙が、黃檗版の一切經を刊行せられた苦心などを聞くと、ただもう有難いと思ふばかりである。

そして、かうした古人の辛勞をおもへば、一册の書物でも、ゆめおろそかにする事は出來ない。心なく讀みすごし

てゐる古書も、實に幾多の貴重な血涙の結晶なのであるから。そして、かうした古人の篤實と熱意とを欣仰するにつけても、あの精進潔齋の心持の十が一でもいいから私達も持ちたいものではないか。そして、その熱誠をもつてして、はじめて書を名山に藏すと云ひ得られたであらう、またこの深い心持を理解し得られたであらう。

書を著して名山に藏すとは、自分の心の愛兒であるその著作を、みだりに人に示したくないところから、筐底深く祕めたいと云ふ心持を、比喩的に强めて云つたのだとも解釋出來るけれど、私は今、それをただそれだけの心持だと思ふのみでは滿足が出來ない。それは自分の書いた原稿を、手箱に入れて封印をかけておくと云ふやうな事よりは、もつと深い意味を有つてゐるのではないかと思ふ。

それはむしろ、文字通り、名山に藏するの謂ひでなければならぬ。名山と呼ばれる秀麗な山容をのぞむとき、私達はそこの山中に、自分のなきがらを埋めたいと思ふ。高山樗牛が龍華寺に遺骸を葬ることを望んだのも、殆んどそれに近い氣持ではなかつたらうか？　私も絶景に遭ふ每に、自然に同化し、自然の中に溶け込んでしまひさうになる、あの一種名狀し難いエクスタシイを身に覺える。然し、すぐれた藝術家は、喜んでその魂を自然への貢物に捧げる人ではあるまいか。

書を著して名山に藏すとは、藝術家の敬虔な精進と、毅然たる自恃との最高の表白であるとおもふ。そこには、名山の靈を汚さずと自信し得るだけの敬虔な努力が籠つてゐなければならぬ。天地神明に恥ぢざるだけの自恃が存しなければならぬ。そして、この心がけがあり、この良心がこもつてゐたならば、たとひ人は何とも云はば云へ、著者は自ら十分に安んじていいのである。

藝術は究竟、自分ひとりの滿足に歸する。眞の藝術愛は、およそ名聞と呼ばれるものを知らない。藝術といふものを、特別に自分から引離して、これを自分の外部に置いて、これを磨き、粉飾をこらして喜ぶのが、或る種の藝術至

上主義者であるが、さうした藝術は、つひに器用な手品にとゞまるのではあるまいか？　藝術もその範圍では、畢竟「繪そらごと」の面白味にすぎないであらう。藝術を自分の內部に見出し、外に現れるものは、單にその反映にすぎないのだと思ふとき、はじめてその意義が認められてくる。つまり、私の落着き處は、人格としての藝術にあると云つてもいいかも知れぬ。いい藝術をつくらうと念がけるよりも、いい人間になりたいと思ふ。

私は良寛が、詩や歌や書に於いても、すべての法則や形式に煩はされないで、心のままに詠み出し、書きはなして、その思ひを詠みすて、書き捨てにして、敢て顧みなかつたあの心持を有難いことに思ふ。それでいいのだ、いや、それでなければならないのだと、此頃はつくづくと思ふ。それが卽ち、名山に藏する心持なのだ。

勿論、それは私の冀求にすぎないので、未だ未だ良寛の心境には、千萬里も遠いところにゐるのだが、今のやうなアクがぬけて、このせせこましい境界を超出することが出來たなら、今少しはましな藝術が生れるだらうと思つてゐる。味噌の味噌くさきは上味噌にあらずといふ。藝術家々々々と云つて、いい氣持になつてゐた時分の自分は、今かへりみると恥かしいことである。珠は碎けずならば、手に白玉の鞭を把つて、驪珠悉く擊碎せよ。藝術は藝術の終つたところからはじまらねばならぬ。

名山に藏するは未だし。名山に藏するの心もて、世間にこれをはふり出して、平然たるを得るやうにならねばならぬ。世間がまた名山と選ぶなきを知らねばならぬ。（大正十三年二月）

片隅の哲學

×

旅ゆく人

私達は是非とも、片隅を有たなければならない。

片隅を有つとき、私達は最も強く、最も安全である。

その力に限りのある人間は、うしろに壁を有たねばならぬ。

かくて、その視野は制限され、その能力は集注される。

劍道の達人は、よくこの事を知つてゐる。彼が障壁をうしろにして、青眼に構へるとき、千人の敵といへども、容易に切り込んで行く事が出來ない。

しかも、一度びその障壁を失ふときは、その四方八面のいづれかに、切り込んで來る隙が出來ないとも限らない。

平原の戰ひに於いて、衆寡敵せぬ場合にも、城塞に據るときは、雲霞の如き大軍をも、なほ支へることが出來る。

背中は我々の身體のうち、最も打擊を受けやすく、最も防備を缺く。

片隅に於てのみ、私達は安全である。

片隅からは、四方を展望する事が出來る。そこから、人間の痴態と狂奔とを靜かに眺めてゐるとき、あだかも安全な港にあつて、怒濤さかまく港外を眺めやる航海者のやうな、感謝の情を覺えるであらう。

哲學者は必然的に片隅の人でなければならぬ。カントやスピノザやショオペンハウエルは、偉大なる片隅の人であつた。

詩人もまた片隅の人でなければならない。彼もまた靜かなる瞑想を愛する限りに於いては。

我々は片隅で得たものを、往々中央に於いて失ふ。華かな交際場裡に於いて我々は往々自分自身を失ふ。

片隅の孤獨にかへるとき、自分の見失つたものが、自分自身が、そこで私達を待つてゐるのを見出すであらう。

×

私の片隅も既に久しい事である。はじめて片隅の幸福といふ事を言出したのは、既に五六年も以前の事となつた。それを、いつであつたか、此頃になつて、私がいかにも自分の生活に自得して、その得意の情を託した言葉であるかのやうに解釋して、非難した人があつた。實に想像も及ばない、無法な誤解である。

私が謂ふ片隅の幸福とは、あらゆる世間的な、外面的な榮譽を離れて、世間の人達からは、一見不幸とさへも思はれるやうな、人生の片隅の謙遜な生活に滿足する時、はじめて見出される平和な心の狀態を意味するのである。つまり、足るを知る事、多きを望まない事、その諦念と制限との中に、眞の幸福は存するといふのである。そして、私自身も、決して口先きばかりでなく、自分の生活をそれに準據せしめようとつとめて來たのである。私がいろいろな華かな夢を棄てて、身の程を知らぬ愚かな野望などは抱かないで、文壇の一隅にかくれて、自分だけの小さな範圍を守つて、地味な著作家生活に滿足してゐるのも、それを思ふからである。そこには失意もなければ、勿論得意もないのである。

人の傳へるところによると、小說家の某氏は曾つて發表した私の斷想を讀んで、無理に片隅とか眞中とか區別しなくてもいいではないかと批評されたとの事だ。私は其人らしい面白い批評だと思つて聞いた。だが、その言葉の裏には、私の「片隅」の動機を、私の狷介性に歸する心持が潜んでゐるやうに感ぜられる。率直に言つて、數年前、私がはじめて片隅の幸福についての感想を書いた時分には、少壯氣を負うて、世間に對立するやうな未熟な客氣が、心の底に根を張つてゐなかつたとは云へなかつた。然し、今の私は最早昔の私ではない。爾來、私も幾分か人間としての練磨修養を積んだつもりである。

×

徳川家康は、近習の者に、身を保つ箇要の語を敎へて、それは五字で云へるのと、七字で云へるのとがある。五字で云へば、「上を見な」、七字で云へば「身のほどを知れ」であると云つたといふ。私は曾つてその二語から、座右の

銘ともすべき一首の歌を作つた、

上を見な身のほどを知れ上を見な身のほどを知れ身のほどを知れ

といふのだ。けれど、私は最早、家康の敎へたやうに、身を保つためにこの座右の銘を遵奉しようなどと思つてゐるのではない。今私の念ずるところは、もつと根本的な達觀である。謂はば——謂ふも憚られはするけれども——無礙自在な境界である。淸風匝地何の極まりか有らん、世を白眼視して、我れひとりすめりと高くとまつてゐるやうな境地は、今の私から見れば、なほ至らないこと甚だ遠い境地であると思ふ。世間がなほ眼中にあつて、絶えずその關心事になつてゐるやうでは、たとひどんな山中に隱栖しようとも、決して自由な境地に棲んでゐるとは云へないのである。

もとより、弱い縛められた人間の事であるから、全然世と相關せぬといふ生活は到底出來る筈はない。が、出來るだけ世間を素直に受け容れて、自ら餘りに多くを要求することなく、與へられるものを喜んで受取る謙虛な心持を尊ぶのである。その意味で、今の私の心持にとつては、おなじ隱遁者、おなじ世捨人でも、上田秋成のやうな、世を拗ねた皮肉な人よりも、(秋成はその才能に於いて今なほ私の愛する文人の一人ではあるけれども)かの淡々たる賣茶翁のやうな人の方がなつかしいのである。賣茶翁の歌に、「笛吹かず太皷叩かず獅子舞の後足となる胸のやすさよ」といふのがあるが、面白い歌ではないか。獅子舞の後足——それが片隅の幸福なのだ。

×

淺學な私は、愚かにも今迄氣が付かないでゐたが、最近になつて、この片隅の幸福といふ言葉が、既にエピクロスによつて言はれてゐる事を知つた。そして、いかにもと感じた。その思想は、エピキュリアニズムに外ならなかつた。快樂主義などといふ譯語のために、とんでもない意味にはきちがへられてゐるが、エピクロスの正當な意味に於いてのエピキュリアンならば、私も殆んどそれだと言つていい。

一杯の葡萄酒に、二三の良い書物、そして心の合つた友達、それは幸福と呼んでいいだらう。空しい名聞や得喪利害に煩はされないで、晴れやかな心をもつて、自然を愛し、自然に浸るやうな生活が出來たなら、それは幸福に外ならぬであらう。

もつとも、今の私は曾つてのやうに、オイデモニスト、即ち幸福論者ではないので、幸福問題は、最早やその事ら介意するところではなくなつてゐるのだけれど、それとは離れても、かうした任運騰々、天命を樂しむと云へるだけの境地に達する事が出來たなら、人間としてまづ申分のない處までは行つた事になるであらう。

哲學者は、總じて片隅の人でなければならぬが、然し、エピクロスほど片隅の哲學者と云ふ言葉がピッタリあてはまる人はあまりないやうに思はれる。

プラトオンが、雅典のアカデミイで、華々しくフィロソフィーレンしてゐたのに對して、このサモスの老漢は、例のエピクロスの庭園の隅から、それを笑つてゐた――これはニイチエの表白であるが、ニイチエの觀察したやうに、エピクロスが、プラトオンに對する反抗から、多くの著書を書いたといふ風には、私は考へたくない。それは恐ろしく片隅の尊嚴を傷つけるものであるから。競爭者が眼中にあるうちは、片隅はつひに眞の片隅ではあり得ないのである。

天上天下唯我獨尊といふと、いかにもお山の大將おれ一人といふやうに取れるが、さうではなくして、人はみなそれぞれに獨自の價値を具有するものであるから、自分一人の世界を守つて、それに滿足する事が出來る筈である。そして、孤獨と片隅とのより深い意味の中に、眞の自由人の出發は求めらるべきものではあるまいか？（大正十三年二月）

生に處する道

智慧と愛と

旅ゆく人

智慧に照らされなければ、その愛は暗く、愛に溫められなければ、その智慧は冷たい。

凡庸の福音

他の人の倍働いて、他の人の半分の效果を收める事が出來れば滿足しよう。かう近頃の私は考へてゐる。私のやうな凡庸な、あまり運命に惠まれてゐない人間にとつては、それ以上適切な生活信條はないであらうと思ふ。

この凡人を見よ

自分が一個の平凡人にすぎないことを悟るのに、二十何年もかかつた自分！　何といふ平凡人だらう。

片隅の人間

或る種類の人は、自分のゐるところを、世界の中心點であると思つてゐる。他の種類の人は、かへつてそれを世界の片隅であると思ふ。

前者は世を救はうと志してゐる、後者はただただ自分が救はれたいと希願する。

前者は天才主義であるが、後者は自分の凡庸人であることをよく心得てゐる。

前者は勝利者を以て世に臨まうとする、後者は敗北の中に意義を見出すばかりでなく、成敗を超越した境地に安心立命の地を求めてゐる。

そして、私はこの後者に屬する人間だ。

弱きに徹して强し

賞讃を求めず、非難を恐れず——世にこれ以上の强味はない。そして、それは一切を折伏した後に、はじめて得ら

れる。一切の世間的欲望と一切の矜恃とを放擲した後に、はじめて得られる。
「負けたる人」こそ眞の自由人である。
弱きに徹して强し。
「負けたる人」には、また恐るべきものがない。

神のたまもの

人間の自負心は、人間がよつて以て立つところの基礎である。
最もすぐれた人からさへも、最後でなくては立退かないものが、これである。
これがなかつたなら、今にも世界はバラバラになつてしまふだらう。——神樣はいいものを人間に與へてくれた。
自分はとるに足らぬ人間である、何一つ世の役に立たぬ人間である、人間の屑であると知つたならば、我々は一日も生存することは出來ないであらう、また、生存することは罪惡である。
それゆゑ、自負心は人間に許されなければならぬ。即ち、自分は何等かの意味で、意義のある人間である、生きてゐる價値のある人間であるとの自負心は、正當な理由をもつて、人間に與へられたと見るべきであらう。
しかも、我々はこの自負心が、我々の心の救ひにとつて最も障害をなすものである事を感じてゐる。ここに大きな矛盾が伏在してゐる。然しここにこそ、深奥な否定の敎義の片鱗が仄見せられるのではなからうか。

生に處する道

ナポレオンは、戰爭にのぞむ前には、勝利を得た場合の事は、殆んど考慮しないで、萬一敗戰の憂き目を見た場合に處する道について、非常に頭を惱ましてゐたといふことであるが、這般の消息を解するものは、確かに人生學者と

稱するに足りるであらう。

まことに、我々は常に危險の淵にのぞんでゐるのだ。いつ不慮の災難がふりかかつてくるかわからない。危機はいたるところに潜んでゐる。

だから、我々はつねに最悪の場合を豫想して、その對策を建てておかねばならぬ。幸福を期待しないで、常に不幸を念頭におかねばならぬ。

かくて、辛うじて九死に一生を得る事が出來るであらう。出來ない場合は止むを得ない、潔く運命に服すべきである。「災難に逢ふ時節には災難に逢ふがよく、死ぬ時節には死ぬがよく候、是はこれ災難をのがるゝ妙法にて候」といふ良寛の言葉は、達人の達觀として、味はふべき言葉である。

我々の一日は、挽回のための一日である。一見進取と見えるものも、實は守成である場合が多い。

書物庫を辭退した男

或る讀書子が曾つて私にかういふ事を話した。何でも彼に小說を書く友達があつて、その友達が、或る人に向つて、彼のことを「彼奴つまらん男だが、一寸重寶な男だよ、何しろ澤山本を讀んでるから、小說を書くいい暗示や思ひ付やを、時々行つて引き出してくるんだ、まあおれの書物庫みたやうなものだね」と言つた。その言葉がめぐりめぐつて彼の耳に入つた。そこで、彼は、即刻、その友達にさよならを言つたといふのである。

その讀書子はなほそれに附け足して言つた、彼の期待してゐたものは、友達であつて、利用者ではなかつたからであると。また、彼は一個の人格であつても、書物庫にはなりたくなかつたからであると。私は彼のその處置をやや矯激に失し、且つ少しく輕卒過ぎなかつたかとは思つたが、結局、彼に同意しなければならなかつた。かやうに單なる書物庫かなりたくないのは、ひとり彼ばかりではあるまいと思つたから。

友情の唯一の形式

戀愛は相互的でなくても成り立ち得る。友情は相互的でなくしては、つひに成り立たない。これが戀愛と友情との最も異つてゐる點である。かの讀書子は、また別の時に、私にその意見をも話した。

「おれは君に友情なんか持つてやしないが、君はおれに友情を持て！」然し、それで成立つ關係は、友情のそれではなくして、主人と奴隷とのそれである。

「君もおれを信じてくれ、おれも君も信じてやる」これを措いて他に友情の形式はない。——君はさう思はないかと、讀書子は私に問うた。私はそれには直ちに答へ得なかつたが、その代り、いつかは自分の友情論を書きたいと心ひそかに思つた。

哲學について二三

無數の學説がある。そして、そのいづれもが、それぞれその支持者をもつてゐる。一般に排撃されたものも、つひに絶滅したのではない。他日、再び新しい支持者によつて復活する。かうして、世紀から世紀へと續く。一體、この澤山の學説のうち、いづれが正しいのか、若くは、いづれも正しいのか、眞理はいづれかの一つにあるのか、或ひはその凡てが眞理なのか。

哲學は畢竟、迷ひの學問である。哲學によつて救はれようと考へるものがあつたならば、その奇特な人の顏をよく見ておくがよい。然し、哲學は我々を救ひはしないが、我々を慰めたのしますことは出來る。若い哲學者には肯定し得ない人もあつたやうだが、私はケエベル博士の哲學に對する態度が最も同感し得られる。

宇宙に中心點があるならば、一つの學説、一つの哲學體系をも正當視できよう。各々の星は、各々の位置を中心と

思惟し得る、また思惟しなければならない。同樣に各人は各々のテンペラメントに、順應する哲學を正しとすることが出來るであらう。然しそれよりも更にいいのは、ただ星斗燦たる天空を仰視して、その莊嚴に驚異することである。

カントの星、ヘエゲルの星、シヨオペンハウエルの星――それらを仰視する時、私のやうな無學な哲學の門外漢は、その燦爛たる光輝に眩惑されて、哲學を迷ひの學問と斷じた事をさへうら恥かしく思ふ。何たる魔術であらう、何たるすばらしい藝術であらう。(大正十二年八月)

一匹の螢

窓をあけて寢てゐると、いろいろな蟲が飛び込んでくる。昨夜も床の中で、本を讀んでゐたとき、ふと眼をやると、枕の下の方を、三四分ばかりの首筋の赤い蟲が這つてゐる。おや、と思つて見てゐると、ゆつくりゆつくり這つてゐるその黑い羽根の下に、ポッと靑い光が、疊の上をほのかに彩つてゐる。螢なのだ、何處からまぎれ込んだのだらう、こんな時、こんなところに、思ひがけない螢の火。本當にめづらしい來客だ。私は何とも言へないなつかしい氣持が、心の底から浮んで來た。そして、このかあいらしい蟲に何か話しかけたいやうな氣持で、しばらく本の上に頰杖をつきながら、この可憐な珍客を眺めてゐた。螢は音も立てずに。私の肱のところまで這つて來た。そつと指でつまんで、掌の上に載せてみると、ポッと掌が靑む。螢はあへて飛び立たうともしない。やつぱり、ゆつくりと掌の上を這つて行く。大方、幼蟲から孵化したばかりなのかも知れない。何處から來たのだらうと、私はまたそれを不審にした。

だが、それにしても、この一匹の螢が、こんなにも珍らしく、こんなにも不思議な出現に思はれるほど、私は自然に背いた生活をして來てゐるのだと思ふと、何だか自分が囚人の身の上でもあるやうな、腑甲斐ない氣がしてくる。

十年にあまる都會生活は、すつかり私を自然と引き離してしまつた。たまたま郊外に出てみたり、旅に出てみたりして、野を吹く風の爽かな息に觸れたり、恣まな木草の青い匂ひを嗅いだりして、辛うじて自然との交通を保たうとつとめてゐる位なもので、それでは、四季さまざまの自然の微妙なうつりかはり、そのこまやかな働きの多くは、全く關知する事なくしてすぎてしまふ。庭前の一二本の樹に若葉の芽立ちを見、公園の櫻に花どきを知り、街頭の蟲賣りの籠に鈴蟲松蟲の聲をなつかしむやうな生活は、自然を愛するものにとつては、まことに惠まれない、不本意な生活と云はれなければならない。

その不本意は、單に都會生活をしてゐるからと云ふばかりでなく、年々、生活が煩雜になり、心の煩はしさが多くなるからで、ともすれば自然を忘れて、日を重ねるやうな事も稀れではない。また自然に對しても、本當に純眞なおのれを空しうした氣持で、自然に醉ふといつた氣持で對してゐる時間はだんだん少くなつて行くやうな氣がしてならない。

子供の時はかうではなかつた。自然と私とは一體であつた。自然を愛するとか、自然に醉ふとか云ふ意識は露ほどもなく、ただ、身體も心もそのままに、自然の中に沒入し、融合してゐたのだ。自分も自然の一部分であつたのだ。

今、迷ひ込んで來た一匹の螢を掌にのせて、ぢつと見てゐる私の眼に浮ぶものは、私の父の家のまはりに流れてゐた小川である。講社と呼ばれてゐた筋向ひの社の境内の堤下をつたうて、こんもり水の上に垂れかかつた夏草の間に、點々と光をつらねてゐた螢を捕へるために、夏の夜になると騷いでゐた子供たちの中に、私も交つてゐた。螢をつかまへ損なつて、川の中に落ちて、着物を濡らした事も、一度や二度ではなかつたやうに思ふ。夏はまだ、大川の水の中に飛び込んで、唇が靑くなるまで、冷たい河水に浸つてゐたり、夜見ヶ濱の松林を何處迄も何處迄も歩いて行つたり、秋になると、奥山に熟柿を拾ひに行つて、百姓に棒をもつて追つかけられたりした子供であつた。それももう二十年の昔となつた。

もう子供の時の氣持は再びかへつて來ない。子供の時の事をおもふと、自分の言つてゐる事、してゐる事が、みんな嘘におもはれてならない。が、今更どうも出來ない事だ。大きくなつた以上は、もはや仕方がない。ただ、せめては、子供の時のやうに、自然の中に身も魂も投げ出して生活したいものだ。自然愛の詩人なんかにならうなどとは思はずに、自然の中で子供のやうに生活したいものだ。それには、田舍に隱れて、田舍者にかへつて、田舍の生活をする事だ。けれども、今では、一定の恒產がなくては、田舍の生活は出來ない。いくら百姓にならうと思つたつて、田地もなければ、體力もない自分のやうなものは、美しい自然の中で餓死するだけであらう。

今の私には、戀愛などといふ事は、あまりに刺戟が强烈すぎて、考へるさへ息ぐるしい氣がする。それは、あんまり苦しい事だ、それはもう何年前かに見すごした惡夢のやうな氣がする。ひとり戀愛に限らず、すべての激情――人間の煩惱から生ずるあらゆる欲情、愛も憎みも、功名野心の渦卷も、おもへば、あまりにあくどく、あまりに激しく、苦しすぎる。そんな激情とちがつた、もつと淡泊な、もつと苦しいこだはりのない、靜かなものをと心を動かせば、どうしても人間を離れて、自然の方へ向はずにはゐられない。

とは言つても、弱い私は、人間の羈絆である息苦しい愛憎や、凡ての對他的な心の煩ひを全く脫することが出來ないので、ともすれば、心の平靜が破られさうになる。そんな時は、私は懸命に自然の手によりすがる。そして痛切に旅をおもふ。

私がこんな事を考へてゐる間、螢は狹い掌の上で、ぢつと休んで、やつぱり何か考へてゐるやうだ。呼吸(いき)するやうに、靑い光が濃淡する。私はかはいさうになつて、緣先へ持つて出て、庭へはなしてやると、それでもヒラヒラと飛んで、垣根の下の方にとまつた。そして、そこで光が一つ美しく、闇の中に明暗してゐる。私はたたずんだまま、暫くの間、それをぢつと眺めてゐた。（大正十二年八月）

漂泊の旅

秋になると、漂泊の旅をおもふ。

「片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず」と云つた芭蕉の深い心持には、及びもつかないであらうが、私の心も一笠一蓑の行脚の旅を羨み、行方さだめぬ旅をおもふ。

旅は自然の堂奥に參ずる絶好の方便である。古日本人の心は、旅に生命を傾けた。厭離の心抑へがたく、安らかな家居を棄てて、旅路のさすらひに果てた。

西行や芭蕉は、字義通り、漂泊の詩人であつた。行脚の人であつた。一茶もまた、芭蕉の足跡を追ひ、松島の月、象潟の雨にあくがれて、奥州大行脚を試みた。

現代の文人にも、西行をたたへ、芭蕉を崇め、旅をおもひ、漂泊を念とする人、必ずしも少しとはしない。然し、今では我々は、もはや古人の旅の俤をすら偲ぶことは出來ない。況んや、その旅の法悦に浴することは、恐らく不可能であらう。それほどに、時代は變つた、文明は空間と時間とを縮めてしまつた。

昔の人は、草鞋の紐をむすんで、笠を手にとつて、親類縁者に別れを告げて、長い旅路に上つたのだ。水盃をして旅立ちをした時代の人々にとつては、旅は生命がけの辛い試練であつたのだ。雨風の辛苦はおろか、雲助、追剝の難、川留めの難儀、旅路の病みわづらひ、ありとあらゆる不自由と憂き目とを豫期しなければならなかつたのだ。

それに比べれば、今の私たちの旅などといふものは、殆んど旅といふ言葉に値しないとさへ言ひたい位だ。急行列車は、何百哩を一夜のうちに、目的地に我々をはこんでくれる。自動車、赤帽、ホテル、東京風の料理、その氣苦勞

は、せいぜい懷中と旅程との胸算用ぐらゐなものである。しかも、この觀光客が、なほかつ旅を誇り漂泊を稱して、それに古人の旅と等しい意味をつけようとするならば、心ひそかに、恥ぢなければならないであらう。

「もし生きて歸らば」とまでの決心で、三里に灸をすゑて出かけた芭蕉の奧の細道の旅、それよりもまた古く、もつと苦しいものであつたらうと想像される西行の行脚は、どんなであつたらう。しかも、その苦しみを苦しみとせず、なほかつ古人は旅をおもうたのだ。芭蕉の旅日記は、その風狂のあとを、つぶさに物語つてゐる。風雅の道ひとすぢ、ここにまた我々の窺ひ知るを得ない法悅もあつたであらうと思ふ。

けれども、私にとつて、更に思ひ深きものあるは、西行の漂泊である。私達の汽車や汽船や自動車でする旅と、やどり定めぬ行脚の旅とは、私達の穩かな日常生活と、出家捨離の生活との相違の如きものでなければならぬ。

漂泊の旅――それは必ずしも字義通りの行旅ではないかも知れない。だが、いづれにしても、それは家を出ることである、すみ心地のよい古巢を捨てることである。それが一時の、かりそめのこともあり、また一生の、永遠のこともある。曾つては、トルストイも、最後に、永遠にこれを捨てた。東洋人は、かの北歐人のやうに、その一生を費すを要しない。西行が出家遁世したのは、わづか二十三歲の若冠の折りではなかつたか。

近く、一人の詩人が現れて、私達の時代に於ける、意義ある漂泊の旅を示した。無一物にして、しかも行處が家。これは彼獨特の托鉢の旅、奉仕の旅である。まことに、今我等の眼の前に、一人の芭蕉が現れて、その漂泊を示さうとしても、當時の苦しみを復活することは空しい努力で終るかも知れない。しかも、この一個のアンダアマン、一個の自由人、一個の「負けたる人」の、托鉢の旅、奉仕の旅には、その中にひとり彼の惠まれたる天分を見るばかりでなく、一個の敎訓が讀み得られると思ふ。

また近く、私の尊敬する一人の藝術家は、トルストイの一生なし得なかつたことをなし、詩人クライストの如く、

若々しく、悦しく、永遠の旅に立つた。曾つては、一人の若い哲學者が、おなじやうに、その愛人とともに「永恒無限の世界」へと旅立つた。また曾つて、一人の文學者は、大學教授の地位を一擲して、その愛人とともに、東に西に、漂泊の旅を重ね、つひに相前後して、世を去つた。心なき人々は、當時いかばかりこれらの旅出を難じたらう。然し、彼等はその非難にも拘はらず、今安らかに眠つてゐる。私たちはただ、これらの旅人の上に幸あれかしと祈る外は知らない。昔、希臘人が慣はしとしてゐたやうに、その墓の前をねんごろな挨拶をして過ぎる外を知らない。これらの人々の上にこそ、まことに生きた人の尊嚴の影はさしてゐるのだ。

ああ、それにしても、純眞に徹し、自由に徹し、眞實の生に徹せんとする時は、遁世か死か。この永遠の旅の外に途はなきか。そのことを思へば、心痛む。

かくて、いかに多くのすぐれた人々は、永遠の出離の旅に立つたであらう。その最愛の子供を足蹴にかけて、修道の旅に立つた西行の心をおもふと、私の心はをののく。厭離の旅——それは、我々にとつては悲しく、尊く、またその外のかずかずの情をゆるがさずには措かない。

眞實一圖の途を踏んだこれらの人の上から、眼をおのれの上に轉ずる時、私は自分の力の足りない事を痛歎せずにはゐられない。おもへば、私の修業は、いかに困難なみちであらうか。その得道は、いかに前途遼遠であらうか。私はまだ、多くの疑惑に充ちたこの賣文生活をすら、未だ一擲するの勇氣がない。一文ごとに、一つの恥を重ねてゐる。けれども、いつかは私自身も、一個の求道者、一個の自由人、一個の「負けたる人」として、出發しうる日も、いつかは來るかも知れないと思ふ。

屋根の上に梧桐の葉の鳴る頃になると、私の心はまた旅をおもふ、出離の旅をおもふ。（大正十二年八月）

負けたる人

×

希臘神話は、一つの意味の深い傳說を私達につたへてゐる。それは敗北した神、クロノスのそれである。クロノスはゼウスの父で、自分の息子の一人に、その位を奪はれるといふ豫言のために、生れる子をみな殺してしまふといふ猛烈な神である。しかもそれが、そのゼウスとの戰ひにたうとう敗れてしまつた。それから彼はどうなつたらう？

古い傳說の敎へるところによれば、クロノスは神々の戰爭に敗れて、その破壞力を奪はれてから、身をもつて遁れ、山々に圍まれてゐるラティーム、卽ち、ローマの地に隱れて、そこにその黃金時代を齎して、ヤヌスの神と一緒に、智慧と慈悲とをもつて人間を支配したといふことである。そして、とりわけこの傳說の美しいところは、それが鬪爭と破壞との時代から、平和と建設との時代への推移を示してゐることである。また勝利の神ゼウスが、依然として危險の地に漂うて、ギガンテンにその電光を投げつけながら、不斷の焦慮と激動との征服戰を戰つてゐるのに、その恐ろしい戰ひから遠ざかつて、平和と幸福との治世をつくつたといふところにある。これぞ、後世の詩人をして、「逃れたものの恩寵」と歌はせたものである。

私ははじめてこの傳說を知つた時から、その魅力を感じたものであるが、此頃になつて、とりわけその深い意義がわかつて來たやうな氣がする。

×

圍碁や將棋のやうな勝負事などをしてゐるとき、大抵どうにかして勝たう勝たうとあせる。その焦慮と努力とは見

てゐてもハラハラする位で、當人の一生懸命の眞劍さには動かされる。が、第三者には、そんな事はどうでもいいではないか、勝つたところで何でもないし負けたところで、格別恥でもないではないかと思はずにゐられない。ところが人間は當面に立つと、なかなかさう云ふわけには行かないのである。それは此世の、この人生の盤上での、輸贏を爭ふ場合についても、また言はれる事である。そして、これはひとりさうした一場の勝負事に限るものではない。しかもこの方の爭ひこそ、更に更に烈しく、眞劍であるだけ、愈々恐ろしい。然しもし我々がもつと大きなところに目をつけて、大局を達觀しさへすれば、そんな盤上の勝負が何でもなく思はれると同じやうに、この人生での勝敗、成不成といふ事も、何でもない、無意味な事に思はれてくるに違ひない。

勝たう勝たうと云ふ氣持は、卽ち、人を凌ぎ、自らを高うしようとする氣持は、必ずしも惡い事と斷ぜられはしないけれども、それが人間の煩惱の根强い一つであることは否まれない。どうかして、負けてもいいと云ふ氣持になりたい。ところが人間は、なかなか負けたくない、どうかして、勝たう勝たうとする、そこからいろいろな苦惱も生れ、煩憂も生じてくるのである。

×

これ迄自分が味はねばならなかつた大抵の苦惱は、みな自分が一途に勝たう勝たうとあせつたところから來てゐる。少くとも、負けまい、人に負けまいといふ意志の發動から來てゐると云つていいのだ、もとより、いつもさうあらはに意識してやつてゐるといふのではないけれど、自分の野心、功名心、自ら高く標示しようとする矜恃、優越感を樂しまうとする慾念、すべてこれ、その勝味に行かうとする心に外ならないではないか。私なぞとりわけ負けじ魂の强い人間で、これまで、そのために、無理な努力もした、分不相應の野心も抱いてゐた事もあつたので、自分の弱いことを意識すればする程、强きにあこがれ力を求め喘いだ。自分がニイチエの權力意志の說に惹かされたのもその

ためである。

然し、力の上に立つとき、そこには必ず無理がある。また必ず苦惱がそこに伴ふ。それでなくてさへ、人間は本能的にその征服慾、優越慾を備へてゐるものだから、今もしもそれを肯定し、更にそれを强調した場合には、恐ろしい慘澹たる修羅場が現出することは疑ひがない。いな、この社會が既に十分その修羅場を具現してゐるのである。私は科學者のやうに、生存競爭を一つの生物的現象として觀察してゐるに堪へない。

×

權力への意志は、價値への意志に變へられなければならない。權力への意志は直ちにその內部の無力と空虛とをあらはす。それは謂はば砂上に樓閣を築かうとするやうなものである。自己といふものの。しつかりした土臺を築くためには、あらゆる外面的の勝利を放擲して、力をその內部に集注しなければならない。そして、その意志は直ちに價値への意志と呼んで差支ないであらう。

然し、大體、この意志——ショオペンハウエルの用語例による——そのものの滅却こそ、卽ち、言ひ換へれば「我意」を滅ぼすことこそ、今、私に最もねがはしい事に思はれるのである。そしてその中に、その努力の中にこそ、私は絕大の價値が見出し得られることを信ずるのである。

負けたる人の生活信條は、絕對的の無抵抗主義でなければならない。そしてこの絕對的無抵抗主義こそ、あらゆる宗敎的生活の根源である。

宗敎的捨離の生活は、負けたる人として立つことによつて始まらねばならない。もつとも、かく特に負けたる人の意識をもつのは、未だ至らない境地であつて、この勝敗、成不成を脫却し、超越した心境に達しなくてはならないのである。況んや世俗的な人の眼から見て、負けたる人であると判斷される事は何でもなくならねばならぬ。

負ける修業――私はそれを修業したい。（大正十二年六月）

附記。この感想はもと大正十二年七月の『文藝週報』に掲げ、のち大正十三年一月の『詩と人生』に再び掲げたものである。現在の見解（片隅の幸福――エピキユリアニズム――負けたる人）は又別に書きたい。

初雷

今年もまた梅雨が來た。

毎日々々、空はどんよりと低く垂れて、その空からあるかなきかの糠雨が、しとしとと、絶間なしに降る。一しきり、さツと烈しい音立てて、窓硝子に叩きつけるやうな時は、一寸救はれたやうな氣もするが、大抵は、じめじめと、そぼそぼと、執ねく、霧のやうな雨が降りに降る。そして、その霧のやうな水粒のかたまりが、まるでグツシヨリ濡れた海綿のやうな多量の濕潤をもつて、戸外から押し込んで來て、浸すやうに我々の皮膚を壓する時の氣持のわるさ。さし込む光線もどんよりとして、部屋の隅々はほの暗く、おのづと兩方の瞼が重り合つて、ただものうく、息苦しい氣持だ。

まだ霽れないかしらと思つて、一日に幾度も幾度も、窓をあけて見ても、どんよりとした空は、依然として、低く軒近にまでも垂れ下つてゐるのに、あァあと嘆息して、またピツシヤリと窓を閉めると、そこの窓の敷居の溝にたまつてゐる水が、パツとはねかへす。

秋の終りごろにも、霖雨期があつて、こんな暗い低氣壓を感ずることも往々あるが、その時分には、何處となく、

私はその頃は好きであるが、この梅雨期には、ただものうさと、息苦しさとを覺えるのみである。梅雨のない北海道へでも逃げて行きたいとおもふが、そこには、梅雨の雨はないかはりに、雨よりもわるいガスが、眼も口もふさがんばかり立て罩めるといふ。せめては、何處か信州あたりの山の溫泉にでも行つて、そこで夏になるまで、靑葉の雨の音を聞きながら過したいと思ふのだが、そのくせ、曾つて一度もその望みを果したことがない。每年々々、この都會のとりわけ不快な梅雨期を、長年の賣文生活——呪はしい奴隸の生活よ、私は奴隸船の苦役にそれをたとへたい——にすりへらされ、腐蝕された頭腦をかかへて、いやないやな日々を、一日家の机の前にすわつたきりで、空しくすごすのだ。

頭が重い、鈍い痛みを何處となしに感ずる。半分しびれてゐるやうな氣さへする。例年の神經衰弱も、今年はとりわけ昂進したやうで、何一つ仕事も手につかないし、讀書すら厭はしく、ただものうい、かうした日が幾日もつづいたあとで、たまたま、思ひがけなく日がさす時がある。その時、やつと蘇つた氣持がして、急いで空を仰いでみると、太陽は、何と高い中空に輝いてゐることだらう！　少しもその運行をあやまらない太陽の循環の正確なのは、何と驚くべきことだらう。けれども、その太陽の光は、濛々としてゐる、雨量に滿ちた地球上の空氣を、生松葉をいぶすものだから、急にまた今度は、とても堪らない程の暑熱をひきおこす。この暑熱が我々の疲れたるんだ四肢に、滴るやうにいぶすやうな汗を湧き出させるので、まだ夏に馴れ切らない弱い身體が、今度はこのあらたな苦しみに、堪へられなく責められる。夏の最初のこの一種特別の濕つた暑熱は、連日の霖雨にも劣らぬほど、苦しく、一層息づまらせる壓迫である。

それも暫くで、又もや、厚い雨雲のために、空はもとのやうにすつかり閉ざされてしまつて、また、びしよびしよと、雨が降りだす。この時分になると、新聞は、本所深川などの貧民窟の人々の、飢餓と浸水とに惱んでゐる悲慘な

狀態を、寫眞入りにして、我々に知らせる。これは實に、毎年のやうに繰返される、この都會での不合理な痛ましい年中行事の一つである。それは謂はば、この呪はしい都會の、呪はしい梅雨どきの、責苦の絶頂なのである。

然し、萬事は過ぎてしまふ、つひには過ぎ去つてしまふ。たうとう七月に入つて、その七八日のころに、突如、天の一角にあたつて、不思議にも、ゴロゴロと、臼を挽くやうな（この陳腐な比喩が最もよくあてはまる）あの音響が、起つてくる。雷鳴だ、――ハツとして耳を引立てて、私はその物音を貪るやうに聞く。すると、そのゴロゴロときしるやうな物音は、一種のリズムを伴つて、まるで大きな空間の琴によつて、音樂を奏でるやうに、都會の上空を、壓しつけるやうに轟きわたる。と、白く、ほの青い電光が、ピカツと、暗い室内に閃く。

初雷――これだ、これを私は、長いこと待つてゐたのだ。私は、助かつたとおもつて、暗い空を見上げる。眞黒な空の一角から一角に、しきりにすさまじいディッグザッグが縫ふ。それは忌はしい梅雨を追ふゼウスの矢であらうか。たしかに、この雷鳴こそ、夏の前驅者の怒聲であるに相違ない。その轟きは加はり、電光は靑味をまし、天地は昏くなつて、雨は沛然とふりそそぐ、一坪何石といふ量をもつて。そしてその雨は夜通し降る。そしてその降りが、いくらか弱くなつた時分に、何處かの地盤にゆるみでも出來たと見えて地震の小さい震動が、一二度、都會のぞんざいな建具をゆるがす。その雷と地震とが一過すると、その翌日からは、はじめて夏の本照りとなる。灼熱した太陽は、今こそ時を得たやうに、クワツと照り出す。それからは、もうきつぱりと夏なのだ。

私はこの夏の最初の雷鳴を愛してゐる。（大正十二年六月）

神樂坂と江戸川

私は牛込に住んでもうかれこれ十年以上になる。二三度引越しはしたが、それもやはりこの界隈で、いつも神樂坂と江戸川と、兩方に同じ距離を保つた地點にゐるものだから、時々讀書や執筆に疲れて、氣がくさくさして來ると、そのどちらかへ散歩をする。

今はもうすつかり掘り返されて、地均しなどしてそのあとかたもないが久世山が廣い草地であつた時分には、よく晴れた春の日など、あの山に上つて、遠く秩父の方の山を望み、目の下に早稻田の町々を見下ろし、心靜かに煙草をくゆらしてゐると、身は都門にありながらも、どこか靜かな田園都市にでもゐるやうな氣がして、心が伸び伸びとするのであつたが、今はもう住宅地としての高臺となるとの事だから仕方がない。いつか近松秋江氏がこの久世山の俗化について、かなり非難し、惜しがつてゐられたのには自分も同感したのである。その秋江氏が、ずつと以前住んでゐられた赤城神社の高臺は、久世山にまさるとも劣らぬ形勝の地で、晩秋、社頭の銀杏の黄葉が、夕風にはらはらと散りしく時、赤い夕雲の上に富士の高い嶺を見出せば、思はず、「山よ！」と聲をかけたくなる。しかし何分にもおちついて四方を見るだけの親切な設備がない、軍人の碑かなんかが、一杯にそこをふさいでゐる。關口の瀧のある江戸川公園は、この二三年ごしの工事で、いろいろと橋だの遊び場だのが出來て、かなり行屆いて來たが、何分にも細長いばかりでコセコセしてゐて氣分が落着かない。これで公園にならない以前詩人河井醉茗氏が、「關口の水は木の根によどむかな」とうたはれた昔の人通りのまれな細長い土堤だつた時分がどんなによかつたかしれない。江戸川の岸の櫻も、今はもういい木は枯れて、若木はまだ何の雅趣もない。岸はすつかり石で築かれてしまつて、靑い草の生えてゐるところもない。藤村氏が、「白菫咲く江戸川の流れの岸に」生れてとおえふをうたつたその江戸川が、昔はそんな美しい草土堤であつた事は今は昔話のやうなものだ。

だが、牛込も神樂坂の方に出ると、早稻田方面の新開地氣分は頓になくなつて、おちつきのある大きい店が綺麗に

並んで活動寫眞とか、バアとか、レストオランとかが　夏の夜などは粧ひをこらして　いかにもすつきりとした明るい都會情調をたゞよはせてゐる。銀座などのやうに、あまり高踏的でもなく、淺草や上野のやうに俗つぽくもない。賑かで、しかもしつとりしてゐる。學生が多く、令孃が多く、若い文士などが、夜更けに高聲で話しながら歩いてゐる。ふと氣がむいて、コオヒイなどのみに出かけると、そこらあたりでいい機嫌になつた小説家が、帽子をあみだにかぶり、ふらふらと歸つて來るのに出逢ふ時は、おのづからほほゑまれる。曾て小川未明氏が、牛込からはなれるのを惜まれたのは、この神樂坂の情調をあのやうに好んで、日々幾度も散歩されたからであらう。私もいつかは郊外に引越して、日當りのいい家に住みたいと思ふのだが、この神樂坂のそばから、いよいよ離れてしまふとなれば、私も多分また、どんなにこの町に別れがたく思ふ事であらう。（大正十二年六月）

隣家の梅

五六日の間、大磯にゐる友人の家をたづねたり、熱海の方に行つたりして、私は今自分の家に歸つて來た。東京の大雪と同時に、あちらの方でも雨が降つたので、（それだけ暖いことがわかる）折角樂しんで行つた美しい早春の空は、十分これを眺める事は出來なかつたが、それでももう湘南では、梅の花がそこここの村落の春趣を飾つてゐた。去年の丁度今頃、名古屋から岐阜の方に旅行したとき、岐阜の若い人達の催しで、舟を長良川の上流に棹さした事がある。その時にも、舟の中から岸に咲いてゐるこの梅の花の白いのを望んで、いかに忘れがたく思つた事であらう！

いろんな花の中で、どんな花が一番好きであるかと時に問はれると、どんな小さな花にも、どんな色の淡い見るか

げもないやうな花にも、心はしみじみと惹き附けられる私には特に何が好きであるといふのがむづかしいが、眼を眩惑するやうな紅紫の色彩を、かの造花のやうにこつてりと染め上げてゐる西洋花よりも、やはり眞白な寂しい梅の花とか、李の花とかが、私にはその場かぎりでなく、長く長く後々までもその印象をのこすやうである。

五六日の旅ではあつたが、さすがに我家近くになると、おもはず足が早目になつて、雪どけの泥濘をふんで、竹の垣根のところまでくると、旅に出る時は、さして目立たなかつた隣家の古い梅の木の、南に伸び出した枝には、もう固い蕾が目立つてゐる。溫かい南の方で白く咲いてゐた梅を見てかへつた自分の眼には、それが、いかにも寒さにいぢけて、咲けばよいのに咲けないでゐるかのやうに見えて、かはいさうである。けれども、今に咲くであらう。さうして高い香が、風につれて漂つてくるであらう。去年は、この花の咲いてゐた間は、どこからか鶯がとんで來て、枝にとまつて、いい聲で啼いたのだ。こんな家と家との建てこんだ町の中にも、春は鶯が來て啼くのだ。それは多分、目白の森の方から來るのであらうか、それとも戸山ヶ原の林の方から來るのであらうか、愛禽家の籠からはなれたのででもあらうか、さまで拙い鳴音でもなかつた。

「おお、鶯がないてゐる」と呟いて、南緣に出た時分には、かの仄青い小鳥はもう梅の枝をはなれて、私の家の小さな庭に立つてゐる一本の細竹をゆるがし、入口のガラス戸の棧にかるくとまつて、そ、そ、そ、と家の裏の方にまはつて行つて、そこで、もう一度高く啼く。

今年もあの鶯が來ればよいと思ふ。

靑い窓かけの小さい書齋には、留守中の新聞雜誌や、手紙などが堆積してゐる。そして机の上には、いつかの夜、美しい詩を書く若い女の人の持つて來てくれたチュウリップの草花鉢が、まだその眞紅の花を開かずに立つてゐる。

「東京はまだ寒いのですもの」

家のものはかういつて、火鉢に炭を澤山にこしらへて、湯をわかし、私のすきな紅茶を注ぐ。（大正十二年二月）

大磯と熱海

×

友達に誘はれて、大磯に住んでゐる今一人の友達を訪ね、かたがた、私が此頃親しんでゐる西上人の由緒のなつかしい鴫立澤をおとなふため、東京を發つたのは、晝前だつたが、一汽車おくれて、横須賀行に乘つたため、大船で一時間も待たねばならなかつたので、大磯に着いたのは、午後の日影も大分傾いた時分であつた。

大磯では、停車場の上の山手に、もう梅が咲いてゐた。仄かに漂ひそめた夕暮の氣配の中に、眞白に浮んでゐる梅の花は、私の眼には、まづ、めづらしい眺めであつた。

その翌朝、私たちは三人連れ立つて、鴫立澤へ行つて見た。もとより、豫想を裏切るほど雅致のあるところではなかつたが、それでも私は一番あとまで殘つて、そこらをぢつと眺めてゐた。底深い小川に圍繞された砂丘で、川に沿うた細い道をくだると、すぐ海岸になつてゐるのが、何となく面白い印象を與へた。海岸に出てみると、海から吹いてくる風は、かなりきつかつたが、それでゐて少しも寒くない。大磯はやつぱり暖かいところだと思つた。

曇つた日ではあつたけれど、左手には泣の島の影もそれとはつきり認められるし、右手の遙か彼方には、微かに伊豆の山影の連亙が望まれた。夏の間は賑はふ濱も、今はまだ二月なので、私たちの外には殆んど誰も人の姿は見えなかつた。濱から町へ上つて、友達の知合ひの本屋に寄つて、元遺山の詩集を求めたり、附近の湯屋に入つて入浴したりして、友の家にかへつてくると、やがて雨になつた。雨は翌日まで降り通した。けれども、それはもう何となく春

雨といふ感じであつた。

×

大磯に二日ばかりゐるうちに、急に思ひ立つて、熱海に行つて見る事にした。雨で一日のばした其翌日も、小雨がしよぼしよぼ降つてゐたが、かまはないで停車場へ出かけた。眞鶴行の汽車は、箱根行の客が降りるので、小田原まで來ると、どつかり空いてしまふ。私たちは打ち寛ろいで、海岸に向いた側の車窓によつて、眞鶴の終點に至る迄の、相模の海岸のすばらしい畫面を、恍惚の眼をもつて眺めることが出來た。

彼方の左方には、黒い小石の磯の美しい彎曲に、波白く渚を浸してゐる壯麗な長い海岸線があつたが、それよりも、つい目の前、目の下の光景が、一層私達には魅力があつた。懸崖の上には、梅樹が林をなして、白く層々とつらなつてゐる。その白い、あざやかな色が、特別に濃やかな潮の色と相映じて、えも云はれぬ風情であつた。

大磯に住んでゐる友人が、即興の句を書いて示した。

眉に迫る潮の濃さや崖の梅

眞鶴から熱海迄は、輕便鐵道はあぶないからと云ふので、自動車にしたが、それがまた殆んど命がけのものであつた。何しろ雨上りで路がわるいところへ持つて來て、路は斷崖絶壁に沿うて走るのだから、一寸油斷をすれば、海中に眞逆樣に飛び込んでしまふのだ。そんな間を、伊豆山まで辿りついて、やうやく熱海に近く來た時に、車馬の往來が烈しいので、ぬかるみは愈々ひどくなつた。そして、右側は熱海線の鐵道を敷く爲めずつと掘り下げてあるところで、一尺路の左手に一臺の馬車がとまつて路をふさいでゐるので、自動車が皆少し右を曲つて行く、その曲るところが、一尺あまり轍の跡が掘れ込んで、そこへかかると、どの車も車體が傾く。私達の前を行く自動車は、そこを一氣に乘り越して行つた。續いて私達の車もそこを乘り越した、と思つてゐると、速力の出し方が足りなかつたのか、その穴の中

へはまり込んで、車體が少し右へ傾いたまま、もう動かなかつた。私達は下へおりて、前後に停滯した十何臺の運轉手が寄り集つて、エイヤエイヤと車體を押し上げるのを眺めながら、人生の難關も、乘り越す時には、どんな無理をしても、一氣に乘り越さなければ駄目だといふ眞理について考へた。

熱海に來た翌日、小雨がパラパラと落ちてゐたが、それにはかまはず、傘もささない下駄穿きで、友達と二人、魚見ヶ崎に行つて見ることにした。

御用邸の横を南に行くと、大きな岩山の緣を縫うて、自動車でも通れさうな網代への道が、魚見ヶ崎のとつぱなへと導いてゐる。

山の上り口まで來た時に、上から下りて來た二人のお婆さんが、私たちを呼びとめて、煙草の火を借りてから、「上の方はひどい路でございますよ、それに骨折つてお上りになつても、何にも面白いものはありやしません」と言つてとめたが、私たちがやつぱり上らうと言ふので、

「お若い方はお元氣だから、それもいいですよ」と言つた。

成程、路はかなり急で、雨に濕つてゐて、落葉の重つた下の土が滑りさうになつたりしたが、二人とも剛情者だから、殆んど跣足のやうにして上にのぼつた。成程上にのぼつてみると、お婆さんたちを喜ばせるやうなものは何もなかつた。

けれども私達は、曇つた空に煙だけがそれと眺められる大島の方を眺めたり、網代の方の人家を眺めたりして喜んだ。友達も自然を愛する方なので、眼下の奇巖を見おろしながら、互ひに自然について語り、またこの地に緣の深い高山樗牛について語つた。

その翌日は天氣がよかつたので、また魚見ヶ崎へ行つてみた。そして人のあまり行かない險しい道を、兜岩のとこ

ろまで下りて行つて、波と岩との相嚙むさまを見たり、胎内くぐりと云はれる洞穴のむかうに、海の青く橫たはるのを眺めながら時を過した。

いちばん日のよくあたる岩の出鼻の、少し平らになつてゐるところに橫はつて、今日ははつきりと盆栽のやうに浮んで見える初島を眺めながら、二時間あまりもぢつとさうしてゐると、私は限りのない平和と幸福とを感じて、心が溫かになごんでくるやうであつた。（大正十二年二月）

後語

私は今精神上の變動期に際會してゐる、そして、丁度罠にかかつた兎のやうに、ジタバタしてゐるのだ。さういふ際だから、ここまで來る間の過程を示してゐるこの書は、私にとつて一種の笞刑のやうなものにさへ感ぜられるのである。卷頭の一文も、もと講演の摘要であるため、意を盡さないところ頗る多く、私のつまらない惱みをすら盡してゐないのだが、その外にも、今の私としては心苦しいものが隨分多いが、他山の石の役目ぐらゐは果すかも知れないといふ空だのみから此書を出す。おろかな人間の迷ひのあととして、憫れんでいただきたい。私もいつかは一人前の人間になる日もあらうから、しばらく見放さないでいただきたい。卷尾の數篇は、ずつと以前公表したものの中から、その時代を示すため、いくらか氣に入つてゐるものばかりを拔いたのである。

影は夢みる

人生に添ひ行く

新綠のころ、郊外の町を步いて行つた。

家並もいつか盡きて、すつかり村の景色になる。

ひとすぢの白い街道の上に、みづみづしい葉をささげて、左右から差し伸ばされてゐる爽かな枝の垂れさがり、地上にちらちらする光と影、それを侵して通る野菜の車など、遠見をする眼に、いつまでも消したくないながめだ。

その並木、その枝、その葉に手をかけてみようと思つて、步いて行つてみると、思つたより高い。思ひ切つて飛付いてみても、とどかない位だ。何べんもやつてみてゐると、つかまへそこなつて、ころがつてしまつた。

「アハハ、、、」と思はず笑ふと、むかうから來かかつた村のお爺さんが、ニコニコと笑ひながら行つてしまつた。

こちらも笑ひながら、その樹かげの草の上に腰をおろした。爽かな初夏の風が、少し汗ばんだ面をはらふ。

さうして風に吹かせながら、煙草のけむりを拂はせながら、しばらくは何を思ふともなき心。その心のおくからむづかしい橫文字の本などに惱まされた頭をやすめには、これ以上の良法はないといふおもひが、ふと湧き出した。

「受働的な自然享受などは、藝術から驅逐されねばならぬ」などと、トロツキイなどの政治家がいくら云はうと、私達は日本人だ、自然と離れて何の藝術があらう。そんな事を云つたら、俳諧などはその日から影をひそめてしまふだらう。寂しい事ではないか。

然し、そんな議論はどうでもいい、今日は綠の中に一日を費さう、もつと步いて行かう、この道を。

さう思つて、左右に伸びてゐる一筋の道のつらなりを眺めてゐると、自分がこれまで步いて來た道をおもふ、こ

れから歩かねばならぬ道をおもふ。
長い長い道であつた。行手には、まだ長い長い道がある。
これが人の一生。何處まで行つても行き着かぬ道、誰でも、どうしても、歩かねばなら道——命の限りの道である。
生きるとは、少くとも、よりよく生きようとすることは、坂道を車を押して上るやうなものだと、この頃はしみじみおもふ。一寸手をゆるめると、すぐ、ずるずると下つてしまふ。教養といひ、自己完成といふ、何といふ困難なみちであらう、一生かかつても遣り遂げられようか。さう思ふと、ときには氣も挫ける。
だが、勇氣、勇氣。
絶望は常に早い。その絶望のさきに、なほ道はあるのだ。
歩かう、歩かう、ただ常に自分を信じて……自分の中には、まだまだ何かがあると信じて……
私達は何かしら、是非とも、自分の中から發見しなければならないのだ。これが私達の生の意義なのである。たとひ自分がいかに無價値に見えようとも、自分といふものを、最後まで見棄ててはならない。何かしら、その中にはあるに違ひないのだ。
私は疑惑の多い人間ではあるけれども、これだけは確く信じてゐる。そして、その信念が、いつも絶望から私を救うてくれるのである。自分の中に全然何物もなく、自分が全く無價値であると悟つたら、生存はいかに困難になるであらうか。少くとも、いかにみじめなものとなるであらうか。
そんなばかな事はない。人はそれぞれ與へられて來てゐるのだ。何かを——。天上天下唯我獨尊とは、それを云ふのだ。おれは人よりえらいといふのではない、人とは違つてゐるといふだけだ。そして、それが自分の尊さなのだ。
自分にとつては、自分の外に道はないのだ。自分らしく生きる、それが人のいちばん自然な生き方であり、いちば

ん有意義な生き方でなければならぬ。眞實に生きるとは、一面また、自分らしく生きること、自分の個性を生かすことであるとも云へよう。

もとより、自分が絶對のものではない。私達は相對の世界にゐる。個人であるとともに、一面、社會人である。いかに孤獨者であると云つても、人間社會を離れて、單獨に生きることは出來ない。その孤獨の中で、私達はやつぱり萬有につながつてゐるのである。社會の陰翳を帶びてゐるのである。然しまた、社會あつて個人のない世界のものは、奴隷だ、蟻だ、デクの棒だ。私達はそんなものにはなりたくない。

デクの棒でない、本當の人間として生きたい。奴隷でない、自由人として生きたい。然らば、どんな苦惱も、心勞も、なほ受けるだけの値がある。

かくて、一人一人の道を行かう。

人を妨げず、人にも妨げられず……

私の道は私の道、その道を私は行く。ただ一すぢの道である。幽かな命のみちである。

それを辿つて行くものは、一つの自我、一つの個性、いかに小さくとも弱くとも、一人の男、一人の巡禮、一人の創造者、唯一者である。

×

道は百條、二百條、私の心にうかびいでる。いや、千條、二千條、あるひはもつと多いかも知れない。記憶の絲のひとすぢに、あやしくももつれまつはる道……

數へつくせないその道々、海べの道、山かげの路、砂山のみち、峠のみち。

町の道、村里の道、山峽の道、さては都の公園の路、庭の小みち、花さく野みち、森のみち、林のみち。

寂しさに沈んで歩いた並木のみち、喜びに足もかるく歩いたアスファルトのみち、わかれを惜しむ歩みも重かつた停車場のみち。
數へあげるその道々は、あるひはかがやかな光を帶び、あるひは仄暗く靑み、あるひは廣々と、あるひは細々と、上り下り、また、うねりつつ、雨の日のみち、晴れのみち、雪のみち、朝のみち、晝のみち、夕の、夜の、かくばかりの多くの道を、また、かくばかりさまざまの色と光と匂ひの道を、むしろより多くの影と惱みと闇との道を、三十有餘年、歩いて來た私の一すぢの道……
道は百條、千條をもつて岐れてはゐても、私が歩いて行つたのは、いつもただ一すぢの道であつた。
數多い道が、みな、私の足の下に結ばれる。山は野につづき、野は町につゞき、町は海につづき、海は川につづづ、川は村につづき、村は峠につづき、峠は山峽にくだり、山峽は原にひらけ、原は畑につらなり、畑は……。そして、この道までつづいた一すぢの道であつた。
地上の道は百條、千條と岐れてゐても、心のみちはただひとすぢである。
「道はいづれも羅馬にむかふ」
といふことば。
「羅馬の道は世界にむかふ」
といふことば。
二つのことばは、ともに人間のことばであり、道そのものの意味をつかんだことばである。
然し、私としてはから云ひたい、
「道はいづれも心にむかふ」

「心はすべての道にむかふ」
たた一すぢのみちは心につづく、心が千の路をも一つにつなぐ。ただ一心、それを私は信じよう、信じて行かう。
道はどこまでも延びるであらう。その長い長い道中をして行かう。雨の日歩き、風の日歩き、光の中で、影の中で、色の中で、匂ひの中で、あるひは涙の中で歩き、微笑みの中で歩き、歩き歩いてはてしれぬ彼方にもなほ道がある。かの世のみちにつづくまで……
「わが奇とするもの三あり、否な四あり、即ち空にとぶ鷲の路、磐の上にはふ蛇の路、海にはしる舟の路、男の女にあふの路これなり。」といふ箴言のことばがあるが、なべて人間の路も、私にはくすしきものの限りに見える。極めてありふれた人の一生——一生の歩み、それが不思議至極なものに見える。人それぞれの運命の相が、この歩いて行く道の上に畫かれてゐるかと思はれる。いや、さうではない、その道の上に、人は自分の運命を畫いて行くのである。その一あし一あしで……
あの道を行かないで、この道を行く。それはなぜだらう？　私の心がそれを欲したからだ。では、なぜ私の心はそれを欲したのか？
つひには、答へられなくなる。
が、とにかく、私は私の道を行く外はない。それは自ら選んだのだとしても、運命に與へられたのだとしても。その外に道はないのだ。
他の人はどういふ道を歩いてゐようとも、それはその人の道である。自分の歩いてゐる道が、自分の道だ。その道を行かう。
自分の道を、自分の好きなやうに、心のままの足どりで……急がず、あせらず、それかとて、またあまり道草をも

食はないで。
人が自分を追ひ越して行かうと、それはその人の勝手である。それをまた追ひ拔かうと足を早めるには及ばない。
そんな事をするのは、相手に囚はれ、自分を失ふ事である。自分は自分、人は人だ。
自分は自分の心の命ずるままに、歩いて行けばいいのだ。人を對象にする必要はない。
自分は自分の足どりで行かう。

×

芭蕉の句に、
この道や行人なしに秋のくれ
この句のこゝろに、深くも感じたときがある。
この路を行かずば、つひに道を得じ！
かく云つた「寂寞道」、私は自分をその行者にたぐへた。
まだまだ思ひ上つた、若い心であつた。
今、私はもつと自由になつたやうに思ふ。
島田青峯氏の句に、「わが影や冬の夜道に面伏せて」といふのがある。その氣持が私は好きだ。然し、私の今の氣持は、おなじ人の句、
靑芒道ほそぼそと曲りけり
その句に最もよく象徴されるやうに思ふ。
道はそぼそと、一筋、絶えなんとして、なほつづく。ほそぼそと、幽かながらに、草間に隱れては、未だ盡きず。

その道を、私はこれから辿つて行くであらう。
考へてみると、これまで私の道はけはしい坂が多かつた、歩きにくい道であつた。これからとても、決してらくになるとは思はないが、もつとなだらかになるやうには思ふ。それは私の心が幾分かやはらぎ、なだらかになつたやうに思はれるからである。
劍のやうな心には、劍のやうな道。直線的な心には、直線的な道。
私の道は直線ではなかつたが、ヂクザクだつたやうな氣もする。
そんな道では危險が最も多い。ともすると、人と衝突する。
さればとて、直線は無趣味にすぎる。
ゆるやかな曲り、なだらかなうねり、私の道もかくあれかし。
心のなほもなほもやはらぎ、なごまんことを。
心のみちは、道德の道である。
私の歩いたみちは、同時にまた、私の道德の實踐であつた。
その道德とは、即ち私の道德。私のあやまりは、すべてそれをつかみ得なかつたからである。道にはづれたからではない。
私には私の道德がなければならぬ。
孔子の道、老子の道。
朝に道を聞けば夕に死すとも可なりの道。道の道とすべきは常の道に非ずの道。
私はどちらかといふと、儒敎の道より、老莊の道に惹かれる。しかも、それはただちに私の道ではない筈だ。

道を歩くものは、また、道を求めるものである。

私も道を求めて行く、一人の求道者として。

然し、その道を求めるのは、即ち、自分の中に何かがある事を信ずるからである。何かが――。私の道德が？

さう、自分の自我、自分の個性、それがしつかりつかまへられたなら、自分の道を見出したといふものだ、自分の眞實を、自分の意義を。

禪宗で、自性といふ、恐らくは、それであらうか？

然らば、それは宇宙の眞理である、萬有につながる自我である……

絶望は常に早い。「日暮れてみち遠し」といふ氣持は、それを殘らず心から切り捨てなければならぬ。生きてゐる限り、日は暮れはしない。過去をおもふから、みちは遠いのだ。むしろ、「來時の道を忘却」せよ。

かういふ心で、私は行く、人生に添うて行く。

命幽かに、しかも絶えず、この緣にそよぐ風のやうに。（昭和二年五月）

自然と書物との愛

誰れでも二十代の時分には、飽くなき知識慾に驅られて、ひたすらに新しいものを。新しいものをと追ひ求める。思想にしても、書物にしても、その他、何事につけても、單に新しいといふだけの事が、その絶對價値である場合が多い。然るに、半生の峠を越えて、多少人生の底が見えてくると、新しい未知のものに、さまで多くの期待がかけられなくなる。日の下に新しきものあること無しとまでの確信ではなくとも、これから知るものが、既に知れるものに

誇る理由のない事を、多年の經驗が敎へるからである。

例へば、書物だけで云つてみても、二十年、三十年の間讀み來つたものの上に、更に新しい世界を啓示してくれるものが、さまで多くあり得ようとは思はれなくなる。寧ろ、既に讀んだものを、新たに讀み返し、讀み直して見たいといふ要求が出てくる。そこで、私などのやうに恥づべき多趣味に煩はされてゐるものにも、いつとなく、愛讀書といふものが出來てしまつて、氣が付いてみると、手馴れた書物を繰返し讀んでゐるといふやうな事が多くなつた。少年の素朴な欲望と夢想とからして、曾つては、あらゆる書物を讀まうと決心したものが、いつか、あらゆる書物を讀むのが不可能であるのみならず、無意味である事を悟つて來た。

とは云へ、よくよく精神的に貪慾な、また多情な生れつきと見えて、私の愛讀書は、その最も重んずる東洋の古典を除いても、かなり多い。特によきエッセイストのもの、例へば、エマスン、アミエル、ケエベル博士の小品集、さうした種類のものを愛する念が強い。かの英吉利近代の作家ジョオジ・ギッシングの『ヘンリイ・ライクロフトの手記』の如きも、またその一つである。この書物は、それほどのものではないとの批評もあるけれど、私には或る個人的な理由から、人並ならず愛好されるのだ。

もう十年あまり前の事、友達に英語を敎はつてゐたころ、その讀本にこの本を選んで、夏の部を、一日に一章宛つあげて貰つた事がある。夏の部から始めたのは、春の部はそのころ既に戸川秋骨氏の譯が、『趣味』といふ雜誌に出てゐたので、それと對照して讀む事が出來たからであつた。元來、この本を選んだのが、その戸川氏の譯で、たまらなく好きになつて、それをしまひまで讀みたいと思つたからであつた。ところが、今では完譯本が一種も出てゐて、誰れでも日本語ですぐ讀む事が出來る。私も藤野滋氏の譯を持つてゐるので、それと靑い紙表紙のちぎれかかつたシキスペニイ・シリイズの原本とを取出して、この二三日、それを引つくり返して拾ひ讀みをしながら、いろいろな事を思

つて過した。

或る英文學史を見たら、ギッシングを評して、「その性格からして既に失敗者であつた」と書いてあつた。この人の「薄くヱエルをかけた自叙傳」だといふ『ライクロフト』で見ると、この批評は恐らく正しいものであらう。この主人公は、成功が素通りして行つた人の一人である。昔讀んだツルゲエネフの『ヤコフ・パシンコフ』だつたかに、その主人公が世の中に出て行くためには、若干の野心、虚榮心、策略といふやうなものが要るといふ意味の語があつたと憶えてゐるが、所謂る成功なるものに達するためには、ひとり世間と調和するばかりでなく、また世間を征服し、飜弄して行けるだけの政治的手腕が必要なのである。そして文壇などといふ處も、その點は世間とあまり違はないと云はれてゐる。現に、この手記でみると、英吉利などでも大差はないらしく、そして、ギッシング自身はかゝる游泳術といふやうなものを知らうとせず、孤獨な道を歩いて行つた人であるらしい。それでとにかくあれだけの地位を得たといふ事は、半ば僥倖であつたかも知れないが、半ばは確かに彼の異常な作家的努力のために違ひない。ただ、これらの當然の結果として、彼は一生貧乏して死んだ。

ライクロフトは、一面、作家の理想を寓したゞけに、失敗の作と云はれる歴史小説の執筆半ばに死んだ作者自身とは違つて、思ひがけなく得たその友人の遺產のために、長い間の倫敦の貧しい著作家生活を脱して、晩年を田園に隱れて、もう何も書かなくてもいい生活をたのしんでゐる。全く、文筆の生活を長く續けてゐると、或る時には、何も書かなくてもいいといふ生活が、理想の生活のやうに思はれてくるものだ。それでゐて、やつぱり何か書かずにはゐられない、かくて、ライクロフトもその手記を書いたのだ。つまり、私たちはいろんな意味の强制を好まないで、自由に、任意に、靜かな閑暇の中で書く事をねがつてゐるのである。ギッシングがその老年の主人公を置いた境遇は、私には寂しい微笑に値するものである。

文學者生活の苦惱は、よく、自分の子供は決して文學者にはしないと云ふ、多くの文學者の、人の親らしい述懷になつて現れる。北村透谷の語を借りて云へば、「筆を弄ぶを以て人間最上の快樂なりと思考」するところから、誰れでも文學者生活の中に入つたのではあるが、さて、その生活の苦惱を底まで味つてゐると、時には堪らない事がある。人の世離れた隱者的な平靜を愛するものは、文學者生活が、學者生活と一見似て非なる事に苦しむ。ライクロフトもさういふ人であつた。「自分には元來、學者になれる素質があつた。閑暇と心の平靜とが有れば、自分は學識を積んだらうと思ふ。」と彼は云つてゐる。そして、「高い意味で學者たる事は、自分に許されなかつた。そして今になつてはもう既に遲い。」と嘆じてゐる。私もまた深い同感なしに、この言葉を讀んだ事がない。

私も二十歲時分には、學者になりたいといふ念が強かつた。が、貧しい境遇がこれを許さなかつた。今では自分を學者の道から引止めたものが、單にその境遇ばかりでなかつた事も知り、自分らしく生きるためには、今のやうな道を選んだ事を、かへつて幸福だつたと思ふやうになつたが、私をして學者生活にあこがれしめた主たる動機である書物の愛だけは、年々強くなつて行く。書物があらゆる娛樂となぐさみとを代用してくれる。かくて、無節制に書物の間を放浪して、ある時には、書物に囚はれ、本の蟲にならうとしつつある自分の危險に氣付いた事もある。すべて何事にまれ、それに囚はれるといふ事は、好ましからぬ事である。そこから、論語讀みの論語知らずなどといふ恥かしい事態が出てくる。

書物は所詮人生の註釋でしかあり得ないのだ。で、今は私も書物の中に必ずしも最高の智慧と眞理とを求める氣持は尠くなつた。一杯の酒の如く書物に對しようと思ふ。陶然たる醉あれば足る。それ以上は望外である。かう思つてをれば、どんな書物にでも、さして失望しないですむ。敎養とさへ云へば、すぐ讀書の事のやうに解せられるが、然し、最高の敎養は、必ずしも讀書からばかりは來ない。むしろ人生の直接の經驗に俟つところが多いのである。

學者といふものは、あまりに書物に支配され過ぎる。書物がなければ何も出來ない、――それを考へると、學者になれなかつたのが、さしたる不幸でもなかつたやうな氣もする。今もし火事が起つて、藏書がみな燒けたとしたらどうだらう？　通例の學者ならば、モナコで文なしになつた男よりも、ある場合もつと悲痛かも知れない。日本有數の梵語學者であるO氏は、震災のためにその藏書をみな燒いたので、學者にとつては藏書が生命だ、それを失へば一文の價値もないと云つて、大學を辭職されたといふ事を聞いた。傳聞の傳聞であるから、眞僞は保證の限りでないが、もし實際だとすれば、痛快な學者だと思ふ。そして、こんな人なら藏書が一册もなくつても、決してゼロではあるまいと思ふ。書物に引廻されやすい讀書子でも、これだけの意氣があれば、書物の蟲たる事を免れようと思ふ。

私は時に自分の藏書を殘らず賣拂つてしまはうと考へる事がある。それほどに書物に煩はされてゐるのである。が、そんなに迄しなくとも、私を書物の中毒から救つてくれるものがある。それは自然である、旅である。全く、無心になつて自然に對する時には、心が朗かにおし開くのを覺える。それは讀書の喜びも、なほ且つ與へ得ないものである。かくて、私の心は自然に饑ゑを感ずる。自然美を探求しようとか、自然から啓示を受けようとか考へる譯ではない。たゞ無意識に、本能的に、自然の方へと心が趨る。旅を思ふのはそのためである。もとより自然は旅に出なければ接せられないやうなものではない。どんな立込んだ都會の中でも、煩はしい日常生活の中でも、もとより自然に接觸する事は出來るのであるが、人間の性質として、どうも常日頃見馴れたものの中からは、新しい刺戟が求められにくいし、殊にわるい事には、そこでは、煩雜な家居の中にあつては、心はなほ十分に自由にのびやかであり得ない事が多い。

けれども、こんな風に自然を追ひ求める心は、既に自然とかけ離れた心だ。自然の中に浸つて暮してゐる時には、そんなものに注意もしない。子供の時はさうであつた。これは前にも書いた事であるが、萬葉人の自然に對する態度

は、丁度子供のやゝにナイーヴではなかつたらうか。それが西行などになると、センティメンタル（シルレルの謂ふ意味の）に自然に對するやうなところが見えはしないか。それゆゑ、深い宗教的な心持にまでなつてゐる事はないか。私などの自然愛は、それほど深い氣持ではもとよりないが、人間生活の不幸と、自分の心の苦惱とに苛まれるにつけて、一層自然のふところによりすがらずにゐられない。だから、たとひ自然を追ひ求めようとも、いや、それを求めずにゐられぬだけ、一層私の衷には人間を愛する心がある。人間の方に惹かれる心がある。愛し惹かれるがゆゑに、時として憎み厭ふ心がある。愛するにしても、憎むにしても、人間社會の事件に關心せずにはゐられない心があるのだ。

いつか『太陽』の自然美號で、木村毅氏が自然美など云ふ事は、生活に餘裕ある者ではじめて云ひ得る事であるし、登山の準備道具だけでも數百金を要する如き贅澤な旅について語る事は、今後の文學者の良心として愼むべきではないかと疑はれた事がある。私もその點については、尠からず疑ひがあつて、自分でしばしば反省させられるので、木村氏もかう感じてゐたのかと思つて、頗る同感するところが多かつた。實際、世上にあるさうした贅澤な旅や登山などは、私など出來もしないが、したくもない事だ。けれども、長い間貧乏生活の中で、日夜勞作に追はれてゐたギッシングが、やうやく多少の餘裕を得て、多少あこがれてゐた伊太利旅行に上つた事などは、一概に贅澤とは云へないやうな氣がする。また、最近、ある共產主義文學者が、溫泉場で書いた原稿の中に、自分がこゝに來てゐるのは、遊びに來てゐるのでなく、仕事に來てゐるのだと、特に斷つてゐたのも見たが、たとひ仕事のためにしろ、その溫泉に行つてゐるといふ事實は打消せない。そして、おなじ仕事と云つても、勞働者たちは、熱火の中でしなければならぬのではないか。だが、若しそれを以て、溫泉場のコンミュニストを咎めるのには、その人に重大な資格を要とする。また、世にその人ありとするも、かかる咎め立ては、それは餘りに殘酷な合理主義、いなむしろ嚴格主義ではあるまいか。

トルストイは、ベエトオヱンを聽きながら、世には今いくばくとも知れぬ饑ゑに苦しんでゐる人間があるではない

かと反省した。私たちはそれによつて、トルストイの誠實に、頭を垂れずにはゐられぬ。けれども今の私には、そのトルストイの結論には、直ちに、無條件には同じられないものがある事をも考へる。合理主義一點張りで判斷して行つたのでは、人生はあまりに息苦しく、身動き一つ出來ないところとなりはしないか。また學問も文學も結局、否定されなければならなくなりはしないかと云ふ疑ひさへ起つてくる。ライクロフトの書物を買ふためのいろいろの苦勞は、おなじ經驗を有する私には身にしみじみと感ぜられたが、學問的研究もまた、自然美も鑑賞と同じく、生活の餘裕の基礎の上に始めて可能である事を思へば悲しい氣持がする。『ライクロフトの手記』の主人公の自然と書物との愛は、さながら自分自身の事ででもあるやうに、同感し、共鳴せずにゐられないと共に、色々な事を考へさせてくれる。

兎に角、ヘンリイ・ライクロフトは、私にはその氣質が、又その境遇が最も近い人間だ。この手記を私が繰返し繰返し讀まずにはゐられないのは、一に其のためである。而して思ふに、かうした氣質の人間は、結局、憐れむべき個人主義者で終るであらう。自然の中に孤獨な冥想を愛したり、古典や音樂を愛する、一切の政治的興味を缺いだ、而も屢々シュティンムングス・ソシアリストであつた一人の貧しい文學者が、から告白するとき、それは最も正直な言葉であると共に、文學の本質について、ある暗示を與へる言葉ではあるまいか――「自分は飢ゑて街頭を彷徨つた。自分は見る影も無い荒屋に雨露を凌いだ。特權階級に對する忿懣と羨望とで燃える心が如何なるものか自分には身に沁みてよく解つてゐる。然うだ、けれど其頃とても、自分は矢張り特權階級の一人であつたのだ……」(昭昭二年一月)

女性に與へる言葉

……女性に語るべき言葉をと思つて、茲に最近の私の心持を書きつけて見る。必ずしも題目に合はないものもある

かも知れず、また、總じて、アフォリズムと云へるほどのものでもない、ただありふれた斷想の一束。

多くの眼のはたらく、都會の人の流れの中で、若い女性は最もいきいきと、晴れやかである。見るのが男性の悦びであり、見られるのが女性の悦びである。それゆゑ、女性はすべてディルネである、といふ哲學者の言葉がある。然らば、男性はことごとく蕩兒でなければならない筈だ。そして、自分の裏(うち)にもまた、一人のカザノフアがあるのであらうか——劇場で、カフエで、ペエヴメントの上で(銀座……)行き過ぎる風、蒔き散らされる香り、瞬間毎に移り變る美の花束、その五月の花の匂はしさをば、私もなつかしむ。けれど、孤獨な行人にとつては、それもただ、空飛ぶ鳥の影に過ぎない。その仄かな遠影を、はかないグリンプスをとらへて、これが現代の女性の……とは、もとより云ひ得られないし、云つてはならないことだ。より深く、その生活を知らない限り、いや、もつと深く、その魂を知らない限り、私は何人をも、眞に知つたとは云へないであらう。

物事の表面だけを捉へて、性急な論斷を下すのが、評論家の任務である。——かう云へば、皮肉であらうか、特に自分に對しての……が、いびつでも何でも、無理やりにでも、相紛糾し、相錯綜した生きた現象を、それぞれに類別し、整理して、これを一々の名目の中に、きちんきちんと當てはめてしまふところが、その苦心でもあり、その手柄でもある。そこで、現代の女性の間のいろんな傾向も、たやすくそれぞれの分類箱に收まる……何處へも入らぬものは、「雜」に入れる。こんな風にして、モダン・ガアルといふ箱も出來た。

まことに、女性は時代の鏡である。また、時代の顔の表情であるとも云はれよう。時代の動きは、いちはやく女性

の身體に表現される。彼女の表情からは、新しい時代が微笑みかける。そして、その新しい表現が、ただちにモダン・ガアルといふレッテルを貼られて、新たに設けられたその箱の中に投げ込まれる、斷髮でさへあれば、洋裝でさへあれば……

モダン・ガアル。それも一つの名目、しかも最も新鮮、たしかに注目に値する。しかも、私は不幸にして、モダン・ガアルを知らない。もとより、モダン・ガアルの本質については、未だ判然とはしてゐない。その解釋にもいろいろあるやうだ。或る人には、單なる女性の娼婦化にすぎないであらう。或る人には、單なるヤンキイ・ガアルの模倣にすぎないであらう。私は新居格氏の解釋を最も好む。氏によれば、卽ち、自由人としての女性、あらゆる旣成觀念を超出した女性を意味するやうである。して、かかる內面的解釋は、男性の女性に對する騎士的禮讓としても、我々の最もとるべき道であらねばならぬ。

私は新居格氏の創作集『月夜の喫煙』中に現れるモダン・ガアルのポルトレエに、尠からぬ興味をもつのであるが、然し、新居氏が唯一の畫家ではないであらう。新居氏の描いた女性が、唯一のモダン・ガアルのタイプではないであらう。世界は廣い。狹くるしい日本のうちだつて、世間は廣いといふ言葉がある。いろいろな人があり得る、いろいろな女性はもとよりあらう。最新式、最上等のモダン・ガアルも。ただ不幸にして、私がそれに接觸し得られないだけの事である。

然しまた、同時に、外界に實在しなくつて私達の頭の中にだけ存在してゐるものも多くある。その中には、すばらしい女性の姿もあらう……すばらしいモダン・ガアルの。

私はモダン・ガアルを知らない。若しくは、外界に於いては、未だ見出し得ない。斷髪と洋裝とが、直にモダン・ガアルを意味するものならば、私のところにも、幾人となく、さうした新しい姿の現れる事はある。

たとへば、あの情熱的な一人の女性……

訪ねて來る度に、美しい花束を持つて來てくれる人。美しい皙いと云つていいほど色の白い人で、その着物のえらび方などにも、都會に育つた人の洗練された趣味を見せてゐる人。その人は、地方の或る大都市のいちばん賑やかな町で生れたのである。その都會は、非常に新しいところと、非常に古いところとの奇妙に混合したやうな土地で、一方、突飛と云ひたい程の新しがりがあるかと思ふと、一方では、一寸の風變りをも目をつけて、大騷ぎをするといふやうな風であるが、さうした不思議な混和が、その人の上にも見えるやうに思はれると同時に、その人自身が、さうした土地の氣風のための一人の犧牲者でもあつたやうに思はれた。

不幸な、そして無理な結婚をして、そのため世間の口のうるさい故郷に身を置く事ができないで、しばらく二人で東京へ出て來てゐたが、結局、不幸な離婚をして、その次ぎ來た折りには、職業婦人になりたいと云つた。こんな弱弱しい身體で……と私はその心根を雄々しいとは思ひながらも、痛ましく思つた。が、身體は弱くとも、勝氣な、意地と張りとで出來たやうな、その性格は、それを私に止めさせなかつた。しばらく振りで會つたとき、その人はオールバックにして、洋裝して、すつかり新しいスタイルになり變つてゐた。けれども、それかとて、直ちにその人をモダン・ガアルとして觀る事は私に出來なかつた。そのためには、その人はあまりにパッショネエトであり過ぎた。また、それがその不幸な離婚の最大の理由でもあつたやうに思はれる。かうした一向きな情熱は批評的なモダン・ガアルにはあり得るだらうか？　もつとも、それを私は望みたい氣持も一方にある……

それからまた……

あの關西の海港から出て來た斷髮の少女もまた、これも華やかな、ヴィヴィッドな性格で、男をやりこめるのが何より好きで、私の年の若い友人の間をかきまはして、それを面白い事にしてゐた。ある艶聞を持つた靑年作家が途中で出あつたとき、ボッと顏をあからめたのを面白い事にして、そちらへ出かけて行つて、ぐんぐんとそのA（かりにAとして置かう）を引つ張り出して、そのAと今一人のBと、Bの友のCと……こんな風にして、相當文學者として名のある人達の間に、大きな渦卷を起させた。それまでは、頗る非凡に見えたけれど、最後に、或る事情に出あふと、すつかり意氣地がなくなつて、涙を流して、海港の方へ歸つてしまつて、そこで平凡な結婚をしてしまつた……

彼女もモダン・ガアルではなかつたかも知れない。

その外、……あの人この人どうも私はモダン・ガアルには緣がないやうだ。然し、そんな名目はどうでもいい。例へば、この二人などモダン・ガアルでないかも知らないが、それぞれ私にはおもしろくも思はれ、好きにもなれた。更に自由な、潑剌とした、新しい林檎のやうに爽かな女性が、この世界を飾ることを私も望む。スティルネルの意味の自由人、それも私の願ひであるが、それが一般にいかに解釋されてゐるかは知らず、私にとつては、決して世紀末的頽廢人を意味するものではない。あらゆる强制を排除する代り、彼は自律の人でなければならぬ。その意味でモダン・ガアルを女性の自由人とみる新居氏が、いつか或る婦人雜誌で、この社會現象について問はれた際に、「個人としては自制を」と答へてゐたのを、私は會心の事に思つたのである。

人生は白の上の黑ではない。人生を織りなすものは、無數の色絲である。眼もあやに、入れ亂れ、もつれ合つて、色は色と交り、絲は絲と重なつて、玆に妙へなる模樣の織物が出來上る。

人の心も白の上の黒ではない。心の中にも、無數の色絲が織りなされる。善と惡、美と醜、愛と憎み……そんなにはつきり分けられないのが、世の相であり、人の心であると思ふ。哲學者はこれがはつきり分けられぬと都合がわるいかも知れない。すべての理論は、人生の一面的把握を意味する。根據といひ、立場といふ、みなその一角に立つて、それを强調するための必要物なのだ。しかも、人生の眞は、全一にある。そして、その全一の中に、その無數のニュアンスを、シャッティールングを味はふのが藝術家の心だ。

その點で、女性の存在は、哲學者に遠く、藝術家に近い。彼女のすぐれた意義は、微妙なニュアンスの表白、陰影の享受にある……

藝術家はよき藝術を創出しようといつも冀つてゐる。そして、しばしば自らよき藝術たらねばならぬ事を忘却してしまふ。然し、自らよき藝術たらずして、どうしてよき藝術を創出しえられよう。私達の手で創りなすものは、その魂の模造品にすぎない。人が人にとつて、最高の藝術品である……時としてはから思ふ。

そして、この點から云ふと、女性は美しき藝術品ではなからうか？

女性は必ずしも自ら詩を作り、小説を書き、畫をかくに及ばない。その身自らを作りなす、刷毛でもつて、白粉でもつて、また、すべての裝身具をもつて。だが、それだけでは、まだ最高の藝術たるには至らぬであらう。いかに天成の美質であつて、美人として讃へられようとも、その魂に磨きがかかつてゐなくては、より精緻な審美感を満足させることはないであらう。

會話がよりよき化粧である。あのアンシアン・レヂイムのサロンを思ふ。デュドファン夫人のサロンから獨立して、その客の凡てを奪つて行つたマドモアゼユ・ド・レピナッス――あの燃えるやうな情熱の書簡を書いた――彼女は決して美人ではなかつた。しかもこの名なく、財産なく、美貌のない彼女が、當時の精神界の大立者を羅致し得たのは、一

にその卓越した精神の力であつた。

内在する美と云はうか、魂の輝きと云はうか、はた、古い言葉を用ゐて、心の匂ひと云はうか……それが最後の仕上げである。畫龍の點睛である。かくして女性は眞に美しい藝術品となる。モダン・ガアルを眞にモダン・ガアルたらしめるのも、またそれでなくてはならぬと思ふ。そのためには、私は敢て女性に望みたい、自制を、勇氣を、そして、あらゆるものを透す愛を。（昭和二年三月）

旅人の言葉

春のあけぼの山邊に住めば
まあ、どんな氣持だらう、
東の空のしらむより
はやくも白く眼をばさまさす、
あちらも櫻、こちらも櫻、
よもの山邊はみな櫻……

ふとさういふ詩の句が、私の唇にのぼる事がある。ふと、誰の作であつたらうと考へてみて、それがむかし自分が作つた詩の一節である事は氣がついて、不思議な氣がした事がある。こんなに、まるで他の詩人の句のやうに、自分の詩句を誦するのは、恥かしい事ではあるが、それほど私の山住みの願ひは強く、ときどき心の中に動く。

海邊の方へ行つてみたいといふ心持もないではないが、近年は、どちらかと云ふと、心は山へ、山へと向ふ。

それにしても、今なほなつかしく、忘れ難いのは、あの伊香保に行つてゐた時の山歩きのたのしさである。

それは五月の末であつたが、山の上にはまだ春が漂うてゐた。見晴らしに上つて、そこから躑躅ヶ丘の方へまはつて、まだ滿開になりきらない躑躅の花を見ながら、ガラメキへの岐れ路まで來たとき、私はふとこの小さな溫泉に行つてみたくなつた。

「どんなところだらう？　伊香保とはすつかり變つた趣きがありはすまいか？」

それは榛名山中の最高峯である相馬ヶ嶽のむかうの山陰にあつて、伊香保に遊び、榛名にのぼる客は多いが、そこから僅か二里しかないこの溫泉に行く人は殆んどなくて、伊香保の人でさへ知つてゐる人のないといふ事が、私の好奇心を唆つてゐたのである。

その左へと岐れた路は、二つ嶽と水澤山との中間に伸びてゐるので、澁川の方から眺めると、一番前に一番高く見える水澤山の裏側をぐるりと廻ると、それにつれて、この山の形がいろいろに變つて、それが象の頭そつくりになるとき、路は丁度上ノ原といふ、船尾の瀧の上にあたるなだらかな傾斜にさしかかる。

雨が降ると、川床になる路が、草原の中をずつと下つて行く。そこまで來たときに、私はふと路傍の草の中に躑躅の枝が突き差してあるのに氣が付いた。いや、そのときはじめてそれに氣が付いたわけではない、躑躅ヶ丘からそこ迄の間にも、二三度そんなにしてあるのを見ながら。格別氣にも止めなかつたのが、そこでふと、それが決して無意味にされた事ではないといふ事に氣が付いたのである。それは一つの言葉ではないだらうか？　おなじ旅人に話しかける或る知られない人の言葉ではないだらうか？

何かで讀んだジプシイの習慣を私は思ひ出した。一所不住の漂泊の民である彼等は、自分たちの通り過ぎたあとを、後から來る仲間に知らせるために、地上に記號を記しつけたり、小石を積み重ねて置いたり、いろいろの事をすると

いふ。そんな事を聯想すると、その紅い花のついた枝を眺めながら、私は何とも云へずなつかしい、旅人らしい心持になつた。

「自分はこの路を通つて行つたのだよ」と、その知られない人も、その花を通して語つてゐるのに違ひない。そして、こんなところの事ゆゑ、それは或る一定の人にではなく、單に後から來るものに語つてゐるのであらう。そして、その躑躅の花がまだいきいきとしてゐるところを見ると、決して昨日ではない、今朝早く通つたのに違ひない。氣まぐれないたづらだとしても、私はこの寂しい山の中で、あだかも誰かの聲を聞いたやうななつかしさを、その花から受取りながら歩いた。

まつたく、そこでは、いくら行つても、私は實際の人間には誰一人にも逢はなかつたのだ。ただ、ずつと下の溪のあるところに、小鳥の聲がするばかりで、後をかへりみると、先刻（さつき）歩いて來た躑躅ヶ丘の高みに隱れて二つ嶽は見えず、つい頭の上の丘の連亙の上に、相馬の山巓がちらと顏をのぞけてゐるばかりであつた。

再び少し上りになつて、落葉松を一面に植ゑつけた原に出ると、もう花の言葉は絶えてしまつた。そして、あらたに路普請をした、掘り返した黑い土が、人里近いことを告げた。この山をめぐるとガラメキだと思つた。どんな處だらう、どんな人にはじめて出逢ふだらうといふ期待が、おのづと足を早めさせる。

やがて、その山路が、そこで盡きてしまつて、私は山の出鼻に立つた。下を見おろすと、兩方の山の迫つて、谷底のやうになつてゐる方へ、かなり急な角度で、路は下つてゐるのだ。そして、杉や檜がその路をすつかり蔽ひ隱してゐる。目の下の樹立の間には、家らしい影も見える。そこにはどんな人が住んでゐるであらうかと、私はまた心に呟いた。

然し、その路へ下る前に、私は暫くその突端に彳まねばならなかつた。それは、そこから一眸のうちに見渡される

上毛の平野の眺めが、私の目を惹きつけたからである。平野の中には右の端と左の端とに、一團の白くきらきらするものが見える。その右のが高崎、左のが前橋の市であつた。その市街をめぐつて、大利根や、烏川は、一條白く、高く盛り上つた地平の果へ線を引いてゐる。

丁度、馬の背のやうな狹い岨路を下ると、樹立は高くなり、水の音が繁くなり、申分のない山峽が現出する。路がやうやくらくになつたところで、山淸水の好きな私は、淸冽な溪水を掬んで、まづ、喉をうるほした。そして、また小一町も下ると、目の前に二三軒の家が現れた。その家はこちらに背を向けて、壁を見せてゐるだけであつたが、ふとその家と家との間に、一人の若い娘の姿が出て來た。彼女は何氣なくこちらを見て、思ひがけぬ旅人の姿を、珍らしさうに見たやうであつた。

私はその娘の家に入つて、そこの離れの座敷で、眞向うに見える妙義から甲斐や秩父の山々を眺めながら、鯉のしほやきで冷たい麥酒を飲みながら、はきはきとよく話すその色の黑い、可愛い娘の話を聞いた。下の室田へ出るよりも、山道づたひで伊香保の方へ出るのが便利だといふ事、郵便は一週間に一度位しか來ない事、冬の間はすつかり閉ぢ籠つてしまふこと……そして、こんな山の中で寂しくはないかと私が訊くと、いいえ、ちつともと答へたが、その娘の心持を私はしみじみ羨ましく思つた。私もせめて一月か二月でも、こんなところに暮したいと思つた。そしたらば、このあこがれの詩も、もつと力強く響くであらうと……

春のゆふぐれ山邊に住めば
なんの憂ひがありませう、
浮世のことはみんな塵、
望みも野心もみんな夢、

花を雲かとながめてくらし
花といつしよに散るばかり。（昭和二年三月）

新線の町

五月ごろ、汽車に乘つて旅する人は、その車窓から靑葉若葉につつまれてゐる一つの町の、靜かな爽かな小景を數多く印象するにちがひない。

この大都會でも、數少い公園、小公園の樹々が、もしくはアスファルトに沿うた銀杏とか、鈴懸とかの並木が、人々の手入れによつて、その靑葉を塵埃の中に開いてはゐるが、五六日雨でも降らないと、目にも見えない白つぽい色をその葉おもてにたたへてしまふ。

それにくらべると、淸い空氣に惠まれてゐる田舍の町の木々は幸福だ。人々の手入れをあまりうけないでも、自由にその枝を張り、その葉を豐かに盛り上げて、小さな町をかこんで、爽かに美しくそよいでゐる。

旅する車窓から、移り變る風景に親しむのは、それがはじめての土地であればなほさら、微かながらに捨て難いたのしみである。野や村はもとよりではあるが、小さな町々の眺めには、また別の云ひ知れぬ情趣がある。曾つて私は、中央線で、信越線で、また奧羽本線で、さうした風景を屢々見た。家々がみなその横の空地とか、裏庭とか、前庭とかに持つてゐる梅の木、その梅若葉、杏の木、その杏若葉、桐の木、その桐若葉、櫻の木、その櫻若葉、なほ灌木のそのかずかずの靑葉の若葉が、低いものは低いものと、高いものは高いものと相應して、一つの集團をかたちづくつて、風來ると共に、そのそれぞれの特色をもつて搖れ動くのである。

それらの中で、とりわけ人の目にあざやかに印象するのは、大きさに於いては欅の若葉であり、楠、樫、柏などのそれであり、優美な點では、何と云つても楓の若葉である。また、木ではないが、芭蕉のわかばなども、すつくりとしてゐて美しく思ふ。そして、一つの町には、それらのものが大抵そのところを占めてゐて、さながら一つの植物園をかたちづくつてゐる。そして特に小さな町で、この眺めが感興を惹くのは、おもふにその人家との照應のためであらうか。あまりに木ばかりであると、かへつてそれ程にも思はず、目にもつかないかも知れない。汽車の窓の眺めは、單調を最も忌む。いつか早春に秋田へ行つた折りの、途中の雪また雪、どちらを見ても雪ばかりの眺めには、全く侘しい思ひをした。

ところが新緑の折りは、さうした北の國へ行つた方が、かへつて一層おもしろい。それは春のさまざまの姿が眺められるからである。若葉靑葉の東京をたつてずつと遠く山の國へと入つて行くと、そこには山櫻が咲き、躑躅が咲いてゐる。先年北陸へ行つたときなど、五月であつたが、泊あたりの停車場には、美しい山櫻の滿開が見られ、さらに金澤まで行くと、その兼六公園には一杯の霧島躑躅、藤の花の紫の房が池水に垂れて影を涵してゐた美しさは、今に忘れえない眺めである。私はそれから片山津に行き、山代、山中に行つた。柴山湖のほとりで靑々した蘆の中にない た行々子の聲、こほろぎ橋の翠色にしたたる雨の雫、加賀の平野を飾つてゐた黃色な菜種、むらさきの紫雲英、かなたには白山の美しい眞白な姿……今一度行つてみたいと思ふ。

私の故鄕の米子といふ町は、平凡な町ではあるが、新綠の町としての眺めは、必ずしも無くはないやうに思ふ。いつたいに、山陰の旅する人は澤山のトンネルの事は別としても、因幡から西の砂丘の連亙には、雪國の雪にも近い侘しい思ひをするかも知れない。が、湖山池、東鄕湖などの湖水は、幾分その單調を慰めるであらう。そして、大山の麓まで行けば、更に多く目をはたらかす事ができるであらう。殊に、淀江といふ驛のあたりで、右手の海に左の方か

ら突出してゐる長い夜見ケ濱の松林ばかりの平砂のふちに、五里に亙つて波打際の波が白く線を引いてゐて、その上に丁字形をなして、かの美保關をもつてゐる出雲の地藏岬の山々の連つてゐる景色を見落してはいけない。私はあれをすばらしい景色だと思つてゐる。然し、更に、中海に沿うて出雲に入つて、宍道湖を見ながら松江へ入つたならば、新綠の町の美しい眺めが遺憾なく味はれるであらう。

泥くさくない水鄕——松江はいつも私の心のあこがれの町である。（昭和二年四月）

郊外散策

地圖をひらいて、東京を中心に、一つの圓をゑがいてみる。そして、この圓線の附近を、ひとわたり歩いてみたいと思ふ。氣がるな郊外散步の心で……

×

以前、私はよく郊外を步いた。たつたひとり、飄然と、長い町を、何處までも何處までも步いて行く。と、家が次第に田舍びて來て、閑散な町はづれに出る。次いで綠の畑に出る。それには小さな溝川があつて、子供達が四五人、騷いでゐる。

野の風が爽かに吹いてくる。まるい丘、まばらな林、その間を通る自轉車、荷車——そこらの草生にすわり込んで、私はぐつと新しい空氣を胸一杯に吸ふ。

此頃になつて、そのまだ家を持たない前の、自由な郊外散策を思ひ立ちつつ、身邊多忙、さうした遊步の機會は、極く乏しい。たまに郊外の友人をたづねる位なもので——

然し、今は郊外もすつかり變つた。私が地圖に圓線を劃してみようと思ふ、その東京の四周は多くは、大工業地となり、市民の住宅地は、なほ遠く遠く武藏野のはるかむかうに逸出して、田園都市、スレエト葺きの文化住宅――かうして恐ろしく大きい、平面的な大都市が出來ようとしてゐる。

×

東方。

深川、本所方面は橋が多い。震災前でも、至つて小さな家がゴチヤゴチヤと並んで、どの町もどの町も、何の特徴もない低地一帶、その感じは灰色であつた。そして、一寸大阪の町でも通つてゐるやうな氣もした。停留所の名も耳馴れない。山の手から來たものは、すつかりまごつく。

月島の方は、私はよく知らない。ただ一度、月島を渡つた記憶がある。小雨のしよぼ降る秋の時分であつたかと思ふ。滿潮のなみなみと川に一杯にたたへてゐる水面を、小舟はゆらりゆらりと漕ぎ出される。舟の上には美しい蛇の目の傘が傾いてゐる。そして、小僧さんなどは、頭からしよぼしよぼと濡れるがままに、荷物をかかへて腰かけてゐる。上流の方には、大きい橋が遠近に二つ三つ見える。海の方には、左の方にお濱離宮の森が、こんもりと雨にうるんでゐる。

押上からは千葉行の電車が出る。それに乘ると、すぐもう江戸川を渡つて、市川だ。船橋、幕張、みんな東京の郊外と云つてもいい位。

市川はむかし、萬葉時代には、港であつて、その山の下あたりにまで、海は入つて來てゐたのだといふ。そして、その海に投じたといふ眞間の美少女、手奈兒の祠は、今停留所のすぐ近くにあつて、昔の繼橋の名殘は、かたばかりであるのに、その祠のみ異様にけばけばしく、その上、お産の神樣とあがめられてゐる。私にとつては、一樹の老杉

のもとに、又は葦とに包まれた一つの塚を、古井戸を、荒廢した野の片隅に見出したいものを。

町から里見公園まで數町ある。折角のいい丘上の眺望地、「櫻の陣」につらなる一帶は、軍隊に占められてゐて、里見公の墓所であつたと思はれる後方の一部だけが、わづかに私達にゆるされてゐるが、この高みから、江戸川を見る眺めはわるくない。私は東京に出て間もないころ、早春の日に此處に遊んで、この川邊の草の上で、即興の詩を作つたことがある。

船橋は市川の次ぎ、海まで行くには、數町歩かなくてはならない。海は遠淺で、汐入の川が方々に流れてゐて、磯くさい匂ひが鼻を打つ。蝦や、蟹がとれると見えて、漁師の家では、桶からすくひ出して數へてゐたりする。

この海邊から見ると、東京灣は鏡のやうに圓く見える。草の土堤が海の方に長くつづいてゐる。時々、都會生活から解放された氣持になるのには、これ位の距離が一番いい。

町には市川同樣、かなりの料理店が多く、また旅館も多い。それには當然の理由があるのだが、それでも市川、船橋などには、幾分純江戸風なところが見えて、落着いた氣分のするのがいいと思ふ。

それから、偶然ではあらうが、この船橋には、野村隈畔氏が、その死の前に愛人と泊り、また、有島武郎氏も、おなじくその愛人とここに泊つたと傳へられる。かうして、この平凡な船橋の地も、多少とも文學史的の意義をもつに至つたのを、私はその海のほとりを歩きながら、ふと思つた事がある。

×

北方。

上野公園の高臺が、ずつと北の方に延長して、王子の方にまで、一帶の丘陵がつらなつてゐる。この丘陵地には、今はすつかり住宅が建ち並んでしまつたが、昔は雜草に埋もれてゐた處だつた。

東京から若い女達が、櫻草の花を摘みに行く浮間ヶ原、そこに近い荒川の蘆荻の生ひしげる水邊の道をおもふ。小草の間に、そこにもここにも可憐な櫻草の花が咲いてゐた。

五色の櫻の咲く荒川の堤は、以前は澤山の人出に、雜沓を見せてゐたが、今は新しい改修工事のために、堤も花も臺なしになつた事と思ふ。遠く熊谷堤などはとにかく、近くの櫻の堤は、上野から常磐線の汽車に乘つて行くと、すぐ車窓の下に見下す江戸川上流の堤の方がいいやうである。

そこには松戸といふところがある。一寸住んでみたいやうなところであつた。常磐線も、まだ我孫子までは、東京の氣分が脈打つてゐるやうな氣がする。手賀沼は鰻の產地、東京へ澤山出て來るといふ。このあたりから土浦の方、利根川、霞ヶ浦の方への旅、所謂水鄕の旅は、どんなにいい旅であらう。

この前、信州や上州へ行く度、この關東平野を、北武藏の平原の趣きを、平凡にも單調にも思ひながら、何となく捨て難く思ふ心も出た。北から來て、東京が次第に近く、川口といふところへさしかかると、川の砂洲に草がところどころに生えてゐて、淺い水が流れてゐる。荒川の上流で、少し上ると、先に云つた浮間ヶ原になるのだ。單調な野の中に、ふと川があつて、汽車は水に沿うて走る。雜木林が次へ次へと現れては去つて行く。秩父長瀞といふ景勝の地もある。そこへも行つてみたいものだ。

×

西方。

そちらへは、私は比較的親しみが多い。

井の頭公園へは度々行く。この初夏も、親しい靑年と、一日遊びに行つた。櫻の若葉が美しく、料亭には竹の子飯の旗が、微風にひるがへつてゐた。杉の林は奥深く茂つて、木の間の路を歩いて行くと、一種重い凉しい植木の感觸

が心に迫り、日向には日に乾く草葉の匂ひがかんばしかつた。

水面には、ぶくぶくと脂ぎつた水の泡が湧いて、そのまはりには、蝌蚪が、黒い綿をちぎつたやうに、もじやもじやしてゐた。ここかしこに、圓い水草の若葉がいい艶を見せ、睡蓮の花も點々と咲いてゐた。

池のまはりを歩いて行くだけにも、かなりの道程がある。池の中程は水が荒い。そして、かなり急に流れてゐるらしい水勢が見える。こんな武藏野の中央に、土地から多量の水の湧くのは、それだけでも、何だか古い昔の傳說が思ひ浮ぶやうに思ふ。

この附近の、玉川上水の土堤を、秋の時分に歩くと非常にいいといふ事であるが、震災の年の十月の末、ここに來て見た時には、薄が一杯に生ひ茂つて、それがもうほほけて、晩秋の感じが切に身に沁みた。

中野なども、數年前に友達と一緒に、そこの新井の藥師に遊んだ頃は、まだ家も疎らで、鄙びた感じであつたが、今は殆んど市中と變らない。そこから高圓寺、荻窪あたりへかけては、一帶の住宅地、赤い瓦の小文化住宅、所謂モダン・ガアルの姿が繁々見られ、カフエェは軒並といふ有樣だ。この西郊に住むのだつたら、もつとずつと引込んで、八王子の西、或ひはもつと北へ入つて、靑梅あたりと思ふ事もある。

中央線の汽車が八王子からずつと甲州の方へ入つて、桂川の流れに沿うて、だんだん山にさしかかり、與瀨とか初狩とかいふ山峽の村へ入ると、山と山との狹地に、高い橋が懸かつてゐる、その溪流の眺めは嬉しい。更にその奥、猿橋などへ、秋の頃行けば、散りがての紅葉、うらがれた山草の間に、野獸の跡も見られるやうな氣がする。木の枝に隱れた山路の苔をふみ、淸水を渡りつつ歩くのは、ほんとに樂しい遊びだ。

多摩川の沿岸へは、晴れた秋の日、京王電車で、調布のそばの多摩河原へ行つて、美しい河原の水を賞した。そこには鮎のおいしい料理を食べさせる料亭があつた。河岸には、鮎漁の時の屋根船が點在してゐた。對岸には、櫻を植

ゐた長堤があつた。おなじ多摩川でも、澁谷からの玉川電車で達するのは、ずつと下流になる。そこの河原は、上流の方ほどよくはないが、人の出はこの方が多いやうで、初夏の螢の時分などには隨分に混む。

今度ついた小田原急行電車が通るのは、丁度この双方の中間にあたる。この電車の沿線は、一番爽かで氣持がよい。多摩川を電車の線路の眞直なものも愉快だ。その沿線に住んでゐる友達をたづねて、一緒にまたその電車に乘つて、多摩川を渡つて、そこの登戸といふ處の野道を歩いた一日の散歩は、樂しかつた。遊園地の丘の上から見下した村の眺め、二つの村をかぎる河流の上に架つた橋の眺めも、氣に入つたが、その丘を下りて、村の本道へ出て、私達はその橋を渡つた。そのとき乘馬を愛する友は、この道をよく馬で通るのだと云つた。

その日の電車にも、若い男女の姿が見えた。彼等は私達と相前後して、遊園地を歩いてゐた。どこでも東京の近郊はさうであるが、特に、この多摩川の沿岸には、若い二人連れの姿を、河原や、木かげや、草畑のここかしこに見出す。戀を語るために、樂しい一日を味はふために人目をさけ出かけて來てゐる、若い戀人たちの幸福の妨げをしない事が、私などのやうな孤獨な散歩者の寂しい義務である。

目黒の方には、私は殆んど行つた事がない。きまり切つた雜木林、丘陵、赤い瓦の西洋館、靑い草地そして小工場。そんなものが、やはり同じやうに連亙してゐるのであらうと思ふ。競馬場は有名だが、それも私は知らない。またその方面には、田園的な花園が方々にあるらしい。いつか秋のいい日にでもゆつくり歩いてみたいと思ふ。

×

南方。

そちらでは、私は今のところ、森ヶ崎を知つてゐる位なものだ。そこも長いことゐたといふわけではない。また近年の事でもなく、ずつと以前、もうかれこれ十二三年も前になる。仕事の上で關係のあつた人が、ここに來てゐたの

で、その手傳ひに三四日行つてゐたのにすぎないが、森ケ崎もその頃は、まだ世にさほど知られず、どちらかといへば閑靜な、保養地であつたが、この頃では京濱の遊客にすつかり荒らされたやうだ。文壇の人々もかなり澤山行つては、原稿を書いてくる處となつてゐるらしい。

ここの海から、一葦の水をへだてて相對してゐるのは羽田だ。俗臭紛々たる點では、いづれ劣らずで、穴守稲荷といふのがあつて、開運出世の祈願のために、京濱からの參詣人で、なかなか混む。祠の前後左右何千基の鳥居が立つてゐる。また、自分の名を書いた燈籠を立ててゐる。相當知識階級の人にも、その信者があるといふ事だ。人間といふものは、いくら高等教育を受けたところで、やはりそんなものであらう。

そこから海へは二町あまりである。左の方に森ケ崎が見える。右の方には、横濱の方が淡く浮んで見える。海は汚ない。こんなところで海水浴をするよりも、家で盥で行水する方がましだと思ふ位だが、やはり人間たちは喜んで泳いでゐる。

京濱電車の沿線では、花月園のある鶴見は人がよく行く。私はまだそこで下りた事がないが、線路からその宏大な屋根が見える總持寺には、行つて見たいと思つてゐる。いつか禪をやつてゐる友人に誘はれたが、たうとう行けないでしまつた。

一體に京濱間には、もう間もなく、立錐の餘地もない程に、家がたちつらなつてしまひさうだ。今も、到るところに大小の工場があつて、その煙突は盛んに黒煙を天に冲してゐる。そして、その黒煙と一緒に、勞資の鬪爭が生れ出る。勞働爭議は、多くこの方面で勃發する。芝浦、大崎などは、これからの階級鬪爭の、東京での淵源地となるであらう。

こんな風に書いてみると、東京の近郊は、私の知つてゐるところより、知らぬところの方が多いやうだ。大切なと

ころが、少しも頭に浮んで來なかつたりしてゐるやうに思ふ。それはこれから歩いてみるのだ。（昭和二年六月）

水邊雜記

廣重の水邊

水のほとりのなつかしさよ。池の水ぎは、湖水のほとり、川邊、海邊……

むかうには、木更津や富津あたり、遠くはるかに内房州の、館山、北條邊の山々らしい遠影の、靉靆とかすんだのを頂いて、畫面の三分の二を、まんまんと湛へた薄水いろの水。それは廣重の江戸百景のうちでも、とりわけ私の好きなものの一つ、『砂村元八まん』である。

それを見てゐると、何とも云へずいい氣持。心は江戸の春に遊ぶ、江戸の内海に——私はわざと東京灣とは云ひたくないのである。

うす水色の波の上に、空が、廣重の靑で、濃く一線、擦つてゐるなつかしさ。

私の心は、水鳥のやうに——かの水ぎはを慕ふ鳥のやうに、その畫面の上をゆき來する。

ずつと手前には、花が、櫻の花が滿開、花に隣つて、鳥居のあたまが見える。そこらの地内を、旅人が——旅人と云つても、遠國の人とは見えぬ、この參詣にさへ草鞋ばきでなければならない江戸の町人が、二人三人、

「なんといい花ではござりませぬか」

「さやう……これだけの櫻は、一寸ありませぬナ」なんかと話し合ひながら、長閑な嘆賞をしてゐる。勿論、この町人たちは花だけに心を取られてゐる。

ゐる。

然し、廣重は、なほ水をさし示して云ふのだ、

「いい水ではありませんか、それにまた、この蘆の芽はどうです……」

陸地よりも廣い砂洲の中に、その薄みどりの蘆の芽が、波のやうに、ひたひたと生えのびて、畫面を美しく彩つてゐる。

「いい蘆ですね。この蘆の芽を見てゐると、私はたまらなく嬉しくなるんです。疲れが忘られてしまふのです。どうしてかうもいいところに目をおつけになつたでせう。ほんとに有難いとおもひますよ。この蘆の根の下には、しみ込んでゆく日ざしの温かさや、蝦だとか蝌蚪だとかの動いてやまない物かげやが、私には聯想されて來ますよ。」

廣重はただにこやかに笑つてゐる、何とも答へないで……

あの頽廢期の江戸末期。私はその時代があまり好きでない、その空氣も、その文學も。京傳、三馬、一九など、昔は好んで讀んだ時期もあつたが、不思議と二度くりかへして讀んで見ようといふ氣が起らない。文化史的に見て、興味がなくもないが、現在のやうな透徹を愛するやうな心では、純粹の文學鑑賞には堪へられないものが多いやうに思ふ。少くとも、本質的に、私などの世界とはかけ離れたものである。

然るに、美術の方だとさうではない。中でも殊に、廣重に至つては、私は文學に於いて失つただけのものを、ひとりでかへしてくれるやうな氣がする。

廣重には、少くとも、私の好きな詩があるのだ。廣重に就いて、私は少しも專門的の知識がないので、しつかりした批判も鑑賞も、もとより出來はしない。ただ理由もなく、眺めて樂しむだけである。けれども、藝術の鑑賞には、それでも格別不都合はないやうにも思はれる。その上、貧書生の身分として、初版物などは到底望む事は出來ないのだから、粗末な複製で見るに過ぎないが、それでも廣重の詩に觸れる事は出來るやうに思ふ。

廣重は實によく水邊をゑがいた。私の知つてゐるだけでも、合歡樹の花さく鐘ヶ淵、水鳥の浮く井の頭、また、近江八景や、嵐山、男山、その他、木曾街道の繪の中には、いくらでもそれがある。
東海道は島田や新井などもあるが、おほよそ海邊のそれである。それらにも傑作は多いが、私にはやはり川のほとり、沼のほとり、湖水のほとりに、草をかき、鳥をかき、家をかき、人をかきしたものに、やはらかな情緒がうかぶ。
水淺うして草青し。
かういふ景色のなごやかさ。女性的であるとしても、何となつかしい靜けさ、やすらかさ。
心はなごみ、やすらひで、夢のやうな水の面にただよふ。
水の畫家としての廣重を、私は慕ふ。

鳥羽

山邊で、山の頂上で、ひと月ふた月送りたいと思ふ。
それも私の心。
水の上で、水のほとりで、水に親しい日々を過したいと思ふ。
それも私の心。
海邊に、いな、湖水のほとりに生れた私は、水のほとりは、もともと珍らしいものではなかつたが、都に住んで二十年近くにもなつては、その氣分が今はなつかしくなつたとても、不思議ではないであらう。
私のいふ海――中海は、正確に湖水と云へないやうな氣がして、おづおづ湖水と云つてゐた處、私の文を讀まれた湖沼學の大家の田中阿歌麿子爵が、中海もやはり湖水である事を懇ろに教へて下さつたので、今は以前の遠慮が我な

がら可笑しく、大威張りで湖畔の人と自分を呼ぶ。

それほど私は湖水が好きだ。

湖水のほとりに、湖水をながめる家、そのあるじ。

それにもましていいと思ふのは、湖上村の住民である。

湖上村とは、湖水の上に張出して家を建てつらねた村の事。いつかある獨逸書で讀んで、非常に私は興深く思つた。もつとも、實際はそれほどよくもないかも知れないが、少くとも、夏は極めて涼しいであらう。

湖畔や海邊には、一寸さうした感じのする宿がよくある。

中でもいちばん好ましく、忘れられないのは、郷國の東郷溫泉。

東郷湖畔のそこの宿の離れは、湖上に突出してつくられてゐるので、床の下を水が波打つて、てすりから下を眺めると、座敷の下から魚が出て來て、むかうの方へ泳いで行く。夜は枕の下に水の音がする……ひたひた、ひたひたと。

それは多少船の上の感じである、ただ動かぬ船である。

動く船、海の上の船。それには、昨年の夏、久しぶりに私は乘つた。

廣重の繪にも美しく描き出された志州鳥羽。それは長い間私のあこがれの地の一つであつたが、七月、そこへ遊んで、三日あまりの夢のやうな日をすごした。その一日、宿の前から發動機船に乘つて、島めぐりをした、その一日の淸遊の樂しかつたことよ。やとうて來た二人の海女は、すぐ近くの島かげで、しばらく鮑や榮螺などを取つて見せてくれた、その垂直に水に飛び込む姿、二本の足が、二つの足のうらが、魚のやうに水の中に消える一瞬の印象、それから、水を出て吹く息の口笛――みな忘れ難いものであるが、それがすむと、海女たちは赤い身體を潮風に吹かせながら、日のよくあたる小島の方へと、自分たちの小舟を漕いで行つた。

それから、私の乘つた船は、菅島の方へむかつた。目の下の波のゆらめき、靑い反射、水光――底の深い、箱のやうになつた船の中で、うつり動く島かげを、島の上の家々を、島と島が岐れて、べつの島のあらはれる眺めを、海も靑、空も靑、島の上も松のみどりの爽かさに、うつとりとして見入つてゐると、やがて船は鯛の浦と云つたか、鯛を飼養してゐるところの石垣の下に着いた。梯子をつたうて上にあがると、おもしろいところで。石垣にかこまれた半圓形の中は、大きな生簀である。

その石垣の上をつたうて、島の方の側にある茶店へ行つてやすみながら、この珍らしい池の面をながめやると、潮のひいてゐる時で、水面はせまく落ちてゐる中を、いろいろな魚が、不規則な行列をつくつて、目の下を通つて行く。

赤い鯛の後から、靑い魚が行く。その後からは、菱形に外套を着た魚が、その廣い兩袖をぴらぴら動かしながら、悠然と行く――

水の上

鳥羽をたつて、私は四國へ渡つた。

大阪の天保山から、今度は本當の汽船で、德島行の汽船に乘つて、實に何年ぶり、いや、二十何年ぶりで、この航海の氣分……瀨戸内海や、玄海灘を、幾度びとなく往來した少年時代の流浪の氣分が、久しぶりで、私の心に蘇つて來た。

あの汽船特有の臭ひ、船のきらひな人ならば、それだけでもう堪らなく、船暈を感ずる臭ひも私はなつかしく、私はめづらしく、船室を上つたり下りたり、甲板を歩いてみたりした。

船室の夜は、一種特別な氣持で、汽車の中などよりは、もつと落着いて眠れもするが、船の絶えざる動搖が夢を、あやしくゆすぶつて、港々の荷物のあげおろし、物賣の聲々が、佗しさをいやまし、それが幾晩もつづくと、舷を叩き、船窓に碎けちる、波の音が、波のしぶきが、佗しさを堪へ難くする。

ハイネに『船室の夜』といふいい詩がある。船中の夜の氣持をいみじくも歌つてゐるが、それは戀人のやるせない思ひである。

私の頭に深く沁み込んでゐるのは、たよりない孤獨な少年の、前途も暗く覺束なく、星を、波を眺める力さへなく、おのれの惱みにあまつて、毛布の中に深くくるまつて、搖れる心で、搖れる身で、あはれに咽び音に泣き寢入りする佗しさ、はかなさである。

　海に寢て
　つれなき波の
　音きけば、
　世も憂しや
　人も憂しや、
　いかによからめ
　このままに
　消ゆる身ならば。

その氣持は、この詩のやうであらうか――

いや、もつともつと暗い、殆んど歎ひ難いものであつたやうな氣がする。

それでも晝は、瀨戸內海だと、甲板へ出て、うつり動く島山の繪のやうな眺めに、無心に見とれて、ときには、こんなところを、一隻の輕いヨットを自由に走らせたなら、どんなにいいであらうと思つた事をも、かすかに私は覺えてゐる。

それは流浪のあはれである。少年の悲哀である。

今はとにかく、流浪ではない、家あるものの旅、もう泣けなくなつた一人の男が、おなじ船室で、藝者づれの大阪人の一團が、めいめい腹卷に全財産をふくらませながら、空騷ぎに騷いでゐる姿を、無表情の眼で觀察してゐるのであつた。

夜明けに、小松島に着いた。曉の微光の下に、ほのかに浮び出た四國の山かげは、靜かに美しかつた。その港の棧橋と停車場との續いてゐる間には、氷店が店を張つてゐる、その前で、船を下りた德島人たちが、朝のすき腹に、何とうまさうに氷水をしたたかつぎ込んでゐた事よ。

然し、船は往きよりも、神戸までのその復りが、より樂しいものであつた。

今度は晝の汽船とて、甲板に腰をすゑて、淡路島の島山の麓を走る一線の路をぢつと眺めてすごした。

その何時間は、海に私を親しく、親しくした。

そぞろにモオパッサンの『水の上』を思ひ浮べつつ、水の上に水を享樂しつつ、ヨットでなくとも、私はこの航路をもつと往復したいと思つた。（昭和二年七月）

夏の憂鬱

紫陽花の花の咲くころになると、とりとめのない憂鬱におそはれるのが常だ。あの花のいろが、薄藍いろから、茄子いろに、また藤紫にと變つてゆくにつれて、私の憂鬱も、一層濃く深くなるやうに思はれる。

梅雨のねつとりした雨が、長けた綠をさらに黑ずませ、座敷の隅々がほの暗く、むかひ合つて話してゐる人の顏が靑白く浮きあがつて見えるやうな頃は、話もとかく濕りがちである。

けれども、私にとつては、それがいちばん憂鬱な季節ではない。

すつかり夏になつて、かつと暑い日が照り込むやうになると、一時のぼせたやうな狀態になる。梅雨のころからかけて、その頃には、發狂、自殺、情死といふやうな記事が、毎日のやうに新聞に出る。

かうした氣候の影響は、思ひの外强いものである。病弱な人は、その壓迫に堪へられないであらう。また、さまで弱くはなくとも、ふだん無理をしてゐる人は、そんな場合に、ふだんの無理押しの破綻を示す事が多い。

しかも、多くの人は、いろいろと無理をしなければ生きて行けないのである。それで、私なども、さうした記事を見ると、いつも人ごとならぬ痛ましさを覺えずにはゐられないのだ。

夏こそ、今の私にとつて、いちばん憂鬱なときだ。それは夏の盛りに、早くも秋の憂ひが胸に忍び入るのであらうか。嘗てはさう感じた事もある。が、今では夏そのものの中に、人を憂鬱ならしめるものがあるやうに思はれる。

街路の上に、ギラギラと照つてゐる日光を見ただけでも、憂鬱が重く心にのしかかつてくるのだ。

勿論、若い潑剌とした心と身體とには、この夏の、この酷熱は、かへつて最もこころよい刺戟であり、リフレッシュメントですらもあり得るだらう。

少年のときをかへりみると、自分などでも、夏はずゐぶん樂しかつた。今も、元氣な少年たちは、夏やすみ中の水

泳や、山登りを、どんなにうれしがつてゐるであらう。

年々登山熱が昂まつて、この頃の松本、大町、それからずつと上つた上高地あたりは、さういふ人たちのために雑沓を來す。今に、白馬や燕の頂上は、砂糖のかたまりに蟻が一杯たかつたやうに、人間の頭で眞ッ黒になるかも知れない。

この夏のはじめに、信州からの歸りの汽車で、輕井澤から乘り込んだ一團の若い登山家たちの、すつきりした姿と、氣持のいい話しぶりとを思ひ出す。

そんな人たちの樣子を見てゐると、現代靑年の頽廢などいふ事も、老婆心からの杞憂に過ぎないやうに思はれてくる。見てゐても氣持のいい人たちであつた。

それに比べると、自分などは、もう旣に戰ひ疲れた人間だと、しみじみ感ずる。夏の盛りに、理由のわからぬ憂鬱などにとらへられるといふ事は、生理的にも、心理的にも、決して喜ぶべき徵候ではない。

これといつた纏まつた仕事一つしないうちから、もうこんな疲勞の徵候を示すやうでは、心細い事である。

此頃、同年配の文學者の身の上に、しきりに痛ましい異變が生ずる。それを聞くたびに、心は一層の憂鬱に沈められる。根本に於いて、それらもみな生涯の危機と云はれる三十臺の後半期に於ける疲勞と衰へとを示すものであるかも知れない。それを思ふとうたた寂寞の情に堪へないものがある。

ただ、それらの人々は、旣にその仕事を成し遂げもし、また、それに相當するむくいをも得てゐる人である事は、この際、せめてもの慰めとすべきであらう。

然るに、まだ何一つ誇るに足る業績もなく、自分に與へられた一票を行使もせず、自分の聲を出し得られないでゐる人間は、死ぬ事が出來ない、死んではならない。

だが、また、それゆゑに、その聲を思ふがままに出す事を得ないがゆゑに、たふれた人もない事はなからう。その咲くべからざる時に咲かうとした花は、つぼみのうちに萎れなければならぬ。

折れたまま咲いて見せたる百合の花――これは北村透谷の自況の句である。だが、透谷は眞に咲き得た花であつたらうか。私にはその悲劇的未完成が、透谷の生涯の意義であるやうに見える。

最近流行の各種のチイプ・エディションには、『北村透谷集』が、必ずそのはじめの方に刊行される。それを見ると透谷は謂はば時代の中へ復活しつつあるやうに見える。そして、それは丁度獨逸に於けるフリイドリッヒ・ヘルデルリンの運命と同じやうにも思はれる。

戰後の獨逸に於けるヘルデルリンの持てはやされ方は大變なものである。しかも二三十年前はどうであつたらう。最近、北村透谷集を刊行した岩波文庫が、その範に取つたレクラム文庫などでも、ヘルデルリンは、昔はいはゆる星一つの薄つぺらな詩集が入つてゐただけであつたが、今ではそれを廢棄して、あらたに星五つ位の完全な全詩集を出してゐる。

これなど、ヘルデルリンに對する一般の評價の變動を最もよく證明する事實だと思ふ。文人に對する評價などは、その生前のみならず、死後も二十年や三十年位では、決定するものではないのだ。

明治文學個々の評價なども、まだ決して確立されてはゐない。いはんや、大正の文學をや。

北村透谷に對する最近の出版者の待遇に暗示されて、漠然と、透谷がその在世當時に、一世を動かし、一世を指導した文人であつたやうに思ふ人あらば、大變な誤りである。高山樗牛などとは、全然ちがふのだ。

透谷の當時の社會的地位は、その死が新聞紙上に六號活字でわづか二三行位で報道されたにすぎないといふ事が、それを最もよく證明すると思ふ。

不遇の文人をおもふとき、私はいつもまづ透谷を思ふ。然し、實際は透谷以上に不遇な文人はいくらもあつたであらう。島崎藤村氏のやうな友人をもつてゐただけでも、透谷はそれらの人々よりは好運でなければならない。

現在の透谷の復活といへども、一に島崎藤村氏のためであるやうに、私には見える。内面的に云つても、島崎氏の完成によつて透谷の意義は一層深まつたやうに見える。氏がゐられなかつたならば、現在の透谷は、もつともつと無視閑却されてゐる事はなかつたらうか。少くとも、いつぞや武藤直治氏の歎ぜられた石川啄木のやうな輕視を受けはしなかつたであらうか。

生前不遇であつた文人は、死後も依然として不遇であるといふ事は、信じたくない事であるが、然し現在の我國では、極めてあり得べき事である。ジャアナリズムの時代には、眞のクリティシズムは、その權威を樹立するを得ないと考ふべき理由が多々あるのだ。

然し、たとひその死後にいかに高く評價されようとも、そんな事は、何の慰めにもならない。目に見えぬ力に押されるがままに、ただ、前へ前へと進むばかりだ。刀折れ、矢盡きるまで戰ふのみだ。これが不幸なる文人の宿命である。

然し、私の憂鬱はそんな文人の運命などを考へるがためではない。憂鬱であるから、自然さうした暗い事を考へるのである。

今、湘南の海の中には、魚のやうにピチピチした生きのいい身體が、人魚よりも自在に波をくぐつて、泳ぎまはつてゐる事であらう。さわやかな海風、強い日光、きらめく波――その中に動いてゐる無數の頭、モダン・ガアルの斷髪もあらう、オール・バックもあらう。そして、夏の夜の海邊には、禁斷の戀もささやかれるであらう。

そんな事を想像してみても、海岸へ行きたいといふ氣がしない。夏のあひだは、あまり外にも出たくない。家の中

で、好きな書物でも讀んでゐるのが、最も自分に適した銷夏法であるやうな氣がする。

だが、讀書も退屈である。一日讀書に耽つてゐると、心は一層重く沈んでくる。知識といふものは、全く、際限がないものだ。そしてしまひには、書物の中のあらゆる賢い智慧も、結局、益のない饒舌にすぎないやうに思はれてくる。他のあらゆる美味と同じやうに、書物もあまり多く貪るべきものではない。憂鬱なときの慰めと思ふものが、かへつて一層の憂鬱の種となつてしまふ。

讀書に疲れた人の悲しげな眼付をおもふ。あるとき出會つた、すぐれた學者の眼付をおもひだす。

考へてみると、私の憂鬱も疲勞も、一半は讀書から來てゐるやうにも思はれる。ほしいままな快樂を追うて困憊した蕩兒の心は、悲しくやるせないものに違ひない。彼等がたやすく情死などをするのは、勿論、經濟的事情に迫られてであるには相違ないが、一つは、その疲勞のはての憂鬱が、その結末を早くつけるように促す點もあると思ふ。あくなき知識慾に驅られて、書物の間に放蕩を續ける精神上の蕩兒の運命も、また危いものである。

私の憂鬱を癒やすものは、やつぱり生きた人生の中に突入して、生きた心臟の鼓動を聞く事であらうか。然し、自分の心を轉換するために、外部的事件を要するのは、常にその心の弱い證據である。（昭和二年七月）

秋の夫人

秋　隣

秋、いつものやうに、目に見えずして近づく秋知。

知らないものを知りたいと思ふ願ひ、觸れてゐないものに觸れて見たいと思ふ願ひ、行つてゐないところに是非行

つてみたいと思ふ願ひ……
知つても、觸れても、行つて見ても、驚くほどの事もないのに、やつぱり飽かず、なほその上をとくりかへす。
秋はかうしてまた、いつの年でも、人の心を誘ふ。
季節へのあこがれ、それがいつまでも薄らがず、年々の經驗は、いつも新たに繰返される。
秋の風物としての、雲、風、花、水、雨、それに蟲、鳥、また野菜、果物（くだもの）……
いつもおなじくて、しかもおなじくない、秋毎のおもしろみは、年とともに、一層深く味はれる。
若い心で、粗くせはしく、惜しみなく嚙み捨てたものを、よりこまやかに、しみじみと嚙みしめて、やや老いた心は、ゆるやかに深く味はふ。
秋光九十日、この間の自然の相（すがた）は、その微妙なニュアンスは、デリケエトな、心の美食家にとつては、年毎に、日毎に異つて見える。
いつの年であつたか、夏八月、ある寂しい田舍の草徑をひとり歩いてゐて、葡萄畑のつらなるところで、繁葉のかげに房々と垂れてゐる綠の實を見て、ふとわれ知らずつぶやいた。
「秋隣……」
秋隣とは、たしか俳諧の季題であつたとおもふ。
立秋、新秋、初秋――そんなに云つただけでもすむ、が、それをもつと靜かに、いかにも、秋が日毎に歩み寄るやうに、秋隣とは、いかばかりかおもむきが深く味はれる言葉ではないか。
この言葉こそ、私の秋への思慕の心を、そのまゝまに現はしてくれるやうな氣がする。
秋が隣にやつて來た、秋はすでに隣人……こんなにも思へる、そこに人間的な親しさが湧く。秋はくる。隣から、

さて、何處へ、自分の上へと……

それは風からか、草からか、冴えた夜空の銀河からか、はた、花咲きそむるコスモスからか、紫の色濃き市場の葡萄からか……

冬と春とのあはひ、春と夏とのあはひ、そのあはひが、すべて私には捨てがたい、こまやかな變化の、味はひの、絶えず爽かになる樂しい時である。

日毎の目に見えぬほどの移りかはり、それが自然に醉へる心をたのします。

だが、いちばんうれしいのは、夏と秋とのあはひ、秋隣……

はじめの秋は、すでに夏の酷暑から。黄色な太陽の光線が、ヂリヂリと照りつけて、乾き切つた暑熱の大地に浸み入るときにも、きまつて、夕方の風の中には、秋意がある。

秋は悲し、秋はさびしと、昔の人は常に云つた。

然し、それは秋も終りのころの事。

はじめの秋は、爽かで、快活で、いきいきとしてゐて、何處かなまめかしくも、たをやかである。

三十すぎた夫人の艶姿を想ひ出させる。

あだかも避暑地から歸つてくるさうした婦人の、ひと夏の光と遊びとにいくらか疲れて、愈々ほつそりとして、何かぐつたりと、うなだれ勝ちとなるばかり、ほんのり眼がうるんでゐながらも、その底に、あたらしい力が動き、來るべき日の豐饒が、そのふところに想はれるやうな……

秋はそんなに思はれるのだ。

夏すぎて、避暑地がへりの汽車の中に、そんな姿を見るときは、秋の榮えと衰へとを、一つのおもてに、ふたやう

に讀みとつて、自(おの)れの秋の實りと空しさとを想ふ。
私も秋が來る。
今ぞはじめて、私の靈魂も、まことの秋であると、この日ごろ、切に心の中にくりかへし呟くのである。

秋のくだもの

汝(な)があたへし秋のくだもの
今ひとたび味はふを得ば！

かうした句ではじまる詩が、私の集の中にある。それは『若き農家の妻に』と題する詩で、もう十何年も昔の作である。
秋風が立つと、私の心はしめやかになつて、しみじみと、その頃の生活を、その若き日をなつかしく偲ぶ。
その折りには、東京を離れて、心に染まぬ田舍ずまゐをしてゐる事が苦しく、なさけなく思はれたのだが、今から考へると、その頃が、自分のいちばん充實した、詩人らしい生活だつたといふ氣がして、その頃の日記やら手紙やらを、取出してはなつかしむ。
この若き妻といふのは、おたかさんと云つて、私より二つか三つ年上の女で、その頃私が假寓してゐた親類の家の、金娘(かなむすめ)といふものであつた。
私の故郷の方では、土地の相當の家には、必ず代々きまつた出入の者があつて、その子供達は、その家の主人――親方と盃事をして、男だと子方といふものになり、女だと金娘といふものになつて、一生、しんみな特別の關係を結んで行く事になつてゐるのである。

それで、おたかさんは、少しはなれた御來屋といふところへかたづいてゐたが、時々、里へかへつてくる度びに、必ず私の親類の家へ顏出しをし、また、そこの叔母たちに、何くれとなく身の上の相談をしたりしてゐた。

それは氣もちのいい、はきはきとした、快活な女で、裏の方の漁夫の娘であつたやうに思ふが、よく肉のしまつた、姿のいい女で、色の淺黑い、眉の濃い、はつきりした顏立をしてゐた。一目見たときから、私はその女が好きになつた。

十七八の無口な少年は、その世馴れた女に、にこやかな笑顏で話しかけられると、どうしたものか、ふだんの恥かしがりも忘れて、思はず能辯になつて、東京の話をしたりした。

「わたしは東京に行つてみたい」といふやうな事も、彼女は云つた。

それらの言葉や、しぐさのまことの意味は、その時の私には分らないでしまつた。私が後になつて、たびたびその女を思出したのは、幾分か女性について知識を得た後の事である。

その折りは、それよりも、おたかさんばかりでなく、もつと近くに、うちとけた遊び友達であつた少女などにも、うはの空で、ただ東京東京とばかり考へてゐたのである。

おたかさんは、私の好きなものを聞いて、秋になつて、またかへつて來たときには、籠一杯に、大きな梨子の實を持つて來てくれた。けれどその籠は、彼女の良人だといふ、いかにもぶこつな人の好さゝうな大男が擔いで來たのであつた。

その大男が、大得意で、田舍風な律義を極めた挨拶とともに、その籠を差出したとき、私の叔母が、どんなにその梨子を賞めた事であらう。そして、どんなに私に、あらん限りの感謝の言葉を云はせようと骨折つた事であらう。

私はみんなのまへで、その梨子を食はねばならなかつた。けれど、そんな中で食べながらも、それはまことにおい

しい梨子であつた。私はそれ程うまい梨子を、その後食べた事がない。けれどそれは、あとでひとりになつて、好きな本を讀みながら食べた折りが、一層旨かつた事は、云ふまでもない。
おたかさんは、にこにこして、私が梨子を一つ食べ終るまで、ぢつと眺めてゐた。こんなきまりのわるい事はなかつた。
私は東京へ出るとき、おたかさんの事を、ふつと思ひ出した。が、東京へ出てからは、かなりの間、思ひ出す事はなかつた。あるとき、ある機會に、彼女の事をなつかしく思ひ出して、私は何となく悲しい氣持に沈んだ。そして、あの詩を書いて、そして、

汝が夫と友白髪せよ

といふ句で、私はそのはかない思ひを抒した詩を結んだ。

きりぎりす

ある年の夏。中央線を通つた。
夜中に信濃路をすぎて、朝の八時、九時には、甲州も東のはしの、岩殿のあたりに來てゐた。
いつ何處で乘つたか、車中に、丁度、私のむかひに、モンペ(甲州では何と云ふか知らないが)をはいた山の少年――と云つても、十七八であつたらう――が、その山童めいた樣子で、おづおづ腰をかけてゐるのが、私の目にとまつた。
その山童の膝の上には、黒い風呂敷包みの四角なのが乘つてゐて、その中で、二三びきのきりぎりすが、キリキリ……チョンと、しきりに鳴く。犬、猫――その他何でも、動物は、汽車の中に持つて乘れない規則ださうで、車掌がやつて來て、それを注意した。

少年はへどもどして、何かわけの分らぬ事を口の中で云つた。
「どうも、こまるな……」と車掌は云つて、しかし、捨ててしまへと云ふのも氣の毒な氣がすると見えて、
「鳴かせないがいい……」と云つた。
その口の下から、きりぎりすは、平氣で、「キリ、キリ、キリ、チヨン……」と鳴く。
少年はあわてて、その風呂敷を、上の網棚に上げた。
すると、又もやそこで、
「キリ、キリ……チヨン」と鳴いた。
乘客がみんな笑つた。
車掌も苦笑して立去つた。
「キリ、キリ、キリ、チヨン……」と相變らず、すずしげに鳴く。
少年は當惑しかへつて、うつむいて、ぢつとかたくなつてゐる……
「キリ、キリ、キリ、チヨン」

或る時

ある日ある時の自分の姿が、ふと、何のきつかけもなしに、思ひ出される事がある。そのときの自分の姿は寂しい。ひゐき眼に見てさへ寒しと一茶は云つたが、かへりみる時の自分の影は、我ながら寂しいと思ふ。これが自分であらうか。
あの時のあんなみすぼらしい、みじめな姿の男が、自分であらうか。

自分であつた。しかも、今もおなじその自分である。

誰でも顏のあかくなるやうな恥かしいしくじりの二つや三つは持つてゐるものだと、モンテエニュは云つてゐる。私にとつては、二つや三つどころではない、殆んどしくじりの連續と云つてもいい位なのだ。それがふいと、今の事ででもあるやうに、まざまざと思ひ出される時の、たまらない自己苛責の心もち。

私はときどき、自分ひとりで、あかくなる事がある。

しかも、もうとりかへしはつかぬ。忘れてしまふ外にみちはない。

その羞恥心の傾きを抑へるため、反對の側のおもりに置いて、心の平衡を取るために必要な言葉は、ただ、「ばかッ、ばかッ……」といふ、嚙んで捨てるやうなつぶやきばかりだ。

こんな事は、私には、めづらしくない事だ。それだけに、私には、他の人のいろいろな失策やら、困惑やらを、平氣で見てゐられない。

他の人が、非常に間のわるい、へまな立場に置かれて、當惑してゐる樣子を、笑つて見てゐる事が出來ない。まるでそれが自分の事ででもあるやうに、私もその人と一緒に、あかくなつて、ひとりでハラハラして、見まいとして、また見ずにゐられなくつて、その人よりも一層多く、自分の方がまゐつてしまふ。

そして、さういふ時の自分を思ひ出した時にも、私は自分をオークワアドに思ふ。そして、ますます寂しく思ふ。

私のある時は、そんなつまらぬ、小さな苦しみであり、苛責である場合が多い。私のおもひでは、それゆゑ、いつも單純にスヰートではあり得ないのだ。

そのくせ、私ぐらゐ思ひ出の好きな人間はない。いや、好きなのではないかも知れない。ただ、どうしても、思ひ出さずにゐられないのである。あれこれと、いつもあはれな自分の事を。

夕暮感

夕方になると、近くの樹々はすべて黒く靜まりかへるのに、遠方の高い樹立の梢ばかりが、黄いろく夕陽の餘光に照らされて、くつきりと浮かびあがる。それを眺めてゐると、理由(わけ)の分らない悲しみが湧き上つてくる。丁度その時分には、一日の讀書に執筆に疲かれて、庭に出る時であるから、その悲哀も、單に疲勞の徴候にすぎないのかも知れない。（昭和二年八月）

わたり鳥

×

林の中にゐるやうな氣持がする……小鳥が啼くので。

朝になつて、明るい、はつきりした光線が、軒にさしわたると、はや小鳥は啼きはじめる。

小鳥を飼つてみて、はじめて鳥といふものが、どんなに自然に近い生活をしてゐるかが、はつきりわかつた。小鳥には、餌や水ばかりでなく、砂をも入れてやらねばならぬ。小鳥はよろこんで、その砂を食べて、元氣づくのだ。

小鳥は自然を身に近く持つて來てくれる。その聲は、自然の、樹木の、響そのもの、聲そのもの、唄そのもの、心の動きそのものであるとさへも感ぜられる。

鳥を飼ひ、その籠を軒につるすと、森林生活が出來る。時には、さう云つてもいい位に思ふ。

もつとも、今飼つてゐる鳥は、紅雀や、文鳥で、普通、日本の林間に啼いてゐるものではない。駒鳥、頬白、さう

いつた鳥の方が、ずつとヴィヴィッドに、林を感じさせ、自然を感じさせるであらう。然し、それだけにさういふ鳥は、狹い籠の中なんかより、廣い林の中で聽いた方がいゝと思ふ。

「駒鳥を飼ひませうか」

ある朝、家人がかう云つたとき、

「でも、駒鳥はむづかしいよ、それに聲が高すぎるかも知れない……」

と弟が云つた。

駒鳥の啼く聲を、初夏の伊香保の林の中で聞いたときは、何とも云へぬ爽かな、いい氣持であつた。然しまつたく、こんな間近にゐたのでは、その聲は高すぎるかも知れない。林の中の感じが強くなりすぎて、それに心を奪はれてしまふかも知れない。

鳥の聲は遠く聽くほどいいものだ。

丘の上や、林の中にすわつて、ぢつと小鳥の聲に耳を傾けてゐると、すべてを忘れてしまふ。もう何の屈託もない、憂愁もない。あまりに感じやすく、あまりに傷つきやすい心は、一時間でも、二時間でも、ぢつとしてゐたいと思ふ。

伊香保から一里あまり東南にある水澤觀音にまゐつて、そこの山の中腹で、小鳥の聲を聽いてすごした半日も忘れられない。

町を下り切つた茶屋のところから、澁川道と岐れて、林の中に入ると、もう小鳥の世界であるが、黑澤といふ涼しい谷川の流れてゐるあたりに來ると、落葉松がみづみづしい葉をひらいてゐて、あたりの林には瑠璃鳥やら、駒鳥やらにぎやかに囀つてゐた。

それは五月の事であつたが、その秋の十月、ふたたび水澤へ行つて、そのおなじ道を通つたときには、ただ谷水の

淙々と流れてゐるばかり、ひつそりと靜まりかへつて、鳥の聲ひとつしなかつた。

あの小鳥たちは何處へ行つたのだらうと、私はしばらくそこに立止まつて、あたりの寂しい凋落の林を眺めずにはゐられなかつた。春と秋とで、こんなにも違ふものかと、驚かずにはゐられなかつた。

この五月、北信濃の澁温泉へ行つて、一月ほど暮したあひだ、私は仕事に倦むと、山や河原へ出て行つた。下流の星川の河原をわたつて、そこにある穗波溫泉の前を通つて、傾斜した林みちを對岸へあがつて行くと、路のかたはらに、一段高く石垣をかこつて、佐久間象山先生の碑が建つてゐる。

そこは象山先生が別墅をつくつて、煙霞勝處と命じようと考へたところとかで、前方がずつと開けて、箱庭のやうに小さな箱山を越したむかうに、戸隱、飯綱、黑姫、妙高などの五嶽が一列に白くつらなつてゐて、さすがに美しい眺めであつた。

私はそこの草生の上に、一時間ばかりもすわつてゐたが、まはりには田圃があつたけれど、人ひとり通らなかつた。ただ今通つて來た林の中に、それから川ぞひに上へ連つてゐる木立の中に、小鳥が口々に樂しさうに囀つてゐるばかりであつた。

あそこも、秋行つてみたら、ひつそりと靜まりかへつてゐる事であらうか。いや、多分、そこは山と云つても村里であるから、眼白や百舌鳥などが、我物顏に啼くであらうと思ふ。

×

この家には、小鳥がよくやつてくる。

はじめて家を見に來た九月の末のある日の午後、まだ庭に植木屋が入らず、檜、楓の葉が深く、枝が長く差し出してゐるところへ、フイと飛んで來て、何かやはらかい切れのやうに見えるものを、つついて食べてゐる鳥があつた。

山雀でもあつたらうか、二羽ほどゐた。

それで、秋深くなれば、百舌鳥も來て啼くであらうと、私は樂しい氣がした。何といつても、小鳥が――わたり鳥が來てくれるのは、うれしいものだ。小鳥の家を、――鳥の巢箱をつくつておいてやらうかなどとも思ふ。

いつか伊勢の山田で見た家は、店の天井いつぱいに、燕の巢があつて、燕の群れがしきりなしに、軒を出たり入つたりしてゐた。あんな具合に、秋の小鳥が庭の樹々に巢を持つてくれたなら、どんなにうれしいであらう。

ある朝、庭木で小鳥が高く啼いてゐるので、緣側へ出て行つて見ると、檜の枝に、その鳥はとまつてゐた。雀などより大きくて、黑みがかつて、頰のところが半圓形に白くなつてゐる。

「頰白なのだらう……」と思つた。

これはまことに可愛らしい訪問客だ。

今年の春などは、もつとめづらしい客があつた。丁度、家の横手の櫻の木が、すつかり滿開で、ひとひら、ふたひら散りそめてゐた時分、ある夕方、その花の枝に、一羽の大きな鳥が來たと云つて、子供たちが騷いでゐるので、出て行つて見ると、それは一羽の立派な山鳥であつた。

何處から逃げて來たものか、かなり疲れて弱つてゐるやうであつたが、きりりと濃やかな縞の入つた身體も尾も立派な鳥が、仄かな櫻の花の間に、ぢつととまつてゐる姿は、まるで狩野派の花鳥の圖でも見るやうに思はれた。

たまにさういふめづらしい事もあるが、鳥を飼つてゐると、よその籠から逃げ出したその鳥なかまが、聲をたづねて飛んでくる事は、めづらしい事ではない。

いつかは紅雀が一羽飛んで來て、うちの紅雀の籠のまはりを飛びまはつて、夕方になるまで離れなかつた。中にゐるなかまが羨ましくて堪らないやうに、どうかしてその中に入りたくてならないやうに。

それでも夕方になると、何處かへ飛んで行つたが、翌日には、また何處からか飛んで來た。かうして、その夕方、たうとうつかまへて、籠の中へ入れられた。すると、喜んで、ほかの鳥と一緒に並んで囀るのであつた。

廣い天地を自由に飛べる身となりながら、またもとのやうな狹い籠の中にあこがれるとは、どういふ不心得な鳥であらう。だが、鳥はなかまが戀しいのだ、鳥は孤獨に堪へられぬのだ。その上、紅雀などになると、他のわたり鳥などとは違つて、勝手に野山で生きる事が出來ないのである。鳥といふものが、どんなにひとりでゐるのが嫌やなものか、私はまざまざと眼に見た。

へき鳥ときんばらといふ鳥。

一つは頭が薄白く、その中に眼玉だけがぱつちりと黑く、硝子玉のやうに見える。一つは頭だけが黑くつて、丁度總髮か、黑頭巾でもかぶつたやうに見える。

その二つを一つ籠に、綠の鳥籠の中に入れてあるのだが、きんばらの方が意地がわるくつて、へき鳥の嘴をつつい て仕方がない。相手の油斷してゐるのを見すまして、不意につつくのである。

へき鳥はいくらかぼんやりなので、はじめはキヨトンとしてゐるが、たうとう腹を立ててつつきかへすと、今度はきんばらがかなはなくなつて、逃げてしふ。

そのきんばらの遣り方がいかにもずるいので、弟などはむきになつて、いまいましがる。頭巾をかぶつた頭からして、意地わるさうな奴だと云ふ。

それで、へき鳥が可哀さうになつたので、別の鳥籠にきんばらをうつして、別々にしてしまつた。

すると、不思議な事には、へき鳥はすつかり萎れてしまつて、少しも飛び廻らないで、長いことぢつとしてゐたが、やがて、これ迄にない樣子をして、首を突出して、悲しさうな聲で、ホウ、ホウと呼ぶ。寂しさうに呼ぶ。

「まあ、呼んでゐるぢやないか」
「ひとりになつて、寂しいのかしら」
それで、元のやうに一つにしてやると、また元氣になつて、飛び廻り出した。そして、また相變らず、きんばらに盛んにつつかれてゐる……。

×

鳥籠から、紅雀や文鳥などが、さかんに粟粒をこぼす。
すると、それを雀が拾ひにくる。
三羽、四羽、五羽、とだんだん澤山になつて、誰かが緣側に出ると、それがパッと飛び立つ。
その中に一羽、足の不自由な雀がゐる。何處でどう怪我をしたものか、びつこをひいて、ほかの雀のやうに、粟粒から粟粒へと、自由に拾つて步けないので、一寸のところでも、翼をひろげて、パッと飛ぶ。
ほかの雀のちつとも來ない時にも、その雀ばかりは、必ずやつてくる。それで、ぢつとして餌を拾つてゐても、すぐそれと分るほど、いつかその雀の特徵を覺えてしまつた。
雨の日など、たつた一羽、しよぼしよぼ濡れながら、餌を拾つてゐるその姿は寂しい。
それでしまひには、特にその雀のために、むかうの垣根のそばの八つ手の下に、粟粒を蒔いておいてやる事にした。すると雀たちは喜んで、代りばんこにそこにやつて來て拾ふ。けれど、その足のわるい雀だけは、やつぱりもとのやうに、緣側の下に落ちこぼれたのを拾ひに來るのだつた。ところで、この鳥籠からこぼれた粟粒が、いつのまにか芽を出して、葉を出して、一尺、二尺、三尺とのびて、つひに今では、高々と穗を出してしまつた。
朝には、白く露がやどり、夕には、涼風に微かにそよいで、つい緣の近くに、一握りの穗むれが、あるかなきかの

粟畑のおもむきをなして、廣い野や畑を心に偲ばしめるやうになつた。
この粟の穗は、客をいつも驚かす。
主人は、自分もかうした落ちこぼれの粟ではあるまいかと、時折り考へる。鳥がはね飛ばしてくれたばつかりに、生え出して來たやうなものかも知れない。偶然が自分を生んだのだと、至極平凡なフィロソフィーレンをやつてゐる。
この粟でも、鳥でも、人間でも、結局は、おなじ偶然の運命に支配されてゐるのかも知れない。然し、私は宿命說には、今極力反抗したい氣持である。自由意志の範圍を出來るだけ擴げたい氣持である。
極端な宿命說が眞理であるならば、何處に人間の自由があらう。
自由といふ觀念、自由人といふ觀念が、このごろは一番强く頭を占めてゐる。だが、私はまだ、それをはつきり把握するまでには至らない。
粟の穗の生えてゐる敷石のむかうの下の方には、蟻の穴があつて、夏のあひだ、出たり入つたり、隨分と活動してゐた。
この蟻と鳥とが、私には、平等と自由といふ、この人間の二つの根强い願望に、ある照明を投げかけるもののやうに思はれる。
だが、人間は蟻のやうになるべきものであらうか、それが人間の幸福であらうか。共産主義者から見れば、蟻の社會は一番理想的なものであらう。また、一番合理的で、一番健全である。その平等、その勞働——然し、人間には、それに滿足出來ないものがある事はないか。
蟻の社會を羨望し得ないのは、人間があまりに現在の固定觀念に囚はれてゐるがためである、といふ事は、理性ではうなづく事も出來る。が、私たちの感情は、どうもそれについて行けない。

鳥のやうに、わたり鳥のやうに、自由に飛んで行きたい。それが僞らぬ人間の感情だ。

鳥の社會にも、また、爭鬪もあり、困苦もあらう。それでも鳥を見ておもふのは、その自由である。その點から、鳥籠の鳥を賞するのは、まことに疚しい事に思ふ。もつとも、紅雀や文鳥やは、もと〱鳥屋で育てられた異國產のものであるからとも云へるが、それも何代か前には、その異國での自由な鳥であつたのに相違ない。

フォゲルフライといふ言葉がある。鳥のやうに自由に——それはまたあらゆる法律の外にある事をも意味する。

ニイチエの所謂プリンツ・フォゲルフライは、卽ち、自由人の王子である。彼は人に擊ち殺されても、誰も訴へる事は出來ないのだ。

だが、それでも私は鳥を羨む。人間もつひには、鳥のやうになるべきだと考へずにはゐられない。鳥のやうに自由に、鳥のやうに淸純に……。

だが、これも瞬間に飛び去るわたり鳥の影のやうな觀念であらうか。

私の思想は、鳥影のやうに速かに飛んでしまふ。

目にかゝる雲やしばしのわたり鳥　　はせを

（昭和二年八月）

非凡な女

——「最も好きな作中の女性は」との問ひに答へて——

好きな女性の出て來る小說は、大抵の場合、同時に好きな小說でもある。

女性に對する好みといふものも段々變つて來るやうに、作中の好きな女性も段々變つて來る。

昔讀んで好きであつたのは、鏡花の中の女性、森鷗外博士の譯された『卽興詩人』のアヌンチヤタ、同じく『埋木』のアンネットなどであつた。

その後もいろいろ讀んで好きになつた女性は隨分多いから、一々擧げきれないが、そのうち好きでもあり、きらひでもあるのは、イプセンのヘッダ・ガブレルである。ヘッダなどは近代的な婦人の、立派なタイプの一つだ。

ゲエテの、『ファウスト』のグレエトヘンなどのやうな、純潔な可憐な少女も勿論好きではあるが、小說で讀む場合は、それよりもヘッダとか、スタンダアルの、『赤と黑』のマティルドだとかいふやうな女性の方が、面白いと思ふ。

スタンダアルの書いたイタリアの女性は、罪を犯しても悔ゆることを知らないやうな、はげしい女性だ。『シャルトルウズ・ド・パルム』といふ作中に出てくるサンスヴェリナの公爵夫人ジナといふ女性などは、この代表的なものである。毒殺位平氣でするやうな女だ。自分の愛した女を理想化して、さうした激烈な女性に作り上げたスタンダアルといふ人は、風變りでもあるし、面白い人でもある。

メリメエの『カルメン』などは、大分人氣のある女のやうだが、私はカルメンよりも同じ人の『コロンバ』の女主人公の方が面白いと思ふ。これはスタンダアルの女性に共通したイタリアの血を示してゐるが、躊躇する兄を激勵して、父親の復讐をさせる、このコルシカ女の性格は、そのはじめて場面にあらはれて來るところからして、强い力を以つて迫るやうに書けてゐる。

ドストエフスキイの女性では、昔から、『罪と罰』のソニヤが好きであつたが、今は、『カラマアゾフの兄弟』や、『白痴』などに出てくる女性を好む。古來、女性のヒステリイ的狀態を、ドストエフスキイぐらゐ好んで、又巧みに描いた作家はない。女性が非凡になるのは恐らく何よりもヒステリイのためであらう。そしてドストエフスキイは、非凡、異常の作家である。

鏡花の女も大部分ヒステリイである。『湯島詣』の蝶吉など、今でもはつきり印象に殘つてゐる。反抗意識などいふことが、隨分やかましく言はれるが、鏡花の女はそれで以て生きてゐるのだ。無産派の論客は、泉鏡花などをもつと注意してもいいと思ふ。『風流線』など、無産派の重んじなければならぬ要素を、非常に多く備へてゐた作だと憶えてゐる。

鏡花の作が、かつて私を惹きつけたのは、その幻怪な空想や、特異な文章ばかしでなく、主としてかうした反抗精神のためだつたと思ふ。

とにかく、私は小說の中では、特異な性格をもつた女が好きだ。型にはまつた、ありふれた平凡な女だと、第一記憶にも殘らないでしまふ。もつとも、平凡な女もその平凡ぶりが巧妙に書ければ、決して平凡ではない。結局、人が好きになるほどの女性を書き上げるのはむづかしいことである。それだけの力のある作家は羨ましいと思ふ。（昭和二年八月）

三角關係について

戀愛は一面、戰ひの性質を帶びてゐる。

男と女とは、その愛撫によつて、互ひに嚙み合ふのだ。――から考へるのは、ストリンドベリイ流のペシミズムに過ぎるのであらうか？

然し、少くとも、三角關係の戀愛に至つては、明らかに戰ひである。それはもとより、男對男、女對女の戰ひであるべきだが、必ずしもそれに止まらぬ。

三角關係にあつては、おのおのその一角は一個の堡壘である、一個の城廓である。その一角にとつて、他の二角は、絕對的に、これを自分の意志の下に置かねばならぬものである。一を他より引き放して、これを手中に收める。ゆゑに、その戰ひは二重である。

近代の戀愛は、三角關係の葛藤に於いて、その近代的の緊張感を高める。

元來、戀愛が藝術の對象となるのは、何等かの意味で、三角關係の中に置かれた場合が多い。例へば、單純な靑年男女の仲でも、親の反對、世間の迫害。その際、親とか世間とかいふものが、三角の一角となる。

然し、眞の三角關係は、もとより――

一人の女と二人の男

一人の男と二人の女。

前者の最も單純で、最もロマンティックな例は、生田川、蘆屋乙女の傳說であらう。二人の男におもはれて、どちらも苦しめたくないから、自分が死ぬる。

後者では、近松の天網島、それは舊日本の三角關係の典型的なもの。芝居でする時雨の炬燵の場面の如き、舊時代の日本的情趣のエッセンスのやうな氣がする。「泣かしやんせ、泣かしやんせ、その涙が……小春が汲んでのみやろぞ」遠い昔の情趣だとは思ひながらも、さすがに心がしんとする。

女から――妻のある男を。

男から――夫のある女を。

これが最もティピカルな三角關係で、いはゆるイタアナル・トライアングルの悲劇はここに生れる。
それが更に複雜な形では、
夫のある女から――妻のある男を。
妻のある男から――夫のある女を。
いはゆる四角關係といふものである。
近代になるほど、ますます複雜になつてくる。そのうち、五角關係、六角關係、七角關係ぐらゐは、めづらしくなくなるかも知れない。
三角關係の劇的な緊張味は、もとより一時的のものであるべきで、やがて二角となるべきものであり、四角關係としても、やがて三角となり、二角となるべきものである。
が、人間の心と、社會の事情とが、微妙になり、複雜になるにつれて、ますます解決が長びく。しまひには、個々の關係の上でも、イタアナルで續くやうになるかも知れない。
原始人の間では、瞬間に結着したではないか。男が男を殺す。女は殺した男のものになる。近代ではさう行かない。
「意地なのよ」女はよくかう云ふ。
意地と張りとで、張り合ふのだ。こんなときの女は可愛らしい。そしてまた、幸福でもある。
或る女――大變年若く結婚して、ただ人形のやうに、または、家婢のやうにして、小川の水のやうに生活を流されてゐた。或る時、思ひがけなく良人に他に隱し妻のある事を知つた時には、天地がひつくり返つた程にも驚いた。到

底事實とは信じられなかつた。が、どうしても信ぜずにはゐられなかつたとき、彼女は今まで經驗した事のない激烈な怒りと憎みとを覺えて、復讐に燃えた。

彼女の眞の生活はそのときからはじまつたのだ。彼女の嫉妬心は、卽ち、良人に對する愛情の自覺である。

『ロスメルスホルム』のレベッカの場合。

「自分は彼の妻よりも彼に適してゐる。故に、自分は彼の妻を追ひのけて、これに代る必要がある」

妻のある男に對する女の行動が、これ程の徹底した自覺を以てなされるのは、稀有といふより、あり得べからざる事かも知れない。

大抵の場合は、女の方が受身で、無意識に無自覺的に、ついその渦の中に入つてしまふのだ。

攻める方の立場と、防ぐ方の立場とでは、すつかり見方が違ふはず。

「人の男を寢取る」といふ言葉。

「人の妻を盜む」といふ言葉。

ウロンスキイか、カレニンか。

「他人の妻と寢臺の下の良人」とは、ドストエフスキイの小說の題だ。

彼の『永遠の良人』――姦婦の夫の心理を描いて、これ以上深刻なものはない。

鹿の角を授かつても、授かりものは授かりものだ。妻の死後、妻の密通してゐた男を探しまはる心理は、何たる複

雑な凄いものだらう。

主人の留守の間の、その座蒲團の上にすわつた男。彼はたしかに人生の深い一面に觸れ得たものだ。

今の文化生活ならば、さしづめ籐椅子位で、窓には九官鳥の籠もかかつてゐるであらう。舞臺は阿佐ケ谷、高圓寺、或ひは少し離れて鎌倉あたり。

今に、いや今でも、日本にも、イプセンの『ヘッダ・ガブレル』の中のブラックのやうな男も出來つつある。三角關係の一角に、無理にでも割り込まうといふ男だ。

戀愛は苦難である。

戀愛する以上は、命がけですべきだ。そこに緊張せる生命感がある、生命の燃燒がある。

地位も要らなければ名譽も要らぬ。世間を相手に二人の城に立籠る。ニイチエのツワイザアムカイト。

もしこの考へが幼稚だと見えるならば、戀愛は卽ち幼稚な事件である。

ゴミゴミした、算盤片手の打算的戀愛、ふところ勘定で、惜しがりながらの調子の低い隱居的戀愛家は、むしろ賣女を買つて滿足すべきである。Irogato の安全にして老成せるに如かぬからである。

三角關係に至つては、苦難中の苦難。これに對しては、ただ二つの道しかない。生命がけで、突き進むか、齒をくひしばつても、これを斷念するか。

その男、その女のために、一切を賭して、他の男、又は女と戰ふか。又は、潔く身を退くか。

それは相手の力と、情熱の分量とによる。(――少くとも私はさう信じてゐる。)だが、大抵は、その中間のところで喘いでゐる。時としては、三角關係が、微温的な妥協によつて維持される場合もある。本妻が妾を許容する如きも、

またそれである。理窟から云へば、不合理な事であるが、人生は理窟通りに行かない。そこに人間の悲しみもあれば、人生の妙味もあるのだと思ふ。迷ひ、あきらめ、罪と恥——それが人間らしい事であり、又眞實なる所以ではあるまいか。（昭和二年八月）

信濃の秋

信濃はいつも私の心から離れぬなつかしい國の一つである。

この春から夏にかけて澁温泉で一月ほど暮した。

朝見るも山、夕見るも山、その山の姿が、私の心をより高いものへと誘ふ。

信濃は山國であるが、その山が一つの平(たひら)毎にちがふ、一つの山峽毎にちがふ。

佐久の山、筑摩の山、木曾の山、高井の山、伊那の山、その他の山。

それぞれ心を誘ふ。心を鎭める、心をよろこばす。

澁の方から眺めやるのは、五嶽——黒姫、飯綱、妙高、戸隱などの山々である。

あの一列の白い姿もなつかしい。

然し、今に忘れないのは、桔梗ヶ原から眺めた日本アルプスである。

も一度あの野に立つて、山を見たい。

あのときは秋であつた。秋も十月か十一月、もう冬に近かつた。

信濃の秋は早い。九月のはじめ、都會ではまだ殘暑に苦しむとき、そこには秋風が爽かに頰を撫でるであらう。

秋九月、又は十月のはじめ、今年は信濃ですごしたいと思つてゐる。
私のやうに冥想を愛するものにとつて、信濃は最もふさはしい國である。
その國の秋、秋の七草、その中をさまよひつつ、詩をおもひ、生をおもひ、永遠をおもひ、眞理をおもふ。
想ひは深く、情は清く澄むであらう。
詩人の國の秋よ。哲人の國の山よ。（昭和二年八月）

裏日本秋景

裏日本の海岸づたひに、靑森、秋田の方から、長州の方まで、ところどころ拾つて歩いてみたら、どんなであらう？
神戸靑森間の直通列車は、そのために出來てゐると云つてもいいやうな線である。その沿線に次いでは、敦賀から舞鶴へ出て、さらに山陰線を小郡まで出たなら、まづ、申分のない裏日本の旅だ。
裏日本の海岸に生れて、好んで裏日本の旅に出る私は、裏日本的氣分といふものを、自ら有つてもゐるし、外界からもたやすく感受する。風景にも、人間にも、善かれ惡しかれ、裏日本一帶に共通してゐる特徵はあると思ふ。
と云つても、裏日本で、私のまだ行つて見ないところはかなり多い。象潟、笹川流れなどといふやうな有名なところで、知らぬところもあるが、殊に若狹の海岸などに至つては、大抵の旅客には全く閑却されてゐるので、一層遊意をそそられながら、やはり自分もつい行けないでゐる。
裏日本の海の感じは、秋田でも、越後でも、北陸から山陰にかけて、大體相似た氣分をもつてゐる。表日本に育つた人ならば、春もなほ秋の如き印象を受けるかも知れない、殊にその地方に多い雨の日などは。

太平洋の海しか見た事のない友人が、最近、秋田へ行つて、はじめて裏日本の海を見て、その波の荒さに一種ちがつた荒寥の音を聞き、その波の間に、一抹の幽鬱の色の漂ふのを見て、めづらしい印象を受けた事を語つた。

その海は私も知つてゐる。

秋田の次ぎの驛の土崎へは、市のはづれから電車に乗つても行ける。土崎の港は、雄物川の川口にあつて、川がしばらく海と殆んど併行して流れるので、海をかぎる砂丘を、川の對岸に望む事が出來る。

その砂丘には、夏は玫瑰の花が咲く。北國も夏だけは、南國の夢がただよふのだ。が、秋になると、またその平常の姿にかへる。寂寥こそ、裏日本の氣分である。眺めやる砂丘の上に黒く一點、ぽつちりと浮上つた小屋が、丁度、和蘭派の繪にある地平の果ての風車小屋のやうに、いやそれよりももつと暗い姿で、灰色の空に畫き出されてゐるのだ。

それよりも一層佗しい思ひを誘うたのは、目の前に聳立つた寒風山の白い姿であつた。夏ならば、舟をやとうて、男鹿めぐりをして、岩と波との奇景にも接せられたものを、時はづれに行つて、その男鹿半島の山を寒いと見た。その山の麓には、船川といふ港があつて、築港も出來て、土崎の繁榮をみな奪つてしまはうとするひらけ方ではあるが、遠望にはあまりに寂しい眺めであつた。

裏日本も、もつと南へ行つたなら、これほどでもなからうと思つたが、芭蕉の「荒海や佐渡によこたふ天の川」の吟が、その豪放をたたへられるのも、越後の海の浩蕩たる波の音から生れたからである。この句など、よし佐渡なる地名がなからうとも、決して太平洋の景とは考へられないであらう。

親不知のあたりで見た落日も忘れられない。あの荒海の――なぜか狭い感じがする――果てなる水平線上に、雲を透けて眞赤なかたまりが、しだいしだいに海へ入つてしまふ、そのあとの夕照の茜いろが、波の上にふるへて見えたのも佗しかつた。殊にあのあたりは、山が海にすぐ接してゐて、そのわづかの平地に家が建つてゐて、今にも波にさ

らはれさうな思ひがする。屋根の上の石まで佗しさうだ。聞けば日本海の方は、だんだん陸地が削られて行くさうで、糸魚川の某氏の宅など、波に接してゐる裏の畠地が、年々少しづつ目に見えぬほど削られて行くといふ事だ。

能登の海はまだ知らない。新潟とはちがつて、金澤は海とはなれてゐるが、そこと動橋との中間にある美川といふところの海岸、新舞子とか何とか名がついてゐたやうに思ふが、あの海岸は私の好きなところの一つであつた。然し三國港の傍の東尋坊は一層有名であり、見る甲斐がある。金津から三國に行く線の中央にある蘆原温泉は、平野の中の温泉とて、景色は極く平凡だが、そこに泊つて、三國へ行つて一日遊んだなら、忘れがたい曾遊の地となるであらう。

鳥取の海岸のあの廣い大きな砂丘――裏日本の秋の寂寥をこんなによく感受せしめるものはないであらう。有島武郎氏がその死の前に、そこに遊んで、悲しい歌を殘してゐる。あの當時の氏の虚無的な氣分に、あの砂丘はいかにふさはしく映じたであらう。

鳥取から西へ行つて、上井といふ驛から支線に乘り換へて行く三朝温泉は、數年前私の行つたときは、まだ清淨な溪流の音のなつかしい温泉であつたが、今はもうかなり俗化した事であらうと思ふ。

海上に隱岐の島をのぞみ、うしろに大山を見上げる西伯耆から、出雲の宍道湖にかけて、あのあたりの風物は、曾つて『旅誌上』に、佐近益榮氏が、美しい文章で書かれてゐた通りである。

夜見ヶ濱の尖端にある境の港から汽船に乘つて、下ノ關まで出た事がある。その航路は、瀨戸內海などと比べると、何といふ相違であらう。日本海の荒い波濤が岩をゑぐり込んだやうな、小さな灣がいくつもある。それらの小さな港に、一々船は寄つて行く。温泉津といつて、ぬるい温泉の湧く寂しい港に夜泊したときの雨の音、萩の港の夜景、提灯さげた物賣の呼聲も忘れられない。おもへばそれも遠い昔である。

おなじ長州でも、萩の方になると、すつかり裏日本氣分だ。削つたやうな斷崖のつらなつてゐるあのあたりの海岸

は、いかにも北海岸の感じがする。（昭和二年九月）

月夜の尾花

月が天にのぼつて來た。八月の十六夜である。かうして月が黄金色に冴えてゐて、空が碧色に澄んでゐる時に、地の上の影の深さよ。木のかげにも、家のかげにも、何かかう密度の濃かな黒色がたたへられてゐるその中で、秋の蟲が、チカ、チカ、チカといつた調子で、鳴き聲をおくり、水のやうな風が吹いてくる。

　雨戸をしめようとして、ふと目にうつる庭石の上の仄白いもの、――尾花。それは、昨夜のお月見にと、大きい花瓶に、紫苑や、女郎花や、かるかやなどと一緒にさし入れてそこに置いたその尾花なのだが、今日の晝頃の焼き灼るやうな秋暑の太陽に、パッと開けてしまつたのだ。昨日は猫の毛のやうに、つやつやと銀ねずみ色に若々しかつたその尾花が、白くぽかとほほけたのである。

　花屋のとどけて來た三莖、四莖を、かういふ花瓶にさして、大きい大きい秋の野を、武藏野を、又は相模野を、又は輕井澤の高原を、なほそのほかの秋の山野を聯想するこの尾花、――美しいといふよりも、きれいといふよりも、佳いといふ風に云ひたいその淡泊な尾花、これを數町打ちつづく土手のむらがりの姿として打ちながめたい、かの玉川岸の秋のながめが、かうした月夜のおもひでの一つになつて來た……私の心に。

　ひとりで、たしかひとりで、私は氣持を變へに田舍へと行つたのだ、その時は……。そして、玉川べりの砂道を歩いたり、雜草の土堤を見たりした時に、あらゆるところで、この尾花の地縫を見たのだつた。きれいだつたそのぬひとり、「秋の風景」の出來ばえを。

尾花の土堤には、涼風が舟のやうに上りつ、下りつしてゐた。そして、蜻蛉が舟人のやうに、飛んだり、とまつたりしてゐた。忘られがたいと思つたその時の尾花のながめ……まことに忘れず、かうして今宵思ひ出すのだ。七八年まへの秋の尾花を……。今もあの土堤に、新しい尾花は、もうほほけようとしてゐるであらう。そして、今宵の月にてらされて、まつくろな蔭をふくみ、その現れた葉面や、ほさきを靑白く冴え冴えともたげて、月の光にういてゐるだらう……（昭和二年十月）

芭蕉の庭

×

私の庭のいろいろの葉がそよぐ。

庭へ來る風は東南の方から吹いて來て、西の方へ亙つて行くのであるが、葉のそよぎは、前後なしに、一樣に、その大小さまざまの形にしたがつて搖れる。

こまやかに小刻みに搖れる萩の葉、おほらかにゆつくりと搖れる芭蕉の葉。この二つが、中でもくつきりと、鮮やかな對照をなしてゐる。

それをぢつと緣側から、蓖を燻らし乍ら眺めてゐる秋の日の私である。

この貧しい庭に、この芭蕉の株が植ゑられたのは、ことしの八月、立秋をすぎた頃であつたやうに思ふ。家のものが、つい近くの柳町の緣日に出てゐた植木屋に交渉して、その家に伸び伸びと繁つてゐたのを、ここに持つて來させたのである。

植木屋は荷車の上に、この芭蕉を積み込んで來た。そして、どうだんの木のこんもりとまろくなつてゐる向う側の土を、三尺あまりも深く深く掘り込んで、この芭蕉を植ゑて、ばけつになみなみと一杯の水を、その根にかけておいて歸つて行つた。

植木屋にあつた時分は、五六葉も出てゐたらしいのが、巻葉一つに刈りこまれて、身輕といへば身輕だが、何だかかうみじめな樣子でやつて來た芭蕉も、やがて、野分もすぎると、秋雨に根をうるほひ、葉も緣長くひらききつて、中秋にかけては、大分、おもむきが出て來た。

「來年はいい芭蕉になりますよ」

かう人は云ふが、私も多分さうであらうと思ふ。さうなればよいと思ふ。この芭蕉に限らず、芙蓉でも、紫苑でも萱でも、薄でも、また、飛石のむかうにある小さな松でも、（この松は、この夏、家のものが、銚子の港の對岸の波崎といふところの磯から抜いて來たものである）この庭にある限りの草木で、何一つ、私の求めによつて植ゑられたものはない。

このごろとりわけ、散漫な自分の思想を統一することに、すつかり沒頭してゐる私は、庭のおもむきなどに心を寄せる事もすくない。ただかうして、植ゑられたものを、素直に受容れて、眺めてゐるだけである。

庭づくりの風流を、私はゆかしいと思ふ。總じて風流の心もちを愛するのであるが、私自身はといふと、まだまださうした風流に浸る心の餘裕を有たない。風流は既に完成した人の世界の事であつて、私はおそらく永久の未完成者であらう。

けれども、この芭蕉だけは、何だかかう自分で求めて植ゑさせたやうな心持さへ起る程に、今の私の氣分にしつくりと當嵌つて來たのである。

好ましいこの芭蕉の葉。

私がこの葉を好むのは、その葉のかたちが何より爽かで、長くなびいて、およそ三尺位、ばつさりと垂れた姿で、何か人のおもかげを偲ばせるからだ。日ざしに透いたみどりの色もデリケエトに、雨の日はひとしほ色濃く、風に裂けやすいその葉の中心に、脊すぢのやうにたくましい葉脈がはしり、左右に細流のやうにわかれた葉脈が、ほかのどの葉よりも鮮かに浮き上つてみえるが、そのどこからか、やがて裂け破れるのだ。

「僧懷素は是に筆をはしらしめ、張横渠は新葉を見て、修學の力とせしとなり。予、其二つをとらず、唯此陰にあそびて、風雨に破れやすきを愛するのみ」と芭蕉翁は云つてゐる。

まことにこの破れやすきが、芭蕉葉のおもむきである。その破れかたが、また、いかにも淡泊で、さらりとしてゐる。まるで花咲く木が花をひらくやうに、芭蕉の葉はさらりと裂ける。必ず裂ける。「鶴啼やその聲に芭蕉破れぬべし」と詩人をうたはしめたそのわけもない裂けやすさを私は好む。

おもふに芭蕉のこころは、「青扇破れて風を悲しむ」にはなくして、「芭蕉は破れて風飄々」といふにあらう。

これが芭蕉葉のすがたであり、うすものの風に破れやすきをおもむきとする風雅のこころであらう。芭蕉翁は空しく芭蕉を愛しはしなかつた。芭蕉葉上に愁雨なしといふ、ここに私のねがふ東洋の智慧があると思ふ。

私の庭の芭蕉も破れた。新秋九月すでに破れて、秋深むにつれて、その破れさらに深みて、婆娑たる影を庭のおもてに動かして、市井の借宅に、しばし草庵の趣きを貸しあたへる。私はその破れた葉を愛する。

芭蕉葉、秋にやぶれたり、
やさしき人のふところに
祕めし夢さへやぶるるを、

秋はそよげり、芭蕉葉に。

×

芭蕉を見て思ひ出すのは、海南の山寺でみた芭蕉の葉である。芭蕉の庭である。

この寺は庭一ぱいの芭蕉かな

といふばせをの句は、この寺の庭を見ての吟ではないかと思はれた位、その庭には芭蕉が一ぱいに葉を垂れこめてゐた。

村からずつと山地の傾斜をのぼりつめた奥のたかみに立つてゐる古い寺で、そこからは山峡の溪谷が見られ、溪谷のむかうのひと村の、のどかな家々が見られた。

その階上に葬具の赤や白がちらちら見える山門をくぐると、寺内はひつそりとしてゐて、人のゐるけはひもしない。ただ、筧の水の音が絶えず落ちるのと、庫裡の暗く靜かな中に、ざんざんと涼しい水の音がするばかり。

そこの方丈に坐つて、しばらく庭を見てゐた時の靜けさは忘れられない。庭は南の方にひらいてゐて、そのまんなかに、泉水をまるく殘して、あとは一ぱいに芭蕉の影が、めづらしい織物のやうに廣葉を重ね合つて、何とも云へぬ爽かな、物寂びた秋のおもむきであつた。

こんな山寺で、芭蕉の葉につつまれて、しづかに春秋を過したなら、どんなに閑寂であらうと思つた。むかし、奈良の廢寺を慕うて、そこに隱れたいとねがつた、ロマンティックな心持が、今もなほ心の底に潛んでゐるのであらう。いな、この遁世のこころざしは、若さの氣まぐれではなくして、もつと根强い要求であるやうにも思はれる。自殺した人の事を、人ごとならず感ずる事が多かつたが、今では僧になつた人の話がしみじみと思はれる。

もとレエニンの友人であつた露西亞の哲學者のセルゲイ・ブルガコフが、僧籍に入つた事を知つて、(現在は國外に

亡命してゐるやうだが）ソギエート・ロシアの背景を思ひ合せて、私は色々の事を思はせられた。

ドストエフスキイが、常にその眼を注ぐ事を忘れなかつた露西亞の僧院は、今どうなつてゐるであらう。長老ゾシマは、今まつたく死に絶えてしまつたであらうか。

今や、その僧院も安全な隱れ家ではあり得ないと見える。そして、ブルガコフも、危險なる異端の徒として、そこから追放されてしまつたのであらう。

ドストエフスキイが今生きてゐたなら、何處へ亡命した事であらうか。そして、偉大なるトルストイもまた。革命運動のために、高貴な一生を費したピヨトル・クロポトキンの晩年の運命をおもふ。ボリス・サギンコフの死をおもふ。

そして、これがコンミュニストの天國での事件である。權力と不寛容とが、かの天國のパスであり、その律法である。自由とは、風のやうな空語にすぎないのであらうか。

自由とは、人間のはかない夢であらうか。

自由は心の中をほかにしては、何處にも求め得られぬのであらうか。

ブルガコフと近接した思想的立場にあるおなじ露西亞の哲學者のニコライ・ベルヂヤエフが、その『ドストエフスキイの世界觀』の中で說くところも、彼の謂ふ基督に於ける自由も、畢竟、その意味に過ぎぬであらうか。

神の名、基督の名に於いて、私は躓く。

然し、私たちの知つてゐる我國の多くの高僧の超脫した心境には、高い自由がみとめられる。何ものにも囚へられない大悟徹底の人以上に、自由な人があり得ようか。

之に反して、いかに自由な社會の中にあつても、物慾にとらはれ、野心にとらはれ、妄執にとらはれた心には、決

して自由のない事だけは確かである。

西歐の神といふ言葉が、いつも私を躓かせるのと同じやうに、マテリアリストのしつこくふりまはす麵麭屑は、いつも心を白けさせる。

人は麭麵のみにて生きると思ふのは、マテリアリストのあやまりであるが、然しまた、人は麵麭なしに生きる事も出來ない。そこに私の考へなければならぬ問題があるのだ。

「道心の中に衣食あり、衣食の中に道心なしと知るべし」

これは開祖大師の言葉として、信濃の善光寺の山門の前の立札に記されてゐたものである。

恐らく、すべての僧侶にとつて、この言葉は常に忘れてはならぬ箴言であらう。そして、すべての文學者にとつても、亦さうでなければならぬ。今、私は必ずしも僧となるを要しない。いな、遁世のパッションあらば、これを人間社會に向けねばならぬ。出家といふ古典的形式でなしに、道を得べきみちは目前にあるであらう。

おもふに、人間が誠實に、力の限りおのれを生かすとき、そこに必ず何等かの意味が生れてくるであらう。文學者が一生机の前にすわりつづけるならば、只管打座の精進のこころにかなふであらう。

人間として、人間に語る。

これが私たちの惠まれた仕事である。私たちが善い人間となるとき、善い人間が、來つてこれを聽いてくれるであらう。

×

少し探しものがあつて、古い紙片の間をかきまはしてゐたら、『埋れた生活』と題した、散文詩やうの斷片が出て來た。もう餘程前に書いたもので、自分でも忘れてゐたものである。

「雪國に一冬すごしてみたらどうだらう？　屋根の上よりも高い雪に埋れて、丈餘の雪の下で、冬眠の蛇や蛙のやうに暮してみたら？

だが、わざわざ雪國に行つてみる迄もなく、私は今に冬籠りの氣持だ。

ときどき、その籠居の佗しさに、日のあたる方へと出たくなる。その心弱さを、いつも嘆かはしく思ふ。

もつと強くならねばならぬ。まじろぎもせず一點を見つめて、それに堪へて行く力——勇氣を私は欲する。

ときどき、地下を掘つて行く土龍の姿を想ひうかべる。私はあの不恰好な、醜い土龍が好きだ。私も精神的な土龍の一匹でありたいと思ふ。

ニイチエとか、キエルケゴオルとかいふ人達の事をおもふと、私は日夜休みなしにコツコツと地下を掘つて行く鑛夫の姿が目に浮ぶ。

彼等は自分の心の中を掘つて行つた人達だ。そして、重い金鑛を地上に齎らした。

埋れた生活——といふ言葉が、ふと心に浮んだ。

埋れて、埋れて、私も掘つて行かねばならぬ。

埋れた生活者——こんな言葉はあまりに寂しい。だが、深く生きるためには、苦しくとも寂しくとも、埋れてゐなければならぬのだ。

私の好きな人が、みなさうした埋れた生活をした人である事をおもふと、不思議な氣がする。

スタンダアルは、わざと韜晦して、一生をすごした。ニイチエやアミエルはあの通り、ドストエフスキイですらも、あのシベリアの生活は、完全な埋沒であつた。

だが、その埋沒は、永久の葬送ではもとよりない。丁度、種子が地中に埋められるやうなものだ。蠶が繭をつくつ

て、その中に閉ぢ籠るやうなものだ。靑々した芽を出して、美しい花と咲くため、美しい蝶になつて飛ぶためだ。日本人は餘りに氣短かだ。私の心も餘りに日本人的でありすぎる。

埋れよう、埋れよう。土龍のやうに地を掘つて行かう。」

この斷片を讀みかへしたとき、私は何とも云へず不思議な氣もちがした。自分の若さに對する羞恥の氣もちと、その若い自分に對するうしろめたさと、この相反する二つが不思議に混交した奇妙な感情である。

私の今の生活は、若い日の私のねがつた、その埋れた生活とは云ひ難い。その日の食に追はれて、未熟な思想を、その半熟のままに世に出してゐる。眞に自信を以て、外界に煩はされないで、自己の內面生活を深く掘つて行く事が出來ないでゐる。新聞雜誌に一篇の文をも發表しなかつたニイチエなどを思ふと、恥かしい事である。然し、ニイチエはその生活に困らないだけの財産のある人であつた。

私は一人のプロレタリアとして、日每の麵麭を自ら稼がなければならぬ。そこから、私のいろいろの矛盾と苦惱が生れ出るのだ。せめては少しでもその實際を理想に近づけたいと、齒をくひしばりながらも考へるのだ。

かうして、草蔭のやうな寂しい私の文學者生活が生れ出た。或る意味では、多少私も土龍と云つていゝであらう。だが、私はあまりに力が弱い。私はもつともつと力ある、そして惠まれた人が、今埋れた生活をしてゐる事を思ふ。そして、その華々しい開花を待つてゐる。（昭和二年十月）

雁わたる

×

逢坂下のむかひの外濠を、土手の上の草徑を通りながら、牛込見附の方に向いて歩いてゐた。

草がすつかりきつね色にかはつて來たので、松の翠が目立つて來てゐた。

濠はあだかも細長い方形の鏡を篏め込んだやうに、艶やかに、水を落ちつかして、初冬の薄濁りのした午後の空を映じてゐた。

古い綿のやうな雲の幾片かが、ぽつと浮んでゐた。ぢつとそれを見てゐると、心が引き入れられて、恍惚としてしまふのであつた。

土手から番町の方を見ると、そこに直ぐ、目を遮ぎる大きい建物は、××病院であつた。その硝子の窓の中には、白衣の影がちらちらと見えてゐた。折りしもその門から、三人づれのはをり着の、年とつた、つやもなく褪せた女が出て來て、何か仰山さうに身振りしつつ話しながら、寂しい方に行くのであつた。

病院のむかうに、何かの小高い大木が、黒い梢を、今日の薄霧の中にひらいてゐる。その木の上あたりに、鳥が一列になつて、南の方から飛んで來た。

海をわたつて、品川の方から、都を西北へわたつて行く雁の群れであつた。

おもはず足をとどめて、ぢつと見上げてゐると、梢を越した頃から、Cの字を見せてゐた列のすがたが、Iとなり、Jとなり、Mとなり、頭の上に來たときにはWをゑがいて、みるまに護國寺の森の上まで行くと、それがUとなり、またそれを逆しまにしたり、引延ばしたりして、池袋の野にさしかかつた頃には、黒絲を四五寸横にひつぱつたやうになつた。黒絲はやがて鼠色となり、次ぎには灰色となり、次第に曇りの中に溶け込んで行つたが、眼を凝らすと、灰色の一筋が、なほ空に殘つてゐる。

けれども、もうそれは、自分の網膜の微かな名殘にすぎなかつた。

「いくつぐらゐ、ゐたであらうか……」

私はふとさう思つた。そして、心にかぞへてみて、三四十羽に近い數であつたのを思ふと、今さらのやうに驚かれた。そして、ああした雁の共同生活といふものに、非常に心を動かされたのである。

鳥よ鳥、われ中空に飛べよ鳥と、むかしの歌のパロデイを、ひとり心にくちずさんだ。

そして、自分も、あのやうな移住を、飛行をとあこがれたのであつた。

この近年、私はすつかり定住的な人間になつてしまつた。流浪と漂泊とで、少年時代をすごした私は、今ではいつも、都の一隅の書齋に打座する人である。

もとより、私の流浪はたのしいものではなかつた。私はその不安、その心細さの苦愁を、底のをりまで味はつたと思つてゐる。もう一度、そんな經驗をしたいとは、決して思はない。それは空をわたる候鳥（わたりどり）のやうな、自由な衝動にしたがつたものではなかつたのである。

が、その流浪生活を脫し得て、しづかな家居の人となり得た今日、私はあの鳥の衝動が、自分の胸に深くも根ざしてゐる事をさとつた。

ゲエテが『フアウスト』の中で云つてゐる、「廣野をわたり、海原わたつて、鶴が故鄕へかへるとき、感情が上へ前へと迫り進むは、實にあらゆる人間のうまれつきだ」といふその本能は、私の裏（うち）にも、深く深く植わつてゐるのだ。

ただ前へ前へと、たえまなく行かんかなと叫ぶ、ボオドレエルの旅人の心が、また私の心であつた。

かうして、そのおもひに堪へられなくては、ひとり飄然と旅に出る。家庭の煩はしさをはなれたいために、自分の生活を靜觀したいために、——そんなためにと云ふよりは、むしろ旅のために旅に出る。旅の佗しさを、しみじみと味はひたいために旅に出る。

かうして、旅は私の病となつた。

かうして、私は好んで人のあまり知らないやうな、山間の小さな溫泉場をたづねたり、これと云つて見るところもない、寂しい田舍町で、汽車を下りたりする。

旅愁といふ言葉は、そんな寂しい田舍での、孤獨な旅人の侘しさ、心細さをあらはすのに、まことにふさはしい言葉である。けれども、私はこれをまた、ノスタルジアを譯して鄕愁と云ふ、それとおなじ旅へのあこがれをあらはす言葉としてもつかふ事がある。

家にゐて旅をおもふ旅愁、旅にゐて家をおもふ旅愁——それぞれに、ぴつたり合つた別々の言葉があつたら、どんなにいいだらうと思ふ。

然し、旅愁といふ漠とした言葉に、旅のなやみのすべてを籠めて、それぞれ自分の好きなやうに解釋してみるのも、自由でいいかも知れない。旅にゐて旅をおもふ私などには。所詮、人間は一生の旅人だ。彼の感ずるすべての人間苦は、この旅愁の言葉の中に籠められもする。

×

田舍へ行くと、村の人が見知らぬ旅人にも、朝晩の挨拶をして通りすぎる。丁寧に聲をかけてくれる。

見知らぬ土地に、見知らぬ旅人として過せられるのを、心安しとするものにも、それはまことにうれしいものだ。ぢろぢろ風態を見やつて、默つてすれちがふのにくらべては、どんなにか親しくなつかしく、氣持がいいか知れない。

甲府の里垣村にゐたとき、毎日の散歩に、細い草みちを辿つて、雨に洗はれた山路の石には苔むし、木の葉、草の葉のかぶさりかかるのをわけて、裏山の小さな祠の前に出たとき、一人のお婆さんが、甲府からの歸りと見えて、何か包みをさげて通りかかつた。せいの高い、瘦せぎすのお婆さんであつたが、私の顏を見ると、まるで隣の總領息子

にでも聲をかけるやうな調子で、親しげに聲をかけてくれた。
その親しさにつり込まれて、私も笑つて話をしかけると、お婆さんはうれしさうに、いろいろとその邊のおもしろい事どもを敎へてくれた。
「この上の高い池に、片方眼のない魚がゐまして、その魚をとると、あのあたり一帶が、荒れますので……」といふやうな話を。
かうして私は、その路をお婆さんの家のある方へと、つい一二町もついて行つてしまつた。
そして、こんな事は、田舍では格別めづらしくはないのだ。
田舍へ行くと、人の心と心とが、都會よりも、もつと密接に結びついてゐるのを感じる。
都會では、殊に山の手の屋敷町などでは、隣同士でも、大抵はあまり深い交渉がなくて、時には隣の人がどんな人やら知らないで、何年もすごすやうな事もある。
田舍へ行くと、さうではない。一村はまるで一家族ででもあるやうに、その生活は密接に結びついてゐる。
それだけ、一面から云うと、都會生活が自由なのに對して、田舍は窮屈で、うるさい事が多いとも云へよう。
田舍生活をしてゐると、自分一個の生活でも、自分の意志でばかりは出來なくなる場合も多いのだ。
そこに若い心が田舍を厭ふ理由の一つがあると思ふ。都會は若い心を誘ふいろいろのものを有つてゐるが、とりわけ、その何をしようと好き勝手で、誰一人氣にかけるものもない、極端に自由なところが、大いに心を惹きつけるであらうと思はれる。
けれども、少し歲をとると、田舍のいいところがだんだん分つてくる。
「神が田園をつくり、惡魔が都會をつくつた」といふ詩人の言葉を、ナイーヴに受け容れようとは思はないけれど、

私は一切の健全なものの根元である田園が、地方が、非常に重い負擔のもとにあるやうな現在の我國の狀態を、憂ふべき現象だとおもはずにゐられない。

地方民を搾取しつゝある都會人として、我々は單純に、自ら被搾取階級と呼び得る權利があるであらうか。私はそれを疑ふ。

いかに流行とはいへ、南獨のトルエルなどいふ產業地方の出身であるマルクスを鵜のみにし、ボルシェビキ流の都會中心主義、機械主義を鵜のみにしなければいけないといふ理もなからうと思ふ。

詩人福士幸次郞氏の地方主義の提唱は、從來あまり人の注意を惹く事がすくなかつたけれど、耳を傾けなければならぬ點が多いと思ふ。今や、農民文學のおこるべき時が來た。福士君もまた、多くの友を得べきである。福士君は詩人であるから、その說には獨斷も多からうが、私は理論よりも、人の熱誠を重しとするものである。

福士君は單に地方主義を唱へるばかりでなしに、自ら東京を捨てて、鄕里の弘前の田舍へ引込んで、鄕土のために働いてゐる。先年上京したとき、私の家へも寄つてくれて、その土地の方言で書いたおもしろい詩を讀み上げて、自ら譯して聞かせてくれた。また、私にも東京を捨てて、田舍へ入つてはとすすめてくれた。けれど、私には田舍のい い事もわかり、地方主義の根據にもうなづくところがあるにも拘はらず、福士君に從ふ事が出來ない。恥かしいやうではあるが、また考へれば、私にはまた私の道があるであらう。私はいかに定住的だとは云つても、實は一種のわたり鳥なのだ、旅鴉なのだ。私の思想が何處へ私を連れて行くか、自分でもわからない。

×

いつであつたか、朝鮮から女の人の手紙を貰つた。

いつもの詩を愛する若い女性の一人であらうと思つて封を切ると、それは思ひがけない人であつた。私を知つてゐ

る人、と云ふよりも、私が知つてゐる人であつた。私がまだ一少年で、朝鮮の密陽といふ土地にゐた時分、私の家では、やはり同郷の人で、Fといふ人と親しく交際してゐたが、そのF氏の娘さんであつた。かへりみれば、もう二十何年も昔の事で、當時まだ、お母さんのふところに、可愛らしい赤ちやんとして憶えてゐる人が、今ではもう立派な娘さんになつて、學校につとめてゐられるといふ事を知つて、歳月の慌しさを思はずにはゐられなかつた。

まだ青年のつもりではゐるのだが、私もやつぱり年をとつた。あのとき若盛りであつた、瀟洒なF氏も、今ではもうかなりの老紳士となられた事であらう。二十年ぐらゐは、實にわけもなく過ぎてしまふ。

この思ひがけないたよりは、私を二十何年の昔に引戻して、いろいろの事をなつかしく思ひかへさせた。あの洛東江の支流に沿うた日本人部落の中で送つた日の事、またF氏一家が今ゐられる釜山で暮した貧しい移住者の生活の事を。

ずつと以前、洲崎の果て、水の多い掘割の間などに建つてゐる、軒の低い、トタン屋根の家のあたりを歩いてゐたとき、ふと植民地にでも來てゐるやうな氣がして、何といふうら寂しい人生だらうと思つた事がある。暗くたよりない、生を一葦に託すると云つたやうな、はかない感じすらもした。家といふよりも、むしろ天幕の生活に近いやうな、わづかに雨露を凌いでゐると云つたやうな家の中で、澤山の人間がうようよしてゐるのを見ると、自分の少年時代に見た釜山での生活を思ひ出さずにゐられなかつたのである。

私の一家が彼の地に渡つた時分は、あのやうに隨分昔の事だから、今では何事も隨分變つたらうと思はれる。が、あの雜然混然たる貧しい人たちの雜居生活は、今はどうであらうか。

一軒の家が、まるで蜂の巣のやうに分割されて、その一間ごとに、夫婦親子三四人づつ入つてゐるといふ風で、一軒の家に、すくなくとも四家族位は住んでゐる。だから、その朝晩の騷々しさと云つたらない。

私はいつもその頃は、家に歸るのが厭やで、雨さへ降らなければ、外にばかり出てゐた。そして、あの朝鮮の諸土道を、うろつき廻つたものである。漂泊は私の運命であり、私の學校でもあつたかも知れない。

その洲崎あたりの海近いところに、子供たちのワイワイ云つてゐるそばに、寂しく一人しよんぼりと立つて、別段一緒に遊ぶでもなく、それを見てゐる子供を見て、自分に似てゐる子だなと、ふりかへつて見た事をおぼえてゐる。

そんな事をふつと聯想しながら、私はF氏の令孃にこまごまと返辭をしたためて、そのあとに、昔歩いたあとを、も一度見たい氣がするから、いつか閑暇を得たら、再び御地に遊んで見たいと思ふといふ事を書き添へたのであつた。

ジョオジ・ギッシングのライクロフトは、田園に閑雅な餘生を送れる身になつてから、むかし倫敦で自分がさんざん苦しんだ場處を、も一度見に行きたいといふ誘惑を感じてゐる。犯罪者のその犯罪の現場を見に行かずにゐられない犯罪者心理は、今では誰でも知つてゐる事であらう。そして、貧乏も一種の犯罪であるまいか。そして、おもへば私も、いかにあはれな少年犯罪者であつた事であらう。

だが、とにかく、私もここまで來た。なほ私は歩かねばならぬ。折角生れて來た一生である。いろいろな事をしたい。自分の力の限度を測つてみたい。自分に許されてゐるだけの深さと廣さとを生きたい。私は生きたい……雁はかへつて行く、心では私も飛ばう。(昭和二年十一月)

落葉の頃

葉が大分黄ろくなつた……かう思つて、通りのプラタナスの並木の、一本の木毎に、まんなかが黄色に燃えるやうに、早や早やと色の染まつた葉を見つつ、外出から歸ると、うちの庭の楓の紅葉も目につく。それから、うちの庭に

枝を伸ばしてゐるむかうの家の柿の葉のむしばみも目につく。
十月の末から十一月の中頃までが、紅葉の美しいといふ伊香保の谷の、湯元に近いところのレストオランの頬のつややかな、西洋人むきの十八九の娘が、ガラス戸ごしの九月の青みこんだ楓を見つつ云つた
「どうかそのせつは又おいでを」と。
木毎の紅の色の濃淡雜多のながめを見せたいとも云つた。もうその谷のもみぢは、今日この頃見ごろであらう。山の深い深い朝ぎりの中に、楓のまつかに染まつた落葉が、點々と散り亂れてゐる上をそぞろ歩きするいでゆの秋。
うちの庭の楓を見つつ、思ひをはるかに走らせつつも、日毎に、日毎に、たゞ横文字の本のこまかい蟹の走りのあとを追うばかりで、今年は慌しく秋も暮れた。思想の生活にすつかり浸つてゐるものには、自然を見ても、これをしみじみ味はふ餘裕はない。その見る眼は空洞の眼である。いかなる具象を見ても、その見るものは常に抽象である。
抽象の世界に氣を奪はれて、具象の世界を忘れるのは、決して好ましい事ではない。
私はたまたま思索と讀書の世界から解き放たれて、受働的な無心な心で、自然を眺めてゐる自分を見出したときは、何となくうれしいと思ふ。そのとき本當に世界を見る眼が働いてゐたのだと思ふ。ひとり自然ばかりではない、人間を見るときも、かくありたい、當體にすつかり卽して見たいものだと思ふ。
落葉の頃になると、また今年も逝かうとしてゐる……と、今更に月日のあしの迅さを思ふ。新綠のころ、みづみづしく、燃え立つやうであつた匂はしい木々の色、草々の色のうつろひに、この半歳の間のわが生活をしみじみと思ひかへす。夜おそくまで起きてゐると、背中が寒くなるやうになつた。夜も更けて、何がなしに疲勞をおぼえて、甘味がねがはしくなつて、火鉢で紅茶を煮る。砂糖を入れて、しづかに唇にもつて行つてゐると、戶外でばらばらと木の葉の落ちる音がする、一しきりばらばらと落ちて、またしんとする……

落葉する夜、ひとり本にしたしむのも、思へばたのしい業である。（昭和二年十一月）

新春

黄色い靜かな日ざしが、低くひろく、張り替へたばかりの障子に、ぱつとあたつてゐる。風はない。何となくおだやかな、のどかな晝である。あたたかな火鉢にもたれて、もくねんとしてゐると、おのづと心もひつそりとなごむ。さういふ時に、

「カチ……」

また、しばらく間をおいて、

「カチ……」

と音。いつとなく、聞いてゐながら、その數を讀んでゐる。と、五つとかぞへてから、はぢけるやうな若々しい娘の笑ひ聲の中で、もうその音は絶えた。つきそんじたものと見える。

それはもう十五六年もまへ、私がまだひとり身で、郊外の貸間で、語學の勉强をしてゐた時分の、一つの情景であつたが、今に忘れないでゐる。正月が來ると、さすがにこの騷がしい都の中でも、かうしたのんびりした情景に接する事が出來る。

少年時代の幾年かを、遠い植民地ですごした事のある私は、その土地での內地人たちが、それぞれに自分のお國風の正月の迎へ方をするのを珍しいものに思つたが、東京でも、やはりその植民地と異るところはない。でも、とにかく一軒の家をもつて、その家の中で正月を祝ふのは樂しい。あの時分は、一つ家の中に、一間毎に、似たり寄つたり

の境遇の人々が、間借の暮しをしながら、かたばかりの正月を迎へてゐたのだ。私の家でも、國にゐた時は、賑やかに酒男たちが餅つきをしたものを、そこでは餅なども、少しばかり買つて來たやうに思ふ。

その父母のところをも離れてからの私は、長いこと、もう正月らしい正月は迎へた事がなかつた。やうやく家をもつやうになつてから、自分らしい正月を迎へるやうになつたが、それがまた、やつぱり違つた意味での寂しいものである。家にこもつて、屠蘇を祝ひ、餅を食べて、あとは本を讀むのだ。暮から旅に出て、信州あたりの寒湯といふのに入りたいなどと思つてゐても、いよいよとなると、やはり家にゐて、自分の部屋の中で、三ケ日をすましたくなる。しかも、心の中では、青い麥生の上に海の見える南伊豆あたりの元旦の風光、日の丸の旗が丘のかなたにチラチラと見える樣などを想ひやつて、心をそそられつつ。

新年になると、俳句を作りたくなる。門松などを見てゐると、つい俳人めいた感興が湧いてくる。悲しまず、喜ばず、淡々として、自然と人生に對する人の心持がおもはれる。然し、句は出來ない。私は旅に出た時でなければ、句が出來ないといふ、不思議な俳人なのだ。して、その得意の句といふのが、一向、句になつてゐない事は云ふまでもない。

舊臘、詩人の組合を組織するについて、發起人會を開くからとの事で、私もめづらしく出席して、久方振りで諸詩人に會つたが、その折り室生犀星君と一寸句談をした。私は室生君の俳句に敬服してゐるものの一人だが、聞いてみると、句作は容易でないらしい。手紙のはしに書く卽興の句などならば何でもないがと、室生君は云つた。私には、いつも正月には、必ず元日に、キチンと羽織袴で訪ねてくれる一人の俳人の友がある。この十年間、この吉例の違つた事がない。俳號を萬戸といふ。彼はよく近詠の句を知らせてくれる。それが私の俳諧心を刺戟する。けれど、私には室生君のやうな俳才がないやうだ。また、才能の點ばかりでなく、日本的といふ事をやかましく考へるほど、私な

どはヨオロッパ的になつてゐるのだといふ氣もする。

第一、私には時代の動きと全然緣を絶つて文人墨客の風流の世界に閉ぢこもる事が出來ない。文學といふものをすら、今の文學者の解釋よりも、ずつと廣義の、社會批評的の仕事として考へたいのだ。そこから非專門主義の意見も生じ、俳諧不熟の結果も出てくる。が、それもこれも自分らしければよい。

年頭、まづ、日々是好日と誦する。いい言葉、いな、いい智慧である。この遠觀に住するや、大晦日も元日も、共にこれ一樣の好日である。私などは云ふまでもなく、日々是好日どころか、とかく不好日ばかりが續きがちである。それでもまあ、正月は、何としても好日だ。とにかく、めでたいものに思ひたいと思ふ。殊に、煩はしい世の義理にもかけはなれた生活の氣安さに、夜など、ひとりすわり込んで、この一年の中にし遂げたい事を、あれこれと考へてみるのも樂しい。そして、「まあ、やれるだけ、急がずあせらずにやらう」と思ふ。（昭和三年一月）

冬の土

×

どの宿屋も、雨戸をとざし、硝子戸をくり出して、すつかり冬籠りのかたちだつた。

夏場の雜沓はもとより、私がいつも來る新綠のころや、初秋の時分には、何となく引き立つて見える通りも、霜枯れの十二月とて、人影ひとつなくつて、あの一日に何度となく廻つてくる、ふかし芋をふれ賣りする男さへも姿を見せない。

廊下の外の硝子戸には、夜になると、べつとりと一面白く息吹がかかつて、霧の流れの荒さを告げ知らせる。その

霧の海の中、ずつと下の方に、赤い燈が一つ、ぽつちり浮いてゐるのも、夜の船のながめのやうに思はれて寂しい。
新綠の時分には、みづみづしく匂つてゐた山の林も、今はあらはな梢が箒のやうに立並んで、見るからに寒さうな姿だ。散歩に出ても、寒いので、すぐ家へ歸りたくなる。溫かい伊豆の海岸の散策道が思ひやられる。
その寂しい山を引上げて歸つてくると、家の庭の芭蕉葉は見るかげもなく枯れてしまつて、ぢりぢりと焼け焦げたやうに萎み切つた葉の名殘りが、あはれな位である。そのとなりの萱は、黄色に枯れ切つた細い葉が、寒さうにふるへて、いかにも冬の姿の象徵のやうに見える。
丁度その時分に、大阪の新聞社にゐる友が、東京の支社に來た序に、訪ねてくれた。何年ぶりの再會だつたらう。殆んど十年に近いやうに思はれる。友が東京を去つてから、まつたく出會ふ機會もなくてすぎたのである。そして、私の方で、辛うじてその日その日をすごしてゐる間に、友はもう相當の社會的地位をも築いて、でつぷりと肥つて、紳士としての風格も出來た。一つ年長でもあるが、昔から私に對しては、友は常に一日の長をもつてゐた。今會つてみても、やつぱりそれは同じ事であつた。
私たちは、友が家の近くに待たせて置いた自動車に乘つて、友の社へ行つて、それから二人で銀座を歩いて、京橋の附近の或る家で食事をしたためながら、それからそれへと、久々の話に、思はず時を費した。
私はふたりが十八九の時分、私が東京から郷里の海岸の小さな町に歸つてゐた折りに、友が訪ねてくれて、座敷で西瓜を食べながら、いろいろな希望や夢想やを談り合つた時の事を思出さずにゐられなかつた。あの折り、二人で寄せ書きをして、私が純といふ字を書き、友が情といふ字を書いた事なども思ひ出された。
あの折りからは、はやもう二十年近くの日がたつた。二人がはじめて相知つたのは、もつと早く、小學校に通つてゐた時分である。おもへば、長い交りである。今殘つてゐる私のいちばん舊い友は、何と云つてもこの友だ。二人は

おなじ町に生れ、おなじ小學校に通ひ、東京へも相前後して出て來た。私が文學のみちに入つたのは、この友の導きがあつたからである。友はまた、小學敎員の講習に行つてゐた折り、私を誘つてくれた事がある。あのとき、私がそちらへ行つたとすると、私の生涯は、或ひは今と變つたものとなつてゐたかも知れない。

そんな事も、考へてみると不思議だし、文學上の兄であつた友が、少し違つた方面に行き、弟であつた私が、今のやうな身の上になつてゐる事も、よくある例ではありながら、妙なものだといふ氣がする。

食事をしたためながら、私たちは、その秋なくなつた德富蘆花の話をした。私たちの長い交遊にとつて、この名前は何と馴染の深いものであつた事だらう。二人が十二三の時分に、いちばんはじめに、一緒に讀んで、その後も長いこと忘れることが出來なかつたのは、蘆花の『思出の記』であつた。それが幼い日の漠然たるあこがれに、功名心の火を點じたと云つてもいいであらう。

私は蘆花先生には、つひにお目にかかる機會もなかつた。三四年前、山の溫泉に行つてゐたとき、德富さんが來てゐられますと云つて、人が知らせてくれた。ふだんから氣むづかしいと聞いてゐる上に、旅先きの淸閑を驚かすのは好ましくなかつたので、訪ねたいとは思はなかつたが、よそながら姿を見たいといふやうな、靑年風な氣持も一瞬起つたのを憶えてゐる。その折り、同行のものは物聞橋の處で、歸京の自動車に乘らうとしてゐた一行にお目にかかつて、言葉を交したと云つてゐた。

そんな事を話して、友と二人で、しばらく少年時代を偲ぶ氣持になつた。

それから二人は歌舞伎座へ行つて、二幕ほど見てから、私は友を東京驛まで送つて行つた。友は別れるときに、是非そのうち大阪へ來ないかと言つた。今年は私も關西へ行きたいと思つてゐたので、少し溫かくなつたら行かうと答へた。

新年に、小田原の別莊に行つてゐる若い友達に招かれて、二三日行つてみるつもりでゐながら、いろいろと煩はしい事が出て來て、いつか箱根行の電車で通つた事のある、あの光圓寺といふお寺の前を、上へ上つて行く道の奥にあるといふその別莊や、もう夏蜜柑や橙の熟れてゐるといふ温かいその土地の氣候やらを想ひ見るばかりであつた。

客も一寸とだえて、少し心が落着いたままに、ぢつと机にむかつて、今年したいと思ふ事どもを、あれこれと思つてゐると、ふと、今日までの自分の歩き方が、一筋道をふりかへるやうに、はつきりと眼前に浮び上つた。

その心が、つねに内へ内へと向ひ、ただ一點に集つて、そこにあるかなきかの標本を建てようとしたのが、これまでの自分の行き方であつた。その生活は、つねに求心的に動いて、みちを狹く、狹く、孤獨の穴に潛んで、ひとりコツコツと土を掘つて行くもぐらもちであつたので、それを嗤はれもし、あはれまれもして來た自分であつた。然し、それも根本から云ふと、自分の力の不足の意識から生じた結果である。外へ出てはたらくよりも、内に籠つて、力を蓄積しなければならぬといふ、要求の結果である。學校生活をして來なかつた代りに、今、一人の學生として、謙虚な心で昔日の境遇の與へなかつたものを獲得したいと思つたのである。

×

然し、研學は果てがない。何處まで行つても、もうこれでいいと云ふ際限はないのだ。それに、ただ書物によつてのみ人生を學ばうとするのはもとより大變なあやまりで、それはただ人生を學ぶための心の基礎を築くだけの事である。して、既にその基礎が出來たと云ふのではないが、このごろ社會的な問題に興味と關心とを多く持つようになるにつれて、もつと積極的に外へ出て働きたいといふ要求が、だんだん强くなつて來た。

大阪の友と話してゐる間にも、私は深くその事を感じた。そして、活社會に立つて働いてゐる友の姿が、凛々しく男らしいものに思はれてならなかつた。私は、本質的に實務家や、社交家としての天分を與へられてゐないので、さ

うといふ風にはなれさうもないけれど、何等かの形で、もつと積極的になつて人生の激流に身を投したいといふ氣持が強く起つてならない。それがどんな形で實現出來るものか、自分にもわからないのだけれども。

それも、だんだんはつきりして來るだらう。龜のやうにのろい歩みの自分にとつて、いつも邪魔になるのは。心の一角にひそむ性急さである。はやり心である。それが全くなくならねば、私も安心の人とは云へぬ。

「薔薇ならば花咲くべし」といふ句は、若い心の逸りには、よき慰勵の言葉であるが、今の私の心には、「雪し溶けなばあらはれん」の句の方が、一層しみじみと感じられる。惑ひも、疑ひも、また外からの誤解も、叱責も、すべてが溶けたときに、はじめて自分の本來の姿が現前して來るであらう。然し、それを空しく待つのはいけない。つとめにつとめなければならない。努力と精進とだと、また今年も、おなじ事を思ふ。

どんな一生を送らうか。人の一生を見るごとに、おのが身にひきくらべて、行末の身のほどを思ふ。功成り名遂げて、靜かに晩年を送る事の出來る幸福な人もあれば、刀折れ矢盡きて、悲慘な最期を遂げる不幸な人もある。然し、幸といひ、不幸と云つても、それはあり合せの淺い概念で見るだけの事であつて、眞の深い生の相から見ればどうあらうか。いづれが幸不幸かは、結局はわからないであらう。然し、要するに、あれも一生、これも一生だ。事終つて見れば、それもこれも等しなみの人の一生に過ぎぬ。

こんな一生を送らうと、思ひ定めて見ても、思ひ通りにならぬのが、人の運命である。そこに人生の不如意もあるが、また人生の妙味もあるのだと思ふ。

とにかく、自分らしく生きられればよい、私も私らしく生きたいと、年頭にあたつて、しばらくそんな事を考へた。

×

小田原へ誘つてくれた若い友が、今度は信州の菅平へ、スキイに出かけて、そこからたよりをくれた。

「山へ山へ、雪の高原へとあこがれて、この四阿山麓にまゐりました。はたして高原は深い雪に埋れてゐました。」と友は書いてゐる。

「途中まで、村の人が、雪橇を曳いて、迎へに來てくれました。白樺の林の中を、橇に乘つて、高原へ高原へと向つて行く氣分は、ネフリュウドフではないが、雪のシベリアを想はせました。山では十年の知己でもあるやうに、人なつツこい人々が、心から迎へてくれてゐます。雪の具合もよく、スキイも二日で、すつかり直滑降が出來ました。いかにも男性的です。きのふは、雪の降る中で、莊嚴な山の虹を見ながら、月の光が雪原を、銀いろに照す頃まで滑つて來ました。

白根、四阿、淺間、猫岳にかこまれたところで、遠く妙高、黑姬、飯綱の山々が見えます。」

「いま朝の八時ですが、山では一時間、時計がおくれて、まだ七時です。一行は疲れて、まだ夜中の有樣です。外は雪が降つてゐます。ゆうべ電報が來て、一行のうち一人は、その愛人の急病のため、この雪の中を下山する筈です。さびしさうです。

兎汁に雉子そばの御馳走、やまがらが群れて庭に來て啼き、雪の上には兎の足あと、すべてが原始的な感じを起させます。ひどい寒さなのでペンが凍つて、思ふやうに書けません。炬燵であたためては書いてをります……」

こんな風に、友はその山の生活を知らせてくれた。私は雪の降る中に立つてゐる山の虹、雪の上の月光の銀いろを想像して、雄大な氣持になつた。そして、そんな經驗をしてゐる友を祝福した。

旅もいいし、讀書もいいが、また、もつと激しい、おのれと人の心臟の鼓動を聽く事もいゝ。生きてゐる限り、人はいろいろの經驗をしなければならぬ。出來るだけ豐富な生を生きねばならぬ。貧弱な過去しか持たぬ私は、このごろしみじみと、自分の經驗の不足を感じてゐる。出來るだけ澤山の、出來るだけ深い經驗を重ねたいと思ふ。それゆ

ゐの生命ではないか。

然し、その經驗を眞にその內生命の經驗たらしめるためには、人は心の强さを有たねばならぬ。深くその眞髓まで徹する心を持たねばならぬ。ただ一心、その一心が肝腎なのだ。

世には、あだかもアメリカの或る種の映畫の主人公のやうな、强い刺戟的な經驗を經て來ながら、人生から何物も學び得なかつた人は、いかに多い事だらう。

私は以前、ある人の自叙傳を讀んで驚いた事がある。その人は、私と同鄕の人であるが、靑年時代に鄕里を出て、それから各地を放浪して、その間に、或る時は、主家の金を費消したため入獄したり、或る時は商賣の女と情死を企てて、ひとり生き殘つて、そこから逃亡したり、その他いろいろの特異な經驗を經てゐながら、それを書いてゐる自叙傳は、講談ほどの意味をも有つてゐないのに、私は驚いたのである。

それはその人が、文學者でないため、表現の術を知らなかつたからでもあらうが、そればかりではない。それから人生の意味を見出す事が出來ないのは、その人が人生から何等の哲學をも引き出し得なかつた事を想はせる。

それだけの豐富な經驗は、あだかも、田舍の親爺さんが、江戶前の料理をたらふく食べたのにも似てゐる。ただ、がつがつと貪つただけなのだ。ただ、空しく生を濫費したのに過ぎないのだ。それだけで、はつまらないと思ふ。

先日、古い友の一人が訪ねて來て、他の共通の友の私行を非難して、不道德として叱責した。が、私はその非難についで行けなかつた。それは寬容を最も重んずる心になつてゐるからであるが、それればかりでなく、私にとつては、十年もその上も、何一つしないで、なまけて暮すといふやうな事こそ非難すべきで、女性の間にその力を費すといふやうな事は、あながちに非難すべき事ではないと思はれるからだ。人間は弱いものだから、あやまちもし、迷ひもするであらう。然し、それにもめげず屈せずに、ますます先きへ先きへと進み、高く高くと登るべく、努力をするもの

こそ、眞に生きたいといふべきである。

ゲエテの哲學は、まことに正しい。終りまで努力するものこそ、救はれる。惡をしまいがために、善をもしないものが、最も惡である。女性の間に力を費しつつある友が、そこから何ものをも學ばず、いたづらにその精力を浪費したのに過ぎないならば、悲しむべきである。然し、それとても、非難すべきものかどうかは分らぬ。(昭和三年一月)

靜夜日記

――日。

希臘人は人生の夢を最も美しく夢みた人種であるといふ言葉には、非常に深い暗示がある。

人生を夢と觀ずるものも、またその夢を美しく生きねばならぬ。

――日。

人間ほど自由にあこがれ、自由を求めてゐて、しかも自由に堪へ得ないものはない。

自由を與へられると、必ず、その自由を破るが如きものを造らずにはゐない。

又。

自由は容易な事柄ではない。それは最も危險な贈物である。自由に堪へるためには、人は悲劇に堪へる力を有たねばならぬ。

自由をあがなふ努力は、決して輕少なものではないが、自由を保持する努力に至つては、想像の及ばぬ位に大なる

ものである。

一日。
人生は與へられたものではなく、自ら創るものである。

一日。
生とは？
曾つてありしものであらざらんための努力である。絶えざる變化である。絶えざる前進である。
曾つてありしもので常にある事に滿足するときは、即ち死である。

一日。
人間は自分の上を飛び越す事は出來ない。しかも、自分の上を飛び越す事が、人間の必須の、最高の事業だ。

一日。
憂鬱に二通りある、精神の偉大を示すものと、その卑小を示すものとである。
多くの憂鬱は、個人的動機にもとづくがゆゑに、他人の眼にこころよきものとして映じない。
然し、世には甚だ稀れに、壯大なる憂鬱がある。快活とも、憤怒とも、激情とも見えるが如き憂鬱がある。
自分は自分の憂鬱が、多くかやうな壯大なものでなくして、ありふれた卑小なものである事を悲しむ。

――日。

一人のモダン・ガアルに會ふ。

その爽かな感觸を愛す。

彼女は北國の林檎の如く味はれる。

彼女と對坐しつつ、自分は曾つて自分に與へられた中世紀人なる評語を、想起せずにゐられなかつた。

彼女のあまりの技巧的擧止を、彼女の美に於ける贅肉の如く感ずるのは、おもふに自分がモダンならざるがためか。

すべての男子を喜ばしめようとする彼女の生に對する善意は肯定せられる。然し、それが未だ技巧的なわざとらしさを伴ふのは惜しむべきである。

技巧は技巧を超えるとき、はじめて完きものとなる。

餘りの技巧化は、結局、機械化である。娼婦は機械化せる女性である。

心動かずして、人を喜ばしめようとするのは、娼婦の事である。

然し、彼女は娼婦であらうか。私には一つの謎である。

又。

流眄はモダン・ガアルの禮儀である。

――日。

Cと會ふ。

露西亞文學の研究者と云はれる某といふ人が、ボタアペンコといふ作家を知らなかつたと云つて、輕蔑して語る。私は幸ひに、ボタアペンコを知つてゐたので、——何しろその短篇を飜譯した事があるのだから——その點大に工合がよかつたが、然し、ボタアペンコを知つてゐる事は、毫も自分の價値とはならない事を、幸ひに私は知つてゐる。
知識は借り物である。それは人間の精神にとつて、あだかも肉體の美に對する衣裳の美に類してゐる。
知識を最上のものとして、それのみを以て人間の價値を測らうとするのは、大きな誤謬である。しかも、それはこの可憐な青年のみならず、堂々たる學藝の士にも、甚だ多くその例を見出す事は、悲しむべき事態ではあるまいか。
私自身も、少年時代には、本を讀まぬ人間は、みなつまらぬ無知な人間だと思つてゐた事があるが、三十歳を越してなほ、自他の無學に對する本能的な羞恥と蔑視との抑へ難きものあるを恥づる。
もとより學藝の士が、その據つて立つべき地盤である學識を缺く事は、致命的な缺陷であらう。然し、ひとへにそれのみをたよりとするところに、それらの人々のつひに智慧の人たり得ない悲劇がある。
無知無學の人——眼に一丁字なき農民や勞働者が、かへつてより多くの智慧を私たちに敎へてくれるのは、彼等が空しき知識によつて、心眼を曇らされないで、直接に人生を觀てゐるからである。
いろいろその說明をしたが、Cがそれを解してくれたかどうかを危ぶむ。

——日。
表現せられない誠實は、誠實であり得るや？
これは深く考ふべき問題である。

――日。

この頃、故人を思ふ事が多い。
若くして死んだ美しき人々よ。
Rよ、Yよ、Aよ、Sよ……
あの利發であつたRのまるい眼をおもひだす。
ふるさとの不老園の池のほとりで、少年少女が三人で、花を摘んで遊んだのは、もう二十何年も昔の事である。花は白粉（おしろい）の花であつた。撫子のやうな色の、何かいたいけな小さな花で、その蔓を手で採むと、パチッと黒い實がはじける。子供たちには、それがたまらなく嬉しいのであつた。
海邊の砂濱に近くつくられたその海水浴旅館の庭園は公開されてゐて、町の人の入る浴場もあつた。その日本海に面した小さな町は、私の生れた町から二里あまり離れてゐて、私の父母の生れ故郷であつた。
十八歳の折り、半歳あまりそこに歸つてゐて、あんなに堪らなく厭やなうるさい土地だと思つたものが、今こんなになつかしく思ひ出されるとは、不思議な事である。
Rはその折りには、もはやこの世の人でなかつた。彼と遊んだのは、ほんの少年の時分であつた。彼はいつまでも、少年のままの姿を私の心に殘すであらう。
彼は私より一歳下であつたから、今生きてゐたら、かなり澤山の子供の父となつてゐたかも知れない。
あの小さな町で、算盤をはじいたり、帳簿を記入したりしてゐる彼の姿を想像するとき、私は夭折した彼を悲しむ事は出來ない。
あの折りの少女は、今も生きてゐる。然し、今會つたら、どんな感じがするであらうか。色も香もない人生のあり

のままの姿に、詩にもならぬ悲哀を感ずるであらうか。
それにしても、私はよくも生きのびたものだと思ふ。

――日。

ある嫉妬ぶかき人の事を聞く。

不幸な人よとおもふ。

「他人の幸福」と題するエッセイを按ず。

子供は菓子や果物などを分けて貰ふと、これでない、あれをと言ふ。他の子の貰つた方が、いつも大きく見えるのだ。然し、人間は大人になつても、この感情だけはつひに變る事がない。

他人の有つてゐるものは大きく見える。これが多くの嫉妬の不幸な理由である。

若し私たちがその羨望し、嫉妬する他人の幸福の實際を見るときは、その不幸な感情は直ちに消滅するであらう。

彼はその他人もまた、他人を羨望し、嫉妬してゐる不幸な人間である事を見出すであらう。

幸福は常に他人のところにある。これが人間の不幸な運命だ。

私たちは多少ともあれ、その嫉妬ぶかい男を、自分の中に持つてゐる事はないか。

その嫉妬ぶかい男を完全に殺してしまつたとき、私たちの幸福の道ははじまるのだと思ふ。

嫉妬ぶかい人ほど、他人の事件に關心する。他人の事を氣にせずにゐられないのは、その魂の卑小な證據である。

――日。

多くの詩人は言葉を與へる。華麗な、豐富な言葉を與へる。言葉の代りに、その靈魂を與へるものは、極めて少數である、そして、その少數の人によつて、私たちの生命はその糧を得るのである。
いかに弱く小さくあらうとも、私たちはどうか靈魂の詩人でありたいものだ。

――日。

國民の夕刊で、德富蘇峯先生の『統一病に罹らんとせる日本』を讀む。私の漠然と考へてゐたところが、頗る明快に論ぜられてゐる。時弊を突いた適切な論である。
その中の政治方面についての言葉は姑らく措いて、近時の流行的現象についての觀察、例へば、銀座街頭の青年等の、互ひに相似て、その差別に苦しむ如きは、面白き觀察であるとともに、たしかに事實である。
流行の勢力は、國家の權力よりも恐るべき專制である、統一である。
流行の追隨は、社會的勢力に對する個性の自己否定である。
流行は人が好んで着るところの柿色の獄衣である。
流行が一切を支配する時は、即ち人間の個性の滅却せられる時である。
ゴオリキイの個性絕滅論は、文學上の共產黨宣言とも云ふべきものではなからうか。(なほ疑問なれど)
かくて、流行なるものゝ本質と、近時流行しつゝあるコンミュニズムの主張との間には、或る類似をもつ事なきか。
(これらの點については、なほ深く考ふべし。)
とにかく、自分がコンミュニズムよりも、アナキズムに共感するところ多きは、ある本質的な理由を有するやうに思ふ。

――日。

自然美（風景）も買はねばならぬ。貧しいものは、日光や、新鮮な空氣を買ひ得ないが如く、自然美をも買ひ得ない。然しまた、自然美は、金を出しても買ひ得ないものだとも思はれる。

長屋住居の貧乏人が、一坪の庭の自然美を愛するとき、百萬長者の大資本家が、天下の絶勝の中を、その大投資の胸算用に沒頭して、自動車で疾驅し去るといふやうな事は、めづらしい事實ではないのだ。

風景はこれを愛する人の所有だとは至言である。

ただ、貧しいものは、天下の絶勝に接する機會を與へられぬとともに、又、その一坪の庭をたのしむ時間をも奪はれる。

かくて、Ｋ君は曰く、自然美などを說くのは、ブルジョアの贅澤な放言なりと。

又。

風景は主觀的なものである。

風景はこれに對する人の心象にすぎない。

衣食足つて風景を知る。

――日。

希臘文明の燦然たる光輝を偲ぶごとに、私はその蔭に蠢いてゐる無數の奴隷の痛苦を考へずにはゐられない。

例へばパルテノンの大建築を見よ。あの莊嚴な藝術品を生んだものは、希臘人の天才ではなくして、これらの奴隷

であつたと云つてもよからう。

我國の奈良朝の佛教文化の如きも、また等しく奴隷の力によつて成つたものである。あの誇るべき多くの建築の蔭には、幾多の奴隷の血涙が流れてゐるのだ。こんな事を考へると、藝術といふものについて、いろいろな疑ひが生じてくる。トルストイの藝術論に、曾つてあんなに惹きつけられたのは、實にこの不可抗的な感情からであつた。

自分はつひに藝術派の人ではない。倫理派だ。人生派だ。

——日。

劍のやうな心。世にはさうした心もある。その心の人と人との交渉は、常に白刃を交へることである。自分より上に位するものに對しては、憎惡と嫉妬とを以てし、これを傷けん事を欲し、自分より下のものに對しては、これを侮蔑して快感を貪らうとする。惡魔の心である。

——日。

一歩深く突込んで考へれば、ある思想なり主張なりは、必ず矛盾の上に立脚してゐる事を見出す。矛盾に出會はなければ、それは十分深くないのである。（昭和三年二月）

我家の春

楓の芽

障子のまんなかにはめてある硝子を、大方は障子紙でふさいでおく。その中にただ一ヶ所、障子紙を張らないで、庭さきの一部をはめておく。

その約一尺四方の硝子の中に、これまでにないものが一つ入つて來た。それは楓の芽である。嫩葉である。その細枝からふき出してゐるものの色は、代赭がかつた紅で、芍藥の芽に近い色をしてゐる。まだその葉がひらき切つてゐる程でもないので、丁度花が咲いてゐるやうに見える。

少しくねりを見せた幹の一點にも、やはりぽつちりついてゐるのが、その芽である。これもここ二三日、あるひは四五日の間の、わづかな時の景物にとどまるものではあらうけれど。

芽楓は美しいものだ。その種類によつて、もつと紅く、朱色のもの、さらにまた一段と紅色のものもあり、綠に傾いたものもあるらしい。

かうして庭前の芽楓を見てゐるうちに、私はあの楓のことを思ひ出した。いつか國分寺の八幡の境内で見たものを。それは私のこれ迄に見たどの楓よりも大きい老木だつた。丁度數へて五六本はあつたかと思ふ。社のうしろの御神木の、そのうしろの方の木々の茂みの中に、その楓たちは茂つてゐた。

茂ると云つても、楓のことである、他の木の葉――椿だとか、樫だとか云つたやうな木とは違つて、その層にちつとも重くるしさがない。幾枚も重つても、もともとの葉が薄くて細かいものだから、何となく輕い明るい氣分をつくつてゐたやうに思ふ。

私の見たときは、その木々は、もう芽楓とは云へない靑みをもつてゐた。それは五月のすゑ、もしくは六月のはじめであつたから。

今ごろ行けば、あの楓たちが芽ぶいてゐるに違ひない。やはりこの庭さきの楓ぐらゐの芽をふき出して。

この狹い庭のわづかな眺めを見るにつけても、曾遊の地をなつかしみ、曾つて親しんだ自然、心なく見捨てて來た自然の變りなき姿を偲ぶ。そして、かの土地、この土地 、かの山、この河、かの木、この草を、再びとは見得るか見得ないか、ねがはくば、生きてその自然に、また新しい思ひもて對したいと思ふ。

おもへば、はかない人間の命にくらべて、自然の相は、いかばかり恒久なものであらう。自然は人間の哀歡とはかかはりなしに、默々としてその道を辿る。春は花咲き、葉を出し、秋には枯れる。しかもまた來ん春には、再び芽ぐみ出でるのだ。

一年毎に生えかはる草もあるが、身に親しいものを失つては、その草が枯れたのだとはあきらめる事が出來ない。それが人間の心だ。何百年も經つた老木の姿に、人の命のあまりに短かいのを嘆く。年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからずといふ、昔の詩人の嘆息は、今もなほ新しい實感となつて胸に蘇るのだ。かつて西班牙の詩人ハルツェンブッシュは、知人のアルバムの中に、この一枚の紙が、その上にこの句を書く人間よりも、遙かに長く生き殘るといふ事は、不思議な事であるといふ詩句を記した。

亡き人の殘した草稿は、今私の手許に積上げられてゐる。生命を籠めたその文字の中に、彼は生きてゐるのだ。然し、彼の現身の顏を、私は再びとは見る事を得ない。あれが永遠のわかれであつた――あの柩の中の蒼ざめた顏よ。

亡き人をおもふ毎に、私は生きなければならぬと思ふ。世に生きる事は苦しい事であるが、また、その苦しみの中に慰めもある。たとひ世に盡すほどの力はなくとも、ただその肉親のものを悲しめないためばかりにも、私は生きなければならぬ。

いちばん年若かつた弟は死んだ。彼は兄のために、大きい敎訓を遺してくれたのだ。彼は私が異つた人のやうに、勇ましく世間に出て、苦しみ戰ふ姿を喜んで見るであらう。けれども、この陽のあたる緣さきで、いつも樂しく語り

合つたその一人を失つた我家の春は寂しい。楓の芽は去年のやうに、こんなに美しく萠え出したものを。

青柳

いつも電車に乘る時には、近くの柳町の停留所まで出る。兩切の煙草を一本吸ひ切らぬうちに行けるほどの距離である。

その停留所の少し手前の左側にある寺は、東京でもかなり有名な古い寺であるが、そこの柳の樹が、もうすつかり芽ぶいてゐた。

「ああ、もう柳のころになつたなあ……」

と、ふと心に呟いた。

この町が柳町と名づけられてゐるのは、この寺の柳から來てゐるのではないかしら。さういふ事を聞いたやうな氣もする。この近くの榎町といふのには、古い榎の並木があつて、今でも埃くさい家並の中に、昔の俤を偲ばせてゐるところからも、さうした聯想が湧いてくるのだ。

こんな風に、町の名が、木や草につとつて名づけられてゐるのは、何がなしに好もしい氣がする。青柳町とか、萱町とか……けれども、横濱の町などのやうに、ひどくガサガサした、プロゼイックな町に、あまりにもみやびた名のつけられてゐるのも、不調和な落着かない感じである。

名實相かなふのに越した事はない。これは私たちの生きてゆく上のいろいろな事にも、あてはまると思ふ。

柳と云へば、震災前の銀座を思ひ出す。

今年になつてから、銀座に出る機會が多くなつた。以前、家に閉ぢ籠りがちであつたときには、たまに銀座街頭に

立つたばかりでも、おそろしく神經が疲れたものだが、今はそこに動いてゐるはげしい空氣、時代の息吹を、眺める事をたのしみとするやうになつた。

ただ一つ、私が物足りなく、寂しく思ふのは、そこに美しく靡いてゐた柳の姿を見出す事の出來ない事である。柳の銀座と呼ぶ事の、いかばかりかこころよかつたものを、もうその柳はないのだ。

ルビイや、眞珠や、珊瑚や、ダイヤモンドや、またはいろとりどりの春の衣裳の陳列されたショウキンドウ、樂器類――ヴァイオリン、セロ、マンドリン、樂譜のかづ〱の列ぶ店の前などに、柳がしなやかにその細い線を垂れてゐたのも、今ははかなくなつかしい昔の夢である。

どうしてあの美しい柳を、もう一度、銀座に植ゑてはくれないのか。私は銀座を歩く度每に、その嘆を深うする。

然し、靜かな古風な柳のかはりに、そこには、モダン・ガアルの斷髮がある、踵高の靴がある。それが動く、それが飛ぶ。その生きた風景が、長いこと頭腦の力の下に壓しつけられてゐた心を、强く波打たせる。

冬眠の穴から這ひ出した蛇のやうに、黑土の下から萠え出した草の芽のやうに、私は好奇の眼を擧げて四方を眺める。書物の中の巢から這ひ出して、世界を新しく觀ようとする――それがこの頃の私なのだ。

「書物の塵を拂ひ落して」といふ言葉がある。誰の言葉であつたか、いつ目にし耳にした言葉であつたか知らないが、今それは私の心の言葉である。

あの懷疑家のアナトオル・フランスが、勇ましい社會主義の戰士となつた、その心の變化に、年來、私は非常な興味を有つてゐる。最近、メレジコフスキイの論集中に、彼が巴里の或る女作家のサロンで、フランスに出會つた印象を記した一段を發見して、特に興深く思つた。

そこでフランスは、彼が曾つて世に在つた最大の懷疑家である所以をもつて、彼の社會主義を十分には信用し得な

いで、
「どんなにしてあなたは、懷疑と行動とを結び付けになるのですか？」と問うた人々に向つて、から答へてゐる、
「それは勿論、行動する事は出來ないでせう。が、もてあそぶことは出來ますよ。政治的黨派の戰ひは、私にとつては、すばらしいさいころ遊びです。そして、人間の行動といふものは、みな勝負事ぢやありませんか？」と云つて、フランスは微笑するのだ。

勿論、それはアナトオル・フランス一流のアイロニイであらう。然し、そのアイロニイの底から、私たちはフランスの心の祕密を嗅ぎ出す事は出來ないものだらうか？

懷疑家は最もよく事物の眞相を看破するであらう。政治がつひに巨大なさいころ遊びである事は、冷靜な觀察者の眼から隱し得ない事實である。そして、マルキシズムのタクチックも、畢竟政治運動である。

しかもなほ、書物の中に埋れてゐたフランスが、街頭を旗をかついで歩き出した事實は、私には玄妙な味ひある事實だ。

社會的關心を深くするにつれて、人はおのづと街頭に出る。かくて、いつしかその頭を政治へ突込む。政治を否定するアナキストといへども、そのタクチックを有する以上、全く政治に無關心ではあり得ないだらう。

そこで、私もまた、いくらかづつその方へと動いてゐる。その第一歩といふわけでもないが、まづ、差當つて、私は出來るだけ多くの人に會ひ、出來るだけ多くの社會に足を踏み入れたいとねがつてゐる。かうして、こんな具合に、柳町の停留所へと出かける事が多くなつたのだ。

花漬

湯のみの中の櫻――」

それは京都から來た人に、花漬を貰つた日のことであつた。丁度來合せた俳人萬戸(ばんこ)氏に、その花漬の湯をついで出すと、

「これは結構ですな……今年はきつと私にいい事がありさうです」

素直な心の友は、こんなにナイーヴに喜んで、いかにも俳人らしく、香氣と、舌にほのかな鹽の味の上品な湯を呑んで、その中に美しく開いた花びらを見ながら、

「私にかういふ句があります」と云つて、聲をあらためて、その吟を披露した、

花づけの妙(たへ)にかたむくつぎ湯かな

それから五六日のち。

聰明な美しい眼をしたモダン・ガアルのA子さんが來た折りに、この櫻湯を出した。すると大變喜んでくれて、

「どうしてこさへるんでせうね……」などと、いろいろ訊ねられるままに、このやうにするには、去年の花を摘んで漬けること、パッと櫻が咲いたところを摘むのだと云ふ事など、知つてゐるだけの事を答へてゐるうちに、ふと思ひ出したのは、私がむかし、郊外に住んでゐた折り見た一つの事實である。

そこの或る學院のところには、かなり澤山の櫻があつたが、それが花咲いたかと思ふと、梯子をかけてみんなむしり取つてしまつたので、どうした事だらうと思つたが、多分こんなにして花漬にしたのだらうと云ふと、A子さんは憮然として云つた、

「花がかはいさうでならないわ……」

モダン・ガアルでも、やつぱり女性は女性で、しをらしい事を云ふと思つた。殊に、何事に對しても、異を樹(た)てずに

はゐられない性質のこの人であるだけに。

……それは昨年の事であつた。今年また、花漬を前にして、ふとその過ぎた日の事どもを思ひ起した。花漬には、櫻ばかりでなく、菜の花を漬けたものもあるといふ。今はどうか知らないが、いかにも京都らしいたべものだ。その他、あの柴漬にしても、千枚漬にしても……

かうしてこの湯を呑んでゐると、春四月の京洛の和氣が目に浮ぶ。

退嬰的な氣持になると、あの古典的な、優雅な都市が私をさし招く。三四年前、そんな氣持であつた頃には、私は切に、京都に隱れて住みたいと思つた。

いま私はかうした安住の誘惑を恐れてゐる。古典的なものゝ魅力に囚はれる事を恐れてゐる。

古典を尊重し、古典を愛惜するのはよい。が、それは飽くまでその古典から新しい生命を吸取せんがためであつて、古典のために自れを空しうし、自れを喪失せんがためではない。

私は最近、幸ひにして、京都五山のなにがし、なにがしの老師の謦咳に接する事を得た。いづれもその活氣ある童顏の微笑の中に弱い靑年を鼓舞する力をもつてゐられた。

禪宗こそ私にとつては生ける宗教である。それゆゑなほ進んで、その室内の鉗槌を受けたいとねがつてゐる。が、それが古典的形式と、唐宋以來の死んだ術語とに囚はれたナマザトリになつたのでは、自ら憫れむにも足りぬであらう。

とにかく、何としても、私はまだいろいろな心に觸れ、いろいろな世界に接しなければならない。一切の人は私の師である。どんな人にでも、頭を下げて、私の知らない事を學びたいと思ふ。

弟を失つてから、私ははじめて子供を失つた人の心持が分るやうな氣がして來た。何事も我身につめて感じたので

なくては、本當の事は分らない。その點から云つても、まだまだ多くの事を體驗しなくてはならない。
此頃になつて、しみじみと人生の尊さ、有難さを感ずる事が多い。
曾つては、私もその生を一擲しようと思ひ極めた事があつた。いつそひと思ひに……さうしたラヂカルな叛逆の心が雲の如くに湧き上つたものだ。
今は、もうその氣短かな靑年の狂激はない。
このわづかな生を、名香のやうに、惜しみつつ焚かうと思ふ。（昭和三年三月）

悲劇的生命感

『悲劇的生命感』といふ書名は、その著者の何人であるかも知らず、その內容のいかなるものであるかも知れぬのに、不思議な魅力を以て私を惹き付けた。
ウナムノといふその著者の名は、私のかつて聞いた事のないものでもあり、また、我々日本人の耳には、幾分奇異に響くものでもあつた。けれども、私をとらへたものは、勿論、かかる未知の名に對する好奇心ではなくして、この題目のもとに語られる思想に對するある豫感であつた。
それで早速、その書を求めたけれど、つひに手にする機會がなかつたので、仕方なく、海外から取寄せて貰ふ事にした。すると、その後間もなく、このウナムノなる著者が、新居格氏によつて、スペインのアナキストとして紹介された。すると、また幾月かたつて、麻生義氏によつて、ウナムノのアナキストと呼び得られない、むしろアナキストの排斥すべき中世主義者である事が書かれた。

その時には、私は既に『悲劇的生命感』のみならず、なほ二三、ウナムノの著書を讀む事が出來て、ウナムノその人が何人であるかを、略ぼ知り得たので、私は私として、この著作者を判斷する事が出來た。

して、私の見たウナムノは、言葉の普遍的意味でのアナキストであるか否かは知らず、全一の人、血肉の人間、唯一の自我として生きる人であつた。ウナムノはウナムノであつて、他から何と呼ばれやうとも、あひ拘はる事なき人である。『悲劇的生命感』は、私の當初の豫感にも超えて、私の心をうつた。しかし、それは私のあはれな獨創性に對する大きな脅威でもあつた。卽ち、私はこの人の哲學の中に、私が近年考へてゐる虛無的生命主義、もしくは絕望的勇氣とも呼ぶべき思想に甚だ近いものを感じたのである。

だが、一體、このミゲル・デ・ウナムノといふのは、どんな人であるのか。それはひとり我々日本人にとつてばかりでなく、彼の本國スペイン以外には、せいぜいラテン系の二三國を除けば、ヨオロッパ諸國においても、從來ほとんど全く知られない名であつた。しかも、私が最初考へてゐたやうな新進の人ではなく、既に六十歲をはるかに超え、既に數十年間、サラマンカ大學のギリシヤ語の敎授として、詩人、批評家、作家、思想家として、多くの著述があつたのだ。

政治的には極左黨に屬してゐたので、數年前、獨裁執政官プリモ・デ・リヴェラのために、その敎職を奪はれ、大西洋の孤島フェルテヴェントゥラに追放され、そこからヨオロッパに脫出して、現にパリで流竄のパンを食つてゐるのである。この冒險的事件が、この人の名を廣く世界に知らせもしたし、また、ロマン・ロオランや、ダヌンチオをして、かかる精神の强壓に對して、强いプロテストを發せしめるの機緣ともなつたのである。

ドイツでは、ウナムノをスペインのドストエフスキイとして論じてゐる人もあるらしい。一體、私はかうした我國でもしばしば行はれてゐる日本の沙翁、日本のイプセン、また下つては日本のハイネなどのやうな稱呼には、さした

る意味も見出し得ないし、さう呼ばれる當人にとつても、あまり名譽でもないと思ふものだが、この場合にあつても、ウナムノはウナムノで、彼は唯一の自我であつて、決して他の自我の影ではない筈である。

ただ、しかしかういはれるのには、それ相當の理由も、全然ないわけではないであらう。で、今それらしいものをあげてみると、まづ、兩者に共通なものは、その宗敎意識である。ウナムノはスペイン人としてカトリック、ドストエフスキイはロシア人として正敎といふ相違はありながら、共にそれぞれ自國の國民的宗敎を尊重する事において、相一致してゐる。そして共にその宗敎が、單純なる信仰ではなくして、懷疑と否定との結果の到達點である事も一致してゐる。次いで、顯著な共通點は、そのラショナリズム、マテリアリズムを基調とする西歐文化への反抗である。してなほ面白い事には、ウナムノによれば、スペインはヨオロッパの中に入らないのだ、あだかもロシアが西歐の外にあるやうに。

また、兩者は共に國民主義の傾向をもつてゐる。ドストエフスキイにとつて、ロシアが大きな關心事であつたやうに、ウナムノにとつてはスペインがその視野の前面に横たはつてゐる。そして、彼にとつてのスペイン魂の象徵は、卽ちかのドン・キホオテである。彼の悲劇的生命感の哲學たるや、正にドン・キホオテ哲學とも呼ぶべきものである。

ドン・キホオテの名はコンミュニストによつて、嘲笑的な人道主義者の代名詞とされた。しかも、ウナムノにとつては、ドン・キホオテの偉大なるは、卽ち、その嘲笑される點にあるのだ。キリストが荊の冠をいただかせられてユダヤの民衆の嘲笑のもとに、十字架にかけられたとき、恐らくそこに高貴なドン・キホオテがあつたであらう。ウナムノが「我等の主なるドン・キホオテ」といふとき、我々はそこにかの悲しい顏をしたマンチヤの貴公子の、悲劇的な生涯のより深い意義をおもはずにはゐられないのだ。

人はみづからを生き、みづからまた戰はねばならない、しかもしばしば打破られ、打碎かれつつ。ドン・キホオテの偉

大性は、その嘲笑せられるばかりでなく、打破られ、敗北するところにある。敗北は勝利と同様の値がある。彼は自分を世のわらひものにすることによつて、世に打ち克つのだ。また彼は自分を人にわらはせ、自分自身でも自分をわらふ事によつて、自分自身にも打克つのだ。ここで私はかのブラウニングが失敗における成功の思想を想起する。

スペイン語の中で、他の外國語中に取入れられてゐる言葉に、デスペラドといふ言葉がある。絶望者の義である。そして、この絶望者こそドン・キホオテではあるまいか。セルヴンテスのドン・キホオテは、その最後にあたつて、自らのコミックを悟り、そのあやまちをなげく。がしかし、世には他のドン・キホオテがある。我等の間に、永遠に生きてゐる、不死なるドン・キホオテがある。それは彼の悲喜劇性を自覺した、內面的なドン・キホオテである。して、彼こそは、絶望からして戰はぬであらうか。まことに、絶望からのみ、ヒロイックな不合理的な、狂氣の希望が來るのだと、ウナムノは說く。

實際、絶望を單なる破局、終結の如く解するのは、あまりに常識的な、平板な考へではあるまいか。絶望を知らぬといふ事は、最後まで屈する事なき勇者の譽とされてゐる。もとより、彼等は絶望によつては終らない。が、彼等は果して絶望を知らなかつたらうか。むしろ、絶望に徹し、絶望から出發したのではあるまいか。すべての道の盡きたとき、忽然として新しい道がひらける。

大死一番の語は、實にこの絶望的飛躍の境地を意味するものではあるまいか。ウナムノの最も共鳴するところ多き人、キエルケゴオルはキリスト教を絶望的飛躍と呼んだ。絶望からして、あらゆる合理的な知識を超越した希望が生れ出る。絶望は希望の最後でなく、希望の端緒なのだ。して、この絶望からの希望こそ、つひに破れることなく、碎ける事なき金鐵である。ここにおいて、ウナムノの道は、無窮の天にひらける。信仰の空につづく。彼の最も深く關心するところの、神、及び不滅永生の問題につらなる。

我々は日本人として、かうした神とか、不滅とか永生とかの問題には、あまり深い興味をさそはれない。我々の問題は、靈魂の不滅や、個人性の不死になくして、むしろ死生の超越にある。毫末も死生に相かかはる事なき人が、我々の勇者である。かくて、人事を盡くして天命を俟つが、我々の有つ最も深い智慧である。そして、その境界は、すでに絶望と希望との彼岸といふべきであらうか。しかし、絶望といふ語の伴なふあり來りの概念にとらはれてはならぬ。絶望とさへいへば、直ちに天を仰いで長歎し、展轉反側して終夜寢ねずといふ風な自棄の姿を想出せしめるが、ここでいふ絶望はそれとは違ふ。それはむしろ希望せぬ事であつても、破られた幻惑に殉する謂ではないのだ。

人生はある意味で、賭けである。あるひは、乾坤一擲の大賭博であるかも知れない。我々は必ず勝つものとは定まらない。どんな無慘な敗北をするかも知れない。いつどこで斃れるかも知れない。しかし、それを恐れては生きてゐられない。しからば、勝敗を意とせずして戰はうではないか。戰ひこそ、人間の運命である。我々は日毎に出陣してゐるのだ。この意味を知るとき、我々もまた勇者ではないか。我々もまた絶望者ではないか。たとひどんなに卑小で、平凡であつたにしても、我々もまた生の悲劇感に滲透されてゐるであらう。

織田信長は、桶狹間の奇襲に出陣する前に、馬から下りて、「死なふは一定、しのぶ草には何をしよぞ」といふのであつたが、「人間五十年、化轉の中をくらぶれば、夢まぼろしの如くなり」といふのであつたが、とにかくその愛好する敦盛の一さしを舞うたやうに記憶するが、そのとき、そこに我々は偉大な絶望者を見る氣はしないか。そこに充實した悲劇的生命感を感得する事はないか。

人生は夢である。夢の浮世といふ事は、世俗のことわざたるに止まらず、また最高の智慧の敎へるところである。そして、そこから死生を超越する高い境界が生れてくる。しかしながら、我々は人生を夢と觀じつつも、なほその夢を美しく、力強く生きねばならぬ。死生を超越するとは、死生を棄てかへりみぬ事ではない筈である。ウナムノが「ド

ンキ・ホオテ」とともに、カルデロンの「人生一夢」を取り出して、その主人公ジギスムンドの生涯の意味を語るとき、彼もまたそれを知る人とおもはれる。
ピンダロスは人間を「影の夢」と歌つた。カルデロンは人生を夢と見て、我々をその夢をみるものとなしたが、シエクスピアに至つては、我々自身が夢である、夢をゆめみる夢であるとなした。束の間のいのちの波、窓の障子をすぎる鳥の影、それが人間の生であらうか。いないな、彼の個人性は、そんなにもろく、そんなに速かに滅びてはならぬ。彼のかけ替へのない自我は、その永續を欲する。エタアニテイ――これが我等の努力である、永遠への渇望、それを人間は愛と呼ぶのだ。
ウナムノの思想の中心點をなすものは、このコンクリイトな自我の意識である。燃焼である。ほろぶべきものが、ほろびざらんとする――ここに悲劇的生命感がある。それは深淵である、奈落である。生命と理性とは、相對立する。人間思考の悲劇史は、生命に對する理性の戰ひである。しかし、その思想家が人間にとどまる限り、意識的か無意識的かに、彼はその理性を生命の力に屈せしめるのであらう。それが生の要求だからだ。そして、若し哲學者が、人間でないならば、彼はまた哲學者でもないのだ、ただのペダント、人間のコピイにすぎない。いかにその思想が精神の中に激動しようとも、その心臓の根を抜き去られてゐるなら、單なる思想のかすにすぎない。哲學者が分析し、解剖し、説明しない前の全一な生命の鼓動こそはたふとい、そこに血あり肉ある、全一の人間が息づいてゐる。これ單なる抽象的な言葉としての人類や、人間ではなくして、生きた個人、獨自の個人性そのものである。社會的様式によつてゆがめられず、美的に様式化されず、精神的に教養のために壓倒されず、矛盾と力とに富んだ、生活意志に燃え立つた人間である。
その人間の姿を具體的にゑがき出したものが、彼の『全一の人間』と題する短篇である。即ち、ウナムノの見たス

ペインの男一匹である。その主人公アレヤンドロ・ゴメスー彼は身元さへもわからぬ男で、少にしてキュウバ、メキシコで、獨力巨萬の富をかち得た男であるが、本國にかへつて、ある地方の町でその町一の美人との評判の高い令孃を知つて、斷然これを得んと決心して、つひにその女性の心を得る、またその女性の愛人なる伯爵を卑怯な逃走の醜にさらし、妻の死ぬるや、その死骸を抱いて自分も死ぬのだ。そのスペイン的情熱こそ、ウナムノの悲劇的生命感の源であらねばならぬ。

しかし、ウナムノは血ある肉ある全一の人間を、單にその本國の本能的、意志的な人間にのみは求めない。性格的にこの悲劇的生命を感得する人として、マアカス・オーレリアス、聖オーガスティン・パスカル、ルソオ、シヤトオブリアン、セナンクウル、トムスン、レオパルヂ、キニイ、レナウ、クライスト、アミエル、キエルケゴオル等をあげて、それらをすべて知識よりも智慧の人と呼んでゐる。そして、これらの名前は、彼が絶望からして大業を企てるもの、卽ち絶望者の名のもとに、考へてゐる人々の觀念を、最も明白に我等に告げ知らせるであらう。

ウナムノは政治的に極左黨に屬するにかかはらず、あらゆる「進步」の敵である。「何故に進步しなければならぬのか」と彼は反問するのだ。ラショナリズムは、必然的に唯物論的なものである、マテリアリズムは個々の靈魂の不滅、個人意識の存續の否定に外ならぬとて、極力これに抗するこの人が、中世主義者と呼ばれるのは、極めてもつともなことである。が、その故に彼はアナキストといへないのであるか、それを私は疑ふ。彼は少くともインヂヴィジュアル・アナキストである筈だ。もつとも唯物論的であり、共產主義的でなければアナキストでないといはれればそれまでだ。しかし、その獨裁執政官から大西洋の孤島に追放された人は、少くともカフエエ・アナキスト、ボルデル・コンムニストの類でなく、血ある肉ある生きた人間である事を、事實に於いて示したものといひ得られようと思ふ。

これはミゲル・デ・ウナムノの思想の正確なる紹介ではない。（正確なる紹介といふものがあると假定して）この中に

は、あまりに私らしく解釋されてゐる點が多く、また、ウナムノその人の重要な特質を逸してゐるかも知れない。しかし、ウナムノは矛盾を恐れぬ人である。同時に定義を好まぬ人である。ウナムノを知らんがためには、ウナムノを讀む外にみちはない。ただ私は自分の共鳴し得られたものをここに引いたのにとどまる。

私の考へてゐる虛無的生命主義については、また別に書きたいと思ふが、ウナムノの悲劇的生命感について、自分の共鳴を語つた後には、あまり甲斐ない事かも知れぬ。否定よりの肯定、絶望的勇氣といつても、大體は前の絶望者の解釋中に織込んだ位の事にすぎない。ただ、一言書き添へておきたいのは、虛無的とさへいへば、ただちに否定的、自棄的、絶望的な氣分として一般に解釋されてゐるやうだけれど、これも絶望が到着點でなく出發點であるといふ意味で、力の源泉たるべきものであるといふ事である。ニヒリズムとは、一切のものの否定であると共に、また一切の肯定である。虛無思想は單なる否定の思想でなく、また肯定の思想である。即ち、否定的な虛無主義の外に、肯定的、活動的、眞勇的な虛無主義があり得るといふ事である。そして、日本人は、この意味の虛無主義者たり得るものである。（昭和三年三月）

蘆屋にて

×

茶蘆屋から濱蘆屋まで、阪神電車の踏切を越して、村役場の前をずつと海岸まで導いてゐる眞白な廣い道と、蘆屋川の川ぞひみちとの間が、細長い遊園地になつてゐて、白い砂地の松林の中には、休憩所があつたり、テニスコオトがあつたりする。夏になると、小學校では、机を持出して、ここで授業をするのだといふ。いちばん自由な林間學校

である。蘆屋の兒童は幸福だと思ふ。

濱蘆屋には、外人の邸宅や、ブルジョアの屋敷やらが美しく並んでゐて、その蔭には、長屋建の貸別莊も澤山建つてゐる。一體に別莊地なので、今はがら空きであるが、これからだんだん夏に近づくにつれて、すつかり塞がつてしまふといふ。こんなところに小さな家を一軒借りて、自分ひとりの佗しい暮しをしてみるのもおもしろいと思ふ。どうしてそんな氣になるのか分らないが、誰にも會はないで、本も讀まないで、ぼんやりと、とりとめのない事を考へてすごしたい氣がする。

蘆屋は實に空氣のいいところだ。殊に、この海濱の砂の上をザクザクと踏んで行きながら、潮の香を嗅ぎ、波の音を聞いてゐると、おのづから息の深くなるのを覺える。然し、海岸ばかりでなく、ここらはずつと山際までが、海濱らしい爽かな氣分を持つてゐる。

今ゐる宿は、海岸から十町あまりも隔つてゐるのだけれど、朝夕ひらいて見る窓の外の、隣家の廣い庭の砂地にも、ひよろ長い松が、まばらな枝をして、高く突立つてゐて、赤い枯松葉が片隅に掃き寄せてあるなど、いかにも海濱の感じである。

その庭の一隅には、大きな鳥小舍がしつらへられてゐて、セキセイインコが澤山に飛び廻つてゐる。今この邊では、十姉妹だとか、セキセイインコだとかは、みんながあんまり飼ひ立てたために、ひどく相場が下落して、一羽一錢五厘位しかしないといふ事だが、實際、このあたりでは、大抵の家が鳥を飼つてゐるやうだ。

山と海とのあひだが、須磨舞子のやうには迫らないで、西の宮邊のやうには擴がらないで、程よい間隔を保つてゐる。その中を、打出から岡本の方へかけて、海邊から山際まで、ずつと住宅が續いてゐて、塀と塀との間を縱横に走つてゐる通路を、自轉車に乘つた御用聞きが走つて行く。して、それらの家の主人たちは、多くは大阪、神戸あたり

にオフィスを持つてゐたり、又はさうしたオフィスへ通勤してゐる人たちのやうである。
その人たちのためには、阪神間を連絡する電車が、あのわづかな間に、汽車ともで四筋通つてゐる。濱蘆屋から山蘆屋まで上るのには、幾つも踏切を渡り、あの廣い立派な阪神國道をも通らねばならぬが、その國道にも國道電車が走つてゐるのである。
阪神間は、京濱間などと違つて、まつたく氣持がいい。殊に、蘆屋あたりは、一體の氣分が上品で、すつきりしてゐる。
自分もそんな人たちの間に伍して、平凡なビジネスマンの生活が出來たなら、どんなにいいだらう。自分にほんの少しでもいいから、實務家の素質があつたなら、この文筆生活を一擲して、阪急、阪神の忠實な通勤者となつたかも知れない。然し、それは魚が陸へ上らうとするやうなものであらう。
だが、それにしても、十年、机の前にすわつて、書物を讀んで滿足してゐた人間が、こんなに急に、こんなに激しく、物質の都、活動の世界である大阪や、神戸の方へと惹き寄せられて來たのは、何とした心の變化であらう。
ただ、前へ、前へと、激しい活動的な世界へと、目に見えぬ力が私を推すのである。何とかして、今までと變つた新しい世界の力強い動きに觸れたいといふ思ひで一杯なのだ。
あまりに晩學の人生探究者よ。おまへは今ごろになつて、この世界から何を學ばうとするのであらう。それともおまへは、生涯の危機に立つて、自分を安全に導いてくれる指標を見出さうとしてゐるのであらうか。

×

人生の途上には、ときどき、思ひもかけぬ大困難に遭遇する事がある。立ちぐらみするやうな思ひのする時がある。
丁度、けはしい山の岨道で、さつとはげしい雲霧につつまれて、につちもさつちも行かなくなるやうな事があるも

のだ。
そんなときには、あわててはいけない、ただぢつとその場に立盡して、その雲霧の霽れるのを待つ外はない。
これは世故に長けた、老巧な人々の敎へる智慧である。この危險に充ちた人生の路で、安全に身を保つための尊い智慧である。
人が一人前になるのには、その難儀な瀬戸際を、幾度びとなく凌いで行かねばならぬ。
今の私が丁度そんな時期にあるのであらうか――多分、さうであらう。
今年になつてから、實にさまざまの事が、私の身邊には起つた。世に生きる事の辛さ、苦しさが、この年になつて、今更のやうに、しみじみと身に沁みて感ぜられた。
一月、二月、三月……
あまりにわづかな月日の中に、あまりに多くの事が起りすぎたのだ。
何年たつても起らない事が、一瞬にして起る……思へば恐ろしい事だ。それが無常な人の世の常であるのか。一寸先は闇の世の中とは、それを云ふのであらうか。それを思ふだけでも、私たちの心は、たしかに暗くなる、寂しくなる。
あの大震災がそれであつた。今、また、それが……。かの日は恐れ、今は悲しみ……
身に近いものを失つたとて、かくも索莫たる思ひの中に陷れられようとは、思ひもかけぬ事であつた。然し、この弟の死は、私に多くのものを敎へてくれた。今はじめて、私は周圍のものの尊さを知つた。あまりに馴れなづんで、何とも思はなくなつてゐるものの尊さを。日ごろ相見、相親しんでゐる人たちが、自分の生活にとつて、いかに尊いものであるかを。

私は私の家族のものに、私の友に、私の知人に、もつともつと盡さねばならない、親切であらねばならない。然し、私の悲しみは、私の心の底深くあれ。それよりも、私は自分の心を深く動かした、今一つの事實について、一人の先輩の身の上について、多くの事を思はずにはゐられない。

この一月に、私が思想上に啓發されるところの多かつた先輩の辻潤氏が、佛蘭西へ渡つた。

この自由な人は、一人の愛兒を伴うて、遠い巴里の都をさして旅立つたのだ。

「もう二度と歸つて來られるかどうかわからない」と述懷して。

送別會の席上、あのノンシャランスを標語とする自由人も、さすがにいくらかセンティメンタルになつて、そのはじめて歐羅巴の文化に接觸したいはれを說き、この洋行も、一に愛兒の身を立てさせたいためだと語り、別れの挨拶にと、その得意の尺八を吹奏して、皆に聞かせてくれた。

その尺八の音は、私の長いこと聞きたいと思つてゐたものである。それで彼は私に、その機會を與へるためにこの送別會よりもずつと前に、もとの靑鞜社關係の五六人集つて談じたいから是非來いと云つた。私も行く約束をしてゐたのだが、丁度その自分になつて、持病の痔がおこつて行けなくなつたので、私はせめてもと思つて、亡弟を自分の代りに行かせてやつた。

彼は夜おそく歸つて來て、大分醉心地で、樂しさうに、その會の樣子を語り、辻氏の尺八を聽いた事、「夢」と大字を書いて貰つた事を得意で話して、晝ごろから今まで、隨分澤山飮んだ事を語つた。その酒の量を聞いて私は驚いたが、今にして考へると、そんな事も彼の身體のためにはよくなかつたやうに思はれる。

ところで、この「夢」の字を書いてくれた人と、書いて貰つたものとが、相前後して、私から遠く離れて行つた。一人は佛蘭西へ、一人はさらに死の國へと……。と歸らぬかも知れぬとは云つても辻氏はまたそのうち歸つて來るであ

らう。弟は再び歸つて來る時はない、決してないのだ。

歸る人と、歸らぬ人ー
そのいづれにも幸あれよ。
旅行く人に幸あれよ。
印度洋、地中海經て、巴里へ行く人に恙なかれ。
十萬億土の旅を行く我が小さな巡禮にも幸あれよ。
頭に笠をかむり、手に杖ついて、死出の旅路を行く人にも……

×

私自身をも、東海道の夜汽車は、大阪まで連れ出した。關西行は昨年から考へてゐたのだが、こんな何とも名狀しがたい衝動のもとに、こんな切ない思ひで、さすらひ行かうとは、思ひもかけぬ事であつた。

それは旅といふよりも、放浪の氣持である、當分家に歸れまいといふ氣さへして。

大阪へ行つたら、自分の昔住んだ家のあとを見に行きたいと、かねがね思つてゐた。福島の洋菓子店の二階に間借りして、詩を書いてゐたのも、もう二十年も昔の事になる。そして、曾根崎の大火で、福島の方まですつかり燒けてしまつてからも、もう十何年になる。今すべてはすつかり變化してしまつて、その家のあとなど何處にも見られないに違ひない。さうも思はれたし、また時間もなかつたので、福島の方へは行けなかつたが、然し、私が大阪でまつさきに友を訪ねて行つた大阪朝日新聞社の應接室のあるあたりは、昔私のしばらく起臥してゐたところなのだつた。私が父に連れられて、はじめて大阪に出た時に落着いた知人の家が、昔はそこにあつたのである。

以前は朝日新聞社は川の方に門があつたので、この中の島の郵便局の向側の通りは、一列の店屋が並んでゐたので

ある。そして、その店屋の間に、父の相場友達であつた出雲の人が、飲食店をひらいてゐたのだ。私は友に會つてその話をすると、彼は興味をもつてそれを聞いた。

大阪は然し、やつぱり私には、あまり烈しすぎる都だ。私は二十年前、大阪に住んで、大阪を親しみがたく感じたその少年と、やつぱり同じ人間で、しかも少しの進步も（實際家としての）ないのであつた。

蘆屋に來て、やうやく私は落着く事が出來た。何處まで行つても、自分は自分だ。激しい活動の世界に、時々傍觀に出かけるべき人間で、自らその中に住み得る人間ではない。世を佗びて、ひとり住むべき隱者的な人間だと、つくづく思ふのであつた。

より烈しいもの、より賑かなものを求めるつもりで、實はやつぱりより靜かなもの、より寂しいものを求めて來たのであつた。

一夕、その蘆屋の佗住居に、友が、神戶にゐる小學校時代の舊師を導いて、たづねてくれた。私はこの舊師とは、小學校時代以來、一度も會つてゐない。實に二十何年振りの再會であつた。今は神戶の或る中學を敎へてゐられるといふ。もう五十歲を越えた年配だが、四十五六の若々しさであつた。むかし、非常にハイカラであつたため、生徒たちから、西洋ボンチ西洋ボンチと綽名されてゐた當年の面影が、今なほ何處かに殘つてゐるやうに思はれた。

師はとにかく多少物になつた（友は大いに然りだが、私はまだ大いに疑問）二人の敎へ子を目の前に置いて、いかにもうれしさうな風であつた。その一人の敎へ子の今の心の狀態を察知せられたなら、師は或ひは茫然とされるかも知れないのだけど……

神戶へ歸られる師を、阪神の蘆屋の停留所まで送つて、それから私たち二人は、暗い濱の方へ步いて行つた。

「これからどうするつもりかね？」と友は心配さうに訊ねた。

私にはどういふつもりもない。ただ、ぢつとここにかうしてゐたいだけである。然し、友はそんな漠然たる答では満足しなかつた。それで、この邊でただ一軒きりのカフェに入つて、かなり遲くまで話して、最後に、そんならいつそこつちに落着きたまへ、生活の保證は僕がしてやるからとまで云つてくれた。

私は友を阪急の蘆屋川の停留所まで送つて、ひとり薄暗い川ぞひみちを歸りながら、

「こんなところへ來てしまつた、ここまで來て、それから……」と呟いて、耳をすまして、心の闇からかへる自分の答を待つた。

東京をはなれて、東京の家庭と、澤山の友とを離れて、こんな濱邊にたつた一人で佗びて住まうなどと思ふやうになつた、その心の變化には、われながらも驚かれる。

何といふ亂れた心だらう、佗しい心だらう。十年の間かかつて、やつと築き上げた思想的立場といふやうなものが、ただ空しい夢にすぎないやうに思はれて來た、この最近の激しい心の變化！

これをどうしたら切拔けられようか。どうしたら、事無く、新しい安全なみちに出て行かれるだらうか。私は切に切に、その救ひの手を待つてゐる。人生が私を裏切るものでなく、私もまた人生を裏切るものでない事が知れたならば、何といふうれしい事であらう。私はそれを、切に切に祈る。

だが、時はすぎて行く、萬事はうつり變る。そしてこんな思ひ、こんな生活も、また一場の夢に終るのであらうか。

その後、幾年も、夜うなされる惡夢となるのではあるまいか……

おもへば、みんな夢だ、人生は何といふはかない迷ひであらう、中空にかかる虹のやうなものであるのか。

せめては、このはかない生のひととき、ひとときを、苦茗の如く味はしめよ。（昭和三年四月）

影は夢みる

——死と戀を、女を春を——

×

蘆屋川に沿うた遊歩場は、私のこれまで歩いた最も氣持のいいみちだつた。今朝もそのみちを、私はひとりぶらぶらと、海岸の方へ下つて行く。

砂地に散らばつた松の樹は、植ゑつけてからまだ十年位にしかならない稚さで、その翠のいろも明るく、ことにそれがくつきりと春めいて、やはらかに、物思ふものの眼に沁み入るやうだ。

海はかすんで、沖は見えない。その仄かにぼかされた水面の手前を、帆かけ舟が、ゆるやかに、悠々と滑つて行く。かへりみると、山手の方も、ぼつとかすんで、うち續いた低い山のかたちだけが、かすかにそれと指される。みるからに春の景色、春の氣分である。

水のない川床の上をぢつと見おろしながら、私はふとどうしてこんなところに、さまよつて來てゐるのだらうと、自分でそれを不思議におもひ、うらさびしくも思つた。

だが、ここに來なければならぬ自分であつた。ここで自分のニュウ・ライフがはじまらねばならぬのだから——ここの外には、何處にもないのだといふ氣さへもする。

いつの年でも、春になると、何となくものうく、倦怠に襲はれる自分だが、今年はまた特別に、心は重く、暗く屈して、とりとめのない物を思ふ日が多く、何處かへ、遠くへ、人の知らないやうな處へと、あてもなく、さすらひ出

たい思ひで一杯であつた。
今、そのあてのない、遠い霞の世界から、一筋の糸が自分を引くのを覺える。
幽かな夢の世界から、こちらをのぞくやうな眼。少しもうるんでゐない、秋空のやうに冴えて、澄んだ、深い瞳。
それはあまりに知的であるかも知れない。でも、その眼は今うるんで、ともすると、濡れてくる……
おもへば、この一月――すべては夢のやうだ、夢のやうな日々。
夢とさへ云へば、たのしいものと人は思うであらう、醉ひであり、まどろみであると。だが、それはあまりに早い青春の夢にすぎない。その後の夢は、多くは苦しくうなされる惡夢、死のやうな、落ち込むやうな、たのしみ苦しみ、いづれとも分ち難い、云ひやうのない夢である。
川ぞひみちの盡きたところ、川尻の兩側に、コンクリイトの防波堤があつて、その上には、二三人の少年が、うづくまつて、何か云ひ合つては笑つてゐる。ぢつとイんだ儘、ぼんやり海の方を眺めてゐる人もある。
海岸線はなだらかに、東の方は打出の濱から西の宮、西は灘、住吉から神戸の方へ、つゞいてゐる。その海邊を、打出の濱へと、ざくざくと白砂を踏んで行く。
何年ぶりで、かうして海岸を逍遙する事だらう、海岸らしい海岸を。
波打際に沿うて、松林と海との間を、何處までも何處までも、無心に歩いて行く――それほど好きな散歩はない。
故郷の夜見ヶ濱のさまよひが偲ばれる。
長いこと、灰いろの書齋の中に閉ぢ籠つて、乾からびた、死んだ概念に引きまはされて、黑と白との書物の間に彷徨してゐたペダントが、その息苦しさに堪へられなくなつて、追はれるやうに、逃げ出すやうに、この海邊をさすらうてゐる――それはあはれな、さびしい、一つの影である。

その影は、この海邊に、自分にふさはしい佗住居を求めてゐる。そこで痛み傷ついた身と心とを横たへようと。
二十年ほど前に讀んだ江戸時代の洒落本だつたかに、勘當された放蕩息子が、近在の出入の者の家にあづけられながら、様子あつての佗住居などと云つていい氣になつてしやれてゐると、そこへ遊び友だちが訪ねて來て、まことに公はさすらひの身などと云つて慰めるといふやうな場面があつたが、今、そんなつまらぬ事が、しきりに思ひ出される……

彼等は金錢と青春とを浪費したやくざものだが、自分は何だらう。自分は言葉と精神とを浪費した一層のやくざものに相違ない。

十年、空しい十年……

今、心に過去はない、過去はすべて空しい、賽の河原の石つみであつた。この十年、自分は何のために、また、何をして生きて來たのだらう？

空し、空し、すべては空し。それは悲しい自覺かも知れない。が、一面また、さつぱりとした、身輕な、せいせいした氣持でもある。半端な才能しか與へられてゐない男には、もつと早く來ていい悟りだつたかも知れない。

過去のない心には、未來もない。

未來は闇だ、また空だ。それは過去によつて聯想し、喚起されるただの概念にすぎないではないか。

今あるのは、ただ、現在のみだ。現在のみが、私の生だ、生の脈搏だ。この現在の惱みと苦しみと、このとりとめのない沈思と、その間からパッと閃き出る心の火花とが、これが自分のものだ、これこそ確實に自分のものだと云ひ得られる——一瞬の後には、ふたたび空しい過去となるのだとしても。

それにしても、人の一生は、何といふはかない夢だらう。それは影の夢にすぎないのか。

夢をゆめみる影のたはむれ――それが人の戀であり、人の事業であるのか。
かげろふのたまゆらの夢にすぎないのか、人の一生は、一生の喜怒哀樂は。

×

曾つて、東京の或るカフエエで、優雅纖細な、才情横溢の詩人Y・S君と對談してゐたとき、彼はその爽かな面に複雜な笑みをたたへて、私に云つた、
「僕は結局、エピキュリアンですね」
その詩のやうに華かに美しく、人生をたのしいプロムナアドと理解してゐる、この生粋（きつすゐ）の都會詩人の生活は、私にはおそらくあまりにかけはなれたものであつた。それゆゑあまり深い理解と共感とをもつ事は出來なかつたが、然し、ことによると、あの方がほんたうに詩人らしい詩人の生活なのではあるまいかと疑つた瞬間はあつた。
ただ、それは、その唯美的な生活は、私の天分でなく、私の趣味でもなかつた。そして、また、その事が格別私の悲しみともならなかつた。この安住のゆゑに十年は生きられたのだ。さびしい自己抑制と、刻苦との中に……をさない理想の夢に醉ひつつ。
今、その安心は何處へ行つてしまつたのだ？
おもへば、無慘な敗北であつた。
打ちひしがれ、打ちのめされて歸り來つたドン・キホオテの悲しい笑ひ。
たしかに笑ひに値する。
この五年間は、時代錯誤的な幼稚な詩人の夢に對する、はげしい時代の鐵槌の亂打であつたのだ。
弱い人間は、確乎として立つて、生そのもの、現實そのものに直面する事が出來ない。

それゆゑ、宗教に走つて、そこに據りどころを求めようとした。
世界を改革する事が出來ないならば、少くとも、自己を改革しなければならない。
それゆゑ、自己完成をその生涯の意義として、教養のみちを進まうとした。
かくて、精神主義とも呼ぶべきものに、その思想的立脚地を見出し、その生活信條を樹てようとした。
だが、時代の激流は、こんなやくざな塵芥なんぞは、一氣に押流してしまふのだ。
宗教――何といふ迷妄、何といふ欺瞞。自己完成――何たる憎むべき個人主義ぞ。精神主義――何たる空虛ぞ。もうそんな幼稚な觀念論の時ではないのだ。
マテリアリズム――その外に、正しい世界の認識はない。現代に適應する生活信條はない！
かつては一切が道德問題に歸着した。今や、一切は經濟問題に歸着する。
生活も、思想も、文學も、はた戀愛も、すべてはこのオプティックによつて見るべきものである。
ラルジヤン！　そのフォルス！
それを敢て認める勇氣のない卑怯者は死ね！　それは現代では、死刑に値する罪惡なのだ！
友だち二人と、堂島ビルディングの七階の一室で、堂島川を挾んだ多くのビルディングの層々たる岩壁のやうにうちかすんでゐる景色を眺めながら話してゐた折りに、自分がとりとめのない焦燥を言葉のはしはしに現はすのを見て、年長の友はまじまじと自分の顏を見て、少し笑つて云つた、
「君もまだなかなか野心があると見えるね。」
それは匕首のやうに、自分の胸にこたへた。
野心――さうだ、自分は確かに野心家である。だが、世にこんな野心があるだらうか。滅ぶべきものが滅びざらん

とする……時代の激流に抗して、はかない夢をつながうとする……ドン・キホオテの絶望的勇氣。

絶望からの建設、虚無からの出發といふ事を、私は說いた。今こそ、その時であらう。だが、私にその力があるだらうか？　こんなに自分の才能に絶望したものに！

痴人は痴人らしく終つた方がいいのではあるまいか。

痴人が賢者のみちを踏まうとするほどの、痴愚と欺瞞とはないであらう。

賢者は、戰士は、英雄は、人類の救ひのために、民衆の幸福のために、時代の先頭に立つて戰ふべく選ばれた人たちだ。

無能な、舊時代の詩人は、自分一人のために惱み、おろかな迷ひのために殉ずる方が、うそいつはりのない、正直なみちかも知れない。

戀するものは、死をおもふ。

死なんとするものは、戀をおもふ。

戀と死とは、双生兒だ。相愛する、しかし仇敵同士の子であらう。

北村透谷が、死を決意してから、品川の妓樓に遊びに行つたといふ事實を、ときどき私は悲しい心で思ひ出す。近くは、かの才人芥川龍之介にも、同樣の事實を傳へられてゐる。

透谷などよりも、もつとつまらない、無教育な人間たちは、しばしば妓樓に死をゑらぶ。ショオペンハウエル流に云へば、それにももつともな形而上的解釋がつくのだ。

無理心中——何たる人間の厭はしいエゴイズムだらう。また、何たる人間の弱さであらう。だが、彼等もまたあはれむべき人の子である。死によつて戀を求めたのだから。

私はむしろ、戀によつて死を求める人の幸福を羨やむ。
然し、一層幸福なのは、愛するドルネチヤのために、敢て屈せずして戰ふ、憂鬱な顔をしたマンチヤの貴公子ドン・キホオテではあるまいか。
スタンダアルは、ドン・フアンの戀と、エルテルの戀との二つに分けて論じた。
誰にもこの二通りの戀人が併存してゐると思ふ。ただその人によつて、そのどちらかにより多く傾いてゐるからだ。所詮は程度の差であるかも知れない。
現にスタンダアル自身が、その兩面を、殆んど均等に有つてゐた。
だが、今の世は、概してドン・フアンの方が、エルテルよりも多いやうに思はれる。
エルテルはすくない。ドン・キホオテは更にすくない。

×

戀愛について、まとまつたエッセイを書いてみたいといふのが、私の長い間の念願であつた。
けれども、それは何といふ愚かな仕事だらう。
酒中の味ひを解しないで、酒の成分を分析し、酒の効用を説明する人間は、憫笑に値するかも知れない。
然し、それでも戀する事なくして、戀を論ずるものほど、滑稽でも、悲慘でもないであらう。まことに、世にこれほど迂遠な、空虚な、間接的な仕事はなからうと思ふ。
スタンダアルの「戀愛論」には、その體驗によつて裏づけられた權威がある。
彼は戰爭と戀愛とに、生甲斐を見出した男だ。
彼のアウステルリッツと、ワアテルロオとは、女性の胸にあつた。

幾たびかの勝利、幾たびかの敗北——それを數へて、自分は生涯を空費したのではなかつたかと疑つた瞬間の彼はどに、寂しい人はなかつたであらう。

然し、彼は悔いなかつた。最も滑稽な敗北をさへも。

メリメエのスタンダアル追想記によると、彼は微笑して、その伊太利での戀のみじめな敗北を、友に告白してゐる。

それは多分アンジェラといふ婦人であつたとおもふが、いつも自分の良人は大變嫉妬深いからと警告してゐたので、それでなくとも用心深いスタンダアルは、あらゆる嫌疑を避けるために、わざと十時間の道程もはなれた隣の町に住んで、女に會ひに行く折りには、何度も馬車を替へるといふ程の注意をはらつて、夜になつて、壁と同色のマントにくるまつて、女の家に入り、腹心の小間使によつて、女主人の部屋に導かれる事にしてゐた。ところが、その小間使が、スタンダアルのあまりの殊勝さが氣の毒になつたものか、あるとき、彼をこつそり傍へ呼んで、旦那樣はそれほど嫉妬深い方でもございませんが、奧樣は外にもいい人があるので、その人に落合ふ事のないやうにと、こんな風に氣を付けてゐらつしやるのでございますと事實を打明けた。そこでスタンダアルは暗い小部屋に隱れて、その事實を自分の眼でたしかめようとした。果して、壁の隙間から、三歩のむかうに、彼はそのみじめな敗北を是認しなければならなかつたのだ。

その時の氣持を卒直に述べたスタンダアルの言葉はかうだ、

「君は多分僕が飛び出して行つて、二人を突き殺したいと思つたと思ふだらう。事實は反對だ。道化芝居でも見るやうな氣がして、笑ひを抑へるのに骨が折れた位だ。」

だが、さすがにそれではすまなかつた。四五日もすると、彼はたまらない憂鬱と銷沈との中に投込まれた。彼はそのとき自殺しようとまで思つたのだ……

だが、そこには、その道ならぬ戀に對する良心の苛責などは少しもない。
道ならぬとも思はないのだ。
それは彼がニイチエにあれ程の影響を及ぼしたスタンダアルその人だからでもあるが、それよりも、より多くその國情によるであらう、また、相手の女にもよるであらう。何しろその土地は權夫(シシスベオ)といふ言葉さへある國で、女は情人のために情人をあざむく女なのだから。
然し、日本では、どうであらうか？
道德の權威がこんなに地に墮ちても……習俗の力はまだ強い。
でも、止めて止まらぬ戀――道ならぬ戀。
くるしく、つらく、悲しい戀。
やむにやまれぬ情熱に驅り立てられて、斷崖の上をも走る。
それこそ、ほんとに強い、ほんとに切ない戀だ。
戀愛に於ける眞の悲劇的の深さは、ただここにある。

紫のにほへる妹(いも)をにくくあらば人妻ゆゑにわれこひめやも

おもふに、道ならぬ戀のジャスティフィケエションは、この素朴な古代の歌の一首に盡きるであらう。
それをあの熱烈な近代の哲學者の言葉で註釋すれば、
「偉大なる情熱は、常に善惡の彼岸に於いて起る」
私の故鄕のうたに、
關と御崎に

燈臺あれど、
戀の闇路は
照らしやせぬ。
ここに至つては、宗敎も道德も、すべて權威を失ふ。ただ、藝術あるのみ。
藝術的生活の極北は、死をもて償ふ戀の勝利の中にあるであらう。

×

春、春——身にしみる今年の春。
この春をどうして過さうかと、私は惑ふ。
はじめて宿つた六甲の苦樂園の朝は、小鳥の聲ばかりであつた。
きりひらいた山の小松は、山とはおもへない姿で、乾いた砂のやうな土さへも、海邊の感じがした。
半日、宿の二階の欄杆にもたれて、ぼつと霞んだ海を遠望してゐると、そのまま煙のやうに消えてしまひさうな、何とも云へぬ寂しさ。
長いこと、ただぼんやりと、言葉もなしに、悲しい思ひですごした——その春の半日。

○

遠く遠く、空の彼方ででも、
この情熱が美しい夢になるのなら
私は死んでもよいのだけれど。

私は情熱を愛するのだけれど、
私にはたへられさうもない、
張り切つた何かのやうに
やがて爆發する時が來るんぢやあるまいか。

それとも、佗しく、
ひとりでに消えるやうな日が
やつて來るんぢやあるまいか。

○

破れるのもつらい、
消えるのはなほつらい。
夢ならばさめよ、
うつつならばさめるな。

心をもやす火、
焦がすはつらい
消えるのはなほつらい。
夢ならばさめざれ

うつつならばさめよ。

このままに
このままに
海のやうにたたへて
空のやうに滿つる思ひ、
これがいのちの眞の姿か……

こんならくがきを書いて、佗しい時をすごした。今の自分の氣持から云ふと、非常にうまい詩よりも、こんな出來損ひの詩の方が、かへつておもしろいと思ふ。

人の生涯にしても、極めて完成した、上々吉の、申分のない生涯よりも、だらしのない、失敗だらけの、拙劣な、尻切蜻蛉の生涯の方が、一層意味が深いとは云へないまでも、一層味はひがあるやうな氣がするのだ。

不健全な考へかも知れないが、さう思はれるのだから、仕方がない。

成功した人々、勝利者の凱歌よりも、無慘に失敗した、あはれな敗北者の呻きの方が、私には身に沁みて感ぜられる。シェクスピアよりもマアロオが、ゲエテよりもクライストが……だが、これは小さな反抗ではない。詩人らしい偏した趣味にすぎない。それゆゑ、この好みは勝利者を崇拜する事を自分に妨げないのだ。

いや、自分はすぐれた人を崇拜するために、此の世に生れて來た人間のやうに思ふ。そのナイーヴに崇拜できる事が、自分のいちばんの幸福であるやうに思ふ。

そして、その偉大な人々とともに、いな、それよりは一層強く深く、私は美しい女性を崇拜したい、愛する女性のために殉じたい。

苦樂園口から夙川へ、夙川から香櫨園へ、香櫨園から蘆屋へ、自動車は走る、走る。

おそらく、戀も自動車の如きものであらう。拙劣な運轉手は危險だ。とめるにとめられず、とめられなければ、何にぶつかるか知れない……

これはおろかだ、十分おろかだ。おろかな想片で、そして、とりとめはない。だが、みんな影の夢だ。シュティックスの彼岸でのたはごとだ。單なるトオテンタンツだ、春の海邊の……（昭和三年三月——四月）

影の備忘錄

×

木立の彼方にともつてゐる街燈が、葉越しにちらちらして、その葉かげのたえまに、砂みちの上に、かすかに一つの影が躍る。

それは夜更けて、阪急の電車を降りて、海邊の宿へと歸つて行く、自分の影であつた。その影を見ながら、これが自分の影であるかと、私は寂しい寂しい思ひに落ちて行つた。

影が動いてゐる。
影が搖れてゐる。
影が笑つてゐる。

影が泣いてゐる。

その影が自分だ。

畢竟、自分はこの影である、影にすぎない存在だと、痛切に、そのとき、私は思つたのであつた。

笑ふも泣くも、何とする。みんな影のたはむれだ。

子供たちは、兩手を組合せて、壁の上に、耳の長い兎を躍らせる。

この廬屋の里を飛んでゐるものも、さうした一匹の兎の影なのだ。

さう思へば、心は輕くなる。

哲人は、物事をあまり重大に取るなといふ智慧を、私に敎へてくれた。

おもふに、私ぐらゐに、物事を重大に取る人間はあるまい。

自由々々と求めながら、直ぐ自由を失ふ。すぐ物事に囚はれて、進みもならず、退きもならなくなる。

いつも、せつぱつまつた立場におかれて、ともすると、ディレンマに陥り、必死の思ひをする。つくづく、苦しい性格だと思ふ。

つひに老熟の日なき永遠の靑年か、自分は——

思想、思想と叫んだ自分。人生、人生、人生觀、世界觀と叫んだ自分。それは、ある方面の人たちには、さだめし幼稚とも見え、いやみとも見えたであらう。

今、私はもはやそれを云はない。

私に思想は求めがたく、人生は私にただ謎である。

ただ、私が生きて、息して、愛して、憎んで、喜んで、悲しんで、泣いて、笑つて、起きて、眠つて、食べて、歩

いてゐる……それが私の生そのもの、私の思想、私の人生觀、私の迷ひであり、私の悟りであるのかも知れない。

長谷川二葉亭の、あの痛烈な懷疑主義をおもふ。

文學の意義をさへ疑はずにゐられなかつた人――恐らく心から愛せずにゐられなかつたからであらうか。

懷疑のあげくは、あらゆる思想や哲學に絶望して、生そのものの端的な燃燒をたふとび、徹底的の惑溺の生活に沈湎して、つひに癒しがたい不健康を招いたこの人よ。

私たちは、生をあまりに愛するがゆゑに、その意義を究めんと欲して、その究めがたきに絶望するのだ。ただ、あまりに愛するがゆゑに――

私たちが女性を疑ひ、女性を憎むのも、また、あまりに彼等を愛するがゆゑか。

二年位前から、私は非常に寛容をたふとぶ心になつた。不思議なほど、裁く心を厭はしく思ひ、恕す心を好もしく思ふやうになつた。あらゆる不寛容だけが、寛容しがたいものとなり、和しがたいものとなつた。すべて己と異るものを非難排撃する人の心を、寂しくも思ひ、時としては、うとましきものにさへも思ふやうになつた。

この寛容の心もちは、私の心境として見ると、たしかに進歩であるとは云へるであらう。また、自由を極度にたふとび、自ら自由人たらんと志す人間としては、當然の歸結でもあつたであらう。

然しまた、この心持をよくよく反省してみると、その外見ほど、よろこぶべきものではないやうに思はれる。すなはち、かうした極度の寛容は、實は、むしろ一層手ひどい心の態度を表白するもの、棄却の心からの無關心を示すもの、救ひがたい絶望から發するもののやうに思はれるのである。

絶望は、然し、おもふに私の救ひであり、私の城塞であるのではあるまいか。絶望的勇氣が、私をより高い生に誘ひ、絶望的飛躍が、私をより大なる事業へと誘ふ。

絶望は終局でなくして、かへつて、出發點である。

これだけの事を理解してゐる自分が、絶望に終るならば、恐ろしい恥でなければならない。殊に、自分の才能の問題について、もう數年も前に、十分に解決を施し得たつもりで、今はただ自分に與へられただけのものを生かし切らうと思ひ極めてゐたものが、今更のやうに、自分の才能の貧しさを嘆くとは、たしかに大きな迷ひだと云はれても仕方がない。

どうしてそんな心持が起つて來たのか、自分でも分らない。ただ、抑へがたい自己厭惡をいかんともしがたいのである。

だが、思ふに、それはまだ、私の絶望が底に徹してゐなかつたからに違ひない。まだ十分に絶望者となり得てゐなかつたからに違ひない。

私をして、更に絶望に徹せしめよ。

死の中に、生を生きしめよ。

死なふは一定、忍ぶ草には何をしよぞ。譽れか、戀か。

譽れも空しく、戀も空しと、底の底まで知つた上で、一物をも求める心なしに、私は燃えねばならぬ、潔く生きねばならぬ。

事の成敗、事業の結果の大小、そんな事は毫も問題ではない。ただ、力一杯やり切つたといふ事に、意義があるのだ。生きるだけ生き切つたといふ事が、大切なのだ。

そして、そこにはもう悔いはない。かへらぬ悔いに歎く必要はない筈だ。やりすごしたといふ悔いは、やり足らなかつたといふ悔いにくらべれば、悔いとは云へぬ位だ。

明智光秀は、よしや名もない百姓の竹槍で突き殺されたにしても、人は何とも笑はば笑へ、たしかに天下を取つたのだ。たとひ三日天下にしろ、天下を取る事は取つたのだ。

石田三成は、一敗地にまみれて、無慘な最期を遂げたにしても、とにかく、天下分け目の關ヶ原の戰ひで、遠謀深慮の家康を向うにまはして、五分々々の大勝負をやつたのだ。

ハインリッヒ・フオン・クライストは、畢世の力作を火中に投じて、人妻と情死したとしても、大才ゲエテの前額の月桂冠を奪ひ取らうとし、その一端にたしかに手を懸け得たのだ。

北村透谷は、二十七歳を一期に、はかなく縊れ死んだとしても、昂然として勝利を目的に戰はずと叫んで、敢て成敗利鈍を超越した戰ひを戰つて、靈劍一揮、空の空を擊ちて、星にまで達せんとしたのだ。

茲に、悲劇的生命感がある。絶望的勇氣がある。虛無からの出發がある。

ただ、生命を燃えしめよ。灰となるまで燃えしめよ。

生の油を、空しく地上に流すなかれ。かかる怠惰と、卑怯未練とに勝る人間の罪惡は、他に決してない。

最後まで努力したがゆゑに、ファウストは救はれた。

燃えて盡きよ、火と照らせ、たとひ束の間の光なりとも。

笑ふも、泣くも、影の身なれば。

何をすればとて、影の業。

したいと思ふだけをせよ。

出來るだけの力を出せ。

それが出來ずば、死とおなじ。

影ではなくて、影の影。

×

このごろ、私は不思議なほど、島村抱月のことを思ひ出す。

島村先生がなくなられてから、今年で丁度十年目だ。あの年はスペイン感冒（かぜ）が流行した年で、先生の死病も、それがもとであつたと思ふ。今年もひどく感冒が流行つた。十年目位に、世界は一轉囘して、おなじ事を繰返すのであらうか。

十年、十年、十年前の夢と、痛みと、迷ひとが、今、私自身の上にもくりかへす。

島村抱月は、私にはなつかしい人である。なぜであらうか、私は知らない。私は文壇の人から、よくその容貌が島村抱月に似てゐると云はれる。時には、龍の落し子といふ事もあるからねなどと冷やかされた事もあつた。私はそんなに似てゐるとも思はないが、精神的に、多少相似たものがありはしないかといふ事は考へる。これは或ひは、山陰人としての、或る共通性なのではないかとも思はれるのだ。が、私が島村先生をなつかしい人に思ふのは、勿論、こんな事のためではない。

私は早稻田大學に學ぶ幸運を持たなかつたので、島村先生を師と呼ぶ光榮をも有し得なかつた。お目にかかつた事も、生前、ただ一度しかない。それも偶然の事情で、私自身には衣食のための行乞であつたし、先生にとつては、退屈な義務の遂行であつたであらう。

それは多分、大正二三年頃の事だと憶えてゐるが、私の先輩でもあり、友人でもある中村武羅夫君が、風邪で臥床してゐたため、その代理になつて、抱月氏の談話を筆記する役目を仰せ付かつて、私は當時牛込の横寺町にあつた藝術座へと出向いて行つた。

入口のところで、かなり長く待たされて、ぼんやりイんでゐたとき、外から一人の女性が入つて來た。小ぶとりにふとつてゐながら、何處かきりりとしたところのある、むしろ冷たい感じのする、權高い女であつた。

彼女はそこにウサン臭さうに立つてゐる、見すぼらしい靑年に、ヂロリと一瞥を投じて、持つてゐた傘をドシンとそこにはふり出した。すると、奥の方から、色の靑い若い男が四五人、飛んで出て來て、ペコペコとお辭儀をするやら、その傘をうやうやしく取上げるやら、大騷ぎをするひまに、その女性は悠然と奥の方へ消えてしまつた。

それは云ふまでもなく、藝術座の女王、松井須磨子その人に外ならなかつたのだ。

やがて、私は階上の一室に導かれて、やがて出て來られた、絣の單衣に無雜作に小倉の袴をはいた、まるで書生のやうな姿をした島村先生に對坐して、先生の言葉を筆記した。が、談話筆記と云つても、先生はノオトブックにちやんと書いた原稿を、ゆつくり讀み上げられるだけだつたから、ちやんと先生の文章になつてゐた。題目は今忘れたが、ただ「過現未、々々々」といふ言葉がしきりに出て來て、はじめはその意が分らなくて、一度問ひ返した事だけを憶えてゐる。

そのときの先生の靜かな調子は、私の頭に深く殘つた。その面に現れた苦惱と疲勞の影も、かすかに私は感じられた。然し、この人の當時の深い、突きつめた心持は、當時の私には理解も及ばぬものであつた。

今、私はしみじみとそれを思ふ。こんな心持ではなかつたか、こんな苦悶ではなかつたかと、いろいろと思ひ合せられる。

書冊の埃と、義務の桎梏との中に閉ぢ籠められて、乾いた、ものうい、妥協と、抑制との中の生活！　學者として、敎授としての、死んだ思想と知識との反復！

それがいかに息苦しい、いかに堪らないものであつたかは、その敎授生活の終りのころに書かれたいろいろな感想

の中に、抑へ切れない歎息の如く洩れ出でてゐる。書卓の上の書册や、原稿や、書狀やらの堆積を見ての感想の如きは、重荷のもとに喘ぐ駄獸の喘ぎの如くに、痛ましいものではなかつたか。

島村抱月は、學者らしい學者であり、批評家らしい批評家であつたかも知れない。だが、彼もまた人間であつた、男子であつた――人生を常に批判し、解說するのみに滿足出來なかつたのだ。人間として、藝術に生きんとし、男子として、戀に生きんとしたのではなかつたらうか。

戀と藝術との一致――あの晩年の生活は、さういふ幸福な言葉を以て評する事も出來るかも知れない。然し、それは必ずしも幸福感の追求ではなかつたであらう。おもふに、あの穩かな君士人を、激しい動亂の中に引き出したものは、單に藝術座の事業のみでなく、況んや一松井須磨子でなく、實に、充實した生命感、悲劇的な生命感の追求ではなかつたらうか。死灰の如き生活を一蹴して、狂瀾の中に身を投じて、燃え盡きる生命のたぎり沸き立つ響をもて、その生の高調を奏でんとする、やむにやまれぬ要求ではなかつたであらうか。

島村抱月の人と生涯とが、私の心を動かすのは、その豐富な學殖のためでもなく、その精到と云はれる批評の筆のためでもなく、その自然主義運動の殊勳のためでもなく、ただ、この一點である。決然として、書物の埃を拂つて、社會の激流の中に身を投じて、愛と藝術との苦悶に殉じた、そのパッションのためである。卽ち、學者としてでなく、敎授としてでなく、批評家、解說家としてでなく、ただただ、詩を生きた人として、歌はざる詩人としてなのだ。

然し、島村抱月も歌つた。

それを發表した當時、世間の問題に上つて、周圍の非難を受けたといふ、その「心の影」の詩と歌とが、歌ふ詩人としての抱月の最も直接的な表白であつた。

私はこのごろ、しきりに、その歌を思ひ出す。

こしかたの三十年は長かりき沙漠を行きてオァシスを見ず

といふ歌もあつた。

いつまでもかくてあらんと願ふなり敗れたるわれ傷つけるわれ

といふ歌もあつた。

かりそめに結びし紙の誓ひにも末をかけたり住吉の宮

住吉の塔の東の窓により人の世狭しと君かこちしか

といふ歌もあつた。

セリセット死にぬあはれの妻なれど妻にかへたる戀もたふとし

といふ歌もあつた。

あるときは二十の心あるときは四十の心われ狂はしく

といふ歌もあつた。

ともすればかたくなりしわが心四十二にして微塵となりしか

といふ歌もあつた。この歌は最も人に知られてゐるもののやうである。それから、

通り雨、通り雨、

戀の邪魔して通る雨

それで思ひ切られる仲ぢやなし。

といふやうな詩もあつた。

すべての謹厳と思はれ、微温的と見なされてゐた人々が、(たとへば、また、有島武郎氏なども……)ひとたびその

桎梏を破つて、人生のいかめしい柵を奔馬の如く逸出するに當つて、その燃え上る生命の高調を託するに、詩を以てし、歌を以てするのは、たしかにおもしろい、意味のある事實だと思ふ。いな、必然的な事實でなければならぬ。何となれば、詩こそ生の燃燒の響であり、やむにやまれぬ心の叫びであるから。

有島武郎氏の「詩への逸脫」は、その點で、或る眞を談り得たとともに、より多く、彼その人の力強い飛躍を示すものであると思ふ。

有島武郎氏の絕筆の歌をも、このごろ、私は思ひ起す。

さかしらに世に立てりける我かこれ神に似るまで愚かしきいま

幾とせの命を人は遂げんとや思ひ入りたる喜びも見で

明日知らぬ命の際におもふこと色に出づらむあぢさゐの花

×

ツルゲエネフは、喜びもせず悲しみもせずに、世を行く人の步みをば、エリジアン・フォールドをさまよふ人の影と見る。

影が影に堪へられなくなつて、血と肉と、鼓動と脈搏と、愛と憎みと、死と痛みとの世界に飛出すとき、影は影ではなくなるのか。

いや、やつぱり、影だ。

人は影、影は生。

われらは夢をゆめみる影。

さらば、力強い影であれ。

さらば、美しい夢であれ。
　夢のうきよの
　露のいのちの、
　わざくれ、
　成り次第よの
　身は成り次第よの。
　そんなむかしの歌がある。室町時代のうたである。室町末期から、織田、豊臣、元祿の時分まで、その强烈な生命の聲は鳴り響いた。
　あのころの人は、よくこの無常感に徹してゐたと思ふ。無常なるがゆゑに、人生のたふとい事を知つてゐたと思ふ。それゆゑ、その生命を極度まで燃やさうとしたのだ。
「死なふは一定、忍ぶ草には何をしよぞ」、織田信長の華やかな一生の事業も、この短い言葉の中に包括される。「花は盛りにたとへていふ、散るべきもさだめがたし、此の浦山を又見る事のしれざれば、今日の思出に……浪は枕のとこの山、あらはるゝ迄の亂れ髮……やがて消ゆべき雪ならばと……」西鶴がおさん茂兵衞の心をゑがいた言葉も、またそのおなじ心のあらはれである。そして、この西鶴の名文を愛した抱月その人もまた、その心意氣をよく味到し得た人であつた。
　人生は夢だ、と誰も云ふ。が、それは夢ではなくして、むしろ、夢の夢かも知れない。誰か超人間的なものが見る夢の中に、あらはれる影の躍り――それが人の一生であるのかも知れない。
　人生は夢だ、しかもそれは惡夢といふのでもない、好夢といふのでもない。そんな價値判斷の及ばぬものだ。いい

みる甲斐がなくとも、どうしてもみなければならぬ夢なのだ。

ただ、われわれに取つては、それでもやつぱり、みる甲斐のある夢である。みる甲斐をあらしめねばならぬ。

とか、わるいとか云はないで、ただ、夢なのだ。そんなら、みる甲斐をあらしめねばならぬ。

夢は夢でも、夢だから無意味だとか、つまらないとか云ふものではない。

夢のうきよの、露のいのちの……だから、人生の醜さも、自分の厭はしさも捨てがたく、またおもしろいのだと思ふ。無常ゆゑ、人生はたふとい。世はさだめなきこそいみじけれと、あの哲學者の兼好法師が既に云つてゐる通りだ。

生きようではないか。何でもかでも、かまはないで、生きようではないか。したいと思ふ事は、やらうではないか。

かまふものか……その腹がなくては、人間は生きられぬ。

い、い、しやんと胸を張り出して、突き進むのだ。

若し、それで進めなかつたなら？

戰ふのだ。奪ふのだ。

戰ひに負けたら？

も一度戰ふのだ。

それでも負けたら？

又起ち上るのだ。

もう起ち上れなかつたなら？

そのときは、死ぬのだ。

潔く死ぬのだ。

その覺悟がすわつたとき、はじめて一人前の男子と云ふものだ。

×

私たちが人生から求めるものは何か？

智慧と、生命とだ。すなはち、血と、智慧とだ。

一つ一つの智慧は、生命の血の一滴を値する。

若し何の犧牲をも拂はずして贏ち得たものであつたならば、それは知識であつても、智慧ではあり得ない。從つてまた、活きて働く力とはなり得ないであらう。

血は智慧ではない。おそらく、一見、智慧に最も遠い、本能と衝動との源泉であらう。しかも、眞の智慧は、その血から生れねばならぬ。

智慧が死んだ理窟となるのは、血でないからである。

われわれは、その血の一滴を以て、一つの智慧をあがなふ。

然し、その血を悉く智慧に變へる人は悲しむべきかな。

世の智者の智慧は、多く貧血と、血の冷えとを示す。

我等の智慧は、我等の血であれ。

冷やかな理智と反省とではなくして、燃え上る生命の力であれ。（昭和三年四月）

牛込ずまひ

牛込について、今何を書かうか。別にまとまつた感想も浮んで來ない。それほど、牛込といふ土地は、私には空氣

のやうなものとなつた。
思へば、私の牛込ずまひも、隨分長いものである。今年で丁度、十五年になる。はじめて下宿をしたのもこの土地。はじめて家を持つたのもこの土地。
その間に、私自身も變つたが、牛込も變つた。
ひときりは、文士區のやうに云はれて、神樂坂の散歩には、必ず文士の幾人かに出會はない事はない程だつたが、今はもうさうでない。
大抵、郊外の方へ越してしまつて、今ここに殘つてゐる人は、ほんの二三人にすぎなくなつた。その二三人の中の一人である私自身も、牛込生活にはもう飽きてしまつて、もうかなり以前から、何處か外へ行きたいと思ふやうになつてゐた。
震災後、神樂坂は賑かになり、美しくもなつた。が、私には昔の神樂坂の方が、ずつと親しみがある。狹斜の巷としての神樂坂は、もとより私は知らない。カフエーと喫茶店との神樂坂には、幾分親しみがあるが、それもこの十年ほどの間に、隨分變化したあとが目につく。
プランタンのなくなつたのも、さう古い事ではない。今ある喫茶店では、下の田原屋が、いちばん氣持がいい。あそこへ一寸立寄つて、珈琲でものんで、散歩してくるのもいい。が、私は散歩ならば、神樂坂よりも、むしろ江戸川の方か、若松町の方へ出たい。
私の家の前を一寸上ると、柳町から來るプラタアヌの並木のある大通りに出る。そのむかうに、島村抱月と松井須磨子との藝術比翼塚のある、多聞院といふお寺がある。弟が死んだとき、眞言宗なので、その寺の和尙さんに囘向をたのんだ。

その和尚さんはおもしろい人で、金持のお葬式などは、一向有難からない。須磨子のために、お寺の名がポピュラアになつたのだけれど、一向須磨子その人に感心してゐない。

抱月氏がなくなつてから、須磨子は始終お寺にまゐつてゐたさうであるが、あるとき、尼になるにはどうしたらなれませうかと、和尚さんに訊いた事があるといふ。

彼女も死ぬまでは、どんなに苦しんだ事だらう。その苦しみが、その話によつて、よく分るやうな氣がした。一人では生きてゐられなかつたのだ、勝氣なあの女は、死ぬ外にみちがなかつたのだらう。

私が前に住んでゐた家の近くには、川上眉山の死んだ家があつた。今住んでゐる家の近くには夏目漱石の邸宅がある。眉山と漱石とは、文學者の兩極を示すもののやうに思はれる。私は漱石を尊敬し、眉山を愛する。この困難な人生の路を終りまで歩き通した人は、よく生きた人として敬したい。が、力盡きて斃れた人には、無言の花束をそのおくつきに捧げたいと思ふ。（昭和三年三月）

少年少女のために

人の一生といふものは、誰しも知つてゐるやうに、なかなか複雜で、困難である。第三者から見て、どのやうに平和で、幸福さうに見える人々の生活でも、その當人の心の中に入つて考へて見れば、決してそんなに羨しがられるやうな、平和な幸福なものでないのが常である。

たとへ幸福と平和とがやつて來たとおもはれても、それは羽根のすばしこい小鳥のやうに、右の窓からとびこんで、左の窓へと飛び去つてしまふ。忘れやすく、意識しにくいものは喜びで、忘れにくく、つよく心を痛めるものは苦し

み、悲しみである。

まだその心の成育してゐない子供時代には、心は丁度健かな芽のやうで、風が吹いて來ても、すぐはぢけるやうにもとにもどり、雨が降つて來ても、うるほひながら伸びる。

そんな時こそ、樂しみは多いけれども、これも、子供そのものからいつて見れば、そんなにはつきりと意識されてゐるものではない。大人になり、世の困難にあひ、いろいろの勞苦の中から、ふとおもひ出して見る時、はじめて、子供の時代はたのしかつた、喜ばしかつたと心づいて、なつかしがるのである。

再びかへしがたい心の距離をもつて、記憶の流れのかなたに、ながめやるそれは、うるはしい花園のやうなものである。かういふわけであるから、もし人間の心に、この生存の上での、ただ樂しみ喜びのみしか感じないやうな心の働きの力が主としてあたへられてゐるなら、いつまでもこの世は樂しく、いや、樂しいとも感じない慣れたこころで、單調にこの一生を一本調子に歩いて行つてしまふだらう。幼時をふりかへつてなつかしむ心も起らず、未來をたのむ期待の心も起らないであらう。そして、それが人間といふものを進化させるかどうかは疑問である。

人間として生きるに當つて、苦しみや、迷ひや、悲しみなどを、人一倍鋭敏に感ずる人ほど、何とかして、その心の支柱がほしい。迷ひの時の暗示、かなしみの時の慰藉、苦しみの時の指導がのぞまれる、女性ならば十三四歳から、男性ならば十五六歳位から、かういふ傾向がひどくなつてくる。その氣質によつて强弱の程度の差こそあれ、ノオマルな人ならば、生のなやみの初めの訪れがやつてくる。そのことは、いつも、少年、少女を取りあつかつてゐる、その周圍の人々の、十分心づいてゐられることであらうとおもふ。

その時代の少年少女は、もうそれまでの童男童女のやうに、決して無邪氣に、あからさまにその周圍の人々と交りあふことを、かるがるしくしないやうになりがちである。父母の手をすりぬけ、教師の手をすりぬけて、どこかへさ

まよひはじめる少年少女の心は、新しい知りあひを、詩歌小說の中に見出すことが尠くはない。

詩歌小說の世界には、少年少女の心に結びつく、自由と淸新、溫柔と愛撫、そして、暗示と慰藉とがある。いい文藝であればあるほど、さうである。

勿論文學にしたしむといふことは、一面子供の知識慾からも來る。寂しがりからもくる。好奇心からも來。るこれを放任しておいて、何でも讀ましておけば、その弊害は恐ろしいものになることは、云ふまでもないことである。だから、軟文學に子供を觸れさせるなといふ敎育者の意見は、決してまちがひではない。かへつて私などの立場からいへば、一層、恐怖と不安を感ずる點が多い位である。

子供が早熟になり、時としては十八九歲で、もう人生をのみこんだやうな事を云つたりするのは、たしかに危險なことであるから、それだけに、子供をさうした不幸に導きたがるこの文學への近接は、警戒を要するとおもふ。

もし文學書に、ひそかに親しむ子供があつたら、その周圍のものはどうすればよいか。私は、いつかさういふ事を考へたことがある。そしてまた、これは、私ばかりの問題ではないだらうとおもふ。

それについて、いろいろの人の意見も、それぞれあることだらうと思ふが、私はもし文學に子供が親しんだなら、その周圍の者も、一緖になつて、子供とともにその書をよんで、子供とともに批評を交すやうにしたいものだと考へる。一つの作に對して、正しい解釋の仕方を授け、それをこの人間の生活にむすびつけて、いゝ反省、いい暗示として、とりいれる心の持ち方を、ともどもに考へてやりたいと思ふのである。

いづれにしても、子供は育つ。その心は、七情の芽立に出逢ふのであるから、それに接しても、十分自己反省の出來るやうに、より正しく、より深く味つて、しかも亂れないやうになるために、大人が、いい批評家として、友人になつてやれると、これに越したことはない。さうすれば、始めて、文學は、子供のための親切な友人、となるであら

う。（昭和三年一月）

快活な心

×

私はわるい意味の詩人らしい惡習慣をもつてゐて、二十代の時分には、週期的に恐ろしく憂鬱になつて、一緒にゐる友達とも、ろくろく口もきかないで、いつまでもムッツリと默つてゐる事が多かつた。平常はそれ程でもなかつたが、概して陰氣で、決して快活ではなかつた。私はそれを大變わるい缺點だと思つた。そして、出來るだけ强制をして、その惡習から脱却しようと努力をした。その努力のためか、又は年齡が長じたせゐか、今ではそれほどひどくはなくなつたと、少くとも自分にだけは思はれるが、それでも普通の人にくらべれば、もとより、ずつと陰鬱で、メランコリックなので、他の人に對して不快を與へはしないかと、心配になる事が多い。

快活といふ事は、たしかに人間の美德である。晴れやかな顔色は、人をたのしくする。人に接する時には、つとめて晴れ晴れしい笑顔を以てしなければならない。それは一見、自らいつはる事であり、巧言令色であるかのやうに思はれるかも知れないが、決してさうではない。良寛の座右の銘になつてゐたといふ道元の「愛語」の精神も、また、これに外ならぬのである。

×

快活な心持は、勢ひ、氣輕な冗談となり、愉快な洒落ともなつて現れる。殊に、交友の間の快活な冗談は、齒車にそそぐ油のやうなものである。友誼はそれによつて滑かに進む。が、然し、それはどこまでも、無邪氣なものでなく

てはならない。卯の毛ほどの悪意や成心がその中に含まれてゐたなら、忽ち相手をきまづくさせて、座を白けさせてしまふであらう。

非常に機智に富んだ私の友達が、思ひもかけぬ人の反感を買つてゐたのは、いつもその度を過した冗談のためであつた。私も少壯客氣に逸つたその時分には、その友達のやうに銳利な理智の剃刀をふりまはす事は出來なかつたが、それでも時々は、ありもしない機才を示して、ひとかど、えらくなつたやうなつもりでゐた事もある。思へば、愚かな事であつた。

私は今、機智(ヰット)よりもユウモアを遙かに重く見てゐる。ヰットは小氣味がよくつて、氣が利いてゐて、あッと人を驚かせるが、往々輕薄になり、小才子風の厭味を伴ふ。それは火花のやうにパッパッと散るが、人を照らす灯にもならなければ、人を暖める火にもならない。ユウモアはそれとは違ふ。心の奧底からおのづと溢れ出るものだ。人格的の深さと溫かみが伴はなければ、決していいユウモアは生れるものではない。私の知つてゐる一人の先輩の如き、人生に對して犀利な觀察眼を有つてゐる人だけれど、その觀察がいつも溫かな同情に裏づけられてゐて、おのづと相手をして破顏一笑せしめずにはおかない。この先輩は、稀れに見るユウモリストだと私は思つてゐる。

×

いつも物事を眞面(まとも)にしか見る事の出來なかつた私にも、ユウモアの價値がだんだん重んぜられて來た。ユアモアのない一日は寂しい一日だと、島崎藤村氏が云はれた事があるが、人間の生活を緩和し、ゆとりをつけるものはユウモアだ。苦しい人生に一つの息拔きの窓をあけてくれるものはユウモアだ。ユウモアはこの無味な人生に味つける(これは卑近な比喩だけれど)謂はば味の素のやうなものではあるまいか。

ユウモアを解しない人は、實にせつぱつまつた生涯を送るものと云はなければならない。あの貧寠な生涯を送つた

一茶にしても、あの飄逸なユウモアは、どれ位その生活をくつろげ、その重荷を堪へやすいものにし、その不運を笑ひすてさせた事だらう。

眞劍といふ事は、もとより尊いし、また必要な事でもある。私がいつも若い友達に望むところは、常に、何よりも、この眞劍といふ事である、眞摯といふ事である。私自身とても、隨分いろいろ間違ひもし、迷ひもしたけれども、眞劍といふ點だけは、常に心がけてゐたつもりである。いや、むしろあまりに一向きすぎたのが、私の苦惱のもととなり、時として私のあやまちのもとでもあつたとも云へる。私はいつも正面からぶつつかつて行つた。あんまり、まともも過ぎた。そこから私のせつぱつまつたニヒリズムが生れたのであつた。

×

人間の心といふものは、思へば弱いものである。人間は始終緊張し、張りつめてばかりゐられない。絶えず張り切つた絲は切れてしまふ。絶えず張りつめた心は、時とすると、裂ける虞れがある。そこで、何處かにくつろぎをつけなければならない。そのくつろぎがユウモアだ。ユウモアとは決して不眞面目といふものでもなく、輕薄といふものでもなく、むしろその反對に、眞摯な心からはじめて生れる一つのゆとりである。或る超脫的の心境に達しなければ、よきユウモアは生れない。ユウモアはその意味で、心をおしひらく窓であるとともに、また、魂の成長のしるしでもあると思ふ。

ユウモアは快活な心から生れる。快活な心は生れつきのものであらう。然し、憂鬱なペシミスティックな氣質にとつては、それは大きな希求であると共に、これを獲得する事は、非常な勝利を意味するであらう。卽ち、狹隘な自己中心の世界から廣い全一の世界へと心を解き放す事を意味するのである。だだし、ペシミストのユウモアといふものも、もとよりあり得る。ガルゲンフモオル(絞首臺上の諧謔)といふものなどがそれだ。が、ユウモアは根本に於いて、人

生との和解であり、一つの調和的氣分の表白に外ならぬと思はれる。
　快活は私にとつて最も望ましい。快活な心から生れるおほらかなユウモアは、人の心を明るくし、自分の心を一層樂しくする。あのユウモアを解しない意地の惡い心ほど、世に厭はしいものはない。そんな抑塞されたあはれなものにならないで、快活な心で、人生を素直に受け入れて味つて行くのが、人間のつとめではあるまいか。何事にも一分の餘裕をもつて、穩かな靜かな心で、自分の狹小な我意から自由になつて、物事を突き放して、客觀的に眺めて行くのが、私達の達し得られるより高い心境ではあるまいか。そして、そこにはじめて私達のよきユウモアが見出されるであらう。

×

　私達はともすると、目前のものを閑却して、遠方の手も屆かぬものを尊んで、及ばぬ願ひに身を苦しめてゐる事が多い。それもわるい事ではない。若々しい心に燃える理想の追求は、美しくもまた尊いものである。が、それと同時に、私達はまた自分の現在もつてゐるものの價値をも忘れてはならない。人生の悅びは、反つて何でもない手近な日常生活の間に見出されるものである。私などこれまで徒らに高遠な、抽象觀念に囚はれて、心を束縛されてゐただけに、とりわけこの感が深い。朝起きてのむ一杯の茶、時々眺める一鉢の草花、貧しい晩餐の團欒、そんなものの中に、生活の悅びといふものは見出されるのであつて、感情を激しくゆり動かすやうな、もつと大きな欲望や情熱は、樂しみよりも苦しみを多く伴ふものである。もつとも、さうした激動も私はいちがいに否定しようと思はないし、その中に生の意義をも見出される事を信ずるのだけれど、心も海の潮とおなじこと、一進一退するので、私は今のところでは、むしろ靜かな安息を望んでゐる。

×

あなたの生活の歡びは何であるかといふやうな質問に、「私事安心立命により物事を凡て善意に解釋し日々を樂しく暮し居候」といふ囘答をしてゐた人があつた。私はおもしろい言葉だと思つた。何事も善意に解釋するといふ事は、たしかに地上の人の幸福である。私もまた、他人の善いところばかりが目について、惡いところは少しも目につかないやうな人になりたい。世の中には、何事も惡く惡くと解釋して、何事もないのに腹を立てたり、他人を憤つたりする人がある。あいつはおれを輕蔑してゐるとか、おれの惡口を云つたに違ひないとか、確かな證據もないのに、人の心持や、行爲を忖度して、平地に波瀾を立てるやうな事をして、結局、自分を苦しめてゐる人ほど氣の毒な人はないと思ふ。

×

私などペシミスティックな氣質だけに、どうも物事の惡い方面ばかりが目につきやすい。何事も惡く考へられやすい。だから、私は不幸であつた。今では、大抵の事には無頓着になりえられるやうには多少なつた。が、まだそれらの上に全く超越した、かの羨ましい超脫の境地には、なかなか達し得られないでゐる。でも、對他關係などに於いて、人の惡いところには無理にも目をふさいで、善いところだけを見るやうに努めてゐる。かうした私のやうな努力なしに、はじめからさういふ風に出來てゐる人は、全く、惠まれた人であると思ふ。但さういふ人には、また反動が來やすい。あまりに他人を信じすぎる人は、手ひどく人に欺かれると、今度は誰をも信じなくなるやうな事が多い（私自身にも多少さういふ點があつた）。それがさうならないで、いつでも物事を善意に解釋し、他人の善いところしか目につかない人こそ、本當に惠まれた幸福な人であると思ふ。その人にとつては、他人の惡といふものは全くなくなるので、その人は善人の間に生きる事が出來るのである。人に欺かれたり、裏切られたりしても、それをみな自分の落度から起つた事だと信ずるやうな人は、世の多くの天才だとか、英雄だとかいふ人達よりも、ずつとずつと私にはなつかしい尊

敬に値する人である。（大正十五年七月）

山代にて

震災の年の初夏であつたと思ふ。加賀の山代溫泉に行つた時の事である。中央の廣場には總湯があつて、それを圍んで宿屋がずつと並んでゐるのが、古風で面白く、ピアッツア・デル何々などといふ伊太利あたりの廣場とはまた格別、その鄙びたところが、ひどく私は氣に入つた。

ところで、その總湯を隔てた差向ひの大きい宿では、どうしたわけか、家の入口に紫の幔幕を張り渡して、日の丸の旗などを立ててゐた。宮樣でもおいでになつてゐるのであらうかと思つて、給仕に出た女中に訊いてみると、時の陸相のy大將が泊つてゐるのだと云ふ。

「陸軍大臣が泊ると旗を立てる規則だと見えるね、總理大臣が泊つたら、花火でもあげるんだらうね」と、自分らしくもない冗談を云つたら、女中は笑つてゐた。

食後、三階の緣に、煙草盆片手に出て行つて、そこにすわり込んで、眼の下の總湯へ、中氣の爺さん婆さんのぞろぞろ入つて行くのを見てゐると、むかうの宿屋の前に自動車が來て止つた。

間もなく、y陸相の一行が、澤山の女中や番頭に送られて出て來て、その自動車に乘込んだ。そしてその自動車は、粟津の方をさして、疾驅し去つた。

と間もなく、さう、ものの十分と經たないうちに、さつき一番低く頭をさげてゐた番頭が出て來て、かの日の丸の旗をとりはづして、それから紫の幔幕をもはづして、小脇にたぐり込んで、さつさと入つてしまつた。

私はこちらからそれを眺めながら、思はずひとりで笑つた。なぜ笑つたのか、自分もわからなかつたが、そのすぐ後で、急に眞面目な、何だか寂しい氣持になつてしまつた。

人間の名譽心や、虛榮心の愚かさを、はつきり見せつけられたやうな氣がしたのだ。

けれどもまた、私は思つた。大臣が泊れば旗を立てる位の敬意を拂ふのは當然であらう。宿屋の誇りとしても。が、客がたつてしまへば、それを外すのもまた當り前のことで、大臣自身も、自分のゐなくなつた後で、すぐ外されても、格別面目にかかはるわけでもあるまいと。

けれども、この簡單な事實は、もつと大きい問題を、私に暗示したのである。

大正七八年頃であつたか、讀賣に時評を書いた時に、文章世界に出た菊池寛氏の『藝術と後世』といふ感想が、私の注意を惹いた。その中で菊池氏は、後世なるものの無意味な事を說いてゐられた。

で、私はそれを批評して、その說に半ば同感を表して、不滅の事業を高唱する人も、どれだけ不滅といふ事を眞劍に考へてゐるか、それを突きつめて考へれば、勢ひメタフィヂックの世界に入る、そしてそこでは一切の見方が一變すべきであると云ふ意味の事を云つた事がある。

後世などといふ事は、要するに單なる抽象に過ぎないとも考へられる。

文學者として、作物を書くのは、後世に殘さんがためではなくして、自己を生かさんがためである。

知己を後世に俟つたといふ心持ちももとよりわるくはないが、もつと強くなつて、同時代と同じやうに、後世などをもたのしみとしないで、ただ自分ひとりの滿足によつてのみ自ら酬いられるやうになりたいものだ。

但しかく後世を信じないところから、いい加減なものを書いてすまさうといふならば、それは自己に對する侮辱であると思ふ。

俯仰天地に恥ぢぬといふ言葉は、我々にとつても尊い言葉である。その心で書かなければならぬのだと、私はそのとき思つたのであつた。（大正十五年十月）

寒山を讀む日

微風吹幽松
近聽聲彌好

この二句二行物、書は春水、詩は卽ち寒山子。この軸の掛つてゐる床の間に近くすわつて、私は長い間ぢつとしてゐた。今日は朝から雪でも落ちて來さうな空模樣で、外は人や車の往來も常よりも多いやうで、何となく慌しい空氣である。歲の暮は全く厭やだ。せせこましい浮世の營みの中にゐては、芭蕉が「旅寢よし宿は師走の夕月夜」の風雅もない。でも、この間中から、市中を奔走して、そこばくの費用を得て、まづ、迎春の計は、これで曲りなりにも成つた。と、まあしておいて、足りないところはどうにかならうと、今日はかうして朝から火鉢を擁して、とりとめのない默想に耽つては、時々思ひ出して、その軸に對すると、いつかたつきの苦勞もさつぱりと忘れて、ああやつぱりいい詩だ、いい句だと思ふ。

秋十月、ここ辨天町の新居に移る。書齋に一間の床の間あり（今迄の家にはそれすらもなかつた）まさか本棚にも出來ない、何か一軸を掛けて、床の間らしくしてみたい、この頃の私の習俗尊重感が、かう要求する。が、あいにく貧寒の書生、傳家の一軸もなく、新たに購ひ求める餘裕もない。その窮餘の一策として、ふと思ひ付いたのは、この夏、四國の田舍の義弟の許へ行つた折り、詩人であつた岳父が大分苦心して集めたらしい軸物が、大半賣拂つたさう

だが、それでもまだ相當にあつたのを睨んで來た、それを一つ利用してはといふ蟲のいい算段である。そこで、如上の次第を叙して、何か適當のものも有之候はば、暫らく拜借仕り度といふやうな手紙を差出してみた。ところが、早速義弟がその適當なものを選んで送つてくれた。それがこの春水の一軸であつた。春水もわるくはないなどと、今度はまた急に贅澤になりながら、ひらいてその詩句を見たとき、私は思はず手を拍つて喜んだ。詩は寒山、しかも安身處の一聯、これ最も私の愛誦するところだつたからである。

寒山子、これぞ今の私の最も好きな詩人である。曾つて私は相馬御風氏の著によつて、良寛和尙を知り、爾來深く傾倒し、今に至つて愈々その高風を慕ふ念が深いが、しかも、良寛は日本の寒山子と云はれた人だ。良寛の歌、もとよりいいが、その詩また捨て難い、脫俗の調である。してその詩たるや、全く寒山の風格をもつてゐるのだ。

その寒山子とは何人ぞ。寒山拾得の畫圖、世にその數尠しとしない、その飄逸の姿は、多くの人の見慣れてゐるところであらう。しかも、寒山子の眞面目、世に幾人かこれを知る。私など、もとよりその知り得ないものの一人ではあるが、それでも、その詩の幽遠高致を慕うて、愛誦措く能はぬ一人だ。とは云へ、寒山の三百首、悉く傑出するといふのではない。玉石混交、時に無味のもの無きにしもあらねど、その佳なるものは、正にこれ神仙の作。これは一に寒山子が、かの世の常の詩人の如く、彫琢推敲、ひとへに巧緻を求むるなく、ただ吟じ出で、吟じ捨てて、敢て顧みるところなきに由る。我が良寛和尙の自由超脫の境地また同じ。かくて、詩と人と一體、詩はただ人の反映たるに過ぎず、氣息たるに過ぎぬ、最高の詩境、心境、ただ玆にある。

安心の處を得んと欲せば
寒山長く保つ可し。
微風、幽松を吹く、

近く聽けば聲愈々好し。
下に斑白の人有り、
喃々として黃老を讀む。
十年歸ることを得ざれば
來時の道を忘却す。

かう假名混りに書き直してみると、多少妙味の減ずる氣もするが、かう書いてみたなら、新しい詩人にも幾分か親しみが出來ようと思ふ。客はしばしばこの詩の意味を問ふ。詩は本來解說すべきものではない、殊に、況んや寒山の如き幽遠高逸の調に於てをや。それゆゑ、私は常に一卷の寒山詩を客に奬めて、以てその答に代へる。今日はその寒山詩を、また取出して來て、灯(あかり)の入る頃まで、私はそれを讀んで過した。（大正十五年十二月）

寂寥の詩人

「そこから羅馬が展望され、その下深く噴水(フオンタナ)の迸る音の聞える、ピアッツア・バルベリイニのずつと上にある、ロッジアで、あの曾つて作られた最も寂寥なる歌、夜の歌は作られた。この時には、そのリフレエンを、私が『不滅の前に死す』との言葉に再現したところの、あの名狀し難い憂愁のメロデイが、絕えず私をとりめぐらしてゐた。」とニイチエが自ら云つた、その「曾つて作られた最も寂寥なる歌」——

夜は來れり。諸(もろもろ)の迸る泉その聲を高む。我が魂も亦迸る泉なり。

夜は來れり。愛する者の諸(もろもろ)の歌今始めて醒む。我が魂も亦愛する者の歌なり。

鎖められざるもの、鎖め得ざるもの我が衷にありて、其思を語らむと欲す。愛の希求我が衷にありて愛の言語を發す。

我は光なり。嗚呼何が故に夜たらざりし。光ありて我が圍繞することこれ我が寂寥なり、
嗚呼闇ならましかば、夜ならましかば。我が心光明の胸に凭れて、其乳を吸はむと欲すること切なり。

……………………………………

嗚呼氷我を繞る。我手は凍れるものを以て燒けたり。嗚呼汝の飢渴を渴慕することこれ我が飢渴なり。
夜は來れり。嗚呼如何なれば我は光たらざるを得ざる。殘るものは夜陰の渴望と、寂寥とあるのみ。
夜は來れり。諸の逬る泉其聲を高む。我が魂も亦逬る泉なり。（阿部次郎氏譯）

この「夜の歌」を――太陽の寂寥のディテュラムブスを、この阿部次郎氏の譯ではじめて讀んだ折りの、自分の驚嘆を私は今に忘れ得ない。私が『ツァラトゥストラ』全篇を讀破しようと望むに至つたのは、一にこのためであつた。多くの人とは異つて、私はニイチエを、まづ抒情詩人として受け容れた。その抒情詩は、私がこれまで讀む事のなかつた種類のものである。「我が手は凍れるものを以て燒けたり」の如き表現は、不思議な魅力をもつて私の心を囚へた。それはあだかも彼が獨逸のより若き詩人に及ぼした蠱惑と相似たものであつたらう。そして、私がニイチエ的思想の深みに親しく觸れ得たのは、この詩的陶醉よりもずつと後だつたのである。

其後、ニイチエに對する私の關係は幾變遷した。私は今ではニイチエ流の英雄主義よりも、東洋流の聖凡不二の達觀をたふとぶ。然し、今でも私のニイチエを詩人として愛する情は、依然として舊の如くである。

抒情詩人としてのニイチエは、私にとつては、孤獨寂寥の詩人である。彼の限りなき寂寥、天才の、孤高なるものの寂寥は、ひとりかの『夜の歌』に盡されてゐるのではない。シルス・マリアのこの隱遁者は――偉大なる孤獨の人シ ョ

オペンハウエルのこの弟子は、その哲學説に於いて師説を轉倒したよりも、むしろその孤獨の深みに於いて、師を凌いだかと思はれる。なぜならば、ニイチエの思想の根柢に横はるものは、この孤獨の精神に外ならずして、また彼の生涯は、彼の思想を最も痛烈に裏づけてゐるのだから。

『ツァラトゥストラ』の詩人を、單なる哲學者と見る人はなからう。この壯麗なる書物は、恐らくは、近代に於ける最高最大の叙事詩であらう。また恐らくは、新しい叙事詩の基礎を置くものとして、その超人説、並びに久遠囘歸の説の含む哲學的意義を除いても、單に一個の文學的作品としても、十分卓越した地位を占めるに違ひない。

然し、ニイチエの詩は、ひとり『ツァラトゥストラ』に止まらない。彼の妹エリザベエト・フェルステル・ニイチエの編した『ニイチエ詩集』一卷は――一八五九年、彼が十五六歳の少年時代の詩篇より、その散文の論策中に散見する「プリンツ・フォゲルフライ」の歌や、「デュオニゾス・ディテュラムベン」をはじめ、「彼の最後の寂寥に堪へるために、彼自らに歌ひ聞かせたるツァラトゥストラの歌」までを悉く網羅してゐる――抒情詩人としての彼を全面的に示すものである。然し、私は單に形式上の韻律詩のみならず、ニイチエの散文の述作をも、すべて純粹に詩的産物であると思ふものである。

まづ、ニイチエは、何よりも詩人であつた。體系を缺くことを非常な缺點の樣に看做して、ニイチエを哲學者として認め得ない人でも、彼の詩人としての優れた地位は、之を否定する事は出來ない。そして、詩人である事によつて、ニイチエの意義は既に十分ではないか。思ふに、ニイチエは、恐らくハイネ以後の獨逸の生んだ最大の詩人に外ならぬであらう。

そして正しく、ニイチエは一般に「詩人哲學者(ディヒテルフィロソフ)」の名を以て呼ばれる。それは至當である。ニイチエほど詩と哲學とを融合せしめた人は、あまり多くはないからである。然し、詩人哲學者とは、本來何を意味するか？　詩人にして

哲學者である人の謂か、又は詩人と哲學者との中間にある人の謂か。凡て盡さない。私はそれを自己の體驗に根ざし自己の生命感に出發する哲學者と解する。彼等の哲學は、自己の生活と游離した、概念の組立や、論理の遊戲ではなく、その個人生活の中樞に根ざすもの、否、彼等自身の心肉に外ならぬ。それゆゑ、彼等は我々を動かすのである。そして若し、哲學者がかやうでないならば、それは單なる哲學教授、又は哲學史家に過ぎないであらう。私がモンテエニュや、エマスンや、ショオペンハウエルや、ニイチエのやうな人を、自分の師に選ぶのは、彼等がさうした解說者學究先生ではなくして、創造者であり、直觀の人であり、人間苦の體驗者であるからである。彼等は謂はば「その耳を世界の心臟に押當てて、その祕密を聽いた人」ではないか。

ニイチエは詩人であつた、詩人であると共に、彼はまた音樂家でもあつた。この事は、ニイチエを解する上に、また特に彼の詩を解する上に必要の事であると思ふ。『音樂の精神よりの悲劇の出生』を書いたニイチエはまた自らその「悲劇の出生」を、音樂と呼び、その自傳『見よこの人を』の中では「ツァラトゥストラ全篇は、音樂の中に數へらるべきである」と云つてゐる。

最高の詩は音樂でなければならない。もとより詩と音樂とは、全然その性質を異にする藝術である事は云ふ迄もないが、然し、全藝術の中では、詩が音樂に最も近い事も人の知るところである。そして私がここにかく云ふ意味は、詩作はまづ音樂的精神に出發しなければならぬといふのにある。そして、ニイチエの全哲學が、既に、この音樂的精神――換言すれば、デュオニゾスの精神から生れたのである。彼の詩哲學の主たる魅力も、恐らくまたここに存するかも知れない。

彼の音樂的練習は、隨分早くから始まつた。フェルステル・ニイチエの言葉によると、彼は既に十歲か十一歲の頃から詩作を始めてゐたといふが、その作曲を始めたのはそれより餘り後の事ではないらしい。『ツァラトゥストラ』を評し

て、「それは音樂の精神から生れたものである。いな、正しくシンフォニックに構造されてゐる」と云つた作曲家グスタアフ・マアレルは、また彼の作曲を評して、「彼の作曲家としての天分は、一般に考へられてゐるよりも、遙かに大なるものがある」と斷言してゐる。

そして、かうした音樂的精神と、音樂的天分とこそは、正しく詩人の間に比類を缺いでゐる。加ふるに、彼がいかに巧妙に獨逸語を取扱つたかは驚くべき事である。「他日、ハイネと私とが、獨逸語に於ける至上の藝術家と云はれるだらう」と私が云つたのは正當である。そして、かかる音樂的効果に於て、ニイチエの詩は、彼の青年時代の愛好詩人ヘルデルリンを遙かに凌いでゐる。彼はその十七歳の時、ヘルデルリンの散文叙事詩とも云ふべき『ヒュウペリオン』を嘆賞して、「實際、この散文は音樂である」と云ひ、「逆卷く海の波音である」と云つたが、同じ言葉は、またニイエの全哲學に冠せられるべきものである。彼の散文詩篇の音樂的魅力に比すべきものは、韻律詩の中にさへ、それ程はなからうと思ふ。ここに原文を引く事は出來ないが、ただその意味を傳へるに過ぎない飜譯でも、その音樂的の力は想察する事が出來ようと思ふ。なぜならば、音樂は主としてその發想に存するから。「音樂的精神の生んだものは、その思想が旣に音樂的であるから。

彼の『ツァラトゥストラ』の魅力は姑らく措く、キトコオプなどは、その一大醉讃歌に比して、遙かに光彩薄きもののやうに云つてゐるが、本來の抒情詩の中に於いても、我々は同じく驚くべき詩の息吹に觸れるのである。見よ、あの嘆賞すべき『秋』のあのリズム！

これは秋なり。秋は――汝に心をやぶる！
飛び去れ！　飛び去れ！――

日は山に忍びよる
かつ下りかつ下りて
一歩毎に休息す。

何故に世界はかくも萎びたる！
つかれてのびたる絃の上に
風はその歌を奏づ。
希望はのがれぬ——
風はその後に愁訴す。

これは秋なり。　秋は——汝に心をやぶる！
飛び去れ！　飛び去れ！
おお木の果よ
汝はふるふか、　落つるか？
いかなる祕密を汝に敎ふるぞ
夜は。
凍れる戰慄の汝の頰を、
つやある頰を蔽はんため——

汝は默するか、答へざるか？
誰かなほ語るものぞ？——　——

これは秋なり。秋は——汝に心をやぶる！
飛び去れ！　飛び去れ！
「我れは美しからず
——かく星の花はかたる——、
されど人間を我れは愛す
しかして人間を我れは慰藉す——

彼等は今なほ花を見るべし、
我がかたにかがみて
ああ！　しかして我れを折るべし——
彼等の目にしかる時には
追想は輝きいづ
我れよりもより美しきものの追想は。——
——我れはそを見る、我れはそを見る、——しかして死す。」

これは秋なり。秋は――汝に心をやぶる！
飛び去れ！ 飛び去れ！

然し、この詩人は、いかにその孤高に堪へねばならなかつたらうか。世はニイチエについて知らうとしなかつた。彼の著作の出版すら容易ではなかつた。ショオペンハウエルですら、その晩年に、名聲の歡迎を受けて自ら慰める事が出來た。ニイチエはかかるものを知らなかつた、また、知らうとも思はなかつた。アルプスの氷雪の中で、然し、彼の心はいかに孤獨と寂寥との思ひに顫いたであらう。

アンリ・リシュタンベルジエは、彼をイプセンのブランドと比較した。一切か無かの信條を彼に擬した。恐らく、そこにも多分の眞實はないではなからう。ものやさしい、柔和な、溫厚な一言語學者――二十五歲にしてバアゼル大學の員外敎授となつた、この謹嚴な秀才が、他日、一世を震撼する强者の道德の創唱者として、狂氣に至るまで、獅子吼するの人であらうと、當時何人が思つたであらう？……

ニイチエは元來、極めて純潔な人であつた。一生、女性も戀愛も知らなかつたと云つていい。ただ、前後に二囘、彼がワグネル夫人コジマに對して抱いてゐた感情が、戀愛のそれに近いものであつたやうに云はれてゐるのと、後にルウ・フオン・サロメに對して有つたのは、明かに戀愛であつたやうに觀察されてゐる。曾つて、故中澤臨川氏が著された小說『嵐の前』は、專らこのルウ・サロメへの彼の戀愛を描いたものであると云ふ事であるが、まだそれは讀んでゐないので、ニイチエがそこにどんな風に描き出されてゐるか知らないが、これをニイチエ自身が、果して戀愛と意識してゐたかどうかは兎に角として、當時の彼の心的葛藤は、いな本來、ニイチエの性格そのものは、小說よりもむし

ろ悲壯劇として、すぐれた題材ではあるまいか。しかも私は、まだニイチエ自身を主人公とした戯曲を見たことがない。恐らくそれがあまりに内面的の悲劇であるがためでもあらう。

このルウ・フオン・サロメ、後にルウ・アンドレアスと云つたこのペテルブルク生れの婦人は、かのプロブレマティッシェ・ナトゥレン、卽ち疑問的人物と云はれるものの一人で、論文、小說等の著作もあつて、かなり才氣のあつた女であつた事は、ニイチエが彼女を自說の後繼者に選んだのでも考へられる。が、然し、そこでもニイチエは悲しい幻滅の苦を味はねばならなかつた。曾つて心から傾倒してゐたワグネルに於いて味つたのと同じやうに。ルウ・サロメも、結局ニイチエの口を極めて罵つたかのブロンドのベスティイエの仲間に外ならなかつたのだ。

孤獨がニイチエの運命であつた。それは彼の性格の導いた必然的結果でもあつた。全く、アンリ・リシュタンベルジェが云つてゐるやうに、ニイチエは「自分の愛するものを理想化するといふ危險な習慣」を有つてゐた。從つて、「幻滅と冷却若くは完全なる破裂は避くべからざるもの」であつたのだ。だが、これは詩人的な、熱中的な性格には免れない事であらう。私はかうした性格を、反動的性格と名づけたい。そして、ドストエフスキイやストリンドベリイなどにも、さうした傾向が見出されるやうに思ふ。

ニイチエほど、友情を求めて、友情に裏切られた人も稀らしい。彼の書簡には、その寂寥を訴へた悲痛な言葉がある。この悲しい孤獨寂寥は彼の戰ひにも、彼の平和にも、いな彼の勝利の日にさへも、彼を緊縛して離れる事はなかつた……彼の名聲は彼の狂氣に次いだ、一日、一語も發する事なく、默然として、庭に面した椅子の上で過した彼の狂氣の日の姿ほど、然し、我々に寂寥と孤獨との象徵として思はれるものが、また他にあるであらうか……

＊

飛べよ、鳥よ、汝が歌をなけ

沙漠の鳥の聲音(こわね)をもて！――
汝痴人よ、汝の傷つける胸を
氷と嘲りとに埋(うづ)めしめよ！
鴉はさけぶ
列をみだして市(まち)にむかふ、
――やがて雪はふらん。

（大正十五年五月）

雪深き心

――「自作詩の鑑賞」を求められて――

「自作詩の鑑賞」と云へば、何だかいい氣持の自己陶醉を思はせる。これに反して、批判とか批評とか云へば、嚴格な自己反省を思はせる。が、どちらにしても、結局はただ言葉の相違だけの事で、自畫自讚の實は同じ事であらう。それもおもしろい。私もやつて見よう。

氷柱

雪の中の條(すぢ)
ひとすぢ、ながながに曳き
雪のそこひに

見棄てられた野の墓場をめぐり
たまたま河とあらはれ
山から山へ
さしわたす樋の腐れに
洩る水か
丈餘の氷柱かずかぎりなく
さむざむとつらなる
年を越すかなしみの水晶
薄日にきらめき
その劍、鋭く痛く
心を刺す。

この詩は大正十二年三月、秋田に旅したをりに得た「雪深し」四章中の一つで、大正十四年に出した詩集『自然の惠み』中に收められてゐる。

三月と云へば、東京ではもう春であるが、汽車が板谷峠を北へ拔けると、そこにはなほ儼として、冬の王が君臨してゐた。

雪――雪は米澤、山形、新庄と、行くに從つて、白く、或ひはむしろ紫色に、層々として連つてゐた。どちらを向いても雪だ、山も、野も、町も、村も……北國の人にとつては珍らしからぬ眺めながら、私にとつては手痛い襲擊――目に痛く沁みるやうな、その佗しい、單調な眺め……

全く、侘しい旅であつた。

私は持つて來たエミイル・ルカの『靈魂の極限』といふ書物を取出して讀みはじめたが、その白い頁の上は、すぐ雪の野原に變つてしまふ。又しても、又しても、私はその單調な、荒寥とした雪の沙漠に見入らずにゐられなかつた當時、精神上の深いディプレッションに沈淪してゐた私は、その窓外の雪景に――空漠たる動きのない、冬の一色のつらなりに――直ちに自分の心の象徴を見たのだ。侘しい、モノトナスなその眺めが、絶えず私の腰を誘つてやまぬのは、あだかも鏡の面に、自分の顏を見ずにゐられないやうなものであつたらう。

私は書物を讀むのをやめて、いつかそのブランク・ペエヂに、鉛筆で斷片的な詩句を書きつけはじめた。短い章句や單語やが、行くにつれ、外を見るにつれて、そのペエヂの白を彩つて行つた。そして、それらの斷片が後に結合せられて、『雪深し』の詩章となつたのである。

この連作の中では、まづ、

不踏の雪
山の背かけて
つらなる果てに
ほそぼそと彳む木立
まばらまばらに
針葉樹、落葉樹の枝の寒さよ。

ではじまる『雪の靑空』の素材を得た。それがたしか山形と尾花澤との間。

それは一羽の鴉だ

果てしなく降りつめた雪のおもてに
たゞ一點、黒く動かぬ物の影。

ではじまる『北國の鴉』は新庄か院內あたり。そして、この『氷柱』は、それより北、秋田縣に入つてからだつたと思ふ。

湯澤と橫手との間ぐらゐであつたらう。雪の深い、深い山の中から、野へ出て行く時だ。雪の中に、少し雪が低くなつて、長々と連つてゐる、北へ北へと、何處までも線路に沿うて……それは一條の川の流れであつた。そして、その川のめぐるところには、野の墓場もあつた。かすかに雪の中から顏を出した石塔の寂しさ、誰かこの雪に埋れた死人を訪ねるものがあらう……

忽ち、私の眼は愕然として、その一點に凝る。雪の中の雪の筋は――そこで、俄然、土の面を、しかも赤々とした土の面をあらはす。それは斷崖であつた、縣崖であつた。川面はそこで忽に低下して、その崖から崖へ、こちらからあちらへと、他の流れが橫ぎるのだ。

それは大きな樋で、その木の腐れから、洩つた水がその儘凍つたものであらう、何たる眺め！　大きな氷柱が、凡そ雜木の幹ほどもあらうと思ふのが、崖の深さほどに、凡そ二丈もあらうと思はれる長さで、林のやうに連つてゐるのではないか――

それは私を驚かせた、同時に、喜ばせた。それは私の心と、いかに鋭く相映ずるものであつたらう。私はそこで、この詩句の大半を書き取つたのである。出來るだけ無駄を省き、冗語を削り、しかも完全に、私の主觀をその氷景に投入せんと試みたのだから、それは單なる寫生ではなくて、幾分象徵の域に入つてゐると思ふ。然し、その出來榮えは、勿論、諸君の批判に一任するものである。（大正十五年二月）

詩作日記

佛蘭西で最近行はれてゐるハイカイ詩といふものの紹介を讀んで、私はそのつまらないのに驚いた。その中には、次ぎのやうなものもあつた。

×

池のほとりに人が一人ゐる
水の中にも人が一人ゐる
どつちが本當の人かしら？

字句は多少違つても、大體の意味はこんな事であつた。が、一體こんなものが、俳諧であらうか。私には詩とさへも云へない氣がする。これは特別ひどいとしても、その比較的ましと思はれたものも、概ね淺薄な理窟や思ひつきで、單に三行若くは四行の短かい詩といふだけで、その精神に於ては、俳諧とは何の關係も見出し得られなかつた。このハイカイ詩を見て、歐羅巴人に、東洋の詩の全然理解し得られない事を、私は今更のやうに考へずにはゐられなかつた。しかも、このハイカイ詩などが、今に、西洋から來たものならば何でも有難がる一派の詩人達によつて、逆輸入されて、そこら中にそれの模倣が一杯出てくる事を想像すると、たまらない氣持だ。

ところで西洋人に東洋の詩が分らないやうに、我々にも、西洋の詩の本當の味は分らないのだ。これが私の得た確信である。それは勿論、全然その意味さへも分らないと云ふのではないが、言葉の外にある不可說の味——謂はば詩の眞髓とも云ふべき、その奧底の肝腎な或物は到底分らないのではあるまいか。どうもどんないい詩だと思ふもので

も、何だか霞をへだてて見るやうな物足りなさが離れない。勿論これには、私の語學力の不足といふ事も、大いに原因してゐるとは思ふが、夏目漱石氏や、戸川秋骨氏の如き英學界の諸先輩が、同じ事を云つてゐられるのを見ると、それが單に語學力だけの問題でない事は、誰しも首肯せずにはゐられまい。

それは單に個人の能力に關するよりも、もつと根本的の國民性の問題である。精神の相違、傳統の相違、不可抗な宿命的なもののやうに思はれる。かうして放蕩息子も、つひには親のふところにかへつてくる。我國の傳統的な詩歌の世界が、外國文學の心醉家に、再び新しい光彩の下に顯現するのである。萬葉以降の燦爛たる歌道と、芭蕉以後の俳諧道と、そして、梁塵秘抄、閑吟集、隆達、松の葉などの今樣や歌謠が、私にも世界の最上の詩歌となつたのである。

×

俳諧には私は深い知識も感じもないので、芭蕉、蕪村、一茶などいふ名前を筆にするだけでも、少からず氣がさす次第だが、だんだん好きになつて讀んでゐるうちに、いくらか分つてくるやうな氣もして來た。兎に角、最近になつて珍らしく俳句らしいものを作つて見た。それは去年の十月の末のこと、私は東北と遠刈田といふ温泉に行つた。藏王の麓の寂しい温泉で、宿には自炊客のお婆さん連ばかりが右往左往してゐた。別に大して見るところもなく、持つて行つた仕事も一向出來ないので、しまひには諦めて、二三日の間、俳句ばかり作つてゐた。勿論俳句といつても、何の修練も經ない素人の事だから、ただ氣分を樂しんだだけの事で、その收穫は、臆面もなく、島田青峯氏のところに書き送つて、後で自分の盲蛇(めくらへび)が恥かしくなつた程のものであつた。ところが、B君といつて、ずつと前から句作をやつてゐて、今ではホトトギスの雜詠で、二三句も毎月出る程になつてゐる友人が、案外にもその中の二三句を賞めてくれた。その中でも、

髭剃ればにはかに寒し山の風

が一番好評で、この山の風とおくまでには、少なくとも句作五年の苦を積まねばならぬとまで云つてくれた。それから又、私が句にも何にもなつてゐないと思つた、

　　小料理の前に彳むふところ手

を賞めてくれたのも、案外であつた。その外、

　　屋根葺きの仕事急がぬ時雨哉
　　女湯は姥ばかりなる夜寒哉
　　石にふれる水みな赤し濁川
　　湯の宿や間毎に匂ふ味噌醬油

など駄句澤山だが、この湯の宿には私は一寸自信があつた。ところがB君は季がないと云ふのでこれは取つてくれなかつた、そして新醬油としたらよからうと云つた。だが、これは味噌醬油をさげてくる自炊客ばかりの溫泉宿の實況を捉へたもので、山の湯に來るお婆さん達に新醬油は受取れぬので、僣越ながら服しかねた。一體、これらはみなまづいながらも、實感實景から來た句で、山の風とても實感をその儘云つたのにすぎない。が、B君の言葉を聞いてゐると、季寄せを見ていろいろ考へてみた方がいいらしくもある。季題の意義について、私はまだはつきりした觀念がないが、かうした點で、いつか島田靑峯氏におたづねしたいと思つてゐる。

　兎に角、B君からは意外に賞めて貰へたが、どうも友人同士のしんしやくが大部分らしく思はれるので、私は到底句作には自信がもてない。又將來あまり上達しさうな氣もしないのである。が、それでも句作は少しづつやつて見たいと思つてゐる、それは俳句のためばかりでなく、實は私の本領の詩のためなのである。

×

まづい句を振廻した厚顏無恥は、自分でも後ですまないと思つたが、然し、そのおかげで、私の詩作に多少の影響はあつたやうな氣がする。遠刈田詩篇の一つとして、私はかうした詩を得た。

行つても行つても
おなじ雜木の路、
まがつてはつづく一筋 ―
何處やらに水の音、
枯草の下、落葉の下を。
頰かぶりした男
枯薄 ――
誰も來ない、
鳥がチチと啼く。
急に人が戀しい、
日が落ちて、寒くなつた。

ところで此の詩を或る若い詩人に見せると、私の詩風の變つた事をまづ認めてから、「何處か俳味がありますね」と云つてくれたので、私は內心ひどく得意にならざるを得なかつた。けれども、その後で、「頰かぶりした男がゐるの

に、誰も來ないといふのは矛盾ぢやありませんか」と云はれた時には、折角の得意の鼻もポキリと折れざるを得なかつた。私はがつかりしてしまつたのだ。

頬かぶりした

枯薄――

とは、頬かぶりした男かと思つてみると枯薄であつたと云ふつもりだつたのだ。が、さう云はれてみれば、成程これだけでは、さうとられても仕方がないやうでもある。然し、私としては此上何も說明したくない氣持である。この上一字でも加へるとこの味がなくなる氣がする。（これは明らかに俳句の影響のやうだ）そこで、その場で更に、私の意圖がさうとすれば、この句を最後に持つて來た方がいいと云ふ說も出たので、さうして見たが、どうも落ちつかない。最後に決定したのは、左の如くであつた。はじめの五行は元通りで、その後一行あけて、

頬かぶりした男――

枯薄。

鳥がチチと啼く。

急に人が戀しい、

日が落ちて、寒くなつた。

これで私の意は多少通ずるやうになつたかも知れない、ただかうすると、「誰も來ない」は必要がなくなる。

×

俳諧研究は、以上の通り貧弱きはまるものだが、歌の方は、それ以上、私にも興味もあり、古い親しみもある。そして、最近では、毎月寄贈していただいてゐる「國歌」や「覇王樹」や「短歌雜誌」などを、かなり、熱心に讀んでゐる。

歌趣味と俳趣味とは、確かに違ふ。もつとも、最近では、兩方の境地が隨分接近して來てゐるやうな氣もするが、その詩としての性質は全然違ふやうだ。そして歌はまづ調子のもので、音樂的な傾向の強い私には、最も味はひやすく、且つ親しみやすい。それだけに、まづい句作を、俳壇の耆宿である島田氏のお目にかけたりする狂愚は敢て出來ても、まづい歌を作つて臆面もなく振廻すだけの盲蛇(めくらへび)はやれないのだ。その代り私は「詩と短歌との間」といふ文章を書いて、今專ら感傷的な少女趣味の詩としてのみ考へられてゐる小曲を、今非常にかけ離れて、全く別の世界となつてゐる詩と歌との間を結びつけるくさびともし、また、その意義を高めて、古日本の傳統的精神の高所に引上げるよすがともしたいと企てた。そして、それにはその前に編んだ『痲の葉』の作品が、その試みとして引くのに丁度役立つた。今その二三をここに引く。

憂き鷗
うきうき鷗
けふもまた
水にかなしき
影は夢みる

文(あや)見せて
消ゆるを水手(かこ)は
雪とながむる　（憂き鴎）

めづらしや
朝のさへづり
出てみれば
ゆらぐ小枝に
はや影もなし
どこかむかうで
朝のさへづり　（朝の囀り）

ふたりして
かくれて住めば
やすらかに
世をあざむもよしや
豆を煮て
番茶すすらん

この山家
ふたりかくれて　（隱栖）

狹山には
枯葉さわだつ
今日もまた
二人來べしと
ささやくか
その枯笹は　（枯笹）

ささかにの
雨にかくるる
家もなみ
網のまなかに
ゆられゆらるる
ささかにの
網にかかりて
蝶ならば

われもぬれつつ
ゆられゆらるる　（ささかに）

若しこれが水を割つた短歌と思はれれば萬事休する。短き時は、短歌よりも短かく、長き時は佛足跡歌、今樣、連作に類する事もあり、五の音と七の音とを自由に驅使して、無限の變化を生じ得るこの詩形は、短歌の格調を愛しつつ、しかもそこに入りえざる私にとつては、非常に愛好の詩形となつた。私はかうしてここに一體の小曲體が創出されて、これに傳統的な自己の感情を盛る事が出來るのを喜ぶ。短歌の格調は永久にその儘に保存し、尊重したい。私は口語歌なども中途半端な企てに思ふ。短歌の意義は、その五七五七七の制約にあり、從つて文語たるべく運命づけられてゐる。この短歌の格調を愛しつつ、詩律の變化を求める人には、この小曲が適當の詩形であらう。と同時に、詩人が西歐の模擬を離れて、日本詩の本道に復歸せんとする時、その新調は將來のよりよき詩形の土臺となりはすまいか。勿論、私の作は拙くもあるし、又その意圖によつて制作されたものでもないが、この謂はば「短歌調」の詩が少しでも、從來ひどくかけ離れてゐた詩壇と歌壇とを結びつける機緣ともならば嬉しい事である。なほ此の小曲體には、短歌調の外に、民謠調あり、俳諧調あり、その世界は廣いと思ふ。（大正十四年一月）

探偵小說

探偵小說中の人物のやうな緊張味で生活したら、張合ひがあるにちがひない。しかも、探偵小說を讀んでゐる時ほど、人間の生活のだらけてゐる事はない。

六七年も以前であつたか、日頃の神經衰弱に、九十度の酷暑とて、何も仕事が出來ず、避暑に出かける餘裕はなし、寢ころんで、探偵小説を讀み耽つて、一夏をすごした事がある。その時の自分の生活ほど、空虚な張合ひのないものはなかつた。

今や、探偵小説は非常な流行をなしてゐるやうであるが、この自分一個の經驗からして、この現象を、他の多くの文學的事情と共に、現代の人心の弛緩と空虚とを表明するものと推論するのはあやまりであらうか。

恐らく、あやまりであらう。むしろ、それはもつと深い暗示を與へるものかもしれぬ。非常な失望や苦惱を受けた時、その苦を忘れるために、多くの人は酒を喚ぶ。時には、酒の代りに探偵小説を讀む人もあり得るのだ。曾つて、その苦心した佛蘭西革命史の原稿をミルの家の下女の粗忽からすつかりストオブにくべられてしまつたカアライルが、その後かなり長い間、毎日々々、刺戟的な傳奇小説を讀んで日をすごしてゐたといふ逸話は、まことによく這般の消息を語るものではあるまいか。

探偵小説もまた一種の酒精である。刺戟劑であり、昂奮劑である。元來、探偵小説の魅力は、一般に通俗小説の有する筋の變化と發展の興味たるに止まらず、智力の遊戯として、謂はばなぞなぞをとく興味である。その點、先般しばらくの間流行したクロッスワアドの興味などに極めて類似してゐる。そして、この種のものの流行は、必ずしも無意味でもなく、また人心の弛緩と空虚とを示すものと云へないばかりでなく、殊にその求める側の方はとにかく、その與へる側の方から云へば、日本人にとつての一進歩だとも云ひ得られよう。今や、探偵小説は、曾つての黒岩涙香時代とは違つて、單なる飜案でなしに、創作として行はれるやうになつてゐる。分析的頭腦に短なる日本人が、とにかく探偵小説の創作を企てるやうになつただけでも、意味のある事ではあるまいか。

然し、また、探偵小説を讀む側から云つても、それを單なるひまつぶしにすぎないと斷ずるのもまた早計であらう。

それは謎々をとくが如き頭腦の遊戯として、多少の意味があるばかりでなく、それが與へる若干の敎訓もないとは云へない。

即ち、敎訓は大凡次ぎの如きものではあるまいか。

一、人間の交涉が、刃物と刃物とを合せるやうなものである事、それゆゑ、一刻も油斷が出來ない事。

一、何人をも信じてはならない事、人を見れば泥坊と思ふべき事。

一、闇黑に光明を投ずるのが、明晰な頭腦である事、明智のはたらきが、人生の最上のものである事。

これらの事を敎へはしないであらうか。

探偵小說を讀むのも、また無意味ではない。玉突きにも、麻雀にも、それぞれの敎訓がある如く、否、それらにさへ敎訓があるのだから、況んや探偵小說に敎訓のない筈はなからうと思ふ。（昭和二年八月）

夏日漫談

×

冬の間は早く春が來ればよいと待つてゐたが、その春が來たと思ふと、すぐ梅雨の時分になつて、また暑い夏がやつて來た。以前には氣候のきびしい夏や冬は、どうしてもきらひであつたが、この頃では火鉢のそばを離れられない冬でも、汗のじくじく沁み出る暑い夏の日でも、それぞれの趣味が見出されるやうになつた。

禪宗の言葉に、寒時は寒殺し、熱時は熱殺すとか、また心頭を滅却すれば火も亦凉しとかいふのがあるが、さうした大きな心境はよくわからないけれど、その與へられた境地に徹する心持は好きである。その點で海岸や山の中へ避

暑に行くよりも、暑い東京の中で、一生懸命に自分の仕事と取つ組み合ひしてゐたい氣がする。

旅もいいけれど、夏の旅といふものは苦しいことが多い。中央線だとか、山陰線だとかいふトンネルの多い汽車では、身體中が煤煙で眞つ黒になつて了ふ。溫泉などでも避暑客で一杯になつて、六疊の間に五六人も追込まれてゐるやうなのが澤山ある。そんな中で、どうして避暑なのかと思はれる位である。私の趣味では、氣候の酷しい時には、働けるだけ働いて、氣候のよい時分に旅したい。

東京の夏は苦しいものといつても、夜になると、東京でなくては味はへない夏の夜の情緒がある。明るい灯の下に涼しさうな姿をした人達がぞろぞろと歩く。その中に自分も交つて、ビールだとか冷しコーヒーだとかを飮んだりして歸るのも、何となく捨て難い味はひだ。

×

日本人の生活には何といつても俳諧趣味が多い。西洋人の生活に比べると、どうしても淡泊で、超脫的なところがある。どんな餘裕のない人でも、植木をいぢつたり、朝顔などの花を作つたりして、自然に親しんで行かうとしてゐる。

文學にもさうした國民性が、はつきり現はれてゐると思ふ。そしてその點からいへば、俳句などは最も日本人らしい文學であるやうな氣がする。私はこれまで西洋の詩を多く讀んで來たけれど、今日では詩に於ては、西洋のものよりも、東洋のものが遙かに優れてゐると信ずるやうになつて來た。

西洋の詩を飜譯してみると、その冗慢なことに、うんざりさせられることが多い。これまでにくどくどしく、あくどく書かなくともよささうだと思ふことがある。その半分にも、四半分にも縮めて了ひたいやうな氣さへすることが往々ある。俳句を讀むやうになつてからは、特にその感が深い。

けれど小說の方面では、日本のものは餘り感心されない。西洋の作品の間に持出して遜色のないものだとは、殘念ながら考へられない。日本に紹介されてゐる外國の作品でも、その中にはずゐぶんくだらないものも勿論ある。先頃一寸流行つてゐたポオル・モオランなども、私はあまり高く買へない。けれど、ドストエフスキイだとか、トルストイだとか、フロオベルだとかの作を見ると、これだけの深い、云つてみると、これだけのあくどい、濃厚なものは、日本人には、殘念ながら、どうも書けないだらうといふ氣がする。その點からいつて、俳句的な心境小說などの方が、日本人らしいものかも知れない。が、吾々としては、矢張りそれでは滿足出來ない感情がある。

たとひ、ドストエフスキイほどに深刻ではなくとも、もつと深味のある情熱的な、深い悲劇的な、偉大な作品が欲しいと思ふ。つまり、私は、或ひは矛盾かも知れないが、詩の方では東洋的な、閑寂味、超脫味を欲し、小說ではより多くの分析的な精神と複雜味とを求めてゐるのである。もとより、詩に於いても、閑寂や枯淡の味ひのみでなく、情熱的な燃え上る焰のやうな詩を私は愛好する。又、自分自身、多少さうした作品をも有するつもりだ。が、心が散文の方に向ふと、詩に於いては、傳統的な自然詩の方が好ましい。そして、散文に人間の七情の苦と熱と、罪と迷ひとを盛りたいのだ。そして、この詩と散文、靜と動、枯淡と濃情、自然と人間、東洋と西洋、——この二つの世界、二つの精神が兩方から私を引く、その間に右し左し、惹かれ放たれして、轉々として行くのが私の一生であらう、私の一生の意義なのであらう。（大正十五年七月）

或る叛逆者

思想と人格

×

文學者が美術の批評を企てると、大抵の場合、美術家のものわらひになるのが落である。それはなぜであらうか？美術の眞髓は、やはり自ら畫筆をとつた事のある人でなければ分らぬので、文學者が美術の中に鑑賞し得るものは、多くの場合、單に文學に過ぎぬからであらう。例へば、ミレエが我々に訴へる事の多いのは、著しく、文學的要素を含んでゐるからに外ならない。若し文學者で、セザンヌの靜物はいいなどと事もなげに云つてゐるものがあれば、まづ、大抵は雷同にすぎぬと見なしてもいいかも知れぬ。

音樂會で、長髮にした小說家などが、さも感に堪へぬやうに瞑目したり、首を振つたり、しきりに演技しつつ傾聽し、喫煙室で、やはりベエトオヱンは凄いもんだねえとか、さすがにショパンは詩人だねなどと喋々として讃嘆してゐるのを見ると、その幸福が單なる音樂の鑑賞以上に及んでゐるのを感得する。ケエベル博士によれば、文學者が音樂について語つたものは、みな取るにも足らぬ愚昧にすぎないが、ひとり自ら音樂家でもあつたニイチエだけは、さすがに妥當な名言をのべてゐるといふ。

たしかに、藝術の鑑賞には、それ相當の修練が要るであらう。そして、この事は、藝術の廣い分野に亙つて云はれるばかりでなく、また、同一の藝術の範圍內に於いて適用せられる。例へば、文學の中でも、小說と戲曲、詩と歌、それぞれ獨自の世界を成してゐるかも知れない。さういふところから玄人と素人との區別が出てくる。然し、私はそんな區別をしなければならぬ事を煩はしく思ふ。トルストイ流に、やはり誰れにも分るものが本當のいい藝術ではな

いかと思はずにゐられない氣持がある。

×

文學にあつては、常にその個人性が重要な問題である。社會科學者の場合は、その個人性は問題でないかも知れない。科學は非個人的なものである。然し、文學は科學ではない。たとひ最近の如く、文學上の社會性の一面のみの强調せられる時にも、その個人性の一面を全然沒却しては、文學は成立しないと思ふ。そして、その人間本位說に於いて、スペインの思想家、ミゲル・デ・ウナムノの說が、偶然私と一致してゐた事を喜んだ。ウナムノによれば、哲學者、思想家もまた生きた血肉の人間でなければならないのだ。

或一人の人が、コンミユニストであるか、アナキストであるか、はたまたリベラリズム、フアスシイズム、その他いかなる主義思想を抱懷するかは、さして重大ではない。主義思想は借り物でも間に合ふ。そんなものよりも、むしろ、彼がいかに生きてゐるか、その生活をいかばかりその思想と一致せしめてゐるかが、より重大な問題であるのだ。

文學にとつては、常にその作品の背後にある人間が問題である。

×

「えらくならう」といふ考へは、ブルジョア的、個人主義的な心理である。あらゆる個人的野心は、ソシアリストの重き試練でなければならぬ。

フランツ・メエリンは、その二十年間、『新時代』及び『自由』紙上に揭げた論文を、大部分、匿名であらはした。若しくはわづかに一つの矢をもつてサインするにすぎなかつた。

主義の宣傳が目的であるとすれば、その述作は、ただ宣傳の用を達すれば足る。その宣傳が何人でなければならぬといふ必要はない。おもふにこれが獨立の文學と、宣傳文學との相違するところであらう。

宣傳文學によつて、自己の名聲を獲得せんとするが如き事は、自己撞着であるに違ひない。

×

人間の思想と實踐――それは大きな問題だ。

かのバクウニンの同志なるジエームス・ギリヨオムのやうなアナキストが、あらゆる人間の中に、まづ、その本來の人格を見たいといふ事は、極めて意味深き事實ではあるまいか。單なる思想や知識よりも、その人間の本質、その思想の實踐を重んずるのは、これ眞正のアナキストの正にとるべき態度ではあるまいか。そして、ギリヨオムが後年、その友バクウニンがおなじ同志カルロ・カフイロに委ねられたバロナタの所有權を主張した際(その事件については、バクウニンに十分同情すべき事情あるに拘はらず)バクウニンに對して、その平素の主張を裏切るものとして、激しい非難を浴びせかけたのも、畢竟、主義と生活との一致を重視したからである。

主義や思想は借物でも間に合ふ。これを意義あらしめるものは、その人格であり、人格の必然的發現であるところのその行動でなければならぬ。主義、思想を問うて、その人を問はぬのは、從來、わが社會主義者の通弊であつた。それは一意その主義を宣傳し、その同志を多からしめんとする政策上夘論恕さるべき事であつた。が、今日のやうに、かかる主張が一世の人氣に投ずる場合には、流行性雷同症により、事大主義によつて、自らコンミユニストと名告り、アナキストと僣する人々もないではないと思はれるから、愈々この點に重心を置く必要がある事はなからうか。即ち、それが單なる知識に止まるか、はたまた眞に信念となつてゐるかを問題にする必要がある事はなからうか。私はこのごろ、とりわけその事を深く考へて見ずにはゐられない。(昭和三年四月)

かがやく露

或る叛逆者

いつの頃から、庭にこぼれこぼれしてゐた稗（ひえ）――小鳥の餌の――が、庭石をかこんであちらにもこちらにも茂りあつて來た。丁度水邊の若い葦の葉を見るやうで快よい。しなやかなその左右にひらいてゐる葉が、美しい撓みを見せてゐて、何となく柔かい感じだ。

この梅雨に入つてから、その葉の上に毎朝、露をむすぶ。この露が光る。葉に觸れてゐる部分の底部から白く光る。眞上から見下ろすと白光は消えて見えないが、はなれてほどよく見ると白露團々、楚にして艶、美と力との豊滿が示されてゐる。この庭前の小景は私に故郷の稻のながめをおもひ出させる。そこでは夕の露、夜の露、曉の露、日の出前の露しとどに赤い素足を濡らせる田の水引きの若い農夫さへも見すごさぬながめ、或年の夏、甲州で四五日くらした時も、朝毎のこの稻田の多くの葉にやどる露を見るのを樂しみにしたことだつた。

露には露の詩（ポエム）があり、神祕がある。これをはかなしとするも華やかなりとするも、人の心の明暗强弱を物語る一つの象徴となるであらう。それは一粒の水玉である。微かな微かな濕りが寄りあつまつて量になつて、一つの水のグループをつくつてゐるもの、およそ水の多く平らかな時には、その上におちる陽の光は廣い明るさになつてゐて、それはおだやかな心持の色を示す。しかし、かたまつてゐる水の玉、露に光のさす時には激越した感情のやうにつよく光る。朝露の美しさは陽が出て一時間位の間の新しい光の中においてもつとも生彩がある。

いふまでもなく露はいろいろのものの上にやどる。石垣の上に、やねの上に、土の上に、板べいの上に、けれども石や土や木の上は、まことに流れやすく、消えやすい。やはり人間が、その性格の適するところに生活をしようとす

るのにも似て、露もそのもつともおちつきやすいところに長くおちつかうとする。露の、もつとも美しくおちついて宿つてゐるところは葉の上である。木の葉のうへ、草の葉のうへ……

田舍の道を曉から陽の出まへにあるいて行くと、稻の葉の上に、芋の葉のうへに豆の葉のうへに、雜草の上に露はしとどにやどつてゐる。そして、私の袖やもすそがさはらなければ、露はもつともつとこぼれないであらう……

池などの蓮の葉の上にたまる露は、里芋の上にたまる露と同じやうに、その厚い葉の表面の毛のやうなものは、綾なされて、白い底の光澤をもつて、かなり大きい玉にむすばれるのがふつうである。從つて、陽がかなり高くなるまでも光つてゐる。おどけものの蛙が出て來て葉によぢのぼり、その大きいまるい葉のまんなかにくぼみをつくると、露はするするとそこへ走りおちて來て、そして蛙の足に、眞珠のかざりをつける。けれど蛙は何の氣もない、プイと蛙が、池の中にとびこむと、それと同時に露も水の中に……。そしてもうあとかたもない。

又、露が、農家の竹やぶや、生垣や、又は少し荒れた軒から椿の木の枝などにかけわたしてゐる蜘蛛の巢に、幾粒となく、むすびついて、その蜘蛛の巢の上で光つてゐるのだが、風が吹いて來たりすると、まるで魔術のやうにどこへか散りうせて了ふ。

露の散り消えるのはその行方が知れぬ、はらはらと草の上から土の上におちても、おちた時にはもうその形はないのだから。

形といふものが、ごくつかのまのものであるといふこと、光りかがやいてゐる美しさが淸いうつくしいものであれ

ばあるだけ、それを人間の生死の上に、世の中の無常といふことに結びつけて、悲しみ、かこつたのは昔の人の主觀である。

今私たちは露のもろくも散りうせることよりも露の白くも黄金色にもかがやきをもちつつ、その形を與へられ保たれてゐる間の「時」を充實させてゐる相により多くの感動をうける。

生きよ、淸く生きよ、美しく生きよ、生きてかがやけよ、これが露の詩魂ではないだらうか。(昭和四年五月)

峠の雜草

やがて夏がやつてくる。あの白くぎらぎらと光る炎熱の夏が……、私の綠の庭の薔薇の花は散つて了つた。

今年の夏はどうする？　旅へ、とから心は答へたいが、今の私は病後でもあるしするから今年の夏の旅はしないかもしれない、自分の部屋で、ごくわづかな旅の思ひ出を心にくりかへす位かもしれない。

此方彼方へ、汽車で、電車で、自動車で、徒歩で見て來た風景の中で、今はしなくも私の心にのぼるのは峠の風光である。峠の雜草である。それは人生の峠といふやうなことも思ひ寄せられつつ深い感懐が私の心にわく。

「もう少しすると峠ですよ」山のぼりする時の聲がこれである。私も少年時代にこの聲をきき、そして名もない小さい故鄕の山の峠をこえたこともある。「もう少しすると峠をこすのだ……」からおもひつつ、幾度、むづかしい仕事を自らはげましつつ完成したであらう。しかも一つ峠をこえれば又一つの峠、いくつとも數へきれない峠越えであつた。

そしてなほ將來にもいくつ嶮岨な峠があるか、はかりしられない氣がする。

「ああ、いい風！」からおもはずも叫ぶ。峠の上で……。頭上には松風、そしてまだ若い蟬の聲(七月のことだ)汗を

ふき、蹲つて、タバコに火をつけようとすると强い風のためなかなかつかない。マッチの火はすぐ消えて了ふ。ふと氣がつくと自分の息は熱く、脚もとの雜草は私の下駄にふみにじられてゐる。

どんな事にも犧牲がある。大の蟲のためには小の蟲はすてられて了ふことがある。心弱ければとても峠をこすことは出來ない。この人生に於いても、こすにこせない峠がある。それをどうしても越して見せようとするところに、各人各樣の力をふりしぼる。自分でふみにじつた草を自分の手でおこすやうなこともある。

「まあいい景色ね」峠に立つてから聲を放つて陶然とするのが人情である。峠は大きければ大きいほど、嶮しければ嶮しいほど、のぼりついた喜びも多い。それも人情である。

人にきく、日本アルプスを眺める德本峠のながめ、富士をながめる乙女峠のながめ又は大垂水峠、上越國境の淸水峠、中央線の小佛峠、いたるところにさまざまの名をもつところの峠、大きいのもあれば小さいのもある。しかし、日本アルプスを眺める德本峠、富士をながめる乙女峠、又は碓氷峠などの大きい峠での喜びは、それが容易でなかつただけに喜びも深いにちがひない。

足のたつしやな若い人々が、息あへぎつつ峠にのぼるその姿を思ひうかべる。峠の上には夏の白い雲の峰が思ひうかべられる。「夕方の裏を見せたる峠かな」これは一茶の句である。夏の日の峠で急に雨に降り出されることなども思ひ出でられてわづか十七字のうちに何ともいへぬ大きい自然がわき出して來る。

峠は夏もよい、又勿論秋はよい、多はただわづかな人が峠をこすであらう。春はもつとも多くの人が峠をこすであらう。「ひばりより上にやすらふ峠かな」この芭蕉の句をひいて春の峠をおもふ。

私は若い人の民謠をよむ機會を與へられてゐて、いつも峠をよんだ民謠に出逢ふ。「雨は峠よ、下里、月夜、あかりチラチラ、在所のランプ」といふのなど幼稚ながらも峠の感じを出してる一つであるが、特に多いのは峠をこえて可

愛いい娘を見に行くといふのや、峠をこえてくる美しい女のことなどである。峠を中にしての相思の心は古今ともに人の感情につよくふれてくるらしい。田園詩人はつねによくこのことをとらへてうたつてゐるのだ。

いつのことであつたか、私は馬醉木の生しげる峠のこみちを步いてゐて、ごく近くのところから飛び立つ鳥におどろかされたことがある。又、峠近くのみちで、谷間になく鶯の聲をほのかにきいたこともある。峠の詩人は、何といつても、かうした啼鳥にゆづらなくてはなるまい。

夕燒あかく、秋もちかづく頃の山の遠望の中に、かつて越えし××峠はあのあたりなどと思ひ見る。汽車の窓からながめやる新しい自然の中、いつしか峠の下はトンネルで失敬して了ふ。自動車に乘つても峠は避けることが多い。峠ごえの妙味は古いとはいへやはり山駕籠のながめだ。箱根とか、又は榛名とかに今でもその山駕籠、又は馬がある。

この人生の峠越えに、山駕籠や馬のごとく人間の心の步みをたすけるものは何といつても讀書だとおもふ。夏靜寂、綠陰の讀書、さらば私も今年の夏は十分の時間を讀書にあてようとおもふ。(昭和四年六月)

暑い晝、涼しい夕

何といふむしあつさ……梅雨のうつたうしさのなほ立去らぬおしつけられるやうな重い氣候に、七月の暑さが加はつて、何ともかともいへぬ氣分だ。頭腦が少しも働かぬ。腐るやうだ。そんな氣分なので、ちつとも救はれぬ。ごろりと橫になつて、そのおしつけてくる自然の壓迫をこらへるだけはこらへるが、こらへきれなくなると、おれだつて考へがあるぞ……といふ風なこともおもふ。

しかし私は轉地してまで、この暑熱をさけようとはおもはない。夏の旅は、考へて見ると實に涼しく氣も晴れ晴れ

とする風におもはれるが、實際は、大していいものでもない。海水浴場のことや、旅館のことや考へると、家にかうしてぢつとしてゐる方が、まだずつといいとおもふ。私は人のごみごみする事が一番いやなのだ。それに東京を離れられない事情が重なつてゐるから、よし轉地したくも出來ないのだ。

とにもかくにもぢつとしてゐる。するとねつとりと汗がにじむ。腋の下とか、脊すぢのところとかが、ねばねばしていやな氣持だ。しかしもう少し夕方になれば、どうにかなるだらうとがまんしてゐる。臺所の方では、家の者が、「御飯がわるくなつたわ」なんて云つてゐる。それをきくと、益々たまらない氣がしてくるのだ。

五六日前、電燈が突然、執筆中にぱつと消えた。家の者が白い蠟燭を持ち出した。その少し燃したが、まだ長い蠟燭が一本、私の机の上の筆立の中に立つてゐる。筆の軸はまつすぐだが、その蠟燭はおじぎしてゐる。今日暑さでそんな風になつたのらしい。僕の身體も心も、丁度あの蠟燭のやうだとおもふ。

二十歳時分には、こんな時でももつと元氣だつたのにと、神經衰弱者特有の憂鬱に沈む。

とにかく、涼しくならないにしても少し暑さが衰へないかぎり、そんな沈んだムチムチした氣分に喘ぐ。そして、つくづく弱い自分自身がいやだ。何しろ、いやにくるしい日だ。

「一寸おいでになつて頂戴……西瓜をきりたいの……」

と家の者が呼ぶ。遠いところから呼ぶやうな氣がして、ぼんやりしてゐる。

「いい西瓜らしいわ、けどもきつて見ないと分らないのね……三保で出來たものですつて」

三保といふ地名が、私の氣分を一寸引き上げてくれた。この五月、靜岡へ行つたとき、三保へ行かうかと思ひながら、行けない事情になつたので、一層心を惹かれる。それに西瓜は私の好物なのだ。又、一寸氣がまぎれようとおもつて、西瓜をきる。

かなりいい形なので、片手で捕まへてゐて、庖丁を入れる。眞二つにわれたのを見ると、同時に、凉しい水つぽい匂ひが鼻をついた。鮮紅色のところどころ砕けはじけてゐる。そのヒビの入つてゐる赤い肉が、舌を誘惑する。

「さあ食べよう」

あちらでもこちらでも、その一片、一片をさまざまな食べ方でたべる。

「おいしかつたわ」

といつてゐる。

私は故郷の西瓜畑のことなどを考へながら、二三片食べた。山のやうにもり上つた西瓜の殘骸の整理せられた時分には、もう大して暑熱は苦にならなくなつてゐた。

夜は凉しく、いなづまが空に走つた。蚊のぶんぶんする緣側にうづくまつて、ぢつとそのいなづまを見てゐる。一閃、また一閃、あだかも一聯一聯の詩をよむやうな心持である。詩は死、――ひとり幽寂たる思ひにしづむ。（昭和三年七月）

時代と個人の苦悶

文壇が滅びたとか滅びないとか、花園だとか廢園だとか、大衆文藝が正道だとか正道でないとか、政治的興味が文學的興味に變つたとか變らないとか、個性は無價値で、沒個性が本當だとか本當でないとか、その他、宇野浩二君の言葉を借りて言ふと、等、等、等。

混亂、亂脈、紛糾、動亂……恐ろしい時代になつたものだ。同時にまた、面白い時代になつたものだ。

私はこの一年あまり、この現代の時世相に當面して、苦悶に苦悶を重ね、未だ、正しい解決を見出し得ず、正しい道をも見出し得ない。その苦悶は、いづれ詳しく書きたいと思つてゐるが、よし、その個人的苦悶を書いたとしても、自分はそれを決して、無意義とも、無價値とも思はず、また、罪惡とも思はぬものだ。何となれば、それは自分一個の問題ではなくして、現代に生きる文學者共通の問題だと思ふからだ。

兎に角、少し物を考へるたちの人ならば、今は、たしかに、みんな苦しんでゐるに違ひないと思ふ。その苦しみが、現に人によつて、さまざまな形で表はされてゐるやうに思ふ。洋行するのも、その一つの表はれだ。左傾するのも、その一つの表はれだ。戀愛するのも、その一つの表はれだ。恐らくダンスをするのもさうであらうし、麻雀をするのもさうであらうし、その他、これも等、等、等、みなさうであらう。

ただ、その人の性格により、一身上の事情により、周圍の影響と、將來の見透し方の相違によつて、いちいち、その表はれ方が、ちがふのであらうと思ふ。

みんな、自分のやりたいやうにやればいいのだ。みんな、自分の方法によつて、生きて行けばいいのだ。苦しんで行けばいいのだ。僕はもちろん、僕の方法によつて、生きもし、苦しみもして行くのだ。或は難破するかも知れず、或はコロンブスのやうに、アメリカといふ新世界を發見するかも知れない。

どつちにしても、他人の眼から見たら、たいした意味もなく、莫迦々々しい努力をしてゐるやうにも思はれ、失敗に失敗を重ね、一つの成功もなく、賽の河原の石積みをやり、もぐらもちの穴掘りをやつてゐる、としか思はれなくても、それでもかまはない。自分さへ意味があると思へば、それでいいのだ。人の眼色を見て、生きるぐらゐなら、いつそ生きない方がましだ。僕は今、さう思つてゐる。

その點で、僕は、たしかに個人主義者だ。また、個人主義がほんたうだと思つてゐる。個人主義に徹し切つたとこ

ろに、ほんたうのアナキズムの協同的精神が生れるのだと思つてゐる。はじめから、超個人主義なんていふものは、かるがるしく、口にすべきものかどうかを疑つてゐる。

しかし、超個人主義を、決して、私は否定しない。むしろ、それを以つて、人間のなすべき最高の事業、必須の事業だと思つてゐる。自己の個人性から超越すること、自己の個人的利害から超越すること、自己の野心、慾望、權力意志から超越すること、それが、自分の最高の理想だ。

だが、それは理想であつて、現實ではない。そこに、自分の悲哀があり、苦悶がある。言葉の上だけで、超越したのでは何にもならぬ。流行に順應して、ていのいい看板をかかげただけでは、何にもならぬ。自分の内部生活から、動いて行かねばならぬ。自分の生活の根柢から、動いて行かねばならぬ。その日その日の、自分の生活の實踐から、始めねばならぬ。

ところが、それがなかなか容易なことではない。談、何ぞ容易なる。實踐、何ぞ至難なる。しかも、至難なるがゆゑに、ひるんではならぬ。やらねばならぬ。やらねばならぬ。しかも、自分の力は弱い。弱い弱い人間だ。根強い人間惡は、自分の前進をくひとめる。内から、自分の力をそぐ。そこに、自分の悲哀があり、苦悶がある。

まあ、こんなやうなことなのであるが、それは、いづれ條理を立てて書きたい。その時は、忌憚なき論評を賜はりたいと思つてゐる。（昭和三年七月十三日）

わが苦悶錄

――一懷疑主義者の告白――

條理立つた論文、それは今、自分の力の及ばぬところだ。ただ、正直な實感を、實感のままに吐き出すのみだ。論議ではなくして、一個の告白に過ぎない。

自分一個の苦悶を世に訴へる。それは個人主義だ。蟲のいい事だ。つまらぬ人間が、生きようが死なうが、苦しまうが樂しまうが、社會には何の意味もない事だ。或ひはさうであるかも知れない。

そんなら沈默か。幾度びも自分はさう思つた。我儘勝手に自己ばかりを語る。抒情詩人は死ぬべき時が來たのだ。彼は沈默するか、又は、流行節、校歌、地方の何々小唄の歌詞でも作れ。自傳的作家は、筆を折つて文壇を去るか、然らずんば、大衆文藝を書け。何となれば、今や一切の個人的表白、一切の自己中心的文學は、明白に無意義を宣せられたからである。從來、自傳的作家の玉手箱であつた戀愛さへも、個人の私事としてさしたる意義を置かれなくなつた。かくて我々は、甘酸つぱい惚氣話の災害から救はれるに到つたのだ。

然し、一切の個人的表白を否定するとき、そこに最早正直な人間の聲は聞かれなくなる。それは寂しい事だ。文學者がみな政治家となつて、體のいい理窟や、大義名分だけを口にするならば。

自分は正直に語りたい。正直に底をぶちまけたい。所思も語り、疑惑も語り、若悶をも訴へたい。もとよりそれは、たとひ自分自身にとつて、殆ど生死にも關する程の大問題であらうとも。第三者にとつて、大した意味があらうとは思ひ得ない。が、それでもこれを書かうと思つたのは、尠くとも、現代の文學者にとつては、必ずしも風馬牛の問題ではないと信ずるからだ。

そこで、無花果の葉を取つて語れば、自分は今、生活的にも、思想的にも、全く針路を失してしまつたのだ。どうして生きたらいいのか、何を據りどころに生きていいのか、全く分らなくなつてしまつた。生活の指標も失つてしまつたし、存在の支柱も失つてしまつた。それは今まで抱いてゐたあらゆる所信が根柢から崩壞してしまつたからだ。

そして、これが根本的原因をなすものは、自己と時代（周圍、環境）との相剋に外ならぬ。これぞ自分の苦悶の根元である。

環境に適合しない生物は滅亡せねばならぬ。時代に順應しない人間は、生きる事をゆるされない。時代に順ふべきか、背くべきか。これ現代日本の文學者に課せられた宿題である。いかなるか是れ順逆の道。いかなるか是れ此の難時代。

時代は常に轉變する。無數の犧牲者の死骸を踏み越して進む。

北村透谷、川上眉山、有島武郎、芥川龍之介、これらの人々は、多少ともあれ、時代の犧牲者として斃れた人々である。尠くとも、普通かやうに云はれてゐる。

然し、時代の犧牲者は、ひとり死んだ人々のみであらうか。なほ生きてゐるものも、またそれぞれの意味で、時代の犧牲者ではないであらうか。もとより、時代の風潮に乘つて、第一線に立つて、勇ましく戰つてゐる無產派の文學者もある。幸運に惠まれて、その事業を成し遂げて、悠々自適してゐる閑雅な文人もある。だが、それらの人には、少しも苦悶はないのであらうか。少しも疑惑はないのであらうか。少しも不安はないのであらうか。

芥川氏の遺書中の、漠然たる不安の語は、今にして思へば、實に適切な表白であつたと思ふ。この有名な言葉は、既に多くの人によつて、いろいろに解釋されたやうである。聰明な芥川氏が、その不安を、素朴無知なる人々のやうにただ漠然と感ずるのみで終る筈はなかつたであらう。が、その分析した結果は、依然、漠然たる不安の語によつて、最もよく表白出來たのではあるまいか。

鋭敏な文人の神經に對して、現代の刺戟はあまりに強く、現代の波浪はあまりに荒く、時代苦は纖細な心身を壓倒するであらう。そして、かかる薄弱を、ブルジョア・インテリゲンチヤの病患として、無產派は同情を寄せ得ない。そ

の一身上の問題として、多くの意義を置き得ないのだ。

不安の根本が、その一身上の私事にもとづく事は言を俟たぬ。これは動かし難い事實である。單に思想のために死ぬ人はない。思想の死を死んだ自殺哲學の創唱者たるマインレンデルは知らず、芥川氏の死の如き、一面、氏の病身に基因する事も考へ得られる。が、それに止まると云はば、餘りに妄斷であらう。漠然たる不安とは、歸するところ、時代的不安なのだ。

文學者は時代の觸角でなければならぬ。時代の嵐をいちはやく感受する。然し、彼の時代が過ぎると、彼は贅肉的存在に過ぎなくなる。なほ一層悲しむべきは、彼が懸命の努力によつて築き得た思想的立場が、次ぎの時代には、全く何の用をも無さぬのみでなく、かへつて、異端、邪見として排斥される事だ。そこに苦悶が生れなければならぬ。然し、その苦悶たるや、決して抽象的な思想的なものに止まりはしない。その根柢にあるのは、常に生活上のそれである。否、思想上の苦悶と、實際生活上のそれとは互に斷ち切れない關係のもとにあるのだ。少くとも、自分にとつてはさうである。常に、いかなる場合にも、自分一個の生活上の考慮が伴ふ。恥づべき事だとは知つてゐる、が萬止むを得ぬのである。

ところで、かやうに自己の一身上の顧慮を放擲しえないのは、即ち個人主義であつて、ブルジョア精神の發現に外ならぬのである。無產派の人は、かく云ふ。まことに、これが自分一個の恥辱に過ぎなければ、人間性のために祝すべき事だ。人間は一身上の顧慮を忘れる事は出來ぬものだ、人間の利己心、自己保存慾は、謂はば公然の祕密であるといふやうな見解が、人間性に對する大なる冒瀆であつたと理解されたならば、自分は一切の道德の書を火中にして、人類新生の第一日にめぐり合つた自己を祝福したいと思ふものだ。

共產主義文學者は、個人主義に對する最大憎惡からして、超個人主義の錦旗を掲げた。その心持には、同感しない

わけではない。然し、激情は常に頭腦の不透明である。從來あまりに社會と懸隔して、個人意識の埒内に彷徨してゐた文學者に對して、その社會意識に目ざむべき事を主張するのは正しい。然し、社會意識の强調を、直ちに、超個人主義の名によつて大聲疾呼するとき、彼は個人主義の超克者として、竹馬乘りを企てるものと疑はれるの危險を敢て冒すものである。そして、若し、その普遍的理解のもとに考へられる如く、超個人主義者が、現實に於いて、全く、個人主義を超越してゐるならば、自分一身の事は、毫も問題にならぬならば、ただ主義のため、信念のため、自れを空しうして努めるの外、餘念ないならば、そして、非常に多數の人々が、超個人主義者として自己を見出すに至つたとするならば、この急激な人間性の淨化作用を、誰に感謝すべきであらうか。勿論、マルクスにである。然しながら、自分はマルクスによつて、むしろ人間惡を敎へられたのだ。唯物史觀は、自分を一層ペシミスティックにした。

超個人主義は、自分の毫も反對し得ないものである。否、或るときは自分の最高の理想であつた。自己の個人性から、個人的制限から自由になること、自己の狹少な我意や、個人的利害から超越する事が、自分の究竟の願ひであつた。然し、それは現在、自分が個人主義者として立つ事を妨げない。自分は多年、自意識の薄弱をこそ最も恐れて、この世界に於いて、自己の個性を確立せんと欲した。そして、これは文學者としての當然事であると信じたのだ。超個人主義の欲求の强まるに從つて、自分は常に文學否定に傾くのを常とした。あらゆる宗敎的要求の到達點は、すべて超個人主義である。

然し、今の論者のそれは、宗敎的でなく、社會的なものである。それは單に社會主義の別名に過ぎぬとも見られるが、一層端的に、集團主義と云つた方が、その論者の本意にかなふであらう。然して、集團主義とは何であるか。他なし、全の中に個を沒却して、團體中の一員として、强權に自己を隷屬せしめんとする主義の謂ひである。文學者にあつては、その文學を、或る一黨派の政策に適應せしめんとするものである。卽ち、これは同時に政治主義である。

そこで我々は、個人主義と超個人主義との岐路に立たずして、政治主義と超政治主義との岐路に立つものである。

自分は本來、一切の黨派の外に立ちたいと思つた。黨派人（パルタイマン）たる事は、自己の死であると思つた。そして、文學者こそ、黨派の外にあるべきものと信じてゐた。然るに、今や、文學者もまた、黨派の人たらねばならぬと主張される。

政治なるものの本質に對して、疑惑を抱いてから、既に久しい。政黨者流は、つねに國利民福を口にする。しかも、彼等ほど我利々々亡者はない。我々はかかる腐敗した政界には、夙にあいそを盡かしてゐる。そして、これは資本主義社會の不合理の必然的發現に外ならぬのだ。我々が無產政黨に唯一の期待を懸けるのも、また理由のある事である。

だが、翻つて考へれば、元來、政治なるものの本質には、さうした腐敗と欺瞞とに導く要素が伏在しはしないであらうか。政治家は結局、すべて惡指導者なのではなからうか。この政治への疑惑は、今これを細述する餘裕がない。ただ、無條件に政治讃美の出來ない事だけを云ふにとどめる。

文學と政治との關係は、現代文學者にとつて、最大最難の問題である。然して、現今の無產派文學者の主張は、文學を政治に從屬せしめんとする。從つて、その論理的歸結は、その主張者の文學の領域より、政治の領域への進出、移動である。そして、事實、無產派文學者のうち、その主張と確信に忠實なる人々は、漸次、政治的活動に忙しき觀がある。而して、それは至當でもあり、賞讃すべき事でもあるかも知れない。

だが、文學は別才であり、政治もまた別才である。殊に、政治は一つの權略である。目的は手段を神聖にすとのジエスイット主義、臨機應變のオッポテュニズム、この故に、例へば、ロシアの新經濟政策。レエニンの偉大なるは、その政治的手腕による。彼が社會革命黨員や、無政府主義者を、捕縛斷罪せんとした際、ゴオリキイは憤然として、これに反對した。彼は多年革命のために身命を賭して來た同志を、今此際に迫害するに忍びずと云つた。これに對し

て、レエニンは、友情は友情、わが主義のためには、すべてを犠牲にせねばならぬと主張した。
この場合、ゴオリキイは文學者の立場と感情とを代表し、レエニンは政治家の立場と信念を代表してゐる。ボルシエビキの今日あるは、このレエニン的精神のお蔭である。チエッカの制度や、政敵の彈壓は、絕對的に必要である。若しゴオリキイをして、レエニンの地位にあらしめば、ボルシエビキは既に沒落してゐたかも知れない。然しながらこの場合、我々文學者の大多數は、レエニンよりも、むしろゴオリキイに共感するであらう。そして、若しレエニンに本能的に共感する人あらば、それは政治家の素質ある人に違ひない。
有島武郎氏は、『宣言一つ』で、ブルジョア階階の傳統的な殼から脫却し得られない絕望を表白した。が、事實は、階級性の問題でなく、他人の素質の問題だ。天分の問題だ。クラポトキンは大公爵だ、バクウニンも貴族、ヘルツェンも地方の豪族の出だ。多くの革命家は、みなブルジョアの階級から出た。レエニンの如きも貴族の出だ。これらの人々の言說は第四階級に何等寄與するものでなく、それ以外の階級に訴へるにすぎぬといふのが、有島氏の見解であつた。そこには多分にアナキスティックな基調が感得せられる。ボルシェビキの如き政治的黨派にあつては、敢てその幹部の出身を問はず、その天分と要求とに服するのである。有島氏の擧げなかつたレエニンの如き、明かに革命家が政治家の本領を發揮したものである。そして、政治家は有島氏の如く潔白純粹で、非妥協的な人とは、全くその性質を異にするのである。
根本は天分と要求との問題である。人それぞれ天分がある。我々はまづそれを認め、それを許容しなければならぬ。政治的天分のないものが、政治に首を突込んで、何になるものではない。然るに、人みな政治に從はねばならぬと云ふならば、かかる一律主義こそは呪はるべきである。
自分は個々人が、各自その天分を發揮する事を期待する。個々人が各自その要求を充たされん事を願望する。その

點で、自分の思想は、アナキズムに近い。自分はほとんどアナキストたらうとした。インディヴィジュアル・アナキストとは、既に現在でも自ら敢て呼び得られるかも知れない。が、自分はそれに滿足し得られなかつた。そこから更に歩みを進めて、積極的に社會に働きかける力を得ない限り、それは空語に近い。しかも、コンミュニスト・アナキズムの積極的主張より、自分は常に抑止された。それは自分が人間に對して、悲觀說を抱懷してゐたからだ。人間は本來利己主義者である。社會惡はただ人間惡の反映たるに過ぎない。この認識こそ、自分の絶望の根本である。此點よりすれば、國家社會主義こそ、最も現實的可能的なものであるかも知れない。しかも、これ以上、人間の自由の掠奪はない。空想か、然らずんば强權主義か。これ致命のディレンマである。その板挾みになつて、身動きも出來ない。かくて自分は何等積極的の主張をなし得なかつた。しかも、その自分に不滿を感ずるのだ。これ年來の自分のひそかなる苦悶であつた。

悲觀主義はブルジョア的な事だと云はれる。凡て惡いものはブルジョア的である。そして、ブルジョア・インテリゲンチヤの致命的な桎梏を告白した。有島武郎氏は虛無主義者として死んだ。氏が『宣言一つ』で投じた。あの根本的な問題は、今果して解決されたであらうか。數月前の都新聞紙上で知識階級の問題が數氏によつて論じられた中で、神近市子氏はこの問題を既に過去に屬するとなし、細田源吉氏も技術工の意義を說かれた。そして、二氏共にその際レエニンの言を引證されたのは、自分には頗る興味のある事實であつた。文學者がレエニンの言を典據とするとき、彼は何かに實行家、政治家としての見地に立つものである。

結局は人の問題であらう。實行家と空想家。意志の人と感情の人。政治家と文學者。樂觀家と悲觀家。自信家と自疑家。そして、悲觀主義や懷疑主義は、つひに虛無の豫備門に過ぎぬのであるか、自分は痛切に自己の無力を感ずるのみだ。自分があまりに文學者的である事を感ずるのみだ。自分は常にシュテインムングス・ソシアリストであつた。

そして、それで終つたのだ。

從來、自分の立場は、專ら、精神主義にあつた。卽ち、唯心論である。理想主義である。然しそれも確固たる信念の盤石の上に立つたものであるとは、遺憾ながら、自ら許し得ない。何となれば、自分は根本に於いて、懷疑主義者だからである。武者小路實篤氏の如き信念の人に對して、十數年前に不滿を表白したのは此故であり、現在敬意を抱いてゐるのも、また此故である。すべてその說の當否は論ぜず、自己の思想に確信を有する信念の人は、自分にとつては羨むべく、敬すべき人である。無產派の二三氏を敬愛するのも、そのゆゑである。自分は思想よりも人格を、主張よりも實踐を重んずるものである。

然し、自分は自己の思想的立場を疑ひ出した。その矛盾と混沌を統一整理せんとして、かへつて自己の空虛を見出した。

現代は唯心論に對する唯物論の勝利を意味してゐる。精神主義に對する物質主義の壓倒的勝利に外ならぬ。此事は、單にマルキシズムの瀰漫をのみ意味するのではない。アメリカニズムの社會的浸潤、資本主義精神の確立をも意味する。マルキシズムは、その必然的反應に過ぎない。然るに、自分は空しくこの唯物的傾向に反抗して來たのだ。

この唯物的人生觀が、我が文學者間に現出したのは、比較的近年の事に屬する。その以前には、現實暴露を唱へた自然主義、文學者といへども、なほ唯心的であつた。物質を超越してゐた。もともと文學者は貧乏なものと定められてゐて、その覺悟を以て、その生活に入つたのであるから、あらゆる窮乏をもその當然の報酬として甘受した。

然るに、文學趣味の普及は、これを有利な職業たるに至らしめ、つひに文學といふものは、一つの企業とさへもなるに至つたのである。それと同時に、文學者は唯物主義に目ざめて、從來の封建時代的な超越的態度を一蹴するやうになり、かうした時代的覺醒は、一方、文學者の左傾の因ともなつた。つまり、我が文壇に於いては、資本主義精神

と、社會主義精神とが、殆んど同時に出現したものだ。そして、この事は唯物的人生觀の必然の結果として、至當以上の事である。

かかる際に、自分は何故にこの時代の風潮に順はなかつたのであるか。その理由は多々あるが、自分の性格と、教養と、思想的傾向とが、自分を玆に導いたのだ。そして、その結果は、今日の無慘な敗北であつた。自分は畢竟、天に向つて唾したのにすぎない。時代の力はもつと强いのだ。

今、一人の傷つき、破れた、アンファン・ペルデュが殘る。唯物主義をあまりに無視、蔑視した事によつて、自己の生活を曖昧空靈ならしめたことが、自己の內生活の調和をも破るに至つた。生活的にも、思想的にも、自分が全く「終れる人」とならねばならなかつたのは、これに基因する。痴人は常に自らその愚を償はねばならぬのである。

紙數の制限の許さぬために、今は多くを割愛して、尻切蜻蛉で終らざるをえないが、この一文の不備は、今書かうとしてゐるわが思想生活の破產史によつて、十分に補ふつもりだ。破產者の子は、再び破產者であつた。彼の苦悶と破綻とは、すべてその愚なエゴイズムの罰たるに過ぎない。然し、自分は嘆かない。內心叛逆者としての誇りをもつて、自分は沒落するであらう。（昭和三年九月十五日――九月十九日）

秋風一夕話

自分は久しく夢といふものを見ない。半醒半眠の中に、自ら夢を創り、自ら小說を作つて、いつまでもそれに耽つてゐるやうな事は、每日の事であるけれども、不思議と夢を見ない。此頃の衰弱した頭腦からいつて、夢を見ない筈はないと思ふのであるが、あるひは、見るかたはらから忘れるのかも知れない。

然るに、この間、珍らしくも夢を見た。それは思ひもかけぬ。十年前に死んだ亡友荒川義英の夢であつた。その夢は別に面白くもないから書かない。が、その朝、自分は寢床の中で、十餘年前の、前途に希望をもつてゐた時代の事を、いろいろと思ひ出した。彼とアルツイバアシエフの「勞働者セヰリヨフ」について、しばしば語り合つた事を思ひ出した。セヰリヨフが、野獸のやうに狩り立てられ、追ひつめられて、打殺される悲劇的な結末を思ひ出した。荒川もある意味で、セヰリヨフではなかつたらうか。彼はつひに日本を追はれて、(もとより官憲の手による追放ではなかつたが、彼自身の性格と運命とが彼を追つたのだ)滿洲の曠野で死んだ。

荒川義英といつても、今誰れもその名を記憶してゐる人はないであらう。彼は堺利彦氏の一派、故大杉榮の一派の間を來往してゐた靑年社會主義者で、大正四五年のころ、『一靑年の手記』等の作品によつて、新進作家として相當に認められてゐた。彼は隨分人に迷惑をかけて廻る男であつたけれど、手ざはりがやはらかで、猫のやうな媚をもつてゐた。自分はあの喘息持の不良少年の、地藏眉をした、色の白い、可愛らしい顏を、今でもありありと思ひ出す。

當時は自分が社會主義者たらんか、文學者たらんかと迷つてゐた時期であつた。今は文學者が左傾を表明すれば、すぐ階級鬪爭の勇士になれる重寶な時代になつたが、當時は文學と社會運動とは、兩立しない性質のものと信ぜられてゐた。そして、自分は今もその見解を正しいと信じてゐる。

この頃自分がにはかに左傾したかの如く傳へられるが、左傾するなら、既にあの時したのだ。堺利彦氏の庇護を受けて、賣文社の一勞働者であつたあの時に。然るに、自分は堺氏の恩に背いてしまつた。それは自分の本質が、唯心的であり、文學者的であり、個人主義的であり、アナキスティックであつたので、止むを得ぬ事であつた。

荒川義英とセヰリヨフとをむすび着けるとき、今日、自分もまた、セヰリヨフであると思ふ。あるひは、イリヤ・ルネフであると。少くとも、自分も十年長く生きた荒川義英に過ぎないのであると。たしかに、自分はそれ以上のもの

ではあるまい。狩り立てられ、追ひつめられ、打殺されるものの絶望と、憤怒と、狂暴と、その苦悩の實相はただ自分のみが知る。その具體的事實を、わが生涯の呪咀を、詳細に說明しない以上、人はこれを單なる誇張と思ひ、例の自己惑溺の感傷主義と輕蔑するに過ぎぬであらう。たとひ自分はこの文壇といふ紳士閥社會での、一匹の野獸、一個のセキリヨフであつたのだと云つて見たところで。

曾つて自分が長篇小說を出したとき、その前篇だけを見て、これを作者の立志傳として痛罵した人があつた。また自分を明哲保身の術を心得てゐる、堅實な人間と認定した人もあつた。また、最近、某誌では、貯金番付とかいふものの下の方に、自分の名をも加へた。その人々は、すべて自分を買被つてくれてゐるのだ。自分は紳士たる資格のない法外人だ。世間の禮儀を知らず、文壇道德を蹂躙し、勝手氣儘な事をやつて、末は野たれ死にする人間だ。貯金帳をひねくる事なぞ、自分の趣味でない。だから、今自分が死んだなら、自分の妻は、彼女の多少の文筆の心得が若しなかつた日には、忽ち路頭に迷ふだらう。この自分の言は眞實である。それは追つて事實が證明するであらう。然し、生きてゐる間は分らぬ事だ。前借と相殺されるが如き一時的の收入も、世間は莫大なものに計算する。外部から見ると、何人もより幸福に見えるものである。

自分のやうなものでも、はたから見ると、幸運兒のやうに見えることがあるらしい。はじめ自分はそれに驚いた。が、今はそれが當然であると知つた。幸不幸も相對的に云ふことであるから、自分以上に不運な人から見れば、もとよりさうも見えよう。が、根本は他人の持物は大きく見えるといふ、この厄介な人間性のなすところだと知つたのだ。或る意味で、自分は幸運兒であつた。一錢の資本も持たずして、人生の市場に立つて、とにかく、曲りなりにも取引をやつたからだ。ただ自分がどれ位ゐ幸運兒であつたか、あるひは薄倖者であつたかは。自分が死んだ後、はじめて判然するであらう。自分は永い間、荒川の志をあはれみ、彼の性格と運命との暗い影をいたましと見た。荒川はかへつ

てその自分をわらつたであらう。

人間の心が衰へると、とかく過去をかへりみるやうになる。自分がこの頃過ぎ去つた日の事を、あれこれと思ひかへすのは、たしかに悲しむべき衰頽のきざしであるに違ひない。未來はただ黒い幕のやうに、前に立ちふさがつてゐる。それを凝視するのは、狂氣の豫習だ。むしろ面をかへして、過去を見るに如かぬ。かくて、老人と落伍者とは、過去を反芻して生きようとする。

どんな人間にでも、全盛時代といふものは、必ずあると聞いた。では、自分の全盛時代はそもそもいつ頃であつたらうか。否そもそも、自分に全盛時代などといふものがあつたらうか。自分はいつも修業時代のつもりであつた。まだ一人前になり切らない人間だと思つてゐた。いつも未來だけを見てゐた。しかるに、その未來が、既に消費を盡くされてゐた事を發見したときは、何たる悲しい日であつたであらう。才能の故の未來である、少なくとも才能の可能性の故の未來である。才能は既に盡きた。否、少なくとも、それは時代に適應せぬ、何の役にも立たぬものとなつた。今、自分は十分の力を出す事なかりし過去に、わが幸福を求める外はないのだ。

自分は文學者の全盛時代を卜する最良の方法を發見してゐる。その方法は頗る簡單だ。卽ち、非難攻擊、漫罵誹謗を受ける事の最も多かつた時分が、その最も人の目ざはりになつた實證だから、それを以て全盛時代と定めても、まづ大した間違ひはなからうといふのだ。そして、自分が最も多く、雨の如き罵詈を受けたのは、大正十三年であつた。自分は今、自分を罵つてくれた人々の名を、なつかしく指折り數へてたのしむのである。

大正十三年以後、自分は文學者としては、半ば死んだ存在であつた。また、外界からも、半ば死者らしく待遇されて來た。自分はこの何年かのあひだ「今に、今に」と云つて暮らした。「今に、今に」と云つてゐるうちに、ふッとそれがもう云へなくなつてしまつた。新しい領土を夢想してゐるひまに、自分の現在の領土を失ひかけてゐる事を發見

した王樣は悲喜劇の主人公である。自分もその王樣だと知つたのだ。今や、この「今に」はあまりに峻嚴な、あまりに決定的な審判として、自分の上に下されんとする。

自分の最初の長篇小說は、ある人から完全な失敗として批評された。その人は誰れであつたか忘れたけれど、失敗と云はれれば、もとよりさうだらうと思ふ。成功だとか失敗だとか云つても、一體何を標準に云ふかが問題であるが、失敗者が失敗者の生涯を描いた作だから、失敗と評したのだとすれば、極めて文壇論理的である。

失敗、失敗、失敗……たしかに、自分の生涯そのものもまた失敗であつた。人間がその歸着點をその出發點と一致せしめ得なければ、失敗の生涯であると云つた人がある。つまり、高遠な理想を抱いて出發した人が、たとへば、瀆職議員として終る如きをいふのである。自分はその言を至言だと思ふ。が、自分はと云ふと、そもそもの出發點からして間違つたのだ。

だが、失敗といふ言葉には、一種の魅力がある。愚な詩人である自分は、その魅力に溺れて、好んで失敗者を座右の友として、自らその暗い路に引入れられてしまつたのだ。失敗が自分の生の目標であつたと云つてもいい位、自分は決然として、人生の功利的、打算的、要素に反抗した。そして、愚かにも、自己の生身の人間たる事を忘却して、成功といふ言葉を、いやな俗惡な言葉として嫌つた。

日露戰爭當時、ひどくこの言葉がはやつて、それを題とした雜誌「大成功」を收めたといふ事を聞いてゐるが、その成功熱は、勿論今でも減退しないばかりか、層一層增進してゐるに違ひない。ただ別の名前になつてゐるだけの事だ。これは人間の通有性であり、その方法さへあやまらなければ、世間の道德にもかなふところである。もつとも、正しい方法では、なかなか「成功」しないのが、社會の實際ではあるが、そして自分も人間である以上、「成功」を欲しないのではなかつた。心ひそかに「成功」を欲しつつ「失敗」を讚美し、「失敗者」を描いて、「成功」しようとした

のは、何たる醜惡であつたらう。自分は今、自分ほど醜惡な、厭な人間はないといふ確信を得てゐる。
北村透谷のやうに、新しい文化の黎明期に生れて、二十七歳で死んで、その仕事が不幸な未完成に終つてゐたとしても、それは少しも恥ではない。自分のやうに、一つの文化の頂點に達した時にめぐり合つて、三十七歳までも生きながら、何一つ云ふに足る仕事も殘し得ない事は、たしかに恥辱である。その事は、人に云はれるまでもなく、自分自身がいちばんよく知つてゐる。それゆゑにこそ、あの時にはそれが堪へがたい痛恨であつたのだ。が、もう仕方がない。もうとりかへす道はない。今一度やり直すべき時期は、既に既に過ぎてしまつた。むしろ、自分の書いたものを、全部破却して死なうか。いや、それも駄目だ。第一、既に書册となつて居るものは自分の意志のままにならない。また、よしそれが實行出來たとしても、それは愚かな執着と、卑小な愚痴とを示すばかりで、自分の人間が本當に出來上つてゐなかつた事を證據立てる役に立つに過ぎない。要するに、恥の上塗である。
自分は不朽の作品のただ一篇を書かうと夢想してゐた。長いこと夢想してゐた。顎に髯が生え出し、さらに、鬢髮にそろそろ白いものが見えはじめる歲ごろまでも、何たる恥かしい幼稚な男であつたらう、自分はそれでも、ニヒリストだと、自分では思つてゐたのだ。曾て口のわるい作家某が、友人の作家某を評して、あんなに大きくなつてからも小說が書きたいのかなあと云つた。あの筆法で行くと、こんなに大きくなつてからも、不朽の作品が書きたいのかなあと云ふべきところだ、あはれむべき夢想家、雲を摑む男よ。おまへの作品は、不朽どころか、たつた三年の壽命しかなかつたではないか。おまへの手前味噌の大作は、忽ち小氣味よくも埋沒してしまつたではないか。否、ニヒリストは、それを感謝すべきである。
總體、藝術品の不朽性とか永遠性とかいふ事は、近年、すこぶる人氣がなくなつてしまつた。そんな事を口にするものは、一座のわらひものにされてしまふ。マルキシズムの時代である。今何處にそんな雲を摑むやうな夢をみてゐ

るものがあらう。我々に必要なものは、ただその日の麵麭、その日の名聲、その日の戀人、その日の快樂、その日の……ただそれだけだ。我々はただ今日だけを幸福にすごせばいいのだ。今日樣、今日樣、貧乏な片田舍のお婆さんの謙虚な言葉は、最も高い眞理の聲である。ただ、彼女は今日樣に感謝する。我々は今日樣にありとあらゆる不平と不滿を浴びせかけるのだ。

知識を增すものは欲望を增す、欲望を增すものは不滿を增す、不滿を增すものは過激化する。現代日本の知識階級は、宿命的にマルキシストだ。少くとも、ソシアリストだ。ただ、その多くは、自ら起つ勇氣がない、弱いエゴイストだ。そこで、ブツブツ云ひながら、あはれなその日暮をしてゐるのだ。否、今の日本全體がその日暮をしてゐるのだ。今の政治、今の社會狀態……それを思ふと、自分は、自分の中の保守主義者は、夜半惡夢にうなされるやうな、何とも云へぬ不安にをののく。自分の中の急進主義者は、田中內閣の存續と、彈壓の徹底化とを切望するのだけれども。

して、かかる時代の文學は、また、必然的に、その日暮の文學である。かくて、ジヤアナリズム以外に文學なく、曾ては新講談として卑しめられた大衆文學が、文學の正道となり、宣傳が文學の最高の使命たる事が自覺せられて來たのだ。この事を、自分は單なる事實として、批評を付加せずに、報道するのである。今や、文學もまた、新聞記事の一種である。

かかる時代に、不朽や永遠が何の用ぞ。しかも、長い間、この唯物的、現實的な今日の風潮に抗して來た自分が、今、不朽が自分に何の用ぞと云ふとき、人は嘲笑するであらう。それはおまへの長篇小說が三年の壽命しか保たなかつたからだらうと。さういふ風に解釋するのは、ある人々に取つては、痛快な氣ばらしとなるのだらう。が、いかに自分といへども、それほど卑しくはない。また、率直に云つて、自分は自分の作品に、多少の自信を有つてゐるのだ。缺點ももとよりよく分つてゐる、また分つて來た。モデル問題とかを文壇樂屋雀に喧傳されて、多くの誤解を招いた

のにも、自分に手落があつた點も自認する。（この誤解を招きやすい部分は、自分の生きてゐる間に、全然的に改竄するつもりでゐる）然し、それでも名を忘れたある人の云つたやうに、全然無價値とは思はぬ。一體、世に全然無價値のものがあり得るだらうか。或る一事物を全然無價値と見なすものは、一切を無價値と見なすものである。卽ち、ニヒリズムである。そして、文學批評上にも、またそのニヒリズムがある。

今、自分は、自分の無價値を認知した。然し、自分がなほ生存してゐる以上は、事實に於いて、自己を全然無價値と認めてゐるものと云ひ得られない。實際さうである。例へば、詩人として云つても、自分は曾て自分を絶えず迫害してゐた民衆派詩人などよりは、遙かに意味ある詩人だと信じてゐる。が、問題の名聲の永續性となると、殘念ながら、彼等の方が自分より長い。おなじその場かぎりの名聲でも、自分は早く死ぬが、彼等は恐らく長生するだらうから、その壽命の間だけは、何とかしてやつて行くに相違ないからだ。

自分が不朽の信者でなくなつたのは、自分が不朽を獲得し得られないからでは勿論なく、（そんな事が生きてゐる間に分るものか）また單に、功利主義や、唯物主義にかぶれたためでもなく、自分は人生の百事が偶然に支配される事を、あまりにも痛感してゐるからだ。他の社會の萬事萬端と同樣に、文學的名聲も、作品の眞價以外の外部的事情で決定される事を知つてゐるからだ。現在旣に然り、將來の更に憑み難きを知つてゐるからだ。そして、かかるものを望むのが、人間の子供らしい虛榮心、祖先から遺傳した單純信仰に過ぎぬと知つてゐるからだ。そして最後に、これが最も重要だが、好事も無きには如かずと信じてゐるからだ。

不朽や、死後の名聲が、自分に何の用ぞ。三途の川の六文錢の代用になるではなし、死骸に湧く蛆蟲を防ぐたしまへになるではなし、餘計な事だ。死んだから、文學全集なんぞに入れて貰ふより、生きてゐるうちに、番茶の一杯もふるまつて貰つた方が、はるかに意味があると、自分は眞面目に思つてゐる。

死ねば人間は天國へ行けるのだ――そして、自分の云ふ天國とは、虚無だ、涅槃だ。ニルヷナだ。一切意識の絶滅だ。完全な無だ。靈魂不滅だとか、永生とかいふ事は、昔から、自分には一向興味のない問題であつた。この短い生涯の間でさへ、苦惱に充ちてゐるのに、そのうへまだ永生があつた日には、それこそ地獄の責苦ではないか。（その永生は人間の智慧の測り得ない、現世とは全然別のものだと云つたところで、約束手形のやうなもので、現金を受取つて見た上でなければ、納得出來ぬ）そこで、完全な無こそは、天國だと云ふのだ。四大は分散し、靈肉共に壞滅に歸し、あらゆる苦惱も、疑惑も、傷心も、完全に雲煙霧散した後、何の名聲、何の榮譽ぞ。

こんな風に思ふのは、勿論、絶望からである。然し、絶望の中から、自分の絶望的勇氣を得た。自分は生命をたふとぶものである。生命の弓のやうに、張られるだけ張らうと思ふ。苦惱の淵のきはまで行かうと思ふ。その上は裂け、その上は落つる限度まで、だが、この絶望的勇氣、それは火だ、熱だ、嵐だ。絶對に希望せぬ事。斷念、諦念。それが出來たならば、最も強い生き方であらう。だが、希望せずして、人は生きる事が出來るであらうか。それを自分は、窓前の立樹に鳴く九月の蟬に訊かんと思ふ。わが痩骨に沁む秋風に問はんと思ふ。（昭和三年九月四日）

土龍の天上

むかし、むかし宇野浩二氏が、『龍介の天上』といふ、おもしろい童話を書いた事がある。芥川龍之介は天上した。彼はたしかに龍であつた。蛟龍であつた。第一流の金龍であつた。

龍にもいろいろある。中には、吐月峯の中に潜むみぢめな縮刷の龍もあれば、滑稽なかたちをした龍の落し子といふものもある。

おなじ辰歳の中にも、それだけの差別はあるのだ。殊に、自分のやうな劣弱なものは、同年の偉人いくたりかの名のあとに、自分の名をも附加へて貰へる毎に、どんなにかその光榮を感謝して來たか知れないのだ。

自分など、どう見ても、龍ではない。或ひは、目も鼻もない、めくら滅法な蚯蚓のたぐひかも知れない。朝じめりの氣持のよさに、ついうかうかと遠歩きして、朝日に照りつけられて、その儘くたばつて、蟻の餌食になる憫然な奴。然し、自分では蚯蚓だとは思はなかつた。おなじ土の下の隱者でも、あの頑固な穴掘りの土龍（もぐらもち）だと思つてゐた。十年、土龍の氣持で生きて來た。

いつも土の下で、こつこつ土を掘つてゐる土龍。日の目にあふと、ころりと死ぬのだ。だが、地上に出て、ころりと死ねば、卽ち、それが土龍の天上ではないか。

そのみじめな土龍、それでも自分は好きだ。

あの氣の利かない、ぶきッちよな、をどけた恰好がすきだ。彼は無言の道化師だ。土の下の、パントマイムの立役者だ。

然し、百姓にとつて、こんな厄介者はない。折角丹精した畑の下を勝手氣儘に掘り廻つて、臺なしにしてしまふ。土龍捕りの機械を發明しないでゐられないわけである。

だが、あれで、つかまへようとしても、なかなかつかまらぬさうだ。うまく拔け道をこしらへてゐるのだ。一方口などには、決してしてゐない。縱橫に坑道を掘つてゐて、何處かに身をくらましてしまふ。

その點、彼はたしかに禪味を得てゐる。たしかに、達摩さんと一脈相通ずるものをもつてゐる。

その意味から云つたならば、自分など、まだなかなか土龍にはなれない。

けれども、いつも地の下でこつこつやつてゐる意味から云へば、十分すぎるほど土龍だ。もうそろそろ天上しても

いい時分だらう。かつと太陽に睨まれて、白い腹を上に向けて、ころりとくたばつてしまへば、土龍も立派な往生といふものだ。

土龍のやうな運命を授かつたものには、日の目を見ると、往生するといふ事だ。

いつまでも、いつまでも、暗いところで、榮えない仕事を、何の意味もない仕事を、單調に、倦きもしないで、繰返してゐるのが、土龍の運命である。彼らしい生き方である。が、その土龍もつひには、さうした生活が堪へられなくなつてくる。

ひとおもひに、穴の口から飛び出したい。たとひ、かつと照りつける眞夏の陽光のもとに、ただひと目、ほんのただひと目、地上の世界を瞥見したばかりで、そのまま眼を白黑にして、ころりと斃れて、短い足を天上にふん張つて、くたばつてしまはうとも。

土龍には、土龍の外の運命は與へられない。だが、土龍にも、土龍の意地がある。誇りがある。彼のやうなものでも、彼らしく生き、彼らしく死ぬ事に、多少の意味を附せずにはゐられないだらうと思ふ。（昭和三年十月四日、病床にて）

病中雜記

×

藥瓶さげて病院通ひをするニヒリスト。

それは人間の矛盾そのものの姿かも知れない。が、それを矛盾とわらふのは、淺薄な見方だと思ふ。自分はそれを

わらはうとは思はなかつた。然し、自分自身がその姿を演出しようとは、思ひもよらぬ事だつた。實際、この十何年の間、自分は醫者の厄介になつた事がなかつた。醫者を信じなかつたからでもあるが、第一は床に就くほどの病氣をしなかつたからだ。

その自分が、丁度今になつて、藥瓶をさげて病院通ひをする、しかも歩けないで、自動車の上に横になつて……今年はいかに年まはりがわるいと云つても、つくづく運命の惡戯を驚かずにはゐられない。何處まで自分を飜弄するのかと、面と向つて云つてやりたい位だ。

だが、それも結局いい事だつたかも知れない。ぢつと寢て、天井の節穴を眺めながら、自分の一生を想ひ返せ、何か得るところがあるだらうと、運命は自分に云つたのかも知れない。自分はこの頃ほど、本當に自分といふものの正體を見究めた事はない……それは樂しく微笑ましいものでは決してなかつたのだけれども。

ぢつと病み臥しながら、いろいろの事を思つたが、とりわけ亡き父の事がしきりに思ひ出されてならなかつた。

父が死んでから、もう十六七年になる。

朝鮮で長らく酒造業をやつてゐたが、ひどい腦神經衰弱にかかつて、別府温泉に療養に來てゐて、そこで客死したのだ。

あのときは、チチシンダの電報を受取つても、自分は別府まで駈けつける事が出來なかつた。何しろ恐ろしい貧乏の中にあつたからだ。

その日、自分があまりに意氣銷沈してゐたので、中村武羅夫君と加藤武雄君とが慰めてくれて、神樂坂の川鐵で酒を飮んだ事を自分はよく憶えてゐる。あの時分からのこの二人の年長の友の親切は、自分が一生感謝しなければならぬものだ。あれは大正何年であつたらうか、自分はあの日、神樂坂の古本屋で、クライストの全集を買つて、そのタ

イトルペエヂに、その日附を書きつけて置いたから、それを出してみれば、何年の何月何日かすぐ分るのだけれど、後で聞くと、父は死ぬ前に、夜中に起き出して、酒を造るのだと云つて、さかんに井戸から水を汲み上げたりしたといふ事だ。

酒造は父の情熱であつた。明日死ぬか知れない病氣の中でさへ、それを忘れ得なかつたのだ。全く、一生それに殉じたと云つていいのだ。

故郷でさかんにやつてゐた時代にも、杜氏まかせにしないで、自分で先きに立つてやつた。酒造の手腕は、その誇りであつた。また事實、誇るに値してゐた事は、自分の家の酒が、隣國まで鳴り響いてゐたのでも分る。

破産後、朝鮮へ行つたのも、當時の朝鮮が、日韓合併以前で、酒造税を要しなかつた事に、まづ何よりも誘惑されたのだつたと思ふ。自由に酒を造れるといふ事は、父には何よりの幸福だつたのだらう。

釜山へ渡つた當時のみじめだつた生活、わづか六疊一間に、親子六人もごろごろしてゐた中でさへ、その六疊のうちの一疊の疊をあげて、そこに小さな酒桶を据ゑつけて、やつぱり酒を造つたのだ。そして酒の力といふものは、大きな五尺の桶でなければつかはぬものだが、こんな小さな桶で、こんな不自由な造り方をしても、これだけの酒が出來るのだと云つて、父は幸福さうに晩酌を傾けてゐたものだ。だが、酒を造る事はうまくとも、酒の賣掛代金を取る事は、恐ろしくまづかつた。そこでいつでも失敗だ。謂はば、人様を無料で醉はせてあげるために、一生苦勞したやうなものだ。

自分が早くから給仕に行つてゐた鎭海灣要塞司令部の風呂番に來てゐた時が、父のいぢばん悲しい時代だつたらう。自分が用事で飛廻りながら、むかうの浴場の方を見やると、吹きさらしの釜の前に立つて、屈託してゐる時のいつもの癖で、筒袖の兩方を、翼をたたんだやうな工合に折つて、ぼんやり柱にもたれて、こちらを見てゐた父の顏のうら寂

しい表情を自分は未だに忘れる事が出來ない。

晩年は少しは事情がよくなつて、密陽といふ處で、相當手廣く商賣をやつてゐたやうだが、自分が父の手許にゐた時は、苦境の時ばかりだつたから、十二三から十五六まで、自分はなさけない日々を送らねばならなかつた。普通の意味の少年時代といふやうなものは、自分にはなかつたのだ。

年とると男の子は、だんだん父親に似てくるといふ。一寸した癖でも、父親が出てくるといふ。自分はこの近年、父の癖がときどき出てくる事に氣付いた。そして、あの氣の毒な失敗者の父が、自分に現れる事を悲しいと思つた。だが、失敗しても何しても、あの酒造の情熱だけは、自分が父に心から敬服してゐるところだ。あの一生を賭した父の酒造の情熱を思ふと、自分の詩作の情熱が、遙かに稀薄で微弱で、到底くらべものにならぬと考へずにはゐられない。但し、商賣の失敗に於いては、自分も父にひけを取らぬだけの自信はあるのだ。その點だけは、自分も不肖の子ではなかつたのだ。

×

昨年末だつたらうか、詩人協會の發起人會が終つて、北原白秋氏はじめ、十名ほどの詩人が、銀座裏のカフエエ・ゴンドラといふところへ行つた折り、自分は竹友藻風君と並んでかけた。

我々が古い友達であつた事を、詩人の誰も知つてゐるものはなかつた。そのとき、竹友君は、英文學の中で、君に一番よく似てゐるのはジョオジ・ギッシングだと云つてくれた。それは大阪時代の貧困な少年、ひねくれた暗い少年としての自分を知つてゐる竹友君にして、はじめて云へる言葉であつたかも知れない。が、ギッシングの「ライクロフト」を愛好して、わが身さながらの聲を聽く思ひのする自分は、英文學者として聞えてゐる竹友君から、こんなに云はれた事をうれしいと思つた。

自分も最少し生きてゐられたなら、『ライクロフトの手記』のやうなものを書いたかも知れない。今はそれさへ興味がない。恐らく自分は「性格からして失敗であつた」と評せられたギッシングよりも、もつとあはれな失敗者で、恐らく（自分は英文學の事はあまりよく知らないのだけれど）ギッシングよりも、かの「恐ろしき夜の都市」の作者のジェムズ・トムスンなどに近い人間かも知れないといふ氣がする。然し、かうして自分を外國の詩人に比べたがるのは、昔からの自分の幼稚な惡癖で、今はすぐ自分でもバカらしくなる位のものだ。自分は何處までも自分だ。自分は複製ではない。いかに貧弱でも卑小でも、自分は自分で、他の誰でもない。失敗しても唯一者だ。それだけが自分の慰めなのだ。

×

病臥の一日、『三富朽葉詩集』を取出して讀んだ。

この美しい本は、三富家から寄贈を受けたものであるが、今は世に亡い愛弟が、直ぐ自分の家へ持つて行つてしまつて、愛讀してゐたので、持つて來いと云ふのも可哀相なので、批評を書きたいと思ひながらも、ついそれなり自分は見ないでしまつたのであつた。彼が死んでから自分は彼が生前愛讀した手譯本を何册か自分の手許に持つて來た。この本もその中の一つだ。今、一頁づつ、ゆつくりゆつくり讀んで行くと、何となく氣持が爽かになり、濁りが淨められる思ひがする。そこには文壇臭などといふものは、微塵も感じられない。今の自分から見ると、あまりに淡くて、弱々しい程の印象もあるけれど、純粹で、淸らかで、調子が高くつて、そして、ノオブルである。文學者生活などに入らずに、二十九歲で死んだのは、かへつてこの人の幸福ではなかつたらうか。

詩にもいい詩がある。當時の詩界の程度を考へると、驚異に値ひするものを見出す。絕筆の「微笑に就いての反省」などの、「生活表」中の散文詩も、自分の趣味に最も近いものであるが、然し、自分が最も樂しく讀んだのは手紙だつ

た。殊に、マドモアゼル・ブランシュに送つた手紙だ。そこには美しい詩があり、やさしく高貴な魂がある。實に淨らかな、そして深い悲哀を知つた魂である……

三富朽葉を、自分はつひに直接知る事が出來なかつた。

自分が十五六歳の少年として、朝鮮にあつたとき、おなじ『文庫』の少年詩人であつた白石武志君と、手紙の上での友になつた。それから、白石君を通して、その友の增田篤夫君を知り、更に三富朽葉君を知つた。

白石君は十九歳で亡くなつた。そして、三富君は二十九歳で亡くなつた。彼等の手紙は、もはや自分の手許にない。朝鮮から郷里へ、郷里からまた朝鮮へ、大阪へ、東京へ……その幾度びとない流浪の際に、失はれてしまつたのだ。殘念であるが仕方がない。

三富君とは直接知りえなかつたが、その後、三富君が銚子で水死した翌年位であつたか、自分は年來の友布施延雄君によつて、そのサアクルに屬してゐた三上於菟吉君と友となつた。堀江朔君と友となつた。福士幸次郎君とも友となつた。增田篤夫君とも、直接相知つた。

その時分の三上君は、新聞小說界の寵兒となつてゐる今から見ると、隔世の感があるが、未だ認められざる才人のもつ、あのひと向きな、若々しい、殉情的な冒險心、彼が「靑白い情熱」と呼んだ、何處か調子の高い、パルナッシアンの氣分を持つてゐた。さすがに三富君の友人だといふ印象を受けて、自分はその人を通して三富君の雰圍氣に接するのを喜びとした。一言にして、自分は三上君に魅せられたのだ。然し、彼は暴君であつた。自分も我儘者であつた。彼との交遊は、喧嘩せずにゐられないまでに、濃厚に過ぎた。然し、その火酒（ウオツカ）のやうな交りは、自分には樂しい記憶だ。この前年、久しぶりに三上君と會つて、一緒に酒を飮んだとき、自分は蘇つてくる古い友情の溫かみの中で、このすばらしい精力をたたへられてゐる男が、この年ごろ、どんなに人の世の苦勞に傷れたかを感じさせられて、昔の若々し

い日の事を偲んで、共に年老いたと、ひそかに悵然の思ひをなした。だが、彼は恐るべき男だ、彼は通俗作家として終るかも知れない、然しまた、バルザックになるかも知れないのだ。考へてみるのに、自分は彼の友情に多くを酬はないで來た。（この事は、自分を弟の如く愛してくれた加藤武雄君に於いて、一層切實な悔みであるが）が、詩人としての自分の天分を最も早く認めてくれたのは、三上君であつたのだ。

古い友達の事を思ふと、自分は心が痛む。自分は親切であつた多くの友に、謝恩の記を書きたいと思ふ。

三富君の第一の友であつた增田篤夫君は、自分の生涯に出會つた最も天才的な人の一人だつた。彼はつひに何も發表しないでしまふのだらうか。彼の澤山の手稿を藏めた行李は、震災の時に燒失したといふ。惜しい事をした。自分はこの春神戸に行つたとき、增田君にだけは會つて來たいと思つたが、住所が分らなくて、それが出來ないでしまつて殘念であつた。

×

自分は生れつき叛逆性の人間だつた。歷史上で、自分が一番共感の出來る男は、イスカリオテのユダなのだ。ルナンによると、ユダが普通信ぜられてゐるやうに自殺をしないで、世間の眼から隱れて、寂しく生き長らへてゐたといふ一說があつたといふ。

彼が、あの傲然で、野心的で、自信强い彼が、猶太（ユダ）の一寒村に潛んで、世に捨てられ、世に忘れられて、半ば死んだ存在として、昔の同輩の盛んに師の道を傳へるのを傍觀してゐた複雜な心持。――それほど自分の創作慾を刺戟するものはなかつた。自分は幾度となく、その隱者としてのユダを描きたいと思つたか知れない。

だが、今自分は、ユダはやつぱり自殺したに違ひないと思ふ。それは聖書にあるやうに、悔恨のためであつたとは限らない。或ひは名狀しがたい大きな幻滅のためであつたか、信仰の崩壞と、自己の無力の意識とのためであつたか

……とにかく、彼も偉大な失敗者には違ひない。

自分はもとよりユダほど痛烈ではありえなかつた。が、叛逆性は自分の宿命であつたのだ。曾て熱愛したものを、曾て崇拜したものを、まもなく不當に憎惡し、不當に蔑視する。自分に勝手な幻影を懸けて、美化し、理想化して、これに陶醉したものが、その常體の實相を知るに及んで、忽ち深い幻滅に陷り、反動的に、これをその眞價以下に貶黜する。實に危險な性格である。

ニイチェは高貴な性格であつた。然し、かうした人であつたと云はれる。彼のワグネルからの離反の如き、思想的乖離のためとは云へ、その顯著な例である。その點だけは、自分もニイチェに似てゐるのかも知れない。（ニイチェの模倣者はみな滑稽な人物であつたといふ。ツァラトゥストラの模倣ほど、我々を苦笑せしめるものはない。自分はニイチェを愛するとは云へ、かうした失錯にだけは墮しなかつたつもりだ）自分も多くの離反をした。個人に就いては沈默するとしても、或る主義や思想に於いても、自分はいつも離反者であつた。人道主義、社會主義、それから宗教……自分はあらゆる陣營からの脫營兵だ。だが、事實は、眞實の離反ではなく、離反がかへつて眞の投合であつたかも知れない。自分の全體が判明するとき、その事もまた判明するであらう。（昭和三年九月二十五日ごろより）

終りよきは皆よし

×

日の暮れるのが、おそろしく早くなつた。陽ざしが庭樹の梢に、ちらちら動くかとみるまに、夕闇の下枝の葉かげから、庭の隅々から緣側にしばしイむ自分の足もとから、靄のやうに湧き上つてくる。

寂しい野の眞中に立つて、だんだん迫つてくる夕闇に包まれて行く時の氣持はどんなであらう。海中の孤巖の上に身を救うたものが、だんだん滿ちてくる潮に足もとまで浸されて來た時の氣持はどんなであらう。生命の時計の砂の一粒々々、落ちてゆく音をまざまざと聞く人の心持はどんなであらう。

今日の一日も暮れてゆく。空しい悔恨の上に夕闇は落ちてくる。生命は秋となり、心は夕となる。しかも、夕映もなく消えてゆく秋の夕のほろにがい光。

「また薄雲に日の暮るる、秋の夕の悲しさには……」といふ或る明治の古典作家の作品の冒頭を、秋の夕の眺めどき、いつも自分は思ひ出す。

秋は佗しく、夕(ゆふべ)は悲し。わが心の秋、わが一生の夕(ゆふべ)。一日の苦しい鬪ひ、恥と、痛みと、消えも入るべきこの疲勞と……。かへりみて思へば、自分は何をして來たのだらう、何をかち得たのだらう。ここにもまた空しく費された一生がある……

晝は消え去つて、夜は未だ來らぬ。この薄墨いろの夕まぐれ、束の間の黃昏の闇、人顏もおぼつかないかはたれどき、この逢魔が時に生滅する自分の一生を思ふ。メレジコフスキイが、古き神々は死んで新しき神は未だ生れない薄明の中に生れ死ぬ、人々の運命と云つたものが、おそらく自分の運命でもあつたであらう。

過渡の時代に、空しく過渡の一生を費すものの悲哀。その一生の收穫(みのり)の空しさ。だが、自分ばかりでなく、自分よりもつと立ちまさつた人々すらも、今の日本の詩人、文學者は、何と寂しい人々であらう。未來を思ふに堪へぬ、その日暮しのニヒリストの心、それも無理からぬ事だ。思ひみよ、その思想、感情を發表する言葉、文字、それが第一、いつどう變化してゆくかも知れないのだ。この日本語と、この日本文字とは――生活樣式も變る、社會組織も變る。道德感情も變る、價値判斷の標準も變る。變る、變る、一切は轉換し、一切は流轉する、時代の潮流は容赦なく一

切を押流す……

今日に生きないで、人はいつ生きられようぞ。しかも、自分は絶えて今日に生きず、いつも明日に生きてゐた。明日は明日はと呟きつつ、つひには墓に入つてしまふ、ツルゲエネフが散文詩に云へる、自分もその愚かな人間であつた。もう明日はやめよう、自分も今こそ、今日に生きよう、ただ今日にのみ、今日のこの一日にのみ。

自分には、今、たつた一日が限りなく尊い。わが一生の悲しみも、悔いも、痛みも、すべてを拭ひ消し、すべてをやはらげる、やさしいやさしい慰めのその日。過去も、未來も、遥かにひき退いて、殘るは現在のただこの一點、我と世界との限界を劃するその一線の撥無せらるる一瞬。一生の事業に値する一瞬だ。さしも執拗なりし個我もつひに屈するのとき、苦痛の子なりし自分もつひに救はれる……

自分の一生の意義は何だらう。おそらく、無がその意義であつたであらう。天上の月を貪り看て、掌中の珠を失却す。雲を掴む男の、これが一生の總決算だ。有にまさる無が、その一生の教訓だ。その行程も虚無、行き着くところも虚無——いつも掌中に無いものを望みあこがれたイデアリストが、ニヒリズムに徹し得たなら、それが自分の完成だ。

虚無厭世主義者は、歴史の發展を認め得ない。が、今や、唯物辯證法の時代だ。社會は動かし難い因果律に從つて發展する。つひに、ブルジョア社會が崩壞して、プロレタリアの時代が來る。それまでが、ただ今日の時代のみが、過渡期であらうか。マルキシストはそこで停止するのであらうか。マルキシストではなかつたが、自分も長いこと、慌しい過渡期と現代を思つてゐた。が、今は思はぬ。過渡期などといふものはないのだ。歴史はそれ自身、無始より無終(は誇張であらうとも)に導く過渡である。タイムは一つの大きな流れである。その流れに漂うて、果てなく押流されてゆくのが、我々の運命なのだ。

自分は今、人間のいかに微少であるか、自然の力の前に、いかに無力であるかを、しみじみと思ふ。人間が神であ

つた時代もあつた。知識は人間を人間とした。そして、科學の發達は、人間を機械にした、神にはしなかつたのだ。

×

おもへば、いかに長い寂寥であつた事ぞ。十七歳のとき、東京に出て來てから、今年で丁度二十年になる。詩作二十年、文筆生活の十餘年、いつ自分が正しく理解されたらうか。自分が他人に理解されないと思ふのは、人間の通有性である。事實、何人も他人に眞に理解されるものではないかも知れない。人間同士は永久のストレンジアで、互ひに孤獨で終るのかも知れない。が、それにしても、自分はあまりに深くも孤獨の氷に埋め盡された。もう五六年前に、わが努力の甲斐なきを思ひ究めて、自分は內心すつかり絕望してゐたのだ。

生きてゐるうちは、絕對に見込がない。これが自分の運命なのだ。そして、死んでからは……。生きてゐるうちですら駄目であつたのだから、死んでしまへば問題にもならない。よしまた、かりに死んでから理解されたとしても、それはもう自分とは何の關係もない事柄だ。自分は死後の世界をも信じなければ、死後の名聲をも信じない。古來聖賢皆寂寞だ。夷齊盜跖俱亡羊だ。とかく、世の毀譽褒貶に煩はされがちだつた弱い心も、その桎梏から脫しうる事が、自分の眠を愛する一つの理由でもあるのだ。

自分は一生、言語不通に惱み通した。おなじ日本語を用ゐながら、自分の言葉は、多くの人に通じなかつた。遠く離れてゐる人に、かへつてよく聽かれながら、近くにゐる同業者には、全く通じなかつた。が、それも無理はない。自分は文壇語、詩壇語を解しなかつたからだ。共通の言語はすぐ通ずる。自分の言葉を語れば、大抵は不通なものなのだ。流行の言葉はすぐ通ずる。自分だけの勝手な言葉が不通なのは、當然ではないか。言語不通は、精神上のストレンジアの甘受しなければならぬ運命なのだ。さういふ事はよく知つてゐてもやはり寂しかつた。

自分は何も自分以上のものに買つて貰はうと思つた事はない。ただ自分のありのままの姿を見て貰ひたいと思つた

ばかりだ。眞實の自分を見て貰ひたいと思つたばかりだ。しかも、常にそれは甲斐ないたのみであつた。甘い、幼稚なセンティメンタリスト――生田春月といふ名は、甘いといふ事と同義語に見なされてゐた。それも仕方がない。が、一生、甘い荷物を背負つて行かねばならぬとは、何たる宿命だらう。四十歳になり、五十歳になり、頭が白くなり、額に皺が刻まれても、やつぱり甘いセンティメンタリスト――それは恐ろしい事ではないか。たしかに、頭が白くならぬうちに、四十になり五十にならぬうちに死んだ方が氣がきいてゐるに違ひない。

然し、正しく理解されるといふ事も寂しい事だ。自分の正體をすつかり看破られてしまふといふ事は、そんなに願はしい事だらうか。理解されるといふ事は、同時に征服されるといふ事だ。自分の孤獨寂寞の愁訴は、ただ自分の弱さをあらはすばかりでなく、また、自分の愚をも示すものではなからうか。理解されないうちが、本當の生ではないだらうか。自分が自分でゐられる時ではないだらうか。さらば自分も悲しむを要しない……

×

四十歳を越した男は惡漢だと、バアナアド・ショウは云つてゐる。ショウ一流の皮肉だが、自分は近頃ますますその言葉の眞實を思ふ。

ショウの惡漢は何を意味するか知らない。が、自分一個では、それを人生の裏も表も知り盡した、一人前の男といふ意味に解したい。つまり現實に徹した人、幻想に惑はされないリアリスト、利害に明るく、事物をその懸値のない實質で受取る人の意である。惡漢といふと語弊があるが、それは毫も無賴漢の謂ひではないだらう。無賴漢は人生の失敗者に外ならぬ。四十歳を越して、なほ毅然として社會に立つてゐる人は、人生の克服者である。生存競爭場裡の勝利者である。それは紳士といふ言葉に置き換へた方が至富であるだらう。そして、紳士の實を惡漢の語で表白したのが、ショウの痛烈な批評であつたのかも知れない。

紳士といひ、惡漢といへば、普通人間の兩極の如く考へられてゐるが、寧ろそれは或る場合には、楯の兩面をあらはす言葉ではないだらうか。英語のジェントルマンの語義はとにかくとして、我國では普通紳士、若くは紳商と呼ばれる場合には、自分はしばしばこのやうな印象を受ける事がある。

うはべはきれいな顏をして、ものやはらかな聲をして、肌ざはりが非常にやはらかい。それでゐて、事ひとたび金錢問題、利害問題に及ぶと、打つて變つた態度になつて、斷乎として、思ひ切つた處置を取つて敢て憚らない。これが紳士だ——少くとも、現在の常識にあつては、アナトオル・フランスの小說の中に、畫家、文士、學者、政治家などの、優雅な、申分のない紳士達が集まつた席上で、その議論がたとひどんなに抽象的な、また架空の想像上の事であらうとも、たまたま自分の利害に牴觸しさうになると、平生の溫和な假面を脫して憤激してくるといふ事が書いてある。よく人間を知つた人の觀察ではないか、四十歲にして人間は生活の眞の根柢を知るのだ。

これが惡漢ならば、この意味で惡漢たり得ないのが、自分の悲哀である。一人前の男子たり得ないといふ事は、男と生れたものに取つて、これ以上の呪咀はないであらう。四十歲になつたら、自分のやうなものでも、人生の裏も表も知り盡して、間違ひもなく危なげもなく、人生を渡つて行けるやうになるであらうか。覺束ない事だ。何で自分が四十歲まで生きられようか。自分は四十歲に値しないのだ。

×

終りよきは皆よし。その生涯の終りを、そのはじめと一致させるものは、生の成功者である。ゲエテの所謂る最も多幸の人である。

ヤコブ・ブルクハルトは、ラファエルの師なるペルヂノの藝術について、彼がまだ本物であつた時代には、驚くべき瞬間があつたに違ひない、それを彼は後には、職業的にやつたと云つてゐる。この事はひとりペルヂノにのみ限られ

た事ではない。非常に多くの藝術家について、しばしば云はれ得る事なのだ。

我々は詩人として、とりわけその感の切實なものがある。我々がその詩の發表の舞臺が得られないで、雜誌社を歷訪して、體よくことわられて、すごすご引退（ひきの）いたとき、いろいろな無理算段をして、やうやくの事で處女詩集を自費出版したとき、その價値の大小高下は別として、我々はつねに本物だつたのだ。しかも、つひに名聲を博し、地位を得て、雜誌記者に頼まれて、いつ幾日（いくか）までに三十行位の抒情小曲を一篇、九月號ですから、初秋の情趣を取入れたものを、なるべく少女の喜びさうなやさしい調子でといふ註文を受けて、多年修練の技巧を驅使して、その商品を製作する時、ああ、我々はもはや詩人といふのに値しない、一人の詩製作工なのだ。悲しいかな、そこに拂はれる苦心は、職業的良心であつても、止むに止まれぬ詩人の熱意ではないのだ。

然も、かうした精神的賣春によつて、詩人の受ける報酬は、いかに僅かなものであらう。自ら汚す事によつて、我々は若干の小遣錢にありつくのだ。何となさけない生活ではないか、詩ほど職業たりえないものはないと同時に、詩人ほど本物でなければならぬものはないのだ。が、詩人も食はねばならない。そこで、醜い競爭、人氣に對する嫉視、政治的、策動、漫罵、誹謗……

自分はさういふものから離れて、一人の道を歩いた事を幸福に思ふ。ただ、自分もあやまつた。人に先んじて抒情小曲集を出した事によつて、終生、小曲詩人の汚名を蒙つたのは、たしかに自分の罪だ。だが、自分はあぶないところで、喰ひ止つた。詩人としての世間的人氣を犧牲にする事によつて、自分はわづかに詩工の榮譽より自分を救つた。これは多少自讃してもいい事だ。自分はつひに、何々節、何々小唄のたぐゐを書かないですんだのだ。

自分の愛好する詩人佐々木指月氏が、紐育の事を書かれたものを見ると、ナイトクラブとかいふ處で、彼地の詩人が近作を朗吟して、朗吟料を得る事が記されてゐる。我國でも、早晩そんな風になるのではあるまいか。いな、現に

この事を主張してゐる詩人すらあつたやうに思ふ。かくて詩人も一種の寄席藝人である。それも必ずしもわるくはないかも知れない。が、その詩は一體どんな詩であり得るだらうか。自分はそのナイトクラブで朗吟された詩を知りたいと思ふのだ。とは云へ、天分は天分だ、さうした事に適した天分の詩人は、それをやるがよい。我國にもそんな人は尠くはないのだから。が、若し自分もそれをやらねば生きられぬならば……若しそんな時代が來たならば……恐ろしい事だ。長生きすれば恥多し、そんな時代が來ないとは限らないのだ。

×

終りよきは皆よし。かの所謂結末をつける術(すべ)は、最高の人生智である。その生涯をよく結びえんがためには、我我は平生の心の鍛錬を要とする。適當な切上げ時を知ること、その適當な時に、潔く切上げ得ること。それが出來れば、生涯を通じて失敗し盡したものも、なほ最大の失敗者ではない。終りよきは皆よし……(昭和三年十月十一日)

餘りにニヒリスト

×

何人もおなじ流れを二度わたるものはないと、希臘の哲人は云つた。河も變れば、自分も變る、水がおなじ水でないやうに、自分もおなじ自分ではないのだ。曾て自分はしばしば河のほとりに佇んで、水を眺めた事を思ひ出す。ぢつと流れる水を見てゐるうちに、日が暮れてしまつた事もある。

幾度び自分は河のほとりに立つたらう。晩春の一日、嵯峨に遊んで、桂川のほとりに、良寛和尚の父以南の身の上

を偲んだ時の事は、今に至つて忘れられない。あの水は美しい水であつた。そして、その水の上に、あの日は雨のやうに花が散りこぼれた。

だが、曾て自分が愛したその風景を、ふたたび味はひたいとは思はない。ふたたび行つてみたところで、もはやその自然は昔のままの自然でなく、自分も昔の自分ではないのだ。今は身世(みよ)をかへりみて、いたづらな悲しみに誘はれるのみであらう。

萬物は流轉する。一切のものは、刻々に變化してやまない。變化こそ、常住である。大自然の不變の法則である。昔の自分は、今の自分ではない。人間の細胞も、七年目毎に、すつかり組織が變るといふではないか。人間の心のみがなぜ變らない事があらう。外貌や體質の變化にもまして、心の內部には恐ろしい變化が行はれるのだ。昨日の自分は今日の自分でない。この春の自分、去年の自分、五年前の自分……何といふ變りやうだらう。だが、變つたのは自分ばかりではない。周圍も變つた。いや、周圍の變化が、自分を變へたのだと云つた方が正しいかも知れない。

社會狀態は變つた。我々の生活の土臺は、その社會的事情によつて、ぐらぐらに搖り動かされる。社會は個人を壓迫して、袋の中の鼠にしてしまふ。この二三年の間の大きな經濟的變動は、十年の歲月のなし得なかつたところをなしたのだ。この事を自分は實にさまざまと、殆んど恐怖を以て凝視して來た。わなに落ちた獸の踊りを、いかに自分は痛ましくもあまりに多く、あまりに近く見なければならなかつたであらうか。

自分は數年前に、現代人の生活態度の基調をなすものは、ニヒリズムだと斷言した。その言は不幸にも、年とともに、愈々その眞實を示して來た。この極度の經濟的不況、生活の不安定、未來の不確實、信仰の全き喪失、避け難い崩壞の豫感としての絕望……これが人々を驅つて、その日暮しの享樂主義に走らしめる。何も考へないで生きようとさせる。考へるといふ事は、ただ、心を暗鬱にし、隱れた絕望を引出し、生活意志を痲痺せしめるだけだからだ。

何ものをも信ぜず何事も憑まず、過去を思はず、未來を考へず、陶醉と忘我とを生活の支柱として、ただ今日の一日に生きる人の心。それは獵師の前に自ら目隱しをする獸のやうな自己欺瞞であるかも知れない。然し、一寸先きに闇の中に生きる人間としては、最も賢い生き方であるかも知れないのだ。そして、今日のこの不安な、灰色の銷沈の時代に、かの未來に對して希望を持ち、自分たちの力を信じ、犧牲と鬪爭の情熱に燃え立つた、少數の勇ましい社會運動の戰士の外は、概ねこの刹那主義、今日主義のニヒリスティックな氣分に生きてゐるのではなからうか。

現代の人心の底に潜むものは、限り知れぬ絶望である。そして、自分もその絶望に於いて。この時代の人間の一人たるに過ぎなかつたのだ……。これは自分の獨斷であつたらうか。現代人の心は、薔薇色の希望に輝いてゐるのであらうか。あの明治時代の潑剌たる新興國民の不撓の意氣を保持してゐるのであらうか。自分にはどうしてもさうは思はれない。大正末期より昭和に及んで、自分は德川末期の頽廢氣分に、あまりにも相似たものを、事毎に看取せずにゐられないのだ。德川末期の平民の虛無思想を論じた北村透谷をして現代にあらしめば、彼はこの現代の人心に浸潤する虛無思想を、いかに見たであらうか。

×

昨年より今年と、年を追うてより痛切に、自分は自分の近い周圍に、また、直接の交渉はないけれども、自分の耳目に入る社會相の中に、ニヒリズムの暗雲が、息苦しいまでに立て罩めてくる事を、身に犇々と感ぜずにはゐられない。日毎に新聞記事に、また、多くの文學者の感想の中に、極めて若い人の文章の中にすらも、自分はニヒリズムの濃い影を、救はれがたい、ニヒリスティックな氣分を見出す。これは自分が自らニヒリストであるがためであらうか。いや、自分にはさうは思はれない。ドストイエフスキイは、「ニヒリズムが我々のところに現れた、なぜなれば我々凡てがニヒリストであるからだ。凡てのものは例外なしに、フヨドル・パブロキッチ・カラマゾフだ」と云つた。その言葉は、

移して以て我々の國、我々の時代に、實に適切にあてはまる言葉ではあるまいか。

フヨドル・カラマゾフのニヒリズム――それは實に恐ろしいニヒリズムだ。必ずしも今日に特有のものではなくて、或ひは人間性に固有のものであるかも知れないけれども。然し、ニヒリズムの様式はそれにとどまらない、更に高貴なものもあり、更に物凄いものもある。更に不吉なものもあり、更に痛烈なものもある。その人間の性格と運命と、思想的の深化、若しくは病的化によつて、千變萬化してあらはれる……イワン・カラマゾフのニヒリズム、ラスコリニコフのニヒリズム、キリロフのニヒリズム、そして、スタフロギンのニヒリズム――あの假面のやうな美しい顏、畫いたやうな紅い唇、石鹼を塗つた絹の紐……ドストイエフスキイは、ニヒリズムの法醫學者だ。かう云つたとき、自分はドストイエフスキイの最奧の特質を最もよく知り得たものと自信していいのだ。

今の日本はロシアの何十年代頃に相當するのであらうか。もとより國家的、社會的事情が全然違ふ以上、正確な比較が成立つわけはない。が、その一般的沮喪と、沈滯と、萎靡と、銷沈とに於いて、あまりにも我々の時代に相似たものを、かの國の或る時期に見出す事はないであらうか。アルツィバアシェフの『サアニン』と『最後の一線』とは、當時の評家によつて、自家の流行病に對する責めを負はねばならなかつた。が、これはアルツィバアシェフの自ら辯じてゐるやうに、取るに足らぬ妄說である。當時のロシアの絕望的な社會狀態が、あのやうな極端な作品を生んだのに過ぎないであらう。元來、アルツィバアシェフの虛無思想が、その時代の反映に外ならないのだ。

當時のロシアの新聞の報道によれば、自殺者の數は驚くべき多數に上り、或る時間にはインテリゲンチヤで、自殺の考へを抱かなかつたものは、殆んど一人もなかつた位だと云ふ。そしてまた、此の事態は、今の、今後の我が國の社會のそれではないだらうか、自分は今後、自殺者の數が驚くべく激增するであらうと豫測してゐる。この恐るべき時代の壓迫、社會の重壓は、無力なる個人をして、自殺の外に途なからしめるだらう。ナウモフは我々の間に、恰好

の地盤を見付けるであらう。

×

最近、自分の周圍にも、この道理ある出口を求めて、一切の壓迫より自己を解放しようとする意志の表明を見た。その人事ならず心を動かされた二三の事件を、自分はひとり病み臥しつゝ、夜の更けるまで考へてゐた。自分がまだ病床に就かない前、自分の知つてゐる女の人が、自殺の意志を表明した手紙を遺して、その所在を失したので、その親しい友達が非常に心配して、探し當てたところ、幸ひ、彼女を生の中に見出し得た。或る事情から、心機一轉して死を思ひとどまつたのであつた。自分は久しぶりに彼女と會つて、その無事な顏を見るを得た事を喜んで、半日、いろいろな事を語つた。彼女はカルモチンの百錠を帶の間に挾んでゐると語つた。然し、生きて行くと健氣に語つた。いろいろな經驗を經て、男といふものを知り盡して（女にとつては、男がただちに世間である）女一人で世の中に立つてゐるこの人が、ニヒリストにならずにゐられないのも無理からぬ事であると感じたが、快活で、冗談が好きで、碎けた物言ひで人をからかつて、男をものともせぬこの女の人の本心が、こんなにやるせない、慰めのないものであつたかと、自分はひそかに驚いた。だが、二人の話は餘りに相響くものであつた――餘りにもニヒリストの男女なのであつた、

女の人にも、此頃は隨分ニヒリスティックな氣分で生きてゐる人が多い。自分の昔から知つてゐる或る女の人は、最近出會つたとき、この一二年會はなかつた間の身の上の變化を語り、何の望みも期待もなく、日毎の絶望の中に生きる空虚な心持を訴へた。その人は情熱的な詩人肌の人で、良人に別れて長く獨身でゐたのが、或るアナキストに愛されて、そのための受難に、一層心を暗鬱にされてゐるのであつた。曾て自分が信州の松本に講演に行つたとき、丁度その土地にゐたその人は、始終傍に附き切つてゐて、あまりに馴々しい樣子だつたので、松本の人たちは變に思つた

のかも知れない。歡迎會の席上で、その人がみんな槍玉にあがつて、その人も負けないで應酬したが、自分はふとそんな事を思ひ出して、あの頃は、その人もまだ人生に夢をもつてゐた事を思つた。自分とても、その頃はまだ元氣があつた。自ら信ずるところがあつた。その人も變つた。自分も變つた。歲月の力は、こんなにも人を變へてしまふのだ。

餘りにもニヒリズム、またニヒリズム……自分の愛してゐる或る若い作家も、このごろ手紙をくれて、樂天的な一面をもつてゐた自分も、驚くべきニヒリストになつてしまつたと告げた。自分の周圍の若い詩人にも、ニヒリストが多い。自分の同鄕の靑年詩人で、下田沖の神子元島で、海との結婚を口にして、死んだものすらもある。いや、そればかりではない、もつと近くに、この春死んだ自分の愛弟は、病死ではあつたけれども、死後その日記を讀んで、自分はその兄に隱してのあらゆる不攝生と、死身な文學的勞作とに驚き、その虛無的な沈鬱な感想に、面打される思ひがした。それは多分に、自分の虛無的な思想の影響であつたかも知れない。が、この日記を讀むと、自分は彼の死が緩慢な自殺であつたかのやうな印象を受けたのである。そのため、自分の心は一層暗くされ、一層悔恨に嚙まれた。自分も小さなアドリアン・シクスト敎授であつたかのやうな、良心の痛みを感じさせられたのである。自分が亡弟のために、あんなに度外れて哀哭した理由の一つは、實にここにあつたのだ。

然し、とにかく自殺は、勇敢な破壞であり、脫出である。ニヒリズムの究局とも思はれるが、また、或る點、ニヒリズムの否定とも見なされる。ロシアン・ニヒリストの決死の戰ひのやうな意義はないけれども、それに次ぐニヒリズムのラヂカルな歸決である。少くとも、德川末期氣分では決してないのだ。然し、すべての人が自殺する事は出來ない。それはいかに夥しき數に上るとするも、なほ依然として僅小な例外に止まるであらう。それほど人間の生命の愛着は强いのである。そこで、死ぬ事を得ず、生きる事を得ない、慰めのないニヒリズムの暗雲が、我々の時代を立て

罩めるであらう……。

×

勞農ロシアの作家ピリニヤアクは、火山を以て日本の謎を解くキイと見なしてゐる。彼の日本印象記は、多くの誤解や滑稽にも拘はらず、我々にとつては、彼の作品以上に意義の深いものがあるが、特にこの一事の如き、日本人にとつては大きい問題を暗示するものである。

火山國たること、これ日本の運命である。我々は火山國の人間である。我々の下には、炎々たる火が燃えてゐる。恐らくは、我々の胸にも……(願はくばさうありたいものだ。永久に燃え爆ける事のないくすぶり方はたまらない。)ただ、爆發の時が未だ來ないだけだ。それはいつ來るであらうか。或ひはつひに來ないのであらうか。

火山國は同時に地震國だ。我々は天變地異に身を以て遭遇した人間である。かの大震災は、いかなる變事も發生し得るものだといふ事を、我々に深く感じさせた。震災は我々の一切の信仰を奪ひ、未來への憑みを奪ひ、我々を經濟的、並びに精神的不況に沈め、ニヒリズムの泥沼に投じた。だが、それはまた我々に社會的突變の啓示を與へはしなかつたらうか。さうだ、××もまた、いつかは來るであらう。早くか、晩くか……

現在のこのニヒリスティックな、救はれ難い絶望と無氣力とは、決して喜ぶべき徵候ではない。だが、我々の愛すべき靑年は、悉くこの希望なき、精神的破產の狀態にゐるのではない。その事を思ふと、自分の沈鬱な心すらも、明るく微笑む。德川末期のあの頽廢した平民の饗宴をよそに、維新革命の火の手は上つた。當時の俊秀な靑年は、身を挺して、その理想に殉じた。吉田松陰、橋本景岳……それらの人々を思ふと、何たる心の若やぎを覺える事ぞ。過去に於いて、日本人の精神の最高調に達したあの時代——それがふたたびかへつてくると思ふのは、何たる樂しい希望であらうか。たとへ違つた理想、違つた觀念の下であらうとも、その純眞な情熱に於いては同じものである!

それまでは踊れ、モガよ、モボよ、そのアメリカニズムのジヤズの足ぶみで……噴火山上のその舞踏を。自分もまたその時代の一人として、そのトオテンタンツを踊るであらう、然し、それは自分の內部に強く波打つてゐるアイデアリズムのエラン・ヴイタルであるかも知れない。否、かくあらんことを自分は望む。切に望む。自分のニヒリズムは、泥沼の腐草の燐光であつてはならない。それは强壓の手の下にはばまれた力の反撥、反抗と破壞との信條でなければならない。ロシアン・ニヒリストのニヒリズムでなければならない。その反撥力の有る無しによつて、自分の生と死は決定するであらう。

然し、自分はよしや空しく斃れるとしても、なほ次ぎの時代に呼びかける一つの聲でありたい。自分はその個人主義の殼を完全に破碎しないうちは、死に得ないのだ。まことに今、自分の憎むはかのアンシアン・レヂイムの罪深き娼婦の言葉、わが亡き後には大洪水。……（昭和三年十月十三日）

袋の中の男

×

文筆生活を長くつづけてゐると、つひにはその上、同じ事を繰返すのに堪へられなくなる。もう澤山だと思ふ時期が必ず來る。

丁度、賣春婦が生に絕望するのに似てゐる。彼女がその糊口のために、自分の肉體を賣つて、つひに恐ろしい疾患に斃れるやうに、自分の魂を賣つて、汚辱に汚辱を重ねて、つひに癒やしがたい精神的疾患に斃れる文筆勞働者！泥坊と賣春婦とは恰好の相棒と見なされてゐる。賣春婦と職業文學者とも、それに劣らぬいい取組なのだ。

自分は藝術家の尊嚴を冒瀆してゐるのだらうか。プイ！　一錢でも自分を高く賣らうと努力する藝術家に何の尊嚴ぞ。彼が讀者を眼中に置いて、人氣の消長に焦心する限り、精神上の藝者だ。パピイニの云つたやうに、彼が世間から報酬を期待する限り、商賣人だ。しかも、報酬がなければ、製作はない。彼はそれによつて食はねばならぬからだ。自己を賣つて食ふもの、賣春婦もまた藝術家である。

自分もまた、毅然として賣春を拒否したとは云ひえない。ただ、生れつきのぶきりやう〻〻〻のために、あまり買手がつかなかつたのと、なさけない臆病心のために、思ひきつた大つぴらな商賣が出來なかつたばかりだ。つまり、賣春の資格がないために、結婚の名で、賣春をやつたのだつたかも知れない。

考へれば、いやな事だ。みじめな生活だ。ツルゲエネフの「イナフ！」が、今自分の唇にも上る……。

×

自分のやつたやうな事をやつた者は一人もない。自分のやうな危險な文章を書いた者は一人もない。自分のやうに、敵からではなく、かへつて日夕往來した仲間から、袋叩きに遭つた者は一人もない。まつたく、文字通りの袋叩きだつた。叩かれた後で、君のためを思つたものだから、わざと叩いたのだ、惡く思はないでくれと慰撫されて、自分はその友情を感謝しなければならなかつた。

自分のやつたやうな事をやつた者は一人もない。アルツィバアシェフの友バシキンだつて、もつとひかへ目だつたらう。それを思つて、自ら慰めるのみだ。自分のやうな大膽不敵な痴漢は、もう二度とは出ぬだらう。それだけで自分の名は記憶される値があるだらう。勿論、希臘の何とかいふ神殿に火をつけた愚人と同一の意味でだ。

×

パピイニは、「自分は常に反對黨だ、自分の精神の必然的なる表白態度は反抗だ」と云つた。自分はパピイニを同質

の人間として愛した。

チェスタアトンは、いつも弱い方の味方だ、先年の英國の總同盟罷業のとき、彼が勞働者側に立つたといふ報道を聞いて、自分は勞働者側の敗北を確信した。果して、さうであつた　この反抗兒、チェスタアトンを自分は愛した。

自分は常に在野黨だつた。自分は一度も權門に出入した事はない。常に孤獨な反抗兒だつた。それだけで、自分の意義は十分だ。

だが、これもつまらぬ事だ。自分がもつと偉大で、もつと賢明であつたならば、かうした惡癖は潔く棄てたであらう。それが出來なかつたところに、自分の人間の卑小と、未完成とがあつたのだ。

ゲエテ的偉大は、自分には無緣の血液だ。自分は常に、バルベイや、レオン・ブロアの徒だつたかも知れない。さうだ、かのガラクタアが最も自分によく似てゐた。

×

自分は自分に氣質の似た詩人、作家を愛した。それが自分の始終一貫しての態度だつた。一にもゲエテ、二にもゲエテ、ゲエテが自分に何ものぞ。

自分がゲエテを擔ぎ廻つて、高くゲエテを押立てて、その横に立つて、他を睥睨してえらくなつたつもりにでもなつたら、悲慘なる滑稽であらう。

自分はもつと小さな詩人が好きだつた。君も小さいし、おれも小さい、仲よくしようぢやないかと、自分は彼等に云つた……

×

昔、支那では、花嫁の市場で、袋の中の花嫁を買つたといふ。我々はみな袋の中の花嫁を買ふのだ。我々の一生と

いふものは、かうした滑稽な冒險である、不確實な袋との結婚である。

結婚といふものが、人生の不確實を、最もよく示す。どんな用意周到な結婚でも、結局、袋との結婚だ。凡ての結婚は、結局、一つのあきらめに終る。それは、人生の不如意の實物教育である。人間の無限の欲望の、悲しい墓である。

勢力ある人にとり入つて、立身出世しようとするものは、美貌の妻をもたねばならない、これは佛蘭西小說が我々に與へた教訓であつた。また、その佛蘭西小說は、怜悧懦弱な男子が、富裕にして醜貌の老婦の男妾となる事によつて、紳士としての資格を獲得する事をも教へた。事實、自分はその虛僞ならざる事をまのあたりに見た。だが、さうした「うまくやつた」結婚も、また、大きい目から見れば、人生との失敗した結婚であるかも知れない。いづれにしても、人間の生涯は、期待と精力との浪費である。自然は一つの萠芽のために、無數の種子を浪費して惜しまない。一つの受胎のための精子のあの濫費。して、その結果として生れ出たものも、大半また、長い文化の流れに空しく消える泡沫にすぎない。

我々の生命は偶然の產物である。しかもその偶然は、自我の意識を生んで、我々を無限の苦痛の中に浸す。そして、つひに我々は、袋の中の花嫁を買ふばかりでなく、自分自身が袋の中に入れられてしまふのだ。いつもそのきはどい時に、巧みにすりぬける人はあるであらう。運命に助け出される人もあるであらう。自分はその智慧も幸運も惠まれなかつた。目に見えぬ力に追ひつめられて、雪隱詰めにされたあげくは、鐵の手で袋の中に詰め込まれてしまつた。もう身動きもならぬ。萬事休す。もう救ひ出されるめあてはない。絕對にないのだ。ただ、一つの決意を外にしては――

袋の中の男には、ただ沈默と、安眠とがあれ、彼の叛逆は、その力の有無によつて、二樣に表白される。そして、自分は袋叩きにされるほど無力であつた。その歸結は敢て言ふを俟たないであらう。だが、袋の中にゐるのは自分ば

かりだらうか。自分には、今の日本の國全體が、袋の中に入つてゐるとしか思はれないのだ。ニッチもサッチも行かない。一切は行詰りだ、政治狀態も、經濟狀態も、一般の人心も……袋の中の國よ、あはれむべき現代の日本よ、この袋をのがれる道は？　大蛇に呑まれた勇士のやつたやうに、内からその腹を斷ち割る外はないのだ。××といふ名刀でもつて……この勇士がこの袋の中にいくばくゐるであらうか、それによつて空しく溶けて、腐るか、或ひは新しい生命によみがへるか、それが決定するのだ。この悲しむべき廢頽の日本は、ただ、最も純眞な靑年の情熱の力によつてのみ救はれるであらう。（昭和三年十月十三日）

文學者の悲哀

×

文學者は文學を愛してゐる。愛すればこそ、文學者となつたのだ。長谷川二葉亭のやうに、つねに文學の意義を疑ひ、男子一生の事業となすに足らずと云つた人ですら、眞底から文學を愛してゐたと見なすべき理由がある。あの苦心慘憺の名飜譯や、三篇の小說よりも、むしろ自分は二葉亭のあまりうまくない俳句を見たとき、最もそれを感得した。

唯物辯證法を說き、階級闘爭を唱へ、プロレットカルトを云々する無產派文學者も、唯物辯證法や、階級闘爭や、プロレットカルトよりも、より多く文學を愛してゐると信ずべき理由がある。もしさうでなければ、もつと直接的な方法で、その主義のために働く餘地はいくらもある筈だ。

文學の愛は、彼をつひに文學者生活に引入れる。しかも、職業文學者として立つとき、その生活は當初の翼求とは、

いかに異つたものとなるであらう。自分の書きたいと思ふ事を書くをゆるされないで、(そんな事をしてゐると食へなくなる……)書きたくない事を書かねばならぬ。

それは丁度、女性が愛する男に添ひ遂げられないで、仕方なしに、厭やな男に身をまかせるやうなものだ。しやんとした結婚が出來ないで、賣春婦になつてしまふやうなものだ。

殊に、今日のやうな場合には、賣春をしなければ、生存をゆるされないのだ。自分はひそかに期待をかけてゐた新進作家などが、講談などを書いてゐるのを見る毎に、憮然として、世が世ならばと、七八年おくれて出たその人の不運を同情せずにゐられない。

然しまた、かういふ考へ方もある。賣春を恥づべき事と思ふのは、舊時代的偏見である。そしてまた、あらゆる戀愛と結婚とには、これを精査する時、必ず賣春的要素を見出すではないか。また、藝者が單なる賣春婦であるとするも、彼女にも眞劍な戀があるではないか、彼女も落籍されて、正妻になる事もあるではないかと。

×

自分の知友の中で、中村武羅夫君位、文學を愛してゐる人を、自分は知らない。文學者である以上、みな文學を愛してゐるに相違ないが、この人の愛は極端だ。德を好むこと色を好む如きものを見ずとか、文學を好むこと、色を好むにまさる。しかも彼はその靑春の最もいい時代を、雜誌記者として過さねばならなかつた。そして、それが一生の痕跡となつた。この人の生涯には、或る悲劇的なものがある。

宇野浩二君の文學の愛も驚くべきものだ。殊に、彼がいかに詩を熱愛してゐるかは、多くの人の知らないところだらう。十年前、彼が布施延雄君とともに、自分の『靈魂の秋』を愛してくれた事を自分は忘れえない。彼はハイネの詩集をも譯した。自分はそれに序文を書いたが、あの譯稿が世に出ないでしまつた事は、非常に殘念に思ふ。自分は

今も『宇野浩二譯詩集』を見たいと思ふ一人だ。

――そして自分も、幾度びとなく、文學の意義を疑つて來た自分も、つひにその魅力からのがれえないでしまつた。おのれの才能もかへりみず、おのれの境遇もかへりみず……自分こそおろかな火取蟲であつた。

×

價値の幻影を作成し得ない文學者は失敗者だ。しかもこの幻影の作成たるや、不朽の大作を成すよりも、更に難事業だ。それは特殊の才能と、透徹した世智とを要するばかりでなく、更に、運命の加擔を絶對的必要とするからである。

詩人は出來るだけ高價な、贅澤な、華美、尨大な詩集を出さなければならない。菓子箱位の大きさなら、まづ、大體、効を奏するだらう。詩人連は最も外觀に眩惑されやすいから、その幻影作成の方法は、至極簡單で、容易であるが、作家だとさうは行かない。もつと智能をしぼらなくてはならない。それらの具體的方法を、自分は多年一隅から觀察して來たから、かなり面白く說述する事は出來ると思ふが、今はその興味がないから止す。

もつとも、この價値の幻影については、曾つて少し詳しく書いた事がある。それゆゑ、そんなに價値の幻影作成を觀察し攻究して來たなら、それがうまくやれた筈ではないかと云ふ人があるかも知れない。その人人には、かう云ひたい。

人生智の說教者が常に處世の失敗者であつた事を思ひ給へ。自分はこれを意味の深い現象だと思ふのだ。

韓非子は當時の政界の失脚者にすぎない。ラ・ロシフコオも、フロンドの大失敗者だ。マキアヹリのみすぼらしい姿はメレジコフスキイの『先驅者』中に描かれた通りであらう。

然し、彼等の生涯が失敗であつたからとて、彼等の言說が無價値であるとは云へない。事實はむしろその反對でな

ければならない。

彼等が實社會の成功者であつたならば、その痛烈な言説は生じなかつたであらう。彼等が何を書かうとも、平凡な微温と化し、秋霜烈日の氣は失はれたであらう。

彼等は失敗によつて、實行家の地位を捨てて、批評家として立つたのだ。或ひははじめから、人生の傍觀者であつたのだ。

自分はラ・ロシフコオや、シヤンフォールや、ニイチエを宗とした。しかも、アフォリストとしても、また失敗した。價値の幻影の作成など、もつての外の事だ。この價値の幻影といふ事にしても、人がちやんと心得て、人に默つてゐる事に、たまたま氣が付いて、鬼の首でも取つたやうに騷ぎ立てたまでだ。愚人の愚擧だ。これを行ふものは、これを云はず。それなら阿呆理詰(アフォリズム)にだけは、成功しさうなものであつたが、ここでも幻影の泡が立たないですんだ。(昭和三年十月二十日)

闘爭か死か

文學生活と社會運動との兩立し得ない事は、自分が十年前からの確信であつた。大正の初年に、當時の社會主義運動の指導者である堺利彥氏や、無政府主義者の大杉榮氏に接近しながら、自分がつひに公然たる社會主義者とならなかつたのは、これがためであつた。ブルジョア作家の左傾の頻出した際に、自分がそれにさしたる意義を見出し得なかつたのは、また、これがためであつた。然し、今、自分の考へは變化した。

左傾を表明して、依然たる平穩無事の文士生活を繼續する事は、しばしば自分の諷刺に値した。然し、今自分は、

たとひそれが流行の追隨であり、怜悧な打算であるとするも、なほ左傾せざるよりも、況んや反動的役割を演ずる事よりも、遙に意味ありと考へるに至つた。その際、或る個人が、口先きだけの過激論を吐き、政策的に左傾を宣傳して、讀書界の人氣を煽ると否との如きは、別に論ずるだけの問題ではないのだ。

自分は思想よりも行動を、主張よりも實踐を重視する。自ら實踐し得ざる以上、これを主張すべきでない。それは自分の確信だ。それゆゑ、自分は自らの中のプチ・ブルジョア精神を克服せざる以上、その生活を斷然改め、プロレタリア・イデオロギイを、その日々に實現し得ざる以上、自己を社會主義者として、プロレタリアとして表記する事を敢てなし得なかつたのだ。

然し、其後、自分はハイネ的諷刺の消極的態度より一歩を進めた。自分は街頭の喧嘩や、無思慮な亂暴狼藉にさへも、或る期待をもつではないか。實際的に無力であるとしても、文士の筆舌にだけ、空氣の動きほどの意義をも認めないで畢るべきではない。たとひその主義と生活の實際とが、必ずしも一致せずとも、なほ彼の筆を尊重せしめよ。

恐らく自分が今日以後、なほこの生活に希望を有つとすれば、自分の生活は、過去三十七年とは、全然面目を異にしたであらう。自分はプルウドンの所謂山師的行動に墮せずして、わが無力をいかに用ふべきかに惑つた。故有島武郎氏の『宣言一つ』は、ブルジョア階級の文學者としての最も誠實な、最も正直な表白であつたが、この絶望をいかに克服すべきか。

鬪爭か死か、持續か斷絶か。單なる持續は死であり、鬪爭もまた死である。恥辱の死と、榮譽の死。我等をしてその一を選ばしめよ。（昭和三年十月二十四日）

秋の日のこと

秋晴れのつづくこの頃に咲く花は、何がいいだらう。新しく咲き出す花か、夏から咲きつづいてゐる花か、いづれにもせよ、大氣は冴えすんで「色」そのものを光らせて見せるのが、秋の晴れ渡つた日のならひである。白きものはくつきりと白く……赤きものはくつきりと赤く……。

私の庭に咲いてゐる白い蘭の花は、この四五日の氣持のよいさわやかな光線の中で、いかにも淸げに、その白い色を際立たせ、一莖々々を、上下、左右、四方八方になびかして、あだかもあの白い印度孔雀のやうにうづくまつてゐる。その花の一つ一つの白さは、たつぷりと水分をふくんでゐる、こまやかさを帶びた乳白色なので、ぢつと見てゐると、心がやはらかにうるほつて來る。この蘭が、秋毎にかうして白い花を見せてくれるので、私は秋の花をおもふ毎に、まづこの白い蘭の花を慕ふ。これは私の祕藏の秋の花である。

秋、食べもののおいしい時、食膳にのぼせるのには、何がいいだらう。あの仄白い、ふつくりとしてゐる松茸であらうか。それともまだ細い、ほんのり赤みをもつ薯であらうか。いづれにしても、淸鮮で、そしてその色が美しいし、味があつさりとして好ましい。たいして食べものにぜいたくな氣持をもたない私ではあるけれども、秋になると、あの松茸の御飯はほしい氣がする。また、それの汁も味はひたい氣がする。かくべつ身體の榮養のたしになりさうにもない氣がするのだが、氣分はたしかに香ばしくなる。またあの松茸の燒けた香ばしい匂ひが鼻をうつ時に、私は、秋の喜びを嗅覺によつて、はつきりと感ずるのである。今年ももう松茸の出る時分、今胃腸をこはして、あまり食慾はないのだけれど、どうかしていくらかでもなほつたならば、あの松茸の御飯を食べて見たいなとおもふ。

秋は、果物のおいしい時である。何の木の實がいいだらう。林檎か、柿か、そのいづれもよいけれども、林檎よりも柿の方が、特に、秋の果實らしくて、それの訪れが、何となく待たれる。今年は、雨が多くて、自然、いろいろのものの出來がわるかつたであらうとおもはれるが、とりわけ柿は不出來ではなかつたかしら。そんなことをふと考へ

た。つれづれの午後の煙草をふかしてゐた時に。

去年は、實にいい柿を食べる事が出來た。廣島の方の知人から、その地方の柿をおくつてもらへたし、北の方、福島の方からやはりその地方での柿をおくつてもらふことが出來て、居ながらにして、秋日田園の情調を、この一夥、二夥の柿によつて味ひつくし得た氣がする。甘くて、そして冷たいその柿の實の食べ心地のよかつたことは、今もはつきりと思ひ出す、私は柿をこのむ。

ある日のこと――それはやはり去年の秋であつた。

秋も末、十一月のことである。「まあ……突つついて食べてゐるわ」かういつて、家のものが、秋の陽ざしの溫かく照らしてゐる緣側にうづくまつて、ぢつと庭のむかうの木の上を見まもつてゐるので、私も見た。

その木は柿の木である。隣の家の柿の木なのであるが、梢が、ずつと私の家の方へとのびて來てゐる。そしてここかしこに、赤い柿の實――澁柿の實をささげてゐたのが、一つおち、二つおち、三つおちして、今度はもう、高い梢に、わづか三つ四つのこつてゐる、その一つの赤い實を、渡り鳥がとんで來て、とまつていかにもおいしさうに啄んでゐるのであつた。何とうらやましい空中の晝餐よ。私は、その時、心から鳥のやうな生活がうらやましかつた。どこから飛んで來たか、多分は武藏野のおもかげを今なほのこす遠い名しらぬ村の林や森などから、かうして秋の都をすぎてゆくその渡り鳥の仲間の一羽だつたらう。身も心もかるげに、その梢の小枝のささげてゐる赤い實に、くちばしをいくたびもいくたびもさし入れてほ、次には首を上にむけては、のみこんでゐる。繪にしたいやうなその風情であつた。

やがて、ぱつと秋の陽ざしの中を、どこへともなくその鳥はとび去つた。私は、ほほゑまずにはゐられなかつた。

秋は何といつても一年中の好季節である。私は、何度、こんな風に、いろいろな折に書いたことであらう。しかし

その美しい秋、このましい秋の日も極くみぢかい。いつしかに、風寒く、時雨にふけて、秋は寂しく逝くのである。私の家の芭蕉の葉もその時には破れるであらう。風あたりが、さうひどくないためか、いまだ、それはたいして破れないでゐるけれども、いつまでか、さうして破れないでゐるわけがあらう。やがて、霜が降り、綠の色はあせて、見るかげもなく破れ芭蕉はばらばらと破れ、つひには枯れくちてしまふのだ。私の運命のすがたも、この芭蕉葉に宿つてゐるであらう。何の未練もなげに裂ける芭蕉の心を、私は愛する。

秋の旅のかずかずのおもひで――秋の山、秋の河、また、秋の湖、秋の海、いろいろな時に見たここかしこでの秋の陽ざしは、今秋の心の中に寂しく照る。いつかは、秋の京都を味ふべく、そこで、一年たり、二年なり住んでみたいと考へたこともあつた。あの東山一體に漂ふ溫かい、うすい晚秋の陽ざしのながめは、いふにいへずはかないものではないだらうか。山秋あたりの野のみちに、黃ばみ枯れた雜草をふみつつ步くのは、心靜かな喜びでもあり、又、生きゆくわづかな時のまの寂しい慰めではないだらうか。

秋、心しづかに半生をふりかへるとき、そもそも我々の喜びはいくばくであらうか。悲しみの方が多くはないだらうか。しかし、とまれ、かくまれ、生命あつて、又も今年の秋を見るといふことを、多くの人とともにたのしんでみたい。それが寂しき果ての秋ならば、いやましにたふとい。

秋よ。豐かにこの世をいろどつてくれ。長く長く、世に生きながらへる人の心をなぐさめてやつてくれ。（昭和三年十一月）

子供のこと

或る叛逆者

私は子供が好きだ。子供のあの赤い頬つぺた、子供のあの彈けるやうな笑ひ、またあの生き生きした聲、あの兎のやうな脚の健かさ、狼のやうなエゴイズム、どれを考へ出して見ても愉快である。つい、見てゐてもほほゑまれてくる。第一、囚はれてゐないのだから氣色がいい。

笑ひたい時、彼等の口はもうほころびてゐるではないか。駈け出したいとき、もうすでに飛び出してゐるではないか。私たちは子供のもつてゐる「生」の力に壓迫されることもあるが、元氣づけられる點も多い。

私の知人に六つ位の元氣のいい女の子があつて、云ひたいことを云つてゐる。たとへば「お父さんは醉つぱらつてゐるのかしらん……」とその父親の元氣のない顏を見て叫んだり、實に罪がない。それで、その中にはちやんと批評があるのだ。だから子供は面白い。

×

この春、大阪に行つた折り、新聞社にゐる竹馬の友と話してゐたとき、友は子供の話をして、中學に行つてゐる長男をわざと一級落して、そのために大變成績がよくなつて喜んでゐると語つた。そして、自分の處世上の方針も、まづこの主義だと語つた。

それは立派な智慧だと私には思はれた。私も、それに相似た事を考へてゐた。次位の人といふ事を、私はいつも考へてゐた。片隅の人と、自分を思ひ定めてゐた。どうなりかうなり生きてゐられればそれでいいといふやうな殊勝な氣持で、この數年を過して來た。

こんな心持は、年若い人には分らないと思ふが、少し世の中に揉まれてくると、おのづと分つてくるであらう。いや、その外に生きて行く道のない事が、はつきり分つてくるであらうと思ふ。

實際、自分を殺す事によつて、自分を生かすのが、人生の一番聰明な處世法かも知れない。

×

友の家は寶塚線の沿線にあつた。その家庭を訪れて、その落着いた平和な空氣を、こころよく思つた。當時、自分が絶望的な動亂の中にあつたために、一層痛切にそれを感じたのであつたかも知れない。

子供に彩られた家庭は、圓滿な家庭だ。子供を中心にした生活は建設的な生活だと云へる。自分の生活をかへりみると、あまり建設的であるとは云へない氣がする。いなむしろ、常に破壞的に傾きがちであつた。

「君のやうに子供のない人には、人生の本當の味ひは分らないよ」と、曾つて美しい家庭を持つてゐる友のK君が、私に云つた事がある。それはきつとさうに違ひないと、そのとき私は深く心に肯つたのであつた。

大阪の友の家庭でも、私はしみじみK君の言葉を考へた。そして、自分がこんなに救はれ難い心持になつたのも、みんな子供のないためではなからうかと考へたのであつた。

×

だが、一方から云へば、私には人の親たる資格がない。子供のなかつた方が、どんなに自分にふさはしい事だつたか知れない。餘計な罪つくりをしないですんだ事は、どんなに良心の慰安であるか知れない。

私の父など、人の親たる資格のない人間だつた。そのために、私たち兄弟は、みな苦しまねばならなかつたのだ。自分の弱點や病所をそつくり傳へた子供をこしらへて、この世の中に立つて喘ぎ苦しませる……私はそれにまさる罪惡はないと信じてゐる。

しかしこんな風なことを考へるのも、子供がないからの事で、さて、實際、我兒となれば、よからうがわるからうが、それを養育してゆく。その間の消息は、又、特別のものであらうと思はれる。

私は靑年時代には、童話作家として立たうと考へてゐた事がある。アンデルゼンが一時この目標であつた。從つて、その頃は「子供」といふものがよほど念頭にあつた。子供のための讀みものといふものについて、かうか、ああかとよく考へてゐた。

しかし、今はすつかり離れて了つてゐるので、童謠、童話、いづれも出來にくい。第一、さういふ氣分になれないのだ。注意から、何か、たのまれてもついことわつてしまふ。

子供のためのいい讀物を書くといふのも、さう、片腕仕事では出來ないものだ。(いい加減なものなら論外だが)子供があれば、ひどい子煩惱になつてしまひさうな私が、こんなにも子供の問題から遠ざかつてしまつた。これは私の運命であつたかも知れない。私は今、自分の子供のかはりに、ほかの人の、友だちや知人の子供を愛したい氣持である。(昭和三年十二月)

一月二日

朝やや風邪の氣味なり。賀狀中に若き詩人H君よりの手簡あり、自分の最近の感想を評して、氷塊で造つた俎の上に、褌も無く大の字になりねころんでゐる感ありと云へり。午前中例日の如く醫者に行く、舊臘ぶりかへしたる腸の疾患の手當と、神經衰弱の注射とのためなり。余は今昆蟲の如く、二本の觸角をもて生死を摸索せるものなり。歸途、肴町の竹中書店に立寄り、主人と雜談す。自分の思想の過激化せるに主人も驚ける如し。ロオザ・ルクセンブルクの佛譯を求めて入り來れる紳士あり、岡田忠一氏なり。七八年振の邂逅なり。

歸家すれば、堀江朔の待てるあり、その詩稿を示さんとてなり。孤坐五年、彼また一個の禪人たるを得しか。白光

炎々の詩なり。余は冷氷人を凍らしむる底の詩を求む、彼は女の涙に和げられし詩をよしとす。わが三十七歳の夢、その涙も今は凍りたるべし。堀江、共に三上を訪ねんと誘ひしも、酒を禁ぜられたるを以て、これを後日に期す。次いで佐藤信重君來り、余が近什、明星影裡の一聯を唐紙に書かん事を求む。
夜、望月百合子嬢、めづらしく和装なり。嬢の言率直にしてよし、余やまことに憂鬱なるピエロなるべし。（昭和四年一月）

戀愛警句

どんなに熱列な戀愛でも意志の力で制御する事が出來る。
戀愛は非常にいいもの、同時に又非常につまらないものである。
つまり戀愛なんてものはランチでしかない。
嫉妬は戀愛に於て芥子のやうなものなり。
戀愛とは鬼ごつこなり。
戀愛の夢は、破られても破られても破られ切れないものである。
激しい情熱を求めてゐる間、それは非常に尊く思はれる。が、手にとつてみれば寧ろ煩はしいものである。ラヴ、即ちエゴイズム。
絶えず不安が伴へば伴ふほど、戀愛の氣持は新しくなる。
女はみんな娼婦で、男はみんな阿呆と野獸との混合物である。（昭和四年二月）

早春雜記

默殺

文學者にとつて、默殺ほどの極刑はない。漫罵や、惡評は、それにくらべれば、せゐぜゐ笞刑ぐらゐにしか相當しない。ことによると、逆の愛撫といつていいかも知れない。

ダンテの地獄におけるユダとなるのは、あの意味からは、最大の光榮である。「ただ見て過ぎよ」といひ捨てられるにまさる最大の侮辱はない。

罵倒は人を焦す、默殺は人を凍らす。

空氣のやうな存在――「ただ見て過ぎ」られる、それが十年續いたら、たしかに人は死ぬだらう。

しかも、默殺は孤獨な文學者の宿命である。生涯、何の黨派にも屬しないものは、この極刑のもとに死ぬであらう。しかし、さうしたあはれな文壇の無籍者、放浪兒ばかりでなく、一世の大家ですらも、その災厄から免れ得ない場合がある。

ゲエテといへば、およそ文學者として申分のない幸運をうけた人のやうに一般に信じられてゐる。けれども、ヰルヘルム・ボオデによると、一七八〇年代、イタリアの旅に上る前の彼の文壇的生活は、隱分寂寥なものであつたらしい。

アブト・エルサレムは、その著にわざとゲエテの名を拔かし、ゴムペルッといふ男は、レッシング、シュレエゲルから、クロネックとか、プラアヴエとかいふ我々の名も知らない當時の知名の戯曲家を殘らず列擧しながら、しかもゲエテ

を逸した。また、レッシングからヤコオビまでのドイツ詩人をあげて、ゲエテがゐるともいはなかつたものもある。

また、默殺しないものも、「彼は與へるだけのものを與へてしまつた」とか、「彼は今公衆にとつては沙漠のやうに荒蕪した」とかいつたといふ。

ゲエテでさへもこんな目にあつてゐるのだ。だがゲエテは大なる崇拜者を有つてゐた。その上、いふまでもなく、どんなえらい批評家であらうと、ゲエテを默殺し終る事は、絶對に不可能の業(わざ)である。

だが、わづかに人並の才能しかもたない小詩人、小作家は、どうであらう。默殺によつて見事に滅び去るのである。否、大なる獨創の才ですらも、そのために死に、あるひは傷つけられる。

ハインリッヒ・フオン・クライストは、文壇の默殺と、公衆の不愛好のために死んだのである。孤高傲岸のニイチエですら、山巓の寂寥のために呻吟したのだ。ただ一人の讀者にすら狂喜し、コペンハアゲン大學でのブランデスの講演に、最大の感謝を表せずにゐられなかつたのだ。

我國ではどうだらう。勿論、その例に漏れないのだ。社會的に聲名高かつた有島武郎氏すら、文壇的默殺には苦しんだあとが見える。氏の書簡を讀むと、隨分それを氣にしたところがある。「この頃の文壇の一角には、私に對するかなりに明著な反抗が起りかかつて居るやうです」（一九一八年、吹田氏宛）といひ、「いよいよ文壇では僕を默殺といふ事に方針をきめたらしい」（一九二〇年、足助氏宛）といつてゐるやうなところが、隨分ある。

實際、有島武郎氏の全盛時代に、氏は異端者として文壇から白眼視され、明かに默殺されてゐた。『或る女』が文壇から正當な評價を得たのは、氏の歿後五六年經つた最近の事だ。

文學者など、何と辯じようとも、所詮は名聞の子だ。虚榮の塊だ。文學者ほど人間性の弱點の上に身を立ててゐるものはない。賞讃せられても、さまでは有難く思はないくせに、ちよつとでも惡くいはれれば、胸に釘を打つた程に

こたへる。いつも賞讃は當り前で、非難は不當なのだ。（これは有島氏を念頭に置いていつてゐるのではない、氏はその弱點の最も少い人であつた）

だが、默殺はどうか、默殺に至つては、外に向つて苦情や抗議がいへぬだけに、二重にこたへる、堪まらない苛責――默殺地獄。

惡くいはれる事よりも、もつと惡い事が一つある。それは何にもいはれない事だと、どこかでワイルドがいつてゐる筈だ。

おもへば、文學も罪な業だ。一度この魅力にとらへられるが最後、どうしてもそれからのがれられぬ、どんなに苦しくとも、どんなに虐げられようとも、死ぬまでかじりつく。これが文學者の運命だ。

どうして文學なんぞの味を知つた事やら。

才を殺す

才を殺すものが眞の才人である。

才の範圍を超出するものが上乘の才である。

才に自得するものはまだ才の至らぬものである。

いはんや才をみせびらかすものをや。

自分は最も島崎藤村氏を畏敬してゐるものであるが、そして、その畏敬の理由は別に多々あるが、ここにも一つの理由がある。

この人ほどの才人は、明治以來の文壇において、自分のかつて見ないところである。氏の生涯と作品とを探求する

につれて、ますますその事をさとる。
しかも、誰あつて氏を才人と呼ぶものはない。さう呼んだなら、滑稽に聞えるだらう。
そこに、氏の並々ならぬ苦勞があつたのだ。
氏の一生は、ほとんど才を殺さんがための修業であつたかの觀がある。
才を殺す事によつて、その人格と作品とに澁い深みを增して行つた人である。その點、藤村氏は芭蕉に似てゐる。
芭蕉も才を殺しつつ生きた人である。そして、芭蕉以後、我々はここに島崎藤村を得たのである。少くとも、藤村氏ほどよく芭蕉の精神に學んだ人は少い。芭蕉と藤村の比較論評は、自分には興味深い題目である。
才人はその才を殺さねばならぬ。そして、殺して殺しきれぬものが、ほんとの才だ。「光を和らげて、なほ消し得ないもの、それが才以上の心のかがやきなのだ。

哲人の妹

『救拔の哲學』を著して、剃刀自殺を遂げたドイツの厭世哲學者フイリップ・マインレンデルの事は、芥川龍之介の遺書によつて、一般に知られるやうになつたが、彼の妹のミンナの事蹟は、あまり知る人がないやうである。
ミンナはおなじく哲學的傾向をもつた女で、兄の遺著「新救世主」を完成しようとして、貧困のためにそれを果し得ず、二十五歲で兄とおなじく自殺を遂げたのだ。
マインレンデルは最も正しい事を云つたのである。しかし、その眞理は人間の本能と反する。生の土臺の上に建てられてゐない。それゆゑ、彼は常に默殺され、無視されて、哲學史上に一つの地位すら得なかつたのだ。バアンゼンと相並んで、彼は永久の不遇者、孤獨者であるであらう。

しかし、そのマインレンデルにも、この妹があつたのだ。それが彼の唯一の使徒であつたのだ。彼女の生涯と死とは、その兄のそれよりも一層悲しくいたましい。自分はこの女の志しと愛とをあはれむ。

總じて外國の文學者と、その姉妹との友愛は、自分のいつも羨ましく思ふところである。パスカル、ルナン、ロゼッテイ、またニイチエ兄妹の如き……

自分にもさうした姉妹があつたらばと時々思ふ。だが、同胞などいふものは、現實ではわづらはしい事が多いだけだ、みんな靑年風な夢だ。

藝術家の誇り

人間には誇りといふものがある。その誇りが、人を生かしもし、殺しもする、岩本榮之助といふ大阪の實業家が自殺したのも、この誇りからであつた。人に頭を下げたくないからであつた。

この誇りの一倍熾烈なものが藝術家である。彼はその誇りのために、一切をあへて犧牲にするであらう。そして、この藝術家の高い誇りを考へずしては、芥川龍之介の死を理解する事は出來ない。

あの才能ある作家の死には、勿論健康の問題もあり、その他外部から窺はれない多くの事情もあつたであらう。が、根本は彼の誇のためであつたと、自分は斷然確信してゐる。

芥川ほどの男ならば、どんなにしてもつぶしは利く。大學の敎授にもなれたであらうし、文學的事業の上でも、小說以外、爲すべき事は十分に有つてゐたに違ひない。將來、生活に困るやうな事は勿論無かつたらう。然し、さうした生活は、彼には死に劣るものと思はれたに違ひない。彼は一流の作家としてでなくしては、生きたいと思はなかつたのだと自分には思はれる。

あの有名な言葉「漠然たる不安」とは、文學者としての地位と名聲と、作家的自信とに對する不安と解すべきである。即ち、文學者としての誇りのための不安に外ならぬのだ。

誇りなど、下らないものであるかも知れない。そんなものにとらはれ、左右されるのは、古い封建的な感情、あの武士は食はねど高楊枝的な、反時勢的な偏執であるかも知れない。

現代の特徴は功利主義である。唯物主義である。精神主義の北村透谷と對立した山路愛山の功利説は、今や完全に勝利を得た。プロレタリア文學は、この功利説にその脚を立ててゐる。そこから、目的のために手段を選ばぬジエスイツト的、ボルシエビキ的戰術が生れる。誇りなどといふものは、ブルジヨア的感情の殘存物に過ぎぬのだ。

この點で、誇りの高かつた芥川龍之介は、古い時代の潔癖を表白した人であり、恐らく彼の好んで用ひた「文人」個人主義の藝術境に悠遊する事を愛する人間の最後の聲を代辯する一人であつたかも知れない。

芥川氏の死の當初、久米正雄氏がこれを北村透谷に比したのを、當時淺薄な思ひ付きのやうにいつた人もあつたが、この見方からするときは、必ずしもさうはいへまいかと思ふ。

とにかく、誇りなどといふものは、厄介なもので、人間の業であらう。少しも誇りなど持たず、幇間のやうな心持で、乞食のやうな心持で生きる人が、かへつて達觀の士であり、より立派な心境であるかも知れない。

岩本榮之助も、人に頭を下げて、借金を片付けてもらつて、堂々と世に立つてゐた方が、よりえらい事であつたかも知れず、芥川龍之介も、藝術家的矜持を、自恃を傷られても生きのびてゐた方が、より強くてよかつたかも知れない。が、然し、人の誇りは瓦全よりも玉碎に傾く。玉碎はいたましい。然し、詩的であり、藝術的である。

貯金と借金

自分は一文の貯金もない。が、同時にまた一錢の借金もない。(書肆に對する前借は別だ)そして、この二つをつくらない事を、文學者としての自分のたしなみと信じてゐた。懷中はいかに素寒貧でも、大手を振つて世間を歩く事が出來ると思つてゐた。

然し、それは自分の世間知らずであつた。貯金を有たぬ事によつて、自分は大切な場合に恥をかかねばならなかつた。大いにのびるべき場合にのび得なかつた。自分は今にして、常識と世智に長けた中村武羅夫氏の貯金萬能論の眞理なるを悟つた。

借金においても、自分の考へは、たとひ全部ではなくも、一部分間違つてゐた。借金は一定の俸給や、所得によつて衣食する人にとつては、身の破滅ともなるべきものであらう。然し、活動的、進取的な人々にとつては、借金は一種の財産でもあり、力の表象でもある。特に、より積極的な活動の原動力ともなり得るのである。ヘンリ・フオードが、勤儉貯蓄をわらつて、金の運用を說いた意見は、結局は借金してでも大いにやれといふ事になるだらう。

然し、文學者は實業家や、請負師などではないのだから、借金は好ましいものでない筈だ。けれども、文學も今は殆んど一つの企業となつたかの觀がある。そして、企業であるならば、又、その企業的の意味の加はるにつれて、借金は文學者に對しても、その意義を發揮し來るであらう。

ただ然し、自分は性格的にそれが出來ない。あの堅實を持たず、この投資の膽力と機略を持たない。自分はそれを悲しみこそすれ、決して誇りはしない。が、善かれ惡かれ、自分はそんな人間だ。

高速度文學

今の日本の三十代の文學者ほど不幸なものはなからう。仕事をはじめたばかりで、もう總決算をやられるのだから。

何しろ驚くべきハイ・スピイドの時代だ。それでなくてさへ、性急な日本人が、其上性急になつてゐるのだ。テンポの早いこと、殆んど飛ぶが如くである。昨日の議論は今日はもう通用しない。昨日の傑作は今日は時代おくれだ。文學も新聞同様、一日でその用を果すやうになつたのだ。

今は五年、十年をかけて、大作を經營すべき時でない。それは一代の文豪にして、かつ堅忍不拔の意志の人である島崎藤村氏を俟つて、はじめて可能な事であつて。群小文士の企て及ぶべきでない。

既に經濟的に不可能なのである。手から口への生活に强ひられてゐる我等は、營々として蒼蠅の態を學ばねばならぬのである。自分は自分の品位を落とさざらんがために、どれだけ苦しんだか知れない。自己の貯金否定說を悔いたのも、またそれがためである。もつとも、はじめからその餘裕もなかつたのではある。

圓本は單行本の雜誌化であつた。今や、書物は學術書の如きもの以外は、雜誌にすぎない。今や、ジヤアナリズムは完全に文學を征服した。我々は虛名を擁するゴマカシの無能な新聞記者にすぎない。文學がその永久性を失つたならば、新聞記事である。そこで、自分は公然たる新聞記者になるだけの才能の自分にない事を悲しみ、文學といふ保護色のもとに自己の仕事をより意味づける欺瞞を恥づるものである。

然し、これは絶望であるかも知れない。然らば、この絶望から自分は勇氣を得たい。文學者としての自分の特別の意味を見出したい。苦しくとも、自分の道を歩きたい。速度はおそくとも、自ら信じて歩きたいものだ。自分は今、龜の如くのろのろ歩かうと歌つた武者小路實篤氏の詩を强く思ひ出してゐる。（昭和四年二月二十日）

東京の明暗

或る叛逆者

いつしらず幾度となく私の心にまた私の口にのぼる言葉は「東京はいやな處だ」といふ言葉だ。私にとつてこの東京は暗くわづらはしく、心のおちつかないところに感じられてやまない。

この日本の首都がその懷にいだくものは、いろいろの邪惡、奸計。そして多角的な惡の祭り、これは私の推察でもなければ、詩人的誇張でもない。各人各處で、どうしてもさけがたいものが、その惡の祭りだ。とにかくにも私はこの東京を惡女だとおもつてゐる。彼女は僞善で、華麗で、そして技巧に富んでゐる。そして人の靈性を賣買し、嘲弄しつづけてやまないフラッパアなのだ。

この黑い覆面の眞白な腕のフラッパアに押しつけられてゐるのがあはれな都會人士だ。暗い心は暗さに慣れる。しかし、時々その暗闇の中で、私たちは喘ぐ。解放されたいとおもつてうごめく。

いやな東京に一日だつてゐることはあるまい。一日も早く、どつか、いいところへ行きやいいぢやないか、かう單純に言つてしまへるならば問題はない。この大東京の持つてゐる魅惑はさうさう單純に捨てえられるやうなものではない。戀の遊びは遊びの中でも特に甘美だといふのだ。

私は空氣のいいところも知つてゐる。人情のあつい町も知つてゐる。しかし私はすでに禁斷の木の實を食べてゐるのだ。といふことによつて益々まつはり、まつはることによつて益々いとはしくなつてゐる。

人間はその親しいものによつてもつとも深く傷つけられるといふが、私もこんなにこの東京に傷ついてゐるといふことによつて、あるひは人一倍東京に結びつけられてゐるのかも知れない。

東京を立去るの日、私の住むところは他なし、それは、かなたの「死」であらうかもしれぬ。東京の明暗はまた私の心の明暗であらうかもしれぬ。（昭和四年三月）

春の熱海

春の海ひねもすのたりのたりかな

おだやかな春の日の波のほのかな美しさ、景情ともに自然と人生の平和を示すこの古人の句、それは思ふに、春は彌生の海のながめであらう。紫の波、紅の日、白帆二つ三つ、まれによこぎるものは沖とほき汽船のかげ、一すぢ糸をひく灰色の煙も、この清朗な春光の一天、名鏡の上に人の面のうつれども、やがては消えてあとかたもなき明滅に似る。

いつの年か、私は、伊豆の、かの温かい湯の町の熱海で、なごやかな海べのみちを一人ぶらぶらと歩いてゐたことがある。東京から履いて行つた下駄が、その前の日の錦ヶ浦見物の時に石にぶつつけて、歯をいためてたので、宿の近くの「やまとや」といふ下駄屋で、新しいのを買ひもとめ、すぐとそこではきかへて、そして、何だか、すがすがしい足の氣分を味ひつつ、海べを歩いて行くと、陸地の人のためといふよりも、海からやつてくる人、波の上とぶ小鳥のためにでもつくつたかといふ風な印象を與へるよしず張りの茶店が、私の前にうづくまつてゐる。いやうづくまつてゐるといふほど重くるしくはない。たこがはひ上つて來てゐるやうに見えた。丸太を荒繩でしばつた手すりの下には、波がよせたりかへしたりしてゐる。そこにゐるのは一人のぢいさんで、僅かのかごの蜜柑をならべ、鹽せんべいをならべてゐるのだつた。ほかにゐるのは宿のどてらのままの青年が一人、犬が一びき、それと、ふと立止つた私だけだつた。

「あれが大島かね」

と、青年がぢいさんにきく。

「煙がよく見えないね」

すると爺さんは、風によつて、よく見える日と淡い日とがあるのだといふことなどを話してから、ここの名物のいか釣りをもう見たかといふやうなことをきいてゐる。私はそこをはなれて、又もやゆつくりと歩き出した。そこらは、横磯といはれてゐるところだつた。ものの半町もゆくと、もう一つ私の前に現れるものがある。

それは尾崎紅葉山人の作『金色夜叉』の碑である。老松と、若松とがこの碑のそばに枝を垂れてゐる。これは海からはひ上つて來て腰かけてゐる海盤車のやうだ。ところで、私が、その碑を行きすぎようとすると、おもひもかけず、人間が一人出て來て、にこにこして聲をかけた。

「お寫眞をひとつ、おとりになつてはいかがでせう……」

つまり、この男は、ここで、客待をしてゐて、新婚の人なんかを見つけては、記念の寫眞をすすめることによつて生計をたててゐるのだ。

「いや……」

かういつて私は、通りすぎたが、ふと考へると、金のために金色夜叉式の結婚したりした人が、ここで、あんな風に、寫眞屋にいはれたりすると、なんぼうか赤面だらう？　たとへ赤面しないまでも、こそこそと新郎の袖をひつぱつてとほりすぎて了ふだらう。金色夜叉に扱かつてある問題は、今は既に古いとはいつても、やはりいつまでもくりかへされるであらうところの、人の世の悲劇、あはれな女性の迷ひででもあるのだ。金か、愛か、金に傾倒するものもあり、愛に傾倒するものもある。愛あるものは金に乏しく、金のあるものは愛に乏しい。それは古今東西一樣の人間葛藤の基であらう。

私はやがて、道を右まはりにまはつて、伊東、下田がよひの汽船發着所の近くの磯に出た。そこらの小石は、汐にそまつて赤黑くなつてゐる上に、ここの附近の漁夫の網が乾してある。その網の上に陽ざしが柔かい。七十位のぢいさんが、うつむいて、わきめもふらず、網のつくろひをしてゐた。ちよつと何か聲をかけたいやうな氣持がしないでもなかつた。カメラをもつ人は、ここらで二三枚とるであらうなどと思ひつつ、少しひきかへして、今度は右の方の細い道の、やや傾斜のひどいのを上つてゆく。

人も知るごとく熱海はあたたかい土地である。もうここかしこにびろうどのやうな靑い草が、簇つて、敷いて寢ころぶのには丁度いい。頭上の櫻のつぼみはもうふくらんでゐるのだ。この櫻の花の滿開になる日までゐたいものだなと、慾も出てくる。といつて、ここで住まうなんてことはあまり思はない。住めば都といふこともあるが、人間社會に棲息する以上、みな自分の職業といふことを考へなくてはならない。幌馬車一つで、町から町へ、村から村へとさすらふスペインあたりのジプシイの生活は「樂しからうとおもはれるが、また苦しからうともおもはれる。さすらひといふことは、夢として考へるときは美しいのだ。夢としてのみ考へなくてはならないところに、私たちの理性の悲しみがある。

徑をのぼり切ると、そこは空地で、傍に、水がしとしとと夢をぬらして流れ下りてゆく。どこかの家の下水ででもあらうかとも思はれる水も、かうして新しい夢をひたして流れてゆくところは淸水のおもむきがある。なほ捨石としては上等すぎる石のかなり大きいのが、ここにかしこに据ゑられてゐて、この三十坪位のひろさの空地が、何だか「廢園」の感じを與へる。「春の廢園」それは詩として考へるとき、ほのかな春の哀愁をともなふ。海のながめはここから見ると、洗練されたながめといへる。それは練絹のやうに整へられた感觸だといへる。波の音も勿論きこえる、波のうねりも勿論見える。しかし、下の道で見たときのやうに荒くない。何となく、うはぐすりをかけられたもののやう

に見える。つまり、「距離」が美化する海の美だ。ここでかうしてぼんやりと沖を見てゐて、初めて私は「春の海ひねもすのたりのたりかな」の妙諦を看取する事が出來た。（昭和四年三月）

五月緑の日

旅心と自然愛

朝、小用に起きて見ると、かはやの窓に、朝の陽かげがあざやかに當つてゐた。

それを見ると、どこかの宿屋にでも泊つてゐるやうな氣がした。朝おそい自分は、家ではこんな朝日を見る事など、ほとんどないのだが、旅に出てゐるとおそろしく早く眼がさめる。一體、何處の宿屋でも、朝早く、ガラガラと雨戸をくりあけるのが普通で、この騷々しい朝の音樂は、それでなくとも目ざとくなつてゐる旅人を、あわただしく呼びさまさずにはおかない。それは怠惰な旅人の苦情の一つだが、家居に飽いてゐるものにとつては、それすらもなつかしく思ひ出されて、自分も庭の楓の若葉にちらちらする陽かげを見ながら、旅心がしばらく心の中に動いた。

が、昔のやうに、無反省に旅を思ふ事はもう出來なかつた。自分の心は、もつと突きつめたものになつてゐるのだ。おもへば、旅は長いこと、自分の病であつた。また、自分の息苦しい生活の救ひでもあつた。が、今の自分にとつては、それはあだかも色女を思ひ、美食を思ひ、榮耀榮華を思ふのと一般で、これを語つてならぬ理由はないと同時に多少の恥なくしては、人に語るべき事ではないのである。旅もまたプチ・ブル的な贅澤に過ぎないのだ。プロレタリアには、場處の移動といへば、放浪の外はない。それは「流れ」るのであり「渡り」歩くのである。所詮、止むを得ざる受動的移動である。自分も十年、さうした放浪の少年であつた。

旅を思ひ、自然を思ひ得るやうになつたとき、自分もある意味で、郷黨の成功者となつてゐたのである。が、今自分は、かやうな文士生活の自得を恥づる。少くとも、さうした温泉場で自然愛を説いた自分が浮薄な思ひ上つた人間として映ずるやうになつたのだ。

近く、人から某氏が、文藝の士の自然愛を失つた事を慨した一文の大意を聞いたとき、自分は不思議な疎隔を感じた。過去の自分ならば、一も二もなくそれに同感したであらう。が、今それは自分にとつては、あまりに安易な考へ方のやうに思はれるのだ。が、それを云ふのが、地主様ならば格別問題はないのである。

自然を愛するのは悪い事では勿論ない。同時に、自然を愛さなくつても差支はないのだ。文藝の士とても、生活の比較的らくであつた明治末期や大正前期と事變り、萬人みな死物狂ひの昭和の時代に生きてその時代苦に當面してゐるのだ。今や、自然を愛する餘裕すら有たぬ人々のいかにおびただしきかを思ふとき、何の自然愛ぞやである。一日、汗水たらして田圃で働いてゐる百姓達は、都會詩人の田園讃美を冷笑してゐるのだ。しかるに、さうした働いても働いても食へない百姓の中に生活しながら、無條件に自然愛を叫ぶ事は、些少たりとも人間生活に關心を有つ詩人に許さるべき事であらうか。

西行、芭蕉、良寛は、今も自分の愛好の詩人である。だが、彼等を愛好するとても、自分は彼等の生活を現代に反復しようとは思はない。また、思つても無益の事である。

自分は最近、ある地方の靑年から、良寛に傾倒してゐたが、この頃その事に疑ひをもつて來た、どうしたものであらうかといふ訴へを受けた。もつともの事である。良寛の存在は、現代に於いてすらも無意味ではない。かの超脱境は、消極的な生存苦の克服であるから。だが、その境界は數十年の修業のもたらした成果である。そして、その修業たるや、良寛に關する書物を渉獵するといふやうな、なまやさしい事ではないのだ。その過程を無視して、その濟美たる

遊戯三昧にのみ陶醉するのは、恒産ある人にとつては、幸福な晩酌の一本でもあり得よう。が、無産者にとつて、また些少たりとも時代的關心をもつものにとつては、かかる逃避は斷じてゆるされない。今や、我々に許されるのは、死か、鬪ひか、二つに一つである。

竹馬乘りの危險

子供といふものは、竹馬に乘るのが好きなものだ。あぶないからよせといつても、いつかなきく事ではない。世には聖賢の書でなければ讀まないといふ人がある。一應もつともな事のやうであるが、危險はその向上心の中に伏在する。彼は容易に竹馬乘りの子供になつてしまふのだ。

朝にもゲエテ、晩にもゲエテ、ゲエテの友達になつたつもりで、群小文士を睥睨してひとり快とするのも竹馬乘りだし、マルクス、レエニンを鵜呑にして、舌の上の極左を誇るマルクス・ボオイも竹馬乘りだ。

一體、本尊がなくては一日もやつて行けないのは、日本人の通有性だが、これは同時に、日本人ほど竹馬乘りの名人はない事をも示すものである。

竹馬乘りは面白い。だが、落つこちると、あぶないぞ。

神々

神々の數は限られてゐる。その限られてゐる神々が、民衆の上に君臨するのだ。それが、この世界の不變の現實である。

政治上にいはゆる寡頭政治、それは一切の社會に適用せられる。時には、寡頭政治の外觀の下に、獨裁政治が行は

れる事もある。が、政治なるものは、その本質から云つて、一つの欺瞞である。故に、民主政治といへども、實は、概ね寡頭政治である。しかも、アナキズムはあまりに高い理想であつて、政治は常に地上を支配する。人間の集合體は即ち政治の母胎である。

かくて神々が現れ、神々が爭ふ。フランス革命は、この神々の權力の爭奪のために血を流した。近代のデモクラシイすら、投票制度の外觀のもとに、少數者の支配欲を滿足せしめるのである。ボルシエビヴイキが、スタアリン等の少數の神々を有つのは毫も怪しむを要しない。

かつては文壇にもそれがあつた。十人位の神々の非公式な託宣が、一切を決定した時代があつた、また、詩壇にさへも、薄弱な神々があつた。政黨や會社は、もとよりその神々の領だ。

神々を斃せ。ただ、別の神々を据ゑんがために。かくて「ダラ幹！　ダラ幹やめろ！」と、あらゆる勞働組合に於いて叫ばれるのだ。

おもふに、人間は永久に、この叫びを叫ぶであらう。

岩野泡鳴

——岩野泡鳴氏の記念會の企てを聞いて——

大杉榮は岩野泡鳴を評して、偉大なる馬鹿と呼んだ。

何故に偉大なる馬鹿であつたか。泡鳴は大杉榮から見て、濟度しがたい人物だつたからだ。彼は日和見をしなかつた、自己を過信した。獨斷と誤謬をすら、斷乎として固守したからだ。

上司小劍氏が、蟹の罐詰の中に紙を敷く事に氣付かなかつた事を以て泡鳴の全生活を象徴してゐるやうにいはれた

のは正しい。蟹の罐詰の製造を企てて、北海道、樺太まで飛出して行つた泡鳴は馬鹿であつたらう。その罐詰の中に、紙を敷かないで失敗した泡鳴の馬鹿は確かに偉大である。

一生、文壇から正當な價値を認識されなかつた泡鳴は馬鹿である。やうやくその茫漠たる輪廓を、茫漠たるながらに、多少人に印象づけはじめた時死んでしまつた泡鳴の馬鹿は偉大である。それは、ドン・キホーテの悲しい死である。そして、彼はその死後、正當に認められたらうか。自分にはさう思はれない。この人ほどその眞價を認められないでゐる人はないのだ。たとひ人並の地位は與へられても、その本質を理解されないで終つた人は、すべて認められなかつた人なのだ。

岩野泡鳴の偉大を理解すべく、今日すらなほ、いまだ時は熟してゐない。そして、その偉大たるや、勿論馬鹿としてでなく、最も個性的な詩人、最も獨創的な思想家としてである。

自分は思ひ出す、あのミカドの詩話會上の泡鳴氏を。當時、自分の詩集が數十版を重ねた事は、詩壇の或種の人々にとつては、輕蔑すべき事であつた。そして、その輕蔑がいろいろな形で表白されてゐたとき、ひとりそれを喜んでくれて「長い間苦しんで來たのだから、それ位の事はあつてもいい」といつてくれた先輩は泡鳴氏であつた。これは自分の個人的な事柄であるけれど、泡鳴氏の公正な超俗的人格を、この時ぐらゐ強く感じた事はなかつたので、敢て玆に書くのである。

もつとも、こんなところが、詩壇的に人氣の惡かつた自分などに好意を示してくれたやうなところが、泡鳴氏の偉大な馬鹿であつた所以かも知れない。今や、偉大なる馬鹿はない。小馬鹿すらもない。損得の打算に鋭敏なる人々はあつても、紛々たる小感情や、些細な競爭心に超然たるこのやうな詩人、文學者はない。また、そんな人はその存立すらも許されない程、世間は世智辛くもなつて來たのだらう。

泡鳴を偉大なる馬鹿と呼んだ大杉榮も、一部の人の思つてゐたやうな、當世風の利口者では決してなかつた。あまりに俳優的才能に惠まれてゐたがために、不慮の死を招いたのは、利口者とはいはれない。しかし、そこにアナキスト等のいはゆる「我等の大杉」の偉大さがあつたであらう。

岩野泡鳴も、大杉榮も、自分にとつては、愛顧を受け、恩を蒙つた先輩である。自分は貞德のやうに殊勝な『戴恩記』を書く代りに、さうした先輩に楯ついてばかり來た。少くとも、恩を報ずる事を知らないで來た。それも自分の悔みの一つである。

偶然手に入つた書物

我々の最愛の書物は、しばしば偶然の機會によつて、我々の手に入る。かやうな書物が、しばしば我々の生命に光を點じ、我々の生涯の伴侶となる。

かやうに、ショオペンハウエルの『意志と表象としての世界』はニイチエの手に入つた。彼は古本屋の店頭で、ほこりまみれのこの書を發見して、つひにこれをその哲學の出發點とした。ヘッベルもまた、この書を同樣の方法で發見して、これを知る事遲かりしを歎じてゐる。かやうに二人の熱心な讀書子が期せずして同一の方法でこの哲學者を知つたといふ事は非常に興味がある。これによつて我々は、ショオペンハウエルが、いかに默殺哲學者であつたかを知るのだ。

偶然手に入つた書物は、しばしばたふとい。だが、偶然でなければ手に入り難いやうな書物の著者は、不幸にして常にかの哲人の如く、その書の普及するまで長命し得ないのだ。

宿命の人

世には死を以てでなくては、その著書を生かし得ない著作家がある。オットオ・ワイニンゲルの如きその種の人であつた。彼の天才的な著作「性と性格」は、その出版後一年、何の反響もなかつた。若年の著者が、自らその頭腦を貫いて死んだ後、人は始めてその書に注意しはじめた。

生時は無、死ねばすなはち全。

熱望してゐる時は得られない。得られたときは何とも感じない。それが人生の約束である。三寸息絶えては、抑も何を感じよう。ゆゑにすべてを與へられるのだ。かくて時人は、生前鞭うちつづけた詩人の墓を、花輪を以て飾る。

孔明と仲達

ある文學者の名聲に對する反感はその人の死と共に消滅するやうに、普通信ぜられてゐる。しかし、事實は、同業者的反感は、死後の名聲に對して一倍するのである。少くとも、文學者にあつては、その生と死とは、さしたる關係もないのだ。

何となれば、文學者においては、常に死せる孔明、生ける仲達をはしらすからである。

哲學と人生

哲學の效用は、人生を複雜たらしめるにあり。分り切つた事を分りにくくするにあり。人間生活の要旨は、複雜を單純たらしめるにあり。面倒臭い事を簡便にするにあり。

哲學は生活の終つたところに始まり、生活は哲學の廢墟に繁茂す。

哲學するものは生活せず、生活するものは哲學せず。生活者は哲學をも行爲たらしめ、哲學者は生活をも理論たら

しむ。

飽食者の夢

形而上學とは――飽食者の夢のことだ。古代のギリシヤ人はすばらしい夢をみた。なぜならば、そこでは氣候が溫かくて、人は無花果の葉蔭に橫たはつて、その實を食ひ、生活難に脅かされるおそれがなかつたからだ。

現今でも、この貧寒な日本の國でも、形而上學を專攻する人は少くない。が、その人達は、きまつて住心地のよい文化住宅と、確實な銀行の預金帳とを有つてゐる。

一線

生は無限である。欲望は無限である、從つて苦惱は無限である。

ある日ある時、我々はそこに一つの限界を劃しなければならぬ。

佛陀一生の難行苦行も、ただこの限界の一線を劃せんがために過ぎなかつた。(昭和四年五月十三日)

海との結婚

彼と海との結婚……

さういふ題目で語つてもいい。或るダダイスト詩人が、海へ落ちて死んだ――八月の炎天の太平洋の中へ。

それは自殺であるか過失死であるか、誰も知らない。ただ、海と空とが上と下との二つの大きな眼が知るだけだ。

彼は魚を釣るとて、岩角に立つてゐた。數分の後、忽然として、彼の姿はそこになかつた。ただ、それだけだ……。
波は聲高く吼えてゐたし、飛沫は岩壁に白く亂れてゐた。
死體は上らなかつた。首だけが上つた。生首が波を眞紅に染めて浮んだ。海底は岩ばかりの處だつたので、落ちた拍子に岩角で首が切斷されたものらしい。
それは恐らく物凄い光景であつたらう。これを聞いた或る評論家は、天才的な死だと云つた。
「過失でせうな」
何ケ月かして、追悼會の席上で、一人の靑年が云つた。「海の方へ來ないかと、僕、さそはれたのですよ」とも云つた。
「自殺だらうな」
かう中年の人は云つた。このダダイスト詩人が、生前、方々へいろいろ迷惑をかけた細目を話してから。
さういふ席上の話を聞いて、自分はやはり中年の人の見方に同じた。過つて落ちさうな危險な岩角に立つたのは、旣に自殺的行爲ではないか。
彼は發作的な男だつた。瞬間、ええ糞を！と、絕望的勇氣が、海の魅惑の上で、火花のやうに迸つて、彼はひと思ひに飛込んだのではあるまいか。旣に、その飛躍の準備は出來てゐたのだ。
そもそも、彼がそんな太平洋の孤島にまで――それは下田沖の神子元島である――渡つて行つたのは、謂はば社會に追ひ詰められたからではないか。彼にはつひに、この小さな孤島の岩角の一片しかあまされなくなつたのだ。それからさきは、ただ、海だけだ。
フロオベルの『サランボオ』で、傭兵の大將マアトオ(？)が、一軍を袋の鼠にされて、囚はれて、復讐に燃えるカ

ルタゴの市民の列の間を、その一人々々から傷つけられながら死んで行く。あれこそ、不幸な人間の象徴である。そしてすべての自殺者は、マアトオの死を死ぬのだ。自然に、社會に、運命に、追ひつめられて、打ち殺されるのだ。彼の死も、その悲しい敗北の一つに外ならない。

　彼は小德喜有次といつた。自分の鄕國、境の港町に生れた。性格破產者といふより、むしろ畸形兒と云つた方が當つてゐよう。彼は或る大雪の日に、ガタガタふるへながら、自分の家へ飛込んで來た。飛込んで來て、そのまま動かなかつた。後には、弟たちのゐる家に、ごろごろしてゐたが、歸國するといふので、旅費を出してやると、それを貰ひに來て、玄關で突然ワアワアと、子供のやうに大泣きに泣いた。

　その純眞の泣聲が、今も耳にはつきり聞える。その子供のやうな泣聲は、太平洋の眞中の波の音とおなじものだ。泣かずにゐられぬ、音立てずにゐられぬ自然の叫びだつた。

　波の音、彼の泣き聲……その二つが一つの音となつて、自分の耳の中に流れる。自分もいつかはワアッと泣くだらうか。泣いたら自分の胸も解放されるだらうか。

　彼は今、幸福だらう。つひに安住の地を得たらう。他人に迷惑をかけて廻らずにゐられなかつたのは、彼の不幸だ。今、海がそれを受取つた。海は自分や、その他の彼の知人のやうに、彼を追出しはしないのだ。

　彼が生前、自分が家に來る若い女たちを誘惑してゐるといふやうな事を云ひ歩いてゐると聞いた時は、自分は少々あきれた。が、若い女性が自分の家に出入してゐるといふだけの理由で、いはれのない憎惡を自分は隨分受けて來たので、それはまだ笑つてゐられたが、その女性の一人を、少女の時にヴアジニテイを奪つた事を楯にとつて、脅迫してゐると聞いた時は、少しあさましくなつた。が、それも彼としては、最後のたのみの綱であつたかも知れないと思ふと、あはれである。そして、今は困つた男だと云ふ代りに、自分には彼の平安を羨む氣持のほかはない。彼も苦しみ

から救はれた……

夏になると、人は海の誘惑を感ずる。海と遊びたくなる。中にはこの不幸な青年のやうに、海と結婚式を擧げるものもある。彼はハイネの歌つた北歐の王様のやうに、海の花婿となつたのだ。

ユリセスは耳に蠟をつめて、サイレンの誘惑を免れた。海は魔女だ。陸のものをその魔窟へと誘ふ。あらゆる魔窟と同じやうに、そこにはこころよい醉ひと眠りがある……

あるとき、他のある詩人が、ある女性と死を語つた。一體、詩人といふものは、とかく女性と死を語るのが好きなものらしい。詩人と昵近になる位だから、さうした女性も、異性と死を語る事を好むらしい。いや中にはただ語つたばかりでなく、サイレンのやうに、詩人を死へ引込んだ女性もあつた。

詩人はさまざまの死を考へてゐた。彼は死ぬ事も詩を書く事と同様に心得てゐるのだ。して、彼が最も好きなのは、シエリイの死であつた。クライストやワイニンゲルの死のためには必要な武器が缺けてゐたし、ネルヴアルや有島武郎の死は、まづ避けたかつたし、芥川龍之介の死も、かなり面倒な手續きが要つた……すると、彼女は水をえらばうと云つた。それが偶然彼と一致した。

二人は海との結婚を話した。然し詩人はダメな詩人だつたので、皮肉になり、理知的になつた。その場のセンティメンタルな芝居がかつた光景と、死後の友人達の言葉との想像が、彼の心を白けさせた。そして、彼はスタンダアルの『スウヴニイル・デゴテイズム』中の或る章句を思出してゐた。

スンタンダアルは、ミラノで、英吉利のブラハム卿と自殺を談じた事をそこに書いてゐた。卿があらゆる新聞が自殺を報じて、その原因を探らうとて、我々の私生活を搔廻す事を考へる。とそれだけでもう自殺するのが厭になつてしまふと云ふと、スタンダアルは、漁夫の小舟に乘つて、海へ釣りに出て行く習慣をつくつて、嵐の日に、偶然のや

うに海へ落ちて了へばわけはないと答へてゐる。そして、こんな計畫を、自分は或る時代に抱いてゐたのだと、スタンダアルは附記してゐた。

然し、スタンダアルは、遺言狀だけで、自殺の誘惑を切り拔けて、巴里の鋪道の上で卒中で斃れた。シエリイがそれをやつた。シエリイの死は、自殺ではなかつたらう。然し、シエリイの詩の中には、海の死が豫告されてゐた。海の彼方の理想郷に對して、しばしば小舟が用意されてゐた。シエリイの復歸する元素としては、水はもつともふさはしい。殊に、自殺でないのがいいと、詩人は思つたが、ふと顏を上げて相手の女性に笑つて云つた。

「だが、二人で海と結婚するのは少々をかしいね……」（昭和四年七月二日）

嵐の中の蝶

嵐の中のごと……

×

ただ、それきりだ。そのあとはない。ただ一句。が、ただこれだけでも、自分の云ひたい事は云へてゐるつもりだ。嵐は轟々と吹きたけつてゐる。草をも、木をも、家をも、山をも吹き飛ばさん勢ひだ。その中に、落花のやうに、紙片のやうに飜つてゐる一羽の蝶！

蝶は飛んでゐるのだらうか。いや、吹き飛ばされ、吹き漂はされてゐるのだ。瀲灡の中の小舟のやうに、揉まれ揉まれて、息も絶え絶えに、なほ今一度、身をたて直して、飛ばうと必死になつてあがきながら。

然し、もう飛べない。春の微風の中に、へんぺんと飛びさまようたのは、むかしの夢だ。この大嵐の中に、何で飛

べよう。ただ飛ばされるばかりだ。

五月、薔薇が蕾をもつたとき、そのやはらかな芽生えのところに、毛蟲が這うてゐた。毒々しい色彩をもつた此の不氣味な蟲は、美しい花園に、その存在を許されなかつた。蟲は人の手で挾み捨てられ、燒き棄てられた。その蟲の口からまぬがれた薔薇が花咲くとき、その人手からまぬがれた蟲は、蝶となつて、空を悠揚と飛んでゐた。

今、薔薇は散つて、土の上に土となり、蝶は風に漂ふ一片の塵である。

かの日、蝶となり得たのは、幸運であつた。今、蝶である事は、何たる受難であらう。一度び風にたたき落されたならば、翅破れ、姿傷ついて、空しく蟻の餌食となるのみだ。

×

昔、俊秀な青年は、哲學の迷路に惑ひ、人生不可解を叫んで死んだ。今や、多數の青年は、社會問題の思想と實行との巖角に觸れて、難破するのだ。實際運動に入れない絕望から、自ら命を絕つたインテリゲンチヤが、今やいかに多い事か。自分の耳にしてゐるだけでも、決して尠い數ではない。

勿論、中には世の實際的な事情に迫られての脫走を、思想的破綻に名を藉りてゐるのもあらう。曾ての若き死に、哲學の美名の應用せられたのと同じやうに。然し、それすら全然藉名に過ぎぬであらうか。それを斷言する人は、既に心の肌へ硬ばつて、青年の純眞な感情の動きを感じ得なくなつた人であらう。

青年の純眞な心は、かつて妥協と糊塗とを知らない。常に事物に當面して、敢て回避する事を欲しない。老成した心は、何處かの安全な避難所に、嵐の通過を待つであらう。が、青年はそれを卑しとする。彼は身を挺して、理想に殉ずるのだ。そして、いろいろの事情から、それの許されないとき、彼の苦悶と自責とは、彼の心をうちから嚙み破るだらう。

然し、老成した心にも、避難所があるだらうか。今、自分にはさう思へない。嵐は全地だ。大木は根柢から震撼してゐる……インテリゲンチヤは、不幸にも、それを一刻も感じないではゐられぬのだ。

嵐の中の蝶よ。それは自分の運命であり、今の自分の姿だと思つた。が、それはひとり自分ばかりではなく、今の時代の疾風に悩んでゐる大部分のインテリゲンチヤの免れ難い運命の姿であつたのだ。

然し、インテリゲンチヤ悉くが、か弱い無意志の蝶ではない。いつであつたか、一週間ほど、自分の家に泊つて行つた×××の青年闘志B君――假りにB君としておく――のやうな人もある。この人は自分の今迄知つた多くの青年とは、すつかりタイプの違つた人だつた。彼は危險の中に、晏然として高談放語してゐた。そして、當時或る爭議に關はつて、鐵道自殺をした或るコンミユニストの死を聞いて、コンミユニストは自殺などしない筈だと云つた。

自分は今かうしたタイプの靑年の澤山出た事を知つてゐる。そこに、新しい日本の希望がある。が、概してインテリゲンチヤは弱い。精神はいかに强靭でも、肉が弱いのだ。銳敏な神經をもつた人ほど弱い。獨房の無爲に狂氣した人の例も相當あるのだ。そこへ行くと、勞働者は强い。少々ぐらゐの事ではまゐらない。圖太い神經と、頑健な肉體とは、嵐の中に立つために、最も强い支柱なのだ。

それを思ふと、ただ絕望あるのみだ。その絕望から、或る靑年は死んだのだ。

×

もう懷疑の時代は過ぎた、苦悶の時代は過ぎた。今や、行動の時代であると云はれてゐる。それに違ひはない。今はB君のやうな活動力をもつた人の時代である。然し、萬人みながB君のやうにはなれない。人はそれぞれその性格と天分とを異にしてゐる。人間は機械ではない。無意志、無性格に廻轉するだけではゐられない。行動は望ましいが、盲動は望ましくない。そこで、行動の前には、まづ思索がなければならないのだ。

然し、同時に、一生思索に終るならば、それもまた悲しむべき事である。書棚を背後に、萬卷の書を擁して、解放運動を談ずるといふ生活は、必ずしも良心ある人の晏然たりうる生活ではない。曾ての書齋から街頭へといふ叫びは、その不安の發したものであらう。かの篤學の教授が、講壇を下つて、政治運動の渦中に投じたのも、その必然の要求からであつたらう。しかも、玆で我々は要求と天分との間の痛ましい齟齬を見る事はないであらうか。

文學か實際運動か。これが十餘年前の我々の問題であつた。自分の二十三四歳のころは、堺利彦氏か故大杉榮氏の門に出入して、自分が最もラヂカルになつてゐた時代であつたと同時に、またこの選擇に當面した時代であつた。その時代の記念として、自分の詩集には『馬鹿の歌』が殘つてゐる。

　　ミイラとなりて千年ののちに殘らんか階級戰の塵とならんか。

　思ふだけで滿足出來なかつた大阪の與力のふみのあはれたふとし

といふやうな歌だが、これは思索と行動と、文學と實際運動との撞着を歌つたものに外ならない。

かうした自己分裂と不決斷とは、ひとり自分のみでなく、當時の靑年のかなり多くの惱みであつた。自分が生活上に抄からぬお世話をも受け、思想上の啓發をも受けた恩人の堺氏の如き、自らすぐれた文章家でありながら、或る意味の、文學否定論者であつた。少くとも、藝術功利說を執つてゐられたやうに思ふ。いつであつたか、さうした見解の相違から、何かの會合で（安成二郎氏の祝賀會？）德田秋聲氏と一場の應酬をされたこともあつたかに聞き及ぶ。然し、これは一堺氏にとどまらない、ソシアリスト共通の見解であつたと思ふ。そして、勿論、自分もその影響を受けて來た。自分の文壇的罪過の一つとなつた文學の意義に對する疑惑說の根本は、そこから發してゐたのだ。だが、自分には強くそれに反撥する一面があつて、そこから自分と自分との嚙み合ひがはじまり、どつちつかずの中腰の負相撲となつたのだ。

然し、今や、プロレタリア文學運動は、完全にその地盤を獲得しえて、アヂ・プロ暴露戰術の理由づけが行はれ、十餘年前のあはれな犠牲者どもの無用な苦悶を嗤ひ得るやうになつたのは、祝福すべき時代の進轉である。かくして、無産派文學者、文學と實際運動とを一如たらしめ、インテリゲンチヤは、その尖端的使命による自己の存在理由を明かならしめるに至つた。そして、有島武郎氏の『宣言一つ』は、輕井澤の死によつて終つた……

×

自分が未知の友から受取る手紙が、最近、從前のものとは、少しく內容が異つて來た。それはみな、自分の將來に異常な期待を寄せるタワリシチ的の激勵の言葉である。その中には、自分の『靈魂の秋』や『感傷の春』を讀んで、プロレタリア詩人ハイネを俺達に讀む機會を與へてくれた詩人の思想に愛着を覺えてゐたが、その近年の思想の流れには不滿を感じてゐたといふのが大分あつた。それは自分のこの近年の宗教的傾向をさすものであらう。その、不滿こそ自らの不滿である。恐らく、自分はこの場合ほど、より大きな間違ひはしなかつたと思ふ。宗教的精神は、今なほ自分は否定しようとは思はない。が、その形骸にとらはれんとした事は、一期の不覺であつたと告白しなければならない。が、これはなほ詳細な說述を要する事だ。

また、或る友は、自分の最近の詩を賞讃して「强い！　これこそ俺達の求める戰の爲めの詩である。かのドイツに於けるハイネの如く、兄のバクロ・アジ・プロの詩の生長を心から望むのです」といひ、ア・シヤボワロフの『マルクス主義への道』に書かれてゐる、シベリア流刑に遭つたロシアの同志の生活の中に、常にハイネの詩のあつた事を注意してくれた。

それらの手紙は、自分を感激せしめた。と同時に、自分の心の底に云ふべからざる悲哀の情を起させた事を、敢て云はねばならない。そして、これは何故の悲哀であつたか。嵐の中の蝶の悲哀である。力盡きなんとするものの悲哀

である。

今こそ二倍も三倍もの力が要る時だ、大切な時に、以前の半ばの力すらもない。頭腦は全く混濁した。集中力は失せ、自分の精神は、丁度彈機の弱つた機械のやうに弛んでゐる。これは疲勞と消耗の徵候だらうか。同年輩の友人知己に訊くと、みな疲勞を語らぬ人はない。が、みんなは自分ほど弱つてはゐないやうな氣がする。それは恢復する疲勞にすぎない。自分はただ疲勞しただけだらうか……

自分はそのなすべき事に、まだ殆んど手さへ着けないで、斃れねばならぬだらうか。その義務をすら果さないで……。思へば惜しい十年であつた! だが、友よ、この弱い迷ひの詩人を鞭うたないで貰ひたい、彼もなほ息の根の通ふ限りは、ふるへよろめきながらもやるであらう。

×

ハイネの紹介者として、自分は實に多くの非難を受けて來た。その中でも、ハイネを戀愛詩人として紹介し、ハイネの面目をあやまつたものが自分であつたかの如く書かれた事は、その皮肉な報酬の最たるものであつた。星と菫と薔薇と涙の詩人として、ハイネが愛誦されたのは、既に二十數年前、尾上柴舟氏の譯のはじめて現はれた時からである。

自分はハイネの追隨者として、感傷詩人として、打倒的叫喚の渦中に漂つた。それが正當であつたかどうかは、後代の批判に任せる。だが、自分は果して、ハイネの眞面目をあやまり傳へた男だらうか。自分が狂氣でないとすれば、ハイネの政治詩、傾向詩、諷刺詩を最も尊重して、これをはじめて邦語に移したのは、自分が最初の、そして唯一の人間であつたのだ。

自分は昔から、ハイネ、ビヨネル等の少年獨逸派の詩人、文學者を最も愛した。フライリヒラアトを、ヘルウェーク

を。一八四八年の革命の前後に、獨逸では、政治的、傾向的、社會的詩人の一團があらはれた。これが少年獨逸派の諸詩人である。彼等は文學史上で、普通、あまり高い評價を與へられてゐない。その中の先輩なるハイネを除いては。しかも、そのハイネの名聲も、傾向詩、政治詩によつてではなく、これはむしろハイネの弱點の如く非難されて來たのである。

だが、文學史上の評價などが何であらう。時事詩人は、社會詩人は、不朽の名聲を一擲する。フライリヒラアト、ヘルウェークの名が、今何ものを値するか。然し、彼等は今の獨逸を見て幾分か瞑するであらう。流行唄、ジヤズ小唄の作者、たとへば「君戀し」のたぐゐの作詞者の名もまた一日の名に過ぎない。そんな一日の流行詩人たるより、むしろ無名の社會詩人、革命詩人たれ。

抑も名が何の要ぞ。作者は誰とも知られず。民衆の魂をゆるがすものが、眞の詩だ。我に不朽の名が何ものぞ、ただ一篇のマルセエーズ！　かのメーデー歌の作者なる、或る若いアナキストのやうに、その作者たる事を喧傳されて、迷惑を感じてゐるのが本當だ。本當の詩人だ。自分はあまりに、詩壇的詩人になりすぎたと思ふ。

ハイネはその政治的信念と節操とを疑はれる事が多かつたが、しかも、他の政治詩人の如く變節せずして、自由の闘士として死んだ。彼が我が柩には劍を置けと云つたのは、單なる壯語ではない。自分はハイネの才能なく、あらゆる點に於いて、憫れむべき失敗の詩人に過ぎない。だが、最後に、自分はその失敗をとりかへす覺悟だ。嵐の中に漂ひつつも、空しくは落ちないつもりだ。

自分がいかにこの嵐を突破して行くか、ただ神ぞ知る。ただ、詩人として、自分は斃れるまで歌ふのだ。白鳥の如く、自分の最も美しい歌を歌ひながら死ぬのだ。

わが空しくも斃れなば、
あまたの友よ、あとつぎて
われにまされる詩を書けよ。
…………
われも詩人とたのみなば
嵐の鳥と啼き立てよ。

さうだ、生くべき道はただ一つ、ストゥルムフォーゲル――
我れ叫ばば、既に蝶でない。叫べ、叫べ――
嵐に叫ぶ鳥のごと……

（昭和四年七月十三日）

初秋心緒

一

もう陽のない空ではあるが、光はしたたるやうに匂つてゐる。少し黄いろく、そして白く廣いその夕空の反映が、庭土をも明るく染めてゐる。しづかに暮れて行く初秋の夕である。芙蓉の花を見よ、しづかにねむつて行く。その紅の花片は、女の脣のやうに巻かれて了つたのだ。心もやすらふ。今ぞすべてのものの「秋夕夢」。ここの生命の靜謐は、薄水色の壺のやうだ。花は挿されてゐない。しかし花はなくとも、壺そのものの美しさが、今その孤獨をほこつてゐる

のである。

秋はひとりの夕。

ひとりこそよき秋の夕。

二

庭土にはこの間の大雨のしめりがまだのこされてゐる。そして雨のあとから咲き出したカンナの花、まはりが鮮紅色で、まんなかが朱赤色になつてゐるカンナの花、勝氣な女の燃ゆる心とも見えるカンナの花、氣持のよい元氣な花である。芭蕉の葉もととのつて、條目がはつきりして來て、このいくらか曇つた清澄な秋の朝の空氣を飾つてゐる。快よい秋の沈默。

私はめづらしく心もさわやかに、愛讀の書をさがし求めてゐる。去年の愛讀書を。

三

蔦の葉が汚くなつた。空があいてゐる。色があせて來て、半分黄いろくなつて了つた。伸びようとする蔓にも、もうさしたる力がない。飽くこともなく伸びに伸びたこの蔓だつた。すがりつけるかぎりのものには、すがりついてのぼつたつけ。行けるところまでは行かうと努力したこの蔓ではあつたけれども、今はもう内部から空虚がやつて來たといふよりも「見果てぬ夢」のなくなつた人間の心のやうに、自然にしぼんでゆく姿を見せてゐるのである。仕方がない。いづれにしても枯れて了ふ。これを完成と見るか、これを敗北と見るか。敗北と見なすとき秋はうらめしく、完成と見る時秋はたのしい。しかも人間の心は、うらめしくもあるが、又たのしくも思ひなす。人の心をただ右から左へ流れる水流のやうに思ふのはかたくなであらう。左から右へ流れる秋の水もある。

四

町から歸つて來て思ふ。

歸つてくる町で、私はすずかけの並木の上にひろがつてゐる暗碧色の宵空を見て、何ともいへず柔かな快よいしづかなおちつきと、ほのかな憧憬を感じ出した。これは星のやうに光る憧憬なのだ。何とふしぎなことであらう。私はたえて久しくかかるあこがれの心持をもたないでゐた。いつもいつも、目の前のことで一杯だつたのだ。心は現實の色の濃い多角的なものとの接觸で滿足されてゐたのに、今は夕風に吹き動かされる草葉のやうに、私の心が頭をもたげるのだ。感情が夕風に吹き動かされて、あこがれの鄕を思ふ。

何處へ！

それは故鄕でないやうな氣もするし……。ただここでないところへ行きたいといふ氣持である。

永遠のノスタルジア。

それは生れぬさきの故鄕といはば言はれよう。

五

「もう稻が黃ばんでゐましたよ。こんなに大きい穗がたわんで、それは見事でしたよ」

となりの話聲。

となりの家では、主人ばかり留守をしてて、細君と子供達は房州の方へ避暑にいつてゐた。それが歸つて來たのだ。初秋の感じをこんなにつよく都につたへる言葉はない。私は汗をふきながら、もう少しでこれもまとまるのだがと、原稿紙を撫でた。（昭和四年八月）

田毎の月

月が煌々と照りかがやいて、日本橋は三越の樓上、屋上庭園の一隅の稻田の上にその月光をふりそそいでゐよう。私が行つて見たわけではないが、家のものが、三越で催された國立公園のヂオラマとかいふものを見て來てかへつて來て、その事を話してきかしたのだ。

「稻を植ゑてありましたよ、稻の葉と葉の間から日本橋の橋のむかうの白木屋が見えるのよ」と。しかし、蛙はゐたといはなかつた。多分蛙をそこに放すまでの風致はつくらなかつたのであらう。

だが、それもよからう。もしも、そこへ玉川あたりの田舍ものなる蛙が移住させられて、月夜、あの白い樓上の一端にはひ上つて、聖ジエネエイヴの「眠れる街を見おろす」さうしたシヤヴアン＝風の宗教的瞑想のうちに、思ひの外の墮落をしないともかぎらない。あまりにも東京市は月光の中に白く寂しくしかも悲しげであらうから。蛙はやはり蛙の生れたところに棲むべきであらう。

×

月の光がさんさんと降りそそいで、あの山と山との間の小さな村の田毎の水に波立つてゐるであらう。私は幼いときその村の月夜のみちを歩いたのだつた。私の生れた海邊の町から、家の用事で、もう一つの町へ行つて、そんなにも夜おそくなつて、月かげを踏んで歸つて來たときのことであつた。

田毎の水に、蛙が動いてゐた。そして啼いてゐた。あの鄙びた、太い、聲量のはばびろい豊かな蛙のジヤズを文字をもつてうつし出すことはむづかしい。ギヤツギヤツギヤツともちがふし、コロ、コロ、コロといふ風なおとなしいものでもない。普通、愛人をよびいだす愛の口笛ならば纖細な音階を尊ぶものと考へられる。丁度稻の葉ずれのそのやうなひそやかなものであるはずだ。しかしこれは、若い、お百姓さんが、娘つ子を、その地ごゑで呼び出してゐるといふわけだ。

「今夜が、今夜でないか、今夜か今夜でないか……コイ、コイ、コイ、コイ……」何ともいへないさわがしさだ。しかしさわがしいといつても、その騒音の中に哀調がふくまれてゐて、この田から、あの田へ、あの田から、又次の田へ、月夜の草みちのみちびくがままに田毎の蛙の聲をきいてゆくうちに、悲しみの溪流がいつしか私の胸の中で、寂しいほそいリズムを流す……

×

まんなかのくびれたやうになつてゐる田がある。路の左に、その水田の中には鯉が放されてある。小さい黒いその鯉は、ひるまは、稻の根株から根株へとまはりおよいで、そこから食べられるものを食べてゐる。今や夜もふけて空には月が白い。光がその月のアウトラインから飛び出して來て、この水田へまつすぐに落ちてるのもあるのだ。光がまつすぐに、正直もののやうに、直行してくるので葉と葉のかげは、葉のかげと葉のかげとを黒く水の上につくりつけてゐる。そのかげに鯉は身をよせてぢつとしてゐる。一夏の榮養で大分大きくなつた田螺が、水をプップッさせながら、これもまた小石のやうにうづくまつてゐる。しかし、これはあながち、鯉のやうに、葉のかげにひそんでゐるといふわけでもない。どこにゐようともかまひはしないところの田螺自身の習性にしたがつてゐるのだ。

稻はあすの陽ざしで、又もやもつと色づくであらう。冴えかがやく月かげが、明日の太陽の快活さをまへぶれしてゐるやうだ。

路の左の田にも、路の右の田にも、夜風が、そよそよと吹いてとほる。

どこで、どんな若ものが吹いてゐるのか、尺八が、すすりなきのやうに木々のしげみをこして、煙か霧かのやうに漂ひながれてくる。

蛙が啼いて、田螺が棲んでゐて、鯉が放し飼ひされてゐて、おまけに、畦には蛇が少くとも二ひきか三びきは、のそのそと夜歩きをしてゐるであらうところの、村の稻田の月夜。それから、東京は日本橋の室町の三越の樓上の二百株位植ゑられた稻田の月夜。二つところの月夜の田をかう數へたからには、何千、何萬といふ多くの稻田を想像し得るであらう。

×

田は何千、何萬とある。しかし蛙のすまないのは三越の田ばかりであることも分るであらう。

三越の田が時來てみのり、刈りとられるまで置かれるかどうかしらないが、何千、何萬といふ日本の稻田のすべては、時來てみのり、刈りとられて、かげをなす莖や葉や穗のない時に、月は蛙とともにのこるであらう。田毎の水に。「私の方も萬事終了だ……」田毎の蛙はこんな風でうづくまるであらう。田毎の刈あとに。ふりかへつて考へれば申分はないのだつた。(昭和四年九月)

最近の生活と文藝

×

文藝は今後どうなつて行くであらうか？　この疑問は、文藝專門の人でなくとも、時々その關心事の一つとなるかも知れない。最近二三年の文藝界の趨向はおそろしく變つて來た。評論然り、創作然り、詩然り、歌の方でさへも、

その變化の兆は看取し得られるのである。從つて既成作家、既成文人の大凡は、かうした文藝界の激變の中に、そのさまざまの試練を受けつつある。ある者は強く踏み留まり、或者は勇ましく進出し、ある者は恐れてしりごみしつつ形勢觀望の態度に出てゐる。要するに昨今の狀勢は、新しく文藝界にうつて出ようとする若い人々にとつて、至難であるばかりでなく、既成文藝人にとつても容易ならざる難境であるといふても過言ではないのである。然らば、何故文藝界がさうした推移と分裂を示し、暗雲のはげしきものをこの最近に於て露骨に現出するやうになつたものであるか。この疑問に對して、むづかしい社會學上の用語を使用するまでもない。私は極めて非學術的に云はう。一にも二にも、生活困難のためからであると。

抑々いついかなる時代にあつても、文藝は時代の影響を受けずにはゐない。生活上の苦痛少き時代にあつては、何と云つてものどかな文藝が生れる。精神主義的な諸文藝の華は、何ら暗色を帶びることなくして、大小それぞれの開花をほしいままにすることを得るであらう。然し、時代の不安、ひろく一般民衆の心をおびやかし、減俸、緊縮の聲聲に人々の眉のくもる時、どうして、武士は食はねど高楊枝的態度をもつて、比較的靜閑を要する文藝及び其他の長き努力を要する精神的研鑽にこもり得る事が出來よう。「街頭に出でよ」と叫ぶ聲がする。しかし、文藝人、學藝の士といへども、パンを要する人間である。飢のおそれのまへには、やむなく街頭に出でざるを得ないことを、誰が嗤笑し得るであらう。最近の文藝は、從來の文藝とことなり、いちじるしく、政治的意義を有つに至つた。殊に自らマルキシストと呼ぶ人々の書くところの評論、創作が、もつとも重きをおかれ、その所說は文藝界を席捲するまでに至つてゐる。藝術的價値と政治的價値とについての論爭まで生ずるに至つた。然し、それと同時に、文學界の傾向は、輕文學に向ひ、通俗文學に向ひ、大衆物に向つてゐる。從來の心理小說などは、テンポがおそいといふ風にけなし去つて又かへりみない。ジヤズ的な、アメリカニズムの流行は、滔々として各方面を風靡し、底力あるもの、幅ひろきも

の、重厚の感あるものは斥けられて、氣の利いた、小才をきかした、技巧的なものが歡迎されてゐるのである。アメリカニズムの文藝と、政治文藝と、この二つの潮流が斷然として文藝界を支配してゐる。しかもこの二潮流とも、ひとしく唯物的立場に立脚するところのものである。一はロシア的であり、一はアメリカ的である。一方、日本主義を高唱するものがあるとしても、この時勢に於いては、又いかにせんやである。

然し、私は最近の思想文藝界がいかに混亂し、いかに混濁し、物質文明謳歌の聲が上下を壓倒するの世とならうとも、なほ敢然として唯心的立場に立つ人の勇氣を讃へたい。流行を追うて、自己を失ひたるものの悲劇は、悲痛なるよりも卑小である。然し、これは現時流行のマルキシストの悉くが、單なる流行の追隨者といふのではない。彼等の多くは、眞摯と熱誠から出發してゐる。私は毫も、彼等の意義を否定しようとは思はない。が、文明批判の眼を失した、その出發は、私の同じ難いところである。私がつひにマルキシストたりえないのは、他に重要の理由も多いが、またこのゆゑでもある。とにかく、私は時世がいかに變轉しようとも、時代おくれのものとならうとも、そのために陋巷に死するとも、なほかつ自己の性向に忠實にして、徒らに他に追隨しない勇氣を把持したいとおもつてゐる。

ブルジョア、プロレタリアの闘爭は日をおうてさかんになるであらう。これを輕視しようとしても、時勢がそれをゆるさない。現代にあつて、些かでも良心あるものはこの現下の社會狀態を目して、平然としてゐる事は出來ないであらう。日常の見聞、すべてこの切實なる壓迫、被壓迫の事象を露骨に暴露しつつあるからだ。右せんか、左せんか、いづれにしても文藝界の眞摯なる人々の努力は、かかる時勢に處して、自分を一つのダイナマイトにすることではなからうか。眞劍なれ、忠實なれ、自己を僞る勿れ。

×

私はいつも自分に對してかう戒めるとともに、私の若い友人にもこの提言をくり返しつつあるのである。

有島武郎氏の全集は、私の時々愛讀するものであるが、氏歿してすでに七年、この間における時勢の變化は、もし、氏にして在世ならば、如何の感を催されるであらう。私は、有島武郎氏の敎養と誠實とに、頭をさげ、また氏の時代に對する敏感、眞實なりし惱みのまへに、眼底のあついものがある。われわれ現下の惱みも、また氏と同じ方向のものであると云つてもよい。現在の如き時代に、もつとも力づよき作品を差し上げ得るものは、何といつても、もつとも強く苦しみを體驗しうる階級に屬する未來の文藝人の外にはないであらう。我々はいかに自分の力弱さを事每に味ひつつあるであらう。未だ全く力が盡きたとは云ひ得られないかも知れぬが、自分の力があまりにも弱いのを悲しまざるを得ない。しかも我々は自ら傷くるの途に進み、敢て自分と粉碎すべく考へさへもして、牛步進まざるところに、二重の惱みがある。嘆息、又嘆息。しかも前途は白い霜だ。年末の道だ。孤影ただ行く。冬の風は肩をかすめて吹く。

私の詩は、悲しみに冴え、私の文は憤りに旋囘するであらう。しかもこれが私の與へられた運命であり、私の避け得ない使命である。理解されようなどといふ事も、今は全く無意味な事になつた。一波また一波、過ぎ去つた前の一波に、目をとめるものが何處にあらう、また目をとめる必要が何處にあらう。今はすべてが慌しい價値轉換の時代である。ただ自分みづからあざむかずばよし、弱さに徹して强し。もし自分が多少とも強いところがあれば、この點である。

——生きられないところを生きてゐるこの斷崖辷りを、自分一人、この人生において試みるであらう。脚下數百尺の墜落もまた自らよしとする自信はもつてゐる。

×

顧みれば段々に世の中は險しくなつたとおもふ。在京二十年、その最初の頃、明治四十年頃の時世は、文藝界は何といつても餘裕があつた。生活もさほどに一般に險惡でなかつた。貧富の差も今ほどではなかつたとおもふ。しかし、今よりなほ將來のことを考へ、明日、明年、明後年のことを考へ及ぶ時、私は冷汗を感ずるものである。失職者の彷

復は現代の一事象であるが、これは益々はげしくなる一方であらう。「人多し、あまりにも人多し」私は十數年前にうたつた自分の詩をおもひ出す。私などは子供を持たないが、子供をもつてゐる親達の將來に對する心持はどんなものであらうか。自分の子供のために暗い時代が待つてゐるといふことを考へる時、その子供の爲に何を備へてやらうとおもつてゐるのであるか。子を思ふ親の心は深いときく。子供のために、親の心は二重、三重の時代的不安を痛感せずにはゐられぬであらう。同情にたへない。

我々は生れないか、それとも死んでゐる方が幸福である。このギリシヤ以來の古い言葉が、今實に切實に思ひ出される。然し、かうして生きて居り、しかも自ら殺すの擧に出でまいとするならば、ただただにがき忍耐のみちあるのみである。

年はくれてゆく。私にとつては失はれる一年を思うて、喜びもなければかなしみもない。年は新しくなる。しかし私は自分をこの年來の痛恨の中に支へるのだ。しかも、もつともけはしいこの文藝界の一隅に。決心はついてゐる。ただしたいことだけをしようとおもふ。(昭和四年十一月十五日)

思想の冬

雨のない乾燥した夏の後に、秋のない秋、雨ばかりの秋が、雨と一緒に冬を持つて來た。また、酷烈な冬が來るのだ。さうだ。今年は堪へ難い思想の冬が。

少年時代に、氣候溫和と敎へられた我が日本の國は、決して溫和な樂土ではなかつた。寒暑の差の此の激烈な變化。就中二百何十萬といふ人間の目白押しをやつてゐる東京は、特別に惡地であるとしか思はれない。

氣候も昔はよかつたのだが、だんだん惡化して來たのだらうか。それとも、これを感覺する人間が、活力を失ひ、抵抗力を失つて、寒暑に堪へられなくなつて來たのだらうか。

世の中がだんだん息苦しく、住みにくくなつた事は、萬人等しく痛切に身に知るところである。資本主義制度が確立して、この人生といふ地獄をますます暗黑陰慘なものにしてゐる。人心は愈々惡化して、また昔に復すべくもない。丁度そのやうに、自然も惡化して來るのかも知れない。

今年の冬は、特別寒さが烈しいといふ。それが毎年の事だ。每年々々、特別ひどい冬が來るのだ。今年もまたさうであらう。

思想も每年々々、險惡になつて行く。階級鬪爭は愈々はげしくなつて行く。中間階級も最早晏如としてはゐられない。それは生活がだんだん困難になり、逼迫して行くからだ。今はどんな保守的な見解の人でも、この社會の現狀をその儘肯定する事は出來まい。住みにくい世は益々住みにくくなり、生き難い世は愈々生き難くなつた。

雨の前には塵が立つ。濛々と漲り飛ぶ。雨はその狂奔を、忽ち鎭め、塵埃を地上に叩きつける。そして、泥水が滔滔と流れるのだ。そして、極寒は、その泥水を凍らすのだ。コチコチに固めてしまふのだ。

凍る、凍る。すべては凍る、思想は凍る。熱意も凍る。このどん底の不景氣で、勞働爭議も凍る。思想の冬。非合法主義も、凍つて合法主義になる。無產黨の氷は、ひび割れて、分裂また分裂だ。その危い氷の上で、スケエトをやるのは、知識階級のマルクス・ボオイである。

地下三尺に、來るべき日の春を潛めて、暗に動く影がある。彼等はボルシェヴィズムを奉じ、第三インタナショナルの指令に從つて、共產國家の建設を志し、自己の信條を最も正しとしてゐる。しかも、彼等に排擊せられるアナキズムも、少數ながらその儼たる存在たる事を示し、かの縱斷の强權主義に反抗して、斷乎として自由聯合の橫列を支持し

てゐる。

それらの理論の正否の檢討は玆になすべき事ではない。ただ、その際、自分の問題となるのは知識階級の問題だ。第四階級に對する知識階級の位置、關係である。總じて、現下の社會に於ける知識階級の死活問題である。

今や、中産階級が、有産階級と無産階級との双方に分割せられ、階級それ自身が滅亡に瀕してゐるのは事實である。都會の小市民階級、即ち小商人や、小工場主等や、地方の小地主階級が、陸續として倒産し、田地を失つて無産階級に混入して行きつつある。知識階級は必ずしも中産階級ではない。が、その運命はこの中産階級と同一の道を辿るものである。知識階級は、今や沒落するか、無産階級の尻尾となるか、二つに一つのヂレンマに置かれてゐるのだ。

知識階級の階級性を決定するのは、極めて至難の事である。既にロシアに於ては、この問題に就いて、激烈な論爭が反復され來つた。ロシアのインテリゲンチヤは特殊な產物である。それはもと、知識あつて財産のない、いかなる階級にも屬せず、いかなる特權をも有しない人々の總稱であつた。然し、マルキシズムはこの知識階級の無階級性を容認し得なかつた。そこから、多くの論爭が生れ出なければならなかつた。が、それは今に至つても、判然たる決定を見るに至つたとは云ひ得られないのだ。

我國の知識階級は、必ずしもロシアのインテリゲンチヤと同一であるとは云はれまい。が、漸次、類似の意義を明かにして來つつある事は疑ひのない事實だ。少くとも、その社會的經濟的地位たるや、正に同一である。その社會的經濟的事情は、彼等を驅つて、ロシアのインテリゲンチヤと同一の徑路を踏ましめるに至つた。

彼等は今や、都會的モダニズムのカクテルによつて、その良心を痲痺せしめ、刹那の享樂に刹那の逃避を圖るか、決然としてプロレタリアの前衞となつて、新興階級のために一身を獻げるか、二つに一つの選擇に當面してゐる。中には、表面プロレタリア意識を高唱しつつ、都會的モダニズムの魔酒に舌皷打つてゐるやうな念の入つたものもある。

それらは謂はば、ブルジョア・プロレタリアとも呼ぶべきもので、知識階級の弱點を最も露骨に暴露するものである。

インテリゲンチヤの最大の弱點は、その小市民性である。その所屬を異にするインテリ出の無産派文學者が、互にその小市民性を攻擊し合つてゐるのは、これが何よりの證明である。小市民性が總じて人間性の弱點である事は、勞働者出身の人々すら、全然これから免れ得ない事によつても知られるが、然し、勞働者にはその危險が極めて微弱なのに反して、知識階級にはその弱點は屢々致命的な桎梏である。それといふのも、彼等の生活樣式のためである。頭腦はいかにプロレタリア・イデオロギイを獲得し得ても、その生活感情がこれに伴はない。實踐が伴はない。生活上の習性は、第二の天性となつて、ともすると舊樣の中に引き戻し、その宿命的な缺陷を暴露せずには措かないのだ。

知識階級がプロレタリア階級に同化するためには、殆ど超人的な力が要る。彼はまづブルジョア階級と鬪ふ前に、自己と鬪はねばならない。自己の中のプチ・ブルジョア意識を克服しなければならない。それは抽象的な理論にのみ沒頭してゐる人々の考へるよりも、もつと困難な事なのだ。また、重要な事でもあるのだ。

インテリゲンチヤは、何處までもインテリゲンチヤで、勞働者でもなく、農民でもない。彼等の進出、彼等の尖銳化は、その階級的必然性からといふより、むしろ知識としての理解からである。知識は彼等の財産である。そこに自ら特權意識が生れ、自己優越感が生れる。彼等が勞働者の反感を買ふのも、まづその點であるやうに思はれる。結局階級性の相違、生活上の習慣性の相違が、最後に水を油から分けてしまふ。知識階級の排斥が、從來、いかに屢々勞働者側から發せられた事であらう。

然し、レエニンはこのインテゲリンチヤの致命的な絕望に、明確な解決を下した。彼は職業的革命家の存在理由を確言して、彼等の鬪志を皷舞した。現在のマルキシズムを奉ずる知識階級の確信は、このレエニンの見解を基礎としてゐるに外ならない。レエニンの卓越した政治的天分と、ボルシエヴイキの成功とは、今青年知識階級の眼を眩ませ

しめ、明るい未來を約束し、彼等に英雄主義の夢を描かせるに十分だ。然し、それは知識階級そのものの明るい未來ではない。光榮ある無產階級の尻尾として彼等が殘存し得る事を語るのに過ぎない。彼等が一身を無產階級のために犧牲にしたとき、彼等はその存在理由を有つのに過ぎず、若し多少でもブルジョア的野心を示し、權力意志を示さば、最も強く鞭うたれ、排除されねばならない。これが第四階級に對する知識階級の正しい位置であり、關係である。

いづれにしても、マルキシズムの階級鬪爭說に於ける知識階級の位置は、最もミゼラブルなものである。それはブルジョア階級と共に、沒落すべき運命にある。次いで來るものは、プロレタリア・インテリゲンチアであらうが、それは又問題が異なつてくる。現在のインテリゲンチヤは、牛のやうな鈍重と執拗とをもつて、身を救ふか、又は滅亡し去るべきものである。この致命的な桎梏を痛感して、最も率直に絕望を表白した最初の人が、有島武郎氏であつたと思ふ。氏の『宣言一つ』は、ブルジョア・インテリゲンチヤの發し得た最も誠實な聲であつた。

知識階級は今、死活のただ中に喘いでゐる。時代の激動の最も銳敏に直接的に影響する文學者に於いて、それは特に甚だしい。彼等の或るものは藝術の超階級性といふ避難所を破壞されかかつて、必死に防衞してゐる。或るものは、マルキシストに轉身して、活路を開かうとしてゐる。どつちみち、彼等は二つの階級に分離せられようとしてゐるのだ。だが、この根本の知識階級の階級性が明確にされない以上、彼等の存在そのものが、頗る曖昧な介在的なものである事を免がれないであらう。

なほ、この知識階級の問題は宗教界に取つても、決して對岸の火災視すべきものでない。宗教界は今最も安全地帶であるやうに見える。マルキシスト等の宗教否定の聲がいかに高くとも、宗教界にとつては風馬牛であるかに見える。既成宗教は強い擁護者を後にもつてゐるから、微動だにする必要はないのであらう。一般民衆のほかに何等庇護者をもちえない文學者と異るところはそこであらう。が、宗教家といへども、民衆の心を失つたらどうなるか。さうし

た危機は眼に見えずとも刻々に迫りつつあるのだ。少くとも、我々の次ぎの時代を考慮するならば、今にして時勢を省る必要がないとは云へない。既成宗教は否定しえても、人間の宗教心は否定されえない。故に、ブルジョア化した宗教も、再びプロレタリア宗教としての當初の精神に復歸するとき、甦生の道は開けるのではあるまいか。

然し、今は冬だ。すべては凍つて動かない日が、まだまだ續くだらう。宗教界は冬眠の安きを貪つてゐていいのだ。唯、文學者だけは、時代の尖端として嚴冬に面して、嵐の中に必死にあがかなければならない。それが彼の運命であり、彼の使命でもあるのだ。

思想の冬、思想の冬、すべては凍る冬。然し、その後に來る春は、果して我等の幸福であらうか。自分はそれを疑ふ。だが、來るべきものをして來らしめよ。否、それはどうしても來ずにはゐないのだ。（昭和四年十一月十八日）

裏日本の冬

裏日本は暗い、寂しい、そして寒い。まろく縮こめた背中のやうな氣がする。その背中の冬を考へると、考へただけでも寒い。それだけ冬は裏日本の最も裏日本らしい時かも知れない。

日本海はいつでも荒寥としてゐるやうな氣がする。殊に、冬は見るさへ心細い氣持になる。その海からは、あの足の長い大きな木の葉蟹がとれるのだ。あの蟹が暗い海の底を這ひ歩いてゐる姿を想像すると、自分たちの生きてるこの寂しい人生の姿が考へられる。

おなじ裏日本でも、北陸の方と、山陰の方とはまたいくらか違ふかも知れない。自分の生れた山陰地方は、いつも雨ばかり降るところで、何となく侘しい土地だ。無數の砂丘が海岸に連つてゐて、それが雪に埋められてゐる景色は、

寂寥そのものの姿だ。

或年の冬、出雲の玉造といふ温泉に泊つた事がある。廣い離れに、たつた一人で泊つてゐると、夜になつて雪が降り出して、木の枝からざらざらとこぼれる雪の音が、寢つかれぬ夜の冴えた耳に、物凄く響く。あまりの寂しさに、次の夜はもう滞在する氣がなくなつて、發つつもりになつたが、雪のために自動車も俥も通じない。仕方がなく、歩いて湯町といふ驛まで出た。

宿の長靴を借りて、川に沿うた道を十町あまり歩いて出るうちに、着物の裾をすつかり濡らしてしまつた。驛前の茶店に寄つて、長靴をあづけたり、着物をあぶらせて貰つたりしてから、外へ出て眼の下の宍道湖を眺めると、眞白な山に圍まれた湖水の面は眞黑に凍つたやうに見えた。世にこの宍道湖ほど美しい湖水はないと思つてゐた私は、この眞黑な死んだやうな湖水を見ると、何とも云へぬ侘しい氣持になつた。そして、故鄕の冬を想ふ毎に、その湖水の姿をおもひだすのだ。(昭和四年十二月)

思想の竈・生活の底

夏目漱石の『門』の主人公は、鎌倉に參禪して、心の平靜を得ようとした。島崎藤村の『春』の主人公は、頭を剃つて、法衣を着て、東海道を下つた、若し彼等が今の時代の人であつたならば、さうした心の動搖に面してどうしたであらうか。私は時折りそんなことを考へる。

我々より一時代前の人は、心の鍛錬のために參禪した。釋宗演、南天棒などの大宗師のもとには、社會的名士の多くが、久參(きうさん)の居士であつた筈である。そして、その中には、未だ現代に活動してゐられる老文豪もあつたと思ふ。否、

今でも、軍人や政治家や、實業家などで、參禪する人は尠くはないのである。しかも、最近の文學者や、思想家で、私は未だ參禪した人の例を聞いたことがない。これはどういふ理由からであらうか。精神修養の愚劣に堪へぬからであらうか、それとも一般宗教に對する蔑視、或ひは無關心からであらうか。もつとも、世の所謂「禪學」なるものは、切實な宗教的要求といふよりも、一面、漢學趣味の變形の如き觀があるから、漢學的教養の衰頽とともに、知識階級の嗜好をそそらなくなつたのであらうか。が、より根本的な理由としては、僧堂の空氣を支配してゐる封建的イデオロギイが、現代の進歩的な知識階級のイデオロギイと、全く相容れぬものであるがためとも考へられる。これらの事は、別に詳細な考察を要するが、とにかく、一切の宗教團體の對社會的の指導精神が、知識階級の時代意識に明白に反撥するものをもつてゐるのは事實である。

上記の參禪の場合の如きは、必ずしも普通の宗教的歸依と同一視することは出來ない。それは多くの俗人にとつて、膽練の手段であり、又、一種の健康法ですらもあるからだ。世には靜座法や何々術をやる心持で、座禪に出精する人も尠くはないからだ。が、それも結局、求道たるを失はない。一體に、明治時代の知識階級は、(否、大正にあつても)精神上の惱みに面して、その救ひを宗教に求めた。樗牛や梁川の如きは、その顯著な例である。だが、昭和五年の我々は、彼等のやうに不治の肺患に冒されて、死生の問題に相面したとしても、果して日蓮に傾倒したり、見神の體驗をしたりするであらうか。さうした破碎の場合には、平常の自得や信念が脆くも崩れて、超自然的存在にすがりつくほど心が弱くなるかも知れない。が、それは極めて稀有な例外ではあるまいか、時代的鐵槌が、今や我々を相當にかたく鍛へ直してゐるからだ。我々知識階級の大部分は、唯物思想によつて洗禮せられて、もはや死後の生存などを問題としなくなつてゐるからだ。肉體の死滅とともに、靈魂も死滅することを承知してゐるからだ。否、靈肉の一元を、肉以外に靈なきことを信じてゐるからだ。

曾ては、人生問題に思ひを潛め、靈魂の救濟に心を傾ける事は、意味深い事に思はれてゐた。いかに生くべき乎は、眞摯な人々の當面の惱みであつた。今、かかる事は、プチ・ブルジョアの贅澤として考へられるに過ぎなくなつた。いかに生くべき乎は、有閑階級の個人主義者の閑葛藤に過ぎなくなつた。今や、個人的な問題に低徊するのは、一つの罪過の如くなるに至つた。その當否は別問題として、これが時代の趨勢である。我々は社會人として、社會問題に當面し、そのために精神の全部を捧げなければならなくなつた。その當否は別問題として、これが時代の趨勢である。人生の無常をはかなんで、出家遁世すればよかつた時代があつた事を思ふと、不思議な心持がする。今は無常をはかなむ事をすら許されないのだ。又、たとひ出家遁世したところで、その遁世にふさはしい塵埃の生活をする事は、絕對に不可能となつてゐるのだ。僧侶も今や一つの職業である。一院の住持は、俗務に忙殺せられること世間人とえらぶ事なく、一つの教團は、一つの政治團體の如き觀をすら呈してゐる。

先頃、私がこの一二年、內外生活のいろんな相剋のために苦しんでゐる事を聞いて、ある女の人が、いつそ坊さんにおなんなすつてはと勸めてくれた。その言葉は、今の私の心持にとつて、あまりに遠いものだつたので、私はそれに何と挨拶していいかを知らなかつた。が、それは私にとつて全然思ひがけない言葉とは云へなかつた。それはこの七八年前に一度、眞劍にそんな事を考へてゐた事があつたからである。そして、その具體的な方法を考へてみて、結局その實現の困難から、その中間の不徹底な妥協案をさへ考へた程だつたのである。が、かかる中途半端な隱遁生活に意味のありやうがない。それはただ淺薄な自己欺瞞に過ぎない事をつひに私は悟つた。今、それは私にとつて、恥かしい昏迷の記念に過ぎないのだ。だが、この昏迷のお蔭で、私は現社會に於ける宗教的生活の正當な意義を認識したのである。ひとり出家遁世に限らない、一切の出世間的生活は、云ふべくして行ひ難い事である。加之、形式的な出家遁世は、決して眞の解脫のみちではない。私の知友の中にも、僧になつた人もあるし、半僧的生活氣分の中にゐる

る人もある。が、私は今ではそれらの生活に多くの意義を見出す事が出來ないのである。

藤村は『春』の主人公の剃髪はやるせない慚愧の心と絶望に驅られたので、必ずしも出家遁世する意志はもたなかつたらうが、彼が法衣を着て行脚に出たとき、その心に西行の遁世を考へてゐた事は疑ひがない。私もまた西行の出世間的生活を羨んだ一人である。が、今や、西行のやうな處定めぬ行脚の生活は、果して可能であらうか。殊に、知識階級にとつて、西行が何によつて生活してゐたかは、記錄によつては判然としないが、多分、今の雲水などと大體同じやうな生活であつたらうと思はれる。が、かかる生活は、或る絶對の信仰なくしては成立しえないものだ。

鴨長明の方丈の世界への逃避などは、必ずしも信仰を要しないであらうが、然し、それも長明の時代ではじめて可能な事である。長明が何によつて生活してゐたかは疑問だが、當時にあつては單に口を糊する位は何でもない事だつたらう。今我々が長明のやうに世を遁れようとすれば、忽ち、食ふに困るだらう。またよし米鹽の資にだけは事缺かぬにしても、忠實な警官のために、浮浪人として囚へられて、放逐されるか、拘留されるのが落であう。自分で山林でも所有してゐて、その中に籠るのならば格別だが、それは單なる遊戲である。それから又、西行と一列に呼ばれる芭蕉にしても、一流の宗匠として、大體、弟子の謝禮や保護によつて糊口してゐたので、文字通り淸貧をたのしんだものであるが、現代に芭蕉の生活を再現しようとするのは無理であらう。殊に、財産を有つてゐてはじめて可能なやうな淸閑生活は、芭蕉の精神にはむしろ遠いであらう。

かやうにして、いかなる逃避もつひに許されない。我々はいやでも前進する外はないのである。我々は否應なしに、現代の複雜な經濟機構の中に生活しなければならぬ。世界中のあらゆる大事件が、直接我々の生活に響いてくる。ひとり精神的にのみ、その澎湃たる世界思潮から免れてゐる事が出來ようか。榮螺のやうにしつかり蓋をしめてみたところで、激浪にさらはれてしまふまでだ。第一に竈の脅威がある。今や、文人墨客の風流は殘るところなく消滅して、

我々は註文に應じて、お好み通りに染めますところの紺屋の職人となり變つたのだ。或る大雜誌社特有の先生といふ敬稱は、殘酷なアイロニイである。この商業主義の暴威は、ひとり文學者のみならず、あらゆる思想家にも及んでゐる。圓本の宣傳はこれらの人々を酷使して、一個のひろめ屋にしてしまつた。竈は思想をも支配するであらう。

思想家の鬪ひは、まづ竈との鬪ひである。それは云ふまでもなく良心の鬪ひである。その點、殊にマルクス主義の思想家は、尠からぬ犧牲を要求せられる。例へば、大學の教職にあるがために、その思想の明確な表明を難しとする人は、その地位を擲たねばならない。その際、一定の財產を所有するがゆゑに、何等後顧の憂ひなしとするも、一の財產を所有してゐて、マルキシズムを說く人は、良心ある限り、有島武郎氏の苦悶に逢着しなければならないのだ。著作家として立つ場合はより自由であるが、それすら自己の要求よりも周圍の狀況に促されて、思想の動搖を來す場合も想像せられる。人氣は恐ろしい誘惑でもあり、暴君でもある。これに支配されずして、その信念に忠實なる人は、敬すべきかな。その思想的立場は異るとも、全生活を擧げてその思想に殉じつつある人に對しては、敬意を拂はずにはゐられない。生活上の實踐は、百千の言說に勝るからだ。

いかなる主義主張に對するも、言者の生活上の實踐に裏づけられないうちは、人々はこれに十分の信頼を置かないであらう。思想と竈との關係は重要である。彼がいかなる生活をしてゐるか、その生活の底は公明なものでなくてはならない。そして、この要求は樂屋のぞきの卑しい好奇心ではなくして、正當な理由を有つ。それはかの代議士候補に對する有權者の心である。彼は空しく一票を行使してはならぬからだ。

宗教家にたふとぶべきは、その生活上の實踐である。行持である、多くの大宗教家は、その純一の行持によつて、その行持の光の發光體なるその人格は力によつて、衆生を歸依せしめる。或る教團の持つ大きい力は、その教祖の人格の力であつた。が、これはひとり宗教家に限らず、思想家、文學者にとつても、多少ともあれ適用せられる。思想

は人格と離して死物であり、藝術は人間と切り離すとき、手品である。藝術を宣傳としか見ないマルクス主義文學者にとつて、かういふ考へ方は一笑に附すべきものかも知れない。然し、彼等の如き立場にある人々は、些細な點にも、ブルジョア文學者側の逆宣傳に利用される虞があるから、その日常生活には、特に警戒と自制とを要すると思ふ。が、事實は必ずしもさうでないやうな噂をも聞く。その生活の實際を見て、ブルジョア文學者と何等えらぶところなくんば、いかにイデオロギイの相違を云ふとも、そのイデオロギイに信頼を寄せるわけに行かないといふのが、多くの常識的な人々の意見である。

經濟的、社會的、政治的變革のみが唯一であつて、個人の道義的完成は全く無意味であらうか。私にはさう思はれない。勿論、私とても、かうした人格主義の危險性に盲目であるわけではない。苦しみのみ多くして、何等得るところなき反省のみの生活は無意味である。苦悶や、懷疑や、絶望や、すべてプチ・ブルジョア意識である、自慰にすぎない。それも尤もな見解である。然らば、現代のモダン・ボオイの如く氣輕に無反省に、その日暮しのゴマカシ生活を生くべきであらうか。ひときり戀愛は私事であるといふコロンタイズムが風靡した。これが自己辯護に應用された。だが、ひとり戀愛のみならず、一切の私生活は私事として押入に藏ひ込んで、實際生活がいかにその所信に反しようとも、毫も問はないならば、結局どういふことになるのだらうか。我々はかうしたイデオロギイを腐敗した既成政治家などによつて、いやといふほど見せつけられてゐるのだ。或る老政治家が、政治とはウソをつくことだと、その純情な子息に教へたのは、彼等のイデオロギイを最もよく道破したものである。

現代の宗教批判を見るにつけて、宗教の本質の批判もさることながら、既成宗教が形骸化して、宗教家が本質よりも形式に泥んで、その生活上の實踐を忘れてゐることが、より多く民衆の不滿となつてゐるのではないかといふ疑惑をもつ。それとおなじく、思想界、文學界にも、この形式主義の著しい支配を見る。マルキシストと自稱すれば、直ち

にそれが世に通用する如きは嗤ふべきことである。思想家はその思想に適應する生活態度を示さねばならぬ。それは必ずしも直ちに無產者生活に入れとか、政治鬪爭に投ぜよとかいふ意味でなく、まづ、その實際生活上に、プチ・ブルジョア・イデオロギイを克服せよとの謂ひである。無產黨の分裂騷ぎや、無產派文學の陣營内の對立にも、その表面上の思想的對立の底に、或る利己的な動機が潛むならば悲しむべきことである。私は人間性に對する悲觀主義のゆゑに屢々非難された。そして、これがため自己の行動を拘束され、無用の苦悶の中に停頓せしめられてゐることをよく知つてゐる。然し、自己に對する誠實より出發せずんば、同胞に對する誠實の空言なるべきことは私の確信である、それゆゑ、思想の蔭に竈の火を見、生活の底にその本心を看過しえぬのである。が、この眼は他に向けるべきものでなく、自己に向けるべきものである。それゆゑ、この監視を自分の上に愈々嚴ならしめたいのである。（昭和五年二月一日）

千歳村の道

千歳村には石川三四郎氏が住んでゐられる。『哲人カアペンタア』以來、石川三四郎の名は私にとつて親しい、なつかしい名であつたにも拘はらず、千歳村時代になつて、はじめて先生にお目にかかる事が出來た。はじめてその直接の指導を受ける事が出來たのだ。

千歳村の村道は、私にとつては、一つの圓滿な、完成した人格の世界への道であつた。ルクリュのブルッセルの家への道のやうに、カアペンタアのミルソルプの家への道のやうに。

京王電車沿線も、北澤まで行けば、都會の濁つた空氣からやうやく解放される。千歳村へのあの畑道の兩側には、武藏野の土が黒々と盛り上つて、野菜物の靑い葉の色が、冬空にむかつて地の威力を示してゐる。もう隨分長くあの

畑道を歩かない氣がする。八幡さんの前をしばらく行つて、左へ入ると、丘のなぞえに、こんもりと大きい樹の聳えた下に、一軒の家が見える。それが共學社だ。昔、水車場であつたといふだけに、入口の處に川があつて、粗末な橋がかかつてゐる。家の後の畑には、時々働いてゐる主人の姿も見えるのだ。

一昨年のクリスマスには、そこで樂しい一夕をすごした。書齋を俄かづくりのホオルにして、私は石川さんとをどつた。白粉と紅と眉墨とでお化粧をしてもらつて、ショオルを卷いて、佛蘭西の少女に假裝して、そして、蹈すくひのやうな滑稽な恰好をして、皆をわらはせた。私の最初の、そして或ひは最後のダンスであるかも知れない。ダンスは私が石川さんに敎はつたもののうち、一等困難な課業だつたかも知れない。レコードに合せれば調子はおのづと合ふものを、足もとばかり氣にするために、蹈すくひになつてしまふ。これは私には思想上にも大きな敎訓だ。たうとう足どりも合つて來た……

その書齋には、ルクリユや、バクウニンやクロポトキンの肖像がかかつてゐる。暗い夜道を歩きながら、私達はルクリユや、カアペンタアを語つた。先生のいろいろの思出をも聞いた。そのカアペンタアも八十幾歳の老齢で、昨年なくなつた。「トウード・デモクラシイ」の詩人は、未だ詩人間には、ホイットマンの追隨者位にしか理解されてゐない。私も石川さんによつて、はじめてこの詩篇の眞意義を敎へられたのだ。土民生活が先生の正譯だ。石川さんの云はれるやうに、我々日本人は、土地を耕す事も淺く、思想を耕す事も淺い。おそろしく淺薄だ。深く耕せといふ石川さんの敎訓は、私自身にとつても適切な敎訓なのだ。

千歳村には、德富蘆花の世に謂ふ粕谷御殿もある。或る冬の夕方、石川さんと望月さんとの後について、富本憲吉氏のお宅にあがる途中、その方へ寄り道した。かたく門を閉した邸宅の前の林の中には、蘆花翁の大きい墓があつた。夕闇の中に浮んでゐるその墓標の前に、私達は禮拜した。『思出の記』で文學眼をひらかれた私にとつて、蘆花翁は恩

人である。翁は日本人に稀らしい强さをもつた人であつたらしい。が、その晩年の思想生活にはそれほど感心しない。輪廓の大小の差はやむをえないとしても、トルストイなどと比べて眞劍味が足りない。何處となく日本人の氣力の不足さを感じさせる。

挫折か退嬰か。それが日本人の求眞生活に於ける致命的な宿命なのであらうか。北村透谷や、有島武郎などといふ人々の運命と、多くの老大家のあまりに早い頓悟とは、私には寂しいものなのだ。日本人は持續力がない。それはひとりマラソン競走にのみは限らないのだ。隱居といふ世界に類のない制度は、その精神生活にもあるやうだ。おまけに若隱居までが。

石川さんは何と若々しい眼をしてゐられる事だらう。それは二十代の靑年の眼だ。その信念は愈々堅く、その思索は愈々深い。私は自ら最も多く日本人らしい弱點をもつてゐる。殊に、思想的に、多元の不統一に惱んでゐる。その社會思想に於ても、多年、多くの迷ひを引きずつて來た。現に、昨年の春の東京市の市會議員選擧の頃までは、まだ代議政治を否定するまでに到らず、無產政黨に望みを囑しさへもしてゐた。その心持は當時書いた私の詩にも反映してゐる。今やうやく私は石川さんの數十年の考察と體驗との結果の眞實性を認識しえたのである。

石川さんの共學社からは、今、リイフレット『デイナミック』が出てゐる。片々たるリイフレットだが、石川さんの思想と信念とは紙幅に溢れてゐる。志ある人は一讀せられん事を望む。必ず得るところがあるに違ひないと信じる。

（昭和五年二月一日）

貧しき者の春

また、春が來る。東京市では、復興の春が祝はれるといふ事だ。堂々たる大通りが出來た。すばらしい橋がかかつた。が、それによつて、市民の生活がらくになるわけではない。我々は復興の歌を高唱する前に、不景氣の歌を腹の中で叫ばざるを得ぬのだ。小賣商人の店頭では、稅務署員が、强硬な談判をして、財產差押へを以て威嚇してゐる。學校から押し出してくる靑年知識階級は、求めるに職なく、巷に溢れる失業者の中に混つて、叛逆心を煽り立てゐる。金解禁とか、產業合理化とかいふものは、どんな結構なものかは知らないが、無產階級にとつては、棒打以外の意義はなさゝうだ。こんな中にも、春はやつて來る。トタン屋根の傾いた、裏長屋の猫の額のやうな空地にも、草が芽ぐむ。割合にのんきな東京市民は、もうそろそろ花見時分の馬鹿騷ぎを待ち構へてゐるかも知れない。殺人的不景氣といひ、人心の險惡といつたところで、大部分の人間は死にもしないで、どうやらかうやらやつて行くだらう。ただその代り、人間が輕薄になり、狡猾になり、卑しくなつては行く。衣食足つて禮節を知るとか。思想善導とは、衣食を足らしめる事なのだ。髭をひねつて、說法する事ではないのだ。心の貧しい者は、春に逢つても、やつぱり冬のやうな凜烈の中に、空しく生を徒費する事を憫れむのみ。

新聞で見ると、鎭海の要塞司令部で、火事があつて、燒死者が澤山出たといふ事だ。十四歲以下の子供が多く燒死したといふ。二十五年前、私は十三四歲の少年として、そこの給仕に勤務してゐたのだから、若しそれが二十五年後の今日の事であつたならば、私もその燒死者の中に入つてゐたかも知れない。もつとも、鎭海灣といつても、私のゐたのは今の鎭海とは場所が違ふかも知れないとも思ふが、兎に角、二十五年前、私のゐた時には、そんな事變が周圍になくてすんだのは事實だ。それからまた、私は大阪の川口を船でのぼるとき、向うから來る船に載せてあつた錨に觸れ、すんでのことで身體を眞二つにされるところだつた。そんな危險な目には、幾度びかあつた。そして免れた。これは私ばかりではない、人間はみなその危險を凌いで、生きながらへるのであらう。

碌々として命を存す。これが平凡人に相應した運命であるかも知れない。私も碌々として、また、貧しい光の春に逢つた。母と弟との死に、生をいたく脅かされたのも、早やもう三年になる。失敗商人であつた不幸な父の十七回忌、自分を最も愛してくれた祖母の十回忌、國の方からは、今年は法事に是非歸つて來いといつて來る。死んだものはみな佛樣だ、極樂往生をしたのだ。生きてその法事なんどをするものは、みな餓鬼道に迷つてゐるものかも知れない。人間は容易に死ねない。死ねない代りに卑しくなる。私は自殺を罪惡視し、自殺者を非議する人に贊成する事が出來ない。我々が社會の一構成分子として、自殺者の行爲によつて、暗默の間に、自己を難ぜられたやうな氣のする事は事實だ。ここに自殺否定の一つの根據がある。が、死にたくないのが人間の本能だ。それに敢て死を選ぶのは、止むを得ない事情があるものと見なければならない。それは默つて許さるべきだ。

私があの不思議な人物に會つたのも、もう二十年近い昔となつた。自死自葬論といふ奇矯な意見を抱懷してゐたあの赭顏の老人に會つたのも。私はその人を自分の作中に描き、その主張をいはばその作品のライトモテイフとしたのであつた。すると、私はその作の前半を讀んだある未見の人から、長い手紙をもらつた。しかも、巴里から。私は何かの故障で(それは震災のためであつたかも知れない)つひにその返事を送る事が出來なかつた。それももうかれこれ十年近い昔となつてしまつた。日本が厭やになつて、巴里に行つたといふそのT氏は(かりにT氏としておく)今どうしてゐるであらうか。私の作品に取扱つた問題に共鳴して、後半を是非見たいといつたその人の手紙の中で、特に私の心を撃つたのは印度洋上で、あの油のやうな波の上に身を投じようと思つたといふ一節であつた。私はT氏が今何處にゐるか知らない。が、ねがはくば、なほこの世に存命でゐられん事を。印度洋上で、氏を引留めたある力が、今もなほ氏を引留めてあらん事を。そして、この感想がどこかで氏の目に止まる事を祈る。そしたらば、私も自分の怠慢の罪を償ふ事が出來るのだから。

T氏は私にこの自死自葬論者の事を問うた。このめづらしい意見を、自分の考へとよく似た考へをもつてゐた人は、あなたの想像上の人物であるか、それとも實在のモデルがあるのかと問うた。かつてモデル問題とかいふ事が、新聞の記事で騒がれたとき、私の作品もあげられて、いろんな事をいはれたが、こんな騒ぎは全く無意味な事。人間は無から有を出す事は出來ない、その意味で、いかなる作品のいかなる人物にも、部分的のモデルはあり得る。しかし、人間は他人を眞に了解する事は出來ない。ある人をそのまま描いたとて、それは結局、自分の投影に過ぎぬのである。私の自死自葬論者も、その意味でのモデルにすぎない。が、彼の意見は正しく實在の人物の意見であつた。事實は作中にあるやうに、前代議士でも何でもなかつたが、彼は實際、最早國家社會に對して何等意義なき存在となつたものは、海中に乘出して、そこに潔く自ら葬り、以て人口の過剩を防ぎ、同時に葬式の虚禮を廢する事によつて、一死を以て國家に貢獻すべきであるといふ奇嬌な意見を、眞面目に抱懷して、まづ身自らこれが範を示すと共に、これを世に宣傳せんがため、パンフレツトにして刊行しようとしたのであつた。そして、私がその主旨を條理立てて起草する事を依頼されたのであつた。が、私はそれをつひに書上げないでしまつたやうに思ふ。そして、その人もその主張を自ら實現しないうちに、病死してしまつたやうに思ふ。

私は眞面目になつて、自死自葬論に共鳴し、これを主張しようとは思はない。自葬はしばらく措くとして、自死はある運命にとつて、まことに「道理ある出口」である。避け難いネセシテイである。善惡の彼岸にあるべきものだ。これを極力非難する道學者の意見は、譯の分らぬ俗見に過ぎない。が、同時に、これを一つの主張となすのは、幼稚、若くは嬌激に過ぎるであらう。自ら死なずして自殺を鼓吹する如きは、あだかもサロン・マルキシストの消耗的感奮に似てゐる。フイリツプ・マインレンデルの『解脱の哲學』は前者に近く、アルツイバアセフの『最後の一線』は後者に近い。しかし、自死自葬論者の粗大な觀念の中には、この問題に對する積極的な意義を暗示するものがあつて存する。

それが私を動かしたのだ。またT氏をも動かしたのであらう。自ら辱しめるより、むしろ死をえらぶ人の心持は、悲壯ではなくとも、決して卑怯と斥ける事は出來ない。矢盡き刀折れてたふれた北村透谷の如き人の最期は、戰場にたふれた戰士の死とおなじ意義をもつてゐる。

本質的に生きようとするものは、ほとんど挫折する外にみちがないかも知れない。透谷の如く、あまりにも眞劍な、あまりに一本氣な人は、力盡きて倒れる外はないだらう。それは不可抗力に對する抗爭だからだ。シュテファン・ツワイクのいはゆる「惡靈(デモン)との戰ひ」だからだ。日本人は深刻な人間でない。突き詰めた人間でない、かなりイージイゴオイングだ。すべては表面で終る。すぐさとりに入つてしまふ。その中で、幾分歐羅巴的な性向の人は、いよいよ挫折、破碎の危機に逢着する事が甚だしい。そして、この危機なき人は、日本人らしく容易に完成する。それは根本的には、日本人の生活力の不足から來るやうに思はれる。持續力の不足から。かくて、挫折か、退嬰か。それが我々の二つの危險ではあるまいか。我々はこの二つを免れて、より深く生きる事が不可能なのではあるまいか。完成は必ずしも賀すべき事ではない。殊に、我々の間の完成は、多くは退嬰に外ならぬからだ。

この點で、私はいつもトルストイを思ふ。トルストイは完成した偉人ではない。その未完成の中に、その苦悶の中に大きな意義があるのだ。今や、マルクスでなければらちのあかぬ時代となつたが、トルストイはなほ我々にとつて、大きな力である。トルストイの信念は、今印度の野に大きな力として働いてゐる、マハトマ・ガンヂイの崇高な姿をとつて。トルストイの思想から、時にその藝術論から、あれだけ大きい影響を受けながら、トルストイは常に私にはあまりに遠い人であつた。ルッソオや、ニイチエなどと違つて、私にとつてトルストイは、丁度ゲエテなどと同樣、近づき難い人であつた。が、家出の前のトルストイに至つて、この巨人がその道德的昂揚の最高の點に達したと同時に、その人間的の姿で、我々に最も近いところまで降りて來たやうに思はれる。當時、バルヒダロフといふ大學生が、

トルストイに寄せた手紙がある。それはメレジコフスキイの『トルストイとドストエフスキイ』を讀んで、トルストイの思想と生活、理論と實踐との矛盾を指摘して、その囘答を求めた手紙である。これに對して、トルストイは「メレジコフスキイは私は讀まなかつた、あなたの引用によれば、それを讀む事も、辯疏する事も私は必要に思はない」といふ簡單な返事を書いてゐる。それが家出の四日前の日附けである。

シュテファン・ツワイクは、その『トルストイ論』中に、この家出前後のトルストイの姿をヴイヴイッドに描寫してゐる。「またもや彼は夜中に妻がこつそりとヒステリカルに、彼の原稿をかき廻してゐるのを見た。その時突然、彼の靈魂を見棄てた彼女を棄てよう、のがれよう、何處かへ、神へ、自分自身へ、自分に定められた死へといふ決意が、鐵石の如く衝動的に彼の心にわき上つた」トルストイといふ名の代りに、テイ・ニコラエーフといふ名を名のつて、ヤスナヤ・ポリナヤを忍び出たトルストイ程、大なる藝術品を、トルストイは書かなかつたであらう。マルキシズム、ボルシエヴイズムの全盛時代となつて、今や、個人の道德的完成は何等意義なきかの如くなつた。果して、さうであるか。三月十五日、この日はトルストイよりはもつと完成した聖徒であつたエリゼ・ルクリュ(クロポトキンの友で、アナキズムの大先覺なる)の生誕百年の記念日だ。我々もこの日を祝つて、未來の道德的社會、自由社會を祝ひたい。それが貧しき者の春である。(昭和五年三月十二日)

白い翼のとき

人の心は、季節々々によつて新しくさせられる。春くれば春、夏くれば夏、言はず語らずのうちに、この季節へむかつての挨拶をする。服裝で、心のもち方で、又は言葉で、生活のしかたで、とりわけ心の敏感さをもつて、女性が

外界の色、光、形、溫度、又は濕潤に、どんなこまやかなデリケエトな感受性を示し、また、これに適應してゆくのは、私にとつて興ある事に思はれる。ところで、今は時新綠、初夏にむかふ。この春と夏とのあはひともいふものは、どういふムウドのものであらうか。柳に燕、穗にいづる麥、色の濃くなる海、光のつよくなる空、都會では白い服の男たち、藤色セルの女たちの輕快なアスフアルト道の步み、――もう町々でのカフエでは、オレンジ、ストロベリイ、レモンなどの曹達水が、あついのみものより喜ばれる。

春と夏とのあはひ、この朗かな光の時、月でいへば、四月の末から五月の中頃の氣象は、これをものの形にかりていへば、鳥のやうである。それも野の鳥のやうである。心に白い翼を感ずるから。それはまた「生の解放」といつてもよいやうな氣がする。

「生の解放」といふことは、いかにも好ましいことである。肉體的にも、精神的にも、自分の自由といふ位のぞましいことはない。この「解放」といふことこそは、古くは何世紀にさかのぼり、なほこれよりも無限の世紀にかけて、ありとあらゆる人間の希求となつてゆくものであらう。それはだれしもの感じてゐることであらうか。私どもはどの方面を考へて見ても、いとはしい力のもとに壓迫されて、屈めた翼に痛んでゐる。この痛みを、ただ敏く感じてゐるか、鈍く感じての相違はあるにしても、形そのものは壓迫されたる形である。團體的生活を考へても、個人的生活を考へても、私たちのぶツかつてゆく扉が、いつもそこに立つてゐる。なほ深く考へて、一人の心の狀態について思うて見ても、心は、心に壓迫され、束縛されてゐることが多い。この心の中の一つの不合理の狀態について、私は今書いて見ようとするのであるが、昔のえらいお坊さんもいつたやうに、世にもむづかしいのは內心事象である。ひたすらにひたすらに心への修練をこひねがつて、神の外にはものさへいはず、たてこもるトラピストの無言僧のその心さへも私は疑ふことが出來る。必ずそこにも、この制しがたい內心悲劇はあるにちがひないと。

心といふものを、ごく單純に考へるくせが、女性の人には多い。しかし、心はしかく單純ではない。もしおのれの心、それをイージイゴオイングに信頼するものがあれば、私はただその人のために悲しむばかりである。この人の心の中の相剋性に氣がついて、そこから目ざめて、自己のよき戰ひに勝ちとほしてゆくやうになつて、はじめて、自己の生活もよくなり、ひいては、世の中の一員として、自分の個性を强調することも出來る。この間、私は「人類に與ふ」といふロバアト・オーエンの書物をよんで、そこに說いてある穩健な社會政策上の意見の根柢にあるものが、やはり、この人の心のリファインメントであることの暗示をうけた。

これまで、私はかなりいろいろの女の人を見もし語りもした。その中で、初夏、そのもののシンボルといつてもよいやうな、一種、純正な精神と、生動する感情とで、積極的な印象を與へる人にあつた時には、世にもよろこばしい感動をうけて、そのやうな婦人への敬愛ををしまなかつたつもりである。

白いパラソルをかざして、新綠の中を逍遙する初夏のよそほひを、その色のハアモニイ、その花模樣の帶、もしくは、洋裝の淡色に匂ひただよはせた、新しく、しかも美しい女性美は、私といへども快よい感じをうける。しかもそれだけのところでは、常識的である。私は、さうした初夏のよそほひを、その心にもつてゐる人に、頭をさげようとおもふのである。負けない心、動いて正しきに從ふ心を、外形美以上にかひたいとおもふのである。かたくなな心を內部にもつてゐて、外に、初夏の爽かさを上塗りしてゐるやうなことは悲劇であらうかとおもふ。

初夏になると私は、あの白い柔らかい雲を靑空に見ることが出來るのがうれしい。あの白い雲を見上げると、はてしもない昂揚的精神を敎へられるやうな氣がする。私たちはいつも自分の心を、もつともつとフリイにしたいと考へてゐる。どんなにフリイにしていつてもいい筈だ。

初夏、この朗かな生の時に、私は、胸がみなぎつてくるやうな氣がする。多分すべての人々もさうであらうと思ふ

のである。（昭和五年三月）

ミノリテの言葉

千葉龜雄氏が「流謫者の群」と題して、異國に亡命しつつあるロシアの文學者について書かれた一文は、近頃興味深く讀んだものの一つだ。彼等今最も人氣のない、閑却せられた人々の運命について、この同情ある記述を得たのは、めづらしい事だ。私は彼等を特別に尊重するわけではないけれども、その反時勢的存在について、身に沁みて感ずるところがあるからだ。

彼等とても、コンミユニストとなり、ボルシエヴイキに迎合したならば、敢て鄉土の地盤を失はずにすんだであらう。土を離れた植物は枯死する。わづかに過去の記憶といふただ一塊の土を持つて、異る季候の中に移された鉢植の花の貧弱な香氣。それは好ましからぬ運命である。しかも、これが故國を離れた文學者の免れ難い運命ではなからうか。ツルゲエネフが、故國との接觸を失つた事について、あれだけの焦慮と不安とを禁じ得なかつたのは、實にこれがためではないか。いかにインタナショナルを口にしようとも、文學は所詮、鄉土に根ざしてはじめて美しく開花する花だからである。

私は日本主義者ではない。むしろ、より深い意味での歐羅巴化を熱烈に冀求するものである。が、それは我鄉國の一切を否定せんとするのではない。我有てるもの一切を捨てて、他の餘瀝をねぶらうとするのではない。我有たぬものを獲て、この土を更に豐饒にせんとするのにすぎないのだ。

我々が日本主義の主張に贊しえないのは、その基調をなす反動主義に贊しえないのであるが、同時にこの反撥は、

その信條に含まれた意味あるものをも否定し去るのではない。我々は日本の××主義を排するのであつて、日本の國土を排するのではないのだ。我々は日本といふ國が、その子供の時に敎へられたやうに、しかく季候温和でもなく、他の國に比べて特に住みいい國でない事を、いやといふほど痛感してゐる。が、それかとて、この國を捨て去る事は出來ない。それは自分の肉體を捨てる事が出來ないのと同じ事だ。自分の個性を捨てえないのと同じ事だ。我々はその欲すると否とにかかはらず、日本人だ。ロシア人でもなく、アメリカ人でもない、ましてやユダヤ人ではないのだ。

ロシアの亡命者の中には、いろいろな人々がある。思想的には、あらゆる色分けが出來る。ただ、そのボルシエヴイキ反對に於いて一致するのみなのだ。この點では我々も同樣だ。我々とても、若しボルシエヴイキ治下にあつたとするならば、その自由を愛し、眞の解放を冀願する以上、亡命のほかに途はなからう。亡命が不可能ならば、名譽の死か、不名譽の屈服かのほかはないであらう。ロシアに於ける多くのアナキストの運命は何を語るか。現に我國に於いても、自分達が權力を獲たならば、アナキストを死刑に處してやると公言するマルキシストもあるのだ。

勿論、これは一場の戯謔であらうと思ふ。然し、その權力意志の率直な表白は、大いに多とするに足るのだ。また、死刑の肯定も、その强權主義の必然の結果でなければならぬ。それは既にロシアに於いて證明されてゐる事だ。否むしろ、ブルジョア國家よりも、一層苛烈に、一層殘忍に施行されてゐるのだ。

そこで、アナキストが、アナキズムをやめるから、死刑だけは勘辨してくれと哀願しなければならぬとすれば、なさけない話である。だが、大丈夫、それ位の正直な人ならば、死刑宣告の際どいところまで行く前に、とつくにボルシエヴイキになつてゐるからだ。今現に、前景氣だけで、その陣營は、押すな押すなの目白押しになつてゐる有樣ではないか。何しろ曾てアナキストとして活動してゐた人々すら、陸續としてマルキシズムの陣營に鞍替しつつあるのだ。そして、その際、愛憎づかしの文句は、三行半にも足らなくてよい。アナキズムは空想だ。それだけで澤山なのだ。

多くの人々にとつては、プレハアノフの一册で、アナキズムは粉碎出來るのだ。

一體、昨日まではアナキスト、今日からマルキシスト、今朝までは、ブルジョア、晩方にはプロレタリアなどと云ふやうな、役者の早變りのやうな事が出來るものであらうか。然し、我々の間では不思議でない。日本人は形式主義の民族だからだ。看板が萬事を決定するからだ。看板さへあげれば、實質は問はないからだ。この形式主義、これが我々の名譽ある旅行券である。我々の間のあらゆる茶番と、空騷ぎとは、すべてこの形式主義の濕地から發生する菌にすぎないのだ。此の傳統的な日本人氣質こそ、何を描いても、克服し、絶滅すべきものだ。

少しく本質的にものを見る人は、主義の看板に多くの信頼をおく事が出來ないであらう。理論の尤もらしさに說得される事が出來ないであらう。主義はいつでも着替られる制服のやうなものだからだ。理論はいつでも他の理論でとり替られる帽子のやうなものだからだ。そこで、或る少數者は、それよりも人間の本質に信頼したい、その性格の必然に信頼したい。その本然の聲に耳を傾けたいと思ふ。然らば、そこには萍（うきくさ）はないであらう、常に確固たる根を見出すであらう。

私はアナキストとマルキシストとは、思想よりも、むしろ性格の相違であり、人格の相違であると思つてゐる。實際家肌の、政治家的な、融通無礙な人々はマルキシズムに行き、詩人肌の、道義的な（それは無論道德問題を重要視するといふ意味でいふのだ）融通のきかない人々はアナキズムに傾く。これは極大ざつぱな分け方にすぎないが、大體はかう云へると思ふ。從つて、一方にゐてその性に合はぬ人が、他の性に合つた方に行くのは自然であつて、毫も咎むべきではないのだ。だが、一方の勢力に眩惑されて、自分の本質の要求を無視して、その反對の方面に行く人あらば、その誤謬は、後年、自らに酬い來る事は明白である。

然し、かういふ考へ方が、第一アナキステイックであるかも知れない。マルキシストにとつては、そんな事は大體、

問題でないのだ。人間の個性だとか、稟性だとか、人格だとかいふものは、絶滅すべきものでこそあれ、毫も尊重すべきものでないからだ。

かういふところから云つても、私はどうしてもマルキシストにはなれない人間だ。私がマルキシストになつたならば、それが虚僞である以上に、悲慘な矛盾撞着を示すに違ひない。しかも、私もまた一時惑ふところがあつた。マルキシズム文獻の理論的完備は、その壓倒的な現在の勢力と共に、大いなる誘惑であつた。この迷ひを鞭ちたい人には鞭つて貰つてよい、理解力の不足を嗤ひたい人には嗤つて貰つてよい。とにかく、私は私の本來にとどまり、その本質的要求に從つた。私が本質的たらんとすれば、どうしてもその本來の傾向に從ふ外はないからだ。

元來、私は昔からアナキステイツクであつた。自然、交遊もアナキストの間に多かつた。しかも私が敢てアナキストとして自己を表明しなかつたのは、前にも書いたやうに、自分の衷の悲觀主義、懷疑主義のためだつたのだ。それが私を迷ひ惑はせたものだ。今、もとより私は卒然として、この悲觀主義、懷疑主義を超克し得たのではない。然し、私は今、絕望的勇氣の思想に勇氣を得た。既に我々の生存が自然に對する一つの叛逆であるとすれば、我々の事業が、たとひその甲斐なくとも、斃れる迄その信念に從つて奮鬪努力するこそ、我々の生存の意義であるのだ。

然しながら、これらの事は、我々知識階級の一部がアナキストであらうと、マルキシストであらうと、さうした事は、此際、大勢には關しない。勞働者、農民は、その生活本能に從つて、默々として動いて行くだらう。利己的な指導者は、最後には必ず顚落し去るだらう。

我々はアナキストであり、マルキシストである前に、まづ、インテリゲンチアである。ブルジョアでもなければ、プロレタリアでもない。知識階級の階級性、その本質的意義、これこそ我々の根本の問題だ。しかも、この肝腎の問題が、今やうやく一般の問題となるに至つたのは、隨分遲いと云はなければならない。がそれも無理からぬ事だ。それ

は我々にとつて、致命の問題であるからだ。そこで長いこと腫物のやうに、そつと觸れずに置かれてゐたのだ。しかもそれが一旦手をつけるとなると、切開する事も出來なければ、引込ませる事も出來ない。それは解決しがたい問題なのだ　結局、各々その思想的立場を異にした人々の間に、堂々めぐりを演ずるにすぎぬであらう。

汝等のうち罪なき者これを打て――それは偉大な言葉だ。これが我々の荊の冠である。そしてインテリゲンチアの問題についても、この重たい言葉が、我々の頭上に置かれるのだ。これが我々の荊の冠である。そしてインテリゲンチアの立場を肯定する人も、否定する人も共にインテリゲンチアである。そして、彼等はこの難問題を解決するに當つて、一つの例外を設けて、自分達こそその例外だといふ。次ぎの人も、また同樣に云ふ。この堂々めぐりが、愈々我々の間でもはじまつたのだ。つひにこの問題でも、ロシアと同じ道を踏みだしたのだ。そして、今やマルキシストたちが、自分達だけは例外だといふ時期に達してゐるのだ。とにかく、この知識階級問題の解決のしかたで、その人の思想的方向も、その思索の深さも、その人間的本質も、殘らず判明する。私はなほいろいろな人のこの問題に對する説を聽きたいと思つてゐる。

（昭和五年三月）

或る叛逆者

タゴオル

端坐してゐる白髯の老詩人の周圍を、輪をゑがいて踊る美しい少女たちの足は、白い蝶のやうである。
その足には、爪に紅をさし、あしのうらにも紅い彩りが施されてゐて、曉にひらきそめた蓮の花のやうに匂はしい。
その愛らしい喉からは、小鳥の歌のやうに、美しい讃頌のたわやかなリズムが、波のやうに溢れ出でる。

ベンガルの哲人の美しい詩章は、かうした美的教育の雰圍氣から生れ出でるのだ。この心をそそる光景は、印度へ遊んだ或る畫家から聞いたのであつたが、この話をした後で、その畫家は、

「まつたく、見てゐても羨ましい位だつた、あれこそ本當の美的生活だらうね」と云つた。

自分はといふと、それを聞いたとき、殆んど反射的に、かの裸身の聖者ガンヂイを想起したのだ。トルストイの精神を、印度の糸車と半月との旗じるしのもとに生かしてゐる、非協同主義のガンヂイと、そのタゴオルにおくつた手紙の言葉とを。

「自分は苦しんでゐる人間を、歌で救つてやる事の不可能なのを知つた。飢ゑた何百萬の民は、ただ一つの詩を求めてゐる、元氣づける食物を……」

×

ガンヂイの眼にあるのは、飢ゑた人間の空虛な胃袋である。氣息奄々たるパリアの、むごたらしくも肋骨を高々と彫り上げた、竹をそいだやうな身體である。

藝術をも、その倫理的、社會的價値によつて判斷しようとするところで、ガンヂイはその師トルストイを繼承するものである。が、この藝術功利說は、無抵抗主義のトルストイやガンヂイのみでなく、また、實際政治家でマルキストなるレエニンの見解でもあるのだ。

タゴオルはその點で、實行家のガンヂイと異る。彼は純粹の詩人である、幽林に瞑想する哲學者である。何處までも貴族的な婆羅門である。彼の問題は、つねに心靈の問題であつて、下腹部の問題ではない。

×

そして、これがタゴオルの十年前來朝した折りに、當時の社會からあれだけの熱烈な歡迎を受けた所以であると同

時に、昨年の來朝が、米人の侮蔑的態度を憤つて、米國に上陸せずして、直ちに我國に來つたが爲めに、邦人の自尊心に投じもし、また、東洋人としての民族的共感に訴へるところ多かつたとは云へ、靑年社會には、以前程の反響を喚び得なかつた所以であつたと思ふ。

それは日本の社會狀態が、この十年間に、全く一變してゐるからだ。

×

タゴオルの「有閑哲學」の內容を自分は知らない。然し、その大要は想像せられぬでもない。そして、その想像せられる限りでは、この悪い意味でアメリカナイズされたジャズと、ハイ・スピイドとの、內面の空虛になつた一部の日本にとつて、かなり適切な敎訓を含んでゐるやうに思はれる。

しかも、同時に、何となく、麵麭を求めて石を與へられる如き不滿足を感ぜずにゐられなくもある。

「無意味な精神主義者の囈語だ」といふ靑年コンミュニストの罵倒には、直ちに同じ得られないとしても、かの畫家に聞いた詩人の有閑生活を聯想して、我々にそれの許されない事を思ひ、糸車をひいてゐるガンヂイの裸體の姿を思ひ合せ、そのガンヂイすら手ぬるしとして、戰鬪的な××運動に進出せんとする印度の靑年鬪士の尖銳化を、共感せずにゐられないものがあるのだ。

×

タゴオルの立場に對する自分の判斷の不確定は、直ちに、自分自らの不決定に外ならぬ。二元的な人間である自分は、茲に於てもまた、あの活潑なる一面的の猛進に追隨する事に多くの困難を感ずるのだ。

ただ自分の信ずる詩人としての途は、他にありやうがない。詩人は詩の祭壇に香を焚く祭司ではなくして、人類解放の途上の一つの焚火であると。詩は神に對する捧げ物ではなくして、あらゆる權威に對する叛逆であると……

アナキズム

現代に於ける最高最美の理想は、アナキズムの理想だ。それが不可能に見えれば見える程、それは眞である。否、それが眞であるがゆゑに、不可能に見えるのである。

性善の限界

先づ自分を、然るのち他人を。これ人間の天性である。本然の道德律である。

先づ他人を、然るのちに自分を。それは普通人にあつては、云ふべくして行ひ難い事である。

從來の人類の教師たちの失敗は、多くこの點に存した。あまりに高き理想を揭げて、人間を强制せんとしたところにあつた。

先づ自分を、然るのちにまた自分を。

これはブルジョア共のエゴイズムである、もとより排擊せねばならぬ。

我々の克服せねばならぬものは、ブルジョアの個々人ではなくして、ブルジョア精神である。それは我々の裏にもあるものだ、先づそれを打碎け。ブルジョア精神卽ち人間惡だ。

だが、人間には、然るのちに他人をの本能があると信ずる。自分自身のためにもそれだけの要求が存する筈だ。人も善かれ自分も善かれの智慧、持ちつ持たれつの融通——勞働者間の相互扶助の如き、それをこそ性善と云ふべきだ。

×

從來、性善と云はれたものは實は、それをさすので、身を滅ぼしてまで仁をなすの謂ひではなからう。所謂宋襄の仁ではなからう。

おまへの物はおまへの物、おれの物はおまへの物は總じて、人間の心の構造に適合しない考へ方だ。然し、おまへの物はおれの物、おれの物はおれの物のエゴイズムばかりでなく、おまへの物はおまへの物、おれの物はおれの物の個人主義以外、おまへおれを、さうやかましく云はなくてもいいぢやないかといつた心持がある。職人などのよく有つてゐる心持だ。日本人には、まだこの心持が多分に殘つてゐる。超個人主義もいいが、いろいろやかましく云ふ人より、この非論理的な職人共が、實踐的にずつと高尚な心を示してゐるのだ。

×

或る夏の夜、自分が江戸川公園を散歩して、溝のむかうの丘の方へ登る暗い道で、眼鏡を落して、うろうろ探してゐたとき、紳士や學生たちが嘲笑して行つたなかに、

「どうしたんです、眼鏡を落したんだつて、それはそれは」と云つて、一緒に探して、たうとう拾つてくれたのは、職人のおかみさんだつた。

彼女は性善の限界を自分に示してくれたのだ。かの紳士等が、性惡の發端を示したかどうかは云へぬけれども。

自分は常に性惡說に傾いてゐた。この人間性に對する悲觀主義が、アナキズムの信奉から、いつも自分を引留めてゐたのであつた。

クロポトキンは蕭條の晩年を送り、レエニンは神樣になつた。性惡說は性善說よりも、より堅固な人類の指導原理である……

然し——今自分は「然し」を云はずにゐられぬものだ。自分は冬の中にも春を見ずにはゐられぬのだ。

人間擁護

人間が惡いのではない。彼を食はなければ生きられない條件のもとに置いた者が惡いのだ。人間が食はなくともすめば世界の惡は忽ち消滅するであらう。但し、その場合、食ふとは生活する事の謂ひである。そして生活するとは、單に餓死から免れてゐる事を意味するのではない。

最大の不幸人

「滿足の生活は退屈であり、退屈のない生活は苦惱である」

といふショオペンハウエルや、レオパルヂの說は、一般的に信ぜられてゐる。

が、世にはツルゲエネフの所謂「悔なき怠惰」もあり得ると同時に、苦惱の中に感ぜられる退屈も尠くはないのである。そして、最大の不幸人は、苦惱と退屈とを同時に感じてゐるのである。

回心

ルイ十六世の娘なるアングレエム公爵夫人の墓標には、羅典語で次ぎの言葉が記されてゐるといふ。

「此道をよぎる人の凡てよ。心して見よ、わがごと大なる苦痛のありしを！」と。

すべての不幸なる生涯を送つた人の墓標には、よし目には見えずとも必ず、此の言葉が記されてゐる。

ことによると、すべての不幸に終つた人のみならず、幸福に終つた人の墓標にすらも、同樣にそれは見出されるかも知れない。

我々はただ自分のみが不幸であるといふ謬見を棄てねばならぬ。自分が最も不幸であると考へるのは、超克しなければならぬ貴族的個人主義である。

自分は常に好んで自己をのみ語る個人主義者であつた。恐らく、この事が自分が此世で犯した最大の罪過であつたらう。しかも、外ならぬこの弱點の上に、自分の存在理由は成立つてゐたのだ。ドンネルウエッテル！

自分が自叙傳を書く事をやめたのは賢明であつた。それは時勢遲れなエゴテイズムであり、最も愚昧な自惚であるばかりではない、如上の謬見を悟らば、全く無用の業だからだ。

「生れた、苦しんだ、死んだ」それ以上何も書く事はない筈である。そして、これは書かなくとも、誰でも知つてゐる。

バイロンの言葉

I'll die as I have lived——alone.

この一句のためでも、自分はバイロンを愛する。

自分もまた、自分が生きたやうに死ぬであらう、たゞひとり、孤獨で……

詩を生きる

バイロンの「ドン・ジュアン」の書かれなかつた結末は、大革命中のバリケエドの上の死であるといふ。そして、メレジュコフスキイは、詩で完成しなかつたものを、「彼は生活で完成した。ドン・ジュアンの最期はバイロンの最期である」と云つた。

詩人は常にその詩で完成しなかつたものを、その生活で完成するのだ。

つまり、その詩はその生涯の凡てを含み得ないのである、生涯がその詩を補足するのである。時には、死によつてはじめて畫龍に睛（ひとみ）を點ぜられるのだ。

然し、世の詩人の多くは、その生活で完成しなかつたものを、その詩で完成するのではないか。生活上に實現出來ぬから、これは詩として表現するのではないかと云ふ人があらう。

さうだ、居ながらにして名所を知る題詠詩人から、白梅やをうなる宗匠詩人迄。

人生詩人は、社會詩人は、革命詩人は、詩を生きよ。彼は生活によつて詩を書かねばならぬ。

バイロンの死は、百篇の詩よりも尊い。

マヤコフスキイの死

新聞紙は、あの元氣のよかつた革命詩人マヤコフスキイの死を傳へた。

彼は「戀愛の桎梏のために」自ら生を斷つたといふのである。彼は未來派の先頭に立ち、完全にあらゆる法則の外に立つやうに見えた個人主義者であつたが、のち集團主義に同化せんと努め、つひにはソヴイエト・ロシアの代表的な詩人として尊崇せられながら、敢て生を斷つたのは、我々にとつて、或る大きい問題を暗示するものがあるのではなからうか。

×

帝政時代の詩人で、ボルシエヴイキに同化せんとして空しく斃れた人に「十二」の詩人ブロオクがある。ブロオクよりも新しい時代に屬しながら、先にマヤコフスキイと同一の運命を辿つた詩人に、あの愛すべきエセエニンがある。

象徴詩人ブロオクはしばらく措いて、エセエニンは農民の出で、革命の間から飛び出した詩人でありながら、鐵と法

則の桎梏に堪へずして斃れた。彼に於て我々は、新しい社會樣式の中での詩人の第一の受難を見たのであるが、マヤコフスキイに至つては、たしか勞働者の出身だつたと思ふ。彼はまた意力の讃美者であつた筈だ。

それとも、彼の死は、シンクレエアの語つてゐる、その親友ジヤック・ロンドンの死などと、類似の理由をもつに、すぎぬのであらうか。

×

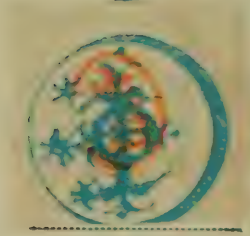
「戀愛の桎梏」などいふ言葉は、コンミユニストの言葉ではない筈だ。彼はつひにその個人主義を克服しえなかつたのであらうか。

多分、多くのコンミユニストから、さういふ風に說かれるに違ひない。また恐らく、さうであらう。だが、我々はそれによつて、彼もまた人間であつた事を知るのだ。彼もまた詩人であつた事を知るのだ。少くとも、革命前の社會に生育した我々と同時代の人間であつた事を。

詩人は强制せられることを好まない。マルクスがハイネを評して云つた如く、詩人は勝手氣儘にぶらつかせて貰ひたがる動物なのだ。

茲に詩人のアナキステイックな本然的の傾向がある。然も、詩人は集團意義の緊束着を着なければ、生存に適しないのであるか。マヤコフスキイの死は、我々に一つの問題である。（昭和五年四月）

—第八卷『感想集』了—

生田春月全集

第八卷

昭和六年四月十五日印刷
昭和六年四月二十日發行

編輯者 生田花世
同 生田博孝
發行者 佐藤義亮

東京市牛込區矢來町七十一番地
發行所 新潮社
電話牛込長 八〇五番・八〇六番・八〇七番・八〇八番・八〇九番
振替東京 一七四二

印刷者 佐々木俊一
富士印刷株式會社
製本者 植木龍藏

全十巻目次